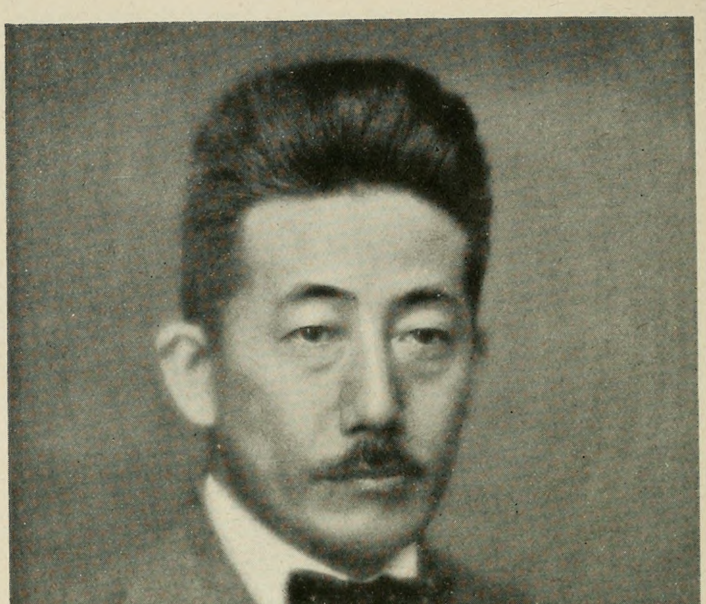




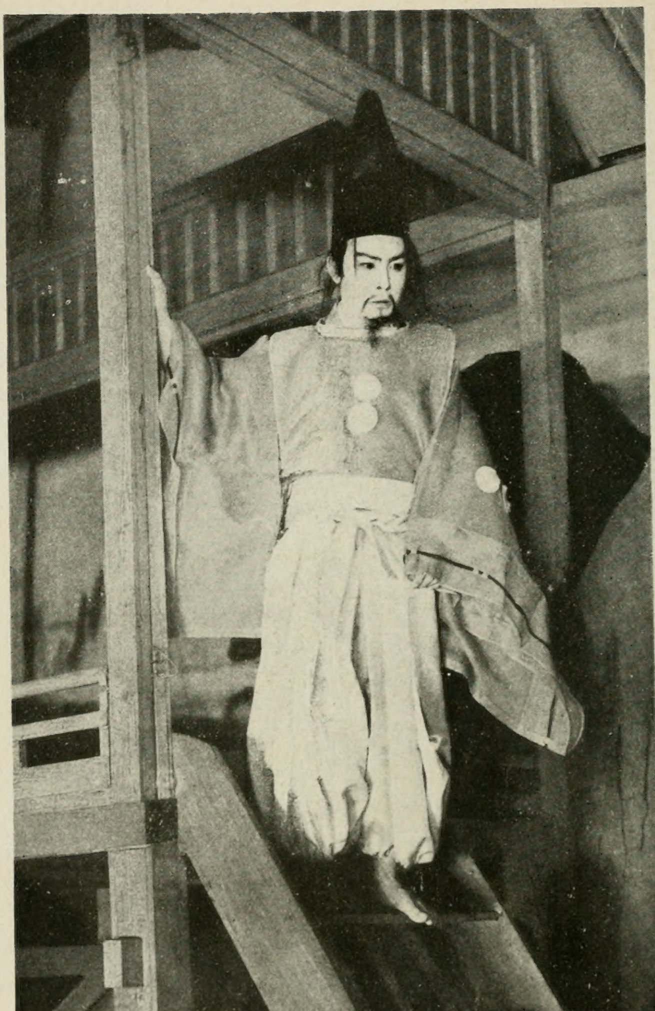
第参巻

小山内薫全集

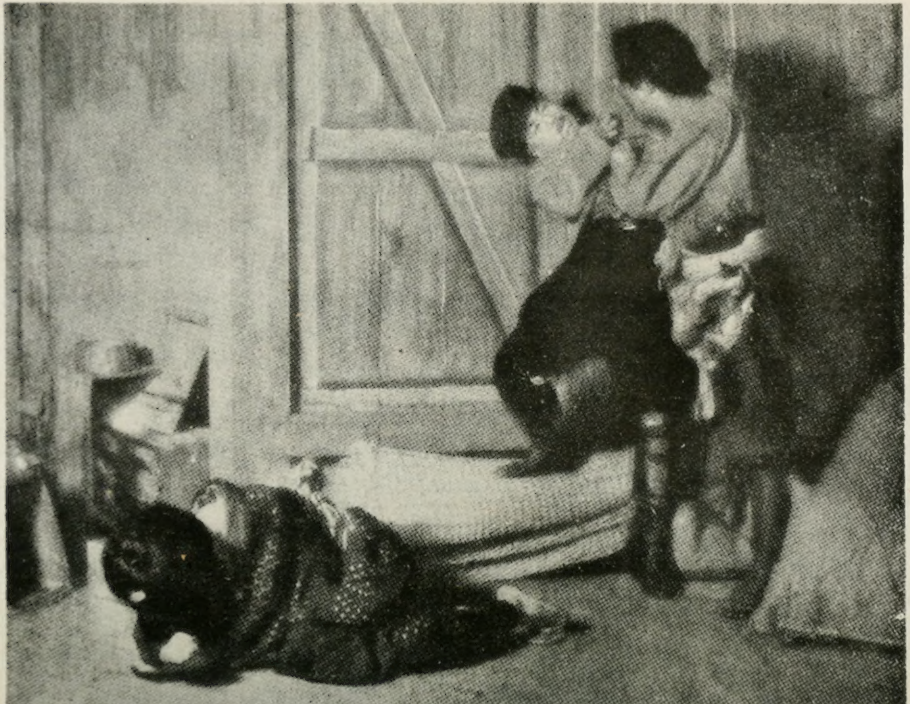
春陽堂



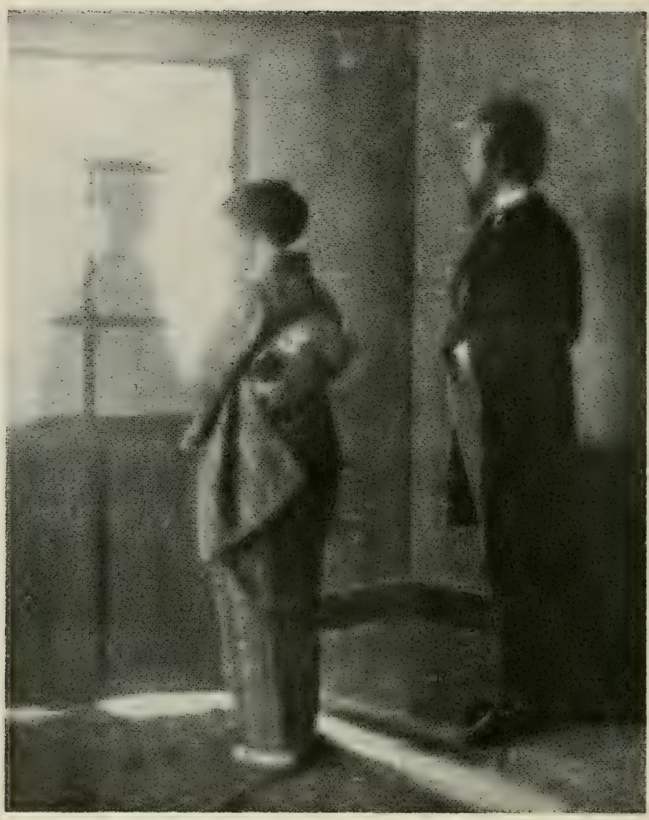
1 「第一の世界」の頃



2 「緑　の　朝」



3 「塵　境」



4　「第一の世界」



5 [illegible]



6　「三人と三人」



7　「西　山　物　語」



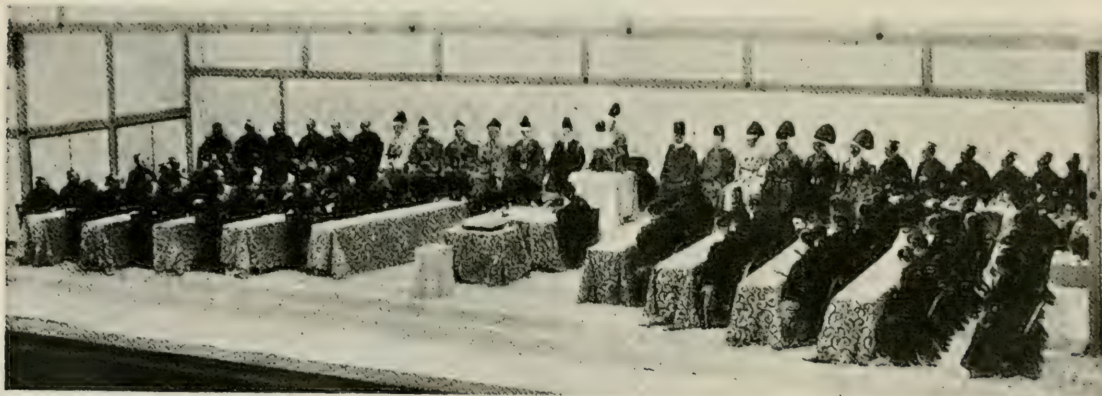
8　「亭　　　主」



9 「奈 落」



10　「[illegible] 遊」第一部



11「森　有　禮」



12



13　「圓タクの悲哀」



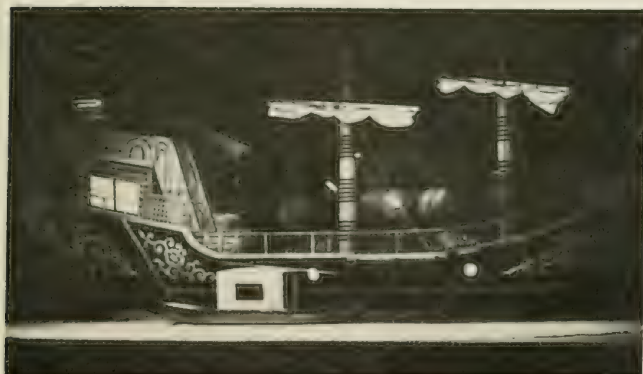
14 「公　園　裏」



15　「國性爺合戰」



16　「金　玉　均」



17　「博多小女郎浪枕」

小山内薫全集 第三巻 目次

寫眞目次

非戰鬪員　五幕

人物

鞆岡正人　一等軍醫正　四十七歳
同　きさ　正人の妻　卅二歳
同　直臣　正人の亡先妻なる獨逸婦人に生れし息　廿歳
佐村その　きさの妹　十八歳
楠部孝一　通譯官　廿六歳
馬丁信吉　卅四歳
女房さと　廿四歳
悴　一郎　三歳
下駄屋小僧
從卒、看護卒、日本兵、露兵
下男、下女

場所

姫路——鴨綠江畔

時代

明治卅七年の夏

第一幕　出征

姫路城外見附跡。石垣の名殘。外濠。土橋。直臣、洋服にて捨石に腰を卸す。星光燦爛。蚯蚓斷續して鳴く。六月五日、午前三時。

幕あくとすぐ陸軍步兵の小部隊征裝して見附門より出で來り、直臣の前を過ぎて暗中步武しづかに

下手に入る。直臣空を仰ぐ。また同じ程の隊默して行き過ぐ。やがて見附内より正人、一等軍醫正の服裝にて出て來る。馬丁信吉從ふ。直臣、目をこれにうつす。

直臣　お阿父あん！（立ち上る）

正人　（すかし窺ひて）うん直臣か。（突と寄りて手をとる）待遠だつたらう。よく待つてゐてくれた。……信吉、もう隊は來まいな？

信吉　へい、今のが大澤の旦那の隊でございますから大丈夫でございます。――あれで今朝は打立たさうで。

正人　さうか――併し直臣、よく家が拔けられたな？

直臣　はい、お園さんが密と出してくれました。

正人　阿母さんによく見つけられなかつたな？

直臣　阿母さんは熟く御睡み……

正人　何？　よく寐て居つた？　昨夜私が家を出ると、すぐ寢て了つたのか？

直臣　は、はい。

正人　（獨語のやうに）驚いた奴だ！　彼女は別離の情をも知らんのだね！

信吉　旦那。べつりのじやうと申しますと？

正人　うん？　解らんのか？　わかれだ、わかれの辛さだ。

信吉　いえ大方そんな事だらうと思つた！　旦那の前だが、あの奥樣に毫厘でも情愛なんてものがあらうものなら、此の戰爭は沙汰やみになりまさあ！しがねえ私の嬶だつて坊主を背負つて隊の門迄送つて來ただらうぢやありませんか。「お園の爲なら爲方がないさ」か何かでぐう

ぐうは恐れたもんだ！あゝ情ねえ、情ねえ！情ねえ！せめて妹御のお園さん位情愛がありあなあ！

正人　いやそのお園だがな。あれをきさが進んで私の氣に入りの楠部、あれの許嫁にしたに就ては何か腹がありさうに思ふが……

信吉　へん大蟻の見世物が聞いて呆れまさあ！何の事あねえ、楠部さんをお屋敷へ引きずり込んで、若様を追ひ出さうてんでさあ——

直臣　そんな事が……

信吉　いえ若様あ何にも御存じねえんだ。「あの雑種兒、あの雑種兒」つて蔭ぢやあどの位貴公をわるく云つてるか知れませんぜ！私あ口惜しくつて口惜しくつてたまらねえんだけれど、私の口惜しさより、旦那の口惜しさはどの位だらう？その旦那が堪へていらつしやるんだと思ふと、石へ嚙りついても耐へる氣になりまさあ！

正人　そこだ、直臣。——阿母さんは果して今この信吉の云ふやうな腹で居るかどうか、それは神様でなければわからぬ。——しかしお前は自分が腹をいためて生んだ子ではないし、殊に彼女の毛嫌をしてゐる西洋人の腹に出來た子だと云ふんだから、稍にくむと云ふやうな事はあるやうだ。——

信吉　あるやうだどころぢやありませんや……

正人　まあ默つてゐろ。——一度子を持つたものはたとへ其子を喪つて他の子を貰つても、親子の情と云ふものを知つてゐるから好いが、彼女は全く子を持つた事がないのだから困る。——

しかしこれもみんな女の狭い心からなのだ！嫉妬の深い女は、自分で仕上げることの出來ない裁縫を、一針他人(ひと)が助けて仕上げてくれても心持をわるくして、ひそかに破いて棄ててしまはうと云ふものだ。――お園はいい女だ。楠部もいい人だ。阿母さんとてもみんな妹が可愛いからこそだ。彼女(かれ)に情愛が無いのではない。かれの情愛は悉く妹にそそがれて餘すところがないのだ！さう思へば腹も立つまい？どうかお前も私の留守中は今の信吉の石を噛んでもと云ふ忍耐力を出して堪へてゐてくれ！いいか？

直臣　はい。よく了解(わか)りました。

信吉　若様はものの了解(わかり)が早いや！奥様の云た日は、何時でも「あの雑種兒(あいのこ)」だが、物のわからねえ日本人よりやあ物のわかつた雑種兒さんの方がいくら賢いか知れやしねえや！

正人　はははははは！まあどうかな。園にも心配をかけぬやうに、阿母(おっか)さんの心をも亂(みだ)さぬやうにな……

直臣　はい。

正人　いかにも残念だ！口惜(くや)しい！と思ふ事があつても決して今の阿母さんや死んだ阿母(おっか)さんを恨むなよ。恨むならおれを恨め！

直臣　阿父(おとっ)あんを恨むなんて……

正人　だが他(ほか)にお前の恨の持つてき處(どこ)は無いぞ！

直臣　だから私は、何處へも恨は持つて參りません！腹が立てば自分が怨めしくなるばかりです！

正人　自分を恨むのはいいが、それが爲めに自棄(やけ)を起しては不可(いけ)よ！いいか？

直臣　はい私はたとひ自分を恨んでも自分を棄て
は致しません！
正人　宜しい。それだけ聞けば安心だ。もう行く
ぞ！
直臣　（名殘惜しげに）もう行くんですか？
正人　さうだ！（ふと腕に卷ける赤十字の章を見て）
いや併し戰地へこそ行け、決して戰爭に行くの
ではない。そりや私だつて日本人であつて見れ
ば露西亞人に對して殘念だ、口惜しいと思ふ事
はある。併し口惜しいからと云つて劍を執つて
立つのが果して吾々の理想であらうか？――國
と云ふ團體は未だ人と云ふ箇々のもの程發達を
して居らぬのだ！露國全體は一箇のトルスト
イ程進歩して居らぬのだ！日本に一人の非戰論
者が出れば國民は擧つて是を露探視するでは無
いか！進歩せざる國と國とが相爭ふのだ！
進歩せる人と人とに爭ひのありよう筈がない！
國と國との戰だ！人と人との鬪ではない！
だから己たちは敵味方の區別なく力を盡し
て負傷者の治療をしようと云ふのだ！――
阿父あんが修羅の巷で赤十字のもとに働いてる
と云ふ事を思つて、お前もあくまで非戰鬪主義
をとつてくれ！何處までも無抵抗主義で遣つ
てくれ！
直臣　はい。
正人　（赤十字を指して）これを忘れるなよ！
直臣　はい。
正人　では愈行くぞ！左樣なら！
信吉　若樣、丈夫で立派におなりなさいよ！うち
の坊主をお賴み申しますよ！

（直臣うなづく。二人忽ち下手に入る。直臣茫然として其行方を見入る。見附内より通譯官の服裝をなせる孝一と白地の單衣着たる園子と語りつつ出で來る。）

その　ほんとに夢のやうね！

孝一　一昨日あの事が定つて、もう今日はお別れなんだからね。

その　お別れなんて云はないで頂戴よ——何だか……悲しくなるわ！

孝一　だつてお別れぢやないか？

その　お別れつて云ふと、もう會はれないやうで可厭だわ。

孝一　（沈んで）しかし實際もう會はれないかも知れん！

その　でも貴君なんかはずつと後の方にゐる人だつて云ふぢやありませんか。

孝一　しかし何と云つても戰地だ。どう云ふ事があるまいものでも無い。——覺悟はしてゐてくれ給へ！

その　（悲しげに）さう？

孝一　たとひ死んでも恩人の足元で死ぬのだ！さらに遺憾はない！

その　そりやさうだわね。義兄さんの事を思へば火の中へでも、水の中へでも這入る氣になるわね。

孝一　（思出の夢にふけりつつ）ああ今でも思ひ出すが、僕が丁度小學校を卒業して中學の入學試驗に及第した時だ。軍醫正は君やなんかと一緒に、僕を初めて芝居と云ふ處へ連れてつて下すつたつけ。

その　あの時分はまだ眞の子供だつたのね。

孝一　さうだ――丁度日清戰爭の最中で、芝居も戰爭のものだつた。

その　あなた、あの時一つの梨子をあなたと私で半分づつ食べた事を覺えてて？

孝一　はは君も覺えてゐたか！

（しばらく沈默。直臣は既に此二人あるを知れど、わざと默して立つ。）

その　何でもあの時の狂言は支那人と日本人との間に出來た雜種兒が、日本の兵士になつて……

孝一　さう、さう、威海衞か何處かに露營してる時に大層分隊長にいぢめられるのだつた――おお左樣云へば、軍醫正や僕や信吉がゐなくなつたら、また直臣君が苛まれる事だらうね。

その　いえそれは大丈夫よ。私が三人分の同情を一人で背負つて見せるわ。――直臣さんの事は決して心配しないで頂戴よ！

（直臣なほ默して立つ。――日やうやう明るし。）

孝一　直臣君はいいとして君の身の上が心配だ。あまり物思ひをすべからずだよ！

その　ええ。

孝一　姉さんはどこまでも姉さんとしてね……

その　ええ。

孝一　だがどうも心配だなあ……

直臣　（思はず目を開いて）僕がゐる！僕がゐる！お園さんの事は心配しないでもいいよ！

孝一　えつ？（直臣を認め）おお直臣君か？僕は天から聲があつたのかと思つた！よし、もう可し、おや失敬！

その　あら……もう?

孝一　(默して頷く)……

その　ではね。……

孝一　(再び頷く)

直臣　(少しく聲を震はせて)　失敬。

孝一　(勇しく)　失敬!

(孝一下手へ向ふ。直臣、圓、これを目送す。夜全く明く。遙かに幽に「萬歲」の聲。)

——幕

第二幕　來襲

鴨綠江畔の農家。野戰病院の一部。小天幕、頂上に赤十字旗。遙かに小斥候の衝突らしく、時を置いて銃聲聞ゆ。正人、天幕の内、卓に倚りて眠る。七月某日、午後二時。

幕あくと暫くして孝一登場。正人の眠れるを見て躊躇ふ。正人眼覺む。

正人　(吃と孝一を視て)　やあ楠部か。はははは!

孝一　どうも御安眠のところを……

正人　いや恰度いい處へ來て吳れた。——今ね、面白いと云はうか、悲しいと云はうか實に不思議な夢を見たんだ。——まあ掛け給へ!

孝一　何か氣にかかるやうな——?(有り合はすものに腰を掛け、膝を進める)

正人　なあにこれがほんの昔の夢さ!

孝一　昔?

正人　ああ獨逸の夢さ、私が學生時代の夢さ。

孝一　はあ左樣で……

正人　ひとつ話さうかね?

孝一　何卒。

正人　處はブレスラウあたりの郊外の景色だね。時は春、野は青々と萠えて、名も知らぬ草花が數知れず咲いてをるのだ！

孝一　大層奇麗でございますな。

正人　いや實に美しいものだつた。流石の私でも覺えず Wie herrlich leuchtet; Mir die N.tur! などと吟りたくなる位だつた。

孝一　ははあ？

正人　さあ其野へ、今しづ〲と出て來た二人の者は抑も誰だと思ふね？

孝一　天使ですか？

正人　天使の交にも劣らざる僕とトウルペさ……僕は春の衣裳を輕々と著なして手には細やかなステッキを弄んでゐる。髭も今のやうなこんな野暮なのぢやない。カイゼルを氣取つてピンと上へ勾ねてゐる。

孝一　ははは！

正人　トウルペはと見ると淡紅色の衣を裾長に著て、未だ當歳の直臣に白い衣を著せて抱てゐる。

孝一　宛然畫を見るやうですな。

正人　畫だ！ほんとに畫だ！畫だから悲しい！

孝一　え？

正人　樂しい事は忽ち過去の畫に化つて了つて、悲しい事はなか〲現在と云ふ域を離れない！楠部、悲しい事も早く畫にして了ひたいなあ！

孝一　はい……そ、それから如何致しました？

正人　すると突然トウルペの姿が消えた！

孝一　はあ？

正人　と思ふと、トウルペの立つてた處に、いきなり大理石の墓が立つた！

孝一　草？

正人　墓銘を讀んで見るとトウルべの墓だ！

孝一　成程——

正人　はつと思ふと何だか足のあたりが急に重くなつた。俯向いて見ると、何時の間にか直臣が私に抱かれてゐる！

孝一　あなたに！成程！

正人　驚いてゐる間もなく今度は私の躰が地面へ引き入れられる樣に這入つて了つた！私も亦忽ち十字の墓になつてトウルべの墓と並ぶ！

孝一　はゝあ？

正人　直臣はひとり草原に取り殘されて泣き叫ぶ事甚だしい。すると、今度こそだ、天から翼の生えた女が獸を馭ひながら、直臣を抱いて空高く登つて了ふ！——折から彌生とも見た青空が俄かにかき曇つて來て忽ち大雷大雨だ！

（從卒一人倉皇として驅け來る。）

從卒　軍醫正殿、大變でございます。

正人　何だ？

從卒　敵の一小部隊が野戰病院を襲つて參りました！

正人　なに？（驚き立つ）

（間もあらせず、露兵鯨波を擧げつゝ藪蔭より襲ひ來る。正人、孝一これに向ひて佇つ。從卒銃を構ふ。）

正人　これこれ諸君、ここは病院ですぞ！私は軍醫ですぞ！

孝一　この方はオフツエエルではない！ドクトルだ！

正人　赤十字社員に敵味方はないと云ふ事は知つ

てゐませう！

孝一　クラスヌヰ、クレストと云ふ事は君等でも知つてるだらう。ネプレアアテリでも無ければプレアアテリでも無いんだ！

（露西亞兵、「ニエスカジイ！」「トウイ、ナム、ウラガア」「ウビイム！」「ラズウエエ、トウイ、ニエ、ニエプリヤアテリ？」など口々に叫ぶ。）

正人　わからんな！この赤十字を見給へ！あの旗印(しるし)を見給へ！（帽章を指し、旗を指す）

孝一　あのプリヅナツクが解らんか！

（露兵ただ銃を構へ、劍を振り翳すのみ。）

正人　これ程云つて解らないんなら、吾輩潔く此の鋒手にかかつて死なう。——楠部、君は早く逃げ給へ。

孝一　そんな事が…

正人　いやそんな事がではない。君は通譯、たださへ人數の少い通譯だ。君が此處で犬死をして了つては國の爲めにならんぞ！

孝一　たとひ國の爲めには犬死であつても、恩人の爲めに犬死で無ければ、それでいいです！私は官職を擲(なげう)つても貴下(あなた)の爲に盡さなけりやあなりません！

正人　志は辱けないが、何卒(どうか)逃げてくれ！私はもう此處で死ぬ覺悟だ！日本の赤十字社員はたとひ敵の虐殺にあふまでも劍を拔かなかつたと云ふ事を世界萬國に見せて遣る！——さあ來給へ！何處からでも斬(や)り給へ！

孝一　いけません！いけません！（軍醫の前に立ちて）さあ撃つなら己を撃て！

（露兵撃つ。銃丸胸を貫いて孝一を斃す。）

正人　や、とう〳〵行(や)つたな！ああ國と國との争が、遂に人と人との闘になつて了つたか！ああ直信は……

（露兵また一發。正人、足を撃たれて倒る。露兵凱歌(かちどき)をあぐ。――信吉、日本刀を振り翳して飛び来る。）

信吉　ど、ど、どいつだ！病院なんかへ飛び込みやあがつたなあ！病院を狙ふなあ病人だ！さあ来い！病人めら！不具めら！片つぱしから撫で斬りだぞ！

正人　（少しく起き上りて）こら信吉、決して抵抗(ていかう)をしてはならないぞ！

信吉　おお、だ、旦那だ！（走り寄る）よ、足ですか、あ、足なら大した事はねえ。（再び立ち上る）さあ来い野郎ども！

正人　こら抵抗(ていかう)をしてはならないと云ふのに！

信吉　へ、へい――だつだつてお前(まへ)さん――さあ来い畜生……

正人　平時(つね)お前(まへ)に云つといたのは此事ではないか！

信吉　そ、そりやあもう旦那の道理は御尤もなんだけれども……だつだつてお前さん――この野郎め！

正人　こら！

信吉　だつたつてお前(まへ)さん――さあ来やがれ！

正人　こら!!

信吉　だつだつて……だつだつて！（と云ひながら漸く進む。ます〳〵進んで孝一の死骸に躓く）――おつ、く、楠部さん！お前さんも殺(や)られたな！

（信吉、露兵を睨む。遠く駈足の喇叭。露兵これを聞きてそそくさと逃ぐ）

——幕

第三幕　悲　報

姫路五軒邸、納岡軍醫正留守宅。夫人きさの居間。上手、直臣の書齋、下手、玄關への通路、襖にて閉づ。直臣、丸窓の下に頭を抱へて讀書す。きさは膝の上に針仕事とり散らしたる儘、小さき烟管にて烟草薫らしつゝ、下駄屋の小僧を罵る。小僧はわが前なる女下駄を見入る擬して、疊柱襖などじろじろと見廻す。

きさ　どうしたと云ふんだね、その鋲の打ちかたは？

小僧　え？ へえ。

きさ　へえではないよ。熟く御覧な、まるで横つちよへ出てるぢやないか？

小僧　どうもこりやあ木理が曲つてるんですから仕方が無いんで……

きさ　仕方が無い？ 仕方が無いとは何です？ え？ 仕方がないとは何ですよ？ ただ貰ふんぢやありませんよ！ お金が出るんですよ！

小僧　そりやあもう重々承知……

きさ　それなら何故こんな事をするんだい？

小僧　けれども、そりやあ、奥樣、御無理と申すもんで。

きさ　無理？ 何が無理ですよ？ さあ伺ひませう、何處が無理ですよ？——五厘一つで買つた大福餅の形が惡いから修せと云ふのとは譯が違ひますよ！ 大枚三圓と云ふ……

小僧　いえ、二圓と五十錢にお直切り遊ばしたんで……

きさ　幾何だつていいぢやないか。お前の方はするだけの利得をしてるんぢやないか。

小僧　へえ。

（直臣、喧しさに讀書の出來ぬ樣子。）

きさ　お前ぢや何を云つても仕樣がないから……

小僧　（嬉しげに）へえ。

きさ　歸つて主人を呼んでお出で……

小僧　（腰を浮かせて）へえ！

きさ　下駄は其處へ置いてつてもいいから――さ早く主人を連れてお出でよ！

小僧　へえ、では是で御免を……（直ちに退場）

（直臣、書齋を出でて母の居間に入る。）

直臣　（樂しく）阿母さん。

きさ　（煙管を下に置き、針を手にしつつ煩さげに）何ですよ！

直臣　あんまり商賣人を虐めるのはお止し下さらんか――僕、隣室で聞いてゐつて實に辛くて堪らんですから……

きさ　そんなに辛けりやあ耳でも塞いでりやあ可いぢやありませんか？

直臣　そ、そ、そんな――ま、いいです、いいです、いいですから何卒今度下駄屋の主人が來たら勘辨して遣つて下さい！ね、阿母さん！……あ、貴下だつて同情は御座いませう！

きさ　下駄屋に同情？おや詼な物言ひをするね。――大方信吉の傳授だらう。――と、どうせ、どうせ私は下駄屋の娘で御座いますよ！

直臣　また、そ、そんな……

きさ　いゝえ下駄屋の娘に相違御座いません！下駄屋の娘で無理に此家へ這入り込んだのですよ！だから下駄屋に同情があるだらうつてんでせう！成程、こりやあ理窟で御座いますね！

直臣　僕は何もさう云ふ意味で……

きさ　意味も絲瓜もないよ。さう聞えるからさう言ふのさ。――ほんとに此子は人を馬鹿にしてるよ。――はい以前は下駄屋の娘でもね、今は立派に軍醫正の妻で御座いますよ！お前の母ぢやなくても正人の妻で御座います！

直臣　阿母さん、そんな情ない事を……

きさ　何が情ない事です？

直臣　もう謝ります！僕が悪かつたんだ、僕が悪かつたんです！謝ります！謝ります！どうか堪忍して下さい！（泣く）

きさ　なにも泣く事はないぢやないか。――お前は平常氣丈で、つひぞ泣いた事は無いのに……今日に限つて何故泣くです？

直臣　はい何だか涙が出て……

きさ　不祥ぢやないか、園ちやんの婚禮も近づいたと云ふのに……

直臣　（眼を拭ひ）ではもう孝一君は歸りますか？

きさ　歸るか如何だか解りやあしないんだけれども……この二三日何だか無性に歸るやうな氣がして仕様がないから、どうせ一度は爲るもんだし……今からかうやつて準備をしてるのさ。――さ、もう謝つたらそれでいいからお室へお歸りなさい。

直臣　はい。(訝しみつつ書齋に入り、机の前に坐して、當もなく庭を見る)

(園子、新調の紋服を携へて姉の居間に入り來る。)

その　姉さん！

きさ　あいよ。

その　あの私の紋附が出來て來ました。

きさ　さうかい？そして吳服屋は……？

その　もう歸りました。

きさ　何故歸したの？

その　もう御用はないと思ひまして……

きさ　用は無いつたつて待たしときやあ好いのに……値させる事でもあつた時、また困るぢやないか。

その　でも大抵良いと思ひましたから……まあ一寸御覽なさいな。

きさ　どれ、どれ、さう、割合によく出來たね。早くこれを着た姿が見たいよ！

その　はい。(と云ひて、物思ふが如く胸に紋服を抱く)

(沈默、暫時にして下女荒らかに襖を開く。)

下女　奥樣！電報で御座います！

(書齋の直臣少しく胸騷ぐ態。)

きさ　なに？で、電報？

下女　はい。(差し出す)

きさ　どれ。お見せ！(受けとりて封を切る)

その　……(姉の後より差し覗き突然驚きと悲しみとの淚をあげて、きさに縋り著き、身を震はせて泣く

電報きさの手より落つ)

きさ　何だね？まだ讀みもしない内から……

その　だつて、こ、こ、孝一さんが戰死……

きさ　えつ？孝一が死んだ？……

下女　あら、楠部さんが？まあ……

（直臣、驚きて書齋を躍り出で、電報を拾ひ取る。）

直臣　眞實か？お園さん！……むむクスベツウヤクセンシ！おおこりや司令部の川瀨さんからだ！（聲を震はせて）さうか！（手より電報を落し、下女の顏を見つめて泣く。下女俯きて座を退く。）

その　（電報を拾ひとり、嫁衣と悲報とを双手に差出して）直臣さん!!

直臣　（振向きて）ああこの嫁入りの衣服を縫ふ一針一針が、この悲しい報知の家に近づく一歩一歩であつたのか！阿母さん！お園さん！

きさ　ええ口惜しい！口惜しい！……口惜しい!!口惜しい!!!

（一同歔欷。）

（最中へ信吉、土足の儘、躍り込む。）

信吉　さあ若樣！私と一緒にいらつしやい！

（直臣の手をとる。）

きさ　（顏をあげ）おや信吉！お前どうして……

その　何時歸つたの？

信吉　何時だつて、如何したつて歸つて來たから歸つて來たんでさあ！——さあ若樣！いらつしやいてば……

きさ　孝一の死んだのは眞實かい？

信吉　そ、そ、それ處ぢや無えてば。——さあ若樣！ぐづぐづしてると擲り飛ばすよ！

直臣　今行くよ！

信吉　さあ早く來ねえてばさ……おつと誰も後から來ちやあいけませんぜ！

きさ　一體何處へ行くんだよ！

信吉　何處？何處も何も……さあ若様！早くさ！早く！早く！（直臣の手を引きて退場）

（きさ、園子、顔を見合す。信吉の女房さと、一郎を背負ひて入り來る。）

さと　奧樣！あの大變で御座いますよ、あなた！

きさ　孝一が死んだ事だらう。

さと　それも御座いますが、あなた、信吉が歸つて參りました！

きさ　お前の亭主が歸つて來たつて何が大變だい？——ああ孝一は死んぢまつた。

さと　もし旦那がお怪我を遊ばしたとかで……

その　なに義兄さんが……？

さと　はい。

きさ　孝一が死んぢやつちやあ……

その　ね、姉さん！義兄さんがお怪我をなすつたつて云ふぢやありませんか！

きさ　ああ孝一……？

さと　それに、あなた。何かそれが元で御病氣をお起しなさつたとか申す事で、只今では餘程おむづかしい樣な……

きさ　え？なに！旦那がむづかしいつて？

さと　はい。

きさ　そして、ど、何處に在つしやるのだい？

さと　何でも此處の豫備病院だとか……

きさ　行かう！園ちやん！支度をおし！

さと　處がね、奧樣、あなたは御出掛にならない

方がいいんださうで……

きさ　なに？私が行つては惡い？何故だい？

さと　何故だか存じませんが、いけないんださうで御座いますよ！

きさ　何がいけないんだい？妻が夫の見舞をするのに何の不思議があるもんか！さ、行かう！園ちやん！さあ行かう！

その　けれども何か義兄さんの御都合で……

きさ　都合も糞もあるもんかね！いいぢやないか！さ、行かう！行かう！行かう！（園子の手を引いて室を出でむとす）

さと　あら奥樣！いけませんてば！（縋りつく）

きさ　お前なんか默つといでよ！

さと　いいえ、いけません……どうしたつていけません！

きさ　ええ離さないかい！生意氣な！（平手でさとの顏を打つ。さと、手を放して尻居に倒る。一郎わつと泣く）

（きさ、園子、退場。さと一人呆れて殘る。）

――幕

第四幕　臨終

姫路陸軍豫備病院内の一室。正人、白衣の筒袖に赤十字の徽章あるを著て寢臺に在り。直臣、椅子に坐し、信吉、病床に輕く手をかけて佇み、共に默してさし俯向く。夕日の光、斜に硝子窓より入る。窓外は廊下にして、白衣の看病人往き交ひ、折々ことことと靴の音す。――暫時ありて人の往來絶ゆ。

正人　（微かに）直臣！

直臣　（俯向きたるまま）　はい。

正人　今私の言うた事はよく解つたな。

直臣　はい。

正人　私が如何して死んだか、私が如何してこの死に至つたかと云ふ事さへ忘れなければお前の一生は安全だぞ。人に逆つてはいかんよ。決して手向ひをしてはいかんよ。

直臣　は、はい。ほ、僕は決して……

正人　ああ敵を愛する者の最期はこれだ。敵を殺し一時の生を存へる者の最期も亦等しく是だ。――併し、直臣、其最後が等しく是であるからと云つて、腹が立てば撲つ、口惜しければ殴ると云ふやうな野蠻な行をしてはいかんよ。死は等しく死だが、敵を殺した者の死は永久だぞ。……永久の死に瀕して悔悟の熱涙を垂れてももう遲い……

直臣　（顔ふりあげて）おお阿父あん。僕は十分阿父あんのお言葉を守りまして、一生後悔の爲に涙を流すと云ふやうな事のないやうに致しませう！

正人　いや然し、後悔の涙は貴いものだぞ。悔悟の涙の光は、やがて神の光だ！　悪に敵するなよ、悪に敵しないで靜かに悪の悔ゆるのを待てよ、そしてその悔ゆるのを見たら、即刻喜んでこれを許してやれ。いいか、これが私の遺言だぞ。この遺言さへ守れば、よし財産が如何ならうと、よし家が如何ならうと、たとひ父に別れようと、母に捨てられようと、お前の一生は幸福だぞ……ああ苦しい！　直臣、このコップに水をとつて來て呉れ！

直臣　はい。（立ちあがる）

正人　遠くても炊事の井戸のが好いぞ、清淨で……

直臣　は、はい。（稍躊躇ふ）

信吉　水なら私が取つて參りませう。

正人　いんや、最期の思出だ、直臣の手づから汲んだのが飲みたい！

信吉　御尤もで……ぢや若樣、早く行つていらつしやいよ。

直臣　うむ。

（躊躇ひつつ戸を排して退場。）

正人　し、信吉！　早く一寸ここへ來て吳れ！

信吉　（枕邊近く寄る）へ、へい。な、何で？

正人　（聲を低うして）今あんなに直臣には言つといたがな、貴樣に後の事はよく賴んだぞ。つまらん奴に財產を奪られんやうにしろ。きさに我儘をさせる事はないぞ。

信吉　そりやあもう私が……

正人　なほ此の枕の下に表だつて一通書きつけて置いたからな、貴樣大事に保つてゐて、若し苦情を言ふ者が出て來たら見せて遣れ！

信吉　へい、これで御座いますか。（枕の下より一通の書を取出し腹掛へ入れる）確かに承知致しました！

正人　其邊にきさはをるまいな。

信吉　へい、私の外誰もをりは致しません。

正人　さうか……何卒私の息を引きとるまでは、きさを此處へ入れてくれるな。

信吉　へい、大丈夫で御座います。

正人　夢中になつてる時に何か言はれて、うつか

り返事した事が、後に直臣の不幸を釀すやうな事になつてはならんからな。

信吉　へい、大丈夫。宜しう御座います。そりやあもう私が命にかけて引き受けまさあ。

正人　國には會ひたいがのう、何しろきさが隨從つきりだから……

信吉　御察し申します！

正人　一郎は丈夫か。

信吉　ぴんぴん致してをります。

正人　さとは如何だ。

信吉　彼女も御蔭樣で元氣で御座います。

正人　さうか、何卒お前等夫婦で直臣の世話をして呉れ、彼は何處までも世に疎んぜらるる人間だからな……

（直臣、泣き入り來り、本を父の枕邊に置く。）

正人　おお直臣か、有難う！……信吉、幾時だな。

信吉　（枕邊の置時計を見て）　もう六時で御座います。

正人　六時か、もう日も暮れるな！

（窓外俄かに一二の足音すと聞く間に、戸半ば開かれて、きさ頭を突き入る）

直臣　ああ阿母さん！

正人　（驚きて）　なにッ！阿母さん？

信吉　ああいけねえ！（急ぎ戸を閉ぢ、戸を背にして立つ）

（戸外物音騷がし。）

信吉　いけねえ、いけねえ、金輪際這入る事はならねえぞ！

（戸の外にきさの聲して「開けて〳〵」と叫ぶ。障子の聲して「お止しなさいよ〳〵」と

云ふ。やがて園子のきさを引き止むる様、硝子越に見ゆ。きさは硝子窓に氣づかず、只管戸にかかる。）

直臣　信吉、開けておあげな！

信吉　いけねえ／＼。

（正人手うち振る。）

信吉　だ、だ、旦那、大丈夫だ！御安心なせえ！——さあ今日と云ふ今日は己も威張るぞ！

（戸の外にきさの聲。「開けて／＼」）

直臣　信吉、こら信吉、開けてあげないか！

（信吉に詰寄る。）

信吉　いけねえよ、いけねえよ。——だ、だ、旦那大丈夫だ。——いくら押したつて駄目だよ。奥様と馬丁の力くらべぢや無えんだ！欲と忠義の力くらべなんだ！ここで己が負けりやあて、天日様破裂だぞ！

（きさの聲。「開けて／＼」）

直臣　信吉、何故開いてあげないのだ！

信吉　何故でも宜う御座います。

直臣　いんえ、いけない。お、阿母さんだつて阿父あんに……

正人　こら、直臣、直臣、今の水を飲ましてくれ！

直臣　は、はい。併し今阿母さんが……

正人　なに？阿母さん？お前の阿母さんは何處かでこの私を待つてるのだ！さ早く水を飲ませてくれ！

直臣　は、はい。——信吉、開けてあげないか！

正人　直臣、如何した、水は如何した。

直臣　でも……

正人　（漸く微かに）直臣、直臣。

信吉　さ、早く行つておあげなさいてば！

正人　（ます〱微かに）直臣！

直臣　は、はい！（遂に信吉を見捨てて父の枕邊に走り寄り、コップを父の口元に捧ぐ）

正人　おお。（一息に飲み干して）な、直臣！ これを！（わが袖の赤十字を指しつつ呼吸終に絶ゆ）

直臣　阿父あん！（屍の上に顔をあてて泣く）

信吉　（片手にて戸を閉しつつ片手にて拜む）

（園子、信子窓より覗き見て泣く。きさ何も戸の外にて叫ぶ。「開けて〱」）

直臣　（戸の側に走り寄り）こら信吉、何故阿母さんを入れておあげなかつたのだ！ もう阿父あんは……

信吉　よし、おかあ開けて遣れ！（戸を開る）

（きさ、園子の手を引きつつ走り入り、信吉、直臣には目もかけず直ちに正人の死骸に縋る）

きさ　あなた！ あなた！ まああなたはもう逝つておしまひなすつたのですかねえ！

（聲をあげて泣きつつ枕の下など探る）

その　兄さあん！（死骸の手をとりて靜かに泣く）

信吉　（腕を組んでこれを見る）

きさ　（一顧、信吉あるを認めて、急ち死骸を離れ信吉の胸に飛びつく）これ信吉!!!

直臣　まあ阿母さん！

きさ　（信吉の胸を離さず、顧みて直臣を睨み）お前もだ!!!

その　あら姉さん！（死骸の手を放して立つ）

（信吉胸をとられたる儘、眼を閉ぢて泣く。園子、信吉ときさの間に割つて入る。直臣、亡父

の側に走り寄る。日全く暮る。）

——幕

第五幕　失踪

鞆岡邸、裏庭。一面、青葉生ひ繁りたる梅林奥深く、雨落一ぱいに四目垣。下手花道の正面たるべき處に小さなる木戸。——鞆岡軍醫正の歿後一月を經たる一暗夜。

暫時寂寞。やがて直臣、小さき包を手にし、物思ひつつ、上手より垣根に沿ひて登場。少し遲れて、林の下手より、同じく沈思の頸垂れつつ園子登場。

園子は一旦木戸を通過ぎ、氣のつきし意にて又木戸まで立戻り、すぐ摸索にて鐶を外さんとす。鐶、かたかたと音す。直臣、音する方を屹と見、人影あるに驚き走り寄る。

直臣　（透し視て、聲を潜め）や、お園さんぢやないか！

その　（屹と直臣を視て、覺えず聲高に）あら、まあ、直臣さん？（膝を落として直臣に縋る）

直臣　ど、ど、如何したんだ、お園さん？

その　（猶、直臣に縋りたる儘、聲を曇らせ）直臣さん！

直臣　え？如何したの？え？

その　（直臣さん稍直臣を離る、聲稍震ふ）だつて私……だつて私貴君がお氣の毒で堪らないんですもの！

直臣　（胸を壓へて態と冷やかに）僕が氣の毒？なにも氣の毒な事は無いぢやないか？

その　（聲の震漸く止りて）いんえ……お可哀さうで堪りませんの……

直臣　（遮るやうに）　な、何で僕が可哀さうですか？

その　だつて兄さんが亡つてからと云ふものは……

……

直臣　阿父あんが死なれてから……？

その　姉さんは我意の募り放題……一日一時でも貴君のお氣の安まる時は無いぢやありませんか……今日だつてもあんな無理な……

直臣　（遮つて）　ば、馬鹿な事を言ひ給ふな、馬鹿な事を！　そりやあ成程君がさう思ふのも無理はないがね。僕には少しも辛いなんて事はないんだよ、君。ただ僕はね、阿母さんの心中を察してね……阿母さんの……阿母さんの失望を思ひ遣つてね……いや失望ばかりなら未だ可いんだ、失望の上へ持つて來て、僕と云ふ阿母さんのお嫌ひな者が朝夕お眼の前を離れないんだもの！　阿母さんはまあ、どんなにかお口惜しからう？　如何にかお心細くあらう？　と、ぼ、僕それを思ふと、じ、實際阿母さんがお氣の毒で……

（醉臥る）

その　直臣さん！　貴君はまあ、そんなにも姉さんの事を思つて下さるの？

直臣　當然ぢやないか、大恩ある阿母さんの事ぢやないか！

その　まあ！……　（直臣の持てる包に眼をつけ）　そして貴君、又、今頃こんな處へ如何して出ていらしつたの？

直臣　（靜かに）　僕か、僕は暫く身を匿さうかと思つて……

その　え？　（大に驚く）

直臣　飾磨の乳母の家へでも行かうかと思つてるんだ。

その　（打萎れて）それも皆姉さんが酷いからだわねえ。

直臣　いえさうなもんか！決してさうなもんか！僕と云ふ者が暫くでもお眼に觸れずにゐたなら如何様にか阿母さんのお氣も安まらうかと、かう思つたからだよ！……實は幾度死んで了はうかと思つたか知れやしないんだけれども死ぬのは阿母さんへ劈面打だ！死ぬのは阿母さんに抵抗ふのだ！と思ふと死んだ阿父つあんのお顔や、あの赤十字の徽章が眼にちらついて如何しても手が鈍つて了ふんだ。そこで、これは何でも一時身を隱すより仕方があるまいと考へついたのは今晩だ。――信吉夫婦は病院以來出されて了つたし、今僕が此家を去れば、必然此家は平和に行くよ。

その　だつて貴君は御主人ぢやありませんか！

直臣　たとひ主人であらうとも、其主人がゐるために家が揉める位なら、寧ろ家を去つても家の平和を見なければならんぢやないか！

その　まあ！（驚嘆の眼を開く）

直臣　（語調を變へ）そして君は一體今頃如何して……

その　（俄かに何か思ひ出でたる樣にて）あ、私、私實は……

直臣　實は何？

その　あの私も暫く身を隱す心算で……生野のお友達の處へ……

直臣　なに？君もか？君は何も逃げなくたつ

て可いではないか？

その　いんえ、なまじ私と云ふ者があるために、姉さんの煩悶を燃やすのだとも思ひますし、私さへゐない者になつて了へば、直臣さんだつて今日此頃程にお虐められもなさるまいかと思つて、偶然今夜逃げる決心を致しましたの。

直臣　き、き、君は夫程にまで僕の事を思つてくれるのか！（嗚咽しつ、園子の手をとりて泣く）

その　いんえ、貴君が家を捨てても姉さんの心を安めて下さらうとなさる、其お心には迚も及びませんの！（俯向きて泣く）

直臣　（涙を拭ひて）もう宜しい！解つた！では園子さん、かうしよう。（園子頭を擧ぐ）君か僕か一人逃げる事になると必然何方かが止める。兩方で止め合つてゐた日には果がない。そして、それがために、折角阿母さんのためにしようと思つた事も止して了ふやうな事にでもなつたら何にもならんぢやないか。

その　ええ。

直臣　だからね、君かうし給へ。僕と一緒に飾磨へ來給へ！

その　え？

直臣　僕も少し考へついた事もあるしするから何卒さうしてくれ給へ。ね、ね。

その　ええ。（遅疑ふ）

直臣　如何だね？

その　でも二人とも居なくなつて了ふと姉さんが後で……

直臣　そんなら君一人殘り給へ。

その　だつて、そんな事は出來ませんわ。

直臣　では如何しようと言ふんだ？——ま、好いから僕の言ふ事を承いてくれ給へ、必然好い結果になるんだから！

その　さう？（尙遲疑ふ）

直臣　では僕あもう一人で行くよ。（行きかけて獨語のやうに）此處で逢ひさへしなけりやあ知らずに二人共逃げて了ふんだつたぢやないか！

その　あ、直臣さん！參ります！參ります！御一緒に參ります！

直臣　行きますか。宜しい。すぐ木戸を開け給へ。

（園子靜かに木戸を開く。直臣、先づ出て、園子次で出づ。二人共に無言。花道より急ぎ足にて退場。）

（暫くして林の奧より、きさ、悲しげに叫びつつ、慌急しく走け出づ。下女お花下男金助、其後を追ひて登場。日漸う明るし。）

きさ　大變だ！大變だ！大變だ！園ちやんは何處へ行つた？園ちやんは何處へ行つた？園ちやんは何處へ行つたよう？（下女に眼をつけ）これお花何を狼狽してるんだよ！お孃さんは如何したと言つてるぢやないか！

お花　何處にもお見えになりません。

きさ　見えないから騷いでるんぢやないか！これ金助、お前は又男の癖に何を遲疑してるんだよ。早く直臣でも呼んどいでな！

金助　へい。（走り入る）

きさ　ああ園ちやんがゐなくなつちやあ何にもなりやあしない！十年以來の苦勞は、みんな園ちやんのためぢやないか！（悲しげに）そ、園ちやんがゐなくなつちやあ……

金助　（再び登場）奧樣、若樣のお床もからつぽで

　御座いますよ。
きさ　なに、ゐない事があるもんかね。
金助　いんえ、居さつしやりましねえ。ちやんと蒲團へえ疊んで御座りやしてな、雨戸一枚押外してありましただよ。
きさ　眞實に直臣もゐないの！
金助　へい、ゐさつしやりましねえ！
きさ　さうかい！（勢漸く衰へ）ああ旦那様は逝去つたんだし、信吉夫婦は追ひ出して了つたんだし、邪魔でならない直臣も今ゐなくなつちまつたんだ！……でも園ちやんがゐなけりやあねえ……
金助　お孃樣も大層若樣の事を心配して御座りしたつけ。
お花　ああ、お孃樣は信吉が可哀さうだと被仰つ

ていらつしやいました。
きさ　（柔しく）さうかい。（獨語の樣に）この雜草も邪魔だ、この雜草も邪魔だつて拔いて行く中に、たうとう育てたい可愛い花も折つて了つたんだ！ああ惡いことをした！ああ惡かつた！

（髮おどろに薄汚き裝したる信吉、下手より突き出て來り、開け放れたる木戸の前に立ち留まる。）

信吉　（冷やかに）解りましたか？
きさ　（聲ある方に振向き）ああ信吉か？惡かつた！惡かつた！惡かつた!!!
信吉　（稍嬉しげに）解りましたか？
きさ　ああもう解つた！ほんとに解つた！私はまあ何と云ふ馬鹿だつたんだらう！園ちや

んが一人ゐなくなつたために、今迄自分は何のために何をしてゐたんだか、まるで譯が解らなくなつちまつたんだよ！ああ私は眞實に馬鹿だつた！

信吉　（大いに喜んで）　おお解りましたか!!

きさ　（俄かに心急く樣にて）　そしてお前、二人は如何したか知つてるの？

信吉　（落着きて）　ちやあんと知つてをります。

きさ　え？知つてる？……若しや……若しや二人は死……

信吉　死にましたよ。

きさ　え？

信吉　あなたがお殺しなすつたやうなものだ！

きさ　（驚きの餘り言句出でず）……

信吉　だが御安心なせえ！　貴女さへ生れ更ればお二人だつて必然蘇生りますさあ！

きさ　だつてお前、そんな事が……

信吉　處がさうなんで。

きさ　眞實かい？お前？

信吉　廿日旱の後の雨にやあ枯れた稻も青くなると云ふぢやありませんか。貴女のお眼に涙が浮んだんだ。人の二三人蘇生へたつて何が不思議だい！

きさ　お前そんな謎の樣な事を云つて、大丈夫なのかい？

信吉　それぢや申し上げませうか。なにね、私やあ御邸から追出されてもね、朝晩お邸の樣子はちやんと見てたんでさあ。處が如何も宜しくねえ——どうも貴女が宜しくねえ。私も初めは堪えてゐたつけがもう如何にもかうにも若樣が可

哀さう二度と歸らなくなつてね、實は昨夜二時頃家を出掛けて、なあに構ふ事は無え、雨戸でも何でも打破して若樣あ連れ出す心算でかう歩つて來ると、如何です不思議ぢやあありませんか、ちやんと若樣が私の眼の前に御出現だ！おやつと思つて見ると傍にお園さんがいらつしやるぢやありませんか。一體まあ如何遊ばしたんだつて伺ふと、これがまた不思議だ。若樣が仰しやるには實は阿母樣がこれこれだに依つて家の財產なんか如何でも好いから、暫く身を隱して阿母樣に御安心をおさせ申したい、と言ふんで今お邸をお出になつた、處で庭で偶とお園樣にお逢ひなすつた。其お園樣がまた若樣がお氣の毒の餘り今夜お邸をお遁げなさる心算だつたと言ふぢやありませんか。そこで二人一緒にこれから飾磨へ行く道だとかうです？

さき　飾磨？

信吉　私もね、こりやあ不思議だ。よくよくの事で私がお迎に出た其晩に、お二人が然も各々に逃げようとなすつたのも不思議だ。こりやあ事によると神樣の御敎示かも知れねえと思つたからぢやあこれから直ぐにお供をとかう申しました。すると何處まで若樣は可愛いんだらう、若しも僕等二人がゐなくなつた後で、阿母樣が病氣な事でも遊ばすといけないから、お前これから即刻行つて邸の樣子を見て來い、こちらは二人で澤山だと、かう被仰るぢやあ御座いませんか。私やあもう何處までお優しいのかと思つて感心しちまひましたね。宜しう御座いますつて此處まで來たんだが、やつぱり若樣の優しいのが嘘

つたんだね、何時の間にか奥様に物の道理がかう解つてゐようと言ふんだもの……

きさ　ああ悪かつた！直臣にも詫る！園ちやんにも詫る！

信吉　死んだ旦那は抵抗ふな〳〵つて、よく弱い事を仰有つていらつした様だつけが、して見るとやつぱり旦那は偉かつたんだね……

きさ　ああ旦那様……貴夫……どうか御許し遊ばして下さい！解りました！初めて解りました！

信吉　ええもう斯うなりやあ刃物は要らねえ！

――（懐中より軍醫正の遺言書を出して破り棄つ）

きさ　（驚きて一片を拾ひ取り）實正也？（と訝しげに讀む）

信吉　は、は、は、仲直り實正也！あ、は、ははは！

きさ　ではこれから直ぐ飾磨へ……

信吉　おお詫びにいらつしやるか！

きさ　（微笑みて）然！行くとも！（下男に向ひ）金助、人力車を！

金助　へい。

信吉　（獨語のやうに）嬉しいぞ。嬉しいぞ、ははははは！

（日光、林の奥より洩る。雀囀る。）

――幕

俊寛　一幕

人物

俊寛
有王
九州の商人
第一の島人
第二の島人
第三の島人
第四の島人
第五の島人
新大納言成親
丹波少將成經
平判官康頼
多田藏人行綱
西光
松浦太郎高俊
難波次郎經遠
妹尾太郎兼康
丹左衛門尉基康
松の前
鶴の前
紅の袴著たる女房二三十人
水主一人
雑色一人

場所

硫黄が島

時代

治承三年の夏

硫黄が島の一角、岩白く、砂白し。左に大なる岩山、頂上に祠めきたる凹み、裾に人の自由に出入りし得る程の洞二つ三つ。右に稍小なる岩山。岩蔭に俊寛の庵。竹の柱、蘆の枯葉の屋根、古き萎えたる錦襴の帳。外の柱に白鷺の首しめたるを一羽吊す。

左の岩山との間は、平なる砂地。その向うは渺茫たる大海。海の向うに火山、黄いろき火を垂直に噴く。

星あかり。深夜。静なる浪の音。

流人俊寛、痩せ勞れたる體を横たへて庵に眠る。

色黑き島人五人、砂地に丸くゐて、酒飲む。貝の盃、瓶子。火山の火の光、明暗交々（こもごも）する毎に、島人等の顔、明暗交々す。

島人、盃を廻らしつつ、一人一人に間を置きて、静に物語る。沈みたる調子。沈みたる顔。

第一の島人　廻せ、廻せ。

第二の島人　廻せ、廻せ。

第三の島人　盃が毀れた。

第四の島人　臭い盃ぢや。

第五の島人　酒を飲まないで、盃を嚙み碎いたものがある。

第二の島人　毀れたら、また掘り出すまでぢや。

（貝を掘り出す）

第一の島人　酒はあるか。

第二の島人　何ぼでもある。

第五の島人　（海を指して）あれは皆酒ぢや。

第四の島人　（盃の中を覗くやうにして）　鹽辛い酒ぢや。

第三の島人　咽喉が引つつるわ。

第五の島人　聲の潰れるまで飲まうぞ。

第二の島人　息の續がるまで飲まう。
第四の島人　命が絶えれば、極樂ぢや。
第一の島人　なりや、ここは地獄か。
第二の島人　おれらは地獄へ生れて來たのか。
第三の島人　極樂へ死んで行くのぢや。
第五の島人　死んで極樂へ行くのぢや。
〔稍長き間。盃めぐる。〕
第一の島人　暗い晩ぢや。
第二の島人　夜が更けたのぢや。
第四の島人　嘘を言へ。まだ宵ぢや。
第五の島人　でも、小屋の親爺はよう寢てをる。
第三の島人　あの蜻蛉のやうに痩せた親爺か。
第一の島人　あの親爺なら、晝でも寢てをる。
第三の島人　晝でも夢を見るやうな眼つきをしてをる。
第二の島人　毎晩うなさるるといふではないか。
第三の島人　恐ろしい聲を出すぢやて。
第五の島人　恐ろしい夢を見るのぢやらう。
第一の島人　晝間は少しも物を言はぬ親爺ぢや。
第四の島人　啞ぢやらう。
第三の島人　でも、はつきりと寢言を言ふぞよ。
第二の島人　何の事やら分かるか。
第三の島人　一向に分からぬ。おれらの知らぬことぢや。
第五の島人　坊主のやうぢやな。
第四の島人　でも、生魚を食ふぞよ。
第三の島人　手を合せたを見た事がない。
第四の島人　何處の者ぢやらう。
第一の島人　ここの者ぢやない。
第二の島人　地獄へ生れて來た者ぢやない。

第三の島人　死んで地獄へ來た者でもない。

第五の島人　生きながら地獄へ流れて來た者ぢや。

第四の島人　何處の者ぢやらう。

第一の島人　知らぬ。

第二の島人　おれも知らぬ。

第三の島人　おれも知らぬ。

（稍長き間。盃めぐる。）

第四の島人　あの白鷺は何ぢや。

第五の島人　毎日一羽づゝ吊してある。

第一の島人　首が絞めてあるぢやないか。

第二の島人　さうぢや。首が絞めてある。

第三の島人　食ふのか。

第五の島人　いんや、夜さり懸けては、朝海(あさうみ)へ捨ててしまふのぢや。

第一の島人　毎日か。

第二の島人　毎晩ぢや。

第五の島人　おれが見ただけでも、五十羽は懸けた。

第三の島人　懸ける時、何か言ふぢやらう。

第五の島人　言はぬ。ただ氣味惡う笑ふばかりぢや。

第四の島人　氣違ひぢやらう。

第一の島人　さうかも知れぬ。

第二の島人　さうかも知れぬ。

（稍長き間。盃めぐる。）

第一の島人　月はまだ出ぬか。

第五の島人　もう沈んでしまつたのぢや。

第四の島人　赤黑い月ぢやつた。

第三の島人　波の上に出たかと思うたりや、すぐ

隠れてしまうた。

第二の島人　は、は、は。月も地獄は嫌ひと見える。

第四の島人　（火山を指して）地獄に絶えぬはあの火ばかりぢや。

第三の島人　あの光でも時々消ゆる時がある。

第一の島人　したら、闇ぢや。救ひがたい闇ぢや。

第二の島人　さういふ闇に會うた事があるか。

第五の島人　おれは一度ある。

第四の島人　おれは二度ある。

第三の島人　おれは三度ある。

第一の島人　おれは今宵のやうによう燃えるを見た事がない。

第二の島人　消ゆる前には、いつもよう燃えるぢや。

第二の島人　今宵も消ゆるな。

第四の島人　なんとも知れぬ。

第五の島人　なんとも知れぬ。

（稍長き間。盃めぐる）

第二の島人　寂しい。

第三の島人　火を吹く音がはつきりと聞える。

第五の島人　寂しい音ぢや。

第二の島人　聞きたうもない音ぢや。

第四の島人　歌でも唄はうて。

第一の島人　誰ぞ舞はぬか。

第二の島人　おぬし舞へ。

第四の島人　おぬし舞へ。

第三の島人　舞はうか。（立つて舞ふ）

他の島人等　（舞に合せて唄ふ）

　波にただよふ

螢のなきがら
ゆらりゆらりと
ゆらりゆらりと
月の光を
はこぶなきがら
ゆらりゆらりと
ゆらりゆらりと

（この舞のなかばに、火山の火急に消ゆ。同時に星も光を失ふ。少時闇黒。人の立ち騒ぐ氣はひ。浪の音。）

第一の島人の聲　消えた。

第五の島人の聲　消えた。

第四の島人の聲　消えた。

俊寛の聲　只今あかしをもて參るぢや。

（あたり急に明るくなる。星の光にもあらず、火山の火の光にもあらず、大海の青白く光り出だせるなり。第一の島人に代りて成親坐す。第二の島人に代りて成經坐す。第三の島人に代りて康頼坐す。第四の島人に代りて行綱坐す。第五の島人に代りて西光坐す。各の顔、元ゐたる島人の顔に似たり。衣服も、島人の著たる物の上に、袈裟狩衣など慌てて重ねたるやうに見ゆ。一同無言。時々口を開けども、聲聞えず。酒に醉ひたる態。瓶子地上に倒れたり。俊寛、庵の内より起き出で、貝殼に蠟つけたるものを持ち來る。火とぼりゐるつもりなれど火とぼりならず。同じく醉ひたる態。少しも弱弱しげなる樣子なし。）

俊寛　山おろしに火をとられたさうな……平家の命もやがてこれぢや。

康頼　（瓶子を指して、口を動かす）

俊寛　なに……なんと言はるる……瓶子が倒れたと申さるか……むむ……いかさま……事のはじ

めに先づ平氏の倒れたるは心地よし。

西光　（瓶子をとり、その首をもぎて俊寛に見せ、口を動かす）

俊寛　はははは……倒れたる平氏……首をとるに若かずと言はるるか……惡面白し。

成親　（俊寛に向ひて口を動かす）

俊寛　なに……愚僧に猿楽つかまつれとな……そは判官の殿の役目なり……なう判官殿……なに……たつて愚僧のが見たしと仰せらるるか……然らば仕らう。

（俊寛、首は無く瓶子をさし上げ、酔ひたる足を踏みしめて舞ふ。一同手拍子をとる。但し音はせず。次の歌、何處よりともなく、微に聞え來る……）

あまりへいしの多ければ、

あまりへいしの多ければ、
酔ひて候、倒るるまで酔ひふとりて候。
そのへいし、すでに倒れ亡びぬれば、
首とりて候、首丁とはなちて候。
とりたる首は、先づ大路を渡さむ、
さて獄門の樗の木にかけむ。

（この間に行綱默して立ち、左手の洞の中へ消ゆ。一同氣づかず。舞まさに終らむとする時、行綱の入りたる洞より松浦太郎高俊、太刀を佩き、繩と鞭とを持ちて出で來り、物をも言はず西光を縛し、鞭うち、刀を擬す。一同知らず。俊寛ひとり氣づきて舞をやむ。）

俊寛　こいや高俊どの、西光をなんと召さるる……なに、謀叛ぢや……謀叛のかたらひしたと言はるるか……はて……不思議……天下の安きを

計るが何で謀叛ぢや……

（高俊、俊寛には目もくれず、西光を引立てて、右の岩蔭に消ゆ。直ぐ又、左の岩山の他の洞より難波次郎經遠出で來り、同じく無言にて成親を引つ立つる。）

俊寛　經遠どの……大納言の殿をいづれへおん供申すぞ……なに……これも謀叛ぢや……はて何が謀叛か……左大將を望まれたが謀叛か……德大寺の卿も望まれた……花山の院の中納言も望まれた……愚僧ぢやとて望まぬには限らぬ……

（經遠、構はず成親を洞の内へ連れ去る。直ぐ又、他の洞より妹尾太郎兼康出で來り、成經と康頼との衣を剝ぎて去る。俊寛、呆れてこれを凝視す。成經、康頼、もとの島人の姿となる。一同酒の醒めたる體。暫く沈默。）

俊寛　（あたりを見廻し、わが姿をも顧みて）や……ここは何處ぢや……なに硫黄が島ぢや……なぜかやうな所へ流された……謀叛の咎によりてとな……謀叛とは院にさからふ事ぢや……人臣の傲れるものを亡ほすが何で謀叛ぢや……

（成經、康頼、默して立ち、岩蔭より細長き木切れやうのもの數多持ち來り、その一つ一つに小さき木切れにて何か彫りつけ、拜みては海に流し、拜みては海に流す。）

俊寛　何をなさる……何……都の戀しさままに……千本の卒塔婆を作りて……海へ流す……なに……一本なりとも……都へ屆かば……願足るとか……（卒塔婆の一つをとりて讀む）さつま潟……沖の小島に我有りと……親には……告げよ八里の……汐風……はははは……（他の一つをとりて讀む）思ひやれ……しばしと思ふ……旅だにも……

…なほふるさとは戀しき……ものを……ははは……かかる願が何になる……佛に何の力があらう……神に何の力があらう……歸らば、泳ぎ歸るぢやまで……人の力ぢや……人の力ぢや…

（成經、康頼、瀧木綿にて幣を作り、左の岩山の頂上へ幾度となく登り降りす。）

俊寛　これは又何ぢや……何……熊野詣ぢや……なに、かの園の上を熊野權現と思ひて……三十三度の參詣をなさるゝ……夫も亦歸洛の願か……ははは……日隱れ天魔はびこる此園に……さやうの祈り卽何程のかひあらむ……ははは…

（康頼、成經に何か耳うちし、頂上の祠めきたる凹みを拜みたる後、立つて靜に舞ふ。次の歌、何處よりともなく、微に聞え來る。）

さまに心ぞかはるかな。

落つる涙は流の水、
妙法蓮華の池となり、
弘誓の舟に竿さして、
沈むわれらをのせ給へ。

（この舞の内に、大なる木の葉二つ、空より落ち來る。俊寛、それを拾ふ。舞終ると、葉の面を讀む。）

俊寛　なに……かたかたには「歸雁」とある……歸雁……歸雁……むむ、歸る雁か……見よ、祈らでもこれぢや……

（成經、康頼、喜び合ふ樣子。）

俊寛　かたかたには……なに……「二つ」とある……二つ……二つ……なぜ三つとはなきぞ……

（稍悲しげなる表情）

（康頼、又立つて舞ふ。次の歌、又何處よりと

もなく、微に聞え來る。）

よろづの佛の願よりも、
千手のちかひぞたのもしき。
枯れたる草木も忽に、
花咲き實のるとこそ聞け。

（この舞の中ばに、紅の袴著て、鼓をわきばさみたる女房二三十人、朦朧と砂の上にあらはれ、康頼と共に舞ふ。康頼、驚きて舞をやむ。女房達、構はず舞ひ續く。次の歌、又遠くより聞え來る。）

人々の、人々の、
都歸りも近ければ、
名殘を慕ひて來れり、
來れり、名殘を慕ひて。

俊寛　（面持晴れやかになりて）あれ見よ……多くの女房が名殘を惜しみに參つた……二人のみかは……三人も……四人も……十人も……二十人も……それ、それ……愚僧をみてほほゑみをる……招きをる……愚僧もやがて歸るぢやて……

（俊寛、女房達へ近寄る。と、女房一人のみ殘りて、他は悉く消ゆ。）

俊寛　や……鶴の前に松の前な……さがれ……さがれ……身共は知らぬ……なに、わが謀叛はそち達故ぢや……おろかな事を申せ……天下の爲ぢや……萬人の爲ぢや……なに……成親の卿よりそち達を貰ひたさ故に……かたうどしたと申すか……たはけめ……嘘ぢや……なに、松の前に子が出來た……子とは何ぢや……僧に子はない……知らぬ……知らぬ……知らぬ……知らぬ……

（二人の女房、俊寛に身近く寄るよと見れば、つと消ゆ。俊寛、呆然たり。直ぐ、舟一艘、海に見ゆ。男三人乘る。）

俊寛　（俄に活潑なる表情）おう……おう……それ、それ……參つた……使が參つた……都より使が參つた……

（俊寛、走りて岸へ近づく。舟著く。丹左衛門尉基康、雜色一人連れて降りる。水主舟に殘る。基康、雜色が首にかけたる布袋より書狀やうのものを出して、何やら頷きつつ俊寛に渡す。成經、康賴もその側へ寄る。俊寛、書狀をひろげて讀む。）

俊寛　中宮御産の御祈禱に依り……非常の大赦行はるるの内……薩摩潟鬼界が島の流人丹波の少將成經幷に平判官康賴法師歸洛すべきの由……丹波の少將成經幷に平判官康賴……丹波の少將成經……平判官康賴……俊寛の名のなきはいかに……むむ、禮紙にこそ……（禮紙を見る）禮紙にもなし……

（俊寛、康賴心亂るる樣にて、赦免狀を奧より端へ讀み、端より奧へ讀む。やがて、手より取落す。成經、康賴、これを拾ひとりて讀み、氣の毒げに俊寛を見る。）

俊寛　（基康に向ひて）吾等三人は同じ罪ぢや……配所も同じ所ぢや……如何なれば同じ赦免に我一人とり殘さるるぞ……平家の思ひ忘れか……執筆のあやまりか……

（基康、俊寛に目もかけず、成經、康賴をさし招く。）

俊寛　（成經の袖に縋りて）俊寛がかやうになるといふも、御邊の父、大納言殿のよしなき謀叛故ぢや。かまへて、よそ事と思ひ給ふべからず……

もし赦されずは、都までとは申すまじ……せめては同じ舟にのせて、九州の地まで連れ給へ……（成經の袖を抑へたるまま、又康頼の袖をひかへて）日頃の嘆きは物の數にあらず……故郷の戀しきも、この島の悲しきも、三人語つて泣きつ笑ひつすればこそ慰む便(よすが)ともなつたのぢや……それさへ忍びかねて……しばしばうき音を泣いたに……われ捨ててのぼり給ふあとの寂しさはどうぢや……思うても……恐ろしい……ああ三年の契も絶えはつるか……ひとり留めて歸り給ふか……名殘惜し……名殘惜し……（泣く）

（基康、成經、康頼、構はず舟へ乗る。俊寛、物狂はしく、舟に乗りては降りつ、降りては乗りつする。水主、纜を解く。俊寛、綱にとりつき、舟の腰になり、脇になり、丈の立つまで海の中へ引かれて出づ。水、頸に迫る。俊寛やうやく綱を放し、岸へ轉び上がる。）

俊寛　方々、俊寛をばつひに見捨て給ふか……おうい……おうい……（延び上がり、足摺りして）おうい……おうい……

（舟隱る。）

俊寛　おうい……おうい……おうい……（倒れ伏す）

（稍長き間。左の洞より有王と九州の商人出で來り、倒れ伏したる俊寛の前に立つ。）

俊寛　（顏をあぐ。稍反抗的なる表情）　や……そちは有王(ありわう)か……それなるは誰ぢや……なに……九州の商人を案内に連れて參つたと申すか……何しに來た……なに……迎へに來た……迎へに來る用はない……歸れ……歸れ……歸れ……俊寛はいつまでも一人でをるのぢや……平家が迎へ

ぬとあらばよい……天下が捨てたとあらばよい……もう誰が來ても歸らぬ……歸らぬ……いつまでも一人でをるのぢや……いつまでも……いつまでも……生きながら鬼になるまで……この地獄の火に燒かれてゐるのぢや……（兩手に顏を掩ひ、走りて庵に入る）

（つと大海の光消ゆ。暫く闇黑。やがて曙光。あたり次第に明くなる。火山、勢よく青き烟を噴く。俊寬、庵の内に、薪の明きたる時と同じ形して眠る。有王と九州の商人、闇黑前と同じ形して立つ。闇黑前の二人より、顏容少しくやつる。）

有王　もう今日で十日ぢや。

九州の商人　十日十夜でござりまする。

有王　すでに世を終へさせられたか。

九州の商人　左程短いお命でもござりますまい。

有王　でも……山にも谷にもお姿に似たものは見えぬ。

九州の商人　匂さへもござりませぬ。

有王　匂とは。

九州の商人　人の匂でござりまする。

有王　それも血肉（ちにく）の枯れ果てしは。

九州の商人　血肉は枯れても、人のたましひは匂ひまする。

（稍長き間。）

有王　三人の内二人は歸つた。一人は行くへも知らずさまようて行つたと島人が申してゐた。

九州の商人　この世の亡ひるまで、さまようてでござりませう。

有王　この島中（しまぢゆう）をか。

九州の商人　いいや……島をも……海をも……空をも。

有王　むむ……さまようてをられようて……主人は不信にをはした。

（稍長き間。）

有王　（元結に手をやり）　姫君の御文も潮になえて、御心こもりし水莖の跡もさぞにじんだ事であらう……（ふところへ手をやり）　京より持ち參りし菓子も、早ほろほろに……

九州の商人　（遮つて）　もはやお歸りなされては如何と存じまする。

有王　さまを變へて菩提を弔へか。

九州の商人　忘れておしまひなさりませ。

有王　忘るる事が出來ようか。

九州の商人　御主人は神佛をもお忘れなされました。

（短き間。）

有王　（俊寛の庵に目をつけ）　あれ見よ、あれも島人ぢや……京童が築地の腹などに造りたる犬の家にも劣れるものかな……あはれ、わが主人若しいまさば、あのやうになりてもをはさう……なぜといへ……かりにも法勝寺領を知行し給ひながら、修理造營をもし給はず、恣に三寶の布施を受け、あくまで伽藍の寺用を貪り給ひし罪のむくいに……生きながら餓鬼道に落ち…

（俊寛、起き出づ。いたく衰へたる樣なり。默して柱の白鷺をとり、海へ捨てに行かむとす。有王、物語りつつ、ぢつとこれに見入り、直ぐそれと氣づく。）

有王　やや……君ぢや……君ぢや……商人……君ぢや……

（俊寛、逃ぐるやうにするを、二人してやうやうに捕ふ。）

有王（獨語のやうに）あさましいお姿……あさましい。

（俊寛、更に物言はず。悲しき激動を強ひて隱す樣子。）

有王（俊寛の顏を覗くやうにして）なぜ物を仰しやりませぬ……夢とでも思し召してか……これは現でござりまするぞ……現でござりまするぞ……君、君、なぜ物を仰しやりませぬ。

（俊寛、眼を見張つて一方を凝視するのみ。物言はず。）

有王　さらば、こなたより申し上げう……君の西八條へ出でさせ給ひし後、官人參つて資財雜具を破りとり……お内の者ども搦めとり……みな失ひ果てましてござりまする……北の方はをさなき君をつれ給ひて、鞍馬の奥へお忍びなされました……悲しき事の多かる内にも、をさなき君はこの童の顏を見給ふ度に、「如何に有王よ、われ硫黄が島とやらへ具して參れ。」とのおむつかり……その悲しく愛らしき聲も……過ぎし二月、瘡と申すいたつきに絶えさせられ……北の方のおん嘆き……それよこれよと思し召し沈ませ給ひしが、さんぬる三月二日、つひにはかなくおなりなされました。

（俊寛、尻居にどうと倒る。）

有王　今は……今は姫御前ただ一人、奈良の姨御前の御許に忍びておはしまする……それよりのおん文……（ふところより文を出して、俊寛に渡す）

（俊寛、これを手に取りて、紙の面をみれども、字義通ぜぬ面持。）

有王　あまりの心つかはれて、文字さへ讀めすな

り給ひしか。讀んで參らすべし。(文を讀む) その後たよりなき孤子となり果てて、お行くへをも承る便もなし。身の有樣をも知らせ參らせず。いぶせさのみ積れども、世の中かきくらして晴るる心地なく侍り。あはれ尊きも卑しきも女の身程いひかひなきことは候はず、男の身にて候はば、渡らせ給ふ島へも、など尋ね參らで候ふべき。この童をお供にて急ぎ上らせ給へ。戀しとも戀し。ゆかしともゆかし。三年の嘆き、水莖に盡し難く侍れば……

(俊寛、この文の言を聞く内、やうやく氣の遠くなる樣子。つひに絶え入る。)

九州の商人　(靜に俊寛をささへ、冷かに)　有王樣……有王樣。

有王　(それと見ると、文を捨てて俊寛に抱きつき)　や……君……何となされますする……何となされますする。

(俊寛、有王と九州の商人とに抱かれて永き眠に入る。夜、全く明く。涙の音。遠く近く鶯の聲。極めて靜かに幕。)

新緑　一幕

人物

主人　二十八歳、文學者、實業家の子

客　三十一歳、文學者

女中

（客は主人に對して、比較的ぞんざいな詞を使ふが、それは決して主人を眼下に見てゐるからではない、親しみ一つからさうした詞使ひをするのである。主人は客に對して比較的丁寧な詞使ひをするが、これも媚びようとしてゐるのではない、先輩に對する以前からの純な敬意がかういふ習慣を作つてしまつたのである。だから、丁寧な物の言ひやうの内にも、十分遠慮のない親しい調子が籠つてゐなければならぬ。）

場所

主人の父の家

時代

明治四十三年

日本風の座敷に西洋風の室内装飾をした主人の書齋。ライチング、テエブルの置いてある前の硝子窓から中庭の新緑が輝いて見える。緣側續きの土藏の白壁が、青葉を透して來る明い日の光に、薄青く染まつてゐる。何處かで目白の鳴く聲が時々する。初めは誰も座敷にゐない。暫くすると、部屋の外に女の聲と男の聲がする

女中　（部屋の外にて）どうぞこちらへ。

客　（部屋の外にて）有難う。

（正面の襖明く。客、登場。微醺を帯びてゐる。
女中その後に添ふ。）

女中　どうぞお掛け遊ばして。

客　（椅子の一つへ疲れたやうに腰をおろす）　まだおやすみなんだらう。

女中　（笑つて）　只今お目覚めになりましたところでございます。どうぞ暫く。

客　（笑つて）　どうぞ御ゆつくり。

（女中退場。間。）

客　（小さな欠を一つする。自分の眼の前をぢつと見詰める。稍芝居掛かつた憂鬱な表情。）

（女中、紅茶のタッセと新聞を持つて登場。）

女中　只今、御飯をあがつて入らつしやいますから、暫くどうぞ。

客　（女中がはひつて来ると同時に、直ぐ前の快活な顔に戻る）　ええ、ええ、どうぞ御ゆつくり。

（女中退場）

客　（右の袂から巻煙草の袋を三つ出して、それを卓の上に列べる。一つ一つ種類が違ふ。いづれも袋が破けて呑みかけてある。女中の持つて来た新聞は一目見ただけで手を觸れずに、自分の袂から幾つにも折つた新聞を一枚取り出して、丁寧にそれを擴げる。その時、電車の乗換切符が一枚袂から一緒に出て、床の上に落ちる。氣が附かない。新聞を讀みながら、三種の煙草を代りばんこに呑む。）

（主人登場。）

主人　入らつしやい。

客　（新聞を置いて立つ）　お早う。

（二人一緒に腰を掛ける。女中、紅茶のタッセを二つ持つて登場。前に客に出した一つを手にして直ぐ退場。）

客　折角寢てるところを起して濟まなかつたね。
主人　いえ、もう起きる時分なんです。
客　こんなに早く。
主人　（白々しく）　ええ、この頃は夜遊びをしませんから。
客　えらいもんだね。（自分は餘程皮肉なつもり）「ま」宜しく言つてましたぜ、クロコダイルが。
主人　（平氣で）　昨晩はどちらでした。
客　（狼狽して）　ゆうべは何處へも行きやしない。
主人　（平氣で笑ひながら客の手にしてゐる新聞を遠くから指さす）
客　（主人のする事が分からないで）　なに。
主人　その「時事」といふ赤いもい判が承知しません。あなたは今朝往來で初めて新聞を見たん〔です〕
客　（言ひ當てられて、人の好ささうな苦笑をする）
主人　（疊みかけて）　大分この頃は御盛んださうですね。
客　どう致しまして。とても君にやあ敵はないさ。（揶揄的に）　君は「好き」で行くんだが、僕は「嫌ひ」で行くんだから。
主人　（落ちついて）　さう簡單にも言へませんよ。私だつて好きになつたり嫌ひになつたりします。
客　（羨ましさうに）　でも、まあ、君は好きな時の方が多いんだらう。君があアいふ處へ行つてゐる時の樣子を見ると、如何にもよく調子が合つてるもの。「おれの家はここだ。」といふ風な、如何にも落ちついたゆつたりした氣持が見えてるもの。

主人　（好い加減に笑つて聞いてゐる）

客　（段々誇張的になる）ところが僕と來ちやあ全然嫌ひなんだからねえ。厭で厭で堪らないんだ。もうあの門を一目見ると、ぐつと癇癪が起つて來るんだ。あの門を一歩はひると、僕はそこいらにうろうろしてる車屋でも、地廻りでも、誰でも相手にして喧嘩がしたくなるんだ。竹村へはひればはひるであのクロコダイルさ。僕は天下にあいつ程厭な婆あはないと思つてゐる。あの眞黑な低い鼻をいやにぴこつかして、「今夜はどちら。花里さんが心配してましたよ。」などとやられると、總身の毛がよだつて來るね。

主人　（茶かすやうに）でも、それから先きは萬更でもないでせう。

客　（益々眞面目に）ところが大違ひさ。一體ああいふ處にゐる女ぐらゐ積に障るものはない。醜女の版元はここでございといふやうなのが、自分では天下一の美人だ位に思つてやがるんだからね。でれでれぐにやぐにやした男ばかり相手にしてるものだから、僕のやうなごつごつしたのが行くと、「あら、花林糖さんが又來たよ。」なんて言やがる。

主人　（又茶かすやうに）大層惡く言ひますね。ゆうべ何かあつたですか。

客　（やはり眞面目に）いいえ、何もありやしない。例の通り行つて例の通り歸つて來たばかりさ。うんと不愉快な空氣に漬つて、女々しい感情を荒して來たんで、けさは餘程頭の工合が好いんだ。

主人　（やはり冷やかすやうに）熱いお湯うへ顏を

しかめながらけひる型ですね。(と言つたが、何か思ひ出して、少し眞面目になる) さう言へば、全くあなたはあすこへ行くと別人のやうになりますね。私はこなひだ初めてお供をして、實際驚きました。

客　(得意らしく) お守(まもり)の一件かい。

主人　(客人の容體を心配するやうな顔つきで) ええ。あゝいふ所にゐる人間はみんな迷信家なんですから。あんな物でもああやつてお宮へ入れて大事にして毎日拜んでゐるんです。それをあなたは引き摺り出して、紙屑でも燃やすやうに火鉢の火へ焼べてしまふんですもの。

客　(益々得意で) は、は、は。五六枚あつたね。成田山だの、水天宮だの、金神様(こんじんさま)だの。僕は罰が當つてくれれば好いと思つてやつたんだが、別に罰も當らないね。つまらない。

主人　どうしてあんな亂暴が出來るんでせう。(探るやうに) かう、醉ふと、芝居氣が出て來るんぢやないんですか。

客　(少しも感情を傷つけられずに) 芝居氣。無論、芝居氣も幾らか混(ま)つてゐるね。併し、八分は本氣なんだ。(又段々誇張的になる) 僕は何かで再び起てないやうなひどい目に會ひたいと、始終さう思つてゐるんだ。ちよいちよい人には虐(いぢ)められるが、やつぱりまだ僕の生きてるやうな虐められ方だから物足りない。滅茶滅茶にやつつけられて、とても起てないやうにして貰ひたいんだ。どうせ世間はさういふもんなんだから、早くさうして貰ひたいと思つてるんだ。ところが世間といふ奴は中々さう早く片を附けない。ち

びり、ちびりとお出でなさる。丁度、年といふ奴が僕等の髪の毛を一本一本白くして行くやうに、世間といふ奴は人間の手や足を一本宛、ゆつくりゆつくりもいで行くのだ。それが僕のやうな癇癪持には迚も待つてゐられないから、何か一度に悪い事をして、一度に滅ぼされてしまひたいんだ。（間）ゆうべ僕はこんな事をやりかけたんだ。電燈の線をナイフで切つて吉原中を闇にしてしまふんだね、同時に自分はナイフから感電して消えてなくなつちまふのさ。

主人　（びつくりして）ほんとにそんな事をしかけたんですか。

客　（得意で）ほんととも。二階の欄干の直ぐ前に丁度太い線が一本來てるんだ。あいつを切つてやらうと思つたんだが、たうとう留められてしまつた。

主人　（安心して）また大分醉ひましたね。

（女中登場、日本茶の盆と菓子鉢を卓の上に置き、手紙端書などと一緒に帯封をした雑誌を一つ主人に渡し、前の紅茶のタッセを片附けて行かうとする。）

主人　菓子はだめだ。ビイルがあるだらう。きのふ貰つた林檎と一緒に持つておいで。

女中　はい。（行かうとする）

主人　おい、おい、この菓子を持つてかないか。このお客様は見るのも嫌ひだとおつしやるんだ。

（女中笑ひながら、菓子鉢を持つて退場。）

客　（穏やかな調子に復る）何だね。雑誌は。

主人　（冷かに雑誌の帯封を切る）「東京文林」です。

客　（心配さうに、又得意さうに）ははあ。又何か

吾々の事が出てゐるね。

十八　（雑誌を好い加減に繰りながら）今度は出てないやうですよ。

客　（嘲るやうに）珍しいこつた。

主人　（少しも憤慨せずに）先月でしたかねえ、寫眞入りで「耽溺文士列傳」とかいふのが出てゐたのは。

客　（腹立たしげに）さう、さう。

十八　（面白さうに）あれが親父に見られて、すつかり怒られつちまひました。けれども内の親父の言ひ草は、面白いんですよ。こんな物を書くやうな下等な奴に知れるやうな場所で遊ぶからいかんのだ。もつとうんと上等な處で遊べ、かういふ下等な記者が窺ひ知る事の出來ないやうな場所で遊べ。」とかう言ふんです。なあにどこで遊んだつて書くにやあやつぱり書くんですが、それでもあれから親父が餘計に小遣を呉れるやうになりましたから、好い鹽梅だと思つてゐます。

客　（眞面目に）好いお父さんだ。お父さんからしてさうだから、君はどこへ行つても、ああ落ちついてゐられるんだね。實に羨ましい。（間）僕などは資金をみついでくれる親父はなしさ。自分の稼いで取るものを、お袋に内證で側から蕩盡してしまふんだ。それも面白くてするならまだ好いさ。僕のは面白くも何ともなくてやるんだからね。

主人　（疑ふやうに）ほんとにそんなに面白くないんですか。

客　「初めは本當の感情が出るが、中途からのは皆虚

的になる）さつきも言ふ通りさ。一體僕は「眞實」といふものを眞面に見る事が出來ない人間なんだね。眞面に「眞實」にぶつかつて行くだけの力が僕にはないんだね。（女中登場。ビイルと林檎を置いて退場。主人ビールを二つのコップに注ぐ。この間も客、構はず話し續ける）丁度視力の弱い人間が太陽をまぼしがるやうに、僕のやうな弱い人間はとても「眞實」を正視してゐることが出來ないんだ。そこで、どうかして「眞實」を見まいとするんだ。「眞實」を逃げようとするんだ。自分に何か好きで好きで堪らないものがあれば、それに沒頭して始終醉つてゐる事も出來るといふものだが、悲しいかな、僕には一つもさういふものがない。そこで成るべく厭なもの不愉快なものを選んで、その中へ飛び込まうとするんだ。さうして始終腹を立てて感情を荒してゐれば、どうにか「眞實」が忘れてゐられるやうに思ふんだ。「生活が單調でつまらないから強い刺戟を求めるんだ。」などといふやうな、そんな無邪氣な人生觀から遊ぶんぢやない。腫物で痛む腿へ錐を突き通して、腫物の痛みを忘れようといふやうなヤケな遣り方なんだ。（誇張が濟むと又辯解の調子になる）失敬だけど、勿論君の耽溺だつて、唯「遊びたいから」といふだけのものぢやあるまい。けれども、君は生れつきそれが好きで、それに醉へる方だから羨ましい。醉つて忘れられる方だから羨ましい。（ビイルを一息に飲む）

主人　（すぐ又客のコップにビイルを注ぎ、話をそらすやうに）でも、あなたの方が私より酒は強い。

客　（主人の詞を少しも皮肉に取らないで）　酒には酔へるが、「遊び」には酔へない。女にも酔へない。三味線にも酔へない。（又一杯飲む。主人、又注ぐ）それをさういふ雑誌なぞを見ると、「歓楽を追ふ」とか「歓楽を求めてる」とか、さういふ事が書いてある。僕等が遊ぶのも、銀座あたりの若旦那が藝者の尻を追つかけるのも同じに書いてある。

主人　（冷静に）　でも、形に現れたところは、やつぱり同じですからね。吾々のだつて、あんまり體裁は好くないでせう。

客　（やはり主人の詞を少しも悪く取らないで）　それは外面ばかりを見るからさ。彼等は内部を見ることを知らないんだからだめだ。

主人　（やはり冷やかに）　外面のと内部のと、そんな事は考へてもゐないのでせう。私は唯儲けるから書くんだと思つてゐます。羨ましいから書くんだと思つてゐます。こなひだの「耽溺文士列傳」を書いた男なども、天下國家の爲に大層憤慨してたやうですが、あの男は大層「六區」の通だと言ひますぜ。吾々の遊びが少くとも六區以上なのが、あの男には氣に入らなかつたのでせう。

客　（どこまでも正直に）　君はさういふ風に悟つてしまへるから、實に羨ましい。僕は憤慨してる男をどうしても憤慨してる男として考へなければ、外に考へやうがないんだ。僕は世間で標榜する新聞の三面記者だとか雑誌の六號記者だとかいふ者をも、一種の道學者として考へずにはゐられないんだ。即ち自分の正面の敵として考

へずにはゐられないんだ。

主人　（客に對する或理解を得て）だから、あなたはいつでも小說の中に、あゝいふ手合に當たるやうな文句を、きつと何處かに書いて置くんですね。私なんぞは小說を書くのに、初めつから「傾城買四十八手」か「娼妓絹麗」でも書くやうなつもりで書いてゐますね。さうして、あれだけの物が書ければ大したもんだと思つてゐます。「梅兒譽美」も好うございますが、「一卷中艶語多しといへども、男女の志、清然と濁りなきを竝べて」なんてアポロジイが時々出て來るので厭になりますね。

客　（主人の詞に反對しようと思ふが、元來腹の底までデカダンスの氣分に漬かつてゐる人ではないから、もう反抗的な誇張した修辭に盡きてしまつて、爲方がなしに默つてゐる。）

主人　（その隙を利用して、巧みに話題を變へる）さう言へば、近頃暫くお作が出ないやうですが、何か長い物でもやつてゐるんですか。

客　（又穩かな調子に復る）いいえ、なんにもやつちやゐない。

主人　（ほんとに心配して）また頭の工合でも惡いんですか。

客　ああ。

主人　毎年、今時分になるといけないんですね。

客　どうもこの、新綠といふ時分になると、頭の奥の方が蜘蛛の巣でも掛かつたやうに、もやもやして來て困るんだ。

主人　もう隨分古い話ですね。

客　さう。もう隨分古い話だ。

主人　（憫むやうに）私は原因を知つてゐますよ。

客　原因（間。自分で自分を欺く）原因なんかありやしない。

主人　でも、みんなの知つてる事ぢやありませんか。

客　（自信的に）初めは原因といふやうなものがあつたか知らないが、もう今ぢやあ、なんにも覺えてやしない。唯毎年今頃になると、ひとりでに頭がむしやくしやして來るんだ。生理的に頭が痛んで來るんだ。漫性なんだね。漫性の――「新綠病」とでも言ふんだらう。

主人　私に丁度、あの時分、あの人の弟と同級だつたんです。

客　（直ぐ釣り込まれて）さう。成程、さうだつたね。

主人　勿論、その時分はなんにも知らずにゐたんですが、あとで色々弟から聞きました。

客　今でも、あの弟と交際してゐるのかね。

主人　思ひ出したやうに、時々訪ねて來たり、手紙をくれたりするんです。

客　（わざと他の事を言ふ）あいつは少し抜けてるやうだつたね。

主人　ええ、ですから、何もかも私にしやべつちまふんです。隨分あの當時は色々ごたごたしたんださうですね。

客　（厭味とは知らずに）なあに、ごたごたしたのは僕の頭ばかりさ。向うは極めて平和に嫁に行つてしまつたのさ。

主人　（追窮するやうに）さうでもないやうですぜ。

客 （無理に諦めた調子で） なあに、僕は青二才だし、先方は立派な紳士だから、問題にも何もなる筈がないんだ。人間の魂などに値打があると思つたのが、こつちの間違ひさ。

主人 （わざと客の知つてる事を言ふ） でも嫁に行つてから、家庭がうまく行かないので、親達もあとで大分後悔したらしいやうですぜ。

客 （自分の既に知つてる事を人の口から聞いて、少しは復讐的の愉快を感じながら、無理にそれを押し隠して） なあに、何處へ行つたつて、家なんてものは餘りうまく行くものぢやないさ。

主人 （皮肉に） あなたの所へ來てもですか。

客 （やはり眞實の感情を隱して） ああ、さうとも。

主人 （客の心を探るやうに） けれども、若し向うの主人が死ぬとか、或は離縁になるとかして、あの人が一人になるとしますね。そして、あの人があなたに會ふとしますね。

客 （少し眞實の感情を出す） そりや問題さ。僕の言つてるのは昔の話さ。もう決して二度と來つこない十年前の話さ。

主人 ところが、この頃噂に聞くと、あの人は家へ歸つてるといふ話ですぜ。

客 （悉く眞面目になる） ほんとかい、それは。弟から聞いた事かい。

主人 弟から聞いたんぢやありませんけど、弟の友達から又聞きに聞いたんです。

客 （狼狽して） へええ、面白いね。（今まで忘れてゐたビイルを思ひ出したやうに又一杯飲む）

主人 なんでも亭主が死んだとか言ふんですがね。

客　え。（心中非常に驚いたが、直ぐ又強ひて冷淡な調子になる）　大分酒飲みだといふ話は前から聞いてゐたがね。ぢやあ、やつぱりそれで躰でも毀したんだらう。

主人　それで、家へ歸つてるといふ話なんです。（眞實客の爲に或レメディを與へようとして）どうです。一度會つて見ちやあ。

客　さあ。會つても好いね。（と思はず言つたが、ふと氣が附いて、釣り出された「自分」を又心の奥の方へ納つてしまふ）　よさう、よさう。今會つて見たところで、しやうがない。

主人　（眞面目に）　でも、或は又新しい世界が開けて來るかも知れませんぜ。

客　（庇ふやうに）　新しい世界。僕はそんなものがあるとは思はないね。人間の運命は先の先までもうちやんと極つてゐるものさ。僕の運命などにはもう黴が生えてゐる。

主人　（やはり眞面目に）　その黴も人間の力で拭き落せる事があるといふぢやありませんか。

客　（起つて來る空想を努めて斥けようとする）　いやだめだ、だめだ。もうそんな話はよさう。歸つたら歸つたで好いぢやないか。僕はもうこんな人間になつちやつたんだ。今の僕とあの先生との間にはもう毛筋程の關係もなくなつてるんだ。

主人　（追窮する）　でも、やつぱり、今時分になると、頭が痛むんでせう。

客　（逃げるやうに）　もう廢し給へと言つたら。頭の痛むのは時候のせゐだよ。

主人　（どこまでも眞實を知らうとする）　でも、こ

んな事を聞けばやつぱり變な氣がしませう。

客　（敗北して）　だから、もう廢す事にしようぢやないか。（間。ふと或事實を思ひ出し、それに諦めの力を得ようとする）　こなひだも君、こんな話があるんだ。何處の歸りだつたかな。（間）　さうさう。向島の歸りだつた。

主人　（餘り責めるのも氣の毒だと思つてゐるところへ、ふと客が何か他の話をし出したので、直ぐそれに調子を合はす）　村越君と一緒に行つた時ですか。

客　いや、さうぢやない。それより二三日前だ。ばかに朝早く出ちまつたんで、家へ歸るのは少し工合が悪いから、本所の栗田ね。あいつの家へ寄つたんだ。すると奴、こんな話を始めるぢやないか。あの、吉川先生ね。

主人　ええ、去年亡くなつた。

客　さう。君はたうとうあの先生に會はなかつたつけね。（間）　あの先生の奥さんが僕のところへ嫁に來たいと言つてると、かう言ふんだ。

主人　へええ。そいつあ面白い。

客　僕もあんまり話が不思議なんでびつくりしちまつたさ。そりや成程、先生の奥さんはまだ若いし、どつかへもう一遍嫁に行くといふ話は僕も聞いてゐたさ。

主人　金持を探してるといふ噂がありましたね。

客　さう、なんでも金持で、女房に踊も習はせれば三味線の稽古もさせるといふやうな家へ行きたいといふ話だつたのさ。それが君、僕のやうな貧乏書生の所へ來るといふんだからをかしいぢやないか。それに、吉川先生は、まあ言つて見れば僕の師匠筋だ。僕は弟子として、後進と

して先生の家へ出はひりもしたんだし、奥さんにも先生の奥さんとして、始終びくびくしながら挨拶をしてゐたもんだ。年も無論僕より二つか三つ上だ。それも、先生の生きてゐる時分に、始終親しく口でも利いてゐたなら又格別だ。そんな事は唯の一度もありやしない。あんまり嘘らしいから、栗田め、又變な事を言ひ出して、おれを試すなと思つたから、尚よく確めて見ると、どうも本當らしいんだ。お里のお母さんにも先生のお父さんにも相談をしてゐたのを現に栗田が聞いたと言ふんだ。

主人　へえゝ。それからどうしました。

客　そこで僕も少し妙な氣になつた。かう何だか恐しい不思議な運命が自分を待つてゐるやうな氣がしてちよいと胸がどきどきして來た。けれども、まだ栗田の言ふ事が信じられないから、好い加減にあしらつて歸つて來たのさ。

主人　成程。

客　併し、僕の胸ん中にはもう何か變なものが殘つてしまつた。どうしても嘘か本當か、それを確めなければ、氣が濟まないやうな氣がして來た。そこで、いろんな方面から當つて見ると、どうも栗田の言つたのが本當らしい。僕はそれでもまだ妙だと思つてゐたが、何となくかう興奮して來て、誰か友達にその話がしたくて堪らなくなつて來た。

主人　あなたはあの奥さんが好きなんですか。

客　別に好きぢやないんだ。好きになる程附き合つて見ないんだからね。まあ、どつちかと言へば、嫌ひな方さ。向うでも僕はあんまり好きぢ

やないらしいんだ。あの奥さんは、なんでも好きな人嫌ひな人を始終ちやんと二つに分けてゐる人ださうだが、僕の聞いたところぢやあ、たしかに僕は嫌ひの部にはひつてゐた筈なんだ。（間）それでもやつぱり人間は妙なものさね。そんな話を聞くと、ちよいと妙な氣が起つて來るもんだ。

主人　（又いつもの突つ込む癖が出る）奥さんが綺麗だからでせう。

客　（眞面目に）さう。そりやさうかも知れない。

主人　（笑つて）それからどうしました。

客　それからね。直ぐその話を人にしようかと思つたんだが、でも若しさうでもなかつたら好い恥さらしだ。思つて、言ひたいのを我慢して誰にも言はずにゐたんだ。（間）言はなくつてよかつたよ。なあに、それつきり別になんにも話はなかつたんだ。その内、君、村田子爵の所へ嫁に行くといふ事が新聞に出て、間もなくお輿入れさ。

主人　へええ。ちつとも知らなかつた。もう行つちまつたんですか。

客　（殘念さうに）行つちまつたとも。

主人　それぢや栗田の話はやつぱり嘘だつたんですか。

客　（眞面目に）いや、嘘ぢやなかつたらしいね。

主人　それぢや分からないぢやありませんか。

客　（段々落ちついた諦めの調子になつて來る）僕にも分からないんだ。まあ、なんだらう。思ふやうな所がないんで氣紛れにそんな事でも考へたんだらうが、決行するだけの勇氣もなくてゐる

内に華族の口があつたんで、その方へ極めつちまつたんだらう。一言も僕の方へ直接に話があつたわけぢやないから、どうもしやうがないさ。

主人（少し冗談らしく）へえ、そいつあ残念でしたね。

客　残念まで来てるなら、まだ好いさ。そこまで来てやしない。或はまるでなんにもない話なのかも分からないんだからね。まあ世間の事は大抵さうしたもんさ。何かかう新しい事が始まりさうになるから、好い氣でその氣になつてると、やつぱりなんにも始まりやしないのさ。希望なんてものは、その欺されてゐる間の話さ。人間はいつまで立つたつて、どうにもなるものぢやない。いつになつたつて同じさ。生活が變るたんびに、よく人が言ふが、それは上邊だけの事さ。人生はいつまで經つても同じ事さ。

主人（少し勇氣が挫けたが、それでもまだ希望があるやうな氣がして）だけど、吉川先生の奥さんの話と今の私の話とでは大分場合が違ひませう。

客　いや、どうだか分かつたもんぢやない。やつぱり氣を揉むだけ損をするのが落だらうぜ。

主人　でも、たしかに亭主が死んだとして、家へ歸つてるとしたら、一寸面白いぢやありませんか。（間。或地歩を得さうな詞を思ひつく）なにも一緒になるのどうのと言ふんぢやありません。久しぶりで會つて見たら、話だけでも面白からうと思ひます。

客（直ぐこの一句に動かされる）そりや、まあ、さうさね。

主人（第二の地歩を作る）向うももう隨分年を取

つたでせう。あなたとは幾らも違はないんださうですね。

客　(直ぐにそれに乘る)　一つ下だと思つた。

主人　さうでせう。して見りや、女の三十ですから、もう隨分おばあさんです。それに色々家庭の苦勞もしたらしい話ですから、隨分やつれてもゐませう。その家庭に疲れた女と、今でもやつぱり昔のやうに若いあなたとが差し向ひになつて、向うは昔通り眞面目な口の利きやうをする。あなたはあなたで、世の中をすねたやうなソフィストらしい口の利きやうをする。長い間離れてゐた二つの心が突然又ぶつかつて、一度は驚いて、それから段々互に昔の面影を探し始める――側で聞いてゐても隨分面白さうに思はれますがね。

客　(强ひて冷やかに)　さう藝術的に行けば好いがね。併し、なんだね、唯會つて見るだけなら、ちよいと面白いかも知れないね。(間。迷つて)いや、よさう。やつぱり廢した方が好い。(又段々落ちついた本當の諦めになる)　僕といふ人間はやつぱりかうして今まで通りにやつてる方が好いんだ。親しみのない世間を放浪して、始終「假の宿」にゐるやうな落ちつかない氣持でゐる方が好いんだ。少しでも親しみのありさうな世界へ足を突つ込むと、直ぐその氣になつちまふ質なんだからね。どうしたつて結局世間は人間に親しいもんぢやないんだから、やつぱりそんな危險なシチユエエションには近づかない方が得策だと思ふ。僕は今の僕で澤山だ。この儘一生ぐづぐづ言ひながら、死ぬまで生きてればそ

れで好いんだ。どう引つくり返して見たつて、どうせ人生はさういふもんなんだから。

主人　（一旦得た地歩を又失つて、氣の毒さうに寂しく笑ふ）

（女中登場、ビイルの新しい瓶と、手紙を一通手にしてゐる。）

女中　若旦那樣。どうも相濟みません。先程この手紙が御一緒に參つてゐたのを、私のゐない間に寺田さんが新聞の下に入れてしまつたのを、只今までちよつとも氣が附かずにゐたのでございます。どうも遲なはりまして。

主人　（快活に）　女の手紙ぢやないか。また寺田の奴梅閙しようとしやがつたな。しやうのない詭いだ。

女中　いいえ、さうぢやございません。全く知らずに新聞の下に入れてしまつたんださうでございます。よくお詫びをしてくれつて、寺田さんもさうおつしやいました。

主人　好いさ、好いさ。（手紙を受け取る）

（女中退場。）

主人　（手紙をその儘机の上へ置かうとして、ふと差出人の名を見る）　おや。

客　どうした。

主人　（或希望を得て）　こりや面白い。あの人の弟から來たんですぜ。

客　（恐れるやうに、手紙の封筒を覗いて見る）　成程さうだね。

主人　（得意で）　ぢやあ、愈ほんたうですぜ。きつとその事を言つて來たんです。前から私が色色あなたの事を聞いてゐましたし、それにあい

つもあなたの事を始終心配してましたから。

客　（心の内に或戰ひが起る）

主人　どうです、若しさうだつたら會つて見ますか。

客　（强ひて自分を抑へる）　いや、會ふまい。

主人　（皮肉に）ぢやあ、この手紙はこの儘明けずに置きませう。（手紙を机の上に置く）

客　（縋るやうに）　明けたつて好いぢやないか。

主人　（一層皮肉に）　あなたに會ふ氣がないのに、明けて見たつてつまりませんもの。元々私には關係のない事なんですから。

客　（憫みを乞ふやうに）　さう言つちやまあ、それつきりの話だが、でも、折角來た手紙だから――どうせ一度は明けて見るんだらう。

主人　けれども、あなたに關係のない手紙なら今見る必要はないんです。かうやつて他の手紙も（前に女中の持つて來た手紙や端書を指す）見ずにあるんですから。

客　（段々自分が出さうになる）そんな事を言はずに、まあ明けて見給へな。事實を知るだけでも好いぢやないか。

主人　（飽くまでも皮肉に）　でも、あなたは眞實を知るのが厭な筈でせう。

客　（終に自分の感情を欺く事が出來ないで）　ぢやあ、會ふ。會ふよ。ほんとに言へば、僕だつて會ひたいんだ。

主人　（喜んで）それ御覽なさい。

客　會ひたいには會ひたいんだが、恐くもあるんだ。

主人　（迫るやうに）　ぢや、會ひますね。會つて

見ますね。

客　會ふ。きつと會ふ。（獨語のやうに）なあに、自分さへしつかりしてれば好いんだ。

主人　（力をつけるやうに）さうですとも。（間）ぢやあ明けますよ。

客　（決心して）明け給へ。

（主人、封筒の口を裂いて、手紙を引き出し、目で讀み始める。或期間の沈默。暫くして、主人手紙を讀んでしまふ。失望の表情。沈默。）

客　（主人の詞を待つてゐたが、堪へ切れなくなつて）どうしたね。

主人　（極めてつまらなさうに）姉さんが子供を生んださうです。産後の肥立が悪いので、暫く鎌倉の別莊へ行つてゐるので、自分もそこへ遊びに行つてるといふんです。

客　（がつかりして）それつきりかい。

主人　それつきりです。

客　ぢやあ、さつきの話は嘘だね。

主人　これの間違ひだつたんですね。

客　なんだ。つまらない。（少し怒つて）だから、僕の言はない事ぢやない。

主人　（ほんとに詫まる）どうも濟みません。

客　（叱るやうに）なにも君があやまる事はない。

主人　（負けて、默つてしまふ）

客　やつぱり僕は元の僕なのさ。けさ君の所へ訪ねて來た時の僕なのさ。「新綠病」にかかつて弱つてる僕なのさ。（投げるやうに）それだけの話さ。

主人　（始めて今まで自分の知らなかつた或物に觸れたやうな氣がして來る）

客　何か行りさうになつて來たつて。やつぱり結局なんにも有りやしないのさ。

（稍長き間。）

主人　今まで一度も手を附けなかつたビイルを、急に一杯、目をつぶつて、ぐつと飮むと、センチメンタルな震へ聲で）どうです。何處かへこれから飮みに行きませうか。

客（つまらなささうに）さうさね。行つても好いがやつぱり同じ事だらうぜ。やあ、やつぱりかうやつて話してるようよ。

主人（客の氣持に壓されて、立ちかけた腰を又おろす）さうですねえ。ぢやあ、やつぱりかうやつて話してゐませうか。

（沈默。遠くの部屋で鈍い時計の音が、だるさうに十一時を打つ。）

――幕

第一の世界　一幕

人

山中　愼一　學者
山中　敏子　その娘
島村　圓雄　孤兒
谷村瀧太郎　實業家
谷村　糸子　その妻
新聞記者A
新聞記者B
新聞記者C
新聞記者D

時　現代

所　東京の郊外

舞臺　或室内。

（敏子、鶏を追つてゐる。）

敏子　しやうがないねえ。又はひつて來て。しつ、しつ、しつ。

（人の音なふ聲）

（やがて、島村、名刺を持つて、はひつて來る。）

島村　お孃さん、太陽新聞の記者といふのが來ましたが。

敏子　お父さんに會ひたいと言ふんだらう。

島村　さうです。

敏子　お留守だと言つたかい。

島村　言ひました。でも、お留守は承知だと言ふのです。お歸りを待つて、お話が承りたいのだと言ふのです。

敏子　いつお歸りになるか分からないと言へば好いぢやないか。

島村　さうも言つたのです。でも、大使館へ入らつしやるのが二時だから、もう追つつけお歸りになる筈だと言ふのです。

敏子（やつと鷄を追ひ出す）よく知つてゐるんだねえ。

島村　そりやあ知つてますとも。東京では大評判です。新聞などでも盛に書き立ててゐますから。

敏子　おや。お前、新聞を讀むのかい。

島村　ええ。毎朝、卵の荷を出しに行く時、ステエションの前の萬松軒で讀むんです。

敏子　お父さんに叱られるよ。

島村　いいえ、先生は決して他人のする事に干渉をなさる方ではありません。人間はひとりびとりで自分自分の道を歩くべきものだと、始終さう仰しやるのです。新聞を讀まないのは、先生の主義です。新聞を讀んでも構はないといふのが、僕の主義です。

敏子　お前の主義なんかどうでも好いよ。それよりお歸りになつたつて、とてもお會ひになりやしないんだから、早く斷つて返しておしまひよ。

島村　斷るんですか。

敏子　返しておしまひよ。

島村　はあ。

（島村、退場）

（敏子、小さい紙片に鉛筆で何か書き始める。）

（島村、登場）

島村　歸りました。

敏子　(紙片を隱す) 歸つたかい。

島村　何を書いてゐたのです。

敏子　學校の作文よ。

島村　嘘をお言ひなさい。手紙でせう。

敏子　手紙だつて好いぢやないか。

島村　いけません。又あの谷村といふ大學生のところへ出すんでせう。先生が一寸でも留守だと、直ぐそれだ。

敏子　他人の事に干渉するもんぢやないよ。お前は先生の弟子ぢやないか。

島村　僕はあなたを他人だとは思ひません。

敏子　又はじめた。それはお前がひとりできめた事ぢやないか。あたしの知つた事ぢやないよ。づうづうしい。

島村　いくらあなたが威張つても、これは人間以上の者のきめた事です。動かす事は出來ません。

敏子　お前なんかに神樣のお心が分かつて堪るものか。

島村　僕は他の人の持つてゐない力を持つてゐるのです。他界との交通が出來るのです。

敏子　透視や念寫ぐらゐが出來たつて、それが何だい。あたしから見れば、一種の不具だよ。お父さんも物好きねえ。お前のやうな者をわざわざ孤兒院から拾つて來て、まるで自分の子かなんぞのやうに可愛がつて入らつしやるんだ。

島村　まあ何とでも仰しやい。今に分かりますから。

（人の音なふ聲。）

島村　また誰か來たな。

敏子　早くお出でよ。

（島村、退場。）

（敏子、手紙を書き續ける。）

（島村、登場。）

島村　また新聞記者です。

敏子　他のかい。

島村　今度は毎朝新聞です。

敏子　斷つたのかい。

島村　いいえ。

敏子　なぜ斷らないの。

島村　でも、折角遠くから來たんですから。

敏子　それは爲方がないぢやないか。こつちで呼んだわけぢやないんだから。

島村　でも、けふは先生の生涯にとつては或偉大な日なのですからね。先生の名が世界的に知れるといふ日ですからね。新聞記者として、會つて話が聞きたいのは當り前だと思ひます。

敏子　大層新聞記者に同情があるんだねえ。

島村　先生だつて少しは世間的になるのが好いのです。

敏子　でも、とてもお會ひになりやしないよ。

島村　さうでせうか。

敏子　さうだとも。早く斷つて歸つてお貰ひよ。

島村　はあ。

（島村、退場。）

（敏子、手紙を書き終り、封筒へ入れて、宛名を書く。）

（島村、登場。）

島村　歸りました。

敏子　おやあ、好いから、鳥小屋を見ておくれ。

島村　少しゐても好いでせう。こんな機會はめつたにないんです。それに、けふはおめでたい日なんです。

敏子　でも、あたしは少し考へ事があるんだから。

島村　それも、あの谷村の事でせう。あなたが東京の學校へ行く電車の中で、毎日どんな事をしてゐるか、僕はちやんと透視してゐるのです。

敏子　嘘お言ひよ。

島村　好い男だ。生つ白いが、ああいふのが女の好い男と言ふのでせう。だが、目が近いと見えて大分強度の近眼鏡をかけてゐますね。

敏子　誰かに聞いたんだね。

島村　知らないと思つてるから氣の毒です。先生に言ひませうか。

敏子　言つたつて好い。あたしは感情を僞つてはゐないのだから。

島村　いいえ、僞つてゐます。あなたは僕を愛してゐながら、自分でそれに氣がつかずにゐるのです。そして、愛してもゐない他の男を、愛してゐると思つてゐるのです。

（人の音なふ聲。）

敏子　また誰か來たよ。

島村　うるさいな。

（島村、退場。）

（敏子、手紙を帶の間に入れる。）

（島村、登場。）

島村　また來ました。帝都日報の記者で、今度は二人です。一人は寫眞機を持つてゐます。

敏子　斷つたんだらうね。

島村　斷りましたが、歸りません。お孃さんにでも好いから會ひたいと言ふのです。

敏子　あたしに會つたつて、しやうがないぢやないか。

島村　僕もさう思ひますが、先生のふだんの事でも聞きたいんでせう。

敏子　そんなら、お前が話してやれば好いぢやないか。

島村　さう言つたんですが、僕ではだめだと言ふんです。先生の子だといふだけで、世間に對してはお孃さんの方が權威があるんですね。

敏子　くだらない事を言つてゐないで、早く斷つて歸しておしまひよ。

島村　あなた會ひませんか。

敏子　厭やよ。新聞記者なんか。

（島村、退場。）

（敏子、懷から或寫眞を出して眺める。）

（島村、登場。）

（敏子、寫眞を隱す。）

島村　だめです。歸りません。

敏子　しやうがないね。

島村　お歸り迄玄關で待つてゐると言ふのです。

敏子　ぢやあ、うつちやつてお置きよ。あの玄關は内の入口ぢやないんだから。

島村　ですから、その儘にして置きました。

（間。）

島村　併し、お孃さん。一體、世間と隔絶するなんて事が實際に出來るでせうか。ほんとに世間と隔絶するなら、山ん中へでも隱れるか、離れ島へでも逃げて行かなければだめだと思ひます。

世間といふものの中に住んでゐて、世間と隔絶するなんて、到底不可能な事だと思ひます。

敏子　それはあたしもさう思ふのさ。でも、お父さんは「心」の孤獨といふ事を仰しやるのだよ。

島村　でも、本を讀むといふ事が、既に「心」の孤獨を裏切つてるぢやありませんか。本を讀む事は、大勢の人の思想に接する事です。

敏子　さうだとも。あたしはそれでなくても、お父さんが何處の大學から迎ひに來ても、決してお出にならないのが歯痒くてならないんだよ。さうすりやあ、何もこんな、鶏などを飼つて、苦しい生活をなさらなくたつて濟むんぢやないか。本だつて心配なしに買へるし。

島村　博士號だつて、もう二度も斷つてゐらつしやるんです。先生が博士になつて帝大の講壇にでも立つてくれると、僕だつてその研究材料になつて、天下に名を廣める事が出來るんだけれど。

敏子　一體お父さんの研究して入らつしやる事がまるであたし達には用のないものに思へるよ。夢だとか、幻影だとか、精靈視だとか、有機磁氣の豫言だとか、それがあたし達の現在の生活に何の關係があるんだらう。

島村　いや、それは違ひます。先生の研究してゐらつしやる事は立派な事です。人間の生活にとつて極めて重要な事です。「第二の世界」の存在を確立する事は、この苦しい「第一の世界」に住む人類にとつて、どんなに深い慰めになるか分かりません。

敏子　でも、お父さんは、それを人の爲にやつて

ゐらつしやるやうには見えないぢやないか。
島村　それです。僕の言ふのもそこです。それ程人生的に意義のある研究をも、たかだか年に一度か二度、外國の文章で書いて外國の雜誌へ送る位な事で、自分の周圍の人には少しも預けてやらうとなさらないのです。僕には先生のそのお心が分かりかねるのです。
敏子　お父さんは若い時に、何か苦い經驗をお嘗めなすつたに違ひないよ。
島村　僕は亡くなられたあなたのお母さんとの間に、何か不幸な事があつたのだと思つてゐます。
敏子　それは分からない。あたしが物心がついた時には、もうお母さんはゐらつしやらなかつたのだし、お父さんは何一つお母さんの事は仰しやらないのだから。でも、合はなかつたといふ噂はあたしが預けられてゐた家でも聞いたよ。
島村　さうです。きつとさうに違ひありません。でも、それ程な深傷を負つて、世間といふものからまるで離れてゐた先生が、けふ急に世間へ出て行く氣になつたのは不思議ですね。伊太利大使館から手紙が來ると、直ぐ行つて見ようと仰しやつたぢやありませんか。嬉しかつたのでせうか。
敏子　分からないわ、あんまり嬉しさうな顏もなさらなかつた。唯、相手が外國人だからね、と仰しやつただけだよ。
島村　どうも先生の心持は、僕には分かりません。
敏子　あたしにも分からないよ。
（間。）
島村　僕は先生の側にゐるのが少し不安になつて

來ました。僕は先生の實驗で、自分が他の人の持つてゐない力を持つてゐる事が分かつたんです。ですから、早く獨立して、これを元に何か爲事がしたいと思ひます。あなただつて、この不自然な寂しい生活には飽き飽きしてるのでせう。二人で逃げませうか。

敏子　またそんな突飛な事を。何といふづうづうしい人だらう。

島村　づうづうしいんではありません。信ずる所があるから、さう言ふんです。谷村なんて、あんななんにも分からない大學生と一緒になつたつて、あなたの將來に幸福は來ません。それは僕の未來の透視で、ちやんと分かるのです。

敏子　失敬な事をお言ひでない。いつまで大學生で入らつしやるものか。谷村さんはきつとあたしを幸福にして下さる方だ。

島村　さつきの手紙はどうしました。

敏子　どうしたつて好いよ。

島村　お出しなさい。その帶の間に挾まつてゐます。

敏子　お前に渡すわけはないよ。

島村　いいえ。僕はあなたの心の主人です。お出しなさい。

敏子　厭だ。

島村　よし。そんなら透視で、手紙の内容を讀んでしまふから。

（島村、或姿勢をする。）

（敏子、逃げてはひる。）

（主人、山中愼一、新聞記者四人を連れて登場。）

主人　さあ、諸君どうぞかけてくれ給へ。裏口な

どから通して失敬だつたが、あの玄關は使つた事がないものだから。椅子が足りないな。宜しい。僕はこの箱にかけるから。どうか遠慮しないでかけてくれ給へ。(島村を見る) 何をぼんやりしてるのだ。諸君には俺があやまつて置いたから好い。お前のした事に罪はないのだ。俺がけふは流儀を變へたのだ。

記者B　やあ、君。さつきは失敬した。太陽子とステエションで落ち合つて、待つてゐたら、先生が歸つて來られて、直ぐ一緒に案內して下すつたのだ。吾々も意外だつた。君も意外だらう。

記者C　僕も玄關で待伏してゐたんだが、何の交渉もなしに內へ入れて下すつたんで、ちと力負けの形だ。

記者A　先生はもつと圭角のある方かと思つてゐたら、意外に溫情のある方なので、恐縮した。

主人　いや、自分の事は自分にも分かるものではありません。いつもはどんな人にでも顏を合せるといふ事が億劫なのに、けふは不思議と誰の顏を見ても話がしたいやうな氣がするのです。

記者B　いや。これ程の名譽を得られれば、どんな偉い方でも、さういふ心持になるのが當り前です。さうならなければ人間ではありません。

主人　君の言ふ通りかも知れません。併し或は君の言ふ通りでないかも知れません。世間で言ふ學問上の名譽といふやうな事なら、決してこれが始めではありません。だが、今までさういふものは大抵こつちから逃げて受けませんでした。ところが、どうしたのか、けふはこつちから出て行く氣になつたのです。(島村を見る) お

い、まだぼんやりしてるな。お客様に番茶でも持つて來い。敏子にはどうした。

島村　あちらに入らつしやいます。

主人　敏子にもあとで來いと言つてくれ。

（島村、退場。）

主人　客といふものに接した事のない男ですから、どうして好いか分からないのです。

（新聞記者A、B、C、各衣兜から手帳を取り出す。）

記者A　ところで、先生、今回の御名譽に就いて、少しお話が承りたいのですが。

記者C　私からもお願ひします。

記者B　私からも。

主人　どういふ話をすれば好いのです。

記者A　世間では色々に傳へてゐますが、どうも本當の事が分かりません。一體、先生は何の御研究で、今度のやうな名譽を得られたのです。

記者B　さうだ。僕も先づそれから伺ひたいと思つてゐたのだ。

主人　それは極めて簡單です。發表したのはダンテの研究です。

記者A　詩聖ダンテですな。

記者C　（Aに）何だい。シセイダンテと言ふのは。

記者A　（Cに）伊太利の有名な詩人だよ。詩の聖人だよ。

記者C　ああ、さうか。

記者B　ダンテと言ふと、やはり「神曲」の御研究ですか。

主人　さうです。併し、その極一小部分の研究で

す。

記者A　それが、あちらで認められたわけですね。

主人　さうです。ほんの小さな論文を伊太利の或大學の雜誌へ寄稿したのです。それが向うの學士院といつたやうなものの目について、今後の研究の足しにでもしろと言ふので、日本の金で三千圓程くれたのです。實はけふ先方へ行つて、私はダンテを專門に研究する者ではないからと斷つたのですが、それはどうでも好いからといふ事なので、兎に角貰つて來ました。名譽といふ程の事でもないのです。

記者B　別に儀式があつたわけでもないのですか。

主人　郵便局へ爲替を受け取りに行つたやうなものです。大使にも會ひましたが、ほんのふだん著で私を自分の居間へ通してくれました。禮儀だと思つて、二十年も著ずにゐた、こんな古ほけたフロックを著て行つた自分が恥づかしくなりました。

記者C　その論文といふのは、やつぱり伊太利語でお書きになつたのですか。

記者A　(Cに)當り前さ。

主人　いや、誠に恥づかしいが、伊太利語は讀めるのと、少し話せるだけで、文章は書けないのです。論文は佛蘭西で書きました。

記者A　「神曲」の一小部分だと仰しやいましたが、いづれ何か特殊の御研究をなすつたのでせう。今まで外國にもないやうな。

主人　さあ、それは分かりません。書いたのは、プルガトリオの最後の六曲の研究です。第二十

八曲から第三十三曲までですね。一部の批評家には、寧ろダンテの失敗だと言はれてゐる部分です。ダンテが地上樂園へはひると、不思議な行列を見ますね。普通、寺院の勝利を象徴するものだと言はれてゐるあの美しい行列です。行列が留まると、天の使が花を散らします。その花の中からダンテの昔の戀人のベアトリイチエが現れて來ます。私の研究が、若し今までの學者のそれと違つてゐるとすれば、ダンテの見たこの幻影を、單に詩人の空想として取り扱はなかつた點でせう。私はダンテの優れた感覺を論じて、これを實際に見たヰジヨンとして取り扱つたのです。中世紀のコルプス・クリスチ。基督の死體を祭る行列です。これとの關係を論じた人は澤山あります。寺院の勝利のアレゴリイとして論じた人も澤山あります。併し、私はさういつた考古的な研究には一切はひらずに唯ダンテといふ優れて心の清い詩人と心靈界との密接な交通を說いたのです。ダンテが人間の目で實際に見た幻影として論じたのです。

記者C　どうか一寸お待ち下さい。少しむづかしくて、私にはよく分かりません。(Aに)　君には分るか。一番初めのブル何とかいふのは何の事だ。

記者A　(Cに)「神曲」には地獄と煉獄と天國とに分かれてゐるんだ。プルガトリオといふのは、その煉獄だ。つまり罪の淨められる處だ。(主人に)さうですねえ。先生。

主人　さうです。さうです。

記者C　(Aに)君は文藝記者だけあつて、なか

なか通だねえ。大使館といふので、よし來たとばかり引き受けて來たんだが、政治記者にはこいつは無理だよ。まあ、よく書いといてくれ給へ。あとで摘要させて貰ふから。

記者B　(主人に)一體、先生のふだん研究してゐらつしやる事は何なんです。

主人　普通の人の目に見えない世界。この世を離れた世界。この世を第一の世界とすれば、第二の世界の研究をしてゐるのです。

記者C　ああ、「死後は如何」といつたやうな事ですな。(Aに)少し分かつて來たぞ。

記者B　すると、心靈學といふやうなものですか。

主人　それもその一部分です。併し、私のはもつと廣いのです。實を言ふと、研究してゐると言ふよりは、さういつた世界に生きてゐると言つたが好いのです。

(島村、客に茶を持つて來る。)

主人　そこへ參つた青年ですが、これなども、諸君には唯の書生に見えませうが、普通人の持つてゐない感覺を持つてゐる人間です。吾々の見ないものを見るのです。吾々の聞かないものを聞くのです。

記者C　幽靈などを見るのですか。

主人　幽靈も見ます。生靈(いきりやう)も見ます。神も見れば、惡魔も見るのです。そして、さういふ者と話をします。(島村に)敏子はどうした。

島村　ゐらつしやいません。

主人　鳥小屋か。

島村　分かりません。

主人　何處かにゐたら、ここへ來いと言つてくれ。

（島村、去る）

記者C　お子さんはお孃さんお一人ですか。

主人　さうです。

記者B　お名前は。

主人　槙子です。ピンの字を書きます。

記者A　失禮ですが、奥樣は。

主人　あれを生むと、間もなく亡くなりました。

記者A　先生が今日のやうな生活をなさるやうになつたのには、或深い動機があつたやうに承つてをりますが、それを伺ふわけには參りますまいか。

主人　それはもう過ぎ去つた事です。二十年も前の事です。今日では唯これが習慣になつてゐるだけです。習慣を變へるといふ事が恐ろしいので、唯かうやつて同じ生活を續けてゐるのです。

記者A　さうお逃げになれば、ちと立ち入つて伺ひますが、失戀が動機だといふのは事實ですか。二十年前の先生は熱烈な戀愛詩人でした。その詩は今でも青年の間に愛誦されてゐます。その燃えるやうな戀愛詩人が急に隔絶した枯淡な學究になられたのには、蔭に女性があるのだといふ事を聞きましたが。

主人　（笑ふ）さうかも知れません。

記者C　これは面白い。

主人　だが、もし失戀だとすれば、餘程不思議な失戀です。

記者A　ダンテとベアトリイチエのやうなのですか。

主人　どうして、どうして。ダンテの場合では、戀人が神です。戀人に挨拶をされるのに、眞に

挨拶をされる事です。私のはもつと低い、ずつと低い地上の戀でした。

記者B　古い事なら好いでせう。この際、その方面の事を續き物にして書かして頂くと、うちの社長は喜びますがな。

主人　それはだめです。それは私自身にもいまだに分からないでゐる事ですから、話したところでとても人に分かる事ではありません。決して私は逃げるのでも、ごまかすのでもない。

記者A　では、それが動機だつた事は事實ですね。

主人　兎に角、その事から、私は戰ふといふ事の出來ない人間になつたのです。退いて守るといふ人間になりました。何か他の事を聞いて下さい。

記者B　どうも、併し、惜しい種だなあ。

記者C　その女性といふのは、お亡くなりになつた奥さんですか。

記者B　（Cに）ばか。奥さんに失戀する奴があるか。

記者C　あるとも、あるともさ、ねえ、先生、ありますね。

主人　意味によつては、ないとも言へますまい。併し、私の場合はそれではありません。妻は無情ではありませんでした。

記者A　その不思議な戀愛問題といふのは、奥さんをお貰ひになる前の事でせう。

主人　さうです。さうです。だが、もうその話はよさうではありませんか。聞く事があるなら、他の事を聞いて下さい。

（間。）

記者C　ところでと。では、伺ひますが、先生は何で生活してゐらつしやるのです。失禮ですが。

主人　さつき御覧になつたでせう。鷄を飼つて生活してゐます。

記者B　御自分でおやりになるのですか。

主人　自分でもやります。娘にも手傳はせます。書生にも手傳はせます。

記者C　學問上での御收入は全くないのですか。

主人　時々外國から原稿料を貰ひます。でも、それは一年に一度か二度です。私は學問で金を取らうとは思ひません。私は卵屋としての外、社會との交渉を避けてゐるのです。避けてゐるのではない。私には世間で言ふ現實の世界が幻影で、世間で言ふ幻影の世界が現實なのです。私は自分にとつての現實の世界に生きてゐるのです。唯それだけです。

記者C　又むづかしくなつて來ましたね。（他の記者達に）どうだい、諸君。あんまりお邪魔をしても何だから。

記者B　（Cに）一寸待つてくれ給へ。（主人に）お宅は大層變つた建築ですが、これは先生が御考案になつたのですか。

記者A　さう、さう。僕もそれを伺ひたいと思つてゐたのだ。

主人　私が考へて建てたのです。舟か何かのやうでせう。

記者A　ノアの箱舟といつたわけですか。

主人　さういふ寓意がある譯でもないのです。唯必要だけのものを必要な位置に置いたのです。

記者B　あの玄關の上に塔のやうに突き出してゐ

る處は何ですか。

主人　私の書齋です。そこの階子段から行けるやうになつてゐます。二階を自分の必要なだけの廣さにしたので、ひとりでに塔のやうになつたのです。

記者C　あすこから世間を見てゐるのですね。

主人　いや、あの部屋には息抜きの穴があるだけで、窓はありません。世間に對しては全く盲目な書齋です。

記者C　明かりを入れる窓もないのですか。

主人　ありません。晝でも蠟燭をつけるのです。

記者C　（Dに）君、フラッシを持つて來たか。

記者D　持つて來なかつた。

記者C　殘念だなあ。そこで寫眞がとらして貰へると好かつたんだが。

主人　寫眞をとるんですか。

記者C　どうか一つ。お孃さんも一緒に願へないのですが。

主人　（呼ぶ）島村、島村。

（島村、登場。）

主人　敏子はどうした。

島村　お歸りになりました。

主人　お歸りに。何處へ行つてゐたのだ。

島村　知りません。

主人　好いから、呼んで來い、

（島村、退場。）

（記者D、寫眞機を持つて、好い位置を探す。）

（敏子、島村、登場。）

敏子　お父さん、お歸りなさいまし。

（敏子、記者達に禮をする。）

（記者達も禮を返す。）

主人　（記者Ｄに）この儘で宜しいか。

記者Ｄ　宜しうございます。（敏子に）お孃さん。どうぞお父樣の側にお立ち遊ばして。

（敏子、父の側へ行く。）

主人　（島村に）お前もはひれ。

島村　僕は。

主人　はひれ、はひれ、（記者Ｃに）入れても好いのでせう。

記者Ｃ　どうぞ。

主人　（島村に）さあ、お出で。

（島村も主人の側に立つ。）

記者Ｄ　少し暗うございますからタイムでやります。はい、一、二、三。は、宜しうございます。

記者Ａ　では、これで失禮いたします。

記者Ｂ　有難うございました。

記者Ｃ　失禮。お孃さん、さやうなら。

主人　寫眞が出來たら、一枚送つて下さい。

記者Ｄ　畏りました。直ぐお送りします。

（四人、退場。）

主人　（島村に）爲事着を持つて來てくれ。

島村　はい。

（島村、二階へ上がる。）

主人　敏子、何處へ行つてゐた。

敏子　お父さん、けふはおめでたうございます。

主人　有難う。お前どこへ行つてゐたのだ。

敏子　萬松軒まで夜のパンを取りに行つたのです。

主人　ああ、さうか。

（島村、階段の上に姿を現す。）

島村　ズボンもですか。

主人　上着だけで好い。

（島村、上着だけ持つて、降りて來る。）

（主人、上着を著換へる。）

（敏子、フロツクコオトを始末する。）

敏子　お父さん。

主人　うむ。

敏子　どうして新聞記者などにお會ひになつたの。

主人　どうしてだか分からない。けふは誰にでも會ひたいやうな氣がするのだ。

島村　僕は何だか恐ろしくなりました。

主人　なぜ。

島村　先生が急に變つた事をなさるのが恐ろしいのです。

敏子　大使館で何か好い事でもあつたんですか。

主人　本國から來た金をくれたのだ。俺の研究を奬勵する意味で。たいした額ではない。鳥の世話を怠る事の出來る程の金ではない。

島村　先生、僕は今まで餘り極端に世間と隔絶した先生の生活を否定してゐました。少しは世間へお出になる方が好いと思つてゐました。併し、あの新聞記者がぞろぞろはひつて來たのを見た瞬間急に何だか恐ろしくなつて來ました。先生の急にそんな事をなさるのが、或破滅を前觸するやうに思はれました。

主人　大丈夫だ。大丈夫だ。俺は決してこの小さな世界を捨てはしない。世間に俺を誘惑し得るものは何もない。

島村　みんなが、ばらばらになるのではないでせ

うか。僕は恐ろしくてなりません。

主人　お前の感覺は鋭敏過ぎるのだ。大丈夫だ。大丈夫だ。

島村　先生、お願ひですから、けふはもう誰が訪ねて來ても、會はないで下さい。

主人　成程、俺はけふ、この二十年間、一度も觸れなかつた世間といふものに觸れた。併し、それはさつき四人の新聞記者に會つた事で、もう帳面になつてゐる。あれが何萬枚かの新聞になつて日本中の人に觸れるのだ。それでもう貸借なしだ。一度に義務を果したのだ。俺は一瞬間第一の世界に觸れただけで、又第二の世界へ歸るのだ。お前は鷄に餌をやれ。綾子は語學の復習をしろ。俺は書齋へ歸る。

（主人、二階へ上がりかける。）

（人の音なふ聲。）

（三人凝立する。）

（間。）

主人　（島村に）行つて見ろ。

（島村、退場。）

（間。）

（島村、登場。）

島村　（綾子を見て、それから主人に）谷村といふ方が見えました。

主人　谷村。男か、女か。

島村　男の方と女の方です。御夫婦でせう。

（間。）

島村　斷りませうか。

主人　（階段を降りる。）いや、通せ。

島村　玄關からですか。

主人　さうだ。玄關から。

（島村、玄關の方へ行く。）

主人　敏子、暫くあつちへ行つてゐてくれ。

敏子　お父さん。

主人　何だ。

敏子　いえ。

（敏子、退場。）

（島村に案内されて、谷村夫婦登場。）

主人　島村、あつちへ行つてをれ。

（島村、退場。）

（間。）

谷村　お祝ひに來た。

主人　何の。

谷村　けふの名譽の。

主人　さうか。それは有難う。

（三人、腰かける。）

（間。）

谷村　暫くだつた。

主人　暫くだつた。

糸子　（口だけ動かす）

谷村　よく會つてくれた。とても會つてはくれまいと思つて來たのだ。

主人　ほんとに會ふまいと思へば、來る筈がなかつたのだ。ことに依ると會ふだらうといふ豫想を持つて來たのだらう。

谷村　如何にもさうだ。けふを外(はづ)してはだめだと思つたのだ。君はけふ世界的の名譽を得たさうだ。おめでたう。

主人　たいした事ではない。唯、外國から金を貰つたのだ。

谷村　實は僕も金を少し持つて來たのだが、受け

てくれるか。

主人　何の爲に。

谷村　君の研究の爲に。無遠慮に、君の生活の爲にと言つても好い。

主人　受けても好い。だが、二十年も音信不通だつた君が、どうして急にそんな氣になつたのだ。

谷村　改めて友達になつて貰ひに來たのだ。

主人　君は昔から友達だ。そして、ずつと今まで友達だ。

谷村　ほんとにさうか。

主人　ほんとにさうだ。僕は君に對して少しでも惡意を持つた事はない。

谷村　ほんとにさうか。

主人　ほんとにさうだ。

谷村　それを聞いて安心した。君の性質を知つてゐる僕が、それ以上の事を言ふのは、君の感情を傷つける事になるかも知れないが、實はけふは、（糸子を見る）妻に代つてあやまりに來たのだ。

主人　あやまりに。（糸子を見る）何をあやまりに。

谷村　二十年前の誤解を。妻は全く君を誤解してゐたのだ。

主人　それは分からない。人間が誤解だと思つても、屡それが正しい解釋である場合がある。人間の事は分からない。僕はそんな事を詫ひられる覺えはない。

谷村　妻だけの事なら好い。僕と妻との關係だ。

主人　それは聞いたつて爲方がない。僕には永遠の謎だ。君自身にだつて、分かる筈はないのだ。

谷村　さう言はれると辛（つら）いよ。その辛さが僕を鞭うつて、僕を鐵面皮にして、ここへよこしたの

だ。僕はこの二十年間、誰にも理解されない心苦しい生活をして來たのだ。どうかして、一度君の諒解を得なければ、死ぬにも死に切れないのだ。

主人　君は忙しい世間の渦の中に生きてゐるのだ。そんな事を考へてゐる暇はあるまい。僕でさへもう忘れてゐる事だ。

谷村　いや、それは違ふ。如何にも僕は忙しい生活をしてゐる。金錢の渦の中に卷き込まれてゐる。併し、青春時代に感じた事は魂の底にこびりついてゐて、容易に消えるものではない、僕と妻と顏を合す度に、一日だつて、あの當時の事を思ひ出さない日はない。

主人　それは氣の毒な事をした。僕は今が今まで、自分といふものが、君達二人の幸福の上にさす暗い影になつてゐようとは夢にも思はなかつた。これは僕の方が、あやまらなければならなさうだ。

谷村　さう言はれると、僕は愈辛い。君と君の細君との間のうまく行かなかつた事もその當時聞いて知つてゐた。細君の亡くなつたのを聞いた時、僕はもう堪らなくなつて家を飛び出したのだが、君の家の門口まで來て、たうとうはひれずに歸つてしまつたのだ。

主人　妻の問題は僕に罪がある。少しの愛の基礎もなしに結婚したのが悪かつたのだ。意志で愛さうとしたのだが、相手が意志だけでは滿足しなかつたのだ。無理のない事だ。僕は唯君達二人に一刻も早く安心がさせたいばかりに結婚したのだ。餘りに機械的な結婚だつた。手段に走

り過ぎた結婚だつた。

谷村　それも聞いて知つてゐる。そして、今でも二人で感謝してゐる。

主人　僕のした事は失敗に終つたが、君達二人に對する僕の心持はそこにある。今でも依然としてそこにある。併し、當時の僕の心持には、不純なところがあつた。虚榮があつた。犠牲といふ假面をかぶつた反抗があつた。ほんとの、ほんとの愛ではなかつた。だから、自分の妻をも心から愛する事が出來なかつたのだ。神は妬み深い。神は僕のその不純な愛を責めてやまなかつた。神が妻を通して、僕を責め拔いたのだ。愚な僕はそれに氣がつかなかつた。僕は自分を犠牲にしないで、妻を犠牲にしてしまつたのだ。僕はたうとう神を殺してしまつたのだ。この罪は永遠に許されまい。僕は地獄の第七獄に堕ちるのだ。

谷村　それもこれも、僕等二人の爲だ。何より苦しい事は、（糸子を見る）この人と君との關係を忠告したのが僕だ。君にこの人を思ひ切らせたのが僕なのだ。

主人　だが、それは君が僕の親友として、實際僕の爲によくない事だと思つたから、忠告してくれたのだ。僕は少しも自分を愛してゐない女の爲に、命をかけてまで悶えてゐたのだ。それを君がはつきり僕に見せてくれたのだ。慈愛の鞭は痛い。眞實をまともに見せられれば目が眩む。併し君の愛に滿ちたメスは、終に醜惡な僕の腫物を切り捨ててくれた。僕は涙を流して、諦める」と言つた。あの涙に一點不純な分子はなか

つた。あの涙は恐らく僕の一生の内にもう二度と見る事の出來ない淸い涙だつた。

谷村　それもさうだ。僕もあの時は、君を思ふ以外に何もなかつたのだ。唯どうかして君が救ひたかつたのだ。君を亡びに會はせたくなかつたのだ。第一僕は、（糸子を見る）この人をまだ知らなかつたのだ。

主人　神祕はそれからだ。

谷村　この人を知つたのは、君が僕の忠告を入れてくれてから、その跡始末をする時だつた。僕は幾度かこの人と會つてゐる内に、どつちから近づくともなく近づいてしまつたのだ。僕にもそれは分からなかつた。たつた今自分の親友を諦めさせた女に、今度は自分が近づいて行く。そんな事が、僕の性格として、唯普通に出來るわけがないのだ。

主人　人間の事は人間の力ではどうもならないのだ。

谷村　全く天意だ。少なくとも天意だと僕は思つた。君に對して愛のない女、それは君にとつて他人だとも思つた。そして、たうとう一緒になつた。この氣持は、きつと君には分かる。いつか分からずには置くまいと思つた。

主人　神祕だ。神祕だ。

谷村　ところが、結婚後三ヶ月程立つた時、この人は始めて眞實を打ち明けた。（間）この人はやつぱり君を愛してゐたのだ。（間）そして、あの當時の君の狂態にあやまられて、君が自分を愛してゐないと思つたのだ。（間）まるで反對だつた。

主人　（沈默）

谷村　しかし、この人は僕にその事を告白して、僕に自分の代りにあやまつて来てくれと言ふのだ。妻に罪はない。勿論、君にも罪はない。恐らく僕にも罪はあるまい。總てが間違ひだ。みんな、みんな間違へてゐたのだ。だが、僕は苦しんだ。この二十年間苦しみ通しに苦しんだ。どうしても君の所へ来る事が出来なかつた。

主人　それは氣の毒だつた。ほんとに氣の毒だつた。君は「狂態」といふ詞を使つたが、あの當時の僕は全く氣違ひだつた。あの氣違ひが、總てを混亂に陷れたのだ。併し、もう總ては過ぎ去つた。僕は案外今落ちついてゐる。平和だ。寂しいとも思はない。娘も僕を愛してくれてゐる。今ゐた青年も、僕を父のやうに慕つてくれてゐる。僕には僕の世界がある。鳥小屋がある。書齋がある。君は餘り過去を重んじ過ぎた。

谷村　有難う。僕はやつと重荷をおろしたやうな氣持がする。僕は君に面罵されるつもりで来たのだ。命を賭けても好いと思つて来たのだ。あ、やつと落ちついた。（糸子を見る）おれ一人でしやべつてしまつた。お前もう言ふ事はないか。

（糸子、頭を振る。）

谷村　（主人に）では、これにも一言許すと言つてやつてくれ給へ。

主人　（糸子に）許すも許さんもありません。總ては神の意志です。

谷村　有難う。有難う。ところで、お嬢さんに會はせてくれないか。

主人　會はせよう（呼ぶ）島村、島村。

（島村、登場。）

主人　お孃さんを呼んで來い。

（島村、默つて立つてゐる。）

主人　何をぼんやりしてゐるのだ。直ぐ呼んで來い。

島村　はい。

（島村、退場。）

谷村　あれだね。あれはどういふ人の子だ。

主人　孤兒だ。父親が死んでから生れた子だ。生れると直ぐ母親が自殺したのだ。

谷村　どうして。

主人　再婚を强ひられたからだ。

谷村　可哀さうに。

（敏子、登場。）

谷村　ああ、お孃さんですか。敏子さんですね。私は父さんの古い友達、谷村です。（糸子を紹介して）これは妻です。

（敏子、默禮する。）

（谷村、糸子を見る。）

（糸子、頷く。）

谷村　（主人に）ところで、山中君。甚だ突然だが、再び昔の友誼を取戻すしるしに、このお孃さんを僕の家へ貰ひたいと思ふが、どうだ。

主人　（間）これを。

谷村　（間）實は理由なしではないのだ。僕等夫婦の間に一人息子がある。大學へ行つてゐるのだ。それの嫁として貰ひたいのだ。

主人　だが、これはまだ。

谷村　天意は測るべからずだ。實を言ふと、僕の

息子と君のお孃さんとの間に、戀が成り立つてゐるのだ。二人は親と親との關係を全く知らずに愛し合つたのだ。

主人　いつ。どこで。

谷村　學校へ通ふ道で。

主人　え、敏子。それはほんとか。

敏子　ほんとです。

主人　ほんとか。

敏子　ええ。

主人　さうか。

谷村　（主人に）どうだ、君。二人を幸福にしてやらうぢやないか。僕等のやうな間違ひの起らない内に。君が僕等に惡感を持つてゐない證據にもなるのだから。

主人　（間）　娘に聞いてくれ給へ。

谷村　敏子さん、來てくれますか。

敏子　ええ。

谷村　厭なら厭と言ふのですよ。

敏子　參ります。參ります。

谷村　どうだい、山中君。

主人　總ては娘の意志だ。（間）　僕に異存はない。

谷村　ああ、それでやつと安心した。君の溫い心も、これで本當に分かつた。感謝する。

主人　いつから連れて行くのだ。

谷村　今からでも好い。だが、したくもあらう。いづれ僕が又迎ひに來る。

（主人、默つてゐる。）

谷村　では、けふはこれで歸る。

（敏子、谷村の顏を見る。）

谷村　おう、さうだ。これを。

(谷村、懐から金包を出す。)
(主人、その方を見ない。)

敏子　(主人に) お父さん、ステエションまでお送りしてもよくつて。

(主人、默つて頷く。)

敏子　では、一寸お待ち遊ばして。

(敏子、退場。)

主人　(谷村に) 過去の事は決して娘に言つてくれ給ふなよ。

谷村　勿論の事だ。

主人　世の中の事はどうなるか分からないものだ。僕の第六感も餘程怪しいものだ。(低く笑ふ)

(敏子、登場。)

敏子　では。

谷村　では、山中君。

主人　さやうなら。

(糸子、主人に默禮する。)
(三人、去る。)
(島村、ぼんやりとはひつて來る。)

主人　敏子は今の人のところへ行くことになつた。

島村　聞きました。

主人　だが、お前はやつぱりここにゐてくれるだらうな。

島村　僕ももうお暇を頂かうと思ひます。

主人　どうして。

島村　お嬢さんがお出でにならないでは。

主人　お前は敏子を愛してゐたのだらう。

島村　はい。

主人　だが、敏子はお前を愛してゐなかつたのだ。

島村　それは分かりません。

主人　成程、それは分からない。併し、今はどうする事も出來ないのだ。

島村　ですから、僕はここを離れたいのです。

主人　ここを出て、何處へ行くのだ。

島村　それも分りません。僕は唯世間へ出て行かうと思ひます。先生の世界は餘りに脆いものでした。世間に一度觸れると、直ぐに毀れてしまひました。先生はこれでもまだ、先生の世界を幸福だと思つてゐるのですか。この卵のやうに脆い世界を。先生の世界も、もう絶望ですね。

主人　いや、俺はやつと俺の行きつく處へ來たのだ。（傍にある書物を取り上げる）ここに露西亞の人の書いた詞がある。（探しながら讀む）「絶望は人生に於ける崇高な瞬間だ。そこへ來るまでは、吾々はまだ何かに助けられてゐるのだ。吾吾は今始めて吾々自身になつた。前には、吾々は人間や人間の律(おきて)と關係があつた。今、吾々と關係のあるのは、もう永遠だけだ。吾々は律といふものと完全に手を切る事が出來たのだ。」

島村　それは負け惜しみです。（行きかける）

主人　これからだ。俺の本當の生活はこれからだ。

（主人、燭臺に火をともす。）

（島村、默つて、行つてしまふ。）

（主人、二階へ上がる。）

（舞臺暫く空虚。）

（鷄二三羽、こつこつと音をさせてはひつて來る。）

――幕

ベテスダの池　一幕

人物

跛者

盲人

皮膚病者

三十八年病みゐる老人

その他、病人・不具者、大勢

基督

時代

或年の三月十四日

場所

エルサレムの羊門附近

ベテスダの池（鑛泉）の縦斷面。池を圍む五つの柱廊の內、三つだけが舞臺に見られる。池は舞臺端の直線で、半圓形に仕切られる。池の上には低い屋根がある。晝の光が、三つの柱廊から僅に洩れてはひつて來る。池の面は、その反對で稍明かるいが、他は總て洞窟の中のやうに薄暗い。池の廻りを、大勢の病人や不具者が、殆ど透間もない程密に取り卷いてゐる。或者は蓐（東洋風の簡素な敷物）を敷いて、その上に腹ん這ひになつてゐる。或者は撞木杖を抱へて、蹲つてゐる。頭を繃帶してゐる者がある。胸を抑へて、唸つてゐる者がある。時々狂人のやうに、高い聲で、何か譯の分からぬ事を叫ぶ者がある。併し、みんな一樣に、池の面を見詰めてゐる。誰も彼も、ぢつと池の面を見詰めてゐる。盲人までが目に力を張つて池の面を見ようとしてゐる。

遠くに、祭らしい人聲や歌や音樂が聞える。

群集、切れ切れに、間を置いて、話をする。

――まだ動かないか。

――動かない。

――随分待たせるな。

――そんな事を言ふのは勿體ない。

――おれはけさ夜の明けない内から來て、少しも油斷をせずに、かうやつて水を見てゐるのだが、どうしても動かない。

――早く來たつて、遅く來たつて同じ事だ。動く時が來れば、きつと動く。

――でも、飛び込む時は、一番初めでなければだめだ。

――一番初めでなければだめなのか。

――水が動いた時に、直ぐ飛び込むのだ。さうすればどんな病氣でも癒るのだ。

――おれは盲だ。水の動くのは見えない。音を聞いて飛び込むのだ。

――おれも盲だ。天の使の水を動かしに來るところが見られれば、誰よりも先に飛び込むのだが。ああ、目の見えないといふ事は、何につけても不自由だ。

――天の使はおれ達の目にも見えはしない。水が動くので、天の使の來た事が分かるのだ。

――ハマンに呪あれ。ハルボナに恵あれ。

――誰だ。厭な聲を出すのは。

――けふの祭の歌を唱つてゐるのだ。

――おれ達には祭などはない。祭のあるのは丈夫な奴等ばかりだ。

――祭の歌などを唱ふ奴は、出て行け。唯さへ狹

い所だ。
――けふはみんな祭へ行つてしまつて、ここは靜だらうと思つて、やつて來たのだ。だが、やつぱりだめだ。やつぱり、こんなに大勢集まつて來てゐる。
――動かないか。
――動かない。
――もう動いても好ささうなものだ。
――辛抱が肝心だ。辛抱する奴が勝つのだ。
――一體、天の使といふのは、大きな者か、小さな者か。
――小さな者だといふ者だ。人間の肩へ乘れる位小さいといふ話だ。小鳥ぐらゐなものだらう。
――いや、もつと小さいさうだ。人間の指のさきにでも留まれるさうだ。蜻蛉ぐらゐなものだらう。
――いや、大きなものださうだ。廣げた羽根へ日が當ると十里四方明かるくなるさうだ。
――ハマンの首を絞めたるハナボナに惠あれ。
――まだ、さつきの奴がゐるな。
――出て行け。出て行け。
――出て行け。出て行け。
（群集の一人が左の柱廊から押し出される。）
――大丈夫か。
――大丈夫だ。まだ動かない。
――長いな。
――ほんとに長いな。
――ほんとに天の使が動かしに來るのか。溫泉が湧くのだといふ人もあるぞ。
――お前は他國者だからそんな事を言ふのだ。今までに澤山癒つた者があるのだから爲方がな

い。

――でも、目に見えないのに、天の使が來るのだといふ事が、どうして分かるのだ。

――それは、昔からの言ひ傳へだ。言ひ傳へほど確なものはない。

(三十八年間脊髄病にかかりゐる老人、褥を引きずつて、中央の柱廊からはひつて來る。)

老人　御免下さい。………。

一人の病人　だめだ。だめだ。

他の病人　もう一杯だ。前へは出られない。

老人　年寄でございます。そんな事を仰しやらずに、どうか前へ出して下さい。

一人の跛者　邪魔だ。邪魔だ。退くのは。

その邊の皮膚病者　またいつもの爺さんがやつて來たのだ。

老人　三十八年もわづらつてゐる者でございます。どうか前の方へ出して下さい。

跛者　うるさいな。

一人の病人　けふはもう遅い。あした來い。

他の病人　歸れ、歸れ。

老人　可哀さうだと思つて、何處へでも入れて下さい。お願ひでございます。お願ひでございます。

跛者　やかましい。

一人の盲人　歸れ。歸れ。

(群集、暫く老人と爭ふ。老人、頑固に動かない。終に、左の方の端に割り込む。みんなと同じやうに池の面を見詰める。あたり靜になる。)

――今の間に動きはしなかつたか。

――動いたかも知れないぞ。

——大丈夫だ。おれはそつちに構はずに水を見てゐた。

——狡い奴だな。

——早く癒りたいのは誰しも同じ事だ。

——もうぢき動くぞ。

——どうして分かる。

——どうもそんな氣がするのだ。

——やかましい。默つてゐろ。

——さうだ。默れ、默れ。

——天使樣。どうぞお早くお降り下さいまし。

——靜にしろ。

——しつ。

——しつ。

（靜になる。白衣の基督、中央の柱廊に現れる。直ぐと、三十八年病みゐる病人に目をつけ、その方へ歩み寄る。）

基督　（唐突に）お前は病氣が癒したいか。

老人　（直ぐと後を振り向く）はい。癒したうございます。けれども、水が動いても、わたしを池へ入れてくれる者がありません。いつでも、先きへ誰かにはひられてしまひます。

跛者　やかましい。また爺が何か言ひ出したな。

一人の病人　靜にしろ。

他の病人　靜にしろ。

基督　（聲を低くして）病氣を癒して後悔するやうな事はあるまいな。

老人　ありません。お願ひですから、水が動いたら、直ぐわたしを池へ入れて下さい。

基督　池へなどはひらないでも好い。わしの言ひつける通りにすれば、病氣は癒る。

老人　どうすれば好いのでございます。

基督　わしの言ひつける通りにするか。

老人　いたします。

基督　蓐を上げて、歩くのだ。

老人　かうでございますか。

（老人、蓐を上げて、立つ。）

基督　さうだ。それで、もう病氣は癒つたのだ。

（基督、靜に左の柱廊から去る。）

（老人、暫く呆然としてゐる。やがて、手を振つたり、足を踏んだりして見る。急に大聲に笑ひ出す。）

老人　は、は、は。癒つたぞ、癒つたぞ。

跛者　やかましい。どうしたのだ。

老人　病氣が癒つたんだ。病氣が癒つたんだ。

一人の病人　氣が違つたな、爺さん。

他の病人　可哀さうに、あんまりいぢめるからだ。

老人　は、は、は。ほんとに癒つた。ほんとに癒つた。

盲人　聲の調子が違つて來たぞ、ほんとに癒つたのぢやないか。

皮膚病者　平氣で歩いてゐるぞ。本當に癒つたらしいぞ。

跛者　なあに、氣が違つたのだ。

老人　は、は、は、は。癒つた。癒つた。

一人の病人　爺さん、どうしたんだ。どうして癒つたんだ。

老人　今ここへ白い着物を着た人が來たんだ。さうして、蓐を上げて歩けと言つたから、その通りにしたんだ。さうしたら癒つてしまつたんだ。

跛者　莫迦々々しい。

一人の病人　いつそんな人が來たんだ。その人は

駈けられるか。
病人　とても駈けられない。
老人　よし、それぢやあ、わたしが駈けて行つて、追ひつくから、お前あとから來い。
病人　よし、一所懸命に急いで行く。
（老人、元氣よく左の柱廊から去る。病人、杖をついて、その後を追ふ。二三人、又その後を追つて去る。靜になる。）
跛者　氣違ひが移つたな。
皮膚病者　さうだ。氣違ひだ。さうでなくて、あんなに急に元氣のつく筈がない。
一人の病人　莫迦な奴等だ。
盲人　ほんとに、白い着物を着た人が來たのか。
他の病人　どうだか分からない。誰かと話はしてゐたやうだが。
何處にゐるんだ。
老人　（左の柱廊を指さす）今そこから出て行つてしまつた。わたしを癒すと、直ぐに出て行つてしまつたんだ。
跛者　夢を見てゐるのだ。
皮膚病者　ほんとか。爺さん。
老人　ほんとうとも。この通り丈夫になつてしまつた。は、は、は。癒つた、癒つた。
一人の病人　白い着物を着てゐたのか。
老人　さうだ。白い着物を着てゐた。
病人　お前、顏を覺えてゐるか。
老人　覺えてゐるとも。
病人　では、おれをその人のところへ連れて行つてくれ。
老人　宜しい。連れて行つてやらう。だが、お前

跛者　誰が來たつて、人間におれ達の病氣や不具が癒せるものか。

一人の病人　さうだとも。だから、おれ達は天の使の來るのを待つてゐるのだ。

他の病人　やつて來たのは氣違ひに違ひない。氣違ひがあの爺さんに氣違ひを移したのだ。

更に他の病人　氣違ひは莫迦力が出るといふからな。

盲人　大笑ひだ。

一人の病人　ほんとに大笑ひだ。

跛者　お蔭で人數が少くなつた。何がしあはせになるか分からない。

その隣りの病人　やつと邪魔がなくなつた。靜にして水の動くのを待たうよ。

一人の病人　さうだ。靜にしよう。

（靜になる。稍長き間。）

盲人　（聲を低くして）動くか。

跛者　（同じく）まだ動かない。

皮膚病者　（同じく）もうぢきだ。

一人の病人　（同じく）もう少しの辛抱だ。

（一同、又ぢつと水の面を見詰める。暫く沈默。）

（遠くに、祭の歌や音樂が聞える。）

——幕

捨兒　一幕

人物

龜井留吉　酒店の主人
およし　その妻
松吉　その弟
二郎　小僧
新吉　小僧
近藤寛　大學生
白井數馬　巡査
酒を立飲に來る男　二人
町を通る人

場所

東京の或學生町

時代

現代

舞臺。食料品雜貨などを兼業する或酒屋の店先。及びその前の道路。

十二月の或晩、十時頃から十一時頃までの出來事。主人留吉、小僧二人（二郎と新吉）を相手に帳合をしてゐる。

二郎　……十九日が十錢でたわし。二十日が一圓十錢で牛罐。廿一日が五十錢でシロップ。廿二日が十一錢で上酒。廿三日が五錢で酢。同じく十五錢で草帚。廿四日が二圓十錢で味の素。廿五日が三十三錢で日本橋漬――それで山口さんはおしまひです。

主人　よし。間違ひなしだ。〻は。

二郎　二十三圓と三十八錢。

主人　よし。よし。

（時計十時を打つ。）

主人　十時か。もう一息だ。やつてしまはう。あと二軒だらう。今度は高山さんか。

若吉　へい、高山さんです。高山さんはお酒ばかりだからわけないんだ。

二郎　隣り合つてゐても妙なもんだね。山口さんは一切お酒の御用なし、高山さんは年中お酒の御用ばかりといふのだからな。

主人　（帳面を合はす）　さあ、讀んだ、讀んだ。あすこは若吉だらう。

若吉　へい。では願ひまして、お朔日が三圓五十錢で一升。二日が一圓八十錢で五合。三日が一圓八十錢で同じく。四日が一圓八十錢で同じく……（讀み續ける）

（電話の鈴鳴る。）

（小僧、二郎出る。）

二郎　はあ、はあ……上州屋でございます……はあ。どなた樣で。ああ、荒木さんで入らつしやいますか……へい、へい……富久娘を一升……へい、へい……荒木さんでございますね……明朝八時までに……へい、へい、畏りました。どうも有難うございます。さやうなら。（電話を離れる。主人に）旦那、荒木さんで、あしたの朝八時に富久娘を一升ですつて。

主人　（帳面から目を放さずに）　よし、お前覺えて置け。忘れるな。

二郎　へい。

新吉　（讀むのをやめて、二郎に）なんだつて朝つぱらから酒が入るんだらう。

二郎　きつと子供が生れるんだよ。奥さん、隨分大きなお腹をしてゐたからな。

新吉　子供が生れたつて、朝つぱらから酒を飲む奴があるものか。

二郎　ぢや産湯にでも使ふんだらう。

主人　（帳面から顏を上げて）ばか。新吉、あとを讀まないか。

新吉　へえ。ええと、十四日まで濟みましたね。ええと、十五日が三圓五十錢で一升。十六日が一圓八十錢で五合。十七日が一圓八十錢で同じく。十八日が一圓八十錢で同じく。も一つ、十九日が一圓八十錢で同じく……（讀み續ける）

（勞働者風の男、立飲に來る。）

（小僧二郎、直ぐ一ぱいコップについで出す。鹽を少し皿にのせて持つて來る。）

（勞働者、默つて一杯一息に飲み干す。コップを出す。二郎、又樽の栓を拔いて、注ぐ。）

（勞働者、今度は間を置いて飲む。初め鹽を抓む。やがて、腹掛から、小さな皮包を出しその中から何か摘んで食ふ。）

主人　（新吉に）〆はいくらになつてる。

新吉　丁度五十六圓になつてゐます。

（勞働者、一寸主人の方を見る。併し、直ぐ又酒の方にかかる。）

主人　（二郎に）二郎、今度は大井さんだぞ。

二郎　へえ。（主人の側へ行く）

（勞働者、二杯目を飲み終り、又コップを出す。今度は新吉が酒をついで出す。）

（勞働者、ちびりちびりと飲む。）

二郎　（この間に、もう讀んでゐる）朔日が二十錢で

味噌。二日が十錢で味噌。三日が十五錢で味噌。四日が十錢でマッチ。五日が六錢で磨き粉。六日が二十一錢で味噌。七日が五錢で鹽……（讀み續ける）

（紋附の男と同樣な男が、店へはひつて來る。）

新吉　入らつしやい。

紋附　酒を。

新吉　お酒は何を差し上げます。

紋附　ここで飲むのだ。

新吉　（驚かずに）へえ。（直ぐコップへ一杯ついで出す）

（紋附の男、ちびりちびり飲み始める。そこに出てゐる皿を嘗める。）

（勞働者、竹の皮包を紋附の男の方へ出す。）

紋附　（相手の顔を見て）いや、これは。僕にですか。それは恐縮。頂きやす。

勞働者　寒いね。

紋附　東京の寒さぢやごわせん。滿洲の寒さでやす。

勞働者　お前、滿洲へ行つてた事があるのか。

紋附　然樣。三年をりやした。

勞働者　どこにゐた。

紋附　大連にもゐやした。旅順にもゐやした。奉天にもゐやした。

勞働者　商賣は何だね。

紋附　興行をしてゐやした。

勞働者　鑛山か。

紋附　いや興行物で。

勞働者　ああ、芝居の興行師か。

紋附　芝居もやりやしたし、手品もやりやしたし、

オペラもやりやした。
勞働者　儲けたな。
紋附　一時はなあに、馬車を乘り廻すやうな景氣でやしたが、明智光秀三日天下で、忽ち沒落でやさあ。
勞働者　今は何をしてゐる。
紋附　どつかに何か働くとこはないでやせうか。
勞働者　ねえな。
紋附　旦那は何をしてゐなさるので。
勞働者　おれか。おれは勞働運動よ。
紋附　儲かりやすか。
勞働者　儲からねえな。その代り、どう轉んでも食ひはぐれはねえ。
紋附　成程な。
勞働者　だが、この頃はどこでも酒を禁じちまつたんで、そいつだけが不自由だ。その代り、運動はしつかりして來た。容易に資本家に負けやしねえ。
紋附　全く資本家といふ奴は癪に障りやすな。
勞働者　お前だつて、興行師なら、資本家だ。
紋附　もうそれは廢業でやす。
勞働者　資本家の自由廢業か。笑はせやがる。
紋附　（怒りもせずに、笑つてゐる）へ、えへえ。

（主人の弟、出て來る。）

（店に客のゐるのを見て、また元來た方へはひる。）

主人　（二郎に）〆高は。
二郎　十一圓と二十三錢五厘。かどの多い割に少ねえなあ。
新吉　あすこは婆さんがしつかりしてゐるから、

經濟がうまいや。

主人　むだを言はずに、帳面を片づけろ。

（二人、帳面を片づける。）

（主人も帳面を片づけにかゝる。）

勞働者　何か。君は演說が出來るか。

紋附　演說て程の事は出來やせんが、口上なら巧いもんでやす。

勞働者　どうでえ。一つおれの方の事務所へ來て働いちやあ。

紋附　結構でやすな。事務所はどちらにあるんで。

勞働者　小名木川だ。愛勞會つてんだ。お前、ひとりもんか。

紋附　女房も子もおいやしたが――滿洲へ置いてきぼりにして來やした。

勞働者　當り前だ。どうも食へなきやあ、しやうがねえからな。おれなんぞは、人間が利口だから初めつから女房なんぞ持ちやしねえ。

紋附　全くだ。人間到るところ靑山ありでやすからなあ。

勞働者　なんでえ、そりやあ。

紋附　女が欲しけりや、コッへ行けでやす。

勞働者　お前、割に話せるな。そのイキで一つ遣つてくれ。

紋附　やりやせう。

勞働者　ぢやあ、これから直ぐ來るか。

紋附　參りやすとも。

勞働者　お前、家はどこなんだ。

紋附　家なんぞありやしません。

勞働者　ぢやあ、合宿へ泊りねえ。ところで、お前もう一杯やらねえか。

紋附　御馳走になるんでやすか。

勞働者　しみつたれた事を言ふねえ。（紋附の男のコップをとつて、二郎のゐる方へ差し出す）

（二郎、そのコップに酒を注いで來る。）

紋附　いや、濟みやせん。有難う。

勞働者　よせやい。一つ健康を祝して、今夜は板橋とするかな。あしたは又命がけだからな。

紋附　そんな危險な事があるんでやすか。

勞働者　なあに。お前は口の方だから大丈夫だ。おれは腕で行く方だからな。さあ行かうぜ。

（二郎に）小僧さん。いくらだ。

二郎　一緒ですか。

勞働者　さうだ。

二郎　（新吉と相談してから）ええ、一圓と十五錢。

勞働者　（腹掛から錢を一掴み出して、その中から要求されただけの額を置くと、殘りを又腹掛の中へ入れて、どんどん出かける）

紋附　どうも、濟みやせんな。（あとを追ふ）

主人　暢氣な人達だ。さあ、早く戸をしめろ。

二郎と新吉　へえ、へえ。

主人　あしたの朝、荒木さんの富久娘を忘れるなよ。

二郎　へえ。大丈夫です。

（丁度そこへ、主人の弟、はひつて來る。ふところに赤子を入れてゐる。）

弟　今晩は。

二郎　入らつしやい。（主人に）旦那、本所の旦那が來ましたよ。

主人　（默つて何か片づけてゐる）

新吉　本所の旦那が入らつしやいましたよ。

主人　（一寸弟の方を振り向くが、又よそを向いて、片づけものをする）

弟　兄さん、今晩は。

主人　（不意、弟の方を向いて）何か用か。

弟　ええ。少しお願ひがあつて。

主人　お前のお願ひは聞かないでも分つてる。もう店をしまふのだ。出直して来い。

弟　でも……折角遠いとこを来たんですから。

主人　それはお前の勝手だ。

弟　どうも、兄さんのやうに言はれてしまつては。

（二階上手、奥へはひる。）

主人　（息子に目をつけて）お前、赤んぼを抱いてるな。

弟　ええ、一週間ほど前に生れたんです。それで、實は……

主人　祝へと言ふのか。

弟　どう致しまして。今の身分で、決してそんな大それた事は願やしませんが、唯かかあが産後の肥立が悪くて……

主人　（黙つてる）

弟　全く、どうも、十月にあんな事があつたんだし、二度と来られた義理ぢやないんですが、ほかに頼るところはないし、この頃ぢや職の方もからつきし……

主人　當り前だ。はやらないのが當り前だ。第一、おれはお前の職が氣に入らないのだ。そこへ（指さす）活版所へ行つて見ろ。大きな機械が夜も寝ずに廻つてゐて、日に何萬といふ本が刷れるんだ。製本も、器械でどんどん出来るといふぢやないか。選りに選つて、今どき、日本紙の

かがり綴などを職にする奴があるものか。
弟　でも、この頃の本は直ぐ毀れてしまひます。
主人　讀んでしまへば毀れたつてほごれたつて構ふものか。
弟　ところが、さうでないんです。後世へ傳へるやうな立派な著述は、成るべく日本紙に刷つて、しつかり綴ぢて置きたいんです。
主人　ふむ。また受賣だな。あの「探古」とかいふ先生の。おれは第一、お前があゝいふ時代おくれな人間を貴んでるのが氣に入らないんだ。やれ「酒樽の由來」だの、「吉原の沿革」だのつて、役にも立たない穿鑿をして喜んでるんぢやないか。今どき、そんな物を讀む閑人があるものか。先生がそれだもの、弟子のお前が貧乏するのは當り前だ。
弟　ええ。あたしはどうせかういふ意氣地なしですから、何と言はれても構ひませんが、どうか先生の事だけは惡く言はないで下さい。先生は日本の學問の爲に金も名も忘れて、食べる物もろくろく食べずに、一所懸命に働いて入らつしやるんですから。
主人　入らつしやる。何が入らつしやるだ。よく聞けよ、松吉。好いか。働くといふのはな。おれ達のやうに、朝は五時に起きて、夜寢るのは大抵十二時。その間飯もおちおち食はずに、動き通しに動いてる――これが「働く」といふのだ。
弟　兄さんの事を働かないとは言ひません。唯、先生は兄さんなどのしてる事より、もつと高尚な爲事をして入らつしやるんです。日本に何

人といふ人にしきや出来ない爲事をして入らつしやるんです。

主人　ふん。そんなに偉い人なら、おれのところへなんか頼つて来ないで、その人のとこへ行つたら好いぢやないか。

弟　でも、かういふ事で、先生に御迷惑をかける事は出来ません。

主人　頼る事の出来ない人間なら、いくら偉くたつてしやうがないぢやないか。人間は人に頼られるやうにならなきやだめです。

弟　兄さんはお金の事ばかり考へてるんです。

主人　さうだ。金の事ばかり考へてる。だから、お前のやうな怠け者には鐚一文だつて恵む事は出来ない。

弟　ああ、さうですか。分かりました。ぢやあ、もうなんにも言はずに歸ります。ええ。さやうなら。

主人　おい、おい、二郎。早く戸をしめてしまへ。

二郎　（出て来る）へい。（そこらを片づける）

（新吉と一緒に主人の妻およしが出て来る。）

妻　どうしたんです。

主人　なあに、又松吉の奴がやつて来やがつたんだ。

妻　でも、もう歸つたんですか。

主人　追ひ返してやつた。あいつも今度といふ今度は目が覺めるだらう。なあに、ここで働かしてくれと言ひさへすりやあ、何でもないんだ。それがあいつには言へないんだ。やつぱり、あいつは親父の血が勝つてるんだ。

妻　でも、あなたにはたつた一人の弟さんですか

らねえ。暮れで困るんでせう。なんとかしてお遣りなされば好かつたのに。

主人　子供が生れたんだとよ。

妻　まあ。ぢやあ、尚更の事ですわ。可愛い子でせうねえ。お峰さんは美人だから。

主人　怠け者の子だ。どうせ碌な者になりやしないよ。

（弟、又出て來る。）

弟　兄さん。

主人　（知らん顔をしてゐる）

弟　兄さん。

妻　あなた、松さんですよ。

弟　姉さん、どうも、こんなにおそく上がつて、済みません。

妻　どう致しまして。

弟　兄さん。今のはあたしが悪うございました。今言つた事はみんな取り消します。あたしは、やつぱり兄さんを頼るより外に爲方はありません。子供が可哀さうです。嚊が可哀さうです。

主人　（默つて戸を締めにかかる）

弟　ねえ、兄さん。

妻　（主人に）ねえ、あなた。松さんがあんなに言つてるんですから。

主人　だめだ。歸れ。歸れ。

妻　（赤子に目をつける）まあ、赤ちやんを連れて來たんですね。どれ、どれ、一寸見せて下さい。（側へ寄る）まあ、まあ、おとなしく寝ん寝だこと。

弟　へえ。仕合せと、世話のちつとも焼けない子でして。

妻　男。女。

弟　男で。

妻　それはまあ、お嬢さん、大きい目でせうね。

弟　それが……まだ、子供の顔もろくろく見ないんで。

妻　あとでも遅いんですか。

弟　ええ。へえ。

主人　さあ。さあ。いつまで同じ事を言つてるんだ。早く歸れ。早く歸れ。

弟　でも、兄さん。あたしは、どうしても、今夜は、この儘は歸れません。

主人　おやれ、どうしようと言ふのだ。

弟　もう、一圓でも、二圓でもよござんすから、貸して下さい。

主人　いけない。

妻　あなた、それ位なら、どうかして。

主人　お前は默つてゐなさい。（弟に）さあ、歸らないか。

弟　ぢやあ、せめて、子供だけでも引きとつて。

妻　あなた、さうして上げようぢやありませんか。

主人　だめだ、だめだ。歸れ。歸れ。

弟　ぢやあ、子供をここへ捨てて行きますよ。

主人　まだ歸らないな。どうしても歸らなけりや、手荒な事をするぞ。

弟　ええ、どうされても、あたしはどきません。

主人　歸らないか。（突く。赤子、泣き出す）

妻　まあ、あなた、そんな亂暴な事を。

主人　お前は默つてゐろ。（弟を外へ突き出す）さあ歸れ。歸らないか。

弟　いいえ。歸りません。

(主人と弟、揉み合ふ。)

(弟、終に締め出される。戸を締める時は、小僧達も手傳ふ。)

(弟、暫く締め切られた雨戸を睨んで立つ。やがて、泣く子をすかしながら、行きかける。が、直ぐ戻つて來て、赤子を軒先へ捨てる。一度行きかけて、又戻り、自分の羽織を脱いで着せたり、自分の襟卷をとつて、子供の頭を包んでやつたりする。暫く佇んで、子供の樣子を見てゐる。やがて、額を押さへて、足早に去る。)

(一度默つた赤子が、又泣き出す。)

(雨戸の中で十一時が鳴る。)

(主人の妻、雨戸の小窓をそつと明けて、顔を出す。)

妻　まあ、ほんとに捨てて行つてしまひましたよ。

主人　(妻の後から少し顔を出して)　うつちやつとけ。うつちやつとけ。あいつは氣の小さい奴だから、近所にゐて樣子を見てゐるに違ひない。今に歸つて來るにきまつてる。(小窓を締める)

(人の往來、絶える。)

(赤子、泣く。)

(雪が少し降つて來る。)

(稍長き間。)

(口笛でファウストの行進曲を吹いて來るのが聞える。)

(やがて、マントを着た大學生が一人出て來る。店の前を勢よく通つて行つてしまふ。)

(赤子、烈しく泣く。)

(學生、うろうろしながら、歸つて來る。子供を見つける。あたりを見廻す。赤子、泣く。學生、思はず抱き上げる。が、下へおろす。又抱き上げる。又考へて、下へおろして、行きかける。又赤子、泣く。又抱き上げて、少し行きかけるが、又立ち止つて、考へて、元のところへ

置きに歸る。赤子を下へおろして、襟の崩れたのを直してやつたりなどする。)

(丁度、その少し前から密行の巡査が出て來て、ぢつと立つて見てゐる。)

(學生、行きかける。)

巡査　君。君。

學生　は。

巡査　(赤子を指す)それは。

學生　子供です。

巡査　君の子供ですか。

學生　僕の……(笑つて)僕は學生です。

巡査　學生だつて、子供がないにきまつてはゐません。

學生　それは、僕の同級生にだつて、持つてる奴はあります。

巡査　だから訊くのです。それは君の子ですか。

學生　僕の子ではありません。

巡査　では、なぜ今抱いてゐたのです。

學生　自分の子でなければ、抱いては惡いのですか。

巡査　理窟を言つちやいけません。では、率直に訊きませう。あなたは自分の子を捨てたのではありませんか。

學生　いいえ、さうぢやありません。

巡査　さうでないといふ證據がありますか。

學生　證據。

巡査　證據と言つては無理かも知れませんが、私に承認の出來るやうな事が何かありますか。

學生　では、順序だけ申し上げませう。僕は親類の家へ遊びに行つた歸りに、唯ここを通りかか

つたのです。僕はそこの下宿にゐるもんですから。ところが、子供の泣き聲がするから、戻つて見るとどうも捨兒らしいんです。あんまり泣くから、可哀さうになつて、抱き上げては見たんですが、下宿へ連れて歸つても、僕にはどうする事も出來ません。で、また、元のところへ置いたのです。唯、それだけです。

巡査　併し、近頃は、大分學生間に戀愛問題がありますからな。

學生　それは、あるかも知れません。また僕自身にも、あるかも知れません。併し、これとそれとは別問題です。

巡査　(手帳を出す)君の名は。

學生　僕は惡い事をしたのでせうか。

巡査　それは分かりません。私は唯自分の職責として、君の名を訊くのです。

學生　では、あなたの名をお言ひなさい。

巡査　私の名こそ言ふ必要はないのです。併し私は自分一個の主義として、訊かれれば言ふ事にしてゐます。私はそこの派出所にゐる白井數馬といふ者です。

學生　僕は近藤寛。

巡査　ユタカは。

學生　寛です。寛大の寛です。

巡査　帝大ですね。

學生　文科の三年です。

巡査　下宿は。

學生　元町二丁目廿三番地。長生館。

巡査　ちやうせい。

學生　長く生きるです。

巡査　國は。

學生　京都市七條下ル西洞院。

巡査　年は。

學生　そんなに何もかも訊くのですか。

巡査　一應訊いて置きます。

學生　二十三です。

巡査　（子供を抱き上げる。子供、泣きやんでゐる）でお氣の毒ですが、一寸署まで御同行を願ひます。

學生　警察へ行くのですか。

巡査　さうです。

學生　それは迷惑ですな。

巡査　迷惑かも知れませんが、やむを得ません。

學生　警察へ行くのは餘り愉快ではありません

巡査　爲方がありません。この子が君の子だか、さうでないか、確めなければなりませんから。

學生　それは、さつきからさうでないと言つてるではありませんか。

巡査　それだけでは、私として承認が出來ないのです。

學生　なぜ承認が出來ないのですか。

巡査　それは署へ行つて言ひませう。

學生　なぜ、ここでは言へないのですか。

巡査　また理窟ですね。それでは言ひませう。先づ第一に斷つて置きたいのは、私が巡査であるといふ事です。

學生　それは分かつてゐます。

巡査　私は巡査です。それをしつかり頭に置いといて下さい。その巡査の私が、この目で見たも

のは、何でしたか。この子を抱いてゐた君がこの子をここへ捨てた事です。私の見たのは、唯それだけです。私は巡査として、君を疑はなければなりません。疑はなければ、私の職務が立ちません。想像や推測で、人を罰したり許したりする事は、吾々に許されてゐません。

學生　あなたの職務は人民を保護する事です。

巡査　さうです。人民の保護です。私はこの子が可哀さうだから、君を疑ふのです。若し、これが君の子であるとして、君がこの子を捨てなければならないとしたらその事情も訊きたいのです。それは君を保護する事になるのです。

學生　僕は自分の子を捨てるやうな事はしません。

巡査　さうかも知れませんが、私の見たのは、君が捨てるところを見たのです。

學生　捨兒が泣いてゐれば、可哀さうになるのが當り前ではありませんか。誰だつて拾つてやるのが本當です。それが人間といふものです。あなただつて拾ふでせう。

巡査　勿論、拾ひます、

學生　それで、あなたに嫌疑がかかつたらどうします。

巡査　警察へでも何處へでも行つて、明かりを立てます。

學生　若し、僕が拾つた儘、どんどん行つてしまつたら、どうですか。

巡査　それなら、咎めなかつたかも知れません。

學生　それは不合理ぢやありませんか。

巡査　精神的に言へば不合理かも知れません。併

し、吾々は目で見た事のみに根據を置きます。

學生　では、僕が一旦拾つたものを、又捨てたのが悪いのですね。

巡査　拾つたところは、私は見ないのです。

（長き間。）

學生　さうだ。確にそれは悪い事だ。僕は愛が足りなかつたのだ。僕の躊躇は愛の缺如から來たのだ。どんな事があつても、拾つて行くべきだつたのだ。さうだ。やつぱり、あなたはえらいところを見つけた。僕は悪かつた。僕は罰せられても仕方がない。ああ、恐ろしい。僕は恐ろしい罪を犯したのだ。

巡査　同行しますか。

學生　致します。

巡査　では。

（二人去る。）

（雪、ますます降る。）

（寢卷姿の主人の妻、小窓を明ける。）

妻　あなた、あなた、子供がゐませんよ。

主人　（後から）松吉が又來て、連れて歸つたんだらう。

妻　何だかごとごと人聲がしましたね。

主人　お巡りにでも咎められてゐたんだらう。

妻　さうですかねえ。可哀さうに。

主人　あした、どうにかしてやらうよ。

妻　どうかねえ。

主人　子供の始末さへつきやあ安心だ。さあ、寢よう。寢よう。

（二人、顔を引つ込める。小窓の戸が締まる。）

（雪がますます烈しく降る。）

（松吉、ふるへながら、出て來る。軒下を見ると、子供がゐないので、一寸驚くが、直ぐ又何か考へついたやうに、酒屋の店の雨戸の側へ身を寄せて、耳を傾ける。）

弟　坊や、よく寢てると見えるな。

（安心したやうに、行つてしまふ。雪が無關心に降りしきる。）

――幕

三人と三人　三幕

人物

村田仁兵衛　請負師　（四十二歳）
お　絹　仁兵衛の妹　（二十四歳）
おしん　お絹の妹　（二十一歳）
仁太郎　仁兵衛の子　（六　歳）
木崎正治　洋畫の學生　（二十三歳）
駒澤卓爾　法學士　（二十八歳）
小　冬　藝者（二十一歳）（登場せず）
櫻川千楽　幇間　（三十四歳）
延　吉　芝居茶屋の男　（四十歳）
安藤要次郎　村田組の支配人（三十五歳）
新　造　村田家の小僧　（十六歳）
お　花　村田家の女中　（十八歳）

場所

東京の下町

時代

明治の末

第一幕

村田家の店先。帳場。金庫。電話。
正面奥、古風な千本格子の障子。奥及び臺所への通路。
二階へ上がる梯子段、大きな掛時計。
下手に小さき土間。土間の奥に建前の化粧柱など。
格子戸。戸外への通路。

朝の十時頃。

幕が明くと、お絹が電話口に立つてゐる（低い踏臺に乘つて）和服で袴をはいた木崎が、胡坐をかいて、新聞を讀んでゐる。白い皮の紐のついた繪の具箱が、その側に投げ出されてゐる。小僧の新造が土間で何か片づけものをしてゐる。

お絹　（電話口で）はあ、はあ……では、赤羽の方は指名入札になりますのでございますね。はあ、分かりました……今月の二十日過ぎでございますね。はあ。はあ……どうも有難うございます……それから、もう一つ伺ひますが、あの三聯隊の厩舍でございますね。あれはお拂ひ下げになりませうか……はあ。なりますか……はあ、來月のなかば頃……はあ、分かりました。どうも有難う存じます。毎度勝手な事ばかり伺ひまして。どうも相濟みません。では、いづれ安藤を遣しますから。はあ……兄でございますか。有難う存じます。相變らず、體が悪いものでございますから。はあ。どうも恐れ入ります。では、御免下さいまし。どうも有難うございました。然樣なら。（電話を切る。木崎の方へは見向きもせず、帳場へ來て坐る。小さな手帳へ鉛筆で覺え書をする。金庫を明けて、契約書やうなものを二三種取り出して調べる。簿記帳を廣げて、算盤をはじきながら、彼是見比べる。それから、小僧に聲をかける）新造、安藤さんはまだ見えないかい。

新造　へい。けさはまだお見えになりません。

お絹　（時計を見上げて）大層おそいぢやないか。

新造　お上さんが少し悪いんださうです。お花さんがゆうべそんな事を言つてました。

お絹　どうしたんだらう。

新造　なあに、又いつもの胃痙攣でせう。たいした事ぢやありませんよ。

お絹　（手早く白紙に紙幣を包む）これを持つてつてね。あたしが伺ふんだけれどもつてね。

新造　（上へ上がつて金包を受けとつて）へい。

お絹　それで、安藤さんに、少し急ぎの用があるから、急いで來て貰ふやうにね。

新造　へい、畏りました。行つて參ります。（直ぐ格子戸から出て行く）

木崎　（顔を上げて、お絹に聲をかける）いそがしいんですね。

お絹　（木崎の方は見ずに、帳場を見ながら）ええ、いそがしいわ。あたしが稼がなけりや、誰も稼ぐ人がないんだからね。

（二階に電話が掛かつて來る。木崎立ちさうにする。）

お絹　お前さんが出たつて分かりやしないよ。（と言ひながら、立つて行つて、受話器をとる）はい。はい。こちらは村田でございますが……どなた樣で……え。あら、いやだ。棟梁かい……分かつたよ。分かりましたよ。え。え。ああ、その事ならね。あたしが悪かつたんだよ。ゆうべ電話をかけようと思つて、すつかり忘れちまつたんだよ……なにっ。莫迦におしでないよ。いくら何だつて、そんな事の爲に商賣を忘れやしないよ……冗談は措いてね。さつきも、それで、木場へ人を見せにやつたんだがね。なんでも、紺がミケに會つたとか言ふのさ。嘘だか本當だか知らないけどもね。でも、けふの夕方にはきつとはひるさうだからね。それまでのところ、

他の方に掛かつてゐてくれないか……え。大丈夫。念の爲に、安藤さんにも廻つて見て貰ふ事にするから……ああ。好いとも。それは大丈夫だよ。ぢやあ。然様なら。（電話を切る。又、帳場へ戻る。そして又帳簿を調べにかかる）

木崎　（顔を上げて）お絹さん。

お絹　（帳簿を調べながら）何だよ。

木崎　今度の明治座、面白さうですね。

お絹　（帳簿を見詰めた儘、頭の前で手を振つて）だめ。だめ。今そんな話をしちやあ。

木崎　だつて、その位の話をしたつて、頭の亂れるお絹さんぢやないぢやありませんか。

お絹　いけない。いけない。商賣をしてゐる時に、そんな話をしちやあ。（木崎を冗談らしく一寸睨んで）おとなしくして、默つてゐるの。用が濟むまで。

木崎　はい、はい。（笑ひながら、また新聞をひねくる）

（小僧の新造と支配人の安藤が、格子戸からはひつて來る。）

小僧　只今。（と言ひながら、上へ上がつて、正面の障子を明けて、奥へはひる）

安藤　（土間に立つた儘、お絹に挨拶する）お早うございます。どうも遲くなつて相濟みません。只今は又お見舞を頂きまして、いつもいつも恐れ入ります。

お絹　どうなの。お仲さんの様子は。

安藤　なあに、又いつもの胃腸なんでございますがね。女中に歸られちまつて、手がないもんでございますからね。（上り框へ腰をかける）

お絹　おや。お金がゐないのかい。それはお困りだねえ。

安藤　国のお袋が悪いとか何とかいふ電報が来たんで、をとゝひ出かけて行つたんでございますがね。どこへ帰つたんだか分つたものぢやございませんよ。あいつこの頃色氣がつきやあがつたんでね。

お絹　まあ、あの山出しがねえ。油断がならないねえ。

安藤　この頃は女中も使ひ難くなりましたよ。あれで、帰さなけりやあ、人様がどうしたの何のと言ふんですからね。そこへ来ると、お宅のお花さんなぞは、模範女中だ。よく坊ちやんの世話を見ますねえ。

お絹　ほんとに、そこだけは感心さ。兄さんはあやつて、外へ出てる方が多いし、あたしはなかなか構つてゐられないし、あの子もお母さんに死なれてからは可哀さうさ。それを、お花がまるで親身のきやうだいのやうに見てくれるんだからね。

安藤　ほんとに感心ですよ。（と、もうその方の話には係り合ひがしないやうに言ひながら、折鞄の中から小さい手帳を出して）時に、けふは先づ木場へ行つて、それから陸軍省の方へ廻らうと思ひますが……

お絹　（これも直ぐ事務的になつて）さう。忙しくて氣の毒だけれども、今も横濱から催促の電話さ。無理もないよ。もう三日も手を明けてるんだからね。一つカネ徳へ行つて厳重に談判をしておくれよ。それから、あの、赤羽の工兵の方

ね。あれはやつぱり指名入札ださうだから、大森さんのとこへ行つて、よくお願ひしておくれよ。それから、あの、三聯隊の厩舍ね。あれは拂ひ下げになるさうだからね。序に廻つて、入札の口取(ひどり)をよく聞いて來ておくれよ。

安藤　（一々手帳へ記入しながら）へい。畏りました。赤羽の一件と、三聯隊の厩舍ですね。畏りました。あの厩舍は隨分古物ですが、何か思わくがおあんなさるのですか。

お絹　田舍から一寸言ひ込みがあるから、その方へ向けようかと思つてね。なあに、いくらにもなりやしないと思ふんだけれど、何しろ今月は又物入りだからね。

安藤　大きにね。（一寸考へて）宜しうございます。精々運動いたしませう。さう、さう、さう言へばきのふ一寸、東京製鐵へ寄りましたら、近い内に增築があるさうですよ。

お絹　さうかい。で、やつぱり内の方へ廻りさうかい。

安藤　それがね。旦那が近頃あんまり顏を出さないもんだから、近藤組が大分手を廻してるらしいんですね。

お絹　だからさ。あたしの言はないこつちやないんだよ。一軒でも二軒でも好いから、古いお得意だけには顏を出して下さいつて言ふんだけれども、もう今ぢやあ、まるで商賣をほつたらかしてゐるんだからね。（一寸沈んで）でも、兄さんのお腹(なか)になつて見ると、氣の毒だらけだしね。さう、つけつけも言へないのさ。

安藤　（同情して）そりやあ、全くさうですよ。今、

旦那の責めるのは全く可哀さうですよ。なんしろあんなに大事にしてゐた人に、急に逝かれちまつたんですからね。それに、御倅にやあ手ひどい目に會ふしさ。酒でも飮まなきやあ生きちやあゐられませんよ。

お絹　だから、商賣の方はあたしが引き受けました——兄さんは當分どうでも自分の思ふ通りになさいつて言つたのさ。それが、ああいふ好い人だからね。直ぐに惡いのに引つかかつてしまつたのさ。

安藤　小冬さんですか。たいした美しい女だつたさうですね。

お絹　とてもお話になりやしないんだよ。

安藤　（急に自分の用を思ひ出して、立ち上がる）これは大變。木場の用が急ぐのだつた。ぢやあ、行つて參ります。

お絹　御苦勞だね。ぢやあ、東京製鐵の方もなんとか專務さんに話して、近藤組に取られないやうにしておくれよ。

安藤　へい。それはもうその手筈にはしてあるんです。木村を毎日やる事にしてありますから。

お絹　どうか、さうしておくれよ。家の暖簾にかかはるからね。

安藤　大丈夫です。精々うまくやります。ぢやあ御免。（格子戸から出て行く。）

木崎　（顏を上げて）もう用は濟みましたか。

お絹　（金庫へ物をしまつて、帳場を出て來ると、笑ひながら木崎の側に坐る）ああやつと濟んだ。

木崎　あの安藤つて奴は厭な奴ですねえ。

お絹　なぜ。

木崎　だつて、僕に挨拶一つしやしない。いつでも、なんだ、書生つぽがつて顏をしてやがる。

お絹　あれはああいふ人なんだよ。

木崎　でも、お絹さんにやあ、ぴよこぴよこしてるぢやありませんか。

お絹　それは主人だもの、爲方がないやね。

木崎　お絹さんだつて、あいつにや馬鹿に丁寧ぢやありませんか。

お絹　それは、ああいふ人にあああしとかなけりやあ、動かないもの。それに、あれでもお父さんの時代から出はひりをしてた人間だからね。

木崎　妥協だ。妥協だ。僕、お絹さんは好きなんだけれども、ああいふところを見るのは嫌ひだな。

お絹　また藝術家のやんちやが始まつたのね。

木崎　だつて、あいつ、いやに僕を邪魔者扱ひにしやあがるんだもの。

お絹　邪魔者扱ひなんかにしてやしないぢやないか。お前さんなんかとは話の出來ない人間だから、それで知らん顏をしてるんだよ。

木崎　それが癪に障るんですよ。僕を何かこの家へ惡い事でもしに來てる人間だと思つてやがるんだ。

お絹　もうおよしつたら。男がそんなにいつまでも一つ事をしつつこく言つてるもんぢやないよ。お前さんはあたしのお友達さ。それで好いぢやないか。

木崎　それは好いけれども。

お絹　もう。おやめ、おやめ。それよりか、お前さん今明治座がどうとか言つてたぢやないの。

木崎　明治座なんかどうだつて好い。僕は、高松君だつて、もう嫌ひになつた。

お絹　そんな事を言ふもんぢやないよ。お前さんとあたしがかうして知り合ひになつたのも高松さんのお蔭ぢやないか。

木崎　そりやあさうだけれども、高松君もやつぱり役者だつてことが、この頃分かつて来たんです。あいつはお絹さんを口説いた事があるんですつてね。厭な奴だ。

お絹　口説いたつて、こつちで聞かなけりやあ好いぢやあないか。

木崎　そりやあさうだけれど、僕はお絹さんの神聖を穢されたやうな気がして不愉快なんだ。奴はうまい人だけど、獣のやうな人間だ。

お絹　（木崎の顔を冗談らしく覗き込んで）どうして、けふはさう御機嫌が悪いの。機嫌、直さない。

木崎　（目の前へ来たお絹の顔をぢつと見て、顔を和らげる）直しませうねえ。詰まらないや。人の事なんぞ議論したつて。

お絹　さうともさ。

木崎　人の事なんかどうだつてよござんすねえ。お前さんさへしつかりしてゐてくれりやあ。

お絹　そりやあ、あたしは大丈夫よ。

木崎　僕は莫迦ですね。

お絹　なぜ。

木崎　僕は陰ぢやあお絹さんを随分信じてゐるんですよ。それでゐて、あなたの顔を見るとついいろんな事が言ひたくなるんです。どうしたんでせう。

お絹　それはあなたの星のせゐよ。

木崎　僕の星はそんな星なんですか。

お絹　あなたの星はね。おとなしい癖に、廻り氣なのよ。

木崎　さうですか。

お絹　それに、もう一ついけない事があるの。

木崎　何です。何です。

お絹　氣が多いの。浮氣星よ。

木崎　そんな事はありませんよ。

お絹　お前さん、お花に何か言やしない。

木崎　なんにも言ふもんですか。

お絹　でも、お花の樣子がこの頃少し變よ。

木崎　そ、そ、そんなばかな事があるもんですか。かりにも、女中などに。

お絹　大丈夫。

木崎　大丈夫ですとも。

お絹　怪しいもんねえ。

木崎　大丈夫ですつたら。

お絹　あたしは、こんなお婆さんだし、男見たいな人間だからねえ。

木崎　おや、おや、變な事を云ひ出しましたねえ。

お絹　（一寸考へて）それに、もう一つ心配な事があるのよ。

木崎　何です。何です。

お絹　名古屋の妹が歸つて來るの。

木崎　名古屋の妹つて、おしんさんの事ですか。

お絹　おしんがけふ急に歸つて來る事になつたの

木崎　けふ。

お絹　それも、唯歸つて來るなら好いんだけれど。

木崎　どうかしたんですか。

お絹　亭主が嫌つて歸つて來るし。

木崎　へえ、そいつあをかしいなあ。おしんさんは自分で見初めてお嫁に行つたんでせう。あの駒澤とかいふ人のところへ。

お絹　さうよ。それが、行つて見ると、まるで思つたやうな人ぢやないんだとさ。

木崎　だつて、もう行つてから何年にかなるんでせう。

お絹　丁度三年になるのよ。

木崎　變だなあ。

お絹　行くと直ぐその事は分かつたんだけれど、あの子も我慢強い子だから、堪へるだけは堪へたらしいのよ。だけど、もう、どうにも辛抱がし切れなくなつたらしいわ。

木崎　道樂でもするんですか。

お絹　それが並大抵ぢやないんだとさ。

木崎　でも、おしんさんを虐待するんぢやないんでせう。

お絹　虐待どころか、そりやあ可愛がつてゐるのよ。

木崎　分からないなあ。

お絹　それだから、ちつとも量見が分からないのよ。そりやあ好い人なんだけど、まあ言つて見れば、だらしがないのねえ。

木崎　その位の事なら、別れるの何のといふ問題が起りさうにもないがなあ。おしんさん、東京が戀しくなつたんぢやありませんか。

お絹　あたしも、まあそんな事だらうと思つてゐるのさ。

木崎　きつと東京で一月も遊んだら、又歸る氣に

なるでせう。

お絹　あたしも、そんな事で濟んでくれれば有難いと思つてるのさ。

木崎　一體、あなたのきやうだいは、みんな遊び好きなんだから。おしんさんも隨分家にゐる事は、はでにやつたさうですねえ。よく高松君がさう言つてゐましたよ。まるで、男の遊びなんですつてねえ。

お絹　なんしろなかなかの負けず嫌ひなんだからね。一時は小林の奥さんなどと張り合つて、高松さんに車までこしらへてやつた事があつたつけ。

木崎　小林の奥さんを敵にするなどは痛快だなあ。僕は高松君を取り巻いてる婦人連の中で一番あいつが嫌ひだ。亭主だつて、金はあるか知らないが、下等な奴でさあ。高松君の一座などでは、奥さん奥さんて、みんな大騒ぎですが、何がそんなに有難いのかと思ひますねえ。あれで、金だつて、世間が思ふ程使はないんだつて言ふぢやありませんか。

お絹　使ふどころか。名は言へないけど、或役者なんか、あべこべに指環を買はせられたとさ。

木崎　そんなこつてせうよ。役者といふ役者で、あいつに關係のないのは一人もないつて言ふんだから、厭になつてしまふなあ。だけど、おしんさんは痛快な人だなあ。むかし、高松君に口說かれた時などぁ、隨分こつぴどくやつつけたさうですねえ。

お絹　高松さんは、誰でも口說くんだからねえ。

木崎　女が役者を贔屓にするのは、大抵野心があ

るものにきまつてゐるのに、舞臺は好いが人間は厭だとはつきり言つたんですつてねえ。豪い人だなあ。おしんさんは。

お絹　いやに褒めるのねえ。あたしだつて、高松さんの舞臺は好きだけど、人間は嫌ひだわ。

木崎　でも、おしんさんの方が徹底してゐますよ。あなたは、まだ弱いとこがあつてだめだ。高松君に會ふと、おろおろして、まるで口が利けないぢやありませんか。

お絹　お前さん、おしんが來ても、惚れちやあだめよ。

木崎　（笑つて）變な事を言ふなあ。大丈夫ですよ。第一向うで相手にしやしませんよ。

お絹　でも、あの人はお前さんのやうな人が好きなんだからね。

木崎　どうだか分かるもんですか。で、けふ、いつ著くんです。

お絹　もうぢき著くのよ。でも、お前さんは、けふは會はない方が好いわ。

木崎　なぜです。

お絹　けふは、いろいろ向うの話や何か聞かなきやならないから。

木崎　さうですか。

（格子戸口から、主人村田仁兵衛、甫岡櫻川平孝を連れて歸つて來る。二人とも醉つてゐる。直ぐ上へ上がる。）

お絹　お歸りなさいまし。（平孝に）平さん、御苦勞樣。

（仁兵衛は寂しく笑ひながら、お絹と木崎の前を、きまり惡げに通つて、直ぐ二階へ上がつてしまふ。）

平孝　（お絹に）あの、恐れ入りますが、お冷を一杯上げて下さいませんか。
お絹　ああ、今直ぐ持たしてやるよ。
平孝　では、一寸御免下さいまし。（と、直ぐ主人の後を追つて二階へ上がる）
お絹　（後を向いて）お花や。
（奥で「はい」といふ聲がする。直ぐ後の障子が少し明く。お花が坐つて顔を出す。）
お絹　坊やはどうしてて。
お花　おとなしく遊んで入らつしやいます。
お絹　旦那がお歸りだから、お冷を一杯、二階へ持つてつて上げておくれ。
お花　はい。（奥へはひる）
木崎　兄さん相變らず醉つてゐるんですね。
お絹　ああ。
木崎　毒だなあ。ああ飲んぢやあ。
お絹　でも、爲方がないわ。寂しいんだもの。
（お花、奥の障子を明ける。コップに水を入れたのを盆にのせて持つて出る。直ぐ二階へ上がる）
木崎　（考へて）だけど、寂しいからつて、酒を飲んで紛らしちまつちやあ詰まらないなあ。僕の先生ねえ。廣田先生なんか始終かう言ふんですよ。人間にとつて――
（お花、二階から降りて來る。直ぐ障子を明けて、奥へはひつてしまふ。）
お絹　人間にとつて――どうしたのよ。
木崎　人間にとつて「寂しい」といふ事ほど貴いものはない。だから、寂しい時は決してその寂しさを紛らしてしまふやうな事をしないで、その「寂しさ」を大事に抱きしめて、その寂しいとい

ふ心持を絵にしろと言ふんです。兄さんなども、唯の請負師ぢやないんだから、あの寂しい氣持な爲事に集注すると、きつと好いものが出來るんだがなあ。

お絹　そんな事言つたつて無理よ。絵かきと大工が一緒になるもんですか。

木崎　だから、お絹さんは分からないつて言ふんだ。建築家は立派な藝術家ですよ。

お絹　また藝術家かい。厭になつてしまふねえ。

（平孝、二階から降りて來る。）

平孝　（小聲で）お休みになりました。（改めてお絹の前に平伏する）へい。先づ今日は。いつもながら、御健勝の態を拜し、恐悦至極に存じ奉ります。（木崎に向つても、丁寧に禮をする）先生。今日は。

お絹　いやだよ。平さん。いやに改まつてさ。

平孝　改たまつてと仰しやいますが。これでも禮儀は心得てゐるんです。鄕に入つては鄕に從へさ。さうぢやござんせんか。（木崎に）ねえ、先生。

（木崎、唯笑つてゐる。）

お絹　やつぱり西の家なのかい。

平孝　へい。この頃はもう、ずつとあすこばかりで。却つて、その方がようござんす。

お絹　「新しい女」はどうして。

平孝　小冬さんでげせう。嬉しいね。あなたまでが「新しい女」などと仰しやるのは。

お絹　まだ脈はあるのかい。大分いけないやうな話を聞いてるんだけど。

平孝　脈は正に百度。

お絹　そりや熱だらう。
平孝　さう、さう、熱、熱。
お絹　そりやあ兄さんの方だけなんだらう。
平孝　いゝえ。なに、さういふわけでもないんですがね。
お絹　あたしぢやないか。ほんとの事を言つておしまひよ。この頃に、一つ恥を掻かしてやるつもりなんだから。
平孝　へえ。あなたが。賛成。異議なし。實はあつしも癪に障つてたまらないんです。
お絹　とても脈はないんだらう。
平孝　ないといふのはあんなんぢやありません。なさ過ぎるといふ奴でげす。何しろ附き者が惡うがさあ。
お絹　小説家だらう。それだつて、あたしはちやんと知つてるんだ。
平孝　それまで御存じとは、どうも、はや、實に恐れ入りやしたな。小冬さんも、飛んだ惡物食(あくものぐ)ひさね。あんな、駈け出しの文士なぞを。
お絹　でも、あれで、なかなか今賣れつ子なんだとさ。
平孝　賣れつ子にもいろいろありますね。あれなぞは、先づ干物(ひもの)の賣れつ子だ。菊屋へ行くと、ああいふのが澤山店に列んでゐますよ。いやに、こちこちしてゐて、まるで石を叩くやうだ。
木崎　(急に口を出す)お絹さん、一體誰の事なんです。
お絹　え。村岡翠(みどり)さんよ。
木崎　へえ。村岡さんが、小冬さんの好い人なんですか。

お絹　さうよ。知らなかつたの。

木崎　ぢやあ、いつれ村岡さんの作物に惚れたとか何とか言ふのが始まりなんでせう。

お絹　さうよ。いつか新派でもやつた「象牙の塔」ね。あれが氣に入つたのが始まりなんだとさ。

平孝　さう、さう。その「蟻の塔」だか「象牙の塔」だか知らないが、なんでも、その塔ですつかり登り詰めてしまつたんですね。

木崎　（暫く考へてゐたが）　さうですか。そりやあ無理はないな。あいつは全く巧いからな。「日本の若きドストエフスキイ」つて評がある位ですからね。あれが分かるんなら、たいした女だ。

平孝　褒めちやあいけないね、先生。

木崎　だつて、あれはたいしたものだよ。先づ明治大正を通じての傑作だらうね。

平孝　困つたね。

お絹　（木崎に）　ほんとに、そんなに好いものなの。

木崎　誰にでも聞いて御覽なさい。あれを褒めない者はありません。（一寸考へて）こりやあ何ですね。氣の毒だけども、ここの兄さん、諦めなけりやだめですね。つまり、あれですよ、時代の相違ですよ。藝者だつて、若い奴は時代の影響は受けずにゐますまいからね。

平孝　（お絹に氣兼ねしながら）どうもひどい事になつて來ましたな。

木崎　ここの兄さんだつて、意氣な人だけれど、もう何しろ四十代でせう。相手はまだ三十にならないんですからねえ。それに、あの小説が分かるやうな女ぢやあ先づ絶望ですね。

平孝　（もぢもぢしてゐたが、急に掛時計を見上げて）やあ。これは大變。師匠のところに寄合があるのをすつかり忘れてゐた。（お絹に）ぢやあ、どうも。旦那がお目覺めになりましたらどうぞ宜しく、いづれ又。

お絹　もう歸るの。まあ好いぢやないか。

平孝　うちの師匠は、ばかに時間のやかましい人ですから。

お絹　（その間に、手早く、白紙へ金を包み、平孝の膝の横へ置く）さう。ぢやあ又來て頂戴。

平孝　（白紙に目をつけ）どうもいけませんねえ。（と言ひながら、直ぐ金包を押し戴く）でも、折角だから頂戴して參ります。ぢやあ、旦那へ宜しう。先生、御免。（と逃げるやうに出て行く）

お絹　（笑つて）平孝の奴、びつくりして歸つて行つてしまつた。（木崎に）お前さんがあんまり遠慮なしに物を言ふもんだから、どうして好いか分からなくなつちまつたんだよ。

木崎　太鼓持なんて、やつぱり時代おくれですよ。兄さんも、あんなものを相手にしてゐちや、とてもだめですね。

お絹　でも、兄さんは弱い人だから、お供がなけりや、どこへも行けないんだよ。

木崎　だから、時代おくれだつて云ふんだ。とても村岡さんの敵ぢやありませんね。

お絹　でも、兄さんは一度思ひ詰めたら、中々諦める人ぢやないんだよ。それに、藝者なんてものは、やつぱりお金次第だからね。まあ、やるだけやつて見る事さ。

木崎　（默つてゐる）

お絹　(掛時計を見上げて)　どれ、あたしもステエションまで行つて來ようか。木崎さん、あなたも研究所へ行くんでせう。

木崎　けふは何だか行きたくないからやめます。

お絹　さう怠けちやだめよ。この頃はちつとも勉強しないぢやないの。好いから行らつしやい。

木崎　けふはどうしても厭です。

お絹　でも、けふは家もごたごたするだらうと思ふし――

木崎　ですから、あなたの歸らない内に歸れば好いでせう。

お絹　きつと、さうして頂戴よ。妹の手前もあるしするからね。

木崎　大丈夫ですよ。

お絹　ちやあ、出かけるわ。(奥へ向いて呼ぶ)　新造、新造。

(「へえい」といふ返事が聞える。直ぐ奥の障子を明けて、小僧が出て來る。)

お絹　お前、氣の毒だけれど、あたしと一緒にステエションまで行つておくれな。

新造　へい。

お絹　それから、お花に肩掛を持つて來させておくれ。

新造　へい。(奥へはひる)

木崎　車は入らないんですか。

お絹　電車で澤山。歸りはタキシがあるし。近いんだもの。

木崎　東京驛ですか。

お絹　ええ。

(お花、スカアフを持つて來る。)

お絹　坊やを頼んだよ。お土産を買つて來てやるから。

お花　はい。

お絹　旦那がお起きになつたら、唯ちよつと出かけたと言つとけば好いよ。（木崎に）お前さんもなんにも言はずに置いといて下さいよ。

木崎　ええ。

（小僧、鳥打帽子を冠つて出て來る。）

お絹　（立ち上りながら、お花に）ぢやあ、あとを頼むよ。坊やを離れちやいけないよ。

お花　畏りました。

お絹　（木崎に）濟まないけど、ほんとにけふは早く歸つて頂戴よ。

木崎　大丈夫。歸りますよ。安心してゐらつしやいよ。

お絹　（小僧に）ぢやあ、新造、お出で。

（お絹、新造を連れて、格子戶から出て行く。お花、直ぐ立つて、奧へ行かうとする。）

木崎　お花さん、お花さん。

お花　（畏つて）何でございます。

木崎　君、僕の手紙見てくれた。

お花　存じません。（と言ひながら、どんどん奧へはひつてしまふ）

木崎　（苦笑して）おや、おや。

（仁兵衞、二階から降りて來る。醉が少しさめてゐる。）

仁兵衞　やあ。木崎君さつきは失敬しました。お絹はどこかへ行きましたか。

木崎　（躊躇して）なんだか、用があるとか言つて、新造君を連れて出て行きましたよ。

仁兵衞　ああ、さうですか。おやあ、商賣用で出かけたんでせう。（苦笑して）どうも僕は家の事はちつとも分らないんだから。

木崎　でも、お絹さんが、しつかりしてるからよござんすよ。

仁兵衞　何もかも任せつ切りで濟まないとは思つてるんですがね。僕はもうこんな體になつてしまつたんだし、却つてなまじつか手を出さない方が好いと思つてるんですよ。木崎君まあ精々お絹を慰めてやつてくれ給へ。

木崎　（躊躇しながら）ええ、慰めるなんて事は出來ないかも知れないけれど、まあ暢氣な事を言つて笑はす位なことはね。

仁兵衞　いや、どうして。お絹は眞面目に君を賴りにしてるんですから、どうか、まあ、末長くつきあつて下さいよ。

木崎　それは僕の方から望むことです。

仁兵衞　（立ち上がつて）ぢやあ、失敬だが、僕又ちよいと出かけますから。まあ、ゆつくり遊んでゐて下さい。

木崎　（或意味をもつて）又出かけるんですか。

仁兵衞　人間も、もう、かうなつちやあ、おしまひですよ。

木崎　そんな事があるもんですか。

仁兵衞　男のある女の尻を追ひ廻すなんて、男子の恥辱ですね。

木崎　そんな事があるもんですか。男があつたつて構はないぢやありませんか。戰かつて勝つんですね。

仁兵衞　（又坐る）でも、相手が若いんですから

ね。

木崎　若いから、必ずしも勝つとは限らないでせう。勝負は眞情のあるなしですよ。

仁兵衛　ほんとに、さう思ひますか。

木崎　ほんとにさう思ひます。

仁兵衛　有難う。それを聞いて勇氣が出て來ました。ぢやあ、失敬して行つて來ます。（奥の方を向いて）お花、お花。

（「はい」といふ聲がする、お花、奥から出て來る。）

仁兵衛　仁太郎はどうした。

お花　あちらで遊んでゐらつしやいます。

仁兵衛　ちよいと連れといで。

お花　はい。（奥へはひる）

木崎　仁太郎さんは、ほんとにおとなしい子ですねえ。いつも、ゐるんだかゐないんだか分かりませんねえ。

仁兵衛　あの子も可哀さうですよ。母親がゐなくなつてから、なんだか急に沈んだ子になつてしまひましてねえ。

（お花、仁太郎を連れて出て來る。）

仁兵衛　（仁太郎を自分の側へ引き寄せて）どうした坊主。何をしてゐた。

仁太郎　お花と繪をかいてゐた。

仁兵衛　何かほしいものはないか。

仁太郎　鉛筆と帳面ほしいの。

仁兵衛　さうか。それはお安い御用だ。（財布を出して、金をお花に渡す）お花、これで買つてやつてくれ。なりたけ紙の好い奴を買つてやれよ。

お花　はい。

仁太郎　お花、買ひに行かうよ。
お花　はい。お父様がお出かけになつたら、直ぐ
　買ひに參ります。
仁太郎　お父ちやん、お出かけするの。
仁兵衛　ああ、直ぐ歸つて來るからね。おとなし
　くお花と遊んでゐるんだよ。
仁太郎　ああ。
仁兵衛　(思ひ出したやうに、木崎に向つて)ああ、さ
　う言へば、君、こなひだ何とかいふ本が欲しいと
　言つてゐましたね。
木崎　ドガでせう。あれは高いから諦めちまひま
　した。
仁兵衛　五十圓だとか言つてゐましたね。
木崎　ええ。
仁兵衛　(紙入から金を出して、木崎の前へ出す)ぢや
　あ、失敬だけど、僕が買つて上げませう。
木崎　だけど、それは。
仁兵衛　まあ、僕の志だから、取つて置いて下さ
　い。
木崎　さうですか。ぢやあ、まあ、一時拜借して
　置きます。(金を懷へ入れる)どうも有難うござい
　ました。
仁兵衛　(お花に)ぢやあ、行つて來るからね。仁
　太郎を賴むよ。
お花　はい。行つてらつしやいまし。
仁太郎　行つてらつちやい。
木崎　行つてらつしやい。
　　(仁兵衛、出て行く。木崎、ぢつとお花の顏を
　見る。お花、顏をそむける。)
お花　さあ、坊ちやん、帳面買ひに行つて參りま

せう。

仁太郎　ああ。

（お花、急いで仁太郎に下駄をはかせ、その手を引いて、外へ出て行つてしまふ。木崎、笑ひながら、元ゐたところへ戻り、胡坐をかく。懐から寫生帳を出して、空想で何か繪をかく。稍長き間。）

（女の笑ひ聲が聞える。お絹とおしんが、小僧に荷物を持たせて、歸つて來る。二人は夢中で話しながらはひつて來るので、はじめ木崎のゐるのに氣がつかない。上へ上がつて、はじめてそれに氣がつく。）

お絹　（立つた儘、稍鋭く）まあ、木崎さん。あなた、まだゐたの。

（木崎、平氣な顔をして、二人を見上げる。お絹、木崎を睨む。おしんの顔をぢつと見る。おしん、姉の後に立つた儘、ぢつと木崎の顔を見る。）

――幕

第二幕

第一幕に同じ舞臺。第一幕より五日を經たる朝の十一時頃。

おしんと木崎が、部屋の掃除をしてゐる。おしんは手拭を姉様冠りにして、赤い襷をかけてゐる。木崎は鳥打帽を冠つて、袴の股立をとつてゐる。おしんがはたきをかけて歩くあとを木崎が箒ではいて廻る。

おしん　だめねえ、木崎さん。そんなにごみをあつちへ集めたり、こつちへ集めたりしちやあ。ごみは一つところへ集めるものよ。

木崎　さうですか。（不器用に掃く）

しん　だめ、だめ。それぢやあ折角掃いたごみが又散らかつちまふわ。ちよいと貸して御覽なさい。（はたきを持つた儘、木崎の箒をとつて掃く）どう、うまいでせう。

木崎　成程ね！

おしん　感心してるぢやだめよ。さあ、やつて御覽なさい。男だつて掃除ぐらゐ稽古しとくものよ。（箒を出す）

木崎　いや、よしませう。とてもだめです。僕は今度ははたきの係りになりませう。

（と、おしんの手からはたきを取る。その時、一寸おしんの手を握る。）

おしん　おや。どこでそんな事習つたの。

木崎　（慙ともぢもぢして）別に習つたといふわけぢやないけど……その位の事は。

おしん　ひとりで考へつくと言ふの。嘘、嘘、慣れてるわ。可愛らしい顔をしてゐても、なかなか隅へ置けないのね。

木崎　（頭を抱へて）困るなあ、僕、そんなに言はれちやあ。

おしん　姉さんも、きつとその手でやられたんだよ。

木崎　僕、僕、姉さんと何でもありやしませんよ。

おしん　だめ、だめ、ちやんと知つてるわ。おう恐い。

木崎　何も恐い事なんかありやしません。僕は何の束縛も受けてやしません。あなたの方がよつぽど束縛のある體だ。

おしん　（むきになる）なに。なんの束縛があつて。

木崎　御亭主があるぢやありませんか。

木崎　ええ、よござんすとも。
（おしん、いきなり木崎の頸に手を廻す。木崎、わざと知らん顔をして、ぢつと立つてゐる。おしん、力任せに、木崎の頸をしめる。）
木崎　（頓狂に）あ、痛い、痛い。
（途端に、奥から、お絹が出て來る。お絹は病人らしく、髮をぐるぐる卷にして、兩方のこめかみに膏藥を張つてゐる。三人、暫く無言。おしん、木崎を離れる。）
お絹　（稍暫して）おしんちやん。
おしん　（平氣で）え。
お絹　何をしてゐたの。
おしん　（平氣で）木崎さんが、あんまり憎らしい事を言ふから、ひどい目に會はしてやつたの。
お絹　（間を置いて）ばかに仲が好いのね。
おしん　（直ぐ）仲が惡いのよ。

おしん　亭主があつたつて、別れてしまへば、自由な體だわ。
木崎　別れようたつて、別れられないぢやありませんか。
おしん　別れてよ。きつと別れるわ。もう別れてるんだわ。
木崎　でも、籍が向うにある間は、まだあなたの體ぢやありませんよ。
おしん　籍だつて、今に抜いて貰ふわ。いやなこつた。あんな遊冶郎なんか。
木崎　なんて、いばつたつて、縛られてゐるんですよ。好い氣味だ。
おしん　まあ、憎らしい。
木崎　憎らしけりやあ、どうでもして御覽なさい。
おしん　きつと、どうしてもよくつて。

お絹　（嘲笑する）ふゝん。

おしん　おや、姉さんでもないのね。

お絹　まあ、好いわ（木崎に）木崎さん。済まないけど、暫く家へ来ないで下さいな。

木崎　さうですか。

お絹　あなたはあんまり人づきが好過ぎるわ。もう少し人づきが悪くなつたら又入らつしやい。

木崎　（哀願するやうに）お絹さん。お願ひだから、そんな変な事を言はないで。

お絹　まあ、なんでも好いから帰つて下さい。

木崎　（素直に）ぢやあ、けふは帰りますけど。

お絹　もう来ちやいけなくつてよ。おしんちやんのゐる間に、又来たら承知しないから。

おしん　まあ、姉さん、そんなに言はなくつたつて。木崎さんに悪いとこはないんだわ。

お絹　まあ、あなたは黙つてゐらつしやい。仲が悪い筈だつたわね。

おしん　（ぶつけるやうに）はい、はい。

お絹　（木崎の前へ進む）さあ、帰つて頂戴。直ぐ帰つて頂戴。

木崎　今帰りますよ。

お絹　（木崎の肩を押す）　さあ、お帰り。お帰りつたら。

（木崎、もう何も言はずに、逃げるやうに外へ出てしまふ。）

おしん　（暫くして）姉さん、随分邪慳にするのねえ。

お絹　（いつの間にか顔が和らいでゐる）あれで丁度好いのよ。お坊ちやんでしやうがありやしない。

おしん　でも、可愛らしい人だわ。今に豪い人に

なりさうだわ。前の小島さんなぞとは比べものにならなくてよ。もつと大事にしておやりなさいよ。

お絹　だけど、おしんちやん、あんまり若い者にからかつちやあだめだよ。直ぐ本氣にするから。

おしん　大丈夫よ。あたしぢやありませんか。

お絹　お前さんの方は大丈夫でも、向うがああいふ坊ちやんだからね。

おしん　安心してらつしやいよ。あたしだつて、まだ自分の體になり切つたといふわけぢやなしね。

お絹　だからさ。あたしもそれを心配してるのさ。ほんとに、お前さん、しつかりしてゐておくれよ。

おしん　姉さんも年をとつたわね、大丈夫よ。

（格子戸を明けて、芝居茶屋の男の延吉がはひつて來る。）

延吉　へい、こんちは。（おしんを見て）おや。どうも、これはお珍しい。（上がり框に頭をすりつけて）暫くでございます。どうもすつかりお變りになりましたな。

おしん　延さん。達者で結構だね。

延吉　へい。お蔭樣で。相變らず、こちらの御厄介にばかしなつてをります。（お絹を見て）お加減が惡いさうで。どうも、ちつとも存じませんでしてね。あんまりお見えにならないから、どうなすつたかと思つてゐましたが、電話で伺ふのもなんだと存じましてね。

お絹　誰に聞いて。

延吉　御病氣の事ですか。いいえ、高松先生のとこ

の男衆が、きのふ電車ん中で安藤さんにお目にかかつたんださうでして。

お絹　ああ、さう。

延吉　先生も、ふだん丈夫な方だけに心配なんだなんてね。それで、あつしにけふ是非様子を伺つて來てくれつてね。

お絹　なあに、なんでもないんだよ。少し頭痛がするだけさ。かうやつて起きてる位だもの。

延吉　へえ。それで、實は今あつしも安心したわけですが、その位なら、お芝居へ入らつしやいな。却つて、お氣が晴れますよ。

お絹　あたしもさう思つてるんだけど、おしんちやんが歸つて來たりして、何だかごたごたしてるものだからね。

延吉　ですから、お二人で入らつしやいましな。

お絹　それが、まださう行かないんだよ。

延吉　（分からないで）然樣ですか。

（間。）

おしん　延さん、先生は相變らず。

延吉　もう、いつも、あなたのお噂ばかり。あんな方を田舍で埋もらせるのは惜しいなんてね。始終さう言つてゐらつしやいますよ。

おしん　うまく言つてるよ。相變らず、小林の奥さんなんだらう。

延吉　（態と目を丸くして）ど、ど、どう致しまして。もう、この頃は、奥さんなんぞ相手になさりやあしません。奥さんの方でも、もうこの頃はぷつつりです。ねえ、お絹さん。

お絹　（おしんに）そりやあ、さうよ。

おしん　へえ、さう。やつと分かつたのねえ。

先生も人が好いからねえ。

延吉　ですから、どうぞお二人で入らして下さいまし。どんなに先生がお喜びになるか分かりません。

おしん　さう。

延吉　（懐から手帳を出して）如何です。明後日は。明後日なら、東のうづらの好いとこがございますが。

お絹　まあ、あとで相談して、電話をかけるから。

延吉　相談なぞなさるにや及ばないぢやありませんか。（帳面へ何か書く）明後日一間とつて置きますよ。

お絹　この人に會つちやあ、とてもかなはないわ。

（手早く金を紙に包む）

延吉　（立ち上がる）では、御免を。これですつかり安心いたしました。では、明後日。序幕が好いんですから、どうぞお早く。お待ち申してをります。（お絹、默つて金包を出す）どうも、恐れ入りますねえ。ちよいと上がつたばかりなのに。（金包を戴いて直ぐ懐中する）御遠慮なしに頂いて置きます。では、御免を。

（延吉が格子戸を明けると、格子戸の外に、おしんの夫駒澤卓爾が洋服姿で立つてゐる。延吉少しあとへ下がる。駒澤、はひる。延吉、お絹達の方を見る。お絹もおしんも默つてゐる。延吉、そこそこに出て行く。）

駒澤　（お絹に挨拶する）姉さん。暫くでした。

（おしん、直ぐ立つて、奥へ行かうとする。お絹、引き留める。おしん、又坐る。不服で顔を上げてゐる。）

お絹　（駒澤に）まあ、お上がんなさい。

（駒澤、黙つて靴をぬぎ、上へ上がると、おしんの顔は見ないで、お絹の前に、いきなりひれ伏す）

駒澤　姉さん、全く僕の不德の致すところです。どうか許して下さい。

お絹　いつ、こつちへ入らしたの。

駒澤　濟みません。けさ參りました。（少し顔を上げる）

お絹　そんなにしてゐらしちやあ、お話が出來ませんわ。

駒澤　（普通の姿勢になる）おしんに、なんにも惡いところはありません。みんな僕が惡いんです。

お絹　いや、いや。膝を崩さなくちや。洋服がたまりませんわ。

駒澤　（素直に、直ぐ膝を崩す）崩しました。

お絹　お詫なら、あたしの方でしなくちやあなりませんわ。無斷で家を飛びだしたりなどして、たとひ何であらうと、それはおしんが惡うございます。

駒澤　いいえ。それも僕が惡いんです。僕は何一言も申すところはありません。

お絹　お父さんはなんて言つてらしやるの。

駒澤　めちやめちやに叱られました。

お絹　お母さんは。

駒澤　お袋にも怒られました。

お絹　ぢやあ、おしんの罪は勘辨して下さるんですか。

駒澤　勘辨するも、しないも、僕はもう一遍どうしても歸つて貰ひたいと思つてやつて來たんです。

お絹　でも、あなたは大層お氣に入りの方があるんだつて言ふぢやありませんか。
駒澤　それはありました。併し、僕はそれが爲におしんを捨てようと思つた事は唯の一度もありません。
お絹　でも、そりやあ、あなた勝手過ぎますわ。
駒澤　（狼狽して）ですから、ですから、それも親父に散散叱られました。ですから、もうそれとも絶縁しました。もう、これから、全く新しい生活にはひります。僕は始めて目が覺めました。
お絹　（おしんに）おしんちやん、どう。
おしん　（默つて笑つてゐる）
お絹　お前さんの考へ一つよ。
おしん　だめよ。うちの人は。口がうまいんだから。
駒澤　（狼狽して）そ、そ、そんな、今度は本當に悔悟したんだ。
お絹　男がそんなに安つぽく悔悟するもんぢやなくつてよ。
駒澤　（いきなり、おしんの前にひれ伏す）あやまる。あやまる。本當にあやまる。もう大丈夫だから安心してくれ給へ、もうどんな事があつても大丈夫だ。親父もお袋もどんなに君の歸るのを待つてゐるか分かりやしない。どうか兩親に免じて、許してくれ給へ。
おしん　ほんとにお父さんやお母さんには濟まないんだけれど、あんまりあなたがひどいもんだから。
駒澤　（又ひれ伏して）だから、もうその事は言はないでくれ給へ。僕が惡いんだから。

お絹　（おしんに）おしんちやん、どう。男の方がこんなにあやまつてゐるんだから。それにお父さんやお母さんに對してもね。

おしん　（急に）だめ、だめ。いつもそれで遣られて來たんだから。もう、お父さんやお母さんに濟まない位は構はないわ。あたし、どうしても歸るのは厭。

駒澤　（おしんの顏をぢつと見る）こんなにあやまつても許してくれないの。

おしん　厭です。厭です。

駒澤　（少し強くなる）ぢやあ、僕もここは動かない。君が歸つてくれるまでは死んでも動かないから。

おしん　（立ち上がる）ぢやあ、あたしも出て行くばかりです。あなたは自分の家からあたしを追ひ出しただけでは滿足しないで、あたしの家にもゐられないやうにしようと言ふんですね。

駒澤　（又弱くなつて）ね、君、お願ひだから歸つてくれ給へ。これからは、一擧一動君の言ふ通りにするから。

お絹　（おしんに）おしんちやん、歸つて上げたら、どう。

おしん　（立つた儘）厭、厭。

駒澤　それぢやあ、君は僕が厭になつたんだね。

おしん　ええ、厭になりました。

お絹　（おしんに）まあ、お前、そんな。

おしん　だつて、さうなんですもの。爲方がないわ。

駒澤　いや、そんな筈はない。それは自分で自分を欺いてゐるんだ。愛はあるんだ。僕に愛はあ

ゐるんだ。唯、僕の人格を信用しないんだ。誤解さへとけば、何でもないんだ。

（おしん、默つて、外へ出て行かうとする。）

お絹　（少し驚いて）おしんちやん、何處へ行くのよ。

おしん　だつて、あたし、こんな所にはゐられないわ。

お絹　ゐられないたつて、ここはお前さんの家ぢやないよ。

おしん　いいえ。もう、あたしの家ぢやないわ。一度お嫁に行つた以上は、もうあたしの家ぢやないんだわ。

お絹　そんなら、名古屋へ歸れば好いぢやないか。

おしん　いいえ、あすこも、あたしの出て來た家だから、もうあたしの家ぢやないわ。

お絹　ぢやあ、どうしようつて言ふの。

おしん　もう、あたしは何處にも家はないんだわ。

（下へ降りて下駄をはく）

お絹　どうしたつて言ふのよ。

おしん　然樣なら。（どんどん出て行つてしまふ）

（お絹、暫く呆然と後を見送る。駒澤は、その方を見ないで、ぢつとしてゐる。やがて、お絹、駒澤の方を向く。）

お絹　駒澤さん。

駒澤　はい。

お絹　あなたも意氣地なしねえ。

駒澤　（驚いて）え。

お絹　自分の女房に逃げられるなんて。少し、しつかりなさいよ。

駒澤　でも、僕は弱いんですから。

お絹　弱いつたつて、女房の外に二人も三人も女をこしらへてゐるんでせう。それだのに、女房一人つかまへてゐる事が出來ないなんて、隨分な意氣地なしだわ。

駒澤　でも、それは。

お絹　もう、あたしもこの事には口は利きませんから、あなたに腕があるなら、首根つこへ繩をつけてでも、おしんを連れてお歸りなさい。あなたの責任だわ。

駒澤　そりやあ、僕の責任です。

お絹　その責任のある人が、今の態たらくは何。男の癖に、ぴよこぴよこあやまつたりなんかしてさ。その揚句に、たうとう逃げられちまつたぢやないの。

駒澤　心當りがあるなら敎へて下さい。僕、どこへでも探しに行きますから。

お絹　心當りなんかありやしなくつてよ。

駒澤　あの、高松とかいふ新派の役者のとこへ行つたんぢやないでせうか。

お絹　そんな事が分かるもんですか。どこへでも自分で探しに行つて、自分で捕まへて入らつしやいよ。その位の事が出來なきやあ、人の亭主になる資格はないわ。あたしや、もう知らなくつてよ。莫迦莫迦しい。（どんどん奥へはひつてしまふ）

（駒澤、泣き出しさうな顔になる。途端に格子戸が明いて、主人の仁兵衛が歸つて來る。仁兵衛は暗い顔をしてゐる。駒澤を見て、何か言ひさうにしたが、又默つてしまつて、逃げるやうに二階へ上がらうとする。）

駒澤　（泣き聲を出して）兄さん。

仁兵衛　（これも聲を絞つて）　僕には分からない。僕には分からない。（と言ひながら、二階へ上がつてしまふ）

（お花、仁太郎を連れて、外から歸つて來る。仁太郎、飴屋の賣る旗を持つてゐる。）

――幕

第三幕

第二幕に同じ舞臺。第二幕より五日を經たる夜の七時頃。

主人仁兵衛とその子仁太郎が、寂しく食卓を圍んでゐる。仁兵衛は手酌で酒を飲んでゐる。仁太郎は飯を食べてゐる。お花が給仕してゐる。

仁兵衛　お花、この頃、木崎さんがちつとも來ないやうだな。

お花　ええ、ちつともお見えになりません。

仁兵衛　どうしたんだらう。體でも惡いのかしら。

お花　さあ、どうでございませうか。

（間。仁兵衛、酒を飲む。仁太郎、飯を代へる。）

仁兵衛　（仁太郎に）好い子だ。よく喰べるな。

仁太郎　お父ちやん。

仁兵衛　なんだ。

仁太郎　これから、毎晩一緒に御飯をたべる。

仁兵衛　ああ。これから、毎晩一緒に喰べてやる。

仁太郎　一緒に寢てくれる。

仁兵衛　ああ。寢てやるとも。

仁太郎　もう、よそへお泊りしない。

仁兵衛　ああ、しないとも、しないとも。

仁太郎　名古屋の伯母ちやん、もう歸つたの。

仁兵衛　ああ、もう駒澤の伯父さんとこへ歸つて

しまつたんだ。

仁太郎　うちの伯母ちやんは。

仁兵衛　（一寸詰まつて）うちの伯母ちやんは、お父ちやんの御用で、田舍へ行つたんだ。

仁太郎　いつ歸るの。

仁兵衛　あさつて。あゝ、あさつて歸つて來る。

仁太郎　僕、寂しいんだよ。お父ちやん、きつとあしたから、お出かけしないでね。

仁兵衛　大丈夫だ、大丈夫だ。

仁太郎　（お花の方へ茶碗を出して）お茶。

お花　はい。（茶を汲んでやる）

仁兵衛　（仁太郎に）お茶を飮んだら、お花と奧へ行つて、三十分ばかり遊んで、それから、寢るんだぞ。お父ちやん、直ぐあとから行つてやるから。

仁太郎　あゝ、きつとだよ。

仁兵衛　御飯をたべて直ぐ寢ると毒だからな。少し遊んでから寢るんだよ。

仁太郎　あゝ。お父ちやん。僕、繪うまいんだよ。今に木崎さん見たいな繪かきになるんだ。

仁兵衛　さうか。それは豪いな。（お花に）さあ。ここは好いから早く連れてつてやれ。

お花　はい。（仁太郎に）さあ、坊ちやん、參りませう。

仁太郎　（立つて）お父ちやん、きつと來てね。

仁兵衛　（仁太郎の手をとつて）あゝ。きつと行くよ。

（お花、仁太郎を連れて奧へはひる。）

（稍長き間。仁兵衛、酒を飮む。格子戸、靜に開く。相國不孝、はひつて來る。）

平孝　をさな子がひとり飯食ふ秋の暮か。これは、
どうも、何事でげす。
仁兵衛　（知らん顔で、手酌で酒を飲んでゐる）
平孝　（どんどん上がつて來る）旦那。（仁兵衛默つてゐる。聲を高くして）旦那。
仁兵衛　（煩さゝうに）何だな。
平孝　御立腹でげすか。これは恐れ入りましたな。（態と勢よく）さ、出かけませう。いけませんな。そんなにくすぶつちまつちやあ。
仁兵衛　（盃をやる）まあ、一杯やれ。
平孝　（盃を戴いて）へ、恐れ入ります。何は。お絹さんは。
仁兵衛　誰もゐない。
平孝　ぢやあ、なほのこつた。出かけませう。出かけませう。
仁兵衛　もう遊びはやめだ。
平孝　御冗談もんですぜ。飛んでもない。
仁兵衛　時勢にやあかなはねえ。もうおれなどの出る幕ぢやねえよ。
平孝　旦那、そんな事は言ひつこなしだ。高があんな文學藝者の一人や二人。まだまだ、旦那の意氣の分かるやうなのがゐますよ。
仁兵衛　だめだ。だめだ。もうおれなどの遊ぶ世界はねえ。
平孝　旦那、どうしたんです。あんな鼻つたらしの事が、そんなに氣になるんですか。
仁兵衛　あいつの事ばかりぢやねえ。おれはもうこの頃の藝者といふ藝者に呆れ返つたんだ。
平孝　旦那、そりやあ、ちと御量見が狹いといふもんでげすぜ。何も今日の藝者衆だつて、みん

ながみんな、さうだといふわけぢやありませんぜ。

仁兵衛　藝者も婦人雜誌を讀んで、西洋の活動寫眞役者に夢中になるやうぢやおしまひだ。

平孝　モンロオ・サルスベリかね。小冬さんは、ありやあ別ですよ。あんななあ珍物だ。さう澤山ゐやしませんよ。

仁兵衛　なあに、秋香だつて、小糸だつてさうだ。昔はお客の話が藝者に分からなかつたもんだが、今ぢやあ藝者の話が客に分からなくなつたんだ。ひでえ世の中よ。今に洋服を着て、オオトバイでお座敷へ來るやうになるだらう。恐ろしい。恐ろしい。

平孝　まあ、なんでも好いから參りませう。旦那は一體。惚れつぽいからいかねえのだ。小冬さん位の女なら、箒で掃く程ありますぜ。まあ、默つて、萬事あつしの方寸に任せて、來て御覽なさい。まん直しに、素敵滅法といふのをお目にかけますから。

仁兵衛　だめだ。だめだ。大體、もう手前などが時代おくれなんだ。よしにしねえ、よしにしねえ。

平孝　よしませんねえ。會稽の恥辱。昔の馬前に討死をしても、お連れ申しますねえ。

仁兵衛　うるせえな。どうしたつて、行きやあしねえんだから、物を言ふだけ損だ。早く歸りねえ。

平孝　歸りません。死んでも歸りません。

仁兵衛　（本當に怒つて）歸らねえか。

平孝　（直ぐ縮み上がつて）ほんとに、旦那・いけ

ねえんですか。

仁兵衛　だめだと言つたら、歸らねえか。（立ち上がりさうにする）

平孝　御免、御免。歸ります。（聲色まがひに）殿には殊の外のお怒り。御機嫌直るそれまでは、ぢつと蟄してゐるでござらう。やあ、テン、テン。（と、きまりの惡いのを隱して、出て行く。）

（間。仁兵衛、立て續けに又二三杯飲む。お花奥から銚子の新しいのを持つて來る。）

仁兵衛　寢たか。

お花　もうおやすみになりました。

仁兵衛　ぢやあ、こつちはもう好いから、坊の側についてゐてやつてくれ。

お花　はい。（奥へはひる）

（間。仁兵衛。飲み續ける。）

（支配人の安藤、格子戸からはひつて來る。）

仁兵衛　（直ぐ聲をかける）どうした。分かつたか。

安藤　（上がり框に腰をかけて）やつと分かりました。上野の鹽原に入らつしやいます。

仁兵衛　一人か。

安藤　お一人でございます。延公の話ぢやあ、高松さんと連絡があるやうな事を言つてますが、どうもあたしの見たところぢやあ、そんな風は見えません。

仁兵衛　で、お前會つたのか。

安藤　おしんさんにですか。ええ、お目にかかりました。

仁兵衛　おしんは、自分ぢやあどう言つてるんだ。

安藤　もう名古屋へも歸らなけりやあ、お家へも歸らないと仰しやるんです。

仁兵衛　で、どうしようつてんだ。

安藤　茶屋奉公をしてでも、自分の身は自分で立てると仰しやるんです。

仁兵衛　莫迦な。そんな事が出來るもんか。

安藤　あたしもそれを申して見たんですが、何しろ一徹な方ですから、どうしてもあたしの言ふ事などはお聞き入れにならないんです。

仁兵衛　困つたなあ。でお絹の方の行方は分かつたか。

安藤　これは直ぐ分かりました。高松さんのところにゐらつしやいました。

仁兵衛　こりやあ、別に變な事はないんだらう。

安藤　へえ。お絹さんの方は、別にどうつて事はないやうです。おしんさんの事も大層心配してゐらつしやいましてね。どうか在りかを探してくれつてさう言つてゐらつしやいました。

仁兵衛　お絹が高松さんのところにゐるやうなら、おしんと高松さんの間になんにもない事は確だな。

安藤　それは確でございます。

仁兵衛　（一寸考へて）おれには何が何だかちつとも分からないんだ。駒澤君が出て來たんで、おしんが家を出たなあ、まあ分るとして、お絹までが家を出るなんて。

安藤　然樣です。そのわけもお絹さんに伺つて見たんですが、唯笑つてゐらつしやるばかりで、なんとも仰しやらないんです。

仁兵衛　木崎君とどうかしたんぢやないか。

安藤　あたしも、先づそこいらだゝと思ふんですが、何しろあんな氣丈な方ですから、その位な事で、

まさか家出もなさるまいと思ふんですが。

仁兵衛　どうも分からないなあ。

安藤　全く分かりませんなあ。

仁兵衛　（沈んで）いや、何もかもおれが悪いんだ。一家の主人が、家を外にしてるからこんな事になるんだ。

安藤　でも、旦那の事は、お絹さんだつて、よく承知をしてゐらつしやるんですから。

仁兵衛　おれが意氣地がないんだ。女房に死なれて、酒を飲み歩く。飲み歩いちやあ、又女に嫌はれる。（捨てるやうに）へ、よく出來てやがらあ。

安藤　（立ち上がり）では、もう今夜は別に御用はございませんか。

仁兵衛　さう。何を言ふにも、今夜の事にやあ、しやうがあるまい。どうも御苦勞だつた。

安藤　では、また明日。明朝は早く伺ひます。

仁兵衛　ぢやあ、さうしてくれ。もう上さんはすつかり好いか。

安藤　お蔭樣ですつかり好くなりました。ぢやあ、おやすみなさいまし。

仁兵衛　おやすみ。

（安藤、出て行く。間。仁兵衛、又酒を飲む。）

仁兵衛　（暫くして）お花、お花。

（「はい」といふ聲がして、お花が出て來る。）

仁兵衛　今夜は早く戶をおしめ。もう誰も來ないから。さうして、早くおやすみ。

お花　はい。（土間へ降りて、格子戶をしめに行く。）

（お花が表の戶を締め終つて、上へ上がらうとすると、戶を輕く叩く音がする。）

仁兵衛　また誰か來たのか。明けずに聞いて御覧。
お花　（戸の側へ寄つて）どなたでございます。
（表で男の何か言ふ聲がする）駒澤の旦那樣でございますか。
仁兵衛　さうか。おやあ、明けてお上げ。
（お花、戸を明ける。駒澤、はひつて來る。お花、上へ上がつて、座蒲團を一つ前へ出して、奥へはひる。）
仁兵衛　さあ、上がり給へ。
駒澤　失禮します。（上へ上がる）
仁兵衛　（直ぐ杯を出す）さあ、一杯どうです。
駒澤　有難う。（杯を受けて、直ぐ飲む）
仁兵衛　（駒澤の顔を見て）どうしました。
駒澤　分かりません。
仁兵衛　おしんのゐどこですか。分かりましたよ。
駒澤　分かりましたか。
仁兵衛　分りました。併し、もう、とても名古屋へは歸りさうもありません。
駒澤　歸りませんか。
仁兵衛　歸りませんね。
（稍長き間。）
仁兵衛　君ばかりぢやない。僕もたうとう捨てられましたよ。
駒澤　あなたが。誰に。
仁兵衛　（或意味を含めて）きやうだい二人に。
駒澤　さう言へば、姉さんも歸らないさうですね。
仁兵衛　爲方がない。捨てられた男二人で飲みませうよ。
駒澤　男はだめですね。
仁兵衛　女にやあ敵（かな）ひませんよ。

駒澤　爲方がありません。飲みませう。（自分の前にある杯へ、自分で酒を注いで飲む）

仁兵衛　（立つて、湯呑を一つ持つて來る）酒のこつてす。酒のこつてす。（湯呑へ自分で酒を注ぎ、一息に一杯飲んで、それを駒澤にさす）

駒澤　これですか。

仁兵衛　驚く事はないでせう。

駒澤　飲みます。（仁兵衛に酌をして貰ふ）

仁兵衛　煙草一服といふ事があります。まあ、酒を飲んで、世の中を考へ直すんですね。

駒澤　もう、どうしても諦めなきやならないでせうか。

仁兵衛　お諦めなさい。お諦めなさい。あつしももうあの女の事は諦めました。

駒澤　飲みませう、大に飲みませう。

仁兵衛　さうだ、さうだ。さう來なくちや、男ぢやない。

（二人で湯呑をやりとりして飲む。間。木崎がぼんやり、はひつて來る。）

仁兵衛　（それに目をつけて）ええ、びつくりした。木崎君ぢやないか。

木崎　ええ。（と言ひながら、上へ上がる）

仁兵衛　木崎君。（駒澤を指して）これはおしんの亭主の駒澤さんだ。ぢやあない。おしんの元の亭主の駒澤さん。

木崎　（駒澤に）お名前は承つてゐます、僕は木崎です。

駒澤　僕もお名前はお絹さんから承つてゐます。

仁兵衛　どうした。木崎君。珍しいぢやないか。

木崎　御不沙汰をして濟みません。

仁兵衞　（湯呑を出す）まあ、一杯やり給へ。

木崎　僕は、酒は。

仁兵衞　まあ、おつきあひにやるさ。君も男の一人だ。

木崎　男は男ですが、極めて意氣地のない男です。

仁兵衞　そいやあ僕達だつて同じ事だ。今も二人でそれを言つてゐたのだ。女に捨てられた男二人だ。

木崎　僕も捨てられました。

仁兵衞　誰に、誰に捨てられた。

木崎　それは言へません。

仁兵衞　お絹にかい。（高く笑ふ）

木崎　さうぢやありません。

仁兵衞　何しろ、それは面白い。捨てられた男が三人集まつたんだ。飲み給へ、飲み給へ。

木崎　飲みませうか。（湯呑に手をかける）

駒澤　（笑つて）お飲みなさい。

仁兵衞　は、は、面白い、面白い。

駒澤　（木崎に）あなたなどは、いづれ未婚の婦人に捨てられたんだらうが、僕などは自分の女房に捨てられたんだからひどいや。

仁兵衞　僕はきやうだいに捨てられたんだ。きやうだい二人によ。

木崎　僕だつて。（と言ひかけて、湯呑からぐつと酒を飲む）

仁兵衞　いよう、その意氣、その意氣。

駒澤　これから、みんなで仲よくして、男の國を作りませうよ。

仁兵衞　さうだ。さうだ。男の國。男の國。男ならでは夜の明けぬ國さ。（唄ふやうに）男なら

木崎　そりやあ、行つた事は行きましたけれど、直ぐ追ひ出されつちまつたんです。

お絹　何を言つてるんだい。さあ、歸れ。ひとの家をめちやめちやにしやあがつて。（手を掴んで土間へ引きずりおろす）さあ、歸れ、歸らないか。

（木崎の顔を平手でめちやめちやに打つ）

木崎　御免なさい。御免なさい。

（お絹、木崎を踏んだり蹴つたりする。仁兵衞と駒澤、一度に酒がさめた樣子で、呆然として ゐる。奥で仁太郎が泣き出す。お絹、なほ烈しく木崎を打つ。）

――幕

――では、と來たね。

木崎　贊成ですね。さうして、世界の女を、みんな征服してやりませう。

駒澤　さうだ。さうだ。征服だ。勝利だ。

仁兵衞　男の國ばんざあい、か。

木崎　は、痛快。痛快。

（突然、明け放しになつてゐる格子戸から、お絹がはひつて來る。これも酒に醉つてゐる。）

お絹　（木崎に目をつけると、いきなり上へ上がつて、木崎の肩を掴む）やい。又やつて來やがつたな。お前さんだらう。おしんちやんをおびき出したなあ。

木崎　知りませんよ。僕は知りませんよ。

お絹　だめだ。ちやんと、けふ鹽原へ行つて、調べて來たんだ。

許嫁

第一

人物

第一の教師
第二の教師
學生A
學生B
その他の學生
小使

某大學の文科の教室。
正面奧に教壇——机、椅子、黒板。その左右に硝子窓。窓の外に青葉。初夏の日光。右手に大きな戸口。教壇に並行して、學生用の机とベンチ、三列にならぶ。

第一の教師、教壇に立つて講義をしてゐる。二十人程の學生、不規律に、ベンチのそこここに腰かけてゐる——まるで明いてゐるベンチがある。さうかと思ふと、一つベンチに目白押しに大勢腰かけてゐる。

學生の多數は筆記してゐるが、中には筆記をせずに、唯ぼんやり教師の顏を見てゐるのがある。また、講義とは關係のなささうな書物を讀んでゐるのがある。居眠りをしてゐるのがある。講義を聞かずに隣同志で話してゐるのがある。

學生Aと學生Bは、一番うしろのベンチ——見物席に一番近いベンチ——に列んで腰をかけてゐる。Bは筆記してゐる。Aは机の上に兩肱をついて、手の上に顎をのせてゐる。

第一の教師　（鐵縁のロイド眼鏡をかけ。頭を一分刈

にした、肩幅の廣い、丈の低い、三十一二の男である。極めて早口に、全く感情なしにしやべる）……

ええ、次ぎは變態恐怖の話でありますが、一體この變態恐怖なるものは、その强度なること、抑制の不可能なること、不合理なることなどが、その特色であります。ボリス・サイヂスに依ると、一體恐怖なるものは、あらゆる精神病理的疾患の基礎をなすものであります。そこで、先づ分類から先きにいたすことにしますが、先づ第一が一般恐怖で――これを Panophobia と申します。（黑板へ白墨で術語を書く） 即ち、何等特別なる事物について恐れるのではありません。無意味に狐疑憂慮する狀態です。フロイドに依ると、あらゆるフォビア――これは後で言ふ特殊恐怖のことですが――あらゆるフォビアは、先づパノフォビアとして始まるので、それが特別なる事物に關係して來るのは、第二階梯であるのです。フロイドは更にかう說いてゐます。このパノフォビアなるものは、恐怖の表現ではなくて、實は性的禁遏即ち Sexual Prohibition の表現だと言ふのです。さて、第二が特殊恐怖、即ち今申した Phobia でありまして、（黑板に書く）これは或特別な事物に依つて起される誇張せられた恐怖を言ふのであります。元來恐怖は行爲の偉大なる抑止者でありますから、フォビアは特殊な抑止者だと言ふことが出來ます。ここで、プリンスの說を一寸述べたいのでありますが、それはあとにいたします。そこで、この特殊恐怖なるものは、凡そ十八種に分かれてをります。Aが Aerophobia で、（黑板

に書く）これは高いところを恐れるのであります。Bが Agoraphobia で、（黒板に書く）これは廣いところを恐れるのであります。Cが Algophobia で、（黒板に書く）これは苦痛を恐れるのであります。Dが Anthropophobia で、（黒板に書く）これは男或は或特別な男を恐れるのであります。Eが Astraphobia で、（黒板に書く）これは雷、或は他の氣象的現象を恐れるのであります。Fが Claustrophobia で、（黒板に書く）これは狭い場所を恐れるのです。Bのアゴラフオビアの丁度反對なのです。Gが Gynophobia で、（黒板に書く）これは女或は特別な女を恐れるのであります。Hが Hematophobia で、（黒板に書く）これは血を恐れるのであります。Iが Mysophobia で、（黒板に書く）これは汚れを恐れるのであります。Jが Phobophobia で、（黒板に書く）これは恐怖の恐怖であります。即ち、恐怖を恐怖するのであります……（終業の鐘鳴る）ええと、まだ大分あるのですが、食事時間ですから、これでやめます。（ハンケチで手を拭きながら）プリンスの說も來週紹介します。（參考書籍とノオトを風呂敷にくるんで、教壇を降り右手の戸口から出て行く）

（學生達、ばらばらに立つ。煙草に火をつけながら出て行くのがある。欠伸をしながら出て行くのがある。ノオトで机を一つ一つ叩きながら出て行くのがある。がやがやざわざわしながら、やがて、みんな出て行つてしまふ。）

（學生Aと學生Bだけ殘る。）

（B、立ち上がる。A、ぢつと腰をかけた儘で、黒板の方を向いてゐる。）

B　飯を食ひに行かうぢやないか。

A　(向うを向いた儘) うむ。

B　集會所はまづいから、けふは外へ出て、ミネルワで食はうよ。變態恐怖で頭が變てこになつてしまつた……

A　うむ午(ひる)からは市岡だらう。あの先生、掛持だから、どうせ遲いよ。ゆつくり食つて來られるよ。

A　(默つてゐる)

B　どうしたんだ。氣持でも惡いのか。

A　(半分見物席の方を向く。突然) おれは煩悶してるんだ。

B　煩悶。冗談ぢやない。(間) 何を煩悶してるんだ。

A　(默つてゐる)

B　(Aと向ひ合つて、他のベンチの端に腰をかける。二人が机と机の間の道を挾む) 君も今の講義で頭が變になつたんぢやないか。

A　違ふ。さうぢやない。

B　ぢや、どうしたんだ。

A　もう、こなひだから煩悶してるんだ。

B　どうしたんだ。金の問題か。

A　ううむ。さうぢやない。

B　女か。

A　(默つてゐる)

B　(笑つて) 女だな。

A　(突然) 君の妹は今國へ歸つてゐるんだね。

B　ああ、歸つてるよ。少し頭が惡いもんだから。それがどうかしたのかい。

A　僕の煩悶はね。

B　うむ。

A　僕の煩悶は君から起つてることなんだ。

B　僕から。

A　あゝ。だから、どうしても君に話さなけりやならないんだ。

B　ぢやあ、話したら好いぢやないか。

A　他の人に話したつて、なんにもならない煩悶なんだ。

B　だから、聞かうと言つてるぢやないか。

（間。）

A　君の妹な。

B　うむ。

A　あれはほんとに君の妹なのか。

B　變なことを訊くな。當り前ぢやないか。

A　ほんとに君の妹なんだね。

B　さうだよ。

A　ぢやあ、訊くがね。若し君の妹に或リイベスハンデル（戀愛事件）が起つたとしたら、君は兄貴としてどういふ處置をとるね。

B　リイベスハンデル。（笑ふ）そんなものは起る筈がない。

A　なぜ起る筈がないのだ。

B　それは……（間）僕は妹の人格を信じてゐるからだ。

（長き間。）

B　（不安らしく）だが、若しそんなことでもあるのか……

A　（默つてゐる）

B　確實な證據でもあるのか。

A　ある。

B　相手は何者だ。

A　（直ぐ）僕だ。

B　君だ。

A　ああ。

B　（怒る）そ、それは怪しからん。かりにも人の妹を……君はどうして……君はどうして償ひをつけるつもりだ。

A　償ひ。（冷笑する）君は妹を束縛するのか。（間）戀愛は自由ぢやないか。

B　束縛するんぢやない……併し、そんな不眞面目な……

A　眞面目か不眞面目か研究して見たか。

B　研究はして見ないが、大抵分かつてゐる。この頃の戀愛は大抵さうだ。

A　（いきなり）嘘つき。

B　何が嘘つきだ。

A　富子さんは君の妹ぢやない。あれは君の言ひなづけだ。

B　（驚いて）誰がそんなことを言つた。

A　富子さんが自分で言つた。

B　富子が自分で……

A　（遮るやうに）君も嘘つきなら、富子さんも嘘つきだ。

B　富子は自分で告白したと言つてるぢやないか。

A　初めに告白すりやあ好いんだ。あとで告白したんだ。

B　あとで（間）あとでとは何のあとでだ。

A　それを言ふ必要はない。富子さんはどこまでも君の妹として僕に近づいて來たんだ。僕だつ

て、それを初めに知つてりやあ、別に執るべき態度があつたんだ。それを……それを……あとになつて言ふなんて。（間）あいつは淫婦だ。

B　それは誰に向つて言ふ詞だ。

A　誰にでも向つて言ふ詞だ。ほんとに君を愛してるなら、初めに總てを告白しなけりやならない筈だ。

B　僕等の愛について、君の干渉を受ける必要はない。

A　干渉はしないさ。唯事實を述べてるんだ。富子さんは君に對しても愛がなければ――僕に對しても愛がないんだ。

B　君に對しても愛がないと言ふのか。

A　ない。確にない。あの嘘つきが何よりの證據だ。初めに言へば好いことを、あとで言つて僕を苦しめる――それだけでも、あの人には愛がないのだ。

B　（一寸考へて）さうすると、君のシチユエエシヨンは餘程惡くなつて來るぞ。（間）愛が君へ移つたのなら、まだ考へやうもあるだらうが、愛がなくて、唯肉だけの問題だとなると、いよいよ僕は許せなくなる。

A　それは富子さんに向つて言はるべき詞だ。僕は少しも欺いてはゐなかつた。僕には愛があつた。實は二年も前から思ひ詰めてゐたのだ。

B　今はどうだ。

A　もうない。あの嘘が分かつてから、一度に厭になつてしまつた。

B　過去は問題の外へ置かう――問題の解決は現在の狀態から出發しなけりやだめだ。（間）する

A　と、今君はもう愛はないのだね。

B　ない。

A　富子の方にも愛はないと言ふのだね。

B　確にない。

A　そして、富子は僕に對しても愛を持つてゐないと主張するのだね。

B　ああ、主張する。

A　實は、僕も君の話を聞いて、あいつに愛が持てなくなつた。

B　さうなるのが當り前だ。

A　すると、君と僕の間に横はつてゐる富子は、唯肉としての富子なんだね。

B　さうだ。

A　さうすると、氣の毒だが、僕の勝利だ。

B　(冷笑して) なぜ。

A　僕に優先權があるからだ。

B　どんな優先權があるのだ。

A　僕の方が先きだと言ふのだ。

B　何が先きだと言ふのだ。

A　僕は兩親に對する約束を破つて、とうから富子と夫婦になつてゐた。

B　(冷笑して) それだけか。

A　それだけかとは。

B　それだけなら、僕はもう君を追ひ越してゐる。

A　追ひ越してゐるとは。

B　富子さんは妊娠してゐるのだ。

A　妊娠。

B　うむ。

A　(笑ふ) そんなばかなことがあるものか。

B　ところが、あるんだ。頭が惡いと言つて、國

へ歸つたのは、その言ひわけに過ぎないのだ。

（長き間。）

B　だが……若しさうだとしても、それがどつちの結果だか分かるものか。

A　ところが、それがはつきり分かつてゐるのだ。（内衣兜から手紙を一通出す）これを見給へ。

B　（手紙を讀む。讀んでゐる内に、顏色が變つて來る。）

A　（無言）

A　僕と富子さんとの關係は三月五日から始まつた。醫者の證言もある。その手紙に書いてあることは本當だ。（間）さすがの噓つきも、困る時は本當のことを言ふのだ。

B　（頭を抱へる。無言）

A　僕がさつき頑固と言つたのは、富子さんの言ひなづけである君に對して、罪や責任を感じたからではない。僕はだまされたんだ。だました者に罪はあつても、だまされた者に罪はない。（間）僕は唯さうした間違つた「愛」の結果を負擔するのが厭なのだ。

B　（顏を上げる）厭だと言つても、爲方がない。僕はもう何も彼もこれつきりにする。君が引き起したことは、君が始末すべきだ。

A　（冷靜に）ところが、さうは行かないのだ。（間）君はどうしても富子さんと一緒にならなければならない運命を持つてゐるんだ。

B　そんなことはない。親父にさう言つて、婚約を破つて貰ふばかりだ。

A　それはだめだ、君が若し今日まで、綺麗に富子さんと生活して來たのなら、それも出來るかも知れない。（間）併し、君にはもうその權利は

奪はれてゐる。
B　それはそれで償ひの方法があらう。
A　その方法は君が富子さんを細君にするより外はないのだ。
B　（沈默する）
A　僕は君を氣の毒だと思ふ。實際、氣の毒だと思ふ。だから、けふまでそれが君に言へなかつたんだ。（間）愛のない者を愛のない者として一生の伴侶にする。こんな厭なことが又と外にあらうか。君はさうした運命にぶつかつてゐるのだ。（間）僕はそれが言ひにくいばかりに、この幾週間煩悶してゐたのだ。（衣兜から又一通手紙を出す）これを見給へ――君のお父さんの手紙だ。
B　（手紙をひつたくるやうにして讀む。見る見る顏色が變る。無言）
A　分かつたか。君のお父さんは富子さんのお父さんにさういふ約束をしてゐたんだ。（間）東京へ一緒に出して、結婚前に、萬一伜がそちらの娘さんと關係するやうなことがあつたら、その後如何なる問題が起らうとも、お孃さんはきつと伜の妻にするといふ約束だ……
B　（沈默）
A　君のお父さんは涙をもつて書いてゐる――總ては聞いた。出來たことは爲方がない。唯殘念なのは伜が清淨でなかつたといふことだ。（間）幸に向うの親はまだなんにも氣がつかないでゐる。伜と富子が一緒にさへなつてくれれば總ては無事に解決する。（間）この上はどうしても二人を一緒にしなければ、自分の一分が立たな

い。どうか、あなたは諦めて、息子に是非とも一緒になるやうに勸めてくれと書いてある。一生御恩は忘れないから、どうかその一事に力を盡してくれと書いてある……

B　（掌で机などどしんと打つ）ああ、ばかだ。おれはもうだめだ。

A　（諭すやうに）爲方がない。男らしく運命に忍從するのだ。さもないと、一轍な君のお父さんの生命に關するやうなことになるぞ。（間）僕は君の親父に、死を賭してもこの事はきつと無事に解決して見せると誓つてやつたんだ。同時に、富子さんには一切の關係を絶つといふ手紙を出したんだ。（笑つて）お蔭で、僕は偉大な人道主義者になることが出來たよ。

B　（嗟嘆する）ああ……

A　（教へるやうに）一體、親と親とが、言ひなづけなどといふものを、勝手にきめるのが悪いのだ。それを又子供達が、何等の反省なしに喜んで引受けるから間違ひが起るのだ。しかも、學生の間は兄妹のつもりでゐろとか何とかいふ親の命令を遵奉して、世間や友人を欺くに至つては言語道斷だ。富子さんに想を寄せてゐるものは、おれの外にも澤山ゐるんだ。唯、みんな僞善家だから——利害觀念が強いから——おれの進んだところまでは進めないでゐるんだ。君はそれを不愉快だとは思はないか。總てが嘘だ。みんな嘘だ。嘘から始まつたことは嘘に終るにきまつてゐるんだ。

B　（頭を上げる）さうだ……ほんとにさうだ。おれの今までの生活は全部嘘だつた。おれはけふ

からほんとの生活にはひるのだ。見す見す愛のない女だと承知で、おれは富子と一緒にならう。そしておれの強い愛の錐で、あいつのほんとの愛を突き覺ましてやらう。（間）だが、それがおれに出來るだらうか。

A　悲觀するな——おれがついてゐる。

B　うむ、頼む——絶えずおれを激勵してくれ。

A　その代り、もう嘘はやめだぞ。眞實で行くんだぞ。富子さんの、あの嘘で固まつた魂を眞實の斧でぶち毀すんだぞ。

B　うむ分かつた——分かつた。

（小使がはひつて來る。小倉の盲縞の立襟の服を着てゐる。六十歲位。電報を持つてゐる。）

小使　（Aに）あの、あなたは文科の方ですか。

A　さうだ。

小使　二年の方はどこにゐるでせう。

A　僕、二年だ。

小使　（電報を見る）ヒサカタケンジ　ヒサカタといふ學生さんがゐますか——ヒサカタケンジです。

B　（側から）久方謙二なら僕だ。

小使　ああ、さうですか。（電報を渡す）至急電報だからつて、あなたの下宿から屆けて來たんです。

B　有難う。（電報の封を切る）

（小使、とぼとぼと出て行く。）

A　どこからだ。

B　國かららしい。（讀む。非常に驚く）

A　どうした。

B　富子が死んだんだ。

A　死んだ。

B　しかも自殺らしい。キシヤデシスとある。

A　なに、自殺。（Bの手から電報を奪ふ。讀む。顏色變る。無言）

（始業の鐘鳴る。）

B　（考へる）さあ、分からなくなつた。ことに依ると、富子はほんとに君を愛してゐたんぢやないか。

A　（考へる）うむ――僕にも分からなくなつて來た。

（稍長き間。）

B　僕も大事なものをなくしたやうな氣がして來た。（涙がひとりでに頰を流れる）

A　（電報を胸に押し當てる）僕も……僕も……何か失はれたやうな氣がして來た。（涙がぼろぼろ床へ落ちる）

B　おい。（Aの顏を見る）

A　うむ。（Bの顏を見る）

（二人、知らずに泣いてゐる。）

（學生達、がやがやはひつて來る。二人、顏を隱すやうにして、教壇の方へ向き直る。第二の教師がはひつて來て、教壇に登る。）

第二の教師　（丈の高い、痩せた、目の小さい、頭の毛の鳥の巣のやうにもじやもじやした四十恰好の男である。ノオトを見ながら、ゆつくり、ゆつくりしやべり出す）第三章。絶對的本原に關する意識の發達。ええ、人生が絶對的性質を持つてゐるといふこと、ええ、自我が絶對的内容を領有してゐるといふことに對する非難は、ええ、概ね甚だ幼稚なもののみである。ええ、隨つて、幼稚なる説明を以て、これを排除する事が出來る。

（間）ええ、生命は自然の必要的過程であつて、全然依存的相關的のものではないか、ええ、どうして絕對的內容がその內にあり得るかと、詰問するのが普通である。然り生命が物理的必然法に支配せられ物質的に依存する自然的過程であることは疑はない。けれども、これからどんな論理上の結論が……

（學生、AとB机の上に突つ伏して泣いてゐる。教師、知らずに講義を續けてゐる。他の生徒も氣がつかないでゐる。）

――幕

西山物語　三幕六場

人物

渡邊源太
妹かへ
弟惣治
母
渡邊團次
息右内
西園の使者
仲人
その他

場所
山城國松の尾

時代
徳川中期

第一幕

源太の家。
源太の母、ひとりで機を織つてゐる。家のうしろで、木劍の試合の音がする。時々掛け聲も聞える。
暫くして、源太が出て來る。木劍を手にしてゐる。

源太　お母さん。おひとりですか。

母　ああ。

源太　かへはどうしました。

母　右内とふたりで紅葉を見に出かけたよ——あたしが勸めたものだから。
源太　惣治はどうしたのです。
母　あれも裏山の方へ遊びに行つたよ。
源太　しやうがないな。年寄をひとり置きつ放しにして行つてしまつて。
母　時候が好いから、若い者は内にぢつとしてはゐられないよ。爲方がないさ。
源太　でも、病後のあなたをひとり置き去りにして行くなんて。
母　なあに、あたしはもう大丈夫だよ。お前のお蔭で、もうすつかり達者になつたのだから。
源太　併し、まだ機などにおかかりになるのは早いでせう。
母　だが、お前がさうやつて働いてゐるのに、あたしばかりが遊んでもゐられないからね。
源太　さう仰しやられると一言もありません。相變らず弟子と言つたら、近所の若いのが五七人來るきりで、一向うだつが上がりませんからね。
母　困るねえ。さういふ風にとられては。あたしはこの暮らしを決して不足に思つてゐるのではないのだよ。今は泰平の世の中だから、劍道の廢るのは當り前だよ。それでも、お前や團次が苦しい思ひをしながら、父祖の道を捨てないでゐるのを、あたしはどんなに喜んでゐるか分からないのだよ。
源太　御免下さい。世の中をひがんでゐるので、つい愚痴が出たのです。お母さんのそのお心持は、わたしにもよく分かつてゐるのです。分かつてゐながら厭みを言つて濟みませんでした。

母　そんなに謝らないでも好いよ。わたしはお前を責めるつもりで言つたのではないのだよ。お前があんまり氣の毒だから、勵ますつもりで言つたのだよ。

源太　それもよく分かつてゐます。有難いと思つてゐます。併し、わたしもせめて團次ほどの弟子を持つて、團次ぐらゐの暮らしが出來れば、これ程ひねくれはしなかつたらうと思ひます。

母　なあに、團次だつて大して好い暮らしをしてはゐはしないよ。これが戰國だつたら、なかなかあんなものではないと思ふよ。團次だつて、決して今の暮らしに滿足してゐるのではないのだよ。不平な點はお前と同じだよ。

源太　そりやあさうでせう。その點はわたしも同情してゐます。わたしは決して團次を羨んでゐるのでも妬んでゐるのでもないのです。それどころか、この春からのお母さんの病氣に就いて、あれのしてくれた深切に對してはこちらが恥つかしくなるくらゐ感謝してゐるのです。高い金を出して人蔘は買つてくれる。やもめ暮らしの不自由な中から、ああやつて息子の右内を毎日のやうに看護によこしてくれる。實際、あれは義理だの人情だのだけで出來ることではないと思つてゐます。

母　それ程に思つてゐるなら、なにも團次に弟子が多いからと言つて、そんなにいらいらしなくても好いではないか。

源太　そこです。わたしは團次に弟子が多いからと言つて、唯それだけでいらいらしてゐるのではないのです。團次は人づきが好いから、弟子

の寄りも好いのです。從つて道場の一つも持てれば、ああした暮らしも出來るのです。わたしは生れつき人づきが惡い。それが爲に弟子も少い。從つて道場一つ建てることが出來ないので、稽古と言へば、裏の竹藪でしなければならない。それはまあ好いとして、お母さんにまで始終暮らしのことで御心配をかけるのです。わたしはそれが堪へられないのです。わたしは自分で自分の性質を憎むのです。

母　成程、園次とお前とは從兄弟同志で、顔までが兄弟のやうに似てゐながら、性質は小さい時からまるで違つてゐた――併し、それは生れつきだから、しやうがないではないか。それは世渡りをする上から言つたら、園次の方が德で、お前の方が損だといふやうなところがあるかも知れないが、大きな目で見たら、どつちが好い、どつちが惡いといふことは言へないと思ふよ。園次の性質には園次の性質で好いところがあるし、お前の性質には又お前の性質で好いところがあると、わたしは思ふよ。劍道でも二人とも負け劣りはないのだから、ひがむところもなければ、すねるところもないではないか。唯お前達の不幸は、今の世の中が泰平だといふだけだよ。それだつて、目はしの利いた武士なら、決して武術をおろそかにする筈はないのだから、今にきつと認められる時があると思ふよ。侍は商人ではないのだから、そんなに眼前のことに心を亂す必要はないと思ふよ。

源太　分かりました。分かりました。全くお母さんの仰しやる通りです。わたしはこれから心を

海のやうに廣く持つて、おもむろに時の來るのを待ちます。

母　どうかさうしておくれ。さうしてくれるのが何よりの孝行だよ。

源太　分かりました。折角、お爲事をしてゐらつしやるお邪魔をして濟みませんでした。暫く休ませて頂きます。

母　それが好い。それが好い。けふは朝から休みなしだつたから、さぞ疲れたことだらう。

源太　有難うございます。

（源太、奥へ入る。母、直ぐ心を取り直した態で、また機にかかる。稍暫くして、かへと右内出て來る。）

母　おう、歸つてお出でだね。どこへ行つてお出でだつた。

右内　松の尾神社から妙本寺の方へ行つて參りました。

母　紅葉がさぞ綺麗だつたらうね。

かへ　木の葉とは見えませんでした。まるで花のやうでした。

右内　あの、妙本寺といふお寺は實に靜なお寺ですね。小半時、ふたりであすこの紅葉の下に立つてゐましたが、物音一つしないのです。唯、鹿おどしの竹の樋が、時々かたり、かたりといふだけでした。

母　また、それで歌が出來たのではないか。

かへ　ええ、二つも三つも出來たのよ。

右内　いいえ、ろくなものは出來はしません。申し上げられるやうなものは、一つもないのです。

併し、あのお寺は氣に入りました。物を考へるのに、あんな好い場所はありません。

母　お前はほんとに不思議な子だねえ。あんな武骨な父親のもとで、小さい時から女手なしに育てられながら、どうしてそんなに優しい心を持つやうになつたのだらう。お前は武人の血を承けながら文人に生れついたのだね。お前の父親は、始終その事を言つて、意氣地なしだとか、弱蟲だとか言つて嘆いてゐるが、わたしはそれも人間の一面だと思つてゐるよ。父祖の道といふことだけを思へば、渡邊の跡とりがそれでは困るが、廣い世の中から考へれば、さういふ人も一人や二人はなければならないと思ふよ。世の中が劍や楯ばかりになつては、あんまりあぢきないからね。

右内　全く、それは不思議です。自分では、これでも親父の業を繼ぎたいと思つて、隨分武術の修行もしてゐるのですが、どういふわけだか心持だけは、一向武人らしくならないのです。物の哀れといつたやうなものにばかり氣を取られて困つてゐるのです。

かへ　ほんとに、右内さんほど優しい方はありません。けふも松の尾神社で、名も知れぬ小さな地蟲を、知らずに踏みつけたと言つて、泣かぬばかりに心を痛めてゐるのです。

母　優しいも好い。物の哀れを知るも好いが、さうした生れつきの人は、兎角うつろひ易いものに心を動かされやすいから、それは氣をつけないといけないよ。あたしが病氣になつて、右内が毎日のやうに内へ來てくれるやうになつてか

ら、かへも大層右内と仲がよくなつたやうだが、どうかお互に、雪霜にも變らぬといふ誠の心を持つて貰ひたいと思ふよ。御覽、向うの山の紅葉を。あれは顔に化粧をして、着物を著飾つてゐる人間のやうなものだよ。一時の盛りはあるかも知れないが、ぢきに色を變へてしまふのだよ。あたしの目から見れば、あの紅葉の中に立ち並んでゐる松や栢こそ眞心の男女だよ。

右内　分りました。雪にも嵐にも負けますまい。

かへ　あたしの名は雪霜にも負けぬ木の名ださうでございますね。それは度々お母樣に伺ひました。

母　さうだよ。亡くなつたお父樣が、お前の生先を思つておつけ遊ばした名なのだよ。だから、お前はその名を忘れずにゐてくれさへすれば好いのだよ。

（惣治、駈けて出て來る。）

惣治　お母さん。お母さん。

母　なんだい。慌ただしい。

惣治　お母さん。大變ですよ。九州のお大名から內へお使が來ましたよ。

母　なんだい。出し拔けに。

惣治　團次伯父さんのところへも行つたんですつて。僕、今そこで聞かれたんで、案内して來たんです。

母　なんだかお前の言ふことはちつとも分からないが、九州のお大名からこの內へお使が見えたと言ふのかい。

惣治　ええ、さうです。立派な人ですよ。兄さんは內にゐないんですか。兄さんが內にゐないと

困るなあ。お出迎ひをしなけりやあならないのに。

右內　惣治君、僕の內へも來たのかい。

惣治　ああ、さうだつて。その歸りだと言つてゐたよ。

かへ　一體、何のお使なのでせう。

惣治　分からないのかなあ。姉さんはばかだなあ。劍術の師範を賴みに來たにきまつてるぢやないか。

母　さう仰しやつたのかい。

惣治　僕にはなんとも言ひませんが、それにきまつてゐますよ。やつとお父さんや伯父さんが世間に認められる時が來たんですよ。

右內　それにしても、兩方へ一度に來ると言ふのは訝しいなあ。ふたり一緒に抱へるつもりかしら。

惣治　ああ、見えた。

（西國の使者、現る。）

母　源太を呼んで來よう。（奧へ入る）

使者　（惣治に）　兄さんはお出でですか。

惣治　ゐるやうです。今、母が呼びに參りました。

使者　それは有難い――この邊は紅葉が綺麗ですね。

惣治　九州にはかういふところはありませんか。

使者　ありません。九州には熾烈な日光があるだけです。雪や霜はありません。從つて萎れるの色を變へるのといふ生活はありません。青いものは益青く、赤いものは益赤くなるばかりです。

惣治　氣持が好いですねえ。

使者　九州は男の國です。

惣治　軟派なんて柔弱な人間はゐないでせうね
え。

使者　武骨者ばかりです。

惣治　僕はさういふところへ行きたいなあ。

使者　もうぢき行かれますよ。

惣治　行かれますか。

使者　多分。

（源太、母と共に出て來る。）

源太　これは、これは。むさくろしいところですが、さあどうぞこちらへ。

使者　失禮します。（上へあがる）あなたが渡邊源太殿ですか。

源太　さうです。これはわたしの母です。これは從兄市圓次の伜、これはわたしの妹です。途中でお會ひになつた惣治はわたしの弟です。

使者　（右内に）あなたのお父さんのところへ唯今伺つて來ました。實に心の正しい御人で、わたしは感服しました。

源太　一體、どういふ御用でお出でになつたのですか。

使者　申しおくれました。わたしは九州の菊池から使に參つたのです。あなた方おふたりのお名を聞いて、是非どちらかお一人劍道の師範役にお抱へしたいと申してをるのです。

源太　どちらか一人。

使者　御親類のことですから、お二人御一緒といふ話も出たのですが、それは今までに例のないことなので、やはりお一人といふことになつたのです。

源太　それで。

使者　それで、お二人ともこの道にかけては優り劣りがないといふことを主人も承知してゐますのでお二人に試合をして頂いて、お勝ちになつた方をお迎へして歸つて來いと命ぜられたのです。

源太　團次は何と申しました。

使者　それには及ばぬ。源太の方がわしより腕が確だ。それに、わしは相當に弟子も持つてゐてどうやら暮らしにも困らぬが、源太は甚だ逼迫してゐる。勝負には及ばぬから、是非源太を抱へて歸つて貰ひたい——と、かう申されました。

源太　それはわたしからも申し上げたい。團次はなかなかの腕利きです。それに、人にものを教へることが上手です。わたしはこの通りの武骨者で、到底主人に仕へて行くことは出來ないやうな生れつきです。いくら貧しいからと言つて、不適當なものが適當なものの地位を奪ふことは出來ません。勝負には及びません。これは是非團次といふことにおきめが願ひたい。

使者　どうも、兩方でさういふ風に仰しやられては、わたしが困ります——御老母、どう思召します。

母　さあ、わたくしは女の身故、さやうなことは分かりませんが、これは團次が辭退をしたところで源太が受けもしますまいし、源太が辭退したところで團次がお受けをしよう筈がないと思ひます。それでは、あなたがお困りでせうし、第一菊池の殿樣の折角の御意を無にすることになりますから、やつぱり試合をするより外に道はないと思ひます。

使者　源太殿、どうお思ひです。

源太　母の言ふことが尤だと思ひます。試合をいたしませう。

（團次、やつて來る。）

源太　おう。團次がやつて來た。

團次　お使のお方、只今は失禮しました――源太、お前、どういふ御返事をした。

源太　一度はお前と同じやうな御返事をしたが、今お袋の說を聞いて、試合をする氣になつた。

團次　さうか。おれも實はさつきあんな御返事はしたが、あとでよく考へて見ると、おれが辭退をしたところで、お前がおいそれと引き受ける人間ではないし、さうかと言つて折角の御下命をお無にするのも勿體ないと思つて、試合をする決心になつた。

源太　さうか。それは丁度よかつた。では、お使のお方、双方とも試合をいたすことになりましたから、宜しく御檢分を願ひます。

使者　それは有難い。それでは早速ながら、明朝大井川のほとりで、試合をして頂くことにいたしませう。準備はこちらでして置きます。

惣治　面白いなあ。面白いなあ。お父さんと伯父さんの勝負か。

母　これ、惣治。何を言ふ。お客様の前で。

使者　いや、お咎めには及びません。このお子はなかなか面白いお子です。

母　野育ちで爲方がありません。

使者　いや、そこが好いところです。

（源太、團次、哄笑する。右内、かへも微笑む。）

第二幕

第一場

大井川のほとり。

源太と團次、左右から出て來て、舞臺の眞ん中で出會ふ。

團次　やあ。

源太　やあ。

團次　いよいよ今日だな。

源太　いよいよ今日だ。

團次　實はこれからお前の家へ行かうと思つて、少し早く出て來たのだ。

源太　おれもこれからお前の家へ行かうと思つてゐたのだ。

團次　何か用があるのか。

源太　うむ。少し話があるのだ。お前はどうしておれの家へ來ようと思つたのだ。

團次　おれは實はお前に話して置きたいことがあるのだ。

源太　それはちやうど好かつた。では、ここへ腰かけて話さう。まだ時間はあるだらう。

團次　うむ。半時ぐらゐはある筈だ。腰をかけよう。

（二人、ありあふ石に腰をかける。）

團次　先づ、お前から話せ。

源太　いや、そつちから始めろ。

團次　さうか。それでは言はう。實は今日の試合のことだ。

源太　うむ。

團次　けふの試合は家のほまれだ。吾々のどつちかが世に出る端緒(たんしよ)だ。誠に有難いことだ。併し困ることには、お前とおれとは兄弟同然の間がらだ。同じ腕で同じ力を爭ふやうなものだ。お前はおれより弟子が少なくて貧乏はしてゐるが、實際はおれよりずつと腕があるのだ。おれはきつと負けるに違ひない。腕のない者が腕のある者に負けるのは爲方がないが、若しおれが負けたといふことになると、おれの弟子はみんなおれを離れて行つてしまふだらう。さうなると、おれはあしたから朝夕の糧にも困るやうになるだらう。それもおれ一人なら構はない。可哀さうなのは右内だ。おれはそれが今から心配でならない。若し、そんなことになつたら、どうか右内をお前の弟子とも思つて、末永く世話をしてやつてくれ。そして時機が來たら、適當な妻を迎へて、孫の顏でも見られるやうにしてやつてくれ。おれは豫めこれだけのことが頼んで置きたかつた。どうか忘れずに心に留めて置いてくれ。

源太　いや、實はおれの方も同じやうなことを頼まうと思つてゐたのだ。お前は弟子も多いし、暮らしも隙(ひま)だから、いつも延び延びとこの道の修行を積んでゐる。おれはだめだ。おれはお袋が永いあひだ病氣だつたし、その看護や世帶の苦勞で、心も暗み、力も盡きた。骨や筋もへなへなに弛んでしまつた。おれはもう到底お前の敵ではない。おれは負けるにきまつてゐる。若しさうなつたら、おれの暮らしは一層みじめなものになるだらう。おれは好いが、お袋や妹や

弟が可哀さうだ。お前にでも世話をしてもらはなければ、三人飢ゑ死んでしまふだらう。かへすがへすもこのことは忘れないでゐてくれ。頼む、頼む。

團次　いや、頼むのはこつちだ。

源太　いや、おれの方が頼まなければならないのだ。

團次　宜しい。ではどつちが勝つにしても、世の中に出た方が世話をすることにしよう。

源太　どうか、さうしてくれ。

團次　お前もそのつもりでゐてくれ。

源太　うむ。

（九州の使者現れる。二人、立つ。）

使者　ここにお出ででしたか。方々探しました。もう時刻です。

團次　では。

源太　行かう。

（三人、退場。）

（右內とかへ、一緒に登場。）

かへ　大層な人出ですね。

右內　みんな試合を見に來たのです。

かへ　山も木も鈴なりですわ。

右內　人間といふものは妙なものですね。どうしてこんなことが面白いのでせう。

かへ　見世物でも見るつもりで來てゐるのでせう。

右內　劍道などをまるで知らない商人までが澤山來てゐますね。何が面白いのでせう。人と人とが勝負を爭ふ。その結果でその人達の運命がきまる。わたしは恐ろしいことだと思ひます。

かへ　では、あなたは御覧にならないのですか。
右内　到底わたしには見られません。唯わたしは心配だから出て来たのです。この結果でわたしとあなたとの問題もどうなるか分からないと思つて。
かへ　それではけふの勝負で、わたし達の關係も變つて來るのでせうか。
右内　そんな筈はないと思ひます。伯父さんだつて内の父だつて、そんなことで仲違ひをするやうな卑しい人間だとは思ひません。それに、わたしはたとひどうなつても、あなたを離れようとは思ひません。併し、唯何となく心配なのです。心が落ちつかないのです。
かへ　なぜでせう。内のお母さんだつて、あんなに二人のことを心配してくれてゐるのです。お内のお父さんも内の兄も、二人のことは承知してゐるらしいのですから、なんにも心配なことはない筈です。
右内　それはさうです。それはわたしにもよく分かつてゐるのです。それでゐて、なんだかかう、心配で心配でならないのです。
かへ　まあ、妙ですわねえ。
右内　わたしも不思議でならないのです。
（惣治、駈けて出る。）
惣治　早く行つて見ないか、もう始まるぜ。
かへ　（右内に）どうしても、あなた、行くのは厭ですか。
右内　厭です。
惣治　どうして行かないんだ。
右内　僕、見るのが恐ろしいんだ。

惣治　意氣地なしだなあ。ぢやあ、僕、先きへ行くぜ。

（惣治、駈けて去る。二人、見送る。間もなく遠くで、わつと鬨の聲が上がる。二人は顔を見合す。右内かへの手に縋る。縋られて、かへも右内を抱く。）

第二場

源太の家。

源太の母、神棚に神酒を供へ、ひとりで拜んでゐる。

惣治、ぼんやり歸つて來る。

母　惣治か。どうだつた。

惣治　（默つてゐる）

母　源太が負けたか。（間）團次が負けたか。

惣治　どつちも負けたんぢやありません。どつちが勝つたんでもないんです。

母　それはどういふことだ。

惣治　やつと聲を合せて、二人が立ち上がると、伯父さんがいきなり打つてかかりました。兄さんがそれを受けたかと思ふと、白樫の木太刀が三つに折れてしまつたのです。

母　それでは勝負にはならないではないか。

惣治　だから、伯父さんも、これは誠の勝ではない。太刀を改めて、もう一度勝負をしようではないかと言ひました。けれども、兄さんは聞かないのです。勝つと負けるは唯天運だ。眞劍でも折れる時は折れるのだ。お前の勝に間違ひはない。おれはこの場にゐるのが恥かしいと言つて、折れた太刀を拾ひ集めると、逃げるやうに試合の場所を出てしまつたのです。

母　では、それで勝負がついてしまつたのかい。

惣治　勝負でない勝負がついてしまつたのです。いづれ兄さんには考へがあるんだらうが、僕はくやしくつて溜まらないんです。見物もあんまりあつけないので、みんながつかりしてゐました。

母　（長嘆息する）

（源太、帰つて来る。）

源太　唯今。

母　（惣治に）お帰り。

源太　惣治に聞きましたか。

母　（頷く）

源太　見苦しい負けをいたしました。

母　木太刀が折れたのだといふではないか。

源太　さうです。

母　それでは、ほんとの勝負にはならないではないか。

源太　木太刀だから、誰しもそんなことを思ふのです。真剣勝負だつたら議論はありません。わたしは立派に負けたのです。

（長き間）

源太　そのお神酒を戴きませう。

母　お酒を飲むのかい。

源太　わたしは負けても、一家の内からあれ程の大名に仕へる者が出れば結構です。それは初めからさう思つてゐました。渡辺一家の為に祝盃をあげませう。

母　（稍明かるく）さう言へばさうだねえ。では、わたしもお相手をしようか。

源太　どうぞ願ひます。

（二人して酒を飲む。源太は獨酌で盃を重ねる。）

母　でも、これからのお前が、わたしは心配でならないのだよ。

源太　これからのわたし。そんなことを心配する必要はありません。わたしは唯役を取りそこねただけです。悪くなると言つて、これより境遇の悪くなりやうはありません。

母　圑次との折合が悪くなるやうなことはあるまいね。

源太　そんなことは決してありません。ありよう道理がないではありませんか。

母　お前がさう言つてくれれば安心だけれど……

（右内、登場。）

源太　伯父さん、父が心祝ひの酒宴をしたいと言つてゐます。皆さんお出で下さるやうにとのことです。

源太　有難う。（母の顏を見る）

母　（安心したやうに頷く）

源太　（急に顏を曇らせる。右内に）併し、伯父さんはひどく疲れてゐる。伯父さんは改めて祝ひに行くとして、けふはかへと惣治を代理に出さう。（母に）かへはどこへ參りました。

右内　かへさんはもうわたしの家に來てゐます。

源太　それは早手廻しだな。では、惣治、貴様行け。

惣治　僕は厭です。

源太　なぜ、厭だ。

惣治　負けた家の人間が勝つた家へ祝ひに行くなんて、そんな恥づかしいことは僕には出來ませ

ん。

源太　勝負は人のことではない。一家の一人が名誉を得たのだ。私情を捨てなければならない。

惣治　そんなら、兄さん、なぜ自分で行かないのですか。

源太　（語荒く）おれは改めて行くと言つてゐるではないか。

惣治　嘘だ。嘘だ。兄さんだつて行くのは厭なんだ。だから、ひとを代理にやらうとしてるんだ。

源太　（叫ぶ）莫迦。

（惣治、昂然としてゐる。母と右内、顔を見合はす。源太、苦しげに惣治を睨む。）

第三幕

第一場

源太の家。

母と惣治、縁側に腰をかけて、話してゐる。

母　もうすつかり冬になつた。

惣治　木の葉がみんな散つてしまひました。

母　もうぢき又雪に閉ぢ籠められるのだね。

惣治　その方が却つて好いと思ひます。どうせ世間とはつきあひのない家ですから。

母　さう言へば、團次伯父さんはまだ九州へ立たないやうだね。

惣治　まだのやうです。でも、もうぢき立つんでせう。この頃しきりに町の方へ買物に出掛けるさうです。きのふ権次に聞きました。

母　権次といふのは團次の隣に住んでゐる桶作りの子供だね。

惣治　さうです。なんだか、むやみと立派なものを買ひ込んで來ると言つてゐました。

母　何しろ、あの試合の日に右内を迎ひによこしたきり、ぷつつり便りがなくなつたのだからね。

惣治　僕はさうなるにきまつてゐると思つてゐました。いくら體裁の好いことを言つたつて、負けたものと勝つたものが前のやうに仲よしでゐられるわけがないのです。兄さんだつて面白くないにきまつてゐます。向うだつて出世をすれば、僕達のやうな貧しい人間とつきあふのは厭でせう。

母　でも、それが人間の道だらうか。

惣治　人の道はどうだか知りませんが、人間はみんなさうです。

母　可哀さうなのはかへだ。あれつきり右内も訪ねて來ず、こつちから訪ねて行つても、會はせまい會はせまいとするのだ。

惣治　姉さんも、もうこの頃は出かけて行かないやうです。右内なんて意氣地なしは、もう好い加減に諦めてしまふ方が好いのです。

母　それはさうは行かないよ。まだなかなか思ひ切れるどころではないよ。右内だつて、やつぱりさうに違ひない。

惣治　あの意氣地なしが、なんの當てになるものですか。

（途端に、奥で女の泣き聲が聞える。）

母　かへだらう。

惣治　さうです。

母　（呼ぶ）かへ、かへ。

惣治　僕は遊んで來ます。（草履を突つかけて、ど

こかへ出て行つてしまふ。）

（かへ、登場。顔は青ざめ、髪は乱れてゐる。）

母　かへ、まあここへお出で。

かへ　はい。

母　お前はどうしてさう鬱いでばかりゐるのだい。わたしだつて、若い時もあつたのだから、若い人達の心が分らないのではないのだよ。だが、縁といふものは[illegible]ごとだから、一度一緒になつたものが離れることもあり、離れたものが又一緒になることもあるのだよ。嬉しいことも、悲しいことも、これが世の常だと思へば、諦められないこともないぢやないか。お前のやうにさう思ひ詰めてばかりゐたら、しまひには體をこはしてしまふよ。

かへ　（黙つて泣いてゐる）

母　この頃は御飯もろくろく食べず、髪なども上げずにゐるやうだが、それは却つてよくないよ。さういふことがあんまり募ると、しまひには親にも悲しい目を見せ、きやうだいにも背くやうなことになるものだよ。わたしだつて、兄さんだつて、決して悪いやうに計らひはしないから、ひとりで考へてばかりゐないで、なんでも思ふ通りを言つてしまふ方が好いよ。

かへ　（愈烈しく泣く）

母　わたしの娘はお前一人、お前の親はこの母一人ぢやないか。その寂しい親子でも、百年千年一緒にゐられるものではない。親子の契りは一世だと言ふぢやないか。その上、若い者が先きに行つて年寄があとに残るといふためしもあることだ。この頃のお前の様子を見てゐると、わ

たしは心配で夜もろくろく寝られはしないのだよ。
かへ　許して下さい。許して下さい。（益烈しく泣く。）
母　許すも許さないもありはしないよ。唯、お前が落ちついてゐてくれさへすれば好いのだよ。
かへ　でも、あたし、どうして好いか分からないんですもの。
母　兄さんの心にもなつて御覧。自分より腕のないものに負けて、その上親類のつきあひにさへ隔てを置かれてゐるのだよ。それでも、兄さんはなんにも言はずに、ぢつと堪へてゐるのだよ。
（かへ、又烈しく泣く。母も泣く。源太、歸つて來る。）
源太　どうしたのです、二人とも。
（二人、又烈しく泣く。）
源太　わけを聞くまでもない。わたしにはよく分かつてゐます。（間）まあ、わたしの言ふことをお聞きなさい。右内とかへの仲はわたしも知つてゐます。團次も知つてゐる筈です。それだのに、あいつはわざと知らん顔をしてゐるのです。一身の榮達に心おごつて、武士の道を忘れ、一時も早くここを立ち去らうとしてゐるのです。團次ごとき犬畜生にも劣つた奴を妹の親にするのは口惜しい限りではありますが、若い者の思ひ合つてゐるのを情容赦もなく引き裂くのは、あまりに殘酷だと思つて、實はこの程から仲人を入れて、度々談判をしてゐるのです。いつも曖昧な返事ばかりなので、けふはどうしても確たる返答を得て來いと申しつけましたか

ら、もう追つつけ何とか言つて来るだらうと思ひます。その返事を聞いた上で、又わたしに考へもあります。まあ、暫く待つてゐて下さい。（かへに）これ、これ。お前も武士の家の娘だ。一旦この男と思つた以上は、決して輕薄に思ひ捨ててはならない。この兄がかうしてゐる間は、決して恥をかかせるやうなことはない。さあ、涙をふけ。髪も直せ。氣を取り直して、お母さんのお世話をしろ。

かへ　なんにも申しませぬ。兄さん、有難うございます。

母　それ御覧、かへ。源太はこんなにまでお前のことを思つてゐてくれたのだ。まさか仲人まで立ててあらうとは、この母さへ知らなかつた。

源太　しつかりした返事のとれるまではと思つて、わざと内證にしてゐたのです。話はたいてい仲人の家でしました。

母　（かへに）さあ、かへ。それでは奥へ行つて、髪でも上げてあげよう。

かへ　はい。有難うございます。

（二人、奥へはひる。）

（仲人、登場。）

源太　やあ、御苦勞、御苦勞。さあ、どうぞ、これへ。

仲人　恐れ入ります。

源太　どうだつた。けふは何とかきつぱりした返事をしたか。

仲人　いたしました。

源太　うむと言つたか。

仲人　（首を振る）

源太　だめか。
仲人　やつぱりだめでした。
源太　うむ。
仲人　もう今では身分が違ふと言ふのです。こつちは大名の師範役、向うは野伏も同然だ。天地が倒になつても、この縁組は出來るものではないと、かう申すのです。
源太　うむむ。
仲人　あんまりな言ひやうですから、こつちも突つ込んでやりました。それでも右内樣とかへ樣とは神に誓つて離れまいと誓文まで取り交した仲なのを御存じないのですか。なんぼ親の力でも、お子樣達の心をまで曲げることは出來ますまいと、かう申してやりました。すると、すぐ右内樣をお呼びになつて、それは本當かとお訊きになるのです。右内樣は、それに相違ない。どうかかへ樣を迎へてくれと、きつぱり御返事をなさいました。
源太　うむ、さう言つたか。
仲人　ところが、どうでございませう。團次樣は殊の外のお怒りで、怪しからん奴だ。貴樣が一人子でなければ、直ぐに斬り捨てるのだが、それは先づ許してやる。すぐに女にあてて去り狀を書け。さなくば、遠國へ追ひやるぞ。さあ、父を捨てるか、女を捨てるかと、それはそれはきつい責めやうなのでございます。流石の右内樣もかう言はれては絕體絕命で、たうとう泣きながらこの去り狀をお書きになりました。(紙に書いたものを出して見せる)もうかうなつては、わたくしも申す詞がございませんので、その儘歸

つて參りました。なんとも申し上げやうがござ
いません。

源太　いや、飛んだ心配をかけた。いづれ改めて、
禮に行く。けふはどうぞ引きとつて下さい。

仲人　では、これで御免蒙ります。

源太　御苦勞だつた。

（仲人、去る。奥で母とかへの急に泣き出す聲
が聞える。やがて、二人が轉び出る。）

源太　かへ、聞いたか。

かへ　（激しく泣く）

源太　お母さん、聞きましたか。

母　（泣きながら）かへと右内のことは兎も角も。
わたしは思ひ上がつた國次の心が憎い。

源太　それはわたしもあなた以上です。實は大抵
かういふことになるだらうと思つて、藤の小袖

へして置いたことがあります。それがどんなこ
とでも、決して驚いてはいけません。必ず恥に
なるやうなことはいたしませんから。（立つて戸
棚から白絹の五つ衣、領巾などの蓋にのつたのを恭し
く取り出す）

（惣治、歸つて來る。）

源太　おう、惣治、酒の用意をしてくれ。

（惣治、默つて奥へはひる。）

源太　（かへの手をとつて上座に据ゑ、さて母の前に手
をつかへて）御存じの通り、家が貧しくなりま
してから、傳來の坏、陶物、文、祭物のたぐひ
まで、一つ一つ米や金に代へてしまひましたの
で、今では何一つ殘つてをりませぬ。唯、韓鞍
一揃、唐櫛二枚、韓靈四組、玉の椀三つ、これ
だけは格別お父樣の大事にされたものだと聞い

て、今までは手をつけずに置きましたが、妹が一代の祝ひごとだと思つて、お母さんにも御相談をいたさず、實はこの程みんな金に代へてしまひました。嫁入の衣裳は勿論、携へ行くべき身の廻りの調度などもそれですつかり用意が出來てゐるのです。この上はかへに嫁入の支度をさせて、園次のところへ押して參るつもりです。それでも、園次がはねつければ、もうこの世でかへの顏は見られぬものとお諦め下さい。

かへ　お志嬉う存じます。わたしももう決心をしてをりますから、決して見苦しい振舞はいたしません。

母　園次も人の心は持つてゐよう。仲人には強いことを言つても、源太が自身でかへを連れて行けば動かずにはゐまい。あの男は一時の榮達に目が眩んだのだ。さうしてその目を覺ましてやるのは、却つて慈悲といふものだ。行くが好い。行くが好い。さつき上京の陰陽師が來て、けふは日がらも好いと言つた。

源太　それではすぐに支度をして下さい。

母　かへ、お出で。

（母とかへ、嫁入の衣裳を捧げて、奥へはひる。入れちがひに、惣治、酒器を携へ出づ。）

源太　惣治、酒を床の間に置いて、その邊を片づけろ。

惣治　兄さん、愈押しかけて行くのですね。やつとこれで僕の胸が透いた。あんまりみんなが意氣地がないので、僕はひとりで癇癪を起してゐたのです。兄さん、しつかりやつて下さい。

源太　まあ、お前は默つてゐろ。子供には關係の

ないことだ。

惣治　子供だつてその位なことは分かります。僕はこなひだつから、くやしくつて、くやしくつて……（泣聲を出す。）

源太　馬鹿。泣く奴があるか。姉さんの嫁入ではないか。不吉な。

（惣治、すぐ默る。）

源太　片づいたら、裏へ行つて、輿を呼んで來い。もう來てゐる時分だから。

惣治　はい。（出て行く）

（母とかへ、奥から出て來る。かへは五つ衣を着け、頭巾をかぶつてゐる。）

源太　（二人を上座に据ゑ、自分は下にゐて）それでは、門出の祝に、一獻いたしませう。

（母と兄と妹の間を杯三度めぐる。）

（惣治、若い者に輿をかかせて出る。）

母　おう、輿の用意まで出來てゐたのか。（思はず聲を立てて泣く）

源太　お母さん、不吉ですぞ。

（かへ、靜に立つ。）

第二場

團次の家。

團次の前に右内が坐つて、泣いてゐる。供が二人外で待つてゐる。

團次　男らしくもない。まだ泣いてゐるのか、早く行け。早く行け。

右内　どうしても行かなければならないのでせうか。

團次　まだ、そんなことを言つてゐるのか。お前がゐては都合が悪いのだ。源太がいつ押しかけ

て來るか分からないのだから。

右内　若し伯父さんが入らしたら、お父さんはどうなさるのです。

團次　どうもしやしない。おれは一旦かうと思つたことは決して變へはしないのだ。釣り合はぬ緣だ。家名の汚れだ。九州大名の師範役となつたおれの後嗣(あとつぎ)に、野伏づれの娘をめあはすことは出來ないのだ。

右内　いくらふたりが思ひ合つてゐましても。

團次　まだ、それを言ふか。お前は親が大事か。女が大事か。

右内　(默つてしまふ)

團次　男が一旦思ひ切ると言つて、去り狀まで書いたのに、何といふ未練なことだ。さあ、行け早く行け。

右内　參ります。參ります。

(右内、下へ降り、供を連れて去る。團次、見送りゐる。別の方角より、源太、かへの乘りたる輿をかかせて來る。)

源太　團次。

團次　おう源太か。何しに來た。

(源太、かへを連れて、簀子にのぼる。輿丁去る。)

團次　これはどうしたのだ。どこへ嫁入るのだ。急なことではないか。

源太　どこへ嫁入するのでもない。お前の息子の嫁にしようと思つて連れて來たのだ。

團次　それは思ひも寄らぬことだ。そのことならさつき仲人を通じて返事をして置いた。お前はまだその返事を聞かないか。

源太　その返事は確に聞いた。

團次　では、押しつけにかういふことをするのか。

源太　押しつけと言はれれば、それまでだが、かねて右内とかへとの仲は、お前も知つてゐる筈だ。親の權力をもつて、子の心を抑へるといふ法はない。かへに落度があるなら聞かう。この去り狀もそれまでは受けとるまい。（去り狀を叩きつける）

團次　親の氣に入らぬ嫁を去るのは武士の道だ。

源太　成程、それはさうだ。併し、一日もまだこの家に住まず、一日もお前に仕へたことがないのに、どこを見て氣に入らぬと言ふのだ。

團次　いや、何と言つても、おれは聞かぬ。すぐに連れて歸れ。

源太　いや、さうはならぬ。それなら、右内を呼んでくれ。右内に一言訊いて見ることがある。

團次　右内はもうここにはをらぬ。

源太　ここにはをらぬ。

團次　泉州へ送つてしまつた。

源太　逃がしたのだな。

團次　逃がしたのだ。

源太　おのれ。（と言つたが、やがて怒を靜め）かうまで道理を說いても聞いてくれぬなら爲方がない。併し、あの試合の日に約束したことは、よも忘れまい。おれの太刀の不意に折れたのを、お前は何と思つた。だが、それは言ふまい。右内はお前の大事な一人子だ。かへもおれにとつては一人の妹だ。人として憐れみ心のないものはない筈だ。無理ではあらうが、どうか二人を一緒にしてやつてくれ。（兩手をつく）かうして

頼む以上は、返事次第でかへも生きては歸るまい。だが、そのやうなことになつたら、お前の爲にもよくあるまい。心を落ちつけて返事をしてくれ。

園次　やかましい。何度言つても同じことだ。

（立つ。）

源太　あの約束を忘れたか。

園次　忙しいので忘れてしまつた。（行きかける）

源太　待て。

（源太、いきなり妹の襟上を掴み、太刀を拔いて、胸を刺す。）

園次　な、な、何をするのだ。

源太　獸のやうな貴様の心がかうするのだ。返す太刀で貴様を打ち果すのはわけはないが、母が病氣の時、看護をしてくれた禮に、命だけは貴樣にやる。（手を放す。かへ、倒れる）

（源太、おとに構はず、下へ降りる。）

園次　まあ、待て。

源太　嫁入は濟んだ。もう用はない。

（源太、出て行く。園次、死骸の前に崩れなる。）

第三場

再び源太の家。

母、機を織つてゐる。惣治、小刀を磨いてゐる。

源太、歸つて來る。

母　おう、源太か。どうだつた。

源太　濟みました。

母　嫁入が濟んだとお言ひか。

源太　はい。

母　さすがの園次も折れたのだね。

源太　いいえ、あいつはどうしても聞かなかつた

のです。

母　それでは、どうして。

源太　死骸にして置いて來ました。

母　お前が手にかけたのか。

源太　はい。かへはすつかり覺悟をしてゐました。

母　うむ。

（惣治、矢庭に小刀を持つて飛び出さうとする。源太、その手を掴む。）

源太　どこへ行くのだ。

惣治　姉さんの仇を討ちに行くのです。

源太　誰を討たうと言ふのだ。

惣治　伯父の奴です。團次の畜生です。

源太　馬鹿。それをして好いなら、おれがして來る。團次に恨みを報いようとするのは私の心だ。おれが何もかも團次に負けて、忍び難い恨みをも報いずに來たのは、親を重んずるからだ。公の道が大事だからだ。私の怒を以て天下の道を破ることは出來ない。貴樣も武士の弟ではないか。堪へろ。堪へろ。

惣治　堪へられません。堪へられません。

源太　まだ分からぬか。おれは苟にも妹を殺めたのだ。これから公の庭へ訴へ出て、罪を受けなければならないのだ。貴樣までがそんなことをしたら、これからお母さんの世話を誰がするのだ。

惣治　（氣が挫ける）

源太　（手を放し）分かつたか。

惣治　（泣きながら頷く）

源太　では、お母さんを頼んだぞ。（母に）　お母

さん行つて參ります。

（母、默つて泣いてゐる。惣治、母に縋り寄る。二人、相抱いて泣く。源太、下に降り立つ。）

――幕

亭主一幕

人物

源太 自由勞働者(三十四歳)

お絲 その妻 (三十歳)

お君 その娘 (十歳)

三吉 自由勞働者(三十二歳)

場所

吉原附近

時代

現今

舞臺。震災後のバラック建。

そこら中に乾し物がしてある。

手製の竈が家の外の土間に据ゑてあつて、それに鍋がかかつてゐる。鍋の蓋が少し明いてゐてそこから湯氣が立つてゐる。

精々三疊四疊ぐらゐしかないところへ、薄縁の汚いのが二枚敷いてある。

一枚の方には(下手)お絲が坐つて、せつせとマニラ麻をつないでゐる。もう一枚の方には(上手)お君が坐つて、ビール箱を机にして、小學校の學課の復習をしてゐる。

遠くに工場の汽笛だの、電車の音だの、物賣の聲だのが雜つて聞える。

初夏の夕暮。

お君 (聲を出して讀む)「アル家デ9斗ノ米ヲ36日ノ間ニタベタ。スルト1日ニイクラヅツタベタデセウ。」(ちつとも考へずに、直ぐ顔を上げる)お

つかあ、いくらだらう。
お絲　おいらにそんなことが分かるもんか。お前、學校で教はつて來たんだらう。
お君　だけど、あたい分からないんだよ。教はつたんだけれど、九斗の米つてのが、あたいにはよく分からないんだよ。
お絲　九斗の米つたら、お前大變だ。内なら一年ぐれえあらあ。
お君　だけど、それを三十六日に食べたんだとさ。
お絲　おつそろしく食やがつたな、よつぽど人數（にんず）が多いんだらう。
お君　だから、一日にいくら食つたんだらう。
お絲　分からねえよ、おいらにや。自分で考へるが好いぢやねえか。人面白くもねえ。九斗の米をたつた一月で食つちまふなんて。
お君　（諦めて又次ぎを讀む）「1圓デ2升5合ノ米ハ5圓デイクラ買ヘマスカ。」（又直ぐ母親の方を見る）おつかあ、いくら買へるだらう。
お絲　うるせえな。何だい。
お君　一圓で二升五合なんだとさ、そのお米が五圓でいくら買へるつて言ふのさ。
お絲　知らねえよ。おいらあ五圓なんてお米を買つたことはねえから。（絲をつなぎながら）ふんとに厭なことばかり教へやがるんだな。學校つてところは。
お君　でも、これは算術のお稽古だから爲方がないよ。
お絲　何のお稽古だか知らねえが、もう少し役に立つことを教へやがりや好いぢやねえか。（獨言

のやうに）　五圓でいくら買へるなんて。それよりやあ十錢でいくら來るか敎へて貰ふ方が好いや。

お君　（又大きな讀む）「30日間ニ42圓トル人ガ4日休ミマシタ。スルトイクラトリマスカ。」

お絲　（どなる）もうよさねえか。お君。ふんとに氣の惡いことばかり書いてある本だな。そんな本ほうつちやつちまへよ。四十二圓だなんて聞いただけでも氣持が惡くならあ。四十二圓取れりや、四日や五日休んだつて何だ。

お君　（本をふせて、母親の側へ來る）おつかあ、何そんなに怒つてるんだ。おいら勉强してるんぢやねえか。

お絲　勉强なんかしねえでも好いよ。それより早く辻占でも賣りに行きねえ。

お君　ああ。だけど、おまんま食べないと、おなかがすくもの。

お絲　おまんまなんか、歸つてから食べりやあ好いよ。

お君　でも、それぢやあおそくなるもの。それに、こなひだのやうにお巡りさんに捕まりでもすると、夜中までなんにも食べられないもの。

お絲　お巡りに捕まるのは、手前が間拔だからぢやねえか。（巾着から銅貨を一つ出す）さあ、一錢やるから、腹がすいたら煎餅でも買つて食べるが好いや。

お君　（銅貨を受けとつて）これぢや一枚ツきや買へないよ。

お絲　一枚で澤山だ。澤山賣つて歸つて來たら、おまんまをどつさり食べさせてやるよ。

お君　けふのお菜(かず)何だい。

お絲　まだ分からねえよ。

お君　あの鍋ん中は何だい。

お絲　お湯だよ。なんにもへえつちやゐねえんだよ。

お君　（あたりを見廻す）おつかあ、お鉢何處にあるんだい。

お絲　しまつてあるよ。心配するにやあ及ばねえよ。（少し聲を落す）ふんとに可哀さうになあ。

お君　何だい、おつかあ。

お絲　ちやんさへゐりやあ、こんな目にやあ會はせねえんだ。ふんとに困つたもんよなあ、お前のちやんは。

お君　ちやん、いつ歸つて來るんだい。

お絲　分かるもんか。

お君　だけど、あたい、をぢさんがゐるから、ちつとも寂しかあないや。

お絲　三ちやんだつて、いつまでゐてくれるか分かつたもんぢやありやしねえ。

お君　をぢさんはお金をくれるんだらう。

お絲　屋根代とおまんまの代を拂つてくれるんだ。それと、おいらの麻絲と、お前の辻占でやつと暮らしてゐるんだ。だけど、三ちやんだつて、定(きま)つた職があるわけぢやねえから、いつ何時(なんどき)出て行つてしまふか分からねえんだ。

お君　ぢやあ、おつかあ、困るねえ。

お絲　困るとも。

お君　あたい、學校よさうか。

お絲　いくら、苦しくても、尋常だけはやらしてえと思つてるんだが、どうもかう苦しくつちや

がる。中の湯が減つてゐるので、水を差す。三吉、表の戸口から歸つて來る。）

お絲　ばかにおそいぢやねえか。

三吉　（はひつて來ながら）けふはの。區役所の爲（し）事をしたんだが、會計の野郎なかなか金を拂つてくれやがらねえんだ。何しろ、かう兵隊見たいに並ばして置きやあがつて、一々名前を呼ぶんだ。ところが、中にやあ自分の名字（みやうじ）を知らねえ奴が居るんだ。知らねえこともねえんだらうが、ふだん苗字なんかで呼ばれるやうなことがねえもんだから、それ、堀田とか、鈴木とか言はれても知らん顔をしてるんだ。すると、返事をしねえから當人ぢやあねえつてんで、なかなか金を渡さねえんだ。ところが、當人實際働いてるんだから、それぢやあ濟まねえ。そんなこ

あしやうがねえ……（氣を變へて）まあ、そんなことはどうでも好いや。早く辻占賣つて來ねえ。もうそろそろ素見（ひやかし）の出る時分だ。

（外はいつの間にか、日が暮れてゐる。）

お君　（辻占を持つて土間へ降りる）ぢやあ、おつかあ、行つて來るよ。

お絲　たんと賣つといでよ。（と言ふ。電燈がつく）

お君　あい。お茶屋の若竹さんね。あすこの娘さんは、あたいが行くと、いつでも可哀さうだ可哀さうだつて、きつと五錢ぐらゐ買つてくれるんだよ。

お絲　ぢやあ、けふも忘れずにおいでよ。

お君　ああ。（退場）

（お絲、一しきり又絲をつなぐ。それから、土間へ下りて、鍋の蓋をあける。湯氣がぱつと上

んなで、日が暮れつちまつたんだ。三公とか繁公とか呼びやあ何でもねえのに、つまらねえ手數をかけたもんよ。

お絲　まあ、好いから、早くいつものものを貰はうよ。

三吉　おい來た。(汚い腹掛から錢を出す)　これが屋根代で、これが賄だ。手數のかかつた代り、けふは少し身入がよかつたから、賄の方は五錢だけはずむぜ。それから一合買つてくんねえか。

(別に又金を出す)

お絲　大層な景氣だねえ。

三吉　まあ、二三日はこの爲事が續きさうだから。

お絲　へえ、たいしたもんだね。何だい。爲事は。

三吉　あの、京屋横町の消火栓のところが悪くなつたんだ。まるで洪水さ。好いあんばいにけふ一日ぢやあ、とても直らなかつた。

お絲　土ほじりかい。

三吉　ああ。外におれは能がねえんだから爲方がねえや。もぐらもちの三吉だ。

お絲　自慢にもならねえよ。(味噌こしを取る)

三吉　おい。早く酒を買つて來てくれよ。

お絲　今行くとこだよ。

三吉　おまんまはあるのか。

お絲　まだ一かたきぐらゐは焚いたのが殘つてるよ。

三吉　(見廻す)　お鉢が見えねえぢやねえか。

お絲　(金を見せる)　今これで取りに行くんだよ。

三吉　また近江屋か。

お絲　だつて、お君の奴が鉛筆がほしいほしいつてしやうがねえんだもの。

三吉 は、は、は。さうか。まあ、早く行つて來ねえ。

（お絲出て行く。）

（三吉、腹掛などとる。股引一つで土間へ降り、汚い手拭を水に浸して、身體を拭く。それから、上へ上がつて、單衣の皺くちやになつたのを着る。それから、隅つこに置いてある箱膳を出して來て、茶碗箸を揃へる。）

○ 郵便。

（といふ聲が表でする。）

三吉 郵便。

（と不思議さうな顏をして、表の戸を明ける。郵便配達夫が立つてゐる。）

郵便配達夫 鈴木お絲さんてのは、こちらですね。

三吉 ああ、さうだ。

（郵便配達夫、默つて葉書を一枚渡して行つてしまふ。三吉表をしめる。）

三吉 （葉書を見る）源公から來たんだな。熊谷にてか。あいつ、熊谷へ行つてやがるのか。何か爲事にありついたな。

（お絲、片手に味噌こしと德利とを持ち、片手にお鉢を抱へて歸つて來る。）

三吉 源公から葉書が來たぜ。

お絲 へえ。（と言ひながら、それを見ようともせずに、味噌こしや德利やお鉢の始末をする）

三吉 熊谷へ行つてるんだとよ。

お絲 誰が。（お菜ごしらへに夢中である）

三吉 源公よ。

お絲 源公のことなんかおいら忘れつちまつたよ。（鍋の中へ何か入れながら）お酒はお前自分で燗をしてくれるかい。

三吉　ああ。（德利を見て）こいつあ氣が利いてたな。燗德利を借りて來たのかい。
お絲　ああ。さうさう、序におちよこも借りて來たよ。（懷から杯を出す）
三吉　ほう、そいつあ豪勢だな。（と言ひながら、土の火入れに火をとつて、それに土瓶をかけ、その中へ德利をつける）お茶は何だい。
お絲　油揚さ。
三吉　しみつたれだな。なんだ、それだけか。なぜ乾物の一枚も買つて來ねえのだ。五錢張り込んだのに。
お絲　でも、お鉢が少し高くはひつてるたんだもの。
三吉　いつでもあんなことを言つちやあ、ごまかしやがるんだ。
お絲　何もごまかしやしねえよ。いつだつて直段だけのものは食べさせてるぢやねえか。
三吉　どうだか分かるもんか。
お絲　なんだと。
三吉　まあ、まあ、好いやな。さう怒るもんぢやあねえよ。
お絲　ふんとに、人面白くもねえ。
三吉　（德利を土瓶から出して）さう怒んなさんなつてことよ。ちつとぐらゐ頭をはねたつて爲方がねえやな。全く麻絲と辻占ぢやあやり切れめえからなあ。
お絲　そのくらゐ分かつてりやあ。何も厭がらせを言はずともことぢやねえか。
三吉　あやまつた。まあ、こつちへ來て一杯やんねえ。お前もいけるロだ。（と言ひながら、自分が

先づ一杯飲む）

お絲　（すつかり機嫌を直して、上へ上がる）有難いねえ。三月ぶりだよ。

三吉　おれも、これで半月ぶりだ。（と言ひながら酌をしてやる）一つその油揚つて奴を頂かうか。

お絲　あいよ。（一杯飲んでから下へ降りる。それから鍋を持つて来て、薄縁の敷いてない床へぢかに置く。それから皿へよそふ）少しからいかも知れねえよ。

三吉　（椀に一口口をつける）なあに、丁度だ。

お絲　でも、お前さんに仕合せだねえ。四月からずつと休みなしだから。

三吉　でも、ことしやあ随分雨にたたられたよ。

お絲　さうさ。随分長雨で困つたことがあつたねえ。

三吉　さうよ。あの七日も續けて降られた時あ、もうお前んとこも出なけりやあならねえかと思つたよ。

お絲　何から何まで曲げてしまつたけね。

三吉　裸で蒲團にくるまつてゐたな。でも、お前よくおれを追ひ出さなかつたなあ。

お絲　よつ程追ひ出さうかと思つたけれど、天氣になりせえすりやあ稼ぐ人だと思つたから、それでおいらあ我慢してゐたのさ。お前に行かれつちまつちやあ、實際おいらあ困るんだからね。

三吉　それぢやあ、おれでもやつぱり足しになるんだな。

お絲　そりやあなるともさ。（間）さう言ふと、何かずるいことでもするやうだが、さういふわ

けぢやあねえ。二人食ふのも三人食ふのも、てえして違はねえものだからねえ。そこへお前がいくらか出してくれるだらう。だから助かるんだ。

三吉　可哀さうに。源の野郎せえゐりやあこんなことはねえんだ。あいつ、まるで金を送つて來ねえのか。

お絲　びた一文送つて來やあしねえ。おいらあ、もうあんな奴は當てにしやしねえよ。

三吉　（葉書を見せる）見ねえ。今度はそれでも、こんなものをよこしたんだ。きつとうめえ爲事にありついたんだらう。もう少しの辛抱だ。その内、きつと爲替が來らあ。

お絲　厭なことをお言ひでないよ。そんなことを言つたつて、おいらあ當てになんかしやしねえよ。何が出來るもんか、あんなぐうたらに。あんな奴はもう亭主だとも何とも思つてやしねえよ。

三吉　だとつて、折角今まで辛抱したんぢやねえか。

お絲　厭だよ。おいらあ、あいつの歸るのを待つて、辛抱してるんぢやねえよ。爲方がねえから、かうやつてゐるんだよ。誰でも世話をしてくれるつて人があれば、いつでもそこへ行くよ。

三吉　ぢやあ、おれとでも一緒になるか。

お絲　なるともさ。

三吉　は、は、は。だが、そいつあ、おれの方でお斷りだ。やつぱり屋根代に賄料の方が氣樂で好いや。おらあとても女房つ子を世話してく力はねえや。

お絲　そんなら、およしよ。誰もこつちから頼みやあしねえよ。

三吉　だが、源公はあれで好い亭主だぜ。世間になかなかあんな亭主はねえぜ。おらあちいつぽけな時分から知つてるが、あんな堅い男はねえや。女といつたらお前ひとりぐらゐなもんだらう。

お絲　だから、いくぢなしだつてんだよ。男は浮氣の一つもするやうにならなきやだめだよ。

三吉　その癖、浮氣をすりやあ燒くんだらう。

お絲　誰が燒くもんか。おいらあ喜ぶよ。

三吉　さういふ風だと、このおれなんかも、さぞいくぢなしに見えるだらうなあ。夜はちやんちやんと歸つて來るし、女なんか見向きもしねえんだからな。

お絲　お前さんはどうだつて好いよ。お前さんはおいらの亭主ぢやねえんだから。

三吉　なるけつ。これは大きに憚り樣だ。

お絲　だけど、お前さんも男ざかりだのに、よくさうやつてくすぶつてゐられるねえ。そんなに溜めてどうするんだい。

三吉　（笑ふ）全くだ。そんなに溜めてどうするんだ。

お絲　けふは景氣が好いつてんぢやねえか。なかでも一廻りしといでよ。

三吉　いやだ。おいらあ、お前とかうやつてる方が好いんだ。

お絲　お前、おいらに惚れてるね。

三吉　うむ。惚れてる。

お絲　冗談ぢやねえよ。おいらあ子持だよ。

三吉　子持だつて構はねえ。
お絲　お前、さつきおいらと一緒になるなあいやだつて言つたぢやねえか。
三吉　當り前よ。
お絲　ぢやあ、惚れてるつてのは噓かい。
三吉　噓だ。
お絲　何を言つてるんだか、ちつとも分かりやしねえ。
三吉　まあさ。怒りつこなしだ。怒りつこなしだ。
（突然、表の戸が明いて、腹掛に半纏一枚の源次が、ぬつと現れる。）
三吉　おう、源公、歸つて來たた。
源次　何をふざけた眞似をしやかるんでえ。
（源次、いきなり三吉とお絲の間に置いてある箱膳を蹴返す。三吉もお絲もびつくりして立ち上がる。）
お絲　何をしやがるんでえ。源公。
源次　そりやあ、こつちで言ふこつた。お取り膳で飯なぞ食やがつて。
お絲　（大聲に笑ふ）ばか野郎。膳は一つつきやねえんだよ。
源次　亭主のゐねえのを好いことにしやあがつて、一緒になるの、惚れたのつて、畜生、外にやあ聞いてる人間がゐるんだぞ。
お絲　誰が聞いたつて構ふもんか。うしろ暗えことはこれつばかりもねえんだ。
三吉　おい、源公、あわてちやいけねえ。まあ、氣を落ちつけなよ。お前が留守の間、おれが間借りをすることあ、お前も承知だつたぢやねえか。
源次　さうよ。それがどうした。

三吉　だから、間借りをしてるだけぢやねえか。
源次　間借りだけぢやあるめえ。
三吉　何だと。
源次　この不景氣に、好い氣になりやあがつて、ふたりで酒なんか飲んでやがるんだ。
三吉　酒はおれが買つて、おれが飲んでゐるんだ。餘計な世話を燒くねえ。
源次　餘計な世話だと。
三吉　ああ、餘計な世話だ。
源次　何を。こん畜生。（いきなり三吉の横つ面をぶつ）
三吉　野郎、ぶちやがつたな。（源次にかぶりつく）
（暫く爭鬪が續く。お絲も三吉と一緒になつて、源次をなぐる。その内、みんなへとへとになつて薄縁の上にへたばる。）
お絲　（息を切らしながら）そんなに亭主風が吹かしたきやあ、亭主らしくするが好いや。三月も四月も家を明けつ放しにして、びた一文送つてよこさねえぢやねえか。
源次　（息を切らしながら）爲事がなけりやあ爲方がねえぢやねえか。
お絲　へ、爲事がねえもよく出來た。手前は好いことをして歩いてゐやがるくせに。
源次　何が好いことをするもんか。
お絲　おやあ。こんだも文なしで歸つて來たのか。
源次　當りめえよ。
お絲　（叫ぶ）やい、出て行け。このぐうたらべえ。
源次　何、ぐうたらべえだと。（いきり立つが、もう掴みかかる氣力がない）

お絲　よくも、それでづうづうしく歸つて來られたもんだ。（立ち上つて、源次の襟がみをとる）さあ、出て行け。ここはおいらの家だ。この不景氣に居候は置けねえよ。

源次　（弱くなる）ぢやあ、三吉は錢を出してゐるのか。

三吉　當りめえよ。屋根代だつて、賄だつて、ちやんと拂つてらあ。

源次　（物が言へない）

お絲　さあ、出て行け。出て行かねえか。（源次を表へ引ずり出す）家へ歸りたきやあ錢を持つて來い。

（源次、口の内で何かごとごと言ひながら、それでも、おとなしく表へ出る。やがて何處かへ行つてしまふ。お絲、表の戸を締める。）

お絲　三ちやん。

三吉　（うなだれて、考へ込んでゐたが、呼ばれて顏を上げる）何だい。

お絲　もう、かうなつちやあ爲方がねえ。お前、おいらの亭主になつてくれよ。

三吉　（少しも躊躇せずに）いやだ。

お絲　いやだ。

三吉　ああ、いやだ。おらあ、つくづく厭になつた。夫婦つてものが。

お絲　だけど、お前とおいらなら大丈夫だよ。

三吉　だめだ。おれだつて、いつ何時（なんどき）爲事がなくなるか分かりやあしねえ。

お絲　さうすりやあ、おいらが立て引くよ。

三吉　當てになるもんか。（立ち上がつて、腹掛や股引を汚い風呂敷に包む）

お絲　お前、どうするんだ。

三吉　もう、お前んとこは出て行くよ。

お絲　なぜ。

三吉　つくづく厭になつた。

お絲　だつて、何もお前さんが悪いわけぢやあねえ。

三吉　だから、おらあ厭になつたんだ。

お絲　でも、もう源公たあ縁を切つちまつたんだから好いぢやねえか。

三吉　それが、おらあ氣に入らねえんだ。おらあ、これから源公を追つかけて行つて、あした區役所へ一緒に連れてつてやらあ。

お絲　分からねえなあ。

三吉　分かるめえ。（下駄をはく）

お絲　男つて變なものだねえ。

三吉　變なものよ。（表から行つてしまふ）

（お絲、ぢつと坐つた儘、ぼんやり考へて居る。）

（お君、土間の方から歸つて來る。）

お君　おつかあ、けふは五十錢まうけて來たよ。

お絲　（默つてゐる）

お君　おつかあ。けふは竹若のお客がねえ。可哀さうだつて、澤山買つてくれたんだよ。（金を出す）さあ。だがら、おまんま直ぐ食べさしておくんな。

お絲　（默つてゐる）

お君　ねえ、おつかあ、おまんま食べても好いかい。

お絲　（低い聲で）勝手にお食べよ。

お君　（あたりを見廻し、ひつくり返つて蓋の明いてゐるお鉢を持つて來る）お茶あるかい。

お絲　ないよ。

（お君、鍋のひつくり返つてゐるのを見て、不思議さうな顔をしたが、黙つて、土瓶をとつて來て、飯に湯をかけて食べる。）

お君　このお湯、お酒くさいね。

お絲　（お君の顔をぢつと見て、黙つてゐる）

（お君、我慢して、飯をかつ込む。）

（お絲、暫くその樣子をぢつと見てゐたが、やがてしくしく泣き出す。お君、何か訊かうとするが、訊いては惡いと思ふ樣子で、又飯をさくさくかつ込む。お絲わつと泣き出す。）

奈　落　一幕

人　物

吉　さ　ん　五十歳位
八　さ　ん　四　十　歳
芳　さ　ん　二十六歳
矢　　　田　四十六歳
（以上四人）穴番

端役の野村　二十四歳
大道具の青木　二十五歳
消防數名、他の穴番數名
　物を言はぬ役
大夫元の村島　四十二歳
澤村田四郎
市川だん六
（以上二人）年をとつた下廻り
おかるに扮した役者
一文字屋女房に扮した役者
女衒に扮した役者
猟師に扮した役者三人
男衆數名

場　所

どこでも構はない——だが、現在こんな劇場はどこにもあるまい。

時　代

いつでも構はない——だが、こんな劇場は現在はあるまい。

舞臺は廻り舞臺を持つた或る古風な劇場の奈落の一部。にな黴の出てゐるぶん廻しの中心の柱が向

うに大きく見えてゐる。左手から右手へ、土間の上にぢかに置いた歩み板が走つてゐる——右手へ行けば花道の揚幕、左手へ行けば樂屋の階段がある心である。歩み板に沿うて、一段高くなつた三疊敷ぐらゐの場所がある。そこには爐が切つてあつて、廻りに疊莚が敷いてある。上に小さい神棚があつて、それに燈明が上げてある。大入袋が列べてはつてある。大道具の一部だの、小道具の大物などが、雜然とそこらに置いてある。燈が必要だけしか點いてゐないので、場所に依つて明暗の度がはげしい。奥の方は一體に薄暗くて、唯、舞臺の下部の骨組が氣味惡く見えてゐるだけである。奥の上一體は舞臺の床の裏が見えてゐるわけだが、これは暗くて、よく分からない。

爐の廻りで、穴番が三人、采を使ふ賭博をやつてゐる。白髪頭で赤い顔をした富さんが胴をとつてゐて、壺で采を伏せたり明けたりしてゐる。若いのに頭のすつかり抜け上がつてゐる芳さんと、不思議に色の白い八さんが、その左右に胡坐をかいて、しきりに采の目を見詰めてゐる。時々、金のちやらちやらいふ音がする。だが、これはこの一群から聞えて來るのではない。爐のこつち側に一人離れて坐つてゐる、髪の毛と不精髭をぼうぼう生やした、他の三人に比べると著しく薄汚ない矢田といふ穴番が、銅貨や白銅を柱のやうに積んでその勘定をしてゐるのである——上の舞臺では、丁度今假名手本忠臣藏の六段目を演じてゐる最中である。併し、上の物音は餘程高い場合でないと、ここまでは聞えて來ない。

暫く、富さんが采を振る音と、矢田が金を勘定する音で、舞臺が支配される。賭博をしてゐる連中は、時々小聲で何か言ふ樣子であるが、それは聞えない。八さんが一二度、矢田から金を借りる。そのたんびに、矢田は懐から小さい手帳を出して、それに何か書き入れる……

歩み板を左手から右手へ、太夫元の村島が默つて

通ちの大島のくみに同縞の袷を穿いて、鼻の下にちよぼつと髭を生やしてゐる。幅の廣い金の指輪が目につく。村島は穴番さの坐つてゐる前を通りながら、ふとその方に目をつける。醜い因業な眉の間に見せるが、すぐ默つて行つてしまふ——富さんは直ぐ氣がつかない。相變らず勝負を續けてゐる……

暫くすると、おかるに扮した役者と、一文字屋の女房に扮した役者と、女衒に扮した役者とが、そそくさと右手からはひつて來て、左手へ消える。男衆が三人、そのあとを追ふ。やがて、そのあとから駕籠舁のこしらへをした老優澤村田四郎と市川だん六が、疲れたやうに空の四つ手駕籠を擔いで來る。そして、駕籠を左手の歩み板の向うに置くと、田四郎の方はよぼよぼと行つてしまふ。だん六は駕籠の中の蒲團へ腰をおろすと、小さくなつて居眠りにかゝる——役はこの芝居の道行中、ずつと遠唱がりで眠つてゐるのである……

右手から奥役の野村が出て來る。まつすぐに富さんの前へ來て、立ち留る。唐桟の着流しで、一本獨鈷な金の鎖が摺んでゐる。金縁の眼鏡、頭をまん中から綺麗に分けてゐる。今湯から出て來たばかりのやうに、顔がてらてら光つてゐる。

野村　（哀願するやうに）富さん、困るぢやあないか。

富さん　（首を上げる。默つて、野村の顔を見てゐる）

野村　ねえ、富さん、お前さんが先に立つて、そんなことをしてくれちやあ困るぢやないか。

富さん　なにが。

野村　なにがつて、それがさ。（壺を持つやうな手つきをする）これさ。困るぢやないか。

富さん　誰が困るんだ。

野村　あつしがさ。あつしが困るぢやないか——今ここを太夫元が通つたらう。不取締だつて、

すつかりカスを食つちまつたんだ。

富さん　さうか、太夫元が通つたのか。

野村　知らなかつたのか。夢中になつてたんだね。どうも困つたよ。なんしろ内の太夫元と來たら大嫌ひなんだからね。

芳さん（突然口を出す）好き嫌ひでやつてるんぢやねえよ。爲方がねえからやつてるんだ。

八さん　さうよ。お前さんはさつきから困る困るつて言つてるが、困るといふなあこつちのこつた。困るからこんなこともするんだ。

野村　そりやあ、困りもするだらうが、何もこんなことをしなくたつて。

富さん　そりやあいけねえ、野村さん。「困りもするだらうが」たあ何て言ひ草だ。それが分かつてるなら、困らねえやうにしてくれたら好いぢやあねえか。さうすりやあ、おれだつて、何もこの年をして、こんなことはしやあしねえ。

野村　だが、それはあつしにやあ分からないこつた。太夫元さんの腹にあるこつたから。

芳さん　返事に詰まりやあ、なんでも、そりやあつしにやあ分からねえと來るんだ。それが奥の手よ。

富さん　だが、ねえ、野村さん。お前さんは今太夫元がやかましいからつて言つたやうだつたね。

野村　ああ、さうだ。

富さん　ぢやあ、お前さんは太夫元の使で來たわけだらう。

野村　まあ、そりやあ、さうさ。

富さん　太夫元さんはなんて言ふんだ。唯やめろ

つて言ふのかい。それとも、こんなことをしねえでも濟むやうにしてやるからやめろつて言ふのかい。

野村　（困つて）そりやあ、その……唯やめて貰ひたいつて言ふんだ。

芳さん　そんな取支をする奴があるかい。ばか野郎、

野村　（少しも怒らない）でも、どうもしやうがないんだ。まあ理窟はよしにして、どつちにしても、あんまり好いことぢやないんだから。

芳さん　ぢやあ、太夫元は好いことをしてるのかい。太夫元のしてることだつて博奕ぢやあねえか——あんまり好いことでもござんすまいよ。

八さん　さうだらうだ。お芝居のはこんなちつぽけなんだが、太夫元のはずつと大きいんだ。何萬てんだからな。こんだの忠臣藏だつて、さうだつて言ふぢやあねえか。みんながもう時代が時代だからだめだつて言つたのに、太夫元がひとりでがん張つたんだつて言ふぢやねえか。一六勝負が當つたんだ。

芳さん　（野村に）差しつめ寺錢はお前が取るんだらう。ヨナイと言つてね。

野村　（やはり怒らない）ヨナイは何もこんだに限つたことぢやない。その代り、僕はお給金といふものを貰つてやしない。

（左手から右手へ、獵師に扮した役者が三人、人形で出來てゐる與一兵衞の死骸を戸板にのせて、默つて通つて行く。）

富さん　（話をついで）さあ、そのお給金といふ奴だ。野村さん、まあ、落ちついてよく聞きよ。

凡そこの世の中で何が癪に障るつて、その「お給金」て奴ほど癪に障るものはねえんだ。成程、おれ達は「お給金」を戴いてらあ。お前さんは「お給金」を貰つちやあゐねえ。だが、その「お給金」を貰つてゐねえお前さんとお給金を貰つてゐるおれ達とを比べて見ねえ。お前の體はその通りぴかぴか光つてゐるのにおれ達は食ふものもろくに食つちやあゐねえんだ。でも、おれなんざあまだ好いんだ。年もとつてるし、内にやあ婆あが一人ゐるつ切りだが、八さんや芳さんは女房つ子を抱へてゐるんだ。四十錢や五十錢のニチでどうしてやつてけると思ふんだ。だからよ。おれ達だつて「お給金」て奴を貰ひせえしなけりやあ、もつとよくなるかも知れねえんだ。どうだい、野村さん、太夫元さんに一つそ言つて貰はうか。これから「お給金」は願ひ下げにいたしますからつてね。

野村　（まじめな顔で）さうして、これからどうするんだ。

富さん　會社で言やあ株主だ――まあ、お前さんのやうな扱ひにして貰ふんだね。「お給金」なしで、ひとりでにほつほが暖まつて來るといふやうな工合式にね。

野村　（笑つて）そりやあ、だめたよ。富さんにも似合はない無理なことを言ふぢやないか。これでもあつしはこの小屋の幹部なんだからね。

芳さん　ぢやあ、何かい、野村さん。おれ達のしてる爲事が詰まらねえことだから、そんな待遇は出來ねえと言ふのかい。

野村　なに、さういふわけぢやあないけれど……

芳さん なあに、さうに違えねえ。さうならさうとはつきり言ひねえ。

野村 なに、決してさういふわけぢやあないよ。太夫元さんだつて、氣の毒だ氣の毒だつて言つてるんだけれど、なにしろ大道具小道具の諸式は高くなるし、役者の仕込だつて、この頃は容易なこつちやあないし、つまり腹ぢやあ思つてゐても、そこまで手が屆かないんだよ。

八さん つまりおれ達は一番後廻しだつてわけか

成程——おれ達は地の底にゐるんだからな。

野村 (ますます陰鬱になつて) まあ、さう皮肉に言ひつこなしさ。その方のことは又將來共に骨を折るから、それはそれとして、けふのところは僕の顔に免じて、一つそいつはやめてくれないか。

芳さん (ぶつきらぼうに) やめねえ。

野村 こんなに賴んでもかい。

芳さん ああ、困らなくなるまでは、やめねえ。

(獵師に扮した役者が三人、右手から左手へはひつて行く。)

野村 (顏に或變つた感情が現れる。だが、それはまだ怒でもなければ反抗でもない) 僕は理窟を言ひに來たんぢやないから、唯賴んでやめて貰はうと思つたんだが、そんなに分からないことを言ふなら爲方がない。僕も一理窟言はなきやならないね。

八さん ああ、なんでも言ふが好いや。

野村 君達は食へないから、こいつをやると言ふんだね。

芳さん さうだ。

野村　ぢやあ、これをやれば、きつと食へるんだね。（ほんの一寸間を置くが、相手が返事をするまでは待たないで）負けたら、どうするんだ。

富さん　（突然笑ひ出す）は、は、は、それが分からねえのか。悪黨に見えても、やつぱりお前はまだ若えや。（一寸間を置いて）そりやあ、負けりやあ尙困るにきまつてらあ。だが、これをやつてる內は、若し勝てばといふ當てがあらあ。なんにもしねえで、まるで當てなしでゐるよりやあ、どんなに增しだか知れやしねえ。その氣持だけでも、生きてるやうな氣がすらあ。

野村　成程、そりやあそんなものかも知れないけれど、何もこんなことをしないだつて……

芳さん　ぢやあ、どんなことをすりやあ好いんだ。

野村　さう言はれると、あつしも困るけれど、たとへば今ここにゐた矢田だ。（矢田は、いつの間にかゐなくなつてしまつてゐる。勿論、銅貨や白銅の柱もない。唯、さつきまでは見えなかつたが、その坐つてゐたところに辨當の空箱が三つ四つ積まれてゐる）

八さん　矢田がどうしたい。

野村　感心ぢやあないか。內で貰ふお給金だけで、もう五百圓も溜めてゐるといふぢやないか。酒は飲まず、煙草はやらず、女買もしなけりやあ、博奕一つしやしない。人間は心がけ一つだ。

芳さん　お、お、お。ちよつと待つてくんねえ。おれ達は江戸つ子だ。客の辨當の殘りなんぞ食つちやあゐられねえや。何も贅澤を言ふんぢやねえ。行辨（かうべん）でも好いから、手つかずのものが食ひてえや。

八さん　それに、矢田はひとりものだ。おつかあもなきやあ、餓鬼もねえんだ。おまけに住ひはこの奈落だ。矢田とおれ達が一緒になるもんか。

富さん　野村さん。お前は矢田が日銭を貸してるのを知らねえのか。高が高だから氣がつかねえが、たいした利だぜ。目の玉が飛び出るやうだ。それでも、座の者はみんな苦しいから借りるんだ。その又催促のしやうが一種特別なんだ。あいつのこつたから、何一つ口を利くんぢやねえ。日切りが来ると、相手のそばを離れねえんだ。金を返さねえ内は、だにのやうにくつついてゐやがるんだ。湯へも床屋へもいつたことのねえ人間だから、汚ねえつたらありやしねえ。それでまあ、大抵な奴は降參して、着てる物までも取られつちまふんだ。あんな奴はねえ。

芳さん　あんな奴とおれ達が、一緒になるかい。なんでえ。一理窟だなんて言やがるから、どんな尤もなことを言ひ出すかと思やあ、そんなばかなことを言ひ出しやあがつて、そんなことでおれ達が負けるかい。

八さん　好いから、もう行きねえ。爲事の邪魔だ。

野村　（笑つて）いや、行かないね。太夫元の言ひつけ通りにするまでは行かないね。

芳さん　（大きな聲をする）行かねえと。なんだ、この野郎。

野村　（宥めるやうに）まあ、さう大きな聲をしちやあいけない。（上を指さす）上では芝居をやつてゐるんだ。

芳さん　上よりやあ下の方が、よつぽど芝居だ。上の芝居は金のある奴が閑にあかして見る芝居

だ。こちとらの芝居はもつと眞劍だ。

八さん　おい、芳公。（地面を指さす）まだこの下にも芝居があるかも知れねえぞ。

芳さん　大きによ。お蔭でおれ達が苦しんでるのかも知れねぇや。

八さん　一體、この下にゐる。（地面を指さす）穴(あな)番(ばん)はどんな面をしてやがるだらう。

富さん　大方、金縁の眼鏡をかけたり、八字髭(はちのじひげ)を生(は)やしたりしてゐやがるだらう。

野村　（はじめて少許りの憤りを顏に現す）ぢやあ、君達はどうしてもやめないと言ふんだね。

芳さん　當りめぇよ。（富さんに）さあ、富さん、始めようぜ。

野村　よし。こんなに言つても聞かなけりやあ僞方がねえ。太夫元にそ言つて、首にして貰ふばかりだ。

富さん　首に。そいつあ面白えや。するなら、して見ねえ。あしたから舞臺は廻らねえぞ。

芳さん　ぐるぐる廻りの忠臣藏が、ゐびつたれの忠臣藏にならあ。

野村　なあに、代りはいくらでもあらあ。（捨臺詞を殘して行きかける）

富さん　ばか野郎、こんなどぢな僞事をする奴がどこ探したつてあるものか。

（野村は富さんの聲を浴びながら、ぷりぷりして、右手へ消えてしまふ。三人は痛快さうに聲を合せて笑つたが、それは直ぐ、寂しい、聲のない苦笑に變つてしまふ――或不吉な豫感が同時に三人を襲つたのである。）

（上の舞臺から篠入の合方が微に聞えて來る。）

芳さん　（沈んだ聲で）富さん、もう一番やらうよ。

富さん　（これも沈んで）気がねえなあ。

八さん　（自分で自分を嘲くやうに）なあに、野村の野郎に何が出来るもんか。

（富さん、籤を引き、芳さんと八さんが賭ける。三人はまるで口を利かないで、暫く勝負を続ける。）

（突然左手から人足頭の吉公が駈け込んで來る。）

吉公　（小聲で、併し力強く）大變だ。大變だ。

富さん　どうしたんだ。（と言ひながら、覺えずそこらの道具をしまふ。芳さんも八さんも顔色が變る。みんな、出してあつた金をしまふ）

吉公　矢田の野郎、ぬすつとなんだとよ。こなひだ中、この飯場のやられたのは、みんなあいつなんだとよ。盗つた金はみんな銀に崩して、自分がけちけち溜めたやうに見せかけたんだとよ。

芳さん　それ見ろ。そんなこつた。

富さん　あいつは、おれ達より度胸があつたんだ。

八さん　あいつだつて、やつぱり食へねえんだ。

吉公　（急いで）兎に角、今逃げて來るから、どうかしてやつてくんねえ。部屋へ隱したんだが、あすこはどうもあぶねえ。すぐこつちへよこすから。

富さん　もう手がへえつたのか。

吉公　あいつが隣部屋で誰かに金の催促をしてるところへ、[illegible]屋口から、いきなり四五人飛び込んで來たんだ。

富さん　よし。ぢやあ、早く逃がしてよこしねえ。

（吉公、左手へ驅けてはひる。三人、立ち上がる。舞臺に、上でチョーンと拍子木が鳴る。）

八さん　いけねえ。切つかけだ。

富さん　爲方がねえ。

（三人、急いで擔ひ棒へ飛んで行く。外からも二三人黑い影が出て來て、擔ひ棒に取りつく。二度目の拍子木がチョンと鳴る。穴番達は舞臺を廻し始める。）

（途端に、左手から眞つ蒼な顔をして、矢田が飛び込んで來る。右の手に何だか光るものを持つてゐる。みんなが舞臺を廻してゐる奥の暗い方へ逃げる。）

（暗闇で舞臺の廻る音と、上の舞臺の賑かな合方とが交錯する。）

（刑事が四五人、ばらばらと左手から飛び込んで來る。矢田の姿を見つけると、その方へ飛んで行く。矢田は穴番達が棒を押しながら、ぐるぐる廻つてゐる中を巧みに逃げ廻る。刑事達もその中を右往左往する。）

（留め木が鳴る。穴番達は知らん顔をして、ますます舞臺を廻す。上から舞臺の床を突く音がする。それでも棒はず廻してゐる。立て續けに狼狽したやうな合圖がある。それでも、まだ舞臺を廻してゐる。）

（突然、合方がやむ。「幕だ、幕だ。」と叫ぶ聲がする。見物のどつと叫ぶ聲がする。）

（太夫元の村島と奥役の野村が右手から飛んで來る。）

（矢田と刑事達の格鬪が始る。）

（舞臺はますます激しく廻る。）

（市川だん六は死んだやうに、駕籠の中で眠つてゐる……）

——幕

吉利支丹信長（一幕）

人物

織田信長
朝山日乘
柴田勝家
丹羽五郎左衛門
木下藤吉郎
和田伊賀守惟政
ルイス・フロイス
ロレンソ了西
黑人
近侍數名
土工石工木匠大勢

時代

永祿十二年の春

舞臺

造營中の室町御所。土の山、石の堆積。土工石工木匠などの頻繁に往來する中へ小さい陣所を構へて、信長自身で工事を監督してゐる。造營顧問の僧朝山日乘、折疊みの机の上に繪圖をひろげてゐる。近侍數名。中に一人、體軀の偉大な黑人、半裸體で、腕を組み、直立してゐる。信長は赤い裝束に虎の皮の行縢を著け、拔身の刀を提げて、人夫を急き立ててゐる。

信長　早く、早く。怠けると斬つてしまふぞ。（白刃をひらめかす）

（人夫達、目まぐるしいやうに往つたり來たり

する。あまり急ぐので、時々轉ぶ者がある。）

信長　ばか。その位のものを擔いで轉ぶ奴があるものか。早くせんか、早く。ぐづぐづしてると斬つてしまふぞ。

（又白刃がひらめく。轉んだ人夫、慌てて起き上がつて、逃げるやうに、土を運び去る。）

信長　早く、早く。急いで、急いで。

（車に石の佛像や墓石らしいものを澤山に積み載せて、引いて來る者がある。車の後押しをして來るのは柴田勝家である。）

信長　おう勝家か。御苦勞、御苦勞。その石はどこから取つて來た。

勝家　（汗を拭きながら）洛外の小さな寺で見つけて參りました。寺の名は忘れましたが、叡山の末寺です。

信長　構はん、構はん。日蓮宗以外の寺なら、どこでも構はん。日蓮宗の寺だつて構はんのだが、今のところでは、將軍も本圀寺の厄介になつてゐるし、おれも妙覺寺の居候だから、當分は遠慮してやらう。

日乘　（立つて來る）當分ですか。

信長　うむ、當分だ。

日乘　わたしの宗旨の寺だけは、どうか、いつまでも手をつけずに置いて下さい。

信長　石が足りれば手はつけんが、足りなければやむを得ん。或は妙覺寺にも本圀寺にも手を下すかも知れん。

日乘　それは亂暴です。日蓮宗の僧侶たるわたくしがお側にをります限りは――

信長　貴樣、それでも坊主のつもりか。法華經一つ滿足に講義の出來ぬ貴樣に、坊主だと言ふ資

格はない。どこでいつ覺えたか知らんが、お前の得意なのは有職故實だ。お前はこの造營の顧問としておれの側にゐるのだ。坊主としてゐるのではない。默つて繪圖でも見てをれ。

（日乘、面を赧らめて、元の席に着く。柴田、笑ふ）

信長　（車の方を見て）大分佛像があるな。

勝家　小さな寺でしたが、不思議と石の大きいのがありましたから取つて參りました。墓はどうかと思ひましたが、これも大きいのだけ掘りおこして參りました。

信長　罰でも何んでも構はん。削つてしまへば唯の石だ。――（笑つて）併し、坊主が怒つたらうな。

勝家　怒りはしませんが、泣き出しました。造營の爲なら金を差し出しても、墓石だけは助けて貰ひたいのだが、その金がないと言つて泣くのです。

信長　（笑ふ）お前の面だましひを見たら、とても反抗は出來まい。好い氣味だ。本山がさんざん京都を荒した天罰だ。（ふと氣がついて）さうだ。早くそれをあちらへ持つて行つて石屋に渡してくれ。大分工事が遲れてゐるので、急がなければならん――何にしても御苦勞だつた。又あとをどんどん頼むぞ

勝家　畏りました。（車を押してはひる）

信長　（白刃を振る）さあ、早く、早く。何をぼんやり見てるんだ。早くせんか、早く。

（暫く又、人夫達が頻繁に往來する。日乘、繪圖を持つて、信長に近づく）

日乘　この廣間の襖ですがな。

信長　うむ。

日乘　とても作らしてゐる暇はありませんし、どうしてもここは繪襖で行きたいので、相當に金もかかると思ひますが。

信長　どこかの寺に手頃のものはないか。

日乘　奈良にあると思ひます。

信長　寺を知つてるか。

日乘　知つて居ります。

信長　では、直ぐに誰か遣つて、奪つて來させるが好い。

日乘　どなたに賴みませう。

信長　强い奴でなければいかん。佐久間がちやうど手明きだ。佐久間に賴むが好い。

日乘　宜しうございます。

（日乘、近侍一人に耳語する。その近侍、去る。日乘又もとの席に戻る。）

（木下藤吉郎、悠暢な裝をして、出て來る。）

信長　おい、おい。藤吉郎。

藤吉郎　（わざと驚いたやうに信長の顏を見る）

信長　なんだ、その裝は。手傳はんのか。勝家などは車の後押しまでしてゐるぞ。

藤吉郎　わたしは力業はだめです。柴田は外に能のない男ですから爲方がありません。

信長　では、お前は手傳はんのか。

藤吉郎　どういたしまして。この通りです。（日乘の前の机の上に小判を山のやうに積む）

信長　（顏を崩して）それはどうしたのだ。

藤吉郎　寄附金です。

信長　お前が寄附するのか。

藤吉郎　どういたしまして。みんな人の金です。（自分の屑を指して）みんな、この麝香一つで召し上げて來たのです。

信長　また堺の商人を嚇したのか。

藤吉郎　もう堺は絞り盡してしまひました。今度は寺中ですよ。商人ばかりではありません。金のありさうな寺を大分いぢめてやりました。柴田のやうに貧乏寺を嚇かして、ごろた石を擔いで來るよりは、この方が餘つ程役に立つだらうと思ひます。

信長　まあ自慢はあとで聞かう。兎に角御苦勞だつた。又あとを賴むぞ。

藤吉郎　まだ入るのですか。

信長　金はいくらでも入る。

藤吉郎　では、ぶらぶら參りませう。

信長　ぶらぶらなどと言はずに、早く行つて來てくれ。

藤吉郎　かういふことはさう性急に行くものではありません。（わざとゆつくりゆつくりと出て行く）

信長（後を見送つて）皮肉な奴だ。だが、兎に角、金の來たのは有難い。

（信長、日乘の側に寄つて、金の使途について小聲に相談する。）

（丹羽五郎左衞門、人夫二三人と土を運んで來る。信長、それに目をつけ、日乘の側を離れる。）

信長　五郎左、五郎左。

丹羽　はい。（立留る）

信長　普請中に喧嘩をしては困るな。

丹羽　面目次第もございません。併し、もうきのふ木下の仲裁で仲直りをいたしました。

信長　淺井はおれの親類だ。何事も一刀兩斷かお

れの主義だが、相手が親戚だけに、おれも手を下しやうがなかつた。あんなことで工事が遲れたら、おれの計畫も悉く崩れてしまふではないか。

丹羽　それはよく存じてゐますが、備前樣のなされ方があんまりひどいと思つたからです。佐々木征伐の時でも援兵一つお遣はしにならないで、謂はば日和見をなすつて入らしたのです。それが、閣下の御威光で佐々木も三好も退散して、將軍の御入洛となると、のめのめと味方面をして御造營のお手傳ひをなさるばかりか、平氣で閣下の贈物をお受けになるのです。わたしは、あの江州者のきたない根性が氣に入らないのです。

信長　分かつた。分かつた。理窟は如何にもさうだ。併し、今はそんなことに拘泥してゐる場合ではない。將軍も本國寺のやうなところに置いたら、いつ何時またあの三好の殘黨に襲はれないとも限らない。一刻も早くこの造營を濟まして、將軍をここへ移さなければならん。そのあとには、まだ皇居の修理といふことも控へてゐる。その次が安土の築城だ。今の場合に、そんな過去の問題を論議したところで、それが何になる。江州者でも犬侍でも、利用出來るだけ利用するのが目下の急務だ。濟んだことは濟んだことだ。大事なのは目前のことだ。

丹羽　分かりました。閣下の度量の大きいのには敬服の外はございません。

信長　度量の問題ではない。おれは唯益もないことに苦勞をして、眼前の爲事を怠るのが嫌ひな

のだ。

丹羽　分かりました、分かりました。もうわたくしもあのことは忘れませう。

信長　さうだ。目前のことだけに勉めてくれればよいのだ。

丹羽　分かりました、分かりました。（と言ひながら、人夫達と一緒に土を擔がうとする。倒れる）

信長　（笑ふ）五郎左、貴樣は感情家だな。口ではさう言つても、まだなかなか忘れられまい。（黑人に向つて）おい。

（黑人、近づく。信長、手眞似で土を運べと命ずる。黑人、一人で輕々と土を擔ひ去る。丹羽と人夫達、呆れながら後を追ふ。）

信長　（日乘に近づく）どうだ、日乘。お前は始終悪く言ふが、あの黑んぼでも、なかなか役に立つではないか。

日乘　役に立つと言つたところで、力業だけのことではありませんか。そんなら人夫もおんなじです。わたしは、あんな素性の分からない、バテレンの贈物などは大嫌ひです。

信長　いや、おれはバテレンのくれたもので、あれが一番氣に入つた。實に可愛い奴だ。それに、あの皮膚の色のどこからどこまでも黑いのが面白い。おれは初め何か黑いものを塗つてゐるのだと思つたが、裸にして湯に入れて見ても落ちないので感服した――實際不思議だ。

（黑人、歸つて來て、元のところに立つ。）

信長　見ろ。あの目を。皮膚の色が黑いせゐか、あの目の色の澄んでゐることはどうだ。まるで空か海を見るやうだ――それに、あの唇の赤い

こと。まるで花のやうだ。火のやうだ。

日乘　いくらお褒めになつても、わたしは嫌ひです。一體わたしはキリシタンといふものが嫌ひなのです。あれは大山師です。さもなければ、日本を窺ふ國賊です。

信長　いや、國賊は寧ろ叡山の坊主だ。王城鎭護などと稱しながら、あの破戒無慚な行はどうだ。

日乘　叡山の惡僧は論外です。併し、それにも増して危險なのはキリシタンです。

（前に去つた近侍の一人が、急いで出て來る。）

近侍　和田伊賀守樣がフロイスと申すバテレンを連れて、お寺の方へお目にかかりに參つたさうですが、如何いたしませう。

信長　さうか。禮に來たのだらう。宜しい。ここで會ふから、ここへ來るやうに言つてくれ。

近侍　實はもうこちらへ參る時分ださうでございます——兎に角伺つて見ると言ふことで。

信長　さうか。それは氣が利いてゐる——來たら、直ぐここへ通すやうに言へ。

近侍　はい。（去る）

日乘（暫く默つてゐたが、不愉快さうに）又あんな奴にお會ひになるのですか。

信長　會ふ。折角來たものだから會つてやる。きつとおれが布教を許した禮にやつて來たのだ。

日乘　一體、なぜ閣下があんなものの布教をお許しになつたのだか、それがわたしには分かりません。

信長　おれは又どうしてお前がそんなにキリシタンを憎むのだか、その理由が分からん。

日乘　理由などはありません。わたしは嫌ひなの

です。異國人といふものが嫌ひなのです。日本には日本の宗教があります。異國の宗教を信ずることは、異國に負けることです。

信長　ばか。そんな小さい量見で世界が征服出來るか。おれはこの小さな島國だけを目的にしてゐるのではない。唐にも天竺にも葡萄牙にも國威を輝かさうとしてゐるのだ。異國人に布教を許すことは異國人を感服させることだ。負けるのではない。勝つのだ。お前はバテレンがどんなにおれに對して恭順であるか、見たことがないだらう。まあ、今にフロイスが來るから、その時よく見るが好い。

日乘　いや、それは上邊だけの恭順です。腹の中では何を考へてゐるか分かりません。あいつらは何か外に目的があつて、日本へやつて來たのです。

信長　そんならそれで、その時の處置がある。あんな力のない痩法師を恐れる必要はどこにもない――それに、品行なども山法師などとは比較にならん。第一、說教の爲方が大きくて面白い。彼等は先づ天地創造の神を說くのだ。その神がデゥスだ。デゥスはインピニイトと言つて初もなく終もない。スピリツアルススタンシヤと言つて、色も形もない實體だ。ヲムニポテンと言つて、如何なることにも適合する。サゼヱンチイシモと言つて、最上の智慧の泉だ。ジエスイモと言つて、大憲法の根源だ。ミゼリカウルヂイシモと言つて、大慈大悲の源だ。然るに、日本で言ふ神や佛はみんな人間だから、到底これだけの德は持つてゐない。第一生きたり死んだり

するものに天地が作れる道理はない。と、かう言ふのだ。如何にも規模が大きいではないか。

日乘　(笑ふ) よくもそんな寢言のやうなことをお覺えになつたものですな。(蔑むやうに) では、閣下はそんなことをお信じになるのですか。信仰があつて布教をお許しになつたのですか。

信長　ばか。誰が信ずるものか。おれは唯キリシタンの說敎が、小さいところにこせこせしてゐないで、規模の大きなところが愉快なのだ——おれは第一、キリシタンの坊主でも、ほんとにそんなことを信じて言つてゐるのかどうか疑つてゐるのだ。

日乘　では、一體閣下は、この人生のことをどう考へて入らつしやるのですか。閣下の信仰は何なのです。

信長　度々言つたではないか。おれの信仰は小唄の「死なうは一定」だ。幸若の「一度生を得て滅せぬ者のあるべきか」だ。この天地を誰が造らうと誰が毀さうと構つたことではない。人間に罪があらうと罪がなからうと構つたことではない。要するに、人間は生きてゐる間だけのことだ。前もなければ後もない。生れるのが初で死ぬるのが終だ。さうして、生れたものはきつと死ぬるのだ。だから生きてゐる間に出來るだけのことをすることだ——あばれられるだけあばれることだ。前もない。後もない。在るのは生きてゐる「今」だけだ——おれはいつ死んでも決して愚痴は言はん。

日乘　そのあなたが、後の世の賞罰ばかり言ふキリシタンをお許しになるのはをかしいと思ひま

す。第一、御自分が信じても入らつしやらない宗教をお廢めになるといふのが分りません。

信長　ばかな。お前はどうしてさう頭が惡いのだ。目的の爲には手段を選ばないといふことを、お前は知らんのか。

日乘　キリシタンの布教が閣下の目的に適ふのですか。

信長　愈以て頭の惡い男だ。おれは今もいふ通り、生きてゐる内に出來るだけ大きな爲事がしたいのだ。キリシタンの布教認可は第一に國威の發揚になる。少くともおれの名が海外にまで響く。第二には、これで叡山や本願寺や根來を壓へつけることが出來る。第三には學問の爲だ。何と言つても學問は異國の方が進んでゐる。それはあの鐵砲を見ても分ることだ。あれだけの武器が日本にまだなかつたといふことは確に日本の恥辱だ。異國人に接し異國の學問を學ぶことは、現在何よりの急務だ。おれは異國人を教師とする學問所を建てたいとさへ思つてゐるくらゐだ。レトリカ、ヒイロソヒヤ、ロジカ、チヨロヂヤ――お前には何のことか分かるまいが、みんな役に立つ學問だ。

日乘　(冷笑して)はあ。では、閣下は唯さういつた目的の爲のみに信教の自由をお許しになるのですか。信仰も何もなしに。

信長　勿論だ。政治家の宗教に對する態度は、これでなければならんのだ。一體、支配するといふことは、人民を殺してしまふか、眠らせてしまふことだ。併し、殺してしまつたら、人民といふものがなくなつてしまふ。そこで、眠らせ

て夢を見させて置くのが一番安全なのだ。それには宗教が一番好い――宗教は一種の痲醉劑だ。

日乘　閣下がそんな考へでをられることを、キリシタンの教師達は知らないのですか。

信長　勿論、知つてゐるだらう――あいつらは、お前などから見ると、ずつと頭が好いからな。

日乘　すると、閣下に信仰も何もないことを承知でゐながら、甘んじて閣下の恩惠を受けてゐるのですね。

信長　勿論さうだ。それで好いのだ。おれはおれで向うを利用するし、向うは向うでおれを利用するのだ。世の中はみんなそれだ。おれと將軍との關係だつてさうだ。將軍は心からおれに從つてゐるのでも何でもない。唯、目下のところおれに頼らなければ危險だから、それでおれを利用してるだけの事だ。又おれが自分の城より先にこの室町の造營をするのも、天下の人望が收めたいからだ。おれは將軍を利用してるのだ。

日乘　果してさうなら、若しキリシタンが閣下の目的を妨げるものであつたら、閣下はそれをお禁じになりますか。

信長　勿論のことだ。禁ずるどころか、滅ぼしてしまふ。

日乘　そして、若し日蓮宗がより以上閣下の目的に適ふといふことが分かつたら、閣下は日蓮宗の爲に力をお貸し下さいますか。

信長　勿論だ。（笑つて）だが、そいつはちとむづかしいことだらうな。

日乘　いや、決してそんなことはありません。き

つとその實證を擧げて御覧に入れます。

信長　高言は勝つてからのことだ——ちやうど好い。今ここへフロイスが來ると言ふから、それと問答して見たらどうだ。

日乘　ええ、やりますとも。

信長　負けるな。

日乘　誰が負けるものですか。

信長　(笑つて)これは面白い。飯時の好い慰みだ。(近侍達の方を向いて)おい。誰か行つて、急いでおれの辨當を持つて來い。(近侍の一人去る)一つ飯を食ひながら宗論を聞くとしよう。日乘、負けるなよ。

日乘　誰が負けるものですか。

信長　勝たしてやりたいが、お前はロジックを知らないからな。

日乘　そんなものは知らなくても大丈夫です——それより伺ひたいのは、あの和田といふ侍のことです。あの人はキリシタンの教師を閣下に紹介したのですか。

信長　さうだ。

日乘　すると、あの人の紹介がなければ、キリシタンの教師などにお會ひにはならなかつたわけですね。

信長　それはどうだか分からん。お前は相變らず頭の惡いことを言ふな。

日乘　伊賀守はキリシタンの信者なのですか。

信長　熱心な信者だ。全體、あれの弟の高山飛騨守が非常な信者だ。惟政はそれに感化されたのだ。飛騨守はダリヨといふ名を持つてるくらゐだ。

日乘　伊賀守といふ人は勳功のあつた人ですか。

信長　知らんのか。呆れた奴だ。三好三黨をやつつける時、攝津で奮戰してくれた男だ。おれの恩人だ。

日乘　さういふ方の紹介だから、閣下もキリシタンの教師にお會ひになつたのでせう。

信長　さうだ。勿論、その義理はある。併し布教の自由を許したのは、おれの意志から出たことだ。

日乘　いや、わたしは伊賀守が……

（前に去つた近侍と後に去つた近侍とが同時に駈けて來る。）

近侍の一人　お辨當を持つて參りました。

他の近侍　（殆ど同時に）伊賀守樣がお出でになりました。

（日乘、默る。）

（信長、辨當を机の上に置くやうに手つきで命ずる。）

（やがて、和田惟政、ロレンソ了西、ルイス・フロイスの三人が、しづかにはひつて來る。）

（信長は今までずつと提げてゐた白刃を、鞘にも收めず、その儘机の上に置いて、忙しく出迎へる。）

（フロイス、帽をとつて挨拶する。）

信長　帽を取らんでも好い。かぶつてお出でなさい。日が當る。

（フロイス、躊躇する。惟政、目顏で信長の言ふ通りにする方が好いと知らせる。フロイス、帽を冠る。）

（日乘、憎さげに、その方を見る。）

惟政　師父の用を足してをりますので、一向、御造營のお手傳ひをいたしません。今も閣下が御

自身御出張のことを妙覺寺で承つて恐縮いたしたことです。師父も閣下がかくまで身を輕うして將軍の爲に盡されるのを知つて、悉く敬服してをります。

信長　（得意の色を隱して、フロイスに）いや、こんなことは何でもありません――それより、師父は寺を建てる場所をお見つけになりましたか。

丁西　師父はまだ日本語に十分熟達してをられませんからわたくしから、御挨拶を申し上げます。實に五條の堀川に無住の佛寺が一軒あるのを見つけて參りました。ちと狹くはありますが、あれを修理すれば、當分の用には立たうと思はれます。それで、實は先達からの御厚意に對するお禮の御挨拶旁々そのお許しを受けに參つたのでございます。

惟政　如何でございませう、閣下。

信長　一向差支はないと思ふが、その寺の持主は何者だ。それとの交渉はどうだ。

惟政　元は根來の末寺だつたさうですが、長い間無住だつたので、今は近所の商人が持つてゐるのです。その方の交渉は豫め濟ませて置きました。金子も一部分渡して置きました。

信長　キリシタンの寺にするのだと言つたか。

惟政　言ひました。

信長　それで承知したか。

惟政　寧ろ喜んでをりました。公方様や織田の殿様がお許しになる教だから、きつと結構な教に違ひない、お蔭で近所が繁華になるだらうなどと言つてゐました。

信長　（思はず）人間の心はみんな一つだな。

惟政　（信長の意味を取り違へて）　今に洛中悉くデウス様のお惠みに浴すことになりませう。

フロイス　（はじめて口を開く）　ありがたう。ありがたう。

（信長、ふと氣がついて、日乘の方を見る。日乘、怒りの目を輝かして、フロイスの方を見てゐる。）

信長　ああ、忘れてゐた――師父、わたしがこの造營の顧問に使つてゐるものに、佛僧が一人をります。それが、何かあなたに宗教上の質問がしたいと言つてゐますが、會つてやつてくれますか。

フロイス　喜んで會ひます。

信長　（日乘に向つて）　日乘、ここへ來い。（日乘、傲然と前へ出る）　朝山日乘といふ日蓮宗の僧です――さあ、日乘、なんでも訊くが好い。（惟政に）おれはその間に辨當を食ふぞ。時間がないから。師父に宜しく言つてくれ。

惟政　どうぞ、どうぞ。（フロイスに囁く。フロイス微笑して頷く）

（信長、机の前に坐つて、辨當を食ひ始める。日乘、フロイスを睨みつけて、默つて立つてゐる。）

信長　（箸を動かしながら）日乘、早く訊け。早く。師父が待つてをられるではないか。

日乘　（暫く口をもごもごさせてゐたが、やがて相手を威嚇するやうに、大聲で）お前達はおれ達が信仰する神や佛を輕んずるが、一體お前達の禮拜する神は何者で、どんな形をしてゐるのだ。それ

をおれに見せてくれ。

（信長、始まつたなといふ思入で、笑ひながら、弁當を食つてゐる。）

フロイス　（しづかに）わたし達の禮拜する神は人の目では見えません。人の智慧では分かりません。

了西　（前の詞を繼いで）不朽不滅の靈神です。萬物の創造者です。宇宙の主宰者です。永遠から永遠に存在するものです。その永久、完全、無限無量の正義と仁愛は、太陽のやうに全世界を照らしてゐます。

日乗　（嗤ふ）嘘だ。大法螺だ。小説だ。そんなことで、この神國が騙せるものか。こんな大山師に布教を許すなどといふことがあるものか。言語同断だ。

信長　（後から、冷かすやうに）日乗、さう興奮してはいかん。落ちついて訊くが好い。それでは議論にならん。

日乗　（後を見ないで）議論にならなくても構ひません。あんまり言ふことが無稽過ぎます。

信長　まあ、さう怒つてしまつてはいかん。もつと何か訊いたらどうだ。

（日乗、いつまでも默つてゐる。）

（そこで、ロレンツ了西が口を出す。）

了西　それでは、わたくしの方から日乗師に伺ひますが、人間の生命及び萬物の創造者は誰でありますか。

日乗　（答に窮す。やがて投げつけるやうに）知らん。

（信長、箸を投じて、聲高に笑ふ。近侍達も誘はれて笑ふ。）

（日乗、愈興奮する。）

信長　（坐つた儘）それでは問答にはならん。では、わしが日乘に代つて、フロイス師に訊かう。キリシタンの神は善を賞し惡を罰するものでありますか。

フロイス　さうです。神は正しい道を愛します。德を見れば喜びます。不德を見れば罰します。そして、その罰には現在未來の二つがあります。一つは生きてゐる間に受けるので、一つは死んだ後に受けるものです。

日乘　（突然笑ひ出す）な、なんといふばかな話だ。人間は死んでからも賞罰を受けると言ふのか。

了西　さうです。なぜと言へば、靈魂は不朽不滅のものでありますから。

日乘　果してさうなら、それを見せて貰ひたいものだ。その靈魂といふものの形を。

フロイス　靈魂は色もなければ形もないものですから、人間の目で見ることは出來ません。

日乘　人間は死んでも靈魂は殘ると主張するのだな。よしそんなら、その證據を見せて貰はう。待つてゐろ。（いきなり信長が辨當を食つてゐる机に駈け寄り、白刃を掴んで駈け戻る）さあ貴樣達の首を斬つて、その實證を見せて貰はう。

（日乘、フロイスに斬つてかゝる。信長、驚いて駈け寄り、その利腕をとつて押さへ、刀を奪ひ取る。）

信長　（日乘に）ばか。大ばか。無學文盲の破戒坊主め。（後を向いて、黑人に）こいつをつかまへて、あつちへ連れて行け。（黑人、つかつかと進んで、日乘を羽掻締にする）誰か二三人附いて行つて、暫くあつちへ控へさせて置け。

（近侍兩三名、黒人と共に、日乘を連れ去る。）

信長　は、は、は、は。佛教の坊主はあれだから困ります。何一つ分からないで、唯自分の小さい量見から、むやみと異國のものを嫌ふのです――それにしても、師父の今の態度は實に立派なものでした。白刃が目の前でひらめいても、びくともしないのですね。

フロイス　それはわたしの勇氣ではありません。神樣が勇氣をお授け下さるのです。神樣には何も恐いものはありません――そこで、閣下は今の靈魂の話をどうお思ひですか。

信長　まあ、さういふ高遠な問題は、武骨一遍なわたしには分かりません。

フロイス　（惟政を顧みて）和田さん。閣下に靈魂の話をもつと詳しくいたしませうか。今の坊さんは餘り氣が短かつたですから。

信長　いや、わたしも氣は短いのです。それに、けふはまだ工事の監督をしなければなりませんから、いづれゆつくり承りませう。

惟政　（フロイスに）それでは、けふはこれでお暇をなさい――お寺の出來たお禮を述べなさい。

フロイス　ありがたう。閣下、ありがたう。

惟政　（フロイスに）わたくしは閣下にまだ申し上げることがありますから、一足先へお歸り下さい。いづれあとでお宿に伺ひますから。ロレンソさん、宜しく賴みます。

フロイス　了西　（一緒に）きりゑれいそん。きりしてれいそん。きりゑれいそん。きりしてれいそん。（と稱へながら去る）

惟政　閣下、どうして日乘のやうな惡僧をお側に

お置きになるのです。
信長　いや、あいつにも取柄はあるのだ。あいつはどこで覺えたか有職故實に詳しいのだ。ここの造營などには、どうしても必要な人間なのだ。無學で亂暴な奴だが、おれはあいつの持つてゐるものを利用してゐるのだ。
惟政　利用なさる內は宜しうございますが、乘ぜられないやうになさらなければいけません。
信長　大丈夫だ。あんな奴に乘ぜられてたまるものか。
惟政　あいつはキリシタンを目の敵にしてゐます。それでゐて、閣下や將軍の親近者ですから、どんなことを企らまないとも限りません。
信長　どんなことを企らまうと、あいつに何が出來るものか。キリシタンもあんなものに崩されゐる程基礎の薄弱なものではあるまい。
惟政　大きにさうでした。キリシタンの信者が、あべこべに閣下に敎へられました。
信長　は、は、は、は。
（途端に、小蔭から日乘が躍り出る。手に小刀を携へてゐる。いきなり惟政を突かうとする。惟政、日乘の手首を打つ。刀落ちる。腕を捩ぢ上げて、膝の下に敷く。）
信長　（大聲に笑ふ）惟政にお前のその首を斬らせて、靈魂が殘るかどうか試して見ようか。
日乘　（苦しげに）わたしをお殺しになつたら、造營が支障を來しませう。
信長　（まじめに）大きにさうだつた。惟政赦してやれ。
（惟政、日乘を放す。日乘、隅の方へ逃げて、痛さうに手をさする。）

信長　さうだ、日乗。分かつたか。お前は議論でも力でもキリシタンには敵はないのだ。神妙に諦めて大工の棟梁を勤めてをれ。

日乗　はい。

信長　分かつたか。

日乗　はい。（机の側へ行つて、絵図に没頭する）

信長　さあ、大分むだな時間を費した。簡政、お前のところの人夫も来てゐるのだらう。

簡政　来てをります。

信長　では、陣所へ行つて、仕事を急いでくれ。今の間の取り返しをしなければならん。

簡政　畏りました。（急ぎ去る）

信長　（又日乗を振り返つて、大声に）さあ、為事だ、為事だ。急げ、急げ。早くせぬと斬つてしまふぞ。

（土工石工など、又頻繁に往来を始める。その中に、疲れて足をさすつてゐる土運びの人夫を見つける。）

信長　（その人夫に）なぜ休むのだ。

人夫　朝からこれで四十六遍目です。もうとても立てません。

信長　ばか。（いきなり斬つて捨てる）

（他の人夫達、恐れて駆けるやうに往つたり来たりする。その内に、又倒れて立てないのが一人出来る。信長、物をも言はずに、それを斬つて捨てる。）

信長　さあ、早く、早く。早くせんと、斬つて捨てるぞ。

（かう言ひながら、日乗の側に寄る。日乗の肩を叩く。日乗、びつくりして首を上げる。）

信長　（斬り捨てた人夫達の方を指して、笑ひながら）

さあ、そこにも、あすこにも、おれの今斬り捨てた人間が倒れてゐる――靈魂が殘つてゐるかどうか、調べて來たらどうだ。

日乘　もうそれには及びません。（頭を抱へて、机の上に突つ伏す）

（信長、哄笑する。）

（土工石工など、絶間なく往來する。二つの死骸に目をかけるものもない。）

――幕

盛遠　第一部

人物

遠藤武者盛遠　十七歳
衣川　四十四歳　盛遠の伯母。
袈裟（あとま）十六歳　衣川の娘
渡邊左衛門尉渡　二十歳　袈裟の夫
渡邊家の郎等
渡邊家の男女

時代

保元平治の頃

場所

京都

（一）

衣川の家。朝。
衣川が一人でゐる。
盛遠がはひつて來て、いきなり衣川の胸元を摑み、白刃を差しつける。

衣川　（眞蒼になつて、震へながら）まあ、お前は盛遠ぢやないか。
盛遠　さうだ。
衣川　なぜ、こんなことをするのだい。
盛遠　伯母さんはおれの仇だからだ。
衣川　仇だつて。あたしが、
盛遠　うむ、仇だ。仇を生かして置くことは出來ん。
衣川　だしぬけに、まあ、何といふことだらう。

あたしはお前に怨まれる覺えはない。
盛遠　いや、ある。
衣川　そんなことがあるものかね。お前が生れるとお母さんは産後が惡くて、直ぐに死ぬ。お前のお父さんもお前が三つの時には、あの世へ行つてしまふ。それからはお前はみなし兒。それをこんなに大きくなるまで育てたのは、この伯母ではないか。恩こそあれ、怨みを受ける覺えはない。
盛遠　いくら恩があつたつて、このおれを殺さうとした以上は許すことは出來ん。渡邊黨の規則として、仇を一刻も生かして置くことは出來ないのだ。
衣川　ま、お待ち。誰が何か言つたか知らないが、あたしはお前の命などを取らうとしたことはない。
盛遠　人に聞いたのではない。自分で知つたのだ。
衣川　知つたとは、何を。
盛遠　なぜ、あとまを渡（わたる）のところへなど嫁にやつたのだ。
衣川　それがどうかしたのかい。
盛遠　とぼけちやいけない。あとまはおれの妻になる筈だつたのだ。
衣川　お前も初めはそんなことを言つてゐたが、渡（わたる）のところから話があつた時に、別に反對もしなかつたから、それでやることにしたのだ。もう嫁に行つてから三年にもなる。それを今更――
盛遠　今更も糞もない。三年立たうが五年立たうが、そんなことは構はない。この三月に渡邊の橋供養で、久しぶりであいつを見たのだ。ひど

く好いなになつたので、踊らなくなつた。それでも、人の女房だと思つて、この半年(はんとし)堪へてゐたつたが、もう堪へ切れなくなつた。この分では、おれの命もあぶない。それといふのも、伯母さんお前が悪いよ。あとまを嫁になどやつてしまつたからだ。おれを殺すのはお前だ。だから、おれは彼を殺して、おれも一緒に死ぬのだ。

衣川　そ、そ、そんな無理なことを言つたつてしやうがない。お前がそれ程思つてるなら、あの時反對してくれれば好かつたのだ。内は貧乏だし、そこへ持つて來て、渡(わたる)が立派な仕度をして迎へるといふので、ついやつてしまつたのだ。取返しのつかないことだ。

盛遠　だから、伯母さんを殺しておれも死ぬのだ。

衣川　まあ、お待ち。お前ほんたうにそんなにあとまが氣に入つたのかい。

盛遠　氣に入つたどころではない。矢も楯も溜まらないのだ。

衣川　おやあ、好いよ。どうにかするから。まあ、その刀を納めておくれ。

盛遠　（刀を垂れる）どうにかするつて、どうするのだ。

衣川　今夜、兎に角、あの子をここへ呼んで、なんとか頼んで見よう。

盛遠　渡の方(かた)へ裏切などすると承知しないぞ。

衣川　大丈夫だよ。いくら亂暴者でも、あたしはお前が可愛いんだから。それに、まだ命も惜しいからね。

盛遠　命が惜しけりや、約束に背くな。おれは決しておどかしに刀を拔くんぢやないから。

衣川　分つたよ。分つたから、早く刀をしまつておくれよ。あぶなくつてしやうがありやしない。

盛遠　あ、は、は、は。（刀を納める）ぢやあ、晩に又來るよ。さやうなら。

衣川　さやうなら。

（盛遠、去る。）

（衣川、泣き崩れる。）

（二）

衣川の家。夜。

衣川と袈裟、對坐す。

袈裟　心配して參りましたが、それ程でもないやうで、安心しました。

衣川　渡さんには、なんにも言やしまいね。

袈裟　お手帋にも書いてありましたので、なんにも申さずに參りました。女も一人連れて參りましたが、門口で返しました。

衣川　今夜は泊つても好いのだらうね。

袈裟　ええ、構ひません。

衣川　實は病氣でもなんでもないんだよ。（突然泣き出す）

袈裟　（驚いて）まあ、お母さんどうなすつたんです。

衣川　（手箱より小刀を出して、娘の前に置く）さあ、これであたしを殺しておくれ。

袈裟　（愈驚く）まあ、お母さん。どうなすつたんです。

衣川　（小刀を取つて、娘の手に差しつける）さあ、殺しておくれ。殺しておくれ。

袈裟　まあ、お母さん。落ちついて下さい。落ちついて。一體、まあどうしたんですの。

衣川　けさ、常道が來て、急に又無理なことを言ひ出したのだよ。

袈裟　しやうのない人ねえ。あの人は。どんなことを言ひ出しましたの。

衣川　今になつて、お前が欲しいと言ひ出したのさ。

袈裟　をかしな人ねえ。今頃になつて。どうして又急にそんなことを言ひ出したんでせう。

衣川　この三月に渡邊の橋供養でお前を見たんだとさ。それから、この半年苦しんだと言ふのさ。

袈裟　まあ、橋供養の時に。ちつとも知らなかつた。

衣川　それで、お前を嫁にやつたのはあたしだから、あたしが仇だと言ふんだとよ。

袈裟　そんな無理な――

衣川　無理でも何でもさう言つて聞かないんだから爲方がないよ。あたしを刺し殺して、自分も死ぬと言ふのさ。あたしは命は惜しくはないが、あんな奴に殺されるのは厭だから、一時を取り繕つて置いて、お前を呼びにやつたのだよ。どうせ死ぬなら、お前の手にかかつて死にたいと思つて――

袈裟　まあ、そんなことがあたしに出來ますものか。よござんす。あたし、あの人に會つて分かるやうに言ひ聞かしてやります。なんぼなんでも、あんまり我儘だ。

衣川　お前の言ふことなどを、なんであの子が聞くものか。それはそれは大層なけんまくで、まるでもう氣違ひ同然なんだから。

袈裟　だつて、あなたを殺すなんて、そんな亂

暴な——

衣川　亂暴なのはあの子の生れつきだからしやうがないよ——もう今にもあたしを殺しに來る筈だから、お前早くそれであたしを殺して、どこかへ隱れるなり、内へ逃げて歸るなりしておくれよ。

袈裟　どうしても、あなたを殺すと言ふんですか。

衣川　さうだよ。あの子のことだから、きつと言つた通りにするに違ひないよ。

袈裟　困りましたわねえ。

衣川　（小刀を押しつける）　さあ、早くしておくれよ。やつと夜まで待つて貰つたのだから。さあ、早く、早く。

袈裟　（決心して）よござんす。どうしてもさうなら、あたし、お母さんの命をお助け申します。

衣川　助けるつて——どうして。

袈裟　お母さんを殺すやうな惡いことをしたと思へば、どんなことでも出來ます——渡さんには濟まないことですが、お母さんの命には代へられません——

衣川　（泣崩れる）ぢやあ、お前。

袈裟　（物を言はずに、唯頷く）

盛遠、美裝して來る。

盛遠　伯母さん。

袈裟　さつきから待つてゐたのよ。（盛遠の手を取る）

（三）

衣川の家。朝。

盛遠と袈裟、對座す。

袈裟　あたし、もう歸つてよ。

盛遠　歸る。

袈裟　ええ。

盛遠　歸ることは出來ん。

袈裟　なぜ。

盛遠　もうかうなつた以上は、いつまでもかうしてゐるのだ。歸るなら、一緒におれの内へ歸らう。

袈裟　そんな無理なことを言つたつて——

盛遠　無理は分かつてゐる。だが、それは人の言ふ無理だ。おれから言へば、これが道理だ。

袈裟　でも、あたしには内があるんですもの。

盛遠　内がある。よくもそんなことが言へたものだ。それは、おれがけふここへ來るまでのことだ。もうそんなことを言ふ權利はない。

袈裟　さう言はれれば、さうだけれど、お母さんがあんまり可哀さうなんですもの——

盛遠　誰が可哀さうだらうと、もうかうなつたら同じことだ。（刀を拔く）さあ、もうかうなつた以上は命くらべだ。お前も不祥、おれも不祥、渡も不祥。三つの不祥が一度に來る運命だつたのだ。

袈裟　では、これをこの儘秘密にして置くことは出來ないのね。

盛遠　當り前だ。おれは公然お前をおれのものにしなければ承知出來ないのだ。

袈裟　だつて、それぢやあ、渡が——

盛遠　だから、命くらべだと言つてゐるぢやないか。

袈裟　ぢやあ、渡の命を取つても、あたしをあなたのものにしようと言ふの。

盛遠　當り前だ。

袈裟　あたしが逃げたら。

盛遠　斬つてしまふ。

袈裟　ぢやあ、どつちにしても一人は死ななければならないのね。

盛遠　お前がこの儘おれと一緒にゐて、渡が何とも言はなければ、誰も死なないで濟むさ。

袈裟　そんなことは出來ないわ。

袈裟　面倒だ。どうするんだ。おれと一緒にゐるか。それとも、逃げて斬られるか。（刀を振り上げる）

袈裟　ぢやあ、かうして頂戴。あたし内へ歸つて、今夜渡をお酒に醉はして高殿へ寢かして置くから、あなた來て殺して頂戴。さうすれば、あたし、天下晴れて、あなたと一緒になれるから。

盛遠　よし。妙案だ。ぢやあ、きつと賴むぜ。

袈裟　髮を洗はせて置くから、濡れた髮を探つて殺すのよ。

盛遠　分かつた。高殿だな。

袈裟　ええ、ぢやあ、さやうなら。

盛遠　さやうなら。

（袈裟、去る。）

（衣川、來る。）

衣川　どうだつたい。得心が行つたかい。

盛遠　（刀を納めながら）もう伯母さんを殺しやしないよ。

衣川　（驚いて）まあ、又お前、そんなものを拔いて、袈裟をおどかしたんだね。

盛遠　あ、は、は、は。

（四）

渡の家。深夜。

（袈裟一人。）

袈裟　あの高殿の寢床には、誰もまだ寢てゐない――渡をあすこへ寢かさうと思つて、髮も洗はせ、酒を飲ませたのだが――なんにも知らない、あの佛樣のやうな顏を見ては、とても氣の毒で、あすこへ案内することは出來なかつた――渡があすこに寢ないとすれば、あすこに寢なければならないのはあたしだ――盛遠は二人の内一人は死ななければならないと言つた――その一人はやつぱりあたしだつたのだ――あたしは初めから思つた――親の爲とはいひながら、あたしのしたことは不貞に違ひないのだから、あたしが死ぬのが當り前なのだが、若しあたしが死んだら、渡はどんなに悲しむか分からない。渡はあんなにあたしを可愛がつてゐるのだから、死ぬ位なら盛遠と一緒になつてくれた方がまだ好かつたと思ふに違ひない、さうして、一生を寂しく情なく送るに違ひない。それよりはいつそ渡を殺してなんにも知らさずにあの世へやつてしまふ方が、却つて、渡にとつては幸福かも知れない。自分があとへ殘つて、あの亂暴者と一緒になるのは厭だが、自分の苦しいことなどはどうでも好い。唯、渡を苦しめたくない、悲しませたくない――さう思つたのだが、あの氣持好ささうに醉つた顏を見ると、たうとう高殿へ行けといふことが言へなくなつてしまつた――夜は更けるばかりだ。もう爲方がない。あたしがあすこへ行つて寢るより外にしやうはあるまい。さぞ、渡は泣くだらう。お母さんもさぞ力を落すだらう。自分の命が助かつても、娘が死

んではなんにもならないと言つて泣くに違ひない――だが、もうかうなつては爲方がない――渡のあの罪のない、佛樣のやうな顏――あれを見ては、言ひ出せなかつた――もう爲方がない――あたしが高殿へ行かう。そして、潔く殺されよう。

（盥を持つて來て、髮を洗ふ。）

（五）

盛遠の家。朝。

盛遠一人ゐる。渡邊家の郎等駈けつける。

郎等　大變です。大變です。

盛遠　なんだ。慌てて。どうしたのだ。

郎等　ゆうべ、内の奥樣が惡者に首を斬られたのです。おやすみになつてゐるところを。何者の爲業とも知れません。

盛遠　なに、奥樣が。

郎等　御主人は殘念だと言つて、門を締めて、閉ぢ籠つてをられます――こちらは御親類ですから、お知らせに參つたのです。では、急ぎますから。

（郎等、走り去る。）

（盛遠、顏色を變へて、戸棚から白い布に包んだ物を持ち出す。包を解く。袈裟の首がころげ出る。驚く。聲を上げて泣く。）

（六）

渡の家。夕。

首のない袈裟の死骸の前に、渡が坐つて泣いてゐる。並ゐる男女達も泣いてゐる。

郎等一人、奥から出る。

郎等　盛遠樣がお出でになりました。

渡　（顏を上げる）お出で下すつたのは有難いが、

武士として女房の寝首を掻かれたのは餘りに面目ないから、もうどなたにもお目にかからないつもりだ。お志は頂いたから、どうぞお引き取り下さいと丁寧に言へ。

郎等　畏りました。

（郎等、去る。）

（間。）

（又郎等、現れる。）

郎等　お言ひつけ通り申し上げましたところ、奥様のお首を掻いた犯人を搦め捕つて來たのだから、是非お目にかかりたいとかう仰しやいます。

渡　なに、犯人を捕まへたと。

郎等　はい、さう仰しやいます。

渡　（喜んで）さうか。そんなら直ぐに通せ。

（郎等、走り去る。）

（直ぐ盛遠を案内して來る。）

渡　犯人を捕まへたといふのはほんとか。

盛遠　先づ首を見ろ。（袈裟の首を出す）

（渡、首を抱き上げる。）

盛遠　（腰刀を抜いて、渡の前へ置く）犯人は盛遠だ。お前の首を掻かうとして、袈裟の首をとつてしまつたのだ——わけなどを話すのは面倒だ——さあ、おれを殺してくれ。

渡　いや、おれも武士だ。斬るなら、人の刀を借りんでも好い——わけも聞くには及ばん。お前と袈裟との關係については、おれも内々心配してゐたのだ——心配しながら、その日その日が無事なので、ついぐづぐづに過ごしたのが悪かつたのだ——一日一日の愛に醉つて、一生夫婦たるの基礎をしつかり築かなかつたのがおれの

過ちだつた――もうかうなつては爲方がない――お前を殺したところで、なんにもなりはせん。お前に腹を切らせたところで無意味だ――お前もおれもこれで好い教訓を得たのだ――二人で佛の往生安樂を祈るより外はない――袈裟はおれ達二人の妄執を救ふ觀音の化身だつたかも知れない。（いきなり刀を拔いて、自分の髻を切る）

盛遠　うむ、さうだ。（渡の前へ置いた腰刀をとつてこれも髻を切る）

（並ゐる男女十人ばかりも、遲れまいとするやうに、急いでみんな髮を切る。）

――三部曲のうち――

盛遠　第二部

人物

盛遠
渡邊渡
渡の第二の妻
資行判官
安藤武者右宗
通行人
行者
院の諸士

場所

京都。那智

（一）

京都郊外の藪の中。夏の眞晝。
盛遠、裸になつて、仰のけに寢てゐる。虻や蚊や蜂や蟻が羽音を立てて、盛遠の肉體を食り食ふ。

盛遠　……さあ、食へ。刺せ。いくらでも食へ。おれはもう七日もかうやつて、お前達に體を食はせてゐるのだ。お前達の勝手に食はせてゐるのだ。それだのに、お前達は、まだおれの肉を一片も食ふことが出來ないのだ。いくぢなしめ。何をぐづぐづしてるのだ。なぜ早く、このおれを骨と皮にしてしまはないのだ。（間）行だ荒行だと言ふから、どんな辛いことかと思つたら、たかがこんなことだ。こんなことが修行か。こ

んなことが修行なら、高僧のなんのと言ふものの正體も知れたものだ。(間)ぶん、ぶん、ぶんか。何といふ情ない聲を出すのだ。もつと勢の好い歌をうたへ、虻め、蚊め、蜂め。蟻め。もつと食へ。もつと刺せ。まだ痛くないぞ。まだ痛くないぞ。

(田舍の人、二三人通りかかる。盛遠に目をつける。)

通行人甲　おや。あの人は何をしてるんだらう。

乙　裸だね。

丙　虻や蜂が眞つ黑だ。

甲　何をしてるんだらう。

(盛遠、突然笑ひ出す。)

盛遠　まだだめだ。まだだめだ。そんなこつちやあまだだめだ。もつと食へ。もつと刺せ。まだだ。まだだ。(笑ふ)

甲　氣ちがひだ。

乙　さうだ。氣ちがひだ。

丙　あぶないから逃げよう。

乙　逃げよう。逃げよう。

(通行人、逃げ去る。)

盛遠　もうあした一日だぞ。もうあした一日でこの行はしまひになるのだぞ。この分ぢやあ、行をしないも同じことだ。いくぢのない蟲けらめ、なぜ、もつと食はないのだ。なぜ、もづと刺さないのだ。

(渡邊渡、第二の妻を連れて、通りかかる。盛遠に目をつける。)

渡　(妻に)待て。

(盛遠のそばへ寄る。)

渡　遠藤武者ではないか。盛遠ではないか。

盛遠　(起き上がる)誰だ。

渡　渡だ。

盛遠　おう、渡か。

渡　こんなところで何をしてるのだ。

盛遠　行だ。修行だ。

渡　坊主になる修行か。

盛遠　當り前だ。それがどうした。(渡の妻に目をつける)や、あれは何だ。

渡　妻だ。

盛遠　なんだ。もう女房を貰つたのか。

渡　當り前だ。それがどうした。

盛遠　坊主にはならんのか。

渡　一時はならうと決心したのだが、人に止められて、やめた。

盛遠　いくぢなし。

渡　いくぢなしでも好い。お前は莫迦正直だ。

盛遠　おれは一度決心したことは、飽くまでも貫徹する。

渡　それが莫迦だといふのだ。おれ達二人が髮を切つただけで、もう世間の同情は十分に集つた。本物の坊主にならなくても、世間の同情は減りはしない。實を言ふと、おれは寺へも行つて見た。だが、坊主に止められた。それから、役もやめようと思つた。だが、お上で許してくれぬ。その内に、是非おれの女房になりたいといふ女が出て來た。それがあれだ。

盛遠　おれはたとひそんな女が出て來ても、結婚などはしないな。お前は二度同じことを繰返さうといふのか。

渡　いや。お前のやうな男は二人とあるものではない。
盛遠　袈裟のやうな女も二人とはない。
渡　いや、必ずしもさうではない。
盛遠　お前はあの女に袈裟のまぼろしを見てゐるのだ。
渡　いや、まぼろしではない。現實だ。しかも、その現實は袈裟以上のものだ。
盛遠　袈裟の菩提はもう弔はないのか。
渡　毎日弔つてゐる。
盛遠　どこで。どうして。
渡　うちで。佛壇の前で。
盛遠　それだけか。
渡　それだけだ。
盛遠　それでは足りん。
渡　いや、足りる。
盛遠　なんの、足りるものか。袈裟はきつとお前を怨んでゐるぞ。
渡　決して怨んではゐない。きつと喜んでゐる。おれが坊主になつたら、却つて怨むに違ひない。
盛遠　あの女をここへ呼べ。
渡　どうするのだ。
盛遠　顔が見たいのだ。
渡　顔を見てどうするのだ。
盛遠　女の心を見通してやるのだ。
渡　嘘を言へ。顔を見て、氣に入つたら、又おれのものを取らうと言ふのだらう。
盛遠　又とはなんだ。袈裟は果してお前のものだつたか。
渡　あの時はさうは思はなかつた。併し、今にな

つて考へて見ると、やつぱり袈裟はおれのものだつたのだ。

盛遠　いや、決してお前のものではなかつた。袈裟がお前のものだつたら、おれは坊主になどはならん。おれは自分で自分のものをなくしたから坊主になつたのだ。

渡　人のものをなくしたのなら、坊主にならんのか。

盛遠　當り前だ。

渡　呆れた奴だ。

盛遠　そつちこそ呆れた奴だ。

渡　まあ、折角修行をして、好い坊主になるが好い。布施ぐらゐはしてやるぞ。おれは新妻と新しい家庭の幸福に浸るのだ。

盛遠　その幸福がいつまで續くか。

渡　何とでも言へ。おれはもう行くぞ。

（渡、妻を促して去る。）

盛遠　（また仰向けに倒れる）畜生、もつと食へ。もつと刺せ。まだおれには血が殘つてゐる。肉が殘つてゐる。もつと食へ、もつと食へ。骨と皮になるまで食へ。いくぢなし。畜生、畜生、畜生。

（二）

那智の瀧壺。

雪さかんに降る。

蓬髪法衣の盛遠、水の中に身を浸して、僅に首だけ出してゐる。

二三の行者、同じやうに瀧壺につかつてゐる。いづれも經文を稱へてゐる。

（盛遠、時々氣を失つて、水に溺れようとする。他

の行者達、顔を見合はす。
盛遠、終に堪へ切れず、水の中へ倒れる。行者達、驚いて、盛遠を岸の上へ擔ぎ上げ、介抱をする。やがて、盛遠、大きな目をあく。行者達を睨む。

盛遠 （叫る）何をするのだ。なぜ、おれを岸へ上げるのだ。おれはまだ三日しか瀧に打たれはせん。なぜ、おれを上げたのだ。おれの行はまだ濟みはせん。

行者の一人 あなたはまだ馴れないから、體の弱るのも尤もだ。

行者の他の一人 暫くここで休んでおいでなさい。

盛遠 いやだ。いやだ。そんないくぢのないことが出來るか。（いきなり又瀧壺へ飛び込む）

（行者達、笑つて、自分達も又瀧壺へ降りる。）

（念誦の聲。）

（暫くすると、盛遠、また氣を失つて、水の中へ倒れる。）

（行者達、また盛遠を岸の上へ引きずり上げる。）

（盛遠、暫くして、また氣がつく。）

盛遠 （叫る） 誰だ、誰だ。又こんなことをするのは。おれの行を、おれの行を破らうとするのだな。（夢中になつて） おれは、おれは、おれは渡のやうないくぢなしではないぞ。おれは一旦思つたことは飽くまでも貫徹せずには措かないのだぞ。貴樣達はおれの邪魔をする惡魔だな。おれを、おれを、また樂欲の世界に引戻さうとする惡魔だな。えい、こいつめ。えい、こいつめ。

（一人づつ行者の襟を掴んで、瀧壺へ投げ入れ

ろ。そして、自分も瀧壺へ飛び込む。）

（三）

院の御所法住寺殿の中庭。

御所の内に、琵琶和琴などに合せて、風俗催馬樂を歌ふ聲聞ゆ。

舞臺暫く空虚。

やがて、「いつまで待たせるのだ。誰もをらんのか、誰か出て來い。」と聲高に叫ぶ聲がする。

（巻物を手にした盛遠（既に文覺と稱す。卅二歳）が現れる。

盛遠　（叫ぶ）　誰かをらんのか。おれはもう二時も待つてゐるのだぞ。おれの待つてゐることを忘れたのか。（間）誰も出て來んな。よし、そんなら、ここで勸進帳を讀んでやらう。（巻物をひろげて、大聲に讀む）好いか。よく聞け。勸進の僧文覺、敬つて白す。殊には貴賤道俗の助成を蒙つて、高雄山の靈地に一院を建立し、二世安樂の大利を勸修せむと請ふ勸進の狀。夫れおもんみれば、眞如廣大なり。生佛の假名を斷つと雖も、法性隨妄の雲厚く覆うて、自ら十二因緣の峰に纏きしよりこの方、本有心蓮の月の光幽にして、未だ三毒四慢の大虛に顯れず、悲しきかな佛日早く沒して、生死流轉の衢冥々。唯色に耽り、酒に耽る。未だ狂象跳猿の迷ひを謝せず、徒に人を謗じ、法を謗ず、豈閻羅獄卒の責を免れん。（御所の樂の音亂れ、やがて止む）ここにて文覺、適俗塵を拂つて、法衣を飾ると雖も、惡業なほ心に逞うして、日夜に造り、善苗また耳に逆つて、朝暮に癈る。痛ましきかな、再び三途の火坑に歸つて、重ねて永く四生の苦

輪に廻らんことを……」

（平判官資行、廊下に姿を現す。）

資行　こら、何者だ。御遊のお邪魔をするのは。ここをどこだと思ふ。とつとと出て行け。

盛遠　ここがどこだと。そんなことは貴様に聞かんでも分かつてゐる。おれはもう七日から毎日ここへ來た。けふも二時から待つた。だが、誰も取次いでくれん。もう我慢が出來んから、お坪へはひつて來たのだ。

資行　知つてはひつたとは尚怪しからん。ここはお前のやうな乞食坊主のはひつて來る場所ではない。

盛遠　乞食坊主とは何だ。高雄の神護寺へ庄を一ヶ所寄進されるまでは、おれはどうしてもここはどかん。

資行　歸れと言つたら歸らんか。

盛遠　（叫る）歸らん。

資行　おのれ。

（資行、盛遠を突かうとする。）

（盛遠、勸進帳の卷物で資行の烏帽子をはたき落し、胸を突いて、仰向けに倒す。資行、狼狽して逃げ去る。）

（殿中騷擾。）

（盛遠、懐から馬の尾で柄を卷いた刀を出し、それを拔き放つ。）

（安藤武者右宗、拔刀で駈けつけて來る。右宗いきなり刀のむねで、盛遠の右の肘を打つ。盛遠、刀を落す。右宗、刀を捨てて、組みつく。盛遠上になつたり下になつたりする。その内に、院の武者が大勢走り寄つて、終に盛遠を取り抑へる。）

盛遠　（抑へられながら、叫る）これはおれの恥で

はないぞ。貴様達の恥だぞ。布施がしたくなければしないで好い。剃髪染衣の僧を打擲するとは何事だ。三界は火宅だぞ。王宮でもその難は免れんぞ。

右宗　黙れ、黙れ。

盛遠　浄行持律の聖、興隆仏法の勧進を、こんな目に会はせて済むと思ふか。地獄には牛頭馬頭がをるぞ。夢うつつの栄華に酔つて、三途常浸の猛火に焼かれることを知らんのか。

右宗　黙れ、黙れ、黙らんか。

盛遠　後生までは待たれん。遠くて三年、近くは三月の内に、きつと思ひ知らせてやるから待つてをれ。

右宗　怪しからん坊主だ。縛つて、牢へ入れてしまへ。

（一同、盛遠を縛り上げる。）

（客行、そつと廊下を這ひ出て、様子を見る。）

——三部曲のうち——

賊　一幕

人物

男

女

聲

場所

築地附近

時代

今

幕があく。

暗黒。

どこかで戸をこち明けるやうな音がする。）

やがて、懐中電燈らしいものが、障子の向うでぴかりと光る。

障子をそつと明ける音がする。

懐中電燈がさかんに明滅する。

長火鉢、帳場格子・神棚、金庫などが、順々に一瞬間づつ見える。

やがて、金庫の或部分に集注される。

金庫をこち明けるやうな音がする。

「おや。」といふ女の聲がどこかでする。

襖が明く。

電燈の光が、大きな幅で、さつと差し込む。

金庫の前にうづくまつてゐる、二重廻しを着て、鳥打帽子を冠つた、男の姿が見える。

寝巻姿の美しい女が出て來る。

男（振向く）　起きたか。（がつかりしたやうに言ふ。八字髭を生やした品のある顔が、隣から差し込ん

で來る光で、まともに照らされる)

女　(立つた儘)　寢ちやゐられないわ。(と言ひながら、男の顏をぢつと見る)　一體、あなた、どなた。

男　どなたは恐れ入つた。僕は泥坊さ。

女　ほんとに。

男　うむ。

女　この頃の泥坊は見つかると大抵居直りになるつて言ふぢやないの。あなたも居直りになるの。

男　そんなものにはならない。第一、居直りになるにやあ、こんなにぐづぐづしてゐちやあだめだ。顏を見たら、すぐにあひくちを出すとか、ピストルを出すとかしなけりやあ…………

女　あなたはなんにも持つてゐないの。

男　この通りだ。(素早く外套を脱いで、遠くへ投げ

出す)　なんにも持つてない。(兩手を廣げて見せる。相當に好い着物を着てゐる)

女　(安心したやうに坐る)　ぢやあ、あなたは見つかつたらどうするの。

男　逃げるか、あやまる。

女　いくぢのない泥坊ね。

男　ああ、いくぢのない泥坊さ。

女　今はなぜ逃げないの。

男　あんまり君が綺麗だからさ。

女　口說くんぢやないの。

男　冗談ぢやない。僕は女は大嫌ひだ。

女　(少し間を置いて)　よくその金庫が明けられてね。

男　そりや明けられるさ。

女　符帳を知つてるの。

男　符帳なんか知らなくつたつて明けられるさ。どんな金庫だつて明けられるよ。
女　ぢやあ、金庫だつてあんまり安心出來ないわね。
男　出來ないとも。
女　（又少し間を置いて）あなた、どこでそんなことを覺えたの。
男　活動寫眞や探偵小說で覺えたのさ。
女　あら、あたしも探偵小說は好きだけれど、そんなことの委しく書いてあつたのはないわ。
男　飜譯はだめだ。原書で讀むと、いくらでも書いてある。尤も、頭がよくないと、分からないが……
女　原書つて言ふと、ぺらぺらね。
男　（笑つて）うむ、ぺらぺらだ。

女　あら、あなた、ぺらぺらが出來るの。
男　あゝ。（間）活動寫眞だつて、日本ぢやあ無暗と切られるからだめだが、向うぢやあ、さう切られないから、金庫破りの方法なんか、すぐ覺えられるよ。
女　あら、あなた、外國へも行つたことがあるの。
男　あゝ、二度ばかり行つた。
女　（驚いたやうに）まあ、それ程の方が、どうして泥坊なんかにおなりなすつたの。
男　そんな丁寧な口を利いちやあいけない。泥坊に「おなりなさる」奴がどこにあるもんか。
女　（まじめに）ほんとに、どうして、こんなことをなさるの。
男　きまり文句だが、食へないからさ。
女　學校の先生でもなされば好いのに。

男　（笑つて）うまいことを言つた。實はもうそれもやつて來たのだ。

女　どうして、おやめなすつたの。

男　免職されたんだ。

女　どうして。

男　弱い者を助けたからさ。今の世の中は、強い者を助けなけりや出世は出來ないよ。強きを挫いて弱きを助ける――それが褒められたのは昔のことだ。學校に奉職したら、是が非でも校長の味方をするんだ。會社へ勤めたら、正邪に關らず社長の味方になるんだ。それでなけりや、すぐに首だよ。

女　會社へも勤めたことがおありなさるの。

男　ああ。學校をよされてから、或會社の工場を預かつた。やつぱり弱い者の味方をしたので追出されてしまつた。もう爲方がないと思つて、今度は弱い者の仲間入をして見た。自分で勞働者の一人になつたのだ。

女　それもだめだつたの。

男　ああ。それもだめだつた。勞働者の仲間內でも、やつぱり強い者に卷かれて居なきや生きて行かれないんだ。僕は弱い者の味方をした爲に、さんざんにぶんなぐられた。あぶなく殺されるところだつた。

女　それから、どうして。

男　それから……だから、それからは、もうなんにもしないことにしてしまつた。

女　唯遊んでゐたの。

男　さうぢやない……どこへ行つても、弱い者を助ける爲にゐられなくなるんだ。だが、それが

惡いことだとはどうしても思はれない。そこでもうなんにも商賣はしないで、唯この「弱い者を助ける」といふことだけを自分の商賣にしようと思つたんだ。

女　ああ、分かつた。それで、あなた、泥坊になつたのね。分かつたわ。義賊なのよ、あなたは。鼠小僧見たいな人なのね。お金持のお金をとつて、貧乏人に施すんでせう。

男　待つた、待つた。さう早合點をしてくれちやお困る。（少し間を置いて）成程、昔なら單純にさうなるところだらう。ところが、今の人間はもう少し目が明いてゐる。單に金持の金を奪つて、それを貧乏人に振り撒いたところで、世の中はちつともよくなりやしない。

女　そりやさうね。あたしもさう思ふわ。

男　それが分るのは感心だ。好いかい。そこで、先づ改めなけりやあならないのは、今の社會の組織だ。

女　組織つて。

男　成程、君には分かるまい。（考へて）まあ、言つて見れば、この世の中の組立だ。早い話が、或金持が金を出して或事業を始めるとするね。その金も先づ大抵は自分の金ぢやない。銀行の金だ。銀行も慾張りだから、儲かる爲事となれば、いくらでも金を貸すんだ。

女　ええ、さうよ。そりやあ、わたしも知つてるわ。よくそんな相談を內でするわ。

男　さうだらう。ところで、事業が始まる。ね、その一番下で働くのは勞働者だ。職工だ。好いかい。實際の爲事をするのは職工なんだよ。と

ころが、その職工といふ奴は安い賃銀で、體のへとへとになるまで働かされて、その拵へた代物は商品となつて世の中へ出る。さあ、その儲けは誰が取ると思ふ？　みんな資本をおろした人間が取つてしまふんだ。それも、出した金の金利といふ程度なら好いが、なかなかどうしてそんなこつちやあないんだ。

女　でも、お金を出す人は損をする時があるでせう。その損を見越してるちやないの。

男　それだ。大抵な人はさう言ふ。資本家の言ふ事も、大抵はそれだ。ところが、事實は大變な違ひだ。損をした時も儲けた時と同じやうに――たとひ薄給でもだね――同じやうに職工達を取扱つてゐてくれれば文句はないわけだが、少し不景氣だとなると、平氣でどんどん首を切つてしまふのだ。ひどいのになると、一度に二千も三千も首を切るんだからな。

女　ええ、あれは全く可哀さうねえ。

男　さうだらう。儲かる時だけこき使つて置いて、儲からなくなると、ぽいにしてしまふといふ法はないだらう。

女　そりやあ、ほんとにさうだわ。

男　ところが、政治家でも、軍人でも、銀行でも、みんなその勝手なことをしてゐる奴の味方をしてるんだからひどいよ。

女　それで、あなたはその弱い方の味方をしようつて言ふの。

男　さうさ。

女　強い奴を倒さうつて言ふの。

男　さうさ。だが、倒しただけではなんにもなら

ない。新しい組立を作り上げなくちやあ……
女　それはどうして拵へるの。
男　さあ、それはちよつと說明がむづかしい。なかなか大きな爲事だからね。(時計を見る) 時間がない。(短い間) まあ、さういつた趣意で、僕は働いてるんだ。ところが、運動費がない。
女　そこで、泥坊をはじめたといふわけですね。
男　さうだ。
女　何か他に遣り方がありさうなものね。
男　寄附を求めるのかい。そりやあだめだ。寄附を求めるとなると、やつぱり強い奴等のところへ行かなきやならない。僕等の仲間にも、そんなことをする奴があるが、あれくらゐ間違つたことはないと思ふね。僕は斷じて厭だ。敵のところへのめのめ金を貰ひに行くなんて。
女　だつて、泥坊をすると思へば……
男　いや、君はさつきから泥坊泥坊つて言ふが、泥坊はそんなに惡いものぢやないよ。
女　なぜ、どうして泥坊が惡くないの。
男　泥坊だつて、他の商賣とそんなに違ふものぢやないよ。今の世の中で、人のやつてる事はみんな泥坊ぢやないか。商賣だつて、工業だつて、文學だつて、醫學だつて、法律だつて、みんな一皮めくれば泥坊ぢやないか。みんな飾りがしてあるから、泥坊に見えないだけで、飾りをとつてしまへば、一列一體、みんな泥坊だよ。僕はそれを唯赤裸々に何の飾りもなしにやつてるだけのことさ。泥坊だつて、趣味があり敎育がある人間がやれば、決して商賣より下等なものぢやないよ。泥坊が下等なものになつたのは、

やる人間の人格が下劣になつて來たからだよ。昔は泥坊だつて、そんな卑しい商賣ぢやなかつたんだよ。

女　さう聞けば、成程さうかも知れないわねえ。

男　(笑つて)實を言ふと、その理窟も盗みもののミアフノシユの壺芝居に書いてあつたんだ。僕は飽くまでも泥坊に出來てるんだね。

女　さう言へば、あたしの商賣だつて泥坊みたいなものだわね。

男　さうとも、さうとも。泥坊も泥坊、大泥坊だ。

女　まあ、ひどい。でも、おんなじ泥坊にも景氣の好いのと悪いのがあるわ。

男　君のところは景氣が悪いのか。

女　悪いつてのはこんなもんぢやないわ。(金庫を指さして)まあ、好いから、中を御覽なさい。

男　そんな筈はあるまい。松田屋にも、堀川にも相當にあつたぜ。

女　あら、松田屋のも、堀川のも、あなただつたの。

男　ああ、僕だ。この界隈の待合へは門並はひつた。

女　ひどい人ねえ。

男　ひどいつたつて爲方がない。(短き間)金庫になけりやあ、どこか外にあるんだらう。早く出してくれ。

女　内はだめよ。松田屋さんや堀川さんとは違ふわ。

男　どう違ふんだ。

女　松田屋さんや堀川さんのお客は、社長さんだの重役さんだのばかりよ。内のお客は丁度その

下にゐる連中ばかりだわ。だから、だめよ。

男　なぜ。

女　この頃てんで顔を見せやしないわ。毎晩お茶ばかり引いてるのよ。

男　どうして。どうしてやつて來ないんだ。

女　みんな留守なのよ。

男　留守。どこへ行つてるんだ。

女　もうぢきあなたの行くところへ行つてるのよ。

男　もうぢき僕の行くところと。（ちよつと考へて笑ふ）成程、分かつた。どうして、そんなところへ行つてるんだ。何か惡いことをしたのか。

女　少しはしたかも知れないけれど、まあ、身代りよ。

男　社長さんの身代りか。そいつは感心だな。

女　ちつとも感心ぢやないわ。みんなお金よ。

男　そんな立派な紳士連でもか。だらう。だから、僕達がこのくらゐなことをしたつて、なんでもないと言ふんだ。

女　だけど、待合なんかいぢめるのは可哀さうだわ。

男　さうか。僕は又待合へはひるのが一番好いと思つたんだ。（笑つて）同商賣だからな。

女　そりやあ年が年中お客が詰めかけてりやあ、さうかも知れないわ。だけど、この頃のやうぢや、やり切れやしないわ。お勘定はちつとも下がらないし、さうかつて、玉祝儀を拂はなけりや箱止でせう。仕出し屋だつて自動車だつて、みんなこつちで立替へるのよ。その上に、税だの連中の切符だのつて、取り立てられるばかり

だわ。それでも、いつか取れるといふ當てがありやあ、まだ樂しみだけれど、この頃のやうにお客がどんどん暗いところへ引つぱられて行くんぢやあ、先の見込もありやしないわ。

男　でも、君なんかは綺麗だから、保護者があるだらう。

女　その保護者だつて……

男　やつぱり、やられたのか。

女　ほんとに間尺にも何も合つたものぢやないわ。こつちはなんにも知りもしないのに、やれ檢事局へ來いの、裁判所へ來いのつて呼び出されては、顔面を見せろの何のつて……

男　もうやめるんだね、こんな商賣は。おんなじ泥棒の中でも一番惡いよ。

女　あたしもさう思つてるのよ。つくづく厭になつちまつたわ。

男　どうせ、今にこんな商賣はなくなつてしまふよ。松田屋の客だつて、堀川の客だつてさういつまで安穩でゐられるもんか。

女　あたしもさう思つてよ。惡いことをして榮えられるわけがないわ。

男　君はそれを承知で、こんな商賣をしてゐるのか。

女　初めは知らなかつたわ。その内、だんだん分かつて來たけれど、どうせそんなことをして儲ける金だから、こつちでも側からそいつを絞つてやらうつて氣になつたの。だけど、やつぱりだめだわ。だめだつてことが、この頃やつと分かつて來たわ。結局向うが倒れりあ、こつちも倒れるんだから。

男　さうだとも。もうぢき倒れるとも。倒れずにゐるもんか。

女　默つてゐたつて倒れるのに、あなたのやうな人がゐちやあ、餘計早く倒れるわ。

男　さうとも。

女　でも、中には改心する人があるでせう。

男　そりやあ、あるかも知れない。

女　改心すると、どんなことになるの。

男　もう待合なんぞへは來なくなるだらう。

女　どつちにしても、こつちはだめね。結局あなたは待合のお金を元手にして、待合を滅ぼさうとしてゐるやうなものね。

男　一番恨みつこがなくて好いだらう。

女　（考へて）今に、ほんとにそんなことになるかしら。

男　なるとも。きつとなる。僕が失敗すれば、僕の子分がやる。僕の子分が失敗すれば、その又子分がやる……

女　さうね。なんだか、さうなりさうだわねえ。

男　こんな商賣をしてると、それがよく分かるだらう。

女　ほんとによく分かるわ。みんなで惡いことばかりを企らんでるんですもの。

男　さう思つたら、金を出すか。

女　ええ、出すわ。（長火鉢の抽出から金を出す）四十五圓しきやなくつてよ。あした取りに來るんで借りといたお金なんだけれど。好いわ、どうにかなるわ。

男　それは氣の毒だ。實を言ふと、けふは神戸まで行く旅費さへありや好いんだ。神戸には同志

聲　裏口が明いてゐますが、別に變つたことはありませんか。
女の聲　どうも恐れ入ります。いいえ、別に。まだふせらないのでございます。
聲　近頃、この近所は用心が惡いのですから、締りだけはよくしといて下さいよ。
女の聲　どうも濟みません。
聲　今、話し聲がしたやうですが、今頃客でもあるのですか。
女の聲　いいえ、お馴染のお客樣が大層醉つぱらつて入らつしやいまして、どうしても泊めろと仰しやるんですが、唯今お返ししようと思つて、車を申しつけにやつたところなのでございます。
聲　ぢやあ、なりたけ早く返して、あとの締りを

がお金を拵へて待つてゐる筈だから。（金の一部を返す）三十圓だけ借りて行かう。それも神戸へ着いたら直ぐ電替で返すよ。
女　そんなことをしないでも好いわ。
男　いや、話を聞いて見ると、君も亦弱い者の一人だ。商賣換をするにしても又金が入るだらう。
女　まあ、思ひやりがあるのねえ。
男　その思ひやりが、たうとう僕を泥坊にまでしたのだ。

（突然、裏口で聲がする。）

聲　もし、もし。誰か起きてゐますか。
女　（ちよつと顏色を變へたが、男が立たうとするのを抑へつけるやうにして、直ぐと出て行く）はい。はい。

（裏の方で二人の聲がする。）

よくしといて下さい。

女の聲　畏りました。御苦勞樣。

（靴の音、サアベルの音。）

（女、戻つて來る。）

（男、直ぐ立たうとする。）

女　だめよ。今出ちやあ、直ぐ捕まつちまふわ。

男　成程、さうか。

女　今、車を言はせますから、都合の好いところまで乘つてらつしやい。咎められたら、內の名を出せば好いわ。（ベルを押す。一度、二度、三度遠くで寢ぼけた聲が返事をする。）

――幕

森有禮　五幕

主要人物

森　金之丞（有禮）（第一幕、廿三歳。第二幕、廿六歳。第三幕、三十歳。第四幕、第一場、四十歳。第二場、四十三歳。第五場、四十三歳。）
波多野治右衛門　公議人、新庄藩
雨森謙三郎　公議人、松江藩
内田仲之助　公議人、鹿児島藩
横山正太郎（安武）　有禮の兄
荒井常之進　従者
矢田部良吉　外務文書大令使
外山正一　辨務少記
亀山某　大垣藩士
吉田清成　大蔵少輔
李鴻章
高崎正風
兒玉佐一　内務省屬
西野文太郎　内務省土木局計算課勤務
中川某　文部大臣秘書
岡本清重　家扶
座田重秀　文部屬
黒田清隆　内閣總理大臣

場所

日本、亞米利加、支那

時　代

明治二年から廿二年まで

第一幕

第一場

明治二年（西暦一八六九年）五月二十七日の午後。

公議所議場。

正面奥の議長席に議長心得森金之丞。その後に辨事、參與、議定、公卿、諸侯、若干名。右手に、議事取調掛、公議所書記、數名。左手に學校、刑法、外務、軍務、會計、神祇などの諸執政官。議長席を狹みて對座す。

議長席より少し前に投票箱。その前に筆生二名對座。筆生より少し前に議案臺。議案臺より又少し隔たりたる前に又投票箱。

投票箱、議案臺等を中に狹みて、左右五列に公議人（貢士）對座す。（公議人の員數は實際に於ては二百七十餘名なれども、舞臺に於ては必しも然るを要せず、但し、少くとも百五十人を下らざること。）

幕あく。議長心得森金之丞、起立しゐる。

森　公議所書記小野清五郎提出の議案第十號「切腹禁止可然の議」は、可とするもの三人、否とするもの二百人で、否決と相成りました。これから廿二日の前會に提出して置きました不肖森金之丞の議案第十二號の討論に移ります。

公議人の一人　討論の必要はない。

公議人の他の一人　否決、否決。

森　討論に移るに當りまして、念の爲に今一應、

議案並にその提出理由を朗讀いたします。(刷物をひろげて讀む)　第一、官吏兵隊の外帶刀を廢するは隨意たるべき事。第二、官吏と雖も脇差を廢するは隨意たるべき事。(少し間を置きて)制度寮撰修森金之丞。謹んで案ずるに、人の刀劍を帶するは、外は以て人を防ぎ、内は以ておのれの身を護するところにて、天下動亂の時要すべきあり。然れども世運漸くに文明に赴き、人々おのづから道義の尊きを知るに至つては、粗暴殺伐の惡習おのづから相息み、これらのものも畢竟虚飾に過ぎざるのみ。方今國家鎭定、皇運日に隆興、良法以て内を正し、兵制以て外を守る。この際に當つて、人各禮節を砥礪し、所謂粗暴殺伐の惡習、變じて道義自守の良俗と化すべきなり。故に自今以後、官吏兵隊を除く

の外、帶刀相廢し候儀隨意たるべし。尤官吏と雖も、脇差相廢し候儀隨意たるべし。是何ぞ偏に文事を重くし、武事を輕くするに非ず。固より文武同體、唯その名を異にするものにして、政治の賴つて擧るところ、人各篤く意を注ぎ、二つながらこれを盛興すべきなり。今ここに陳ずるところの二題目は、唯その弊習を一新して、聊か皇政隆興の際に裨補あらむことを思ふのみ、伏して諸賢の高評を待つ。謹議。(着席する)

公議人の一人　議長。第百三番。第百三番。

森　第百三番。新庄藩波多野治右衞門氏に發言を許します。

波多野　(起立) 諸君、拙者は慨嘆に堪へません。切腹禁止の議と言ひ、又この帶刀廢止の議と云ひ、天下の公議所に向つて、よくもかくの如き非

國家的な議案が持出されたものだと思ひます。

公議人の一人　さうだ、さうだ。

波多野　議案提出者たる森氏は、帶刀を以て「粗暴殺伐の惡習」だと言はれるのであります。「虛飾」だと言はれるのであります。「弊習」だと言はれるのであります。併しながら、果して帶刀は「粗暴殺伐の惡習」でありませうか。「虛飾」でありませうか。「弊習」でありませうか。抑も日本刀は大和魂の權化であります。大和魂は「虛飾」ではありません。「弊習」ではありません、否、決して「粗暴殺伐」ではありません。

公議人の一人　議長。第五十九番。

森　第五十九番、松江藩雨森謙三郎氏に發言を許します。

雨森　不肖雨森は波多野氏に全然同意見であります。たとひ隨意にせよといふ法令が出たにしても、苟も大和魂のあるものは帶刀を廢さうとはいたしますまい。想ふに議案提出者は徒に洋風に心醉して、國風の貴さを忘れられたものでありませう。

公議人の一人　その通りだ、その通りだ。

公議人の他の一人　毛唐の眞似だ。

公議人の更に他の一人　大和魂は毛唐にはないぞ。

雨森　本議案は國家の精華を蔑にした議案だと思ひます。極言すれば國家その者を危くするの議案だと思ひます。故に不肖雨森は極力反對いたします。

公議人の一人　議長。第百二十四番。

森　第百二十四番、鹿兒島藩内田仲之助氏に發言

を許します。

内田　私は同藩の藩士たる森氏からかかる愚案の提出せられたることを、諸君の前に恥づるのであります。

公議人の一人　貴公が反對なら、恥づるには及ばんぞ。

内田　諸君も御承知の通り本案の提出者たる森氏は、慶應元年齡十九にして歐洲へ留學せられたのであります。それ故、森氏の教育は概ね西洋で受けられたものであると言つても差支はないのであります。從つて、森氏は西洋の歷史には通じてをられても、日本の歷史には盲目であられるのではないかと思ひます。建國以來、日本が萬國に比類なき國體を守つて來られたのは、抑も何の力でありませう。

公議人の一人　日本刀のお蔭だ。

公議人の他の一人　大和魂だ。

内田　本朝の大勢は神武建國以來九變して武家の代となり、武家の代また六變して、終に王政復古したのであります。建武中興の御政務以來、今上陛下の御親政に至るまでの朝廷の御苦勞は如何程でありましたらう。その間、皇統の連綿として一系亂るることのなかつたのは、皇威の侵すべからざるに依れること勿論でありますが、また一面、朝敵現るる毎に死生を賭して必ずこれを鎭撫した忠勇義烈なる武士の功績に負ふところが多いのであります。

公議人の一人　さうだ、さうだ。

内田　森氏は事もなげに「方今國家鎭定」と言はれたが、果して今の國家は帶刀を廢しても可な

る程鎮定したでありませうか。現に本年正月四日の御詔勅にも「一治一亂、内安ければ必ず外の患あり。豈戒愼せざるべけんや。」と仰せられてあります。次いで本年二月十一日、紀元の大節に、畏れ多くも我が鹿兒島藩主たる島津公に賜はつた優渥なる御詔勅の内にも「凡そ國體を正し、强暴に備へ、大義を立て、民安を慮り」との御詞があります。抑も一治一亂に備へるものは何でありませうか。强暴に備へるものは何でありませうか。拙者はもはや多言を費しません。本議案は日本の國體を危くするものであります。滿場一致の否決を希望いたします。

公議人の一人　同意、同意。

公議人の他の一人　刀をよしてピストルを持たうと言ふのか。

（笑聲、起る。）

公議人の一人　武士の魂が奪へると思つてゐるのか。

公議人の他の一人　森は武士の魂を英國に忘れて來たのだ。

公議人の更に他の一人　早く便船で取り寄せ給へ。

（笑聲、起る。）

森　（起立す）靜肅に願ひます。議案提出者として、今一應趣意のあるところを申し述べますから、暫時御靜聽を願ひます。

公議人の一人　もう澤山だ。

公議人の他の一人　聞かないでも分かつとる。

森　いや、まだ十分お分かりにならぬ點があるやうであります。既に提出理由書にも認めありま

す通り、私は決して文事を重くして武事を輕くするものではありません。同藩の内田氏は森は外國で學問をしたので、日本のことは知らないのであらうと申されました。これは誠に意外なお詞であります。鹿兒島藩士たる内田氏が我が鹿兒島の學風を御承知ない筈はありません。若し御承知がないとすれば、内田氏こそ薩藩第一の怠け武士だと言はなければなりません。

内田　（憤然と）怠け武士とは何だ。

森　苟も鹿兒島藩士たるものが鹿兒島藩の學風を知らなければ、怠け武士だと言はれても爲方がありますまい。

公議人の一人　鹿兒島のことなどはどうでも好い。

公議人の他の一人　早く議案の說明をし給へ。

森　成程、私は弱年にして歐洲の地を踏みました。かの地で教育を受けました。併し、それまでは懈怠なく藩の教育を受けたのであります。諸君も御承知の通り、我が鹿兒島藩に於いては、年齡六七歲に及べば、集會所に於いて、經書歷史の輪讀並に習字運動の三課を課せられます。十五歲以上になれば、毎夜軍書の輪讀を課せられ、運動としては相撲、戰鬪演習、並に兎狩などをいたします。私も藩士の子弟として一通りかうした教育を受けたのであります。その上、別に兒の島藤太に就いて漢學を學びました。川上八郎左衛門先生に就いて天眞流の武術も學びました。森は淺學短才ではありますが、日本のことをまるで存ぜぬ程無學ではありません。帶刀廢止の議案を以て日本歷史の無知に由來するもの

だと斷定せられるのは、誠に迷惑至極であります。

公議人の一人　それでは何に由來するのだ。

公議人の他の一人　毛唐人に由來するのか。

（笑聲、起る。）

森　國家が國防内亂に備ふるところなかるべからざることは、不肖森もよく心得てをります。併し、それが爲には既に軍備が出來てをります。兵隊の組織があります。治に居て亂を忘れずといふことは、成程立派な覺悟ではありますが、今は建武時代でもなければ戰國時代でもありません。日本の歴史に比類なき御一新の大業が成つた萬民鼓腹の時であります。英米佛伊は勿論、最近瑞典、那威、西班牙、北獨逸聯邦の諸外國とも同等の交際をするやうになつた時代であります。日本は既に日本の日本に非ずして世界の日本であります。かかる時代に於いて、兵隊以外の者が武器を帶びるといふことは、第一無用であるばかりでなく、野蠻時代の遺風だと言はなければなりません。

公議人の一人　無用ではない。御一新は何で出來たのだ。

公議人の他の一人　野蠻とは何だ。

公議人の更に他の一人　まだ人民は鼓腹してはをらんぞ。

森　今日諸外國に於いて、兵隊以外の者の平素武器を帶びてゐる國はどこにもないのであります。はじめて日本へ渡來した外國人は、この奇異なる帶刀の風俗を見て、必ず恐怖と疑惑に襲はれるでありませう。日本は好戰國である。日

本は野蠻國であるとして、必ず一種の警戒をするやうになるでありませう。

公議人の一人　日本を恐れるのだから好いではないか。

森　いや、それは外交上由々しき大事であります。外交とは平和的折衝の意でありまして、決して恐喝若しくは威嚇の意ではありません。條理公道を楯にして、一歩も假借すべからざるは言ふまでもないことではありますが、苟にも武力を誇示して條理を壓迫するが如きは、卑屈卑怯なる外交と言はなければなりません。

公議人の一人　帯刀がなんで恐喝だ。

公議人の他の一人　誰が條理を壓迫せよと言つた。

公議人の更に他の一人　帯刀は武力の誇示ではない。

公議人の一人　卑屈とはなんだ。卑怯とはなんだ。

公議人の他の一人　無禮なことを申すな。

（議場、漸く騒然として來る。）

森　どうか今暫く御靜聽を願ひます。先程、日本刀は大和魂の權化だといふお説がありました。如何にもそれは然樣でありませう。併し、權化は飽くまでも權化でありまして、實體ではありません。大和魂は無形の魂でありまして、有形の刀劍ではありません。

公議人の一人　屁理窟を言ふな。

公議人の他の一人　大和魂は無形ではないぞ。

森　若し大和魂が刀劍その者であるとすれば、賊に襲はれて刀劍を奪はれた時、諸君の大和魂は盗賊の手に渡ることになるのであります。

公議人の一人　刀を奪はれる莫迦があるか。

公議人の他の一人　莫迦なことを申すな。

（議場、益騒がしくなる。）

森　諸君の謂はゆる大和魂とは然様な脆弱なものでありますか。建武御中興以來、一天萬乘の皇室を守護し奉つて參つたものは、然様な脆弱なものではありますまい。尊王は忠烈無比なる意志でありまして、殺伐野蠻なる兇器ではありません。

公議人の一人　兇器とは何だ。

公議人の他の一人　武士の魂を侮辱するな。

（議場、愈騒然。）

森　國家を守るものは斷じて刀ではありません。魂であります。

公議の一人　いんや、刀だ。

公議人の他の一人　御一新はどうして出來た。

公議人の更に他の一人　貴公はもう忘れたか。

公議人の一人　忘恩者。

公議人の他の一人　國賊。

公議人の更に他の一人　西洋崇拜。

（議場、囂々。）

――命が惜しけりや議案を撤回しろ。

――さうだ、撤回しろ。

――歸りを氣をつけろ。

――國賊。賣國奴。

森　どうか靜肅に願ひます……

（怒聲、罵聲、議場に滿つ。）

（森、終に卓上の木板を打つ。）

（それでも、議場の憤怒は鎭まらない。）

（議場、總立になる。）

第　二　場

同年六月二十日の夕刻。

森金之丞邸の一室。

森の兄横山正太郎、麻鼠絣の單衣に袴を穿ち、机の前に正座して、頻に何か認めゐる。稍長き間。

森金之丞、襖を排して出づ。

横山　（筆を置いて、振向く）金之丞か。

森　はい。（兄の前に手を突いて、禮をする）只今歸りました。

横山　御苦勞だつた。（弟の顔をぢつと見る）大層蒼い顔をしてゐるではないか。また刺客にでも襲はれたか。

森　いや、さうではありません。

横山　役所で何か不首尾でもあつたか。

森　（辭令書やうのものを懐から出して、兄の前に置く）それを御覧下さい。

横山　（書類を手に執る）「徴士（ちようし）並に職務を免じ、位記返上仰せつけらる」（呆れたやうに弟の顔を見る）これはどうしたことだ。

森　その通りです。

横山　どうしてこんな目に會つたのだ。何か不都合があつたのか。

森　帯刀廢止の建議が祟つたのです。

横山　あれはこの六月二日の會議で否決されたと言つてゐたではないか。

森　さうです。滿場一致で否決されました。

横山　それなら、それで一件落着に及んでゐるわけではないか。

森　私もさう思つてゐました。ところが、太政官では、あまり世間が騒がしいから、一先づ役を引いてくれろと申すのです。

横山　岩倉さんや大久保さんがそんなことを言ふのか。

森　岩倉さんや大久保さんは、寧ろ私を庇護してくれたのですが、周圍がどうしても言ふことを聞かなかつたらしいのです。

横山　周圍が聞かないと言つて、岩倉や大久保ほどの人物が、それに負けるといふ法があるものか。

森　薩藩の先輩が一番反對したらしいのです。私を殺さうとしたのも多くは同鄕人らしいのです。

横山　何をいふことだ。太政官ではお前が刺客につけ狙はれてゐるのを知つてゐるのか。

森　それは知つてをられます。いつも氣の毒だ氣の毒だと言つてをられます。

横山　氣の毒だと言ひながら、役を取り上げるとは何事だ。卑劣極まるではないか。

森　（寂しく笑つて）天下の大勢には勝てないのでせう。

横山　（熱して來る）それが果して天下の大勢だらうか。おれはさうは思はん。役人どもは維新の功に誇る唯一部の武人を恐れてゐるのだ。一時を糊塗して、一身の安きを求めてゐるのだ。おれとお前とは學歴も違ふで、意見の上では多少とも相違してゐる點がないではない。例へば廢刀の可否についても、おれには又おれで意見がある。併しながら、公議所は天下の議を集める場所ではないか。建言輿論を求める場所ではないか。可否は問はず、廢刀の建議をしたことが、なぜ悪いのだ。それに何の罪がある。幾分過激

であつたかも知れんが、國を思ふの誠意は、お前の書いた趣意書にも十分現れてゐる。どこに不忠がある。どこに不敬がある。免職とは何だ。位記剝奪とは何事だ。

森　まあ、兄さん、さう興奮しないで下さい。

横山　お前はおとなしく引きさがるつもりか。

森　既に天裁をも經たことでありますから、この際少しでも不平らしい行爲に出るのは、却つて不忠不敬に當ると思ひます。

横山　（首を垂れる）それは如何にもさうだ。

森　それに、自分の精神が貫徹しなかつたのは、畢竟自分の考慮に足らぬところがあつたからだと思ひます。お國のお爲を思つてしたことではありますが、世間を騷がした點は重々申譯がないと思つてをります。

横山　それで、お前はこれからどうするつもりだ。

森　國へ歸ります。國へ歸つて四五年うんと勉強をいたします。折角拔擢されて官職につきながら、かうした結果を見ましたのは、畢竟自分の學問が足りないからだと思ひます。大言壯語をするやうですが、只今の日本には人物らしい人物が一人もをりません。眞の儒者もゐなければ、眞の豪傑もをりません。昌平校あたりの賣名學者が幅を利かしてゐる世の中です。國家が私を必要とする時期は必ず來ると思ひます。それまでに十分勉強をして、立派に御奉公の出來る資格を作つて置きたいと思ひます。

横山　その覺悟を忘れてはならん。お前はまだ二十三だ。まだまだ先が長い。もう一度初めから遣り直すことにしても、決しておそくはない。

森　はい。きつと御期待に背かないやうにいたします。ところで、兄さんはどうなさいますか。

横山　おれか。おれは東京を離れることは出來ん。おれは役人は嫌ひだ。仕官の望みもない。併し、お國は今累卵の危さに臨んでをる。幕府を倒した當時の意氣は今の政府には見られない。明治の新政は昨の非を今日の是としてをる。大臣參議は驕奢を極め、官員は名利を事とし、直を尊ばずして能を尊び、官の爲に人を求めず人の爲に官を求めてをる。廉恥もない。忠誠もない。輕薄の風は天下に漲つてゐる。おれはこの狀態をこの儘見殺しにすることは出來ん。殊に憂ふべきはこの頃盛なあの征韓論だ。おれはけふも實は佐田を訪ねて、一論判して來たのだが、彼等の唱ふる征韓論なるものは、總て政略から出たもので、決して大義名分から出たものではない。一體、我が國の現狀はどうだ。庶民は困窮飢餓に迫つてをる。政令は枝葉のみに走つて、根本國是は今に定まつてをらん。一新とは名のみで、一新の德化はどこにも見られない。若し國力が眞に充實してゐるなら、朝鮮如きが我に非禮を加ふる道理はないのだ。それを考へないで、唯朝鮮を小國と侮り、妄に無名の師を興して、若し萬一にも蹉跌したならば、天下の人民は何と言はう。たとひ大勝利を得たにしても、名義を失つたら、長く世界の誹を免れることは出來まい。佐田の如きは己を欺き人を欺き、國事を以て戲れとするものだ。おれはこれらのことを書に認めて、聞かれるまでは幾度でも建白するつもりだ。おれの味方は一人もない。しか

も一人の不義は以て萬人の心を翻すことが出來ると信じてゐる。おれはこの建議の納れられるまでは、斷じて東京の地は去らん。

森　事に大小はありますが、私の帶刀廢止の議も、兄さんの非征韓論も、根ざすところは同じだと思ひます。武力が政略の具となる時、國家は土の如く崩れずにはゐません。折角、御健闘を祈ります。

横山　うむ。どうしても聞かれんやうなら、死を以ても諫めるつもりだ。

森　いや、それはいけません。死ぬのはいけません。現在、私のやうな場合でも、昔なら切腹をするところでせうが、今は時勢が違ひます。私は一時の恥を忍んで、他日大に爲すところあらうとしてをります。兄さんも命を輕んじないで、

飽くまでも生きて世を救つて下さい。

横山　いや、最後の手段は死より外はない。おれの死が諸公の胸に響いて、一人でも非を悟る人が出來たら、おれの死も決して冗にはならん。

森　分かりました。もう強ひてお留めはいたしません。

横山　（弟の手を執る）金之丞、禮を言ふぞ。おれの心を知つてくれるのはお前ばかりだ。

森　（兄の手を堅く握る）私の心を知つて下さるのもお兄さんだけです。

（書生、慌しく出づ。）

書生　（息をはずませて）お客樣です。

横山　おれのところへ來たのか。弟のところへ來たのか。

書生　森先生にお目にかかりたいと申してをりま

す。

森　どうかしたのか。ひどく息をはずませてゐるではないか。

書生　先程から參つてゐたのでございますが、御密談のやうでございましたから、暫く差控へてをりましたところ、早く取次げと申して、脾腹(ひばら)を蹴られたのでございます。

横山　亂暴な奴だな。何人で來た。

書生　お三人でございます。府中藩の方だとか承りました。

横山　毛利か。まだ廢刀が祟つてゐるのだな。金之丞早く行つて諭してやれ。

森　免職の上位記返上だと申したら、大抵滿足するでせう。

横山　大きにな。は、は、は、は、は。

森　は、は、は、は。

（森、襖に手をかける。）

第二幕

明治五年（西暦一八七二年）四月廿七日の午前。亞米利加華盛頓日本辨務使館の一室。（當時の辨務使館は或ビルヂングの一部かホテルの數室を借りて設けられたるものなるべし）

中辨務使森有禮、フロックコオトを著け、暖爐いマンテルピイスの上に黑塗の小さい位牌を飾つてゐる。

從者荒井常之進、花を持つて登場。

荒井　行つて參りました。

森　買つて來てくれたか。それは有難う。（花を受取つて、直ぐそれを位牌の前に捧げる）

荒井　ほかに御用はございませんか。

森　外山はアリントン・ホテルへ行つたやうか。

荒井　はい。もうお出かけになりました。

森　矢田部はもう起きたか。

荒井　疾うにお目覺めで、もう新聞を調べて入らつしやいます。

森　宜しい。それでは、もう行つて好い。

（荒井、退場。）

（森、姿勢を正して位牌の前に立ち、合掌默禱する。稍長き間。）

（外務文書大命使矢田部良吉、英字新聞を片手にして、案内なしにはひつて來る。）

矢田部　いや、これは失禮しました。

森　（顏を上げて振向く）構はん、構はん。もう濟んだ。

矢田部　けふはお兄い樣の……

森　祥月ではないが命日なので。

矢田部　では、毎月さうやつてお祀りになるのですか——ちつとも存じませんでした。

森　これでは餘り西洋心醉でもないだらう。は、は、は、は。（椅子にかける）

矢田部　（椅子にかけながら）全くお兄い樣は惜しいことをいたしましたな。

森　正直一途な人だつた。死を以ても當路の惡政を諫止せずには置かないとよく言つてゐたが、まさか實際やらうとは思はなかつた。わしが東京にゐたら、どんなにしても留めるのだつたが、何しろ薩摩へ島流しになつてゐたのでな。（寂しく笑ふ）

矢田部　もう三年になりますな。

森　さう。をととしの七月のけふだつた。

矢田部　併し、閣下が再び迎へられて、かうした大任をお帯びになつたのですから、地下の横山先生はさぞ御滿足でございませう。

森　いや、それは分らん。政府は相變らずの政府だからな。現に岩倉大使の一行が條約改正の相談に遙々ここまでやつて來ても、條款一つ携へて來んやうな始末だからな。かうした政府に仕へることは、決して地下の兄の喜ぶところではあるまいと思ふが、命ぜられた任地が外國でもあつたし、將來聊か期するところもあるので、兄の墓に詫びて、こつちへやつて來たのだ。

矢田部　お志の程はよく分かつてをります。外山や私をお連れになつて、自由に教育方面の研究をさせて下さるのにも、將來の御畫策がよく見えてをります。

森　教育だ。教育だ。何を措いても教育だ。教育がなければ、政治家も軍人も一文の價値はない。今の政治家はみんな御一新のどさくさ紛れに出世をした成り上がり者だ。正式の教育を受けたものは一人もありはせん。各藩の藩士に至つては更に一層無知蒙昧だ。若しあの手合に少しでも教育らしい教育があつたら、わしが公議所に提出した廢刀案なども議論なしに理解が出來る筈なのだ。今の時世に、用もないのに刀を差して歩くなどといふ野蠻なことがあるものか。さういふ野蠻な風があるから、何度わしは刺客に襲はれたか分からない。兄の横山もたうとう刀で腹を切つてしまつた。

（間。）

矢田部　さう言へば、切腹禁止の議を出した小野

清左郎も暗殺されたのでしたな。

森　あれも先覺者の一人だつたのに、實に惜しいことをした――わしが國へ歸ると、間もなくやられたのだ。

矢田部　まあ、こちらにゐれば、それだけは安心です。

森　併し、油斷はならんよ。吉田のやうな分からん奴が出來して來るからな。

矢田部　さう言へば、たうとうお書きになりましたね。新聞へ出して見ませう。

森　日本語廢止反對論か。いくら説いても吉田には分からんから、亞米利加の當路に警告を與へたのだ。吉田は同窓で、わしがはじめて英國へ留學した時に一緒に行つた一人だが、どうしてあの國字分からんのかなあ。

矢田部　吉田さんは餘り英語がお出來にならないやうですが、ヰリアムスが附いてをりますから、きつと通譯して聞かせたでせう。今頃はさぞ怒つてをられるでせう。

森　今にきつと談判に來るだらう。さうしたら、また條理のあるところを説いてやらう。

矢田部　今の日本の狀態で、二千萬圓からの外債を募るといふことは全く不利益だと思ひます。

森　君もさう思ふだらう。國計の基礎もまだ出來てゐなければ、條約の改正さへまだいつ出來るか分からん狀態だのに、單に諸侯の家祿を買ふ爲や鐵道の敷設などの爲に外國に公債を募るなどとは言語道斷のことだ。吉田は廟議廟議と、廟議の一點張りだが、たとひ廟議でも政府の命令でも、日本に不利益だと思へば、職務上わしは

は默つてゐることは出來んのだ。
（誰かがドアをノックする。）
森　おはひり。
（雜務少記外山正一、登場。）
外山　何か御用談ではなかつたですか。
森　いや、例の外債募集の反對論を述べてゐたのだ。
外山　今も大使のところで、その噂がありました。
森　さう、さう、君はアリントン・ホテルへ行つてくれたのだつたね。御苦勞だつた。岩倉公はお變りはないか。
外山　大層御元氣でした。
森　公債募集のことはどう言つてをられる。
外山　誰にもしつかりした意見はないやうです。木戸さんも山口さんも、外國のことは森がよく知つてゐるのだから、或は森の意見が正しいいかも知れんなどと言つてをられました。
森　困つたものだな――伊藤さんや大久保さんからの便りはないやうか。
外山　まだ、ないさうです。
森　一體、二人が條欵を持つて歸つて來るまで、ここに待つてゐて、是非とも條約の改正をするつもりなのだらうか。
外山　さあ、それもしつかりは定つてゐないやうです。あまり來るのが遲いやうなら、さう便々と待つてはをられんといふやうなことも言つてをられました。
森　困つたものだな――ところで、わしの出向くやうな用はなかつたか。
外山　來月朔日までには、ホテルで靜養をされる

さうです。明日には瘋狂院を參觀に行かれるさうで、閣下にも是非御同行が願ひたいと言つてをられました。

森　こなひだの招魂祭については、なんにも話がなかつたか。

外山　アリントンの招魂祭ですか。大使は好いものを見たと言つて、大層喜んでをられました。殊に、南北戰爭に就いての閣下の御説明が有難かつたと言つてをられました。餘程感服されたものと見えて、リンコルンのことを、幾度も言つてをられました。

森　（矢田部の顔を見て）そら、これが教育だ、君。

（荒井、登場。）

荒井　（森の側へ行つて、名刺を出す）かういふ方が見えました。

森　（名刺を見る）カメヤマ――日本人だな。

荒井　さうです。

森　十五分位でよければ會ふと言へ。

荒井　はい。

（荒井、退場。）

矢田部　何者でせう。

森　心配はない――わざわざ旅費を使つて、ここまでわしを殺しに來る奴もないだらうから。

外山　併し、油斷は出來ません。

森　大丈夫だ。わしはどんな場合にも油斷はしてをらん。

（荒井、龜山某を案内して來る。）

（龜山は白い布で包んだ刀らしいものを持つてゐる。）

（矢田部と外山は、出て行かうとして、これに目をつけ、ぎよつとする。）

森　（矢田部と外山に）　君達は暫くあつちへ行つてゐてくれ給へ。

（二人はまだ躊躇してゐる。）

森　（威嚴を以て）　早く行き給へ。

（兩人、去る。）

（龜山、森の前にいきなり平伏する。）

森　それでは、お話が出來ません。どうか椅子へかけて下さい。（自分が先づ椅子にかける）

龜山　はい。（素直に椅子にかける）

森　御用は何ですか。

龜山　はい。（躊躇する）

森　どうか遠慮なく言つて下さい。

龜山　はい。（まだ躊躇してゐる）

森　時間がないのですから、どうか早く言つて下さい。

龜山　（卓の上に兩手を突いて、頭を擦りつける）　申し上げます……わたくしは先生に對して、實に申譯のないことをいたしました。けふはそのお詫びに參つたのであります。

森　（訝しげに）　餘り唐突で分からんが、どういふことですか。

龜山　（決心したやうに）　先生、わたくしは嘗て先生を暗殺しようといたしたものであります。

（間。）

森　それはいつのことですか。

龜山　先生が帶刀廢止の建議をなすつた時であります。

森　うむ。あの時は隨分大勢につけ狙はれました。

龜山　わたくしも、なんにも分からずに、憤慨した一人でありました。

森　あなたは士族ですか。

鵜山　申しおくれましたが、大垣藩のものであります。

森　舊藩の士族はみんな憤慨したやうですな。

鵜山　わたくしはどうしてもあなたを倒さなければならないと思ひました。

森　なぜ倒さなければならないと思つたのです。

鵜山　それはお答が出來ません、今日になつて見ると、冷汗背を濡すばかりであります。わたくしは屢先生を道に要したのですが、食ひ違ひ、食ひ違ひして、どうしても先生を捕まへることが出來ませんでした。その内に、先生はたうとう薩摩へ歸つてしまはれました。併し、それが實にわたくしは救はれたのであります。その後、一時の興奮から醒めて、だんだん先生の仰しやつたことを考へてゐる内に、どうも自分の頭は何かに縛られてゐるのではあるまいかといふ風に考へて來ました。そこで、今まで排斥してゐた洋學を研究し始めました。わたくしの眼界は忽ちに開けて參りました。世の中の見方がまるで變つて來ました。それからその後いろいろと準備をいたしまして、たうとう今度こちらへ渡つて參るやうなことになつたのであります。わたくしはこれから亞米利加のカリホルニヤで開墾に從事するつもりであります――。實に、今になつて見ると、お詫の申しやうもない不埒なことをいたしました。

森　では、その謝罪に來たのですか。

鵜山　さうであります。（森の顏をぢつと見る）　先生、赦して下さいますか。

森　（いきなり龜山の手を取る）君は實に偉い人だ。

龜山　お赦し下さいますか。

森　赦すも赦さんもありません。あなたは學問をしたお蔭で、眼界が開けて來たと言ひましたね。その一言を、わたくしは何よりも嬉しく思ひます。

龜山　（涙を流して）これでやつと安心しました。實はもう一週間も前からこの地へ參つてゐたのでありますが、どうしてもお訪ねをすることが出來ませんでした。けふは非常な覺悟でやつて參つたのであります。

森　それは却つてお氣の毒でした。

龜山　さう仰しやられては申し上げやうがありません。（白い布で包んだものを解く）就いては、これがその當時わたくしの差してをりました刀でありまず。記念として、これを先生に差し上げたいと存じますが、お受け下さいませうか。

森　（刀をとつて押戴く）有難く頂戴いたします。

龜山　（立つ）公務のお妨げをして申譯がありません。それでは、これでお暇をいたします。

森　（立つ）もう直ぐここを立つのですか。

龜山　今夜にも出發したいと思つてをります。いづれカリホルニヤの方から御通信をいたします。將來事業の上で御厄介になることも澤山あるだらうと存じます。その節は何分宜しくお願ひ申し上げます。

森　どうぞ、何なりと遠慮なく命じて下さい。暇があつたら、又このワシントンへも遊びに來て下さい。

龜山　有難う存じます。

森　（握手する）それでは、さやうなら。

鍋山　失禮いたしました。

（鍋山、去る。）

（森、鍋山から貰つた刀を、マンテルピイスの上の、位牌の前に捧げる。そして、また合掌默禮する。それから、デスクに向つて讀書を始める。）

（從者荒井、顏色を變へて登場。）

荒井　閣下、閣下、吉田理事官樣がおいでになりました。

森　（微笑しながら立ち上る）たうとうやつて來たか。

荒井　なんだか大層怒つて入らつしやいます。お留守だと申しませうか。

森　ばかを言へ。直ぐここへ通せ。

荒井　でも、非常な御劍幕ですから、若し間違ひでもあつては……

森　餘計なことを言はずに、直ぐ通せ。

荒井　はい。（行きかける）

森　矢田部や外山はどうしてゐる。

荒井　お部屋に入らつしやいます。

森　吉田の來たことは二人に言ふな。

荒井　畏りました。

（荒井、退場。）

（森、部屋の中央なる圓卓に歩み寄り、卓に手をかけ、姿勢を正す。大藏少輔吉田清成、荒々しく登場。）

吉田　森、貴樣は怪しからん奴だ。（衣兜から英字新聞を出して、卓の上に叩きつける）これは何だ。

森　まあ、かけ給へ。（椅子を指す）

吉田　（新聞を指す）これは何だ。これは何だと。

森　讀んだか。
吉田　讀まんでどうする。
森　（兩樣の意味で）分かつたか。
吉田　分からん。分からんから談判に來たのだ。
森　（新聞を手にとる）どこだ。どこのところが讀めない。
吉田　（新聞をはたき落す）文字ではない。なぜ、こんな不埒なことをするのか。それが分からんのだ。
森　では、坐れ。返答するから。
吉田　（椅子にどさりとかける）さあ、坐つた。
森　（椅子にかける）一體、何が不埒だと言ふのだ。
吉田　不埒ではあるまいか。おれは日本政府を代表して、廟議の決するところを携へて來てゐるのだ。然るに、政府の代任として外國へ派遣されて來てゐる辨務使が、これに反對するといふ法があるものか。況や第三者たる外字新聞に投書して、これを誹毀するに於いてをやだ。貴樣は日本の役人ではないのか。
森　おれは日本の役人だ。日本の役人だから日本の爲を思ふのだ。日本の爲になることなら、誰に向つて物を言つても差支はないではないか。勿論、政府の命令を受けないで言つた詞は、利害とも責任は自分にあると思つてゐる。
吉田　今度の祿制を目して、政府を盜賊にたとへ、公然減奪又は賣奪の詞を用ひたのは不埒だ。苟も祿と名のつく以上、それが所有財產でないことは明なことだ。それ故、これを沒收したところで何の差支があらう。これを賊と呼ぶ道理は斷じてない。若し、あるにしても、政府の代任

たる者か、かやうな言辭を弄して、自國政府の光榮を傷けるといふ法があるものか。

森　政府を盗賊にたとへたのは、論理上の譬喩に過ぎない。また淺薄實的の文字を嫌ふなら文學者に聞いて書給へ。その意味が直ぐに分かるから。一體、君の持つて來た條件の内に「諸族高を蔑と見做せば」といふ詞がある。これが第一おれには分からん。これ蓋し東洋流行、無理の理より生ずるの理かな。

吉田　苟も政府の代任たる役人は、努めて政府の信用と名聲とを辱かしめないやうにしなければならない。これが交際吏員としての第一の職務だ。故に、政府の處置が果して全國の安危に關するやうな場合は、書を呈して利害を述べるか、使を出して事を議らせるか、或は自身歸つて意見を陳述するが好いではないか。命を奉じて來た理事官に迫るといふ法はない。

森　いや、おれはさうするのが一番好いと思つたからさうしたのだ。

吉田　そんな亂暴な詞があるか。

森　いや、決して亂暴な詞ではない。

吉田　いや、亂暴だ。

森　おれが亂暴なら、貴樣は分からず屋だ。

吉田　分からず屋とは何だ。さんざん人に恥を搔かせて置いて。

森　搔くやうな恥を持つて來たのが悪いのだ。

吉田　なに。（立ち上がる）も一度言つて見ろ。

森　幾度でも言ふ。亞米利加三界まで恥を搔いて來たのは、貴樣の頭が悪いからだ。

吉田　何を。

（吉田、森に掴みかかる。）

（森も吉田を振ち倒さうとしたが、ふと兄の位牌とその前に捧げてある刀に目をつける。突然手を放して、絨氈の上に膝を突く。）

森　癪に障つたら、腹の癒るまでおれをぶて。

（吉田、氣の狂へるが如く、森に鐵拳を浴びせる。）

森　ぶて、ぶて、いくらでもぶて。ぶつてゐる内には、貴樣の目も明いて來るだらう。

（森、目をつむる。）

（吉田、尙續けて打つ。）

（矢田部、外山、ドアを押して駈け入る。この態を見て、立ち竦む。）

第三幕

明治九年（西曆一八七六年）一月廿五日の午後。

清國保定府の一室。

特命全權公使森有禮、李鴻章と卓を挾んで對話す

双方稍熱してゐる。

日本公使館附鄭一等書記官、翰林院學士ハンホヰヤン、英語通辯官ホンユリヤン列席す。

森　……永久とは何ですか。それは到底望むべからざることです。

李　望むべからざることとはどういふ意味ですか。では、條約といふものは、自國の都合で、破つても構はないと言ふのですか。

森　これは不思議な御質問を受けるものです。日本人にさういふ御質問の理解出來るものは一人もありますまい。勿論、條約といふものは、これを議定する際に、十分雙方の意に適ふやうにして作るものです。併し、一度きめたものは、永久に動かすことが出來ないといふ道理はあり

ません。時勢の變遷に連れて、必ず改めなければならない箇條が出來て來ます。

李　勿論、それはさうです。併し、現今貴我兩國の間に結ばれてゐる條約は完全無缺なものです。それに、一旦締約した以上は、少くとも十年間は、雙方ともこれを固守しなければならないと思ひます。

森　如何にもさうです。期限をきめた以上は、その期限は守らなければなりません。併し現在の條約が完全無缺のものでないことは、閣下もよく御承知のことでせう。

李　それはなぜですか。なぜそんなことを言ふのですか。

森　總理衙門大臣などが私に向つて言はれました――朝鮮は清國の屬國である。だから、條約に掲げ言ふところの屬地の一つであると。

李　勿論、さうです。朝鮮事件について、衙門と貴國の公使館との間に往復した書翰の趣意は私も詳しく承知してゐます。即ち、朝鮮は清國の屬隷であつて、貴我の條約に基き、貴國からも屬國として見らるべきものの一つです。

森　併し、條約の內には、朝鮮が貴國の屬國だといふことを明示してある條款はどこにも見えません。これに反して、我が政府は終始朝鮮を獨立不羈の國として認めてゐます。獨立國として待遇してゐます。列國は勿論、恐らく貴政府とてもさうに違ひありません。現に貴政府は嘗て明言しました――朝鮮には自國の政府があつて隨意に內外の事務を處理してをる。清國は毫もこれに干與することはないと。

李　如何にもさうです。如何にも朝鮮は獨立國です。併しながら、その國王は淸國皇帝の命令に依つて立つのを常としてゐます。だから淸國の屬隷だと言ふのです。

森　併し、それは貴國と朝鮮との交誼に關する單に禮儀の問題ではありませんか。朝鮮獨立の問題には何の關係もないことです。

李　いや、朝鮮は淸の屬國です。これは昔からみんなのよく知つてゐることです。

森　もうその問題はやめにいたしませう。いくら討論をしても際限がありませんから。それよりは、緊急に閣下の御注意を願ひたい一事がありますから、それを述べることにいたしませう――貴我の條約の內に、一方が他方の封土を侵掠してはならんといふ一欵がありますが、領土の限界が確定してゐない爲に、嘗ては臺灣事件を起し、今度は又朝鮮事件を起すやうなことになりました。私が現在の條約を不完全だとする理由は、この一條でもお分かりになるでせう。和親を目的とする一欵から斯くの如き紛紜を釀すことは、弊國の爲のみならず、貴國の爲にも憂ふべきことではありませんか。

李　いや、それはいけません。貴國が事を起さなければ、なんでこんな紛紜が生じませう。砲船を出して朝鮮海の測量をなすつたのは貴國ではありませんか。さういふことをなさらなければ、朝鮮の方でも發砲などはしなかつたでせう。畢竟朝鮮が貴國の砲船に發砲したのは、貴國自らが招いたことなのです。況や公法で禁じてある三英里以內の海岸に侵入し、城地を陷れ、人を

役し、財を掠めるに於いてをやです。

森　いや、それは違ひます。我が砲船は海水測量が目的で朝鮮へ行つたのではありません。偶水を求める爲に端艇を寄せたのです。船を寄せるには、先づ海水の深淺を實測して、進退を無難にしなければなりません。その上、砲船の帆柱には歴然と國旗が揭げてあつたのです。それにも關らず、突然これに向つて發砲するといふのは、我が國の名譽を汚すものだと言はなければなりません。勿論、直ぐに問罪の師を出して、彼を討滅するのは容易なことではありますが、我が國はさういふ處置に出るのを好まないので、修好の使を派遣したわけであります。閣下は又我が國の砲船が公法上禁ぜられてゐる場所へ侵入したのが悪いといふやうに仰せられましたが、公法といふものは、これを遵守する國に對して用ふべきもので、朝鮮のやうに公法の何物たるかを知らず、却つてこれを嫌惡するやうな國に對して用ふる必要はないと思ひます。

李　それは如何にも御尤です。併し朝鮮は決して貴國との交通を嫌つてゐるのではありません。唯その影響を恐れてゐるのです。自餘の外國が貴國の例に倣つて、狡猾なる商業を營むことになると、朝鮮は忽ち亡びてしまふからです。

森　いや。その心配はありません。諸外國にいたしたところで、航海安全の爲に朝鮮海測量の自由をさへ許してくれれば、必ずしも開國通商は求めますまい。

李　いや、外國人の欲望は決してそこには留まりますまい。

森　それはさうかも知れません。併し、通商を迫るといふことは、どこの國でも出來ません。たとひ我が國でも、さやうな強迫を朝鮮に加へようとは思ひません。

李　それは保證出來ますか。

森　勿論のことです。苟も朝鮮に於いて外交を拒絶する正理があるなら、それを行ふのも好いでせう。或は日本や淸國のやうな脣齒の國だけを容れて、自餘の外國を拒むとしても好いでせう。

李　さういふことが出來ませうか。

森　勿論出來ると思ひます。現に我が國の例を見ましても、今から三百年前に、歐洲の諸外國を容れて交易を營んだことがありましたが、だんだん內政に關與して參りましたので、和蘭國を除くの外は悉くこれを逐斥して再び日本へ來ることを禁じました。葡萄牙人が良好友愛の情を我に示しましたことは、恰も貴國が我が國に封するのと同樣でありました。故に貴國及和蘭は數百年の間、我が國と交通があつたわけですが、その間自餘の諸外國は一切我が國へはひること が出來なかつたのです。漸くその禁が解かれて、日本が諸外國一般と交通するやうになつたのはつい二十年前のことです。

李　果してさうなら、朝鮮もその計畫を變へなければなりません。

森　實は私もさうした件に就いて、貴政府の協力同心を得たいと思つて、貴國へ渡來したわけですが、今日になつて貴政府の意のあるところを見ると、甚しく私の期待に背くものがあるのです。

李　それはどういふわけですか。

森　貴國の大臣達は朝鮮の爲に事務を處理する誠意を持つてゐられません。日本が朝鮮へ修好の使を出したことに就いても、その主意を知りながら、これを贊成する意志がないのです。唯、條約の中の和親條款——或は招撫條款と言つても好いでせう——例の無用な領土不可侵の條款です。唯あればかりを問題にして、何度手紙を遣いたか分かりません。かやうな待遇を受けるのは、實に失望の至りです。

李　それは如何にもお氣の毒でした。併し、我が政府が朝鮮に關してさういふ處置をとつたのには相當理由のあることです。一體、我が政府の見るところを以てすると、貴政府は事を行ふに當つて、甚しく急遽に過ぐる嫌ひがあります。況んや今日の朝鮮はまだ貴國の望を十分滿足させることが出來る程度まで來てをりません。しかも、貴國は——臺灣事件の例を見ても分かるやうに——動もすれば隣邦を擾亂し、機に乘じてこれを奪はうとする意があるやうに見受けられます。

森　成程、貴國に比べると、日本は敏捷でもありませう。清國人たる閣下の目から見れば、或は短慮にも見えるかも知れません。併し、今日の朝鮮が日本の望を滿足させる程度にまで來てをらぬといふお說は首肯いたしかねます。我が國が朝鮮政府に求めるところのものは、極めて容易な一二件に過ぎません。先づ第一は、朝鮮が我が國に對して、國威相當の禮を盡すことで、第二は朝鮮海を我が國の船が安全に航海が出來

るやうにして貰ふことです。日本が朝鮮に求めることは、この二件以外にはないのです。こんな至當な、こんな簡單な要求を拒むのは、天譴を畏れざるものと言はなければなりません。また閣下は今、日本は動もすれば隣國を擾亂し云々のことを言はれましたが、これは英明な閣下のお詞とも覺えません。申すまでもなく、日本は四方海に圍まれた島國でありまして、水に依つて生を營むものと、陸に依つて生を營む者と、その數殆ど同じであります。日本の人民が海利事業に熱心なのは、この理由からでありまして、政府も亦これが爲に保護の道を設けなければならないのであります。閣下の仰せられた征臺一件も、さうしたわけから、已むを得ず起つたことで、我が政府が莫大の費用と苦心とを厭はずに、あのやうなことをしたのは、唯政府が政府たるの義務を盡さうとしたからです。若し征伐が目的だつたら、どうして一旦占有した臺灣の一部を棄てる道理がありませう。

李　分かりました。朝鮮のことに就いては、早速一書を總理衙門へ遣しませう。我が政府があなたのお手紙に對する返事の内に、和親の條款——即ち雙方互に領地を侵すことを禁ずる條款を引いたのは、如何にも聊か輕卒でした。

森　その御一言を承つて安心しました。どうか貴政府が十分我が政府の眞意をお汲み下さればと願つてゐます。

李　暫くお待ち下さい。私の手紙に依つて、總理衙門が熟考する間、どうか待つてやつて下さい。

森　畏りました——貴國へ到着いたしまして以

來、こんな愉快なことはありません。今夜は枕を高くして眠ることが出來ます。

（李安的警長、飲む。）

李　それでは、お茶を上げますから、ゆつくりして行つて下さい。

森　有難うございます。

（李鴻章、卓上の鈴を振る。）

（綠茶、運ばる。）

李　失禮だが、あなたはお幾つですか。

森　三十になります。

李　お若いに似合はんしつかりしたおかただ。私はもうあなたの倍に近い。この通り、髪の毛ももう大分白くなりました。

森　いや、併し、お元氣なことはなかなか若い者の及ばぬところです。

李　勿論、あなたは外國へ行かれたことがあるでせうな。

森　前後二回參りました。一度は西へ向つて東から歸り、二度目は反對に向つて西から歸りました。

李　それは愉快でしたらうな。

森　まるで夢のやうでした。

李　ところで、この頃貴國では舊來の制服を棄てて、洋服を用ひられるやうになつたと聞いてゐますが、それはどういふわけですか。

森　極めて簡單な理由からです。日本舊來の服裝は無事安逸に世を送る人には適してゐますが、多忙多用な人間には全く不適當です。それで、時勢の變遷につれて、新式な制服をとるやうになつたのです。

李　併し、衣服といふものは、祖先を憶はせるものですから、子孫たる者はこれを貴重して、いつまでも保存すべきではないでせうか。

森　いや、吾々の祖先が若し今日生きてゐたら、きつと吾々と同じことをしたらうと思ひます。吾々の祖先は旣に千年も前に、貴國の服が我が國の服より便利だと思ふと、直ぐにこれを採用してをります。凡そ何事につけても、他國の長を採るのが、我が國の美風です。

李　貴國の祖先が私の國の服を採つたのは賢いやり方です。私の國の服は作るのも容易なら、材料も一切貴國のもので間に合ひます。第一歐羅巴の服を眞似るやうに金がかかりません。

森　成程、貴國の服は如何にも美術的ではありますが、便利といふ點では如何かと思ひます。靴も大きくて粗末です。髪の毛を結んで長く垂れるといふやうなことも日本の國民には適しません。ところが、洋服の場合はさうではありません。成程、經濟の原理を知らない人は贅澤のやうにも思ひませうが、勤勉は富の基、怠慢は貧の源です。便利な服を著て一所懸命に働けば、現在費すところに據つて、將來無限の報酬が得られると思ひます。

李　成程、それは如何にもさうでせうが、それに依つて貴國獨立の精神が歐洲の配下に委ねられるやうになつても、あなたは少しも恥ぢませんか。

森　少しも恥ぢません。私はこの變革を以て却つて世界に誇らうと思ひます。一體、この變革たるや、決して外から強迫せられたものではあり

ません。全く我が國自己の好むところから出たものであります。日本は昔から亞細亞、亞米利加、その他いづれの國を問はず、その長ずるところを取つて、常に自國の短を補つて來たのであります。

李　我が國では決してさういふ變革は行ひますまい。唯軍器とか鐵道とか電話とかいふ器械方面のことは、確に西洋の方が優れてゐるのですから、これを採用しないわけには行かないのです。

森　一體、將來のことといふものは、容易に分かるものではありません。たとひ貴國にしても、四百年前に現在の國體を好んだ人はないでせう。

李　併しこれは我が國だけの變革で、決して洋風を用ひたのではありません。

森　併し、變革はやつはり變革です。殊に、貴國の變革は強迫に出たもので、貴國の人民は容易にこれに服さなかつたと言ふではありませんか。

李　いや、併し、それは衆愚のことで、變革の動機は勤王の志にあつたのですから、やむを得ません。

（間）

李　時に、亞細亞と歐羅巴の交際は將來どうなりませう――これに就いての御意見が伺ひたいものだが。

森　それは大問題です。この問題は各種の國民、各種の宗教の權威にも關係のあることで、世界二大洲の智力と富との競爭如何にある事だと思ひます。併し、私は亞細亞人ではありますが、亞細亞が歐羅巴と對抗の出來る時機はまだまだ數百

年後でなければ來ないと思ひます。單に外面から見ましても、今日の亞細亞人の下賤野卑なことは禽獸を距ること遠くないと思ひます。

李　なぜそんなことを言ふのですか。

森　何よりも先づ第一に言ひたいのは婦人に關することです。一體、婦人を尊ばなければならないのは、天の定めた理法です。婦人は人間の母です。一國一家の母です。然るに、亞細亞洲では、どこの國へ行つて見ても、婦人を卑んで、これを遇する道を知りません。まるで獸か何かのやうに扱ふのです。私が亞細亞人を下賤だと言つた意味は、この一事を見てもお分かりになりませう。

李　これは不思議な議論を承るものです。あなたは一體耶蘇敎徒なのですか。

森　いや、私は耶蘇敎にせよ、佛敎にせよ、回敎にせよ、宗敎と名のつくものを一つも奉じてはをりません。現に御覽の通りの俗人です。唯常に正道を守つて、人を害さないといふことを一身の目的としてゐるだけです。併し、己れの心が己れの心を迷はして、實に實行の難きを嘆じてをります。

李　どうも實にあなたは豪い方だ。孔夫子のやうなお方でもあなたの仰しやるやうなことなら、謹んで聽くでせう。併し、あなたのやうな豪い方がをられるのに、どうしてあなたの國は外征などといふ輕擧妄動を企てられるのでせう。しかも、お國は今財政困難で巨額の公債をさへ歐洲に負うてゐるといふではありませんか。

森　併し、苟も思慮のある人間なら、豫め計畫す

るところなくして、妄に事業は起しますまい。

李　それは勿論のことです。併し、現在のやうに莫大な經費を計上して、この外にも外債を積むやうなことがあれば、國家は終に滅亡してしまふでせう。

森　外債のことに就いては、以前から私も聊か考を費してをります。一體負債といふものは、その方法と時機さへ宜しければ、必ずしも忌憚すべきものではありません。現に我が國の歐洲に對する負債の如きは、國家にとつて實益の廣大なるものがあるのです。

李　それはさういふかも知れません。負債は決して好いことだとは思ひませんが。

森　それはさうです。以前外債のない時代には、國民一般に理財のことを知らなければ國家の形勢にも無頓著でありましたが、今日では、たとへ小額でも外債があるといふことから、國民が理財の方法を會得して、常にその可否を論じ、一擧手一投足にも深い注意を拂ふやうになりました。その上、百般の工業を起して、その利潤を以て外債支償に充てようと努めるやうになりましたから、外債は却つて我が國の財政を善良に導いたと言はなければなりません。

李　それは結構なことです。服制の變革と言ひ、外國に對する負債と言ひ、それが貴國の幸福になるなら慶賀に堪へません。唯併し、歐洲に對する負債の増加は必ず貴國の獨立の束縛になるだらうと思ひますから、今後は御注意が肝要です。

森　御懇篤の程感謝いたします――それでは、今

日はこれで失禮いたします。

李　お歸りですか。それでは、朝鮮の一件は早速總理衙門の方へ申し遣しますから、暫くお待ち下さい。

森　委細承知いたしました。

（一同起立。禮。）

第四幕

第一場

明治十九年（西暦一八八六年）十二月某日の午後。
高崎正風邸の客間。
文部大臣森有禮、書生に案内せられて登場。

書生　只今直ぐお見えになります。

（森、默つて頷く。）
（書生、去る。）

（高崎、直ぐに出て來る。）

高崎　やあ。年末でいそがしいところを、よく來てくれた。

森　いえ、役所の方は用事はもう大抵片つきました。

高崎　家庭の方の用事はどうだ。

森　（默つて、高崎の顏を睨む）そんなことで私をお呼びになつたのですか。

高崎　さうではない。（笑つて）まあ、向きにならんでも好いではないか。

森　いや、併し、家庭の問題は家庭の内で解決するといふのが私の主義です。如何に先輩でも、他人の干渉は許しません。

高崎　誰が干渉すると言つた。僕は唯氣の毒だと思つて、見舞を言はうとしたのだ。

森　別に氣の毒なことはありません。

高崎　併し、君の男女同權論には多少の修正が施されるだらうな。

森　なぜですか――家内が不都合をしたからだと仰しやるのですか。

高崎　（默つてゐる）

森　そんなことで私の男女同權論が動いて溜まるものですか。その證據には、結婚をした時契約書を取交したやうに、離婚をする場合には、双方諒解の上、契約書を破棄したのです。

高崎　それでは、奥さんが同意をしなければ、離婚もしなかつたといふわけだね。

森　勿論です。

高崎　それは分からんな。

森　お分かりにはなりますまい。

高崎　世間でかう言つてゐるぞ――男女同權などといふことを稱へるものだから、女がそんな不都合なことをするやうになるのだと。

森　いや、それは違ひます。女の不都合は女の不都合で、男女同權とはなんの關係もないことです。その證據には、同權論が稱へられる以前にも、さうした事實はあつたではありませんか。

高崎　（笑つて）成程、これは一本參つた――ところで、君は後妻を迎へる氣があるか。

森　適當なのがあれば、貰つても好いと思つてゐます。

高崎　岩倉公が末のお孃さんを上げたいと言つてゐられるのだが。

森　岩倉さんのお孃さんだから、何でも彼でも貰へと言ふのでは困りますが、交際をして見て、

氣に入れば貰つても好いと思ひます。

高崎　さうか。それでは、そのことを先方へ傳へよう。

森　（少し打け解る）その御用だつたのですか。

高崎　いや、それもあつたが、實はけふは君にあやまることがあるので、わざわざ來て貰つたのだ。ところがいきなり男女同權論で食つてかかられたので、話がわき道へそれてしまつたのだ。

森　何をあやまると仰しやるのです。

高崎　例の黴の生えた勤王の一件だ。あれはこの頃になつて、つくづく君の説が本當だと思ふやうになつた。

森　いや、あれは酒の上で言つたことです。さう仰しやられると却つて恐縮です。

高崎　いや。ほんとに吾輩の勤王論などは、もう黴が生えて、犬も食はぬやうになつてしまつた。

森　あなたがそんなことを仰しやるのは不思議です。

高崎　いや、もう黴の生えた勤王論などは再び言はん。もうけふからは宗旨變へだ。

森　どう宗旨をお變へになるのです。

高崎　これからは歐羅巴主義だ。

森　飛んでもない。氣でもお違ひになつたのではありませんか。

高崎　いや、決して氣は違はん。

森　でも、あなたのやうな勤王家が急に歐羅巴主義にならうと言つたつて、それは出來ることではありますまい。

高崎　いや、決して出來んことはない。過つて改むるに憚ること勿れ。といふことがある。また

君子は豹變するといふこともある。勤王家が歐羅巴主義になつても、決して怪しむことはない。さあ、わしが歐羅巴主義になつた以上は、何も彼も歐羅巴流儀にしなければ氣が濟まん。第一君の係である教育などでも、早速歐羅巴流儀にしなければ困る。若し、さうせんやうなら、君の首を貰ひに行くかも知れん。

森　(腰を上げて笑ふ)　それはをかしい。現に歐羅巴流儀に爲しつつあるではありませんか。併しあなたの仰しやるやうに、さう早急には行きません。五六年の內には、きつと歐羅巴流にして見せます。

高崎　爲しつつあるといふ議論があるものか。わしは君も知る通り、英語も出來ず、佛蘭西語も出來ず、獨逸語も出來ないが、歐羅巴大陸は一通り廻つて見て來た。勿論風俗や人情も探り、教育の方面も注意して見て來た。ところが、どこの國へ行つて見ても、きつとその國の國語學校といふものがある。さうして、小學の讀本はその國の詞を正しく話させ、その國の文章を正しく書かせる階梯になつてゐる。佛蘭西へ行けば佛蘭西のことを先づ第一に教へてゐる。獨逸へ行けば、獨逸のことを先づ第一に教へてゐる。英吉利へ行つて見れば、英吉利のことを先づ第一に勉強させてゐる。かうして見ると、學校といふものはその國の國民を作る場所である。ところが、今君達の爲しつつあることはどうだ。皮相、髮の毛を切つて、洋服を着て、時計を下げたり、眼鏡をかけたりする位のことは爲しつつあるやうだが、日本の學校が果して日本人を

作つてゐるかどうかは疑はしい。なぜと言へば君が貰い學位を授けた博士とか學士とか言はれる人達の中に、手紙一つ滿足に書けぬ人があるではないか。わしは二三人さういふ人を知つてゐるので、始終手紙を貰つてゐるが、いつもてにはや語格が間違つてゐる。佛蘭西や英吉利の博士に、自國の文法を間違へて手紙を書くやうな人が一人でもゐるだらうか。どうだ。ちやきちやきの博士が、氣の毒な程日本の文法を知らぬ手紙をよこしたのだ。それでも日本の博士と言はれるか。わしが歐羅巴流にして貰ひたいといふのは、ここのことだ。歐羅巴の學校はその國の人を製造する場所である。日本の學校は英吉利人を製造する場所なのか、佛蘭西人を製造する場所なのか。英を學ぶものは英でなければならない。佛を學ぶものは佛でなければならない。日本の學問を隅つこの方へ押し込んで置いて、それで日本の學校だと言はれるか。日本の教育だと言はれるか。どうだ。早速あしたから歐羅巴流にして貰ひたいと思ふがどうだ。

森 （頭へ手をやる） 成程、これは一本參つた。實はそのこと就いては、私もかねて心配してゐるのです。かう言ふ自分も、日本文で手紙を書けば、きつと間違ひをするに違ひないのです――あなたは人が惡い。

高崎 いや、決して惡くはない。君の說に依つて自分の說を變ずるぐらゐ人が好いのだ。

（高崎笑ふ。）

森 もう澤山です。けふは一本參りました。

（森も笑ふ。）

第二場

明治二十二年（西曆一八八九年）一月二十八日の午後。

文部省の會議室。

直轄學校長會議。

森有禮、自席に起立して、演說す。

森　……現今帝國大學その他諸學校の氣風を見まするに、決して未だ滿足すべき狀態に達してをりません。蓋し、これは時勢の然らしむるところでありまして、諸君に於いても旣にお氣づきのことであらうと思ひます。ところで、今これを滿足すべき狀態へ進めようとするには、主として學政の目的を明示し、萬事この目的に向つて進むのが第一だと思ひます。さて、學政の目的とは何でありませうか。これは詳言せずとも旣に諸君の知悉せらるるところであります。抑も政府が文部省を設立して、學政の責を負はせ、その上國庫の資力を借りて諸學校を維持する所以のもの、畢竟國家の爲であるとするならば、學政の目的も亦專ら國家の爲といふことに歸著しなければなりません。例へば、帝國大學に於いて教務を執る場合に、學術の爲と國家の爲とに關することがあれば、國家のことを先づ第一にしなければならないのです。學政の上から見れば、諸學校の教育は生徒その人の爲にするのではなくて、國家の爲にするのです。一體、教育といふことは教科書の材料を列べて事物を知らせるといふに留まりません。一般國民の心を確め、精神上の方向を指示し、一つの重點に歸向せしむることが最も重要なことであります。

これは甚だ困難な爲事でありまして、二千年前の支那で行はれた周の世の教育を、その儘今日の世の中に移さうとしても、出來ることではありません。歐羅巴には宗旨があつてそれが少年の精神を固めることになつてゐますが、これはお國に於いて採るべきことではありません。然らば、お國の教育の結果をして、人心歸一ならしむるにはどうしたら宜しいでありませうか。幸にして、我國には萬國に類のない優美な國産があります。それは何だと言ふと、外ではありません。卽ち、御國の國體、萬世一系の一事であります。この一事より外に教育の基礎とすべきものはありません。御國の人民たるものは、遠い祖先から子孫の末に至るまで、千代に八千代に、御國の國土のあらん限り、萬世一系の天子に侍づき奉つてゐるのでありまして、こんな有難い國體は世界のどこへ行つても二つとは見られないのであります。この國の成立を以て教の基礎とすることが、教育上第一の主義とならなければなりません。これを棄てて、他に依るべきところはどこにもありません。どこにもありません……

（拍手。）

第五幕

第一場

明治廿二年二月八日の宵。

内務省屬山口縣人兒玉佐一の寓居。

主人の兒玉、同郷の青年四五名、大きな卓を圍ん

で夕飯を食つてゐる。

兒玉　憲法發布も近づいたな。

青年の一　あす、あさつて、しあさつてか。

青年の二　市中はえらい騒ぎをやるらしいな。

青年の二　新聞で見ると、なかなか奇拔な催しがあるらしい。

青年の四　山車や御輿も隨分出るらしい。

青年の一　それぢやあ山王の祭も同じことだな。

青年の二　東京人はお祭騒ぎが好きだ。中にはわけも分からずに騒ぐ奴もあるのだらう。

兒玉　いや、いくら騒いでも好い。お祭騒ぎはおれも好きな方ではないが、今度ばかりはいくら祝つても祝ひ足りないやうな氣がする。

青年の三　ほんとだ。君主獨裁が一滴の血をも流さずに立憲帝政に移るのだからな。

青年の四　古往今來、萬國を通じて、かういふ例はあるまい。

兒玉　ない。全くない。その代り、この二十二年の間の今上陛下の御苦勞はどの位であつたらう。おれはそれを思ふと、涙がこぼれて來る。

青年の三　板垣が民選議院設置の建白をしてからも、もう十六年になるからな。

兒玉　板垣などが何を言はずとも、陛下は既に御登極の際から、このことを天地神明に誓つてゐられたのだ。有難いことだ。

青年の一　大典の當日には、西郷も賊名を除かれるさうだな。吉田松陰へも贈位があるさうだ。

兒玉　大赦令が出て、國事犯は全部釋放されるさうだ。愈有難いことだ。

（内務省土木局計算課勤務西野文太郎。登場。）

兒玉　おう、西野、歸つて來たか。早く飯を食へ。けふはおれがけんちん汁をこしらへて置いた。

（西野默つて卓につく。）

兒玉　大層顏色が惡いぢやないか。體でも惡いか。

西野　（首を振る）いや。

兒玉　役所で喧嘩でもしたか。

西野　（首を振る）いや。

青年の三　どうしたのだ。

西野　いや、どうもしやせん。

兒玉　ぢやあ、飯を食へ。

西野　うむ。（まづさうに飯を食ふ）

青年の二　一體、貴樣、この頃どうかしてるぞ。

青年の四　背水庵からこつちへ移つて來た時は、ひどく愉快さうだつたが、この頃又すつかり沈んでしまつたな。

兒玉　青年は元氣がなくちやいかん――今も話してゐたことだが、しあさつては愈憲法發布だ。一つみんなで東京市中をあばれ廻らうぢやないか。

青年の二　おれも東京人のお祭さわぎには不贊成だつたのだが、今兒玉の話を聞いて、大いに祝ふ氣になつた處だ。

青年の一　どうせ役所も休みなのだから、東京中見物して歩かうと思つてるのだ。千載一遇の大典だからな。

青年の四　（西野に）なぜ默つてゐるのだ。

（西野、やつぱり默つてゐる。）

兒玉　西野、貴樣はこの大典をめでたいとは思はんのか。

西野　それはめでたいと思つてゐる。

兒玉　今上陛下の御治績を有難いとは思はんか。

西野　恐れ多いことだ有難いことだと思つてゐる。

兒玉　それでは、なぜもつと快活にせんのだ。

西野　唯一つ氣になることがあるからだ。

青年の二　分かつた。森文部大臣の不敬事件だらう。

西野　さうだ。

青年の四　貴様は頻にこなひだからあのことを言つてゐるが、あれは果して事實なのか。

青年の一　おれは事實だとは思はんな。この正月に文部省でした演説の筆記を見ても、森は立派な國體主義者だ。あんなことを言ふ人が、苟にも皇室の御先祖に對して不禮を働くなんて、おれには考へられないな。

兒玉　聞くところに依ると、森といふ男は、秀才ではあるが、非常に傲慢な男ださうだ。だから人に憎まれて、さもないことを大業に言ひ觸らされるのだらう。

青年の一　耶蘇信者だといふ噂もあるな。

青年の二　だから、神官や僧侶に憎まれてゐるだらう。

青年の四　さう言へば、西野の親父も神官ださうだな。

西野　いや、おれは宗教上の憎みなどから人を律しはせん。森は日本の國民として、誰が見ても許すべからざる行爲を敢てしたのだ。おれは德島から轉任して來る途中、伊勢へ寄つて、すつかり調べて來た。

兒玉　では、森は一體どんなことをしたのだ。

西野　森が三重縣へ學事視察に行つたのは、をとゝしの十二月だ。神宮へ參拜したのは二十八日の午後二時五十分頃だつた。案内役は尾寺禰宜だつたが、豐受大神宮の前まで來ると、森はステッキで御門扉の御帳を高く上げて、中を覗いたさうだ。尾寺禰宜が、この門内へは皇族以外のものはひることが出來んのだと言ふと、さうかと言ひながら、左の手で帽子をとつて、輕く頭を一度上げたきりで、その儘二見ヶ浦の賓日館といふ宿屋へ引き上げてしまつた。皇太神宮へはたうとう參拜しなかつたのだ。

兒玉　それは事實か。

西野　確な事實だ。その時隨行したといふ山田の或新聞記者から親しく聞いて來たことだ。

青年の二　事實とすれば怪しからんことだ。

西野　怪しからんといふ程度のことではない。帝國の臣民として實に許すべからざる不敬な行爲だ。況んや、これが教育の大任を雙肩に擔つてゐる文部大臣たるに於いてをやだ。

兒玉　併し、唯それだけのことなら、さう深く咎めるには及ばんと思ふ。おれは靴の儘神殿へ上がつたやうなことを聞いたが、まさかにそんなことはしなかつたのだ。

西野　咎めるに及ばんとはどういふ意味だ。ステッキで御帳を掲げたといふだけでも、不敬至極ではないか。

青年の三　それは森が日本のことを知らんからだ。あの人はうま煮のことを馬の肉だと思つたと言ふではないか。

西野　それは昔のことだ。森も今日ではもう四十

三だ。日本のことを知らんでは、もう濟まん。

青年の四　おれは森がそんな不忠不敬な人間だと思ふことは出來ん。さつき兒玉も言つたやうに、あの男の傲慢な態度が、さうした流言を生んだのだと思ふ。

西野　流言とは何だ。おれは實際調査して來たのだ。

青年の二　事實さういふことがあつたのなら、第一當局が默つてはゐまいと思ふが。

青年の一　森は昔帶刀廢止の建議をして、位記返上を食つたことさへあると言ふではないか。亜米利加で理事官の吉田と喧嘩をした時も、日本へ召還されたといふ話ではないか。それに、それ程の不敬を敢てしながら、安穩でゐられるわけがないと思ふ。

西野　それは今の内閣が腑拔だからだ。

兒玉　それでは、森一人が惡いのでなくて、今の内閣全部が惡いことになるではないか。

西野　勿論のことだ。

青年の三　森は西洋崇拜であるかも知れんが、國家主義者たるに於いては、昔から終始一貫してゐる。おれはどうしても森を不敬罪に問ふことは出來ない。

西野　森の國家主義は舶來の國家主義だ。日本で生れた國家主義ではない。

青年の三　併し、森は日本の國體の世界に比類のないことを賞讃してゐる。

西野　それは政略の上からだ。腹からほんとにさう思つてゐるのではない。

青年の一　それがどうして分かる。

西野　ステッキで御帳を掲げた一事でよく分かつてゐる。

兒玉　どうも、さういふ風にいつまでも一つことに拘泥してゐては困るな。兎に角、しあさつての大典には大赦令も出るといふのだ。もう好い加減に許してやれ。

西野　いや、許すことは出來ん。曠古の大典に、あんな非國民を列席させることは斷じて出來ん。

兒玉　出來んといつたつて、どうすることも出來んではないか。

西野　いいや、出來る。

兒玉　どうして出來る。

西野　おれが命を棄てれば、なんでもない。

兒玉　そんなことで命を棄てる莫迦があるか。

（一同、笑ふ。）

兒玉　さあ、もうそんな議論はやめにして、小川町へ散歩にでも行かうではないか。

青年の二　行かう、行かう。

青年の三　前景氣を見に行かう。

（一同立ち上がる。）

兒玉　西野、貴樣行かんのか。

西野　おれは一寸調べ物があるから、留守居をする。

青年の四　をかしな奴だな。ぢやあ、みんな行かう。

（一同、退場。）

（西野、一人殘り、葛籠の中から紙を出して、食卓の上に廣げる。それから、筆と硯を持つて來て、何か書き始める。紙の上に涙が落ちる。）

第　二　場

同年同月十一日午前七時。

森文部大臣官邸の應接室。正面に扉。扉の向うは廊下。中川秘書、西野文太郎を案内して、登場。正面の扉、開いた儘になりゐる。

中川　どうぞおかけ下さい。

（西野、椅子にかける。）

中川　（椅子にかけながら）大臣は御參内前で時間がおありになりませんから、私が代つてお目にかかります。私は秘書の中川といふものです。

西野　實は秘密に閣下へ申し上げたいことがあつて參つたのですが。

中川　併し、何分にも參内の時間が切迫してをりますので。また明日にでも。

西野　いや、今日御參内前に是非ともお耳へ入れ

て置かなければならないことがあるのです。

中川　私が承るわけには參りませんか。

西野　實はけふ、閣下を途上に要して暗殺を企ててゐるものがあるので、その顚末を直接閣下に申し上げたいと思つて參つたのです。

中川　（驚いて）それは一大事ですが、さういふことなら、委細をお話し下されば、折を見て私から大臣へ必ずお傳へいたします。

西野　いや、重大事件ですから、直接大臣にお目にかからなければ、申しあげることは出來ません。

（大禮服を著た森有禮、廊下の外を通りかかる。）

西野　（戸口へ走り寄る）閣下は大臣でありますか。

森　さうだ。

（西野、いきなり左の手で森の胴に抱きつき、手の下に隠してゐた出刃庖丁を揮つて、森の右の脇腹を刺す。森、應接室へ倒れ入る。）

中川　（呼ぶ）　賊だ。賊だ。

（家扶岡本清遠、飛んで來る。中川と力を合せて西野を組伏せる。）

（屬官座田重秀、駈けつけて來る。）

（西野、跳ね起きて、再び大臣を刺さうとする。）

（座田、仕込杖を拔いて、西野を斬り下げる。）

（岡本、中川、大臣を抱へ起す。）

第三場

同年同月同日午前十時。

文部大臣官邸の二階。大臣居室。

森、病床に横たはりゐる。中川、座田、主治醫など侍しゐる。

森　（譫言のやうに）中川、中川。

中川　（摺り寄る）はい、はい。

森　中川はをらんか。

中川　中川はここにをります。

森　兇漢はどうした。

中川　座田君が直ちに成敗しました。

森　斬つたのか。

中川　はい。

森　可哀さうに。何で斬つた。

中川　仕込杖で。

森　仕込杖で。（間）兇漢はおれを何で刺した。

中川　（答へない）

森　何で刺したのだ。

中川　はい。庖丁で。

森　庖丁で。

中川　はい。

森　おれの兄は日本刀で腹を切つた……おれは庖丁で刺された……兇漢は仕込杖でやられた。

（沈默。）

森　（譫言のやうに）兇器は……兇器は……

（沈默。）

（岡本家扶、大禮服の内閣總理大臣黑田淸隆を案内して來る。）

（黑田、直ぐ森の枕頭に行く。）

黑田　森、森。

（森、瞑目して答へない。）

黑田　安心せい。憲法發布の大典は、歡呼の内にめでたく終つたぞ。

（森、目を開く。）

黑田　天皇陛下から優渥な御沙汰があつたぞ。

（森、微に笑つて、僅に頷く。やがて又瞑目す。）

（百一發の祝砲、遠く響く。）

（市民歡呼の聲、遙に聞ゆ。）

ある敵討　四幕

人物

川野九十郎
北條造酒之助　後に近藤一學と稱す
淺田十郎兵衛
池田七郎左衛門
近藤源太兵衛　造酒之助の伯父
近藤宇右衛門　源太兵衛の兄
山本五郎兵衛
小山田清左衛門
二和十兵衛
山田又一
高橋喜兵衛
淺田鄕右衛門　十郎兵衛の弟
半左衛門　淺田の家來

時代

延寶より天和

第一幕

第一場

但馬村岡藩山名主殿の江戸邸の一室。

（小姓の北條造酒之助と朋輩の川野九十郎が激しい口論をしてゐる。）

川野　いや、貴樣が惡いのだ。

北條　うんにや、貴樣が惡いのだ。

川野　貴様の狡いのは誰でも知つてゐる。

北條　貴様の狡猾なのを知らん者はない。

川野　貴様のやうな奴がゐるのは、村岡の名折れだ。

北條　貴様こそ獅子身中の蟲だ。

川野　言つたな。

北條　言つたとも。

川野　蟲とはなんだ。

北條　蟲は蟲だ。毒蟲だ。蛆蟲だ。

川野　何を。（刀を拔きかける）

北條　生意氣な。（いきなり刀を拔いて、相手を斬り下げる）

川野　あつ。（息絶える）

（北條、狼狽する。）

（淺田十郎兵衛、池田七郎左衛門、駈けつけて來る。）

（北條、いきなり二人に縋りつく。）

北條　逃がして下さい。逃がして下さい。

淺田　一體、どうしたのだ。

北條　きのふの御前勝負のことから九十郎と喧嘩をしたのです。斬るともなしに斬つてしまつたのです。九十郎は殿様のお氣に入りです。私はお咎めが恐ろしいのです。

淺田　（池田に）どうしたものかな。

池田　若氣の至りだ。逃がしてやらう。あとはどうともなる。

北條　どうかお願でございます。お願でございます。

淺田　（池田に）だが、若し大事になつたら。

池田　切腹するばかりだ。

淺田　貴公がか。
池田　おれも、貴公も、造酒之助も。
淺田　三人で腹を切るのか。
池田　さうだ。
淺田　よし、引き受けた――造酒之助もそれは承知だらうな。
北條　勿論です。あなた方に御迷惑がかつたら、私はどんなことでもいたします。
淺田　よし、それでは逃げろ。
北條　有難うございます。
池田　何氣ない態で出て行くのだぞ。
北條　はい。
淺田　早く行け。

（北條、走り去る。）

（池田と淺田、死骸の始末をする。）

第　二　場

浪人近藤宇右衛門の住居。本郷。

（宇右衛門、一人で經書の裏張りをしてゐる。）

（近藤源太兵衛、北條造酒之助を連れて來る。）

宇右衛門　（目金を外して）源太兵衛か。暫く顔を見せなかつたな。
源太兵衛　御不沙汰をしました。
宇右衛門　御用繁多と見える――殿樣にはお變りはないか。
源太兵衛　至つて御壯健です。
宇右衛門　それは何よりだ。（造酒之助を見る）どうした、造酒之助。けふは伯父さんと一緒か。御前の首尾はどうだ。
造酒之助　はい。（と言つたきり默つてゐる）
宇右衛門　（源太兵衛に）大層顔色が悪いやうでは

ないか。どうかしたのか。

源太兵衞　實は、兄上、そのことで伺つたのです。

宇右衞門　病氣か。

源太兵衞　いえ、病氣ではありません。

宇右衞門　では、どうしたのだ。

源太兵衞　朋輩の川野九十郎と喧嘩をして、相手を殺めてしまつたのです、

宇右衞門　それはいかんな。

源太兵衞　併し、御存じの淺田十郎兵衞と池田七郎左衞門が庇つて逃がしてくれたのです。それで、私のところへ賴つて參つたのですが、私は主人持でもありますし、長屋住居では人目も多いので、兄上のところへ匿まつて頂かうと思つて、連れて參つたのです。

宇右衞門　出來たことは爲方がない。よし、それではおれが引き受けよう。併し、ここも長屋だから安心は出來ん。(一寸考へて)さうだ。安中の堀田樣で小姓を一人探してゐるさうだから、あしたにも連れて行つて、あすこへ住み込ませることにしよう。

源太兵衞　それは好都合ですな。

宇右衞門　あすこは、お前も知つてゐる池邊が家老をしてゐるから、あれに賴めば間違ひはあるまい。

源太兵衞　成程、あすこには池邊樣がお出でてしたな。

宇右衞門　ところで、北條造酒之助ではいかんから、名を何とか變へよう。(考へる)かうつと…………一學といふ名がおれの家にある。近藤一學はどうだ。

源太兵衞　宜しいでせう。
宇右衞門　好いか。（造酒之助に）それでは、けふからお前は近藤一學だぞ。
造酒之助　はい。
宇右衞門　もうさう心配せんでも好い。若氣（わかげ）の至りだ。堀田家へはひつてしまへば安心だ。
源太兵衞　（造酒之助に）ほんとだ。もう心配しないでも好い。
造酒之助　はい。
宇右衞門　酒にしよう、酒に。一升買つて來てくれんか。
（造酒之助、立たうとする。）
宇右衞門　お前はいかん。お前はまだ世を忍ぶ身だ。（笑ふ）
源太兵衞　私が行つて行ります。

宇右衞門　賴むぞ。（金を渡す）

第二幕

第一場

浪人になつた淺田十郎兵衞と池田七郎左衞門の侘住居。谷中。
夕暮。
（淺田が一人で飯の支度をしてゐる。）
（編笠を冠つた池田が歸つて來る。）
淺田　どうだつた。
池田　だめだつた。
淺田　源太兵衞のところへ逃げたのは確なのだな。
池田　それは確だ。

浅田　今もやつぱり源太兵衛のところにゐるのか。

池田　どうもそれがゐないらしいのだ。

浅田　それでは、どこにゐるのだ。

池田　源太兵衛の兄の宇右衛門な。

浅田　うむ、あの、浪人をしてゐる。

池田　さうだ。あの宇右衛門のところにゐるらしいのだ。

浅田　宇右衛門はどこに住んでゐる。

池田　本郷だ。けふ家も突き留めて來た。

浅田　よし。それぢやあ、あした二人で行つて見よう——飯が出來た。さぞ腹が減つたらう。一緒に食はんか。

池田　うむ、食はう。

（二人で飯を食ふ。）

浅田　實際、こんなばからしいことはないな。

池田　ばからしいといふよりは腹が立つて來た。

浅田　そりやあ、おれ達も武士だから、一旦言つて逃がしてやつた以上は、責はどこまでも負ふつもりだが、肝心の造酒之助がをらんのでは、どうすることも出來ん——まさか、二人だけで腹を切るわけにも行かんからな。

池田　いや、おれ達は既に切腹以上の目に會つてゐる。あいつを逃がしたばかりに主家を追はれたのだ。造酒之助を討つて出すまでは歸參は叶はんと言ふのだ。

浅田　おれ達がこんな目に會つてゐるのは、噂にも聞いてゐるようのに、あいつが姿を見せないのは怪しからん。

池田　おれはあいつが出て來たら、あいつとおぬ

しと三人で腹を切るつもりだつたが、もうかうなつては、あいつが敵だ。おれはあいつを討ちとつて、主家へ歸參するつもりだ。

淺田　おれもさつきから考へてゐた。事を起した當人が知らん顏をして隱れてゐるのは怪しからん。いくら年若でも、武士の端くれではないか。あんまり恩知らずだ。

池田　卑劣極まる奴だ——おれは是非ともあいつを見つけ出して、討つて捨てる。

淺田　おれも同感だ。武士の義理はもう立てるだけ立てた。もうかうなつたら、あいつを討つて捨てるのが武士の意地だ。

池田　討たう。

淺田　是非とも討たう。

（飯の膳を片づける。）

第二場

本郷四丁目の街路。

（右から編笠を冠つた池田と淺田が出て來る。）

（左から近藤宇右衛門が四つ手駕籠に乘つて出て來る。）

（池田と淺田が、それに目をつける。）

池田　宇右衛門だ。

淺田　うむ、宇右衛門だ。

池田　呼び留めろ。

淺田　（大聲に）こら、駕籠。待て、待て。

（駕籠留る。）

池田　近藤氏ではないか。

（宇右衛門、顏を出す。）

宇右衛門　池田氏に淺田氏か。暫くだつた。

淺田　挨拶はあとでよい。訊くことがある。北條

造酒之助が貴公のところにゐるだらう。

宇右衛門　いや、わしの家にはをらん。

池田　では、どこにゐる。それが聞きたい。

宇右衛門　山名様を出たといふことは聞いたが、その後のことを知らん。

淺田　伯父甥の間で知らんといふ法はない。

宇右衛門　いや、知らんことは知らん。

淺田　嘘を言ふな。

宇右衛門　嘘は言はん。知らんことは飽くまでも知らん――駕籠屋、早くやれ。

池田　（殺氣を帶びて、淺田と目くばせをする）待て。

（宇右衛門を駕籠から引き摺りおろす）

（淺田、物をも言はずに、宇右衛門を刺す。池田も同時に一太刀浴びせる。）

（駕籠屋逃げる。）

（宇右衛門、死ぬ。）

（淺田と池田、編笠を捨てた儘、走り去る。）

（近藤一學（北條造酒之助）通りかかる。）

（宇右衛門の死骸を見て驚く。）

一學　伯父様、伯父様――これはどうしたことだ――もう事切れてゐる、（二つの編笠に目をつける。直ぐそれを手にとつて、緒に書いてある名を見る）うむ、池田に淺田か――ううむ。（前を睨む）

第三幕

第一場

旅宿の一室。京都三條。

（小間物賣の裝をした近藤源太兵衛、既に元服をした近藤一學。その他小山田淸左衛門、高橋嘉兵衛、

二和十兵衛などが車座になつてゐる。二和は病氣らしく、髪もほつれ、顔も蒼ざめてゐる。）

（槍、刀、鎖帷子、繩梯子などが、そこらに置き散らしてある。）

（源太兵衛が、長い手紙を膝の上に廣げて、みんなに話してゐる。）

源太兵衛　親父からはかう言つて來たのだ――今年は兄宇右衛門の七回忌に當るではないか――人生古來七十稀といふことがあるから、七十を越してゐるおれには、命はもう入らない。唯、お前が首尾よく敵を討つてくれれば――よし討ち損じても、敵の屋敷を枕にして討死したとでも聞くなら――この世に思ひ置くことはない――それだのに、おれの身の上を案じて、ぐづぐつ月日を送つてゐるやうでは、死んでも冥途の障りだ――不孝の沙汰だ――この世の音信はもうこれ限りだ――とかう言つて來たのだ。（感激して）おれはどうしても今年中に敵を討たなければならん。

小山田　（高橋に）さすがは源太兵衛樣のお父樣だ。實に立派なお手紙ではないか――おれはまだお目にかかつたことはないが、亡くなつた親父は一方ならぬお世話になつたものだ。

高橋　去年、あんな失敗さへしなければ、もう疾うに敵は討つてゐたのだ。實に殘念なことをした。

小山田　年貢を納めに行く百姓達の松明を追手の者と間違へるなどとは、おれもよつぽど慌ててゐたのだ。あれは全くおれが惡かつたのだ。

一學　いや、その前にみんなを連れて逃げたのはこのおれだ。おれは事が露顯して村岡勢が押寄

てさ來たのだと思つた。おれの方がよつぽど臆病者だつた。おぬしはたつた一人で淺田の屋敷へ乘込んだ勇者だ。おれ達の方で牒合せをしないから、不思議に思つて、また塀を乘越えて出て見ると、一味のおれ達は一人もゐないで、あの天を焦がすやうな焰だ。これは逃げるのが當り前だ。罪はおれにある。おぬしに罪はない。

小山田　いや、たとひ一人になつても、踏み留つて戰ふのがほんとでした。わたしは大恩のある師匠方に對しても、申譯のないことをいたしたと思つてをります。

高橋　全く、あれまでは淺田も油斷をしてをつたやうだが、あれからすつかり用心をしてしまつたからな。

小山田　あれは全くおれが惡かつたのだ。おれはどうしてもその償ひをしなければならん。

源太兵衞　（突然）　もう古いことを言ふな――過ぎ去つたことを詮議したところで、なんにもなりはせん。たとひどんな失敗があらうと、小山田、高橋、二和、山本、山田などの一味が、この六七年の間、誠心誠意おれ達と辛酸を共にしてくれたに就いては、いくら禮を言つても言ひ足りない――改めて言ふまでもないが、事は操の一學から起つたのだ。併し、一學の行方が知れないからと言つて、いきなり宇右衞門を討つといふ法があるものか。それも好い。それも好いとする。それを功にのめのめと歸參をして、故郷の街頭で平氣な顔をして暮らしてゐるとは、武士の風上（かざかみ）にも置けぬ奴等だ。士道から言つても許し難い公敵だ――しかも眼前、おれにとつ

ては兄の敵、一學にとつては伯父の敵だ。

高橋　さうですとも、さうですとも、天地共に容れざる大惡人です。

源太兵衛　おれはこの親父の手紙を見て、もう溜まらなくなつた――あすは是が非でも但馬へ押寄せて行かう。

一學　ええ、行きませう。

小山田　吾々はいつでも參ります。

高橋　二和の病氣か心がかりだが……

二和　いや、おれは途中で斃れるまでも、ついて行く。

（鏡磨の裝をした山本五郎兵衛が歸つて來る。）

一學　おう、五郎兵衛、歸つて來たか。

源太兵衛　聞道はどうだ。

山本　すつかり探つて來ました。今度は自分で實地に見て來ましたから、もう大丈夫です。

一學　敵の備へはどうだ。

山本　その樣子を窺ふので、思はぬ日がかかりました。併し、御安心なさい。去年の暮れまでは用心をしてゐたやうですが、この頃では、もう大丈夫だと思つたか、すつかり油斷をしてゐるやうです。池田の方にも、淺田の方にも、あまり人數はをりません。

源太兵衛　よし。この機會を外してはならんぞ。山本、疲れたらう。少し休むが好い。あすは愈討入だぞ。

山本　え。ではあした直ぐにお出かけですか。それは有難い――さう聞いたら、疲れも何もどこかへ行つてしまつた。（笑ふ）

（山田又市が歸つて來る。）

小山田　おう、山田、暇乞をして來たか。

山田　うむ。

高橋　お母さんの病氣はどうだ。

山田　もうだめだ。何しろもう六十八だからな。

小山田　それは氣の毒だ。

山田　いや、ところがおれはお袋に叱られて來たのだ――自分は長くこの世にゐる身でない。道端で餓死をしても構はん。お前は孝行者だから母のことが氣にかかるだらうが、母に心を引かれて敵の俘にでもなつたら、七生までの勘當だ。人におくれぬやうに早く討死をしろ――かう言つて、お袋は寢床から匍ひ出して來て、おれを家の外へ突き出したのだ。（泣く）

源太兵衛　（感動して）　似たやうな話があるものだ。山田、これを見ろ。（まだ開いた儘手にしてゐた手紙を山田に渡す）

（山田、默讀する。感激の色、眉宇に現る。）

源太兵衛　愈あすは討入だぞ。（いきなり側に置いてあつた刀を拔いて、刀身をぢつと見入る）

（一同、思はず同時に、刀を拔く。）

小山田　山田、泣くな。

山田　泣きはせん。（泣いてゐる）

高橋　二和、大丈夫か。

二和　大丈夫だ。（立ち上がつて、刀を構へる）

第二場

但馬の淺手坂。

（源太兵衛、一學、山本、小山田、高橋、勢込んで進んで來る。）

（二和は一人駕籠に乘つてゐる。）

二和　（駕籠の中から、苦しさうな聲で）　待て、待て、

(駕籠、留る。一同も足を留める。)

二和　(垂れを上げて顔を出す。形容枯槁してゐる)

おれはもうだめだ。堪へに堪へて來たが、これでは村岡へ著くまでの命があるまい。とても晴れの場所へ臨むことは出來ん。如何にも殘念だが、もうかうなつては爲方がない。みんなの足手纏ひになるばかりだ。頼むから、おれを敵の方へ向けて殺してくれ。

源太兵衛　(感動して)好い覺悟だ。おぬしばかりではない。おれ達の命もけふ限りだ。先立つ者もおくれる者も三途の川は手を引いて渡らう。

(一學に)盃はないか。

(一學、携帶用の盃と水筒を出す。)

源太兵衛　別れの盃だ。

(一同、飲み廻す。盃を割る。)

源太兵衛　それ、又市。(刀を拔く)

(山田も刀を拔く。)

(二和、垂れを下げる。)

(源太兵衛と山田、左右から駕籠を刺す。悶絶の聲。)

(源太兵衛の命令で、一同、駕籠を上から縛い、その儘、谷底へ投げ棄てる。)

源太兵衛　行け。

(一同、後をも見ずに押して行く。)

第四幕

第一場

池田七郎左衛門の屋敷の前。但馬村岡。夕暮。

(「火事だ。火事だ。」といふ聲が、方々でする。や

（がて、半鐘の音すしる。）

（町の者が右往左往する。）

（身を堅めた一學と小山田と山本が、拔刀して、池田の屋敷へ躍り込む。）

第二場

池田の隣家なる淺田十郎兵衞の屋敷の一室

（主人の淺田十郎兵衞と隣の池田七郎左衞門が碁盤に向つてゐる。）

（途端に、隣に恐ろしい物音人聲がする。）

（二人、思はず顏を見合す。）

池田　何だらう。

淺田　何だらう。

池田　（腰を浮かす）近藤かも知れんぞ。

淺田　（顏色を變へる）近藤に違ひない。

池田　大勢で來たらしいな。

淺田　うむ、大勢だ。

池田　逃げろ。

淺田　逃げろ。

（二人、別々の方角へ逃げる。）

（源太兵衞の聲がする。）

「十郎兵衞はをらんか、出會へ、出會へ。」

（源太兵衞、拔刀で現れる。）

源太兵衞　逃げたな。卑怯者。源太兵衞だ。出會へ、出會へ。

（池田が逃げ惑つて、出て來る。）

源太兵衞　おう、七郎左衞門か。兄の敵だ。覺悟しろ。

（池田、いきなり源太兵衞に組みつく。）

（源太兵衞、池田に組み敷かれる。）

（池田、源太兵衞の差添を拔いて、一太刀刺す。鎖帷子を著てゐるので、思ふやうに刺さない。一學が飛んで來る。）

一學　おのれ・七郎左衛門。
（池田を引き倒す。）
（源太兵衛、跳ね起きる。）
（二人で終に池田を爲留める。）
源太兵衛　十郎兵衛はをらんか。
一學　をりません。
源太兵衛　探せ。
（二人、別々の方角へはひる。）
（山田又市と淺田郷左衛門とが渡り合ひながら出て來る。そこへ半左衛門が飛び出して來て山田の眉間へ槍をつける。）
（源太兵衛が又戻つて來る。郷左衛門を斬り下げる。）
（半左衛門、逃げる。戸口で、丁度來た高橋喜兵衛に斬られる。）
源太兵衛　十郎兵衛はをらんか。十郎兵衛はをらんか。
高橋　をりません。どこにもをりません。
（一學、出て來る。）
源太兵衛　おらんか。
一學　をりません。
（小山田と山本が出て來る。）
山本　村岡勢が二三十人押寄せて來ました。
小山田　もうこの屋敷はすつかり取圍まれてゐます。
源太兵衛　十郎兵衛はをらんか。
山田　隣にも、この家にも、もう誰もをりません。
源太兵衛　もうこれまでだ。七郎左衛門も討つた。弟の郷左衛門も討つた。家來も一人爲留めた。これでも出會はんやうなら、十郎兵衛を爲留めたも同然だ。

一學　だが、殘念だな。畜生。

（外で鬨の聲がする。）

源太兵衛　やつて來たな。（一同を見る）さあ、もう斬り死にだ。

（付同勢、四方から斬り入る。）

（亂鬪。）

シネマトグラフ 十二場

(一) 或大きなビルヂングの外壁

(高い窓からするすると綱が下がつて來る。)

(洋服を著た若い男が、するすると綱をつたはつて降りて來る。會社員の三輪である。)

(左手から刑事Aが姿を現す。)

(三輪、右手へ逃げる。A、あとを追ふ。)

(入れ違ひに、右手から掏摸の仙吉が逃げて來る。刑事Bが追つて來る。「掏摸だ。掏摸だ。」といふ聲が聞える。二人、左手へ消える。群集、現れる。)

(左手から或キネマ會社の撮影隊が現れる。撮影監督、撮影技師、助手數名、盜賊に扮した男優一名、刑事に扮した男優二名、妖婦に扮した女優一名などである。群集、足を留めて、見る。)

(撮影が始まる。)

(盜賊がビルヂングの壁に沿うて逃げるのを、刑事があとからつけて來て、格闘になる場面である。女優には用がない。)

(格闘になると、群集が喝采する。)

(左手から、また掏摸の仙吉が逃げて來る。刑事Bがそのあとを追つて來る。二人、右手へ消える。)

(群集、「掏摸だ。掏摸だ。」と叫んで、そのあとを追ふ。)

(撮影隊、あつけに取られる。)

（二）　地下室のカフエエ

（三輪と三輪の情婦カチウシヤお時が、小さい卓を囲んで話してゐる。お時は或ダンスホオルのダンサアである。）

（刑事Aがボオイに扮して、二人の行動に注意してゐる。）

三輪　恐い。（戦慄する）

お時　（黙つて笑つてゐる）

三輪　恐い。（戦慄する）

お時　（黙つて笑つてゐる）

三輪　恐い。（戦慄する）

お時　何がそんなに恐いの。

三輪　エレエエタア……

お時　エレエエタアが恐いの。毎日乗つてゐるくせに。（笑ふ）

三輪　もう乗らない。

お時　いくぢなしねえ。

三輪　エレエエタアに掏摸がゐるんだ。

お時　掏摸が……

三輪　おれは大金を持つてゐたんだ。

お時　もう捕まつたでせう。

三輪　まだ捕まらない。

お時　直ぐ捕まるわ。

三輪　一人捕まると、また一人出て来る。

お時　濱の眞砂。（笑ふ）

三輪　おれはエレエエタアに乗らないで、窓から綱で外へおりた。

お時　泥坊みたいね。

三輪　すると、外には掏摸がゐて、おれを追つかけた。

お時　でも、無事に銀行まで行つたんでせう。

三輪　けふの用は濟んだ。でも、まだあしたがある。

お時　あしたのことはあしたのことよ。

三輪　恐ろしい。（戰慄する）

お時　掏摸にとられたつもりで、あした、その金をあたしにくれない。

三輪　飛んでもない。（立ちあがる）

お時　あたし、カフエが始めたいの。もう家もきめたの。資金が入るの。

三輪　だめだ。（行きかける）

お時　ぢやあ、男爵に頼んでよくつて。

三輪　それは困る。

お時　ぢやあ、あなた、お金をくれる。

三輪　困る。困る。困る（出て行く）

お時　待つて。待つて。（あとを追ふ）

（掏摸の仙吉が洋服ではひつて來る。第二の卓につく。）

（ボオイ（刑事A）が近づく。）

ボオイ　（默つてツインリストを見せる）

仙吉　今、もう一人來る。

ボオイ　お連れ樣はもうお出かけになりました。

仙吉　出かけた。（立つ）

ボオイ　はい。

仙吉　さうか。（出て行く）

（撮影監督、撮影技師、男優一二名入り來り、第三の卓を圍む。夜間撮影の歸りである。）

（お時がぼんやり歸つて來てもとの卓につく。）

（ボオイが近づく。）

ボオイ　どうしました。

お時　逃げちまつたわ。

ボオイ　どうせ。捕(つか)まります。

お時　男爵は當てにならないし……

ボオイ　人の金ですからね。

お時　ヰスキイを頂戴。

（ボオイ、酒をとりに行く。）

（キネマの連中、カチウシヤお時を見て囁き合ふ。）

（掏摸の辰、はひつて來る。第二の卓につく。）

（ボオイ、お時のところへヰスキイを持つて來る。それから、第二の卓に近づいて、辰にワインリストを見せる。）

辰　もう一人來るのだ。

ボオイ　（目でお時をさす）　あの御婦人でせう。

辰　（首頷して）　いや、違ふ。洋服を着た男だ。

ボオイ　そんなら、もうお出かけになりました。

辰　出かけた。

ボオイ　はい。

辰　さうか。（出て行く）

（お時、ヰスキイをあふる。）

（キネマの連中、卓を叩いて、ボオイを呼ぶ。）

（二）　撮　影　所

グラスステエジの内部。撮影の最中。

セツトは「一」のカフエエをその儘に摸したもの。お時が活動女優になつて、ヷンプに扮してゐる。「一」のロケエシヨンで盗賊に扮してゐた男優が、お時のヷンプに金をねだられて、それを拒絶する爲に、捨てられるといふ場面。

（監督が動きをつける。）

（刑事Aが監督助手になつてゐる。）

（撮影が始まる。）

お時　（臺詞を言ふ）　ぢやあ、どうしてもくれないの。

盗賊に扮した男優（臺詞を言ふ）だつて、そんな大金は……
お時　どうせ、人のものぢやないの。
男優　でも……
お時　たかが二萬圓ぢやないの。
男優　困るなあ。
お時　そんなに厭なら、もう頼まないわ。その代り、みんなにお前さんの素性を吹聴してやるから。（立ち上がる）
男優（立つ）まあ、待つてくれ、待つてくれ。
（途端に、會社員の三輪が飛び込んで來る。いきなりお時の前に跪いて、紙幣の束を捧げる。）
三輪　勘辨してくれ。勘辨してくれ。おれが惡かつた。おれが惡かつた。
（お時、紙幣の束をとつて振り廻しながら、聲を上げて笑ふ。）
（撮影中止。）

（四）ダンスホオル

（蓄音器が鳴つてゐる。）
（數組の男女が踊つてゐる。）
（その中に、掏摸の仙吉と辰とが混つてゐる。）
（三輪がカチウシヤお時を連れて來る。直ぐに踊の中へはひる。）
（刑事がAはひつて來る。いきなり三輪を捕縛する。仙吉と辰、逃げる。）
（お時そつと紙幣束を三輪の足元に置いて逃げる）
三輪　なぜ、こんなことをするんです。
刑事　一緒に來れば分かる。
三輪　間違ひです。
（刑事、紙幣に目をつける。拾ひ上げる。）
刑事（紙幣で三輪の頬を打つ）これは何だ。

三輪（覗いて、あたりを見廻す）　お時、お時、お時――（悲しげに叫んで、崩なれる）

（刑事、三輪を引つ立てる。）

（五）　繩のれん　1

内部

（掏摸の仙吉と辰が、二人とも分捕者のやうな裝をして、飲んでゐる。もう大分醉つてゐる。）

仙吉　銀をんか。

辰　まきんよ。

仙吉　けんの前か。

辰　ダンスに限るよ。

仙吉　エレヱエタはもうやばいぜ。

辰　でかが一人づつ乘つてるさうだ。

仙吉　ゆうべのは何だ。

辰　會社員だ。

仙吉　だいたいか。

辰　當分は河岸を變へることつた。

仙吉　長脇か。

辰　得意のばんか買よ。

仙吉　おいそれはもう懲り懲りだ。

辰　さあ。もう一杯飲んだら行かうぜ。

仙吉　うむ。

（兩人、獻酬する。）

（六）　繩のれん　2

外部。

（撮影隊が[illegible]お時を連れて、やつて來る。お時の扮したヴンプが、男に金を拒絕されて、自棄になつて、繩のれんを潜るといふ短いシインの撮影に來たのである。）

(刑事Aは、もう撮影隊の内にゐない。撮影が始まる。)

(労働者に扮した刑事Bが、出て來る。繩のれんを潜つてはひる。直ぐ入れ違ひに、仙吉と辰が逃げるやうに出て來て、左手へ消える。)

撮影監督　(手をあげる) ストップ。

撮影技師　取り直しですか。

撮影監督　今のがはひつたのかい。

撮影技師　ええ。

撮影監督　すつかりはひつたかい。

撮影技師　ええ。

撮影監督　面白いぢやないか。背景になつて。

撮影技師　さうですねえ、

(刑事Bが繩のれんを潜つて出て來る。)

(撮影隊、行きかける。)

刑事　もし、もし。

撮影監督　(立ち留る) 何です。

刑事　(笑つて) 撮影ですか、

撮影監督　ええ、さうです。

刑事　今、あつしがここへはひると、直ぐ二人出て行きましたね。

撮影監督　ええ。

刑事　あれはカメラへはひつたでせうか。

撮影監督　(困つて) さあ。

刑事　(威壓するやうに) 分からないんですか。

撮影監督　それは分かつてゐます。

刑事　はひつたんでせう。

撮影監督　取り直しをするかも知れないんです。

刑事　兎に角はひつたんでせう。

撮影監督　ええ。

刑事　いやどうも有難う。

(刑事B、どんどん行つてしまふ。)

(撮影隊、あつけに取られる。)

(七)　監　房

高いところに窓が一つある。

二三人の男が、暗い中にうごめいてゐる。

三輪が突き飛ばされたやうに、はひつて来る。

一人の聲　どうしたんだ。

三輪　ダンスだ。

もう一人の聲　どうしたんだ。

三輪　女だ。

更にもう一人の聲　どうしたんだ。

三輪　金だ。

一人の聲　拐帶(かいたい)か。

三輪　無罪だ。

もう一人の聲　ばか。

三輪　恐ろしい。

更にもう一人の聲　いくぢなし。

三輪　おれはなんにも罪を犯してやしない。

一人の聲　おれだつて、なんにも罪を犯してやしない。

もう一人の聲　おれだつて、なんにも罪を犯してやしない。

更にもう一人の聲　おれだつて、なんにも罪を犯してやしない。

三輪　(叫ぶ)女だ。

他の三人　(一緒に)女だ。

三輪　(叫ぶ)金だ。

他の三人　(一緒に)金だ。

三輪　(叫ぶ)ダンスだ。

（他の三人、踊り出す。「四」で聞えた蓄音機の舞踏曲、どこからともなく聞えて來る。三輪も踊へ加はる。）

（八）　汽車の中

二等室。

（カチウシヤお時と掏摸の辰が並んで腰をかけてゐる。二人の間に鞄が一つ置いてある。）

辰　どちらへ。

お時　おめにかかりましたわねえ。

辰　（驚いて）どこで。

お時　カフエエ、マノリで。

辰　いつ。

お時　五月二十七日の晩。

辰　五月二十七日の晩と。

お時　いやなボオイがゐたわ。

辰　ああ。

お時　あなた、直ぐお歸りになつたわ。

辰　（度胸を据ゑて）分かりました。失禮。

お時　どちらへ。

辰　あなたは。

お時　サツエイ。

辰　（びつくりする）サツエイ。

お時　（笑つて）活動の撮影。

辰　ああ、キネマの……

お時　キネマの方かも知れなくつてよ。

辰　（立つ）

お時　どうなすつて。

辰　次の驛で降ります……

（九）　試寫室

（「六」でとつたフイルムがスクリインへ映される。）

（仙吉と辰が繩暖簾を潛つて出る場面になる。）

誰かの聲　（暗闇で）待つた。

（フイルム留る。）

撮影監督の聲　誰だ。どうしたんだ。

（刑事AとB、スクリインの側へ寄る。）

撮影監督　ここの方です。あなた方は。

刑事A　警察の者です。ちよつと調べることがあります。

刑事B　このフイルムを暫く貸して下さい。

撮影監督　それは困ります。

刑事A　今のは役者ではないでせう。

撮影監督　いいえ、役者です。

（刑事B、スヰッチを捻る。）

（試寫室、明かるくなる。）

刑事B　今繩暖簾を潛つてはひつたのは僕です。

撮影監督　（首を垂れる）濟みません。

（十）　或海岸

（お時と男爵が、海水着で、砂原に腹ん匍ひになつてゐる。）

（日がかんかん當つてゐる。）

お時　燒けたわねえ。

男爵　お前も燒けた。

お時　もう構はないわ。役者は廢業だから。

男爵　秋からどうするんだ。

お時　カフエよ。もう家もきめてあるわ。

男爵　資金は。

お時　あなたが出すのよ。

男爵　僕は君がそんな商賣をするのは反對だ。

お時　なぜ。
男爵　大勢に顔を見られるんだらう。
お時　今までだつて見られてるわ。
男爵　今までは今までさ。これからはいかんよ。
お時　これからつて。
男爵　もう僕のものになつたんだから。
お時　冗談でせう。
男爵　何が。
お時　ふざけちやいけなくつてよ……お金はどうなのよ。
男爵　金よりは先づ今の問題だ。
お時　そんなことよりお金よ。
男爵　金よりは……
お時　いいえ、お金、お金、お金、お金……

（十一）　ステエション

（群集。）
（仙吉と辰、汽車から降りて、出て来る。）
（刑事AとB、群集の中から出て来て、いきなり二人を捕まへようとする。）
（格闘。）
（撮影隊がカメラを擔いで、やつて来る。）

群集の一部　芝居だ。芝居だ。
群集の他の一部　芝居ぢやない。芝居ぢやない。
（撮影隊、カメラを立てて、格闘を見る。）
或聲　芝居だ。芝居だ
他の聲　芝居ぢやない。芝居ぢやない。
（仙吉と辰、つひに捕縛せられ、刑事達に引つ立てられて去る。）
（群集の一部、そのあとを追ふ。）
（他の一部の群集、カメラを取り巻いて立つ。）

（お時がしよびれた浴衣一枚で、次ぎの汽車を降りて來る。）

（撮影監督が目をつける。お時、驚く。）

撮影監督　困るぢやありませんか、撮影の途中でゐなくなつちまつて。

お時　濟みません。

撮影監督　あの繪は中止しました。

お時　もう使つちやあ頂けないでせうか。

撮影監督　所長に訊いて見ます。

お時　お願ひですわ。お願ひですわ。お願ひですわ。（撮影監督の手に縋つて泣く。）

撮影監督　（困つて）分りました。分りました。

お時　（泣く）

（群集、笑ふ。）

（撮影技師、カメラを覗く。）

撮影監督　ばか。

（群集、笑ふ。）

（十二）　或ビルヂングの外壁

「一」と同じ舞臺

（刑事Aが立つてゐる。）

（高い窓からするすると綱が下がつて來る。）

（三輪がするすると綱をつたはつて降りて來る。）

刑事A　（帽子を脫ぐ）やあ。

三輪　（帽子を脫ぐ）やあ。

刑事　（笑つて）もうエレエエタアでも大丈夫ですよ。

三輪　（苦笑して）いえ、まだ安心は出來ません。

刑事　銀行ですか。

三輪　ええ。

刑事　御苦勞ですな。

三輪　あなたも。
(三輪、右手へ去る。)
(撮影隊、再び女優になつたお時を連れて来る。)
(刑事A、近づく。)
刑事　撮影ですか。
撮影監督　(氣がつく)　やあ。こなひだは失禮。
刑事　行方不明の女優は。
撮影監督　無事に歸りました。(お時を指さす)
刑事　(お時を見る)　お前さんか。
お時　(刑事を見る)　まあマノリのボォイさん。
刑事　違ふ、違ふ。(行つてしまふ)
(お時、笑ふ。)
(撮影監督、窓から下がつてゐる綱を調べる。)
撮影監督　これが好い。これを登つて御覽。
お時　ええ、なんでもやるわ。

(撮影技師、カメラを据ゑる。)
(お時、綱を登る。登りかけては落ち、登りかけては落ちる。)
(カメラ、頻に移動する。)

——映畫俳優の爲の舞臺劇として

金玉均

主要人物

金玉均
朴泳孝
洪英植
徐光範
閔泳翊
閔台鎬
朴英教
李寅鍾
[illegible]
高永錫
申重模
劉大致
邊樹
松山泰藏　日本公使
今村進　日本公使館書記官
小林眞造　公使館附武官
上村中隊長
高木 ┐
岡本 ├ 日本志士
井上 ┘
高橋
壯士、別客、日本兵、韓兵、その他

時代

明治十七年十一月——十二月

場所

朝鮮京城

一

明治十七年十月二十日の夜。

朝鮮京城、外衙門參議金玉均邸客間に於ける「日本酒會」。

(主人、金玉均。客、代理公使今村進、公使館附武官小林眞造、志士高木、岡本、井上、高橋などの日本人に混りて、金の黨士朴泳孝、洪英植、徐光範、金の反對黨なる閔泳翊、閔台鎬、親清黨の金宏集、金允植など。卓二つ。各の卓の上に、神仙爐、沈菜、餅、團子。日本製の酒徳利と豬口が異彩を放つてゐる。)

(宴は既に半。主客皆醉ふ。)

(兩閔兩金と日本の志士とが爭つてゐる。)

高木　小國とはなんだ。

井上　弱國とはなんだ。

泳翊　併し、地圖の上では……

高橋　地圖の上ではいくら小さくても、膽つ魂は大きいぞ。

岡本　清國のやうにずうたいばかり大きくて血が通つてゐない國とは違ふぞ。

宏集　それはさうかも知れませんが、忌憚なく言へば、日本はまだ兵力が足りません。財力が足りません。

小林　兵力は必ずしも人數だけの問題ぢやない。日本の兵には訓練がある、規律がある、擧國一致の熱誠がある。一騎當千のつはものばかりだ。

台鎬　併し、衆寡敵せずといふ詞があります。いくら日本の兵が強くても、多勢に無勢では致し方がありますまい。現に、壬午の變亂でも……

小林　待ち給へ。君は又それを言ふのか。あの時

は堀本中尉が教官として来てゐただけで、日本の軍隊は来てゐなかつたのだ。それでも、三十二人の公使館員が一團となつて、國旗と公使とを守りながら、正々堂々と仁川まで引き上げたのだ。とても淸國人などに出来る爲事ではないぞ。

岡本　宏集君、君は現に謝罪の副使として濟物浦條約に調印をした一人ではないか。國王が國書を以て罪を謝したのだ。五十萬圓の償金も拂つたのだ。あの事件は、決して朝鮮の名譽ではない。

允植　如何にもさうです。併し、あれは大院君の排外思想が無知の暴徒を唆かしたので、決して國民全體の意志ではありません。

泳翊　その大院君を天涯萬里の異境に幽閉してくれたのも、淸國の機敏な處置です。若し、あの時北洋大臣があの敏速な行動に出なかつたら、朝鮮は今どうなつてゐるか分からないのです。

岡本　その代り、モルレンドルフなどいふ怪しげな獨逸人をよこして、朝鮮の内事外交に干渉の手を延ばし始めたのだ。さうして、君達はその干渉を甘んじて受けてゐるのだ。

台鎬　でも、吾々は淸國に恩があります。今日の平和は淸國のお蔭で得られたんですから。

高木　「今日の平和」か。うまく言つたな。なぜ「王妃黨の勝利」とは言はんのだ。なぜ「閔族の横暴」とは言はんのだ。

泳翊　いや、吾々は決して王妃の爲に黨を作るものでもなければ、閔族の多數を誇るものでもありません。現に、世間からは吾々の反對黨と見

られてゐる金、朴、洪、徐の諸君をさへ政府の要路に立ててゐるではありませんか。

井上　いや、それは單なる手段に過ぎない。君等は決して親日黨たる金君や朴君を快く思つてゐるのではない。

高橋　公使館を燒いても、國旗を侮辱しても、償金さへ拂へばそれで好いと思つてゐるのだからな。

台鎬　諸君は吾々が比較的清國に親しんでゐるのを見て、不快に思つてゐられるのでありませうが、これはやむを得ないことで、實際吾々は支那のお蔭で……

岡本　もう分かつた。支那のお蔭はあつても、日本のお蔭はないと言ふのだらう。

泳翊　必ずしもさうだとは言ひません。併し日本が吾々に對して十分親切だといふことはちと言ひ兼ねるのです。

今村　（始めて口を開く）なぜです。なぜ、そんなことを言ふのです。

泳翊　私は亞米利加へ參る時、日本へ寄りました。そして、亞米利加人のチヤウタンといふものを通辯に雇つて連れて行かうとすると、なぜか日本の政府はそれを阻害したのです。

今村　それは、その亞米利加人の資格に缺けるところがあつたからでせう。それは寧ろ日本政府の親切と言はなければなりません。

泳翊　そんなら、外に適當な人を世話してくれれば好いのですが、それもしてくれないのです。

（一同無言。）

台鎬　（冷笑して）兎に角、吾々は清國に恩にあつ

ても、日本に恩は……

岡本　ないと言ふのか。

泳翊　（断乎と）ありません。

高木・井上　（同時に）何を。生意氣な。

（日本人一同、立ち上がる。）

（兩閔兩金も立ち上がる。）

（あぶなく摑み合ひになりさうになる。）

（今まで沈默してゐた金玉均、驚いて、その間へ割つて這入る。）

金　まあ、待ち給へ。今夜の會は親睦の爲にやつたのではないか。親睦會が討論會になつてはいかん。（兩閔兩金に）まあ、諸君もさう興奮しないでくれ給へ。けふは日本酒の會だ。日本の諸君に一步讓るさ。

泳翊　いや、讓るといふことは出來ん。正義は飽くまでも正義だ。

台鎬　第一、こんな酒なんか、ちつともうまくない。

允植　老酒の方がよつぽどうまい。

高橋・岡本　（同時に）何を無禮な。

（摑みかからうとする。）

金　（兩閔兩金に）まあ、諸君は醉つてゐる。今夜は歸り給へ。あしたになれば分かることだ。好いさ、好いさ。朝鮮は如何にも支那のお蔭を蒙つてゐる。だが、日本の世話にもなつてゐないことはない。それで好い、それで好い。分かつた、分かつた。

（金は押し出すやうにして、兩閔兩金を部屋の外へ連れて出る。）

（朴、洪、徐などが頻に日本の志士を宥める。）

（直ぐ、金が一人で歸つて來る。）

高木　（まだ興奮してゐる）　おい、金君。君はどうして今夜あんな奴等を呼んだのだ。

井上　みんな君の反對黨ぢやないか。

岡本　閔泳翊なんて奴は、面を見ても蟲唾（むしづ）が走る。あんな奴が前にゐると、折角灘の生一本（きいつぽん）を振舞はれても、一向うまく飲めやせん。

高橋　不愉快つたらない。二言目には、日本のことを小國だの弱國だのと言やがる。

高木　彼等には支那より有難い國はないのだ。

金　（徐に笑つて）　まあ、まあ、諸君、僕があやまるから赦してくれ給へ。

高木　（しつこく）　だが、なんだつて、あんな奴等を呼んだのだ。

金　それは僕も公明な態度が執りたかつたからだ。吾黨ばかりで集まると、直ぐと目をつけられるからな。

井上　目をつけられたつて構はんぢやないか。君の親日黨たることは既に天下周知の事實なんだから。

金　いや、併し、輕擧盲動は出來ん。吾々の目ざすところは高遠だ。一時の快を貪つて、國家百年の計を失つてはならん。

今村　（宥めるやうに）　まあ、まあ、兎に角、これで水入らずになつたんだから、一つ愉快に飲み直さうぢやないか。

洪　一時はどうなるかと思つたが、まあ無事に濟んで結構だつた。

朴　それでも、よく先生達、おとなしく歸つたものだな。

今村　そこは金君の外交的手腕ですよ。

徐　いや、彼等の所謂「衆寡敵せず」主義に依るものでせう。

（一同笑ふ。）

（酒盃、また廻る。）

金　（今村に）併しねえ、今村さん。僕はどうも日本政府の眞意が測りかねますよ。清國の羈絆は、どうしても脱しなければならんと思つてゐますが、さうかと言つて、今の狀態では、日本に全然依賴することも出來ないのです。

今村　すると、日本が信じられんと言ふのですか。

金　さうです。日本政府の腰がきまつてゐないと思ふのです。

小林　なぜ、そんなことを言ふのですか。

金　小林中隊長にはまだお話しませんでしたが、今村書記官にはこなひだも話したことです。僕が日本に依賴するやうになつたのは、壬午の亂の謝罪使として朴君と一緒に東京へ行つた時からのことです。あの時は、實際日本は恃むに足る國だと思ひました。軍備擴張も決して日本の爲のみではないと言はれた、井上外務卿の詞にも、言外の深い意味が讀まれました。國債問題も委任狀さへあればといふところまで話が進みました。ところが、國へ歸ると間もなく、趙寧夏の奴が清國からモルレンドルフといふ獨逸人を顧問に雇つて來ました。閔泳穆や閔泳翊は、直ぐとこいつに附和して自家の利益を計り始めました。モルレンドルフの背後に清國のゐることは疑を容れないのです。北洋大臣は外洋人の顧問を通じて朝鮮の內政に干涉するといふ實に

巧妙な手段を執つたのです。僕は事毎にモルレンドルフと爭ひました。當五當十錢の鑄造問題などに就いては、半日も論爭を續けました。僕は貨政の弊を說いて、國債の遙に優れることを主張したのです。幸に主上は僕の意見をお納れ下すつて、三百萬圓の國債委任狀をお渡し下すつたのです。閔族やモルレンドルフは隨分妨害運動をしましたが、もう主上の御決心が堅いのだから、どうにもしやうがありません。そこでモルレンドルフは搦手から僕を陷れようとしたのですね。巧に松山公使に近づいて、僕のことを惡しざまに言つたものです。顧問の外國人だとは言ひながら、兎にも角にも朝鮮の內政に參與してゐる人の詞です。輕率な松山公使は忽ちそれを信じてしまつたのですね。公使の僕に對する態度が急に變つて來たのです。

洪　君が委任狀を持つて出發する時、松山公使に會つて、モルレンドルフを信じてはいけないと言つたら、公使はひどく怒つて、そんな莫迦なことがあるものかと言つたさうだ。

金　さうだ。怒りやうと言つたらなかつた。（小林に）公使はすつかり籠絡され切つてゐたのですね。併し、僕は平氣でした。一外交吏がどう思つたつて構はない。僕の相手は日本の政府だ。さう思つて、意氣揚々と出發したものです。ところが、日本へ着いて見ると驚きました。井上外務卿の態度がまるで以前とは違ふのです。初めからもう受けつけないと言ふ風なのですね。委任狀を出して見せても、一向に信用しない樣子なのです……僕は咄嗟に氣がつきました。松

山公使がもう外務卿のところへ、なんとか電報を打つてよこしたに相違ないと思つたのです。ところが、だんだん日本政府の様子を見てゐると、單に梶山公使の反感だけが原因ではないのですね。僕が朝鮮へ歸つてゐる僅數ヶ月の間に、日本政府その者の方針がまるで變つてしまつてゐたのですね。前には可なり積極的なことを言つてゐたのが、今度は暫く手を斂めて動かないといふ態度なのですね。これではどうにもしやうがないと思ひましたが、金を持つて歸らなければ主上に對して申譯がありませんから、亞米利加公使のビンガムといふのに泣きついて見ましたが、歐米ではまだ朝鮮がどういふ國であるかさへ分らないのですから、これも物にはなりません。當方が[illegible]しに第一銀行の澁澤さんに頼んで、たとひ十萬でも二十萬でも借りて歸らうと思つたのですが、これも外務卿の許可がなければといふことで、結局だめでした。散々(さんざん)な失敗で、國へ歸つて來ると、いつの間にか當五錢が鑄造されて行はれてゐるといふ始末です。僕の顔は日本のお蔭でめちやめちやに潰れたのです。もうさうなると、閔族は公然僕に反對の態度をとつて、益清國と密接な關係を結ぶ。モルレンドルフの如きは、朝鮮の害は當五錢に非ずして金玉均なりとまで公言するやうになりました。僕はもうつくづく厭になつて、無理にお暇(ひま)を願つて、一時田舍へ引込んでしまひました。

徐　それが又引つ張り出されるやうになつたのは、日本通商條約の紛議からだつたかな。

金　ああ、さうだ。もうその時は松山公使が日本へ歸つたあとで、今村さんが代理公使になつてゐたから、總てが圓滑に行つた。かう言ふとお世辭のやうになるが、今村さんは實際親切だし、吾黨の熱誠をも十分認めてゐてくれるのだが、日本の政府の態度が今のやうぢやあ、どうにもならんよ。

岡本　成程、君の言ふことは分かつた。併し、政府がどういふ態度を執らうと、吾々日本の國士が君達の味方をすれば好いではないか。僕等は君達の熱誠に動かされて、君達の運動を助けようとしてゐるのだ。人數が足りなければ、いくらでも日本から呼ぶぞ。

金　いや、その御厚志は有難いが、やはりそれだけでは事を起すことは出來んよ。朝鮮の惡政を除くには閔族を滅ぼさなければならん。その閔族の背後には淸國が控へてゐるのだ。

井上　淸國が控へてゐようと、何が控へてゐようと、ちつとも恐れることはないではないか。

金　それは大言壯語に過ぎん。一國家に當るには、少くとも一國家に依賴しなければならん。僕はその依賴しようとしてゐた國家に裏切られたのだ。僕は親日黨の故を以て王妃黨に憎まれながら、僕自身日本を信ずることが出來ないといふ窮境に陷つてゐるのだ。

今村　いや、金君、それは言ひ過ぎる。松山公使との問題は、双方の意志に疏通を缺いたところがあつたからです。成程、日本の政府があなたに對して冷淡だつたのは、松山公使の報告があつたからでもありませう。併し、公使があなた

な疑つたのは、あの時の時勢が時勢だつたからです。公使もう今日ではそれを後悔してをられるに違ひありません。併し、それは個人の感情問題で、日本政府の朝鮮に對する政略は一度でも變つたことはない筈です。況や、目下は安南問題から清國と佛蘭西との間に事が起らうとしてゐる時です。この際若しあなた方が起てば、日本の政府も決して唯傍觀はしてゐまいと思ひます。

金　（探るやうに）今村さん。大層勢の好いことを言ひますが、して見ると、日本の政府の態度は又變つて來たと見えますね。

今村　それは初めから變化はないと言つてゐるではありませんか。

金　さうすると、あなたの今のお詞は、あなた一個人としてのお詞だけではないのですね。

今村　それは明言の限りではありません。

金　それです。それだから、僕は疑はざるを得ないのです。

今村　併し、私は自分に與へられてゐない權限を使用することは出來ないのです。兎に角、もう十日程すると、竹添公使が歸任する筈ですから、さういふ問題は直接公使にお話になるが好いと思ひます。

金　公使が歸るといふことは僕も聞きました。併し、公使は僕に會ふでせうか。

今村　勿論、喜んで會ひます。

金　少しも恥ぢずにですか。

今村　それは私には分かりません。併し、公使はきつとあなたにお詫を言ふでせう。

金　さうですかねえ。

（急に風が吹いて來る。）

（戸障子ががたがたと鳴る。）

（一同、ぎよつとする。）

（風だと分かると、一同笑ふ。）

高橋　なんだ。風か。おどかしやあがる。

洪　いつでも、十月の今頃になると、きつと大風が吹くのだ。

徐　ちやうど神仙爐を使ひはじめる時分だ。

井上　この、餅や團子にも謂はれがあるのか。

徐　これは農家の祝だ。豐年の祝だ。

朴　ねえ、諸君、この風については、面白い傳說があるんだ。

高木　ほう。どんなことだ。

朴　昔高麗の王が船で江華島へ行幸をした時、船頭の孫石といふ者が舟を難所へ進めた。すると、王は忽ち疑つて、臣下に命じてこれを斬らせた。その難所を今に孫石頃と言つてゐる。毎年今頃になると、孫石の怨で風が吹くのだと言つて、江華島では決して船を出さないのだ。

金　（突然）それだ。その傳說が朝鮮國王の象徵だ。

岡本　疑ひ深いと言ふのがか。

金　いや、さうではない。船は是非とも難所を漕ぎ拔けなければならない場合がある。それが國王には分からないのだ。

井上　いや、疑ひ深いのは朝鮮人一般の天性だ。

金　いや、決してさうではない。

高木　さうではないと言ひながら、現に君は日本人を疑つてるのだ。

金　さうだ、だから、僕は寂しいのだ。

（金、苦しげに笑ふ。）

（一同、沈黙。）

（風、ますます吹き募る。）

二

同年同月廿一日の午後。

京城、日本公使館の寝室。

（松山公使。病褥にゐる。）

（村岡醫師、診察を終り、歸りかけてゐる。）

松山　どうです。もうあしたは起きられませうか。

村岡　ええ、もう熱もとれましたから、お起きになつても構ひません。唯今年は特別に氣候が悪いやうですから、外出をなさる時は、餘程御注意にならんといけません。

松山　有難う。やつぱり船の中で風を引いたのですね。

村岡　さうです。それに多少疲勞もあるやうです。あとで、もう一日分薬をお届けしますから、どうか召し上がつて下さい。

松山　ええ、有難う。

村岡　では、これで。

（村岡醫師、一禮して去る。）

（松山、枕の側に置いてある手紙を一二通開封して讀む。）

（今村書記官、登場。）

今村　あの、金玉均が訪ねて参りましたが……

松山　會はう。

今村　お會ひになりますか。

松山　あの男なら、遠慮がないから、寝室で會つても構はんだらう。

今村　そりやお構ひますまい。併し、金は大分閣下を恨んでゐるやうですから……

松山　會はん方が好いと言ふのか。いや、それは却つて會つた方が好い。あの男は大した經綸(けいりん)のある人物ではないが、國を思ふ意氣が壯(さかん)で、爲事の上にも機敏なところがある。僕はモルレンドルフの緒口に載せられて、大分彼を誤解したが、やつぱり彼は日本にとつて有用の人物であることが分かつた。それに、きのふも君に話した通り、政府の方針ももうすつかり定つたのだから、今後はどこまでも彼等と親しくして行かなければならぬ。

今村　では、ここでお會ひになるのですね。

松山　うむ。この儘會はう。直ぐ通してくれ。

今村　宜しうございます。

（今村、去る。）

（入れ違ひに、金がはひつて來る。）

松山　（半起き上がりて）　おう、金君、暫くだつた。

金　暫くでした。御病氣は如何ですか。

松山　いや、もう起きても好いのだが、用心して寢てゐるのだ。きのふも金宏集と金允植がやつて來たから、會つて、暫く話したよ。

金　僕も一緒に伺ふ筈だつたのですが、新築の運動場へ亞米利加公使や英吉利領事を招いてゐたので、失禮しました。

松山　フウドさんやアストンさんは相變らずか。

金　相變らずです。我黨に對しては絕えず好意を持つてくれてゐますが、いつも唯「時機を待て」と言ふばかりで、あまり深入(ふかいり)はしたくない樣子なのです。それでも、日本のやうに態度の始終

狗鼠するのみでは、まだ増しです。」

松山　いや、君、それは君の誤解だ。日本の態度に決して變化はない。僕はきのふも金宏集にさう言つてやつた、朝鮮の外衙門には清國の奴隷となつてゐる者が少くない。僕はそんな連中と事を共にするのは嫌だ。」と。それから、金允植にも言つてやつた。「君などは漢學も出來るし、清國に意を傾けてゐるさうだから、いつそ清國の官吏になつてしまつたらどうだ。」と。

金　(痛快の面持にて)　ほんとにそんなことを仰しやつたのですか。

松山　(得意げに)　ほんとに言つた。外務協辨の丁豪驥にも言つてやつたら、うんと罵倒してやるつもりだ。

金　それ程のあなたが、どうして去年はあんなに僕のすることを妨害なすつたのですか。僕はまだどうしてもあなたを信ずることが出來ません。實はけふ伺つたのも、あの時の怨を言ひに參つたのです。

松山　(默つてゐる)

金　朝鮮の國勢は壬午の變以來、危急存亡に瀕してゐます。大院君が清國へ擒になつてから、宮廷には外戚閔族の跋扈跳梁に委せられてをります。國民は惡政に苦しみ、官吏は私腹を肥やすに日もこれ足らざる状態です。百事君上を詿誤して害を國民に爲すものは即ち閔黨です。あなたはさうは思ひませんか。

松山　(默つてゐる)

金　その閔黨の背後にあつて、傀儡の糸を操るものが、即ちモルレンドルフなのです、陳樹棠な

のです、袁世凱なのです、更に北洋大臣李鴻章なのです。横暴なる清國の政府なのです。あなたはさう思ひませんか。

松山 （默つてゐる）

金 朝鮮をこの危急から救ふ策は、先づ第一に清國の羈絆を脱することです。それには政府の改革です。兵力の充實です。先立つものは何よりも財力です。そこで、僕は實狀を主上に訴へて、國債委任狀を賜はりました。喜び勇んで、日本へ渡つて見ると、井上外務卿の僕に對する態度が、まるで以前とは違つてゐるではありませんか。涙を呑んで亞米利加公使に縋りましたが、これもだめでした。第一銀行の澁澤さんに賴んで、たとひ豫定の十分の一でも二十分の一でも借りようとしましたが、これも外務卿の許可がないからと言つて拒ねつけられました。僕の計畫は悉く畫餅に歸してしまつたのです。（泣く）松山さん、一體、これは誰がしたことですか。だ、誰がしたことですか。

松山 （目を閉ぢて、尙沈默を續ける）

金 僕は期せずして主上を欺いたのです。閔黨は指をさして僕を笑ひます。モルレンドルフは公然僕を國家の荼毒だと主張します。僕は身の置きどころがなくて、一時東郊の別莊へ姿を隱してしまひました。その殘念さ口惜しさは、いまだに忘れることが出來ません。（泣く）松山さん、一體、これは誰がしたことですか。だ、誰がしたことですか。

松山 （やうやく口を開く）分かつた。分かりました。君の言ふことは一々尤もだ。あれは全く僕

の誤解から起つたことで、今になつて見ると、なんともお詫びの申しやうがない。君が日本で非常に困られたことも、實は聞いてみんな知つてゐる。あれは全く僕が人にあやまられたので、なんとも申譯がない。併し、いくら詫びたところで、もう過ぎ去つたことはどうにもならない。この償ひはきつとするから、まあ將來を矚目してくれ給へ。

金　（まだ相手を信じない。）それでは、少くとも僕に對するあなたの疑惑は、もう解けたのですね。

松山　解けたどころではない。僕は微力ながら君達を助けて、朝鮮の改革に盡さうとさへしてゐるのだ。

金　（愈自信をもつて。）それはさういふ風に日本政府の方針が變つて來たからですか。

松山　（まじめに。）國家の方針といふものは、決して一所に膠着すべきものではない。時に從つて變じ、勢に應じて動くのが國家の政策だ。

金　僕は三年前から、朝鮮を改革して、絆を清國から脱するには、日本に力を藉りるより外に手段はないと思つてゐました。然るに、その日本の態度は變幻常なき狀態で、吾黨はそれが爲にどれ程困苦を重ねて來たか分からないのです。僕は今になつて、あなたがそんなことを仰しやる意味が分かりません。

松山　分からんことがあるものか。佛蘭西は今安南問題に端を發して、既にクウルベ提督を東方に遣らうとしてゐる。清國は今累卵の危きにゐるのだ。この機會を利用しないで、外に機會が

あるものか。

（突然、今村書記官が現れる。）

今村　閔泳翊が參りましたが……

金　それでは、僕は歸りませう。（今村に）裏門から行きますから、どうか閔には僕の來たことは言はないで下さい。（松山に）あなたもどうぞ。

松山　大丈夫だ。では、もう行くか。折角自重してくれ給へ。

（金、默つて、別の扉口から去る。）

松山　（今村に）閔を通してくれ給へ。

今村　お會ひになりますか。

松山　會ふ。

（今村、去る。）

（やがて、閔がはひつて來る。）

三

同年十一月一日の夜。

金玉均邸の密室。

（金玉均、洪英植、徐光範、卓を圍んで、小酌す。）

徐　すると、日本政府の方針が變つて來たのだな

金　確に變つて來たに違ひない。それでなくて、あの弱蟲の松山が、どうしてあんな勢の好いことを言ふものか。

洪　そんな勢の好いことを言つたのか。

金　勢が好いと言ふよりは、寧ろ過激なのだ。金宏集や金允植なども、ひどくやつつけたらしい。

洪　清黨だといふところでか。

金　さうだ。尹泰駿も今にやつつけてやるなどと言つてゐた。だが、僕は一度ひどい目に會つたせゐか、どうもあの松山といふ人間が信じられ

ん。

徐　どうも輕卒な男らしいな。

金　非常に輕卒な男だ。

（鳥が啼く音がする。）

金　誰だ。

（外で聲がする。）

聲　（暗號を言ふ）天。

金　（暗號で答へる）ヨロシ。

（朴がはひつて來る。）

金　公使館へ行つて來たか。

朴　行つて來た。

金　公使にあつたか。

朴　あつた。

金　どんなことを言つてゐた。

朴　實に過激なことを言つてゐた。清國は今度の戰で佛蘭西に敗けるにきまつてゐる。君等が改革の爲に立つのは今を措いて外にはないなどと。

金　それから、まだ何か言つてゐたか。

朴　大院君の拘禁は不法だ。あれをあの儘にして置く法はないとも言つてゐた。

金　もう他に言つてゐたことはないか。

朴　朝鮮の内政は是非とも改革しなければならん。それには、歐米の公法に從つて、速に他國の覊絆を脱しなければならん。それは日本政府も望むところだ……

金　はつきり、そんなことを言つたか。

朴　うむ、はつきり言つた。

金　だが、僕にはまだ信じられんな。言ふことがあんまり突飛だから。

朴　實際、一國の公使たる者があゝ輕々しく物を言つては困るな。

金　僕もそれを言ふのだ。折角ここまで計畫が進んで來てゐるのに、松山の輕卒な行動で事が破れるやうなことになつたとしたら實に殘念ではないか。

徐　もうかうなつたら、一刻も早く事を擧げることだな。機先を制することだな。

洪　僕も同意だ。もうかうなつたら援助などは入らん。僕は僕の一身を挺して國家の爲に戰ふつもりだ。天若し僕を憐まば、事はおのづから成らう。

金　（笑つて）君の熱誠は認めるが、どうもさう簡單にはいかんよ。事大黨の宮廷に張つてゐる根は深いし、又それに培つてゐる淵源も可なりに廣く遠いのだからな。

（扉を叩く音がする。）

金　誰だ。

聲　（暗號を言ふ）天。

金　（暗號で答へる）ヨロシ。

（朴の兄、朴英教が顏色を變へて來る。）

朴　どうしました。兄さん。

英教　あした、松山公使が參内をするさうだ。

朴　うむ、それは僕も聞いてゐますが……

英教　ところが、謁見式が濟んだら、秘密で主上に申し上げたいことがあるから、密室で拜謁が願ひたいといふのだ。今、それで外衙門は擦つた揉んだの最中だ。

金　それはいかん。早速參内して、事情を確めて來よう。（立つ）どうも實に困るな。いきなり

そんなことを言ひ出せば、人が騒ぐにきまつてゐるぢやないか。

朴　ほんとにさうだ。（立つ）ぢやあ、僕も一緒に行かう。今夜は又徹夜だぞ。

金　勿論だ。

（二人、出かける。）

四

同年同月二日の午前。

王宮内、議政閣。

（日本公使接伴の諸閣及諸大臣の奥に集つてゐるのが見える。）

（公使に随行して来た今村書記官が、ひとりで廊下に出てゐる。）

（礼服を著た金玉均が、急いで出て来て、直ぐ今村の側へ寄る。）

今村　謁見は済みましたか。

金　無事に済みました。今、人払ひで密奏の最中です。

今村　誰も侍立してゐないのですか。

金　主上は僕に侍立をお命じになつたのですが、嫌疑を受けるのは厭ですから、李祖淵に代つて立つて貰ひました。

今村　（笑つて）相變らず用心深いことですな。

金　僕は軽忽なことをするのは嫌ひです。

今村　併し、もうここまで来たら五十歩百歩ではありませんか。君は献上品を見ましたか。

金　見ました。村田銃十六挺でしたね。

今村　外務卿からのと両方併せて十六挺です。

金　あの献上品にも意味があるのですか。

今村　（笑つて）勿論です。

金　併し、僕には信じられませんな。それに、公

使の言動の輕卒なのには驚く外はありません。(聲を潜めて) あんな態度をとつて、事前に事が破れたらどうするのでせう。かうしてゐる間も主上に向つて、どんな過激な言辭を弄してゐるか分からないのです。僕は心配でなりません。

今村 (笑つて) 大丈夫です。心配することはありません。もう日本の政府の方針はきまつてゐるのですから。又それでもなければ、天性柔弱な松山公使が、あんな態度に出る筈はないのです。

金 たとひ日本政府の方針が急に變つたにしても、公使の擧動は餘りに過激に過ぎます。これでは、事を擧げるにも擧げられません。

今村 (聲を潜めて) 心配はありません。直ぐに著手するが好いです。

(松山公使、李祖淵を從へて現れる。)

金 (走り寄る) 密奏は濟みましたか。

松山 濟んだ。(得意さうに、李祖淵を顧みながら) 君は密奏の内容を知つてゐるか。

金 知りません。

松山 (大きな聲で) 壬午の亂の償金の内、四十萬圓お返し申して來たのだ。

金 (驚く) えつ。

松山 但し、この金は軍備の外には一切使つて貰ひたくないといふのが日本の要求だ。(得意げに笑つて) どうだ。金君。分かつたか。

(間。)

金 (小聲に、獨語のやうに) いや、分からん……僕には信じられん。どうしても信じられん……

(諸閣諸大臣、公使を迎へに出て來る。)

五

同年同月四日夕。

朴泳孝邸の一室。

（主人朴、客金玉均、洪英植、徐光範、鼎座す。）

洪　きのふの大長齋に韓圭稷が呼ばれて來てゐたのは、さういふわけだらう。

金　あれが日本人の迂遠なところだ。松山は韓を日本の味方だと思つてゐるのだ。

洪　捧腹絶倒だね。

徐　併し、誰だか清國領事のことを、骨なしの海月だと言つたのは痛快だつたな。

金　あれは岡本君だ。

徐　常人の陳には勿論分からないし、陳がモルレンドルフに聞いても分からないと言ふし、アストンは日本語が分かる筈に、分からんやうな顔をしてるのだから面白かつた。

金　それより、きのふ僕はあの席で、はじめて上村中隊長に會つたが、あの人はなかなかしつかりした人らしいな。

徐　うむ。あの人は本國でもなかなか評判の好い人だ。頭は單純な人だが、頼りにはなる人だ。

金　僕はああいふ重厚な人が好きだな。松山のやうな輕佻な人間は大嫌ひだ。けふは關税問題で外衙門へ來たのは好いが、談判が濟むと、衆人稠座の中で清國の現狀を罵倒して、今にも日清兵を交へさうなことを言ふのだ。あんな輕卒な人物はない。

朴　併し、今の場合、あの人を頼りにするより、他に頼るところはないのだからな。

金　僕はあんまり頼りにはしてゐないな。

朴　頼りにしないと言つたつて、日本兵の援助がなければ、どうにもしやうはないぢやないか。

金　僕もそれで苦しんでゐるのだ。

徐　僕等の部下の訓練がもう少し出來てゐれば、日兵などは頼りにしないのだがな。

朴　兎に角、もうかうなつては、どうにもしやうがない。たとひ松山公使は信じられんでも、あの人があゝいふ態度をとるやうになつたのは、日本政府の方針が決定したからに違ひない。現に、をとゝひ償金を還納したのでも、それは分かるではないか。

金　ところが、僕にはどうもまた信じられんのだ。

朴　信じられんと言つて、現に今夜今村書記官を呼んだのも、愈吾々の決心を打明ける爲ではなかつたか。

金　それはさうだが……

（今村書記官、突然姿を現す。）

今村　やあ、おそくなつて失敬しました――今まで公使につかまつてゐたのでな。

朴　お忙しいところを、御足勞でした。

今村　何か重大な事件ですか。

金　（もはや遲疑の色なく）至急あなたのお耳に入れて置きたいことがありますので。

今村　ほう。どういふことですか。

金　諸君、もつと側へ寄つてくれ給へ。

（一同、座を進める。）

金　先づ第一にお斷りして置きたいのは、きのふ日本公使館へお招きになつた韓圭稷が全然日本黨ではないといふことです。

今村　さうか。それは失敗でしたな。僕もあれは

親露派だと思つてゐたのだが、公使がどうしても呼ぶといふものだから……

朴　親露派でもあれば、清黨でもあるのです。兎に角、立派な事大黨で、醜類の最たるものです。

今村　いや、それは失敗でした。今後はそのつもりでつきあひませう。（間）事件といふのはそれだけですか。

金　いや、それだけではありません。もつと重大なことがあるのです。

今村　ほう。まだあるのですか。

金　（聲を潜めて）愈例の計畫を實行することになりました。

今村　（少しも驚かずに）好いでせう。おやりなさい。併し、その方法は。

金　第一策は刺客に清國人の裝をさせて、一擧に閔泳穆、韓圭稷、李祖淵の三人を屠るのです。そして、その罪を閔台鎬父子になすりつけるのです。

今村　併し、そんなことがさう巧く行くでせうか。

金　第二策は京畿の監司沈相薫に説いて、宴會を白鹿洞の別莊で催させるのです。そして、その席で事を擧げるのです。

朴　白鹿洞には洪君の別莊もありますし、あたりも靜で、事を行ふには屈強の場所なのです。

今村　併し、沈は近い内に轉任になるといふ噂ではありませんか。

金　それでは、第三策に依りませう。近い内に郵政局の新築が落成しますから、その披露の宴で事を擧げるのです。

今村　併し、そこへは各國の公使や領事が列席す

るでせう。

金　勿論です。

今村　そんなところで事を擧げて、若し關係のない者に累を及ぼしたら、どうするのです。

金　多少の犧牲はやむを得ません。

今村　でも、若しそれが國際問題にでもなつたら……

金　萬々そんなことはありません。

今村　それが保證出來ますか。

金　出來ます。

今村　（笑つて）そんなら、さうするのも好いでせう。

金　さういふ際には、勿論吾々の味方をして下さるでせうね。

今村　日本の態度はもう決定してゐます。それはもう幾度も君にさう言つてゐるではありませんか。

金　宜しい。分かりました。

今村　話はそれだけですか。

金　それだけです。併し、この事はまだ公使にも言はないで置いて下さい。

今村　言はない方が好ければ、言はずに置きませう。（立つ）では、餘り長くゐても怪しまれますから、これで失禮します。

（一同、挨拶をする。今村、去る。朴、送つて出る。）

徐　金君、僕等はまだ一向聞いてゐなかつたが、今の計畫はほんとなのかね。

金　なあにでたらめさ。朴君と相談して、唯今村の氣を引いて見たのさ。

徐　さうか。

洪　なあんだ。

　　二人、哄笑する。

　　朴が歸つて來る。

六

　同年同月十一日の夜。

　金玉均の寢室。

（金と朴と徐と、卓を圍んで小酌す。）

朴　英國領事は意見はどうなのだ。

金　アストンの意見はかうだ。世間では日清が今にも兵を交へるやうに言ふが、事實は決してさうではない。成程日本の軍隊は清國より精鋭でもあらうが、氣の毒なことに財政が甚しく逼迫してゐる。日本人は利口だから、決して、この際干戈を交へるやうなことはあるまい。松山公使が頻にそんなことを言ふのは、朝鮮人に對する虚勢に過ぎまいと、かう言ふのだ——僕は確に當つてゐると思ふな。あの、六日の招魂祭の餘興などは、殆ど兒戯に類してゐる。

徐　うむ。あの赤白か。

朴　僕は知らないが、何をしたのだ。

徐　上村中隊長の兵を赤組白組に分けて擊劍をさせたのだ。赤が日本で、白が清國だと言ふのだ。赤が勝つと、松山公使は躍り上がつて喜んだ。吉兆だ吉兆だと叫んでな。

金　ばかばかしい。僕はなんにも知らないものだから、その明くる日、圍棊に寄せて日館を訪ねて、松山に最後の決心を吐露したのだが、あとで今の赤白の話を聞いて、ばかばかしくなつて來た。

（扉を叩く音がする。）

金　李寅鐘が歸つて來たかな――誰だ。

聲　天。

金　ヨロシ。

（壯士李寅鐘、登場。）

金　どうだ。様子が分かつたか。

李　分かりました。袁世凱は五六日前から密々に軍中に令を下して、夜半でも帯を解いたり履を脫いだりすることを許さないさうです。兵士の外出なども一切許可しないさうです。閔泳翊も右營使の資格で、東別宮を離れないさうです。さうして、袁と同じやうに一刻も兵士に武裝を解かせないさうです。前營大將の韓圭稷も、左營大將の李祖淵も、戰時と同じ警備をしてゐるさうです。

朴　さあ、愈始まつたぞ。

金　徐君、君は直ぐ載弼のところへ行つて、上村中隊長にこの報告をさせてくれ給へ。これはおそくても今夜の内が好い。朴君は夜が明けたら直ぐ洪君と一緒に松山公使のところへこの事を傳へてくれ給へ。

（朴と徐、立ち上がる。）

（途端に、銃聲霰のやうに聞える。）

金　なんだ。

徐　何だらう。

朴　この夜なかに。

李　さては愈始まりましたかな。

金　そんな筈はない。そんな筈はない。

（壯士黃龍澤が飛び込んで來る。）

李　どうしたのだ。

金　何事が起つたのだ。

黄　(息を切らしながら) なんでもありません。日本の兵士が不時演習を行つてゐるのです。(息を切らしながら) 私も驚いて駈けつけたのですが、演習だつたので、安心しました。

金　(大喝する) ばか。ばか。松山といふ奴は何といふばかなことをするのだ。

七

同年同月十五日の暮。
日本公使館の一室。
(金玉均と松山公使、對座す。)

松山　大層宮中ではお驚きになつたさうだな。

金　お驚きになるのが當り前です。僕だつて驚きました。十二日の朝早くお召しがあつたので、早速參内しますと、前の晩からまだお休みにならずに入らつしやるのです。

松山　それはお氣の毒のことをしたな。併し、外衙門からお使があつたので、一應辯明をして置いたから、もうお分かりになつたことだらう。

金　何がお分かりになつたと仰しやるのです。

松山　不時演習の意味が。

金　僕には分かりません。

松山　分からん。君に分からんと言ふのは不思議だ。第一、あれは僕の知らんことだ。併し、聞くところに依れば袁世凱の屯營でも、君の國の四營でも、殆ど戰時に變らない警備をしてゐるさうではないか。日本ばかりが悠暢に構へてゐることは出來ない。それは規模の大きな演習なら、一應照會もしようが、不時演習は兵士の勤怠を見る爲に、突然やるところに値打があるの

だ。不時演習を前から報告してしまつては、なんにもなりはしない。

金　（憤然と）いや、そんな講義はあなたに聞くまでもありません。

松山　それでは、なぜ分からんなどと言ふのだ。

金　僕は唯目下の形勢に注意して貰ひたいのです。目下の形勢に注意して、もう少し愼重な態度をとつて貰ひたいと言ふのです。事もないのに袁世凱が軍備を嚴にする。閔泳翊が一緒になつて、戒嚴これ努める。この二事だけでも、日本の爲に主上はどんなに御心を苦しめてをられるか分からないのです。それだのに、日本があんな事をしてくれては、主上の御心配も水の泡になつてしまふではありませんか。唯さへ日清交戰の噂が高いのに、あんなことをされては、人心愈恟々たるばかりです。僕は不時演習の可否を論じてゐるのではありません。唯、その時を得ないのを難じてゐるのです。

松山　（笑つて）まあ、さう心配せんでも好いさ。なあに、今に清國軍の方でも始めるよ。

金　そ、そんな不眞面目な、そんな……（殆ど泣かんばかりに憤慨する）

（書記生来、登場。）

書記生　金さん、お宅から急用ださうで、お迎ひが見えました。

金　（直ぐと氣持を取直して）有難う。直ぐ歸ると言つて下さい。

書記生　は。

（書記生、去る。）

金　松山さん。今のは冗談だと思ひますが、どう

かもうこれからは軽々しいことを仰しやらないで下さい。

松山　分かつた、分かつた。安心してゐ給へ。

金　では、これで失禮します。

（金、去る。）

（今村書記官、登場。）

今村　大分金をおいぢめになりましたな。

松山　あいつはどうも正直過ぎるよ。その癖、どうしてもおれを信じられんのだ。

今村　その癖、力にはしてゐるのですが……

松山　それが彼等の分らんところさ。

松山、笑ふ。

今村も誘はれて笑ふ。

八

同年同月十六日の晝。

劉大致の家。

（劉、一人病床にゐる。）

（金玉均、朴泳孝、連れ立つて登場。）

（二人、劉の前に跪拜する。）

（劉、體をもたげる。）

金　どうか、先生。その儘に、その儘に。

朴　國事に忙しいので、つい御不沙汰をいたしましたが、御容態は如何でございます。

劉　いや、わしの容態よりは國家の容態だ。日本の公使が再來してから、ひどく物情騷然としてゐるやうだが、君等の計畫はどうなつた。わしはそればかり心配してゐるのだ。

金　時々御報告に上がると好いのですが、お上の御用と同志の會合に寸暇も得られないので、つい御心配をかけるやうなことになつてしまひま

した。併し計畫は著々進行してをりますから、どうか御安心を願ひます。

劉　それは結構だ。わしはまあ、出來るだけ早いが好いと思ふな。併し、日本政府の方針はどうなのだ。それもわしは心配してゐるのだが……君等は日本の眞意を十分に知つてゐるのか。

金　相當には知つてをります。日本の政府も今度は餘程堅い決心をしてをるやうです。併し、たとひ日本政府の援助がなくても、もう起たなければならない時が來ました。目下の朝鮮は糧なくして背水の陣を敷いてゐるやうなものです。危急は刻々に迫つて來てゐます。もう日本の態度如何などは論じてをられません。以前、僕等をあれ程疎外した松山公使が、今度來てからの應援ぶりは餘りに過激で、却つて禍を僕等に及ぼしさうですが、これも時です。僕等は運を天に委して、一死國家に奉ずる覺悟です。どうか、先生、心を安んじて御擁護下さい。

劉　わしの心配してゐるのは、日本兵が僅二百人しかゐないことだ。成程、訓練や規律は清國軍に優つてゐようが、清兵は二千からゐる。數に於いて餘りの相違だ。わしはそれが氣遣でならん。

朴　併し、先生、戰ひは必ずしも兵の多寡には依りません。

劉　それはさうであらうが、二千に二百では餘りの相違だ。

金　併し、それよりも大きな相違は、彼等の心と僕等の心との相違です。

劉　（笑つて）成程、一以て十に當るか。

金　（笑つて）一以て百に當る位です。

劉　その決心があれば大丈夫だらう。しつかりやり給へ。

金　やりますとも。何日を出でずして、朝鮮は屬邦の醜衣を脱ぎ捨てるでせう。

朴　先生、きつとそれまで生きてゐて下さいよ。

九

同年同月十七日の午後。

金玉均邸の密室。

（金、壯士李寅鐘、李昌奎。）

金　閔泳翊は近頃咽喉が悪いとかいふことで、まるで參内しないのだ。人にも一切會はんさうだ。

寅鐘　でも、ゆうべ袁世凱を訪ねたことは確です。

昌奎　なんでも、餘程長い間密談をしたらしいのです。

寅鐘　高を探偵にやりましたから、もうぢき何とか報告して來るでせう。

（扉を叩く音。）

寅鐘　高かな——誰だ。

聲　天。

金　コロシ。

（壯士申重模がはひつて來る。）

金　申か。何か情報があるか。

申　えらいことがあります。モルレンドルフが獨逸から輸入した大砲が二門、延慶堂にありましたな。あれを、ゆうべ夜半に、修繕するところがあるからと言つて、閔泳翊が吳兆有の屯營へ運ばせたさうです。

（三人、顔を見合はす。）

金　すると、それは袁世凱の陣を訪ねてから後の

ことだな。

申　それは分かりません。

（扉を叩く音。）

寅鐘　今度は高だらう。

金　誰だ。

聲　天。

金　ヨロシ。

（壯士高永錫、登場。）

金　どうだ。分かつたか。

高　分かりました。閔泳翊はゆうべ確に袁世凱を訪ねたのです。三時四十分に、閔は袁世凱を連れて右營へ歸つたさうです。それから、なんでも餘程長い間二人で筆談をしたさうです。その草稿は閔がどこかへ隱したさうです。袁はそれから吳兆有の陣を訪ねて、夜が明けてから下都監へ歸つたさうです。

金　ふむ。すると、その間に大砲を運ばせたのだな。愈油斷は出來んぞ。諸君、直ぐ又密偵を續けてくれ給へ。何よりも知りたいのは、その筆談の內容だ。

寅鐘　どうかして探つて參りませう。吾黨の梁鴻在は閔泳翊の信任を得てゐますから、梁君に賴んだら、存外早く知れるかも知れません。

金　妙案だ。何分賴む。

（一同立つ。）

十

同年同月二十五日の午後。

日本公使館。

（松山公使と金玉均。）

金　アストンは相變らず時機を待てと言ふので

す。來年の春はパアックス公使も來ることだから、これまで待てと言ふのです。その癖、近い内に變事の必ず起ることは豫想してゐるらしいのですね。頻に居留民のことを案じてゐますから、それは必ず保護をする、その代り亂後の結局に對しては十分好意が持つて貰ひたいと言つて來ました。

松山　さすがは君だ。さう釘をさして置けば大丈夫だ。ところで、亞米利加公使の方はどうだ。

金　フウトとは大分議論をしました。これもやつぱり時機の尚早を稱へるのですね。併し、どうしても今の儘ではゐられないと言ふなら、暫く旅行をして來たらどうだと言ふのです。長崎か上海へでも遊びに行つて、歸つて來てから事を舉げても好いではないかと言ふのです。僕がどうしてもこの機會を逸することは出來ないと言ふと、自分は前から一度平壤の方へ旅行がしたいと思つてゐた。ちやうど長崎にゐる軍艦が仁川へ來る筈だから、一緒にそれへ乘つて、案内役を勤めてはくれまいかなどと言ふのです。さすがにフウトは老猾ですね。

松山　併し、好意は持つてゐるのだらう。

金　それは十分に持つてゐるのです。その日も晩餐などをくれて、夜おそくまで引留められました。

松山　よし。英吉利、亞米利加が先づさういふ態度なら心配はない。露西亞は寧ろそれを喜ぶ側だらうし、獨逸領事のゼンブッシュは餘り利害は感じてゐまい。

金　列國側は寧ろ心配はありません。僕の心配し

てゐるのは、却つて日本政府の態度です。

松山　事ここに及んでゐるのに、君はまだそれを疑つてゐるのか。

金　僕等が事を擧げるのは、單に端緒を開くのです。最後の解決は日本政府に賴るより他に道はないのです。この通り、僕は少しも隱さずに話をしてゐるのですから、あなたもどうか本當のことを言つて下さい。

松山　君も疑ひ深い男だな。松山泰藏不才なりと雖、既に公使の重任を帶びて外國へ來てゐるのだ。遠く本國を離れて來てゐる以上、朝夕自國の政府と連絡をとることは不可能だ。公使の公使たる所以はそこだ。公使は政府の代表だ。公使は政府そのものだ。その位のことが君に分らん筈はないではないか。

金　勿論、それは分かつてゐるのです。併し、僕は苦しい經驗を嘗めてゐるのです。日本の政府はいつ何時方針を變へるか分りません。けふ僕等に親善であるかと思ふと、直ぐあしたは僕等を疎外するのです、さうかと思ふと、そのあくる日は又僕等を勵ますといつた調子です。たとひ、あなたがどういふ内命を受けて來られたにしても、それはいつ何時變るか分らないのです。これは僕一箇の經驗に徴しても明かなことです。朝鮮の國狀はもう一刻も忽に出來ないのです。僕等はあなたの歸任される以前から既に或決心をしてゐたのです。實を言ふと、日本の援助如何などは問題にしてゐなかつたのです。僕はあなたが又來られると聞いて、却つてそれが妨害になりはしないかと思つて心配した位です。あ

なたとこんな相談をするやうになつたのは、寧ろ意外なことで、僕はこれを世の中の移り變りに過ぎないと思つてゐます。僕等の決心はもう定つてゐるのです。もう何も申し上げることはありません。

松山　いや、さう言はれては話しやうもないが、たとひ政府の方針がどう變らうと、僕は僕で決心してゐることがあるのだ。どうか疑はないで、合議すべきことは合議してくれ給へ。

金　（考へてゐる）

松山　まだ信じられないのか。政府の方針はどう變化しようと僕は僕として決心してゐることがあると言つてゐるのだ。

金　（笑つて）それはほんとですか。

松山　誓つても好い。

金　（笑つて）では、一應の御相談だけはして置きませう。

松山　一應では困る。すつかり言つてくれなくては、こつちにも準備があるから。

金　分かりました。それでは申し上げませう。事を擧げたら、先づ第一に主上を江華へお遷し申さなければなりません。

松山　それはいかんと思ふな。

金　なぜですか

松山　國王お一人なら、直ぐにも御遷居が出來ようが、御婦人方はなかなかさうは行くまい。若し、その方々が淸國軍の手にでも落ちたら、あとがきつと面倒なことになるだらう。僕はそれより御所の守備を飽くまでも嚴重にする方が好いと思ふな。

金　併し、どこかへお遷しなければ、日本兵に來て貰ふ名義がなくなるではありませんか。たとひ景祐宮へでも、桂洞宮へでも。

松山　それは却つて危險だと思ふがな。

金　危險だから、日本兵に來て貰ふのです。第一、主上に御座所を遷して戴かなくては、醜類を始末するのに不便で爲方がありますまい。

松山（考へて）まあ、その問題はあとでゆつくり研究することにしよう。それから、次ぎに聞いて置くことは。

金　事を擧げると同時に起つて來るのは金の問題です。これはどうしたらいいでせう。先年は亞米利加人に謀つて失敗しましたが、今考へて見ると、かういふ問題は英吉利人に賴むのが一番好いと思ひますが。

松山　何も亞米利加や英吉利に賴ることはあるまい。三百萬圓ぐらゐの金なら、いつでも日本で用立てることが出來ると思ふ。

金　あなたはそれを保證しますか。

松山　君はまだ僕を疑ふのか。

金　目下の場合、一度に何百萬といふ金は入らないのです。二三十萬も用意があれば足りると思ふのですが、それはどうでせう。

松山　待つてくれ給へ。（ベルを押す）

（書記生、登場。）

松山　今村君を呼んでくれ。

（書記生、退場。）

（今村書記官、入れ違ひに登場。）

松山　今村君、仁川、釜山、元山及び京城在留の日本商人の資産を併せたら凡そいくら位になる

だらう。
今村　十五六萬圓は大丈夫でせう。
松山　よろしい。
今村　御用はそれだけですか。
松山　それだけだ。
（今村、去る。）
金　（笑つて）まあ、金のことは、けふがけふ入るわけではありませんから、必要な場合が來たら御盡力を願ひます。
松山　それは大丈夫だ。さういふことは一切心得てゐるから、唯事を擧げる手段をあやまらないやうにしてくれ給へ。
金　内政の改革と奸類の殲滅には飽くまでも僕等が任じます。唯事を擧げたら、直ぐに兵を出して、主上の御保護と暴民の鎭壓に力を盡して下さい。これはどうしても公使にやつて頂かなければならないことです。
松山　よく分かつた。さうはつきり言つてくれれば愉快だ。その點は安心してゐて貰ひたい。併し、事が起つて、吾々が行くとなると、是非國王のお招きがなければならんが、それに就いての策はどうだ。
金　（笑つて）主上お手づからのお手紙があつたら好いでせう。
松山　それなら好い。唯一字書いて下すつても結構だ。
金　（笑つて）勅使は一等大臣朴泳孝ですかな。
松山　（笑つて）極めて妙だ。たとひ、清國兵が千ゐようと二千ゐようと、我が一箇中隊の兵を率ゐて北岳に據れば、一二週間は支へることが出來

ろ。南山に據つても、二日の守備は斷じて憂なしだ。

金　（立つ）では、大體お話も濟みましたから、これで失禮をします。僕は今後もう公使館へは伺ひません。事を擧げる日が決定しましたら、朴君か洪君かをよこします。計畫の細目も、その時申し上げます。けふお別をすれば、もうどこでお目にかかれるか分かりません。御健勝を祈ります。

松山　有難う。まあ、しつかりやつてくれ給へ。

（金、扉を排す。）

（公使、送つて出る。）

十一

同年十二月一日夜半。

東洞、金玉均の別莊の廣間。

（金、朴、洪、徐、鼎座す。卓上に書類。）

金　では、それできまつた。もうみんなの來るのを待つだけだな。

洪　みんなは何時に來るのだ。

徐　二時には集まる筈だ。（時計を見る）もうあと十五分だ。

金　洪君、君はけふ日本公使館へ行つたか。

洪　うむ。こつちへ來る前に寄つて來た。

金　公使はゐたか。

洪　ゐたらしいが出て來なかつた。今村書記官が出て來て、もう公使の心はきまつてゐるから、却つて會はん方が好いだらうなどと言つてゐた。

徐　今村書記官はなかなか外交がうまいな。

金　愈計畫のきまつたことを話したか。

洪　話した。十二月七日に決行すると言つて置いた。本當の日を言ふのは危險だと思つたからな。

金　それは上出來だつた。さうしたら、何と言つた。

洪　おそいぢやないかと言ひをつた。

金　それから、君は何と言つた。

洪　七日以前は月があるからだめだと言つた。兎に角、七日より遲れることはない。七日には日本の千歳丸(ちとせまる)が仁川へ來るから、是非それまでには決行するつもりだと言つた。

金　それはどういふわけだ。

洪　日本の政府の方針は始終變るから、又何か變つた命令でも來ると、松山公使の決心がぐらつくからだ。

金　それを今村書記官にさう言つたのか。

洪　うむ、言つた。

金　は、は、は、愈それは上出來だつた。

朴　は、は、は、は。洪君、君もなかなか隅へ置けなくなつたな。

洪　それは金君のお仕込みだ。

金　（直ぐまじめになる）冗談は措いて、主上を景祐宮へお遷し申す一件は話したか。

洪　話した。

金　今村書記官は何と言つてゐた。

洪　江華へ遷すことは絶對に反對だが、景祐宮なら、公使も承知するだらうと言つてゐた。

金　つまり承知したのも同然なのだな。

洪　さうだ。もう書記官との間に話が出來てゐたらしいのだ。

徐　（横から口を出す）さう言へば、金君、君は主

上にこの事を申し上げたか。

金　始終君側に人がゐるので、こなひだまではどうしても申し上げることが出來なかつたが、二十九日にちやうど好い機會があつたので、大凡(おほよそ)のことは申し上げた。

徐　主上は何と仰しやつた。

金　主上は飽くまでも僕を信ずると仰しやつた。（聲を潜めて）實は、もう密勅まで戴いてゐるのだ。

徐　さうか。もう密勅まで戴いてゐるのか。

朴　内には主上の御信任があり、外には日軍の援護がある。吾々の計畫はもう成つたも同じことだ。

（壯士李寅鍾、黃龍澤、申重模、李昌奎、高永錫、李圭貞、朴殷明、金鳳均、李殷鍾、尹景純、李圭完など三々五々入り來る。徐光範、點檢す。）

金　ほう、これでみんなか。

寅鍾　柳赫魯、崔殷章、林殷明、朴三龍、李熙鎭、李錫尹は各所へ密偵に參つてゐますので不參です。

金　（書類を廣げながら）それでは、早速決定事項を諸君に傳へよう。缺席の諸君へは出席の諸君から便宜遺漏なく傳へて貰ひたい。（間）愈事を擧げるのは來る四日ときまつた。午後の八時から九時の間に、××××××××若し當日雨が降つたら、翌五日の同刻に行ふのだ。諸君も知る通り、別宮は徐君の家と墻一重(かきひとへ)を隔ててゐるだけだ。宮の後門は卽ち徐君の家の庭前(ていぜん)だ。依つて、徐君が萬事を總裁する。（書類を見ながら）諸君の部署配置を言はう。火を放つのは李寅鍾

指揮の下に、李圭完、杜殷明、尹景純、崔殷童の四人があるのだ。既に邊樹に頼んで置いた布袋が三十箇出來て來てゐる。それに細かく折つた榾を詰めて、豫め徐君の家の南庭から別宮の北門まで運んで置くのだ。日が暮れたら、墻を越えて、別宮の正殿内へそれを運ぶのだ。別に××を入れた小瓶三十箇を携へ行つて、榾を入れた布袋に注ぎかけ、××××××××××るのだ。東西の廊下には劇藥を配置して、×××盛になると、おのづから××するやうにしかけて置くのだ。」(間)火が起れば、各營の將軍が駈けつけて來るに違ひない。併し、病氣などで來ない者がないとも限らない。松山公使が來てから、大分諸方に疑惑の種を蒔いてゐるから、或は疑つて來ない者があるかも知れない。さうなると、事は成らない。そこで、洪君が今度出來た郵政局の局長に任じたのを幸に、同じ晩に新築落成の宴を局で開くことにして、豫め四營將軍の故障の有無を調べて置くのだ。郵政局へ彼等を集めて置きさへすれば、火が起れば勢(いきほひ)駈けつけなければならないことになる。事を行ふのは火災場だ。敵一人に味方二人が當ることにして、各位に短劍一振、短銃一挺を與へる。倚怙贔屓(えこひいき)事を過まつてはならんから、日本人四人を定めて、一組毎に一人を配する。日本人には總て朝鮮服を着せる。

朴　(書類を金の手から取る)あとは僕が言はう。(書類を見る)これからが肝心だから、よく聞いてゐてくれ給へ——閔泳翊に當るのは、尹景純と李殷鍾だ。尹泰駿に當るのは、朴三龍に黄龍

澤だ。李祖淵に當るのは、崔殷章に中軍模だ。韓圭稷に當るのは、李圭完に林殷明だ。李寅鐘と李熙禎は年長だから、一切の號令をする。火が起つて、人が集つたら、二人が發砲する。發砲と同時に、各位は一齊に手を下すのだ。この間一瞬の遲速があつてもならない。

洪（書類を取る）探偵通信は柳赫魯、高永錫の係りだ。泥洞附近には申福模が一隊の壯士を率ゐて隱れてゐて、火が上ると同時に、諸大臣の通路たる金虎門を塞いで閔台鎬や閔泳穆や趙寧夏が參內するのを待伏して手を下すことになつてゐる。尹景純の弟尹景完は前營の小隊長で、最近吾黨に投じたものであるが、當夜は特に當直を願ひ出て、主上御寢室前の閤門を、五十名の兵卒で堅めてゐて、若し繩を洩れて宮中へはひる者があつたら、その場で處置することになつてゐる。金鳳均と李錫尹は豫め××を宮中仁政殿の廊下に隱して置いて、吾黨が變に乘じて入闕する時、附いてはひつて火をつけることになつてゐる。その他、宮中の婦人に同志が一人あつて、これが×××を竹の管に入れて置いて、外で火が起ると同時に、通明殿へ×××××ことに內約が出來てゐる。

金（書類を見ずに）別宮で火が起ると同時に、日本公使館から兵士三十人を金虎門と景祐宮洞へ出して、變事に備へる約束が出來てゐる。尙、混雜の際、同志討をしないにも限らんし、日本人との連絡も取らなければならんから、總て同志は暗號で應答することにする。暗號は從來も用ひた「天」と「ヨロシ」だ。

徐　それから、同志に日本人の顔を知つてゐて貰はなければならないから、あした鴨鷗亭の朴君の別荘で一緒に鴨猟をすることになつてゐる。諸君、洩れなく来てくれ給へ。欠席の諸君へも間違なく傳へてくれ給へ。時間は朝の十時から夕刻までだ。

朴　もうこれで言ふことはなかつた。

金　もう何もない。

朴　それでは酒にしよう。不分明な點があつたら、酒間に訊ねて貰ふことにして。（手を叩く）

洪　けふは大に飲むぞ。

徐　飲むのは好いが、また馬から落ちんやうにしてくれ。

金　おい、徐君、なぜ。そんな不吉なことを言ふのだ。（急に顔を曇らせ）朴君、金虎門へ来る日本兵は何人だつたかな。

朴　（書類を見る）三十名と書いてある。

金　三十名……三十名……それで足りるかな。

（不安になる）

（杯盤が運ばれる。）

十二

同年同月四日の夜。

典洞、郵政局の門前。

局の右隣に藁根根の人家。

左手に大なる溝。

あたり暗く、靜寂。

突然、溝の中から、人間らしい黒いものが飛び出す。

同時に、人家からも人らしい黒い影が現はれる。

後の黒影　（聲を潜めて）誰だ。うろうろ出て来た

のは。

前の黑影　まだか。

後の黑影　（すかし見る）木村だな。引込んでゐろよ。

前の黑影　あんまり合圖がおそいので退屈しちまつた。

後の黑影　まだ機會が來ないのだらう。急に計畫が變つたのだからな。

後の黑影　別宮がやめだと聞いた時は狼狽したよ。おれはもう徐の家へ行つてゐたのだ。

後の黑影　それにしても、よくみんなに連絡がとれたものだな。

前の黑影　傳令の高永錫といふ男は、なかなかすばしつこい奴だ。（局の方を見る）それにしても、何をぐづぐづしてゐるのだらう。

後の黑影　まだ目的の人物が足りないのだらう。

前の黑影　いや、醜類は大抵集まつてゐるさうだ——おれの組には奴等の顏を一々知つてゐる人間がゐるのだ。

後の黑影　それは都合が好い。各國の領事や公使も來てゐるのだらう。

前の黑影　みんな、なんにも知らずに來てゐるやうだ。

後の黑影　あの人達に害を加へてはならんぞ。

前の黑影　それは大丈夫だ。

後の黑影　松山公使は來ないやうだな。

前の黑影　今村書記官が代理だ。

後の黑影　松山さん怯えたな。

前の黑影　いや、公使館の方の堅めをしてゐるのだらう。

後の黒影　袁世凱は早く歸つたやうだな。

前の黒影　あいつは利口な奴だ。危險なのを知つて、時刻より前に來て、みんなの條に集まらん内に歸つて行つてしまつた。

(局の窓が一つ明く。白い布が振られる。)

前の黒影　(直ぐそれに目をつける) 合圖だ。

後の黒影　(これも窓を仰ぐ) よし。(直ぐに驅けて家の内へ入る)

(前の黒影、溝の中へ飛び込む。)

(靜寂。)

(暫くすると、家の中から二三の黒影が飛び出す。)

黒影　(苛立聲で) まだか、まだか。

(屋根の上で聲がする。)

聲　この火藥はだめだ。

下の黒影　マッチで藥に火をつけろ。

上の聲　よし。

(屋根の上で藁を引拔く音がする。)

(忽ち、屋根が燃え出す。)

(「しめた。」といふ聲が何處かで低く聞える。)

(黒影は又姿を隱す。)

(やがて、郵政局の内部が騷しくなる。)

(方々の窓が明く。)

(「火事だ。」「火事だ。」といふ聲が聞える。)

(火は徐徐と燃え上がつて、今にも郵政局を舐めようとする。)

(局内騷然。)

(黒い人影が人家からも溝の中からもばらばらと出て來る。)

(郵政局から四五人の人が驅け出して來る。それを掻き分けるやうにして、狼狽した閔泳翊が姿を現す。)

(地面の上に匍伏してゐた黒影の一人が、いきなり躍りかかつて、閔を背後からぐさりと刺

す。)

(閔、悲鳴をあげて、局內へ逃げ歸る。)

(局內、前より一層騷がしくなる。)

(突然、局內から日本人らしい五六人の青年がピストルを亂射しながら飛び出して來る。)

(黑影、暫く戰ふが、やがて四散する。)

(少時靜寂。)

(金玉均と朴泳孝と徐光範とが、局の三方から出て來て、門前で落ち合ふ。)

徐　(聲を潜めて)失敗したな。

朴　(聲を靜めて)閔の傷はどうだ。

金　致命傷ではない。

徐　もう誰も怯えて出て來はせん。

朴　それに、刺客も散つてしまつたやうだ。

金　ピストルを打つたのは誰だ。

朴　日本から來た郵便技手の連中だ。困つたことをしてくれた。

金　事情を知らんのだから、やむを得ない。

徐　やつぱり初めの計畫通り別宮をやつた方がよかつたらしいな。

金　今そんなことを論じてゐる場合ではない。君は直ぐに金虎門へ駈けつけて、申福模に豫定の行動をとるやうに命令してくれ給へ。僕は朴君と一緒に王宮へ駈けつけて、日兵來護の御親書を戴くことにするから。

徐　よし。(直ぐに走り去る)

(金と朴と、手を携へて走り去る。)

(火勢愈烈しく、終に郵政局の一端に燃え移る。)

(悲鳴、喚聲、人影右往左往す。)

十三

同じ夜。

王宮、金虎門。

（申福模の率ゐる韓兵の一隊が堅めてゐる。）

（空は火で赤い。諸所に爆發の音がする。）

（徐光範が門内から出て來る。）

申　主上は慶祐宮へお遷りになつたか。

徐　やつとお遷りになつた。

申　日本公使館への使はもう出たか。

徐　まだ出ない。御親書がなかなか出ないのだ。

申　それはいかんな。

徐　なあに、もうぢき出る。金が附いてゐるから大丈夫だ。

（高永錫が門外へ驅けつける。）

（韓兵、銃劍を構へる。）

申　誰か。

高　高。

申　ヨロシ。何か報告があるか。

高　閔泳穆がやつて來る。用意は好いか。

申　宜しい。

（高、門内へ驅け入る。）

（間もなく、閔泳穆が輿に乘つて現れる。從者五六名。）

申　誰か。

閔　外衙門督辨閔泳穆。

申　何用だ。

閔　天機奉伺に參つた。

（詞の終らぬ内に、門内から刺客が躍り出て、閔を刺し殺す。從者、逃げ去る。）

（死骸、門内へ運ばれる。）

（入れ違ひに内官遼樹が門外へ出ようとする。）

（後から徐光範が呼び留める。）

徐　どこへ行く。

邊　日本公使館へ。

徐　御親書が出たか。

邊　この通りだ。（紙片を示す）

徐　（讀む）「日使來衛」（邊樹の顔を見る）　御親筆だな。

邊　（あまり確でなく）さうだ。

徐　よからう。早く行け。

（邊樹、走り去る。）

閔　（申を見て）もう大丈夫だ。

申　うむ。

（閔台鎬、從者を連れて、門外へ驅けつける。）

申　誰か。

閔　內衙門督辦閔台鎬。

申　はひつて宜しい。

（閔、門內へはひらうとする途端に、刺客が躍り出て、一撃これを斃す。從者、逃げ去る。）

（死骸、運び去らる。）

（趙寧夏が輿に乘つて來る。）

申　誰か。

趙　判書趙寧夏。

申　斬れ。

（刺客が躍り出て、趙を刺し殺す。）

（死骸が運び去らる。）

（高永錫が門內から驅けて出て來る。）

高　李祖淵も斬られた。尹泰駿も斬られた。韓圭稷も斬られた。宦官長の柳在賢も主上の御前で斬られた。もう君側に侍す者は、吾黨の士ばかりだ。

（一同、歡聲をあげる。）

（夜が白んで來る。）

（遠くに、日本兵の行進喇叭が聞える。）

十四

十二月六日の午後。

慶裕宮前門内。

（日本兵と韓兵との混成隊が警備してゐる。）

（金玉均と松山公使が、立ちながら、言ひ爭つてゐる。）

金　それはいけません。それはいけません。今兵を引くといふことはありません。

松山　でも、もう新政府は立派に出來上がつたのだから。いつまでも吾々が關係してゐることは、清國の感情もどうかと思ふのだ。

金　それに初めから覺悟の前ではありませんか。それだから、僕があやつて、英吉利領事や亞米利加公使の諒解を得て歩いたのです。

松山　英吉利や亞米利加は好いが、清國の感情はどうかと思ふのだ。何等の通牒なしに兵を動かしたのだからな。

金　それには御親書といふものがあります。

松山　でも、あれには御名（ぎよめい）もなし、印璽もないのだからな。

金　松山さん、あなたは何といふことを言ふのです。現に、こなひだ、御親筆なら一字でも結構だと仰しやつたではありませんか。

松山　併し、袁世凱の態度が大分強硬のやうだからな。

金　いくら強硬でも構ひません。御親書一札（さつ）で、どこまでも押し切ることが出來ます。

松山　ゆうべも宣仁門を開けと言つて來たのだから。

金　ですから、けさ早く返事をしてやりました。

さういふ指揮を受ける筈はない。宣仁門閉鎖は王城警固の爲にしてゐることで、私の爲にしてゐることではない。今後、さういふ御干渉があれば、當方でも斷乎たる處置に出る……

松山　大分强く出たな。僕にはさういふ勇氣はない。

金　勇氣がないと言つて、ここまで計畫の進んだのを、今更手を引くといふことがあるものですか。その位なら、初めから兵を出さない方がよかつたのです。

松山　まあ、さう怒つてくれては困る……

（朴泳孝と徐光範が來る。）

金　（二人の方を向いて）どうだつた。

朴　（首を振つて）だめだ。

徐　右營も左營も前營も後營も錆だらけだ。早速解剖して掃除をするやうに命令して來たが、實に困つたことだ。

松山　（わきから口を出す）朴君、どうしたのだ。

朴　金君が調べてくれと言ふから、各營の銃器を見て歩いたのですが、どれもこれも錆だらけで、とても物の役に立たないのです。

金　（思はず目に涙を浮べる。松山に）さあ、さういふ有樣ですから、尙お願ひするのです。今、あなたに兵を撤囘されたら、事は必ず敗れます――三日で宜しい……どうか三日待つて下さい。その内には、こつちの軍備も整ふと思ひますから、どうか三日待つて下さい……（聲涙共に下る）

松山　宜しい。三日待たう。つい勢に驅られて、飛んだ深入をしてしまつたが、もうかうなつたら爲方がない。如何にも三日待たう。

金　金のことはどうしませう。在留の日本商人から借りると言つたところで、それは容易なことではないでせう。英吉利人に賴みませうか。

松山　又そんなことを言ふ。まだ君は僕を信ずることが出來ないのか。

金　併し、深入云々のお詞もありましたから……

松山　軍事と金とは別だ——日本の大藏省には三百萬圓ぐらゐの金はいつでも遊んでゐるから、決して心配はない……

（門外から、傳令が一人驅けて來る。）

金　なんだ。

傳令　淸國の士官が一人、上に拜謁をねがひに參りました。

金　（直ぐ）ならんと言へ。吳兆有か袁世凱か張光前が自身で來るなら接見を許す。無名の士官に拜謁は許されんと言へ。

傳令　はつ。（驅け去る）

朴　（徐に）きのふ一日はひどく靜だつたが、ゆうべから急に動き出したな。

徐　袁世凱から密書が王妃のところへ屆いたといふ情報があるが……

金　（直ぐ）そんなことは斷じてない。使の來る隙間がない。風聲鶴唳だ。

朴　日本公使館は大丈夫だらうか。

松山　公使館は小林中隊長が堅めてゐるから大丈夫だ。

（傳令が又驅けて來る。）

金　なんだ。

傳令　袁世凱が拜謁に參りました。

金　自分で來たのか。

傳令　はい——兵士を六百名引率して。

金　なに。兵を連れて來た。それはいかん。袁司馬の謁見は差支ないが、兵士を率ゐて入闕することは絶對にならんと言へ。若し、言ふことを聞かなかつたら、非常手段をとれ。

傳令　は。（驅け去る）

金　（直ぐ）徐君、直ぐに各營の手配を頼む。一戰は免れまい。（徐、走り去る）松山さん、誰かを上村中隊長のところへやつて下さい。

（松山、日本兵の一人に旨を含める。日本兵走り去る。）

（韓兵の士官、號令を下す。警備隊、銃劍を構へる。）

（忽ち、門外に銃聲起る。）

朴　始まつたぞ。

（傳令、飛んで來る。）

金　どうした。

傳令　隊長が、御命令通り傳へましたら、いきなり發砲いたしました。

金　應戰してゐるか。

傳令　してをります。

（銃聲、霰の如く聞える。門内へも彈が飛んで來る。）

傳令　一隊が分かれて、宣仁門へ向ひました。宣仁門の防備を願ひます。

金　宜しい。

（傳令、走り去る。）

金　松山さん、宣仁門へ行きませう——上村中隊長の兵を連れて。

松山　宣仁門へ。

金　ここは李圭完に杜殷明がゐるから大丈夫で

す。宣仁門が危険です。宣仁門へ行きませう。

宣仁門へ。

（金、松山を促して、走り去る。）

（銃聲益烈し。喊聲門外に聞る。）

（日暮れかかる。）

十五

同日の夜。

王宮、宣仁門内。門は堅く鎖さる。

（上村中隊長、日本兵を率ゐて、門樓に登り、外に向ひ、射撃す。）

（松山公使、書記に護られて、不安げに佇む。）

松山　（下から聲をかける）　上村君、敵の數はどの位だ。

上村　もう五百ぐらゐになりました。また、どんどん殖えて來る様子です。

松山　韓兵もゐるのか。

上村　大分まじつてゐます。

松山　怪しからん。

上村　みんな清國の教育を受けたものらしいのです。清國の士官が指揮をしてゐます。

松山　どうも、さう多數では、とても防ぎ切れない。

上村　なに、そんなことはありません。

（金玉均が驅けて來る。）

松山　（金に）　御座所は大丈夫か。

金　まだ大丈夫です。併し、前門は餘程の苦戦らしいのです。王妃は北廟へ遷られました。

松山　それはいかん。北廟には呉兆有がゐるではないか。

金　王妃はもう清國の手に落ちてゐるでせう。

松山　國王は今お一人か。

金　お一人です。

松山　それでは、國王も危ないな。

金　そんなことはありません。朴君が附いてゐるから大丈夫です。

（日本の傳令が駈けて來る。）

松山　なんだ。

傳令　日本公使館が三回清國兵に襲はれて、たうとう燒かれました。

松山　ああ。

傳令　小林中隊長が戰死をなされました。

松山　ああ。

傳令　警備隊は公使館を突出して、居留民の保護に當つてをります。居留民も多數殺害されました。

（傳令、走り去る。）

松山　ああ、もうだめだ。

金　だめなことはありません。もう少しの奮闘です。吳も張も攻勢はとつてゐません。袁世凱さへ防ぐことが出來れば、こつちの勝利です。主上は吾々を信頼してをられます……

（朴泳孝が駈けて來る。）

金　（朴に）どうしたのだ。なぜ、お側に附いてゐないのだ。

朴　（泣く）だめだ。たうとう北廟へお遷りになつた。

金　（憤激して）なぜ……なぜ、君はお留め申さなかつたのだ。

朴　身をひれ伏してお留め申したのだ。泣いてお留め申したのだ。併し、どうしてもお聞き入れがないのだ。どうしても一人でゐるのは厭だと

仰しやるのだ。その内に前門の敗れた報告があつたので……

金　前門は敗れたか。

朴　うむ……それで、たうとうお立退(たちのき)になつてしまつたのだ。

金　君は見す見すそれを捨てて来たのか。

朴　さうではない主上には洪君がお附き申して行つた。命を賭しても、北廟からお連れ戻すからと誓つて出て行つた——僕は急いでそのことを君に言ひに来たのだ。

松山　こいつあ、金君、愈だめだな。もう手を引いて、再挙を計つたらどうだ。

金　いやまだだめなことはありません。洪君はきつと主上を連れて帰つて来ます。

朴　僕もさう思ふ。きつと洪君は……

（高永錫が駆けて来る。顔色を変へてゐる。）

金　高君、どうした。

高　洪君が斬られた。

金　えつ！どこで。

高　北廟の関羽廟で。

朴　誰に？

高　清国兵に！

金　主上はどうなされた。

高　王妃と一緒に呉兆有の清軍に投ぜられた。間もなく輿で袁世凱の屯営へ向はれた。

松山　もうだめだ。（上村中隊長に）上村君、打ち方をやめて、みんなおろしてくれ。

（中隊長の命令で、日本兵、地上へ降りる。）

（外では銃音が続く。）

松山　もうかうなつては為方がない。ここを脱出

して仁川へ逃げるより外にしやうはない。けふあすには千歳丸が來る筈だ。あれへ乘つて日本へ歸らう。金君も朴君も一時日本へ來給へ。

（金と朴、手を取り合つて泣いてゐる。）

松山　さあ、もう一刻も猶豫は出來ない。ここで死んだら犬死だ。日本へ逃げて再擧を計り給へ。

金　（首を上げる）再擧。

朴　再擧。

松山　さあ、行かう。（二人の手をとる）上村君、門を開いて脫出するのだ。

（中隊長、命令を下す。）

（日本兵、門を開いて突進する。）

（銃聲、喚聲、更に起る。）

（松山公使、金、朴、兵に紛れて門外へ駈けて出る。）

（清國兵、門内へ崩れ入る。）

十六

同年同月九日の夜。

千歳丸の甲板。

背景に仁川港の燈火きらめく。

星寒く、天澄む。

（金玉均、朴泳孝、薙髮、洋服、佇立して、仁川港を見る。）

（松山公使、遠く離れて立つ。）

朴　夢だ。夢だ。もう一遍やり直すのだ。

金　（低く）うむ。

朴　僅三日の夢だつたな。もう今頃は事大黨の新內閣が出來てゐるだらう。

金　うむ。

朴　日本だけに依つたのが失敗だつた。寧ろ列國に依つた方がよかつた。

金　僕はさうは思はん……僕は日本を疑つてゐる。飽くまでも日本を疑つてゐる……それでゐて、どうしても日本が棄てられない……僕は日本を疑ひながら、どうしても日本に頼らずにはゐられない。……僕の失敗はこの矛盾撞着から來てゐるのだ……。

朴　なんにしても兵力が足りなかつた。二千に二百ではどうにもしやうがない。僕等は日本兵を頼み過ぎた。

金　いや、兵力の問題ではない……この失敗を生んだのは僕の矛盾からだ……どうしても日本が信じられない……どうしても日本の外に頼る國はない……

朴　この船はその日本へ向つてゐるのだ。日本は必ず僕等を保護してくれるだらう。再擧だ。再擧だ。

金　（思はず首を上げて）うむ、再擧。

（松山公使、近づく。）

松山　（優しく）もう下へ行つて休まうぢやないか。

金　（低く）ええ。

（松山、下へ降りて行く。）

（聲太く汽笛鳴る。）

（金、朴、思はず手を取り合ふ。）

（二人、朝鮮を背にして泣く。）

吉田御殿　一幕

人物

千　　　　姫
若い美しい町人
阿部伊勢守成重と稱する若い大名
武　士　二　人

宮　　　島 花　　　岡 沖　　　津 松　　　阪	美しい侍女

踊り子の一群
他に美しい侍女數名

時代

不　　　明

場所

或城内の物見のある華美豪奢な部屋

音樂。

物見の窓の前に、脇息にもたれ、膝を崩して、年三十を過ぎた千姫が、後向に坐つてゐる。

若い美しい侍女。花岡、宮島、沖津、松阪などが、姫の側に侍つてゐる。

(姫も侍女達も、物見の窓から、ぢつと城下を見詰めてゐる。部屋の中央に大きい卓が置いてあつて、その上に洋風のコツプと酒の瓶が乘つてゐる。その周圍にも、四五人の若く美しい侍女が控へてゐる。)

(下手の襖の前には、筋骨逞しい武士が二人、端坐してゐる。)

（舞樂暫く靜寂。總ての人物、化石したやうに動かない。突然、侍女花岡が動く。宮島に囁く。宮島、沖津に囁く。沖津、松阪に囁く。）

（千姫はまだ眠つてゐるやうにぢつとしてゐる。）

（松阪、千姫に囁く。千姫、急に身を起して、ぢつと城下を見る。と、素早く脇息の下から薄絹を出して、三度それを高く振る。それから、正面へ向き直り、襖の前に端坐せる武士二人に目まぜにて或命令を傳へる。武士達、直ぐ襖を排して、出て行く。）

（千姫、襠を着換へ、手輕く化粧をし直す。）

（やがて、町人風の若い男、黒い布で目を縛られて拔刀の武士に護られて登場。音樂、やむ。）

（千姫、ぢつとそれに目をつける。と、躍りかかつて目隱しをとる。）

（千姫、男の美しさに打たれる。男も千姫の美しさに恍惚とする。）

（踊り子の一群が現れて、嬌めかしい踊を踊る。音樂。その間に、千姫、若い男を別室へ拉し去る。）

（踊り子、踊りながら去る。）

（武士二人、卓の側に坐つてゐた侍女達も去る。）

（宮島、花岡、沖津、松阪、殘る。）

宮島　けふも好い獲物がかかりましたな。

沖津　ほんに、この頃は、いつも美しいのが參りますな。

花岡　はじめは恐れて人の近寄らなかつた城下も、この頃は美男の市を見るやうでございます。

松阪　われから望んで參るやうになつたのでございます。命をとられるのを承知で參るやうになつたのでございます。

宮島　ほんに、命にも換へ難いしあはせでございますものな。

沖津　來世は美しい男に生れて、こんな目に

會ひたいものだと思ひます。(笑ふ)

松阪　冗談は置いて、あの、この頃、毎日のやうに、ちらりと姿を見せては、直ぐと逃げて行つてしまふ若い侍は、何者でござりませうな。

宮島　ほんに氣味の惡い侍でございます。探りの者かとも思ひますが、何を探らうと、何を見窮めようと、お姫様をどうすることも出來はいたしませぬ。

沖津　でも美しい男のやうではございませんか。

花岡　美しい段か。今まであのやうに美しい男を見たことはございません。

沖津　お姫様も何度布をお振りになつたか分かりませんが、いつも捕まへに參る間に姿を隱してしまふのでございます。

花岡　來たさは來たし、恐さは恐しといふところでもございませうか。

松阪　まあ、そんなところでございませう。

宮島　なんにしても、氣味の惡い侍、早く捕へておくれ様の犠牲にしてやりたいものでございます。

(隣の部屋に衣摺れの音がする。)

松阪　しつ。

沖津　しつ。

(若き男、青白い顏をして、魔につかれたやうに、ふらふらとはひつて來る。)

(追ふやうにして、千姫、他の侍女達、はひつて來る。武士二人もはひつて來る。)

姫　坐りや。(卓の前を指す)

(若い男、卓の前に坐る。)

(姫、自分でコップへ酒をつぎ、それを男の前へ出す。)

姫　飲みや。

男　（姫の顔をぢつと見る）

姫　（平気で）毒ぢや。毒酒ぢや。

男　（悩ましげに笑ひながら、コップを手にとる）

姫　飲むか。

男　（頷く）

姫　毒酒ぢやぞ。

男　（大きく頷く）

姫　嬉しいか。

男　（頷く）

姫　飲みや。

男　（コップを仰ぐ）

（侍女達、ぢつと若い男を見詰める。）

（男、直ぐに苦しみ出す。やがて、死に斃れる。）

（侍女達も武士達も、少しも動かされない。）

[redacted]　それ。（武士二人に合図する）

（武士二人、直ぐ立つて来て、若き男の死骸を下手奥へ運ぶ。）

（侍女の一人。隠し戸を明ける。死骸、隠し戸から下へ投げ込まれる――遠く水の音。）

（姫はぢつと立つて、それを見てゐたが、やがて又元の物見の窓へ帰る。）

（総て蒜明きの舞台と同じになる。）

（千姫と四人の侍女は物見の窓に、他の侍女は卓の側に、二人の武士は襖の前に、総て化石したやうに動かない。）

（舞楽暫く静寂。蒜明きと同じ音楽。）

（やがて、侍女花岡が身を動かす、宮島に囁く。宮島、沖津に囁く　沖津、松阪に囁く）

（千姫はまだぢつとしてゐる。）

（松阪、千姫に囁く。千姫、急に身を起して、ぢつと城下を見る。直ぐ合図の布を三度振る。それから、正面へ向き直る）

姫　（二人の武士に）急いで。

（武士二人、走り去る。）

姫　松阪、いつもの侍ぢや。また逃げようも知れぬ。目を放すな。

松阪　はつ。（一人、物見の窓よりぢつと外を見る）

（姫、裲を着換へ、化粧をし直す間に、時々松阪に聲をかける。）

姫　松阪、どうぢや。逃げたか。

松阪　（向うを見た儘）いえ、逃げはいたしませぬ。

姫　捕手の者はもう參つたか。

松阪　はい、もう參りました。

姫　それでも逃げぬか。

松阪　それでも逃げませぬ。けふはいつもと違つて、ぢつと立つた儘、捕手を待つ様子でござりまする……あ、捕へられました……素直にお城の方へ參りまする。

姫　參るか。

（と、言つたきり、あとは物を言はず。默つて化粧を續ける。）

（化粧終る。）

（或若い美しい侍、目隠しをされ、抜刀の武士に護られて、はひつて來る。）

（姫、ぢつと侍を見る。）

（と、駈け寄つて、目隠しをとつて捨てる。）

（姫、嬌めかしく、ぢつと男の顔を見る。）

（男は腹立たしげに、姫を睨みつける。）

（踊り子の一群が現れて、舞ふ。音樂。）

（千姫、若き侍の手をとらうとする。）

（侍、姫の手を振り拂ひ、姫を下へ引き据ゑる。）

（踊り子、驚いて逃げ去る。）

（二人の武士、抜刀の儘、若き侍を引つ立てようとする。）

武士の一人　おのれ、狼藉者。

若い侍　狼藉者とはその方達のことだ。おれは阿

部伊勢守成重だ。すさりをらう。

（二人の武士、恐れてすさる。）

姫　伊勢守であらうが、何の守であらうが、恐れはせぬ。なんで身を引き据ゑた。

成重　申し上げたいことがある。家の爲、國の爲、人の爲に申し上げたいことがある。

姫　一旦この城へはひつたら命はないぞ。

成重　それも承知ぢや。命を捨てても申し上げたいことがある。

姫　諫言なら、聞かぬ。

成重　諫言ではない。諫言などをしたところで、聞く姫とは思はぬ――併し、人拂ひが願ひたい。

姫　（一同に）皆、遠慮せい。

（一同、危ぶみながら去る。）

（姫と成重と唯二人殘る。）

姫　もう聞く者はない。言ひたいことは何ぢや。

成重　お命が申し受けたい。

姫　妾の命か。

成重　さうぢや。

姫　誰が妾の命を望むのぢや。そちか。それとも他の者か。

成重　頼まれて參つたのではない。拙者自身が望むのぢや。

姫　何の爲に。

成重　家の爲、國の爲、人の爲に。

姫　（笑ふ）ほ、ほ、ほ。もうその詞は聞き飽きた。妾は八つの時から、その詞一つで、この身を道具のやうに扱はれた。

成重　それとこれとは心が違ふ。成程、大御所はあなたを政略の道具に使はれたかも知れぬ。だ

が、それはやむを得ぬことぢや。あなたが若し道具なら、大阪二度の陣に命を捨てた武士達も道具ぢや。一同が優れた武將の道具となつてこそ、天下は統一せられるのぢや。あなたの場合は、それとは違ふ。あなたは唯自分の欲の爲に、罪もないものを犧牲にするのぢや。それは國の爲にもならなければ、天下の爲にもなりはせぬ。唯淫蕩極まるあなたの肉慾を滿足させるだけのことぢや。

姬　いや、それは違ふ。如何に優れた武將でも、人間を道具に使ふことは出來ぬ。如何に國の爲天下の爲でも、人間を道具に使ふことは出來ぬ。人間は飽くまでも人間ぢや。おのれの意志を殺して命のない道具となることは出來ぬ。人間を道具扱ひにして得た天下などは三代と續くものではない。

成重　それでは、我欲の爲に罪のない者を犧牲にするあなたはどうぢや。

姬　勿論、妾は自滅を覺悟してゐる。けふまで生きられたのを不思議に思つてゐる位ぢや。妾は生れるから命ある人間として取扱はれてゐない。豐臣家へ嫁にやられたのが八つぢや。夫の秀頼が十歲ぢや。大阪の城の落ちた時、夫の年は十六で、妾の年は十四ぢや。嫁も夫婦もあつたものではない。しかも、その僅十四の妾が、あの激戰の最中に、母と夫との命乞の道具として、德川の陣へ送られる。それを途中で會つた坂崎といふ男が、背に負うて無事に茶臼山へ送り屆けたといふばかりで、妾を見も知らぬ公卿へ嫁にやらうとする。妾ももうその時は十八で、

美しい男も出來てゐた。それへ嫁がうとすると、坂崎が邪魔をする。揚句の果はお爺樣にまで楯を突いて、たうとう自滅してしまふ。妾はやつと自分の好んだ本多家へ嫁いで、はじめて人間らしくなつたかと思ふと、今度はころりと夫が死んでしまふ。無理強ひに佛門に入れられ、名も天樹院とつけられて、この城へ押籠同然の身の上となつてしまつた。だが妾は髪も切らぬ。經も讀まぬ。妾ははじめから命のない人間だつた。僅二三年は命を得たが、もうその命も永遠に奪はれてしまつた。妾は世間に奪はれた命を、この城の中で、自分の世界だけで生かして行かうと言ふのぢや。

成重　（やゝ動かされて）　あなたの境遇には同情する。自分だけで自分を生かして行かうといふ心持も理解出來る。併し、その爲に、なぜ罪のない者を犧牲にしなければならないのぢや。をとゝひも許嫁のある美しい男が、この城へはひつたきり歸つて來ぬ爲に、その許嫁は自害して死んでしまつた。きのふこの城で命を終へた若侍の母は氣が違つてしまつた。けふも、ついさつき町人風の若者が、この城へ誘ひ入れられたきり消息がない。わたしはこの七日程、毎日城下へ來て、何も彼もよく見て置いた。なぜ、そんな殘酷なことをなさるのぢや。自分の命が得られれば、人の命は失つても好いのか。道具になるのを嫌ふあなたが、なぜ人を道具扱ひになさるのぢや。

姫　（笑ふ）　そちはまだ若い。大家に生れて、大勢の上に立つても、そちはまだ人間といふもの

を知らぬと見える。妾は誰も道具扱ひにしたことはない。妾は誰も犠牲にはしない。この城へはひつて來る若い男達は、みんな喜んで命を捨てるのぢや。われから進んで死んで行くのぢや。

成重　（驚く）なに。

姫　（卓上の酒の瓶を指さす）これが命をとる毒酒ぢや。この城へ來る若い男は、みんな喜んでこれを飲むのぢや。妾は一度も強ひたことはない。

成重　毒と知つて飲むのか。

姫　さうぢや。妾ははつきり毒だと言ふのぢや。

成重　それは分からぬ。

姫　それだから、そちは人間といふものを知らぬと言ふのぢや。ようく聞きや。妾は將軍の娘ぢや。妾かたちも美しい。一旦この城へはひつた男は、幸福の絶頂を窮めるのぢや。もう一生涯にこれ程の幸福はないと思ふのぢや。これからの生涯をみぢめに貧しく送るよりは、いつそたつた今死んだ方がしあはせだと思ふのぢや。

成重　（聲を上げて笑ふ）ばかな。そ、そんなことがあつて堪るものか。

姫　いや、さうぢや。

成重　いや、そんなことはない。

姫　そちも、一旦この城へはひつた以上は、どうせ命のないものぢや――試して見たらどうぢや。

成重　（平氣で）うむ、試して見よう。したが、あなたの言ふことが若し嘘だつたら、お命は必ず申し受くるぞ。

姫　言ふまでもないことぢや。（立つ）　さあ、來や。

（成重、立つ。）

（姫、先きへ立つてはひる。成重続いてはひる。）

（宮島、神津、花岡、松阪、部屋の方々から現れる。）

松阪　たうとう負けをつた。

神津　いえ、いえ、油断はなりませぬ。

花岡　でも、もうあのお部屋へはひつたからは、こちらのものでございます。

宮島　でも、餘程思ひ詰めてゐるやうでございますから、何をいたすか知れませぬ。

神津　警護の者を呼びませうか。

花岡　それが宜しうございます。

神津　（手を打つ）

（武士二人、現れる。）

（花岡、その側へ寄りて囁く。）

（武士達、緊張して、太刀を側へ引き寄せる。）

（侍女達も、小刀の柄へ手をかける。）

（一同、身構へして、きつと下手へ目を注ぐ。）

（やがて、下手の襖から、成重が顔色蒼白、魔につかれたやうになつて出て来る。）

（千鶴、無表情に、そのあとから附いて来る。）

（二人、卓の前に坐る。）

姫　（默つて酒をコップに注ぐ）飲むか。

成重　（頷く）

姫　毒ぢやぞ。毒酒ぢやぞ。

成重　（大きく頷く）

姫　飲みや。

成重　（コップに手をかけ、なかば酒を仰ぐ）

姫　待て。（成重の手を抑へ、コップを奪ひとつて、おその半分を一息に飲み干す）

（武士、侍女達、驚愕す。）

成重　や、あなたも飲むのか。

姫　そなたのやうな美しい男、そなたのやうな大

膽な男、そなたのやうな頑な男は、この世に二人とあるまい……けふは妾が幸福の絶頂を窮めた……妾の命は完全に取返された……二人で永遠に幸福の道を歩かう。

成重　かたじけない。

（成重、姫の手をとる。）

（姫、がつくりとなる。成重、その上へ斃れ伏す。）

（武士、侍女達、目を伏せる。）

（音樂。）

――幕

支那の戈登

——三つの挿話から成る戯曲——

人物

英國工兵少佐チヤアルズ・ゴオヅン
スタツク大尉
ヲオド中尉
　　常勝軍

慕　　王
納　　王
他の二王
四人の天將
　　髮賊

王の伯父
納王の息

李鴻章（登場せず）
程學啓
ベエリイ砲兵少佐
　　官軍

米人バアジエヰン
その他

時代

西暦一八六三年

場所

南清

第一幕

西暦一八六三年。六月

南支那江蘇省崑山。

英吉利の工兵少佐チヤアルズ・ゴオヅンの率ゐる常勝軍（Ever Victorious Army）の陣營の一部。

暗色のセル地の洋服に綠帽を戴き、英國製の滑口銃を手にせる常勝軍の兵卒下士二三十名（總て支那人）口口に罵り騷ぐ――幕あく。

――おれは厭だ。

――おれも厭だ。

――厭だ。厭だ。

――休ませなきやあ、もう戰はやめだ。

――一度勝つたら一度休むのが支那の軍律だ。あいつはそれを知らないのだ。

――常熟を落した時も休んだのだ。太倉で勝つた時も休養したのだ。それだのに、今度に限つて休まぬといふ法はない。

――今度の戰ぐらゐ骨の折れた戰はない。ハイスン號へ乘つて運河を行つた連中などは隨分やられたらしい。

――何しろ、あの暗夜だ。急を聞いて飛び出して來た蘇州の賊にいきなりぶつかつた連中などは、敵も味方も分からなかつたといふ話だ。

――おれもその中にゐた。よく命があつたと思つてゐる。

――實際みんなよく戰つた。だから、一萬五千にも餘る敵を破つて、この崑山を占領することが出來たのだ。

――いくらゴオヅンの軍略がうまくても、吾々が善戰しなければ、崑山は落ちなかつたのだ。

――この功績は吾々のものだ。

――それだのに、ゴオヅンは吾々に酬いることを知らないのだ。

――この儘、この崑山を根據地にして、もう松江

の本營へは歸らないと言ふのだ。

——酒もなければ女もない。こんな田舍で何が出來るものか。

——おれはどうしても二週間休ませて貰ふ。

——おれはどうしても浙江へ歸らして貰ふ。

——それでなけりやあ、もう兵隊は御免だ。

——給料だつて食料だつて滿足にくれやしないのだ。戰へ出るのは分捕だけが目當だ。その分捕もしちやあいかんと言ふ。あんな分からん奴はない。

——おれは構はず分捕つた。これ見ろ。

——實はおれだつてやつた。これ見ろ。

——おれだつてやつた。

——いくら分捕りをしたつて、休みがなけりやあなんにもなりあしない。

——さうだ。寶の持ち腐れだ。

——休みがなけりやあ、もう戰は厭だ。

——厭だ、厭だ。

——厭だ、厭だ。

（喇叭、鳴る。）

——なんだ。集まれか。厭だ、厭だ。

——誰が行くものか。（軍帽を脫ぎ捨てる）

——厭なこつた。（銃を投げ棄てる）

（喇叭、又鳴る。）

（一同、ふてくされて、胡座をかいたり、寢そべつたりする。）

（ゴオツン少佐、幕僚を連れて出て來る。少佐は一切武器を帶びず、唯双眼鏡を首にかけ、竹鞭を手にしてゐるだけである。兵卒二名、從ふ。）

少佐　（靜に）諸君はなぜ隊伍につかんのです。

（一同、默つてゐる。）

少佐　喇叭が聞えないのですか。

――（一同、尚默つてゐる。）

少佐　何か不平があるのですか。

――（突然）休ませて下さい。

――休養させて下さい。

少佐、勿論休養させます。この次ぎは蘇州の總攻撃で、これは容易ならん戰です。蘇州を落すには、先づ嘉湖や吳江を落して、これを孤立させなければなりません。それには十分兵を練る必要があります。

――そんなら、松江へ返して下さい。

少佐　なぜですか。折角、こんな好い場所を占領したのに、それを捨てろと言ふのですか。この崑山は根據地として實に適當な所です。水路が自由で、蘇州へも、太倉へも常熟へも、松江へも直ぐに船で行けます。

――そんなことは、あなたに聞かないでも知つてゐます。

少佐　では、なぜ松江へ歸りたいなどと言ふのです。

――こんな田舍は厭です。

――酒も女もありません。

――松江へ返してくれなければ、もう戰はやめです。

少佐　（呆れたやうに暫く默つてゐる。やがて）いつでも諸君の言ふことはおんなじだ……常熟の時でも、太倉の時でも、戰が濟むと、きつと諸君はそれを要求した。私も出來るだけ、その要求に應じて來たが、今度はもういかん。今この地點を離れるといふことは、戰略上どうしても出

――松江へ返してくれりや文句はねえんだ。

少佐　一體、常勝軍なるものは、上海に居留してゐる歐米人が髪賊の襲來を防がうとして組織したのが始まりだ。だが、今ではもう性質が變つて來てゐる。今日の常勝軍は、單に居留民保護の爲にのみあるのではない。卽ち、吾々の同胞の利益の爲のみに存在するのではない。髪賊を支那の平和に害あるものと認めて、清國政府の爲に、淸の官軍と協力して戰つてゐるのが現在の常勝軍だ。

――分かつてる、分かつてる。

――もう澤山だ、澤山だ。

少佐　私は英吉利の爲に戰つてゐるのではない。英吉利政府の爲に戰つてゐるのでもない。英吉利人の多くは、寧ろ私の行動を怪しんでゐるの來ん。

――そんなら隊伍につかんばかりだ。

――もう戰はやめだ、やめだ。

少佐　まあ、待ち給へ……一體、諸君は何の爲に戰つてゐるのだ。國の爲だ。國の平和の爲だ。さうぢやないか。それ以外になんにも目的はない筈だ……私は外國人だ。外國人でありながら支那の政府に雇はれて、支那の內亂を鎭定しようとしてゐるのだ。一寸見ると、私はしないでも好いことをしてゐるやうだ、だが、私はさう思はん。私はこれを上帝の命令だと思つてしてゐる。人間として、しなければならんことをしてゐるのだと信じてゐる。

――又お說敎か。

――もう澤山だ。澤山だ。

だ。非難してゐるのだ。現に、私の父などは信仰の厚い基督教徒であるから、苟も基督教を信奉する髪賊を討つのは神に對する冒瀆だと言つて來てゐる位だ。本國にゐるものばかりではない。現在清國に在留してゐるものでも、髪賊は支那を開明に導くものだ。髪賊は目覺めたる支那だ。その目覺めたる支那を討伐するのは、文明に反向ふものだと言つて、私を攻撃するものがある。併し、私は堅く信じてゐる。この戰は正義の戰であるといふことを。

——もう好い、もう好い。

——早く松江へ返してくれ。

——休養だ、休養だ。

少佐　成程、髪賊は基督教を信じてゐる。併し、その基督教は自分達に都合の好いやうに作り直した基督教だ。決して正當な基督教ではない。若し彼等が眞に愛の神を信ずるものであつたら、この十二年間に行つたやうな殘虐は敢てしなかつたであらう。若し、彼等に眞に國家を改革する誠意があつたら、行く所として必ず民政が敷かれてゐなければならん。然るに、彼等は唯攻めては取り攻めては取りするだけで、何處に一箇所も民政を敷いた跡がない。彼等は唯奪掠するだけだ。殺戮するだけだ。首領洪秀全の如きは既に三十人の妻を持ち、百人の妾を擁して、日夜美食美酒に飽いてゐるといふではないか。私はかかる人物を基督教徒として遇することは出來ない。かかる人物を國家の先覺者として敬ふことは出來ない。洪は詐僞師だ。山師だ。私はかかる山師が長い間支那帝國の平和を擾し

てゐるのを默つて視てゐることが出來なかつた。私はそれ故立つた。私の立つたのは、英吉利の勢力を布く爲ではない。單に殺戮を喜ぶが爲でもない。掠奪が目的でもない。支那の動亂は世界の動亂だ。支那の開發は世界の開發だ。私は世界の平和の爲に、人類全體の愛の爲に、自分の國籍を忘れて、この戰に從つてゐるのだ。御覽の通り、私は身に寸鐵を帶びてゐない。いつも携へてゐるのは、指揮棒としてのこの竹の鞭ばかりだ。私は殺す爲に戰ふのではない。奪ふ爲に戰ふのではない。然るに、諸君は稍ともすれば……

（舞臺背後に騷擾の聲起る。）

（砲兵中尉ナオド、走りて登場。）

少佐　どうした。

中尉　いくら命令をしても、誰も隊伍につくものがありません。

（舞臺にゐる兵卒等笑ひ嘲ける。）

少佐　砲兵はどうだ。

中尉　砲兵が最も頑強です。これを御覽下さい。

（ポケットから檄文やうのものを出す）

少佐　（檄文を手にする）　うむ。どうしても松江へ引き上げなければ、英吉利の士官を大砲で打つと言ふのだな。檄文の起草者は分かつてゐるか。

中尉　分かりません。

少佐　（しづかに）　わしには大抵分かつとる。砲兵の下士官を全部ここへ連れて來い。

（ナオド中尉去る。）

少佐　（舞臺にゐる兵卒達に）　諸君、事態は實に容易ならんことになつた。私は言ふだけは言ふ。

說くだけは說く。だが、それでも分からん奴は……どうするか。そこで見てゐるが好い。

（チオド中尉、砲兵下士官（いづれも支那人）二十餘名を連れて出て、少佐の前に整列させる。）

少佐　（いきなり檄文をひろげて見せる）これを書いたのは誰だ。

（誰も返事をしない。）

少佐　この檄文を書いたのは誰だ。

（一人が「知りません。」と言ふ。他の一人が「知りません。」と言ふ。やがて、口々に總ての下士官が「知りません。」と言ふ。）

少佐　よし。誰も知らんのだな。

（「知りません。」「知りません。」と口々に言ふ。）

少佐　よし。（自分の側にゐる二人の歩兵を前に出して銃を構へさせる）それでは、お前達の內、五人每に一人を銃殺するから、そのつもりでをれ。

（下士官等、恐れ叫ぶ。）

（少佐、その內最も烈しく叫ぶ一人を引きずり出して二人の歩兵に「打て。」と命ずる。銃を構へてゐた二人これを射殺する。）

少佐　（チオド中尉に）あとの者は悉く禁錮する。一時間內に檄文起草者の名を告げなければ、愈五人每に一人を銃殺する。

（下士官等、泣き叫ぶ。その內、一人が少佐の前へ駈けて出る。）

下士の一人　申し上げます。申し上げますから、どうかお許し下さい。閣下。

少佐　言へ。

下士の一人　檄文の起草者は楊です。わたし達は何も知らないのです。

少佐　楊とはどの男だ。

下士の一人　（銃殺された下士を指さす）あれです。

あの男です。

（少佐、中尉と顔を見合せて、寂しく笑ふ。）

（ユ・ノグ大尉、登場）

大尉　總督閣下。

少佐　なんだ。

大尉　兵がどんどん脱走します。

（さつき塹壕にゐた歩兵達も、もう一人も殘つてゐない。砲兵の下士官達も、一人逃げ二人逃げして、だんだん數が少くなる。）

少佐　（顔を暗くして）もうどの位逃げた。

大尉　千人は逃げましたらう。夜分になつたら、もつと逃げませう。

少佐　捕賊の捕虜はどの位ゐる。

大尉　三千人はをりませう。

少佐　好い兵士がゐるか。

大尉　苦戰を續けて來ただけに、各々の兵よりはしつかりしてゐるやうです。

少佐　よし。それでは、それを使はう。

大尉　賊をお使ひになるのですか。

少佐　きのふの敵が、けふの味方だ――これが支那だ。（寂しく笑ふ）

（遠くに喇叭の音。）

中尉　この死骸はどうしませう。

少佐　軍律の犠牲だ。だが、その犠牲も今では何の役にも立たなくなつた。氣の毒な男だ。丁寧に葬つてやれ。

（中尉、二人の歩兵に銃殺された下士の死骸を運ばせる。）

（少佐、鞭を上げて敬禮する。）

（日が暮れる。）

（支那兵はもう一人もゐない。）

（遙に喇叭の音。）

第二幕

第一場

（西暦一八六三年十月。
蘇州寶帶橋附近。
相對せる民家の壁に凭りて、髪賊軍の亞米利加人三名と常勝軍の英吉利士官四名とが、パイプを燻しながら暢氣に話してゐる。
太湖が仄見えて、水鳥が何處かで鳴いてゐる。

英士官A　……ぢやあ、もう降參ときめたか。

米人B　きめた。第一もう城中には食糧がない。流石のバアジエヰンも、あんまり豫想を裏切られたんで、もう降伏と覺悟をきめたらしい。

米人A　きのふその事で、ゴオヅンに會つた筈だ。

米人B　けふ第二回の會見がある筈だ。

英士官B　ほう、さうか。ちつとも知らなかつた。內の大將はなんにも言はんからな。

米人A　なんと言つてもゴオヅンは豪いよ。バアジエヰンも強いには強いが、野心があつていかん。それに輕卒だ。

英士官A　でも、內の大將はなか〳〵買つとるぞ。バアジエヰンが髪賊の味方になつたら、少くともこの戰爭は豫定より一年は長引くだらうと言つてゐた。

英士官B　なんでもあいつの親父はナポレオン部下の將校だつたと言ふぢやないか。

英士官A　學問もなかなかあるさうだが、唯非常な野心家で、この渾沌(こんとん)の支那で何かどえらいことをしようと思つてゐるらしい。

米人C　ウオードが死んでから、常勝軍の指揮を引受けた當時は得意だつたが、その地位をゴオヅンに取られたのでひどく癪に障つたんだな。それから、北京へ行つて李鴻章にさんざんゴオヅンの惡口を言つたのだが、李は問題にしなかつた。そこで、僅々二百人を引率して髪賊に投じたのだ。

英士官A　そいつが今になつて、内の大將に款を通ずるといふのは訝しいな。それも何かの陰謀ぢやないか。

米人C　なんとも言へんな。おれ達も言はゞ欺されて來たんだからな。

米人A　兎に角、おれは早く賊を脱走したいよ。ゴオヅンはきつと助けてくれるに違ひないからな。

英士官B　それは助けるとも。内の大將は降參して來たものの命は取らないといふのが主義なのだから。

米人B　そこへ行くと官軍の程はひどいな。

英士官A　あいつは亂暴だ。降伏して來たものでもなんでも殺してしまふのだからな。

英士官A　内の大將も幾度それで怒つたか分からない。崑山の時なども下士や兵卒は反抗する。政府は約束の給料を渡さない。程は言ふことを聞かないといふわけで、内の大將すつかり怒つてしまつてな。辭職するつもりで、單騎で上海まで歸つて行つたんだ。ところが、著くと直ぐと聞いたのが、バアジエホン反逆の一件だ。これは一身の不快を顧みる時でないといふので、直ぐ又引返して來た。それから、この寶帶橋の

占領となつたわけだ。

米人A　そこがゴォヅンの豪いところだよ。ふだんはおとなしいが、怒るとなると思ひ切り怒る。併し、いくら怒つても、私情の爲に公事を犠牲にするやうなことはしない。そこがゴォヅンの豪いところだ。

英士官B　おい、おい。髮賊の士官が常勝軍の大將をさう讃めてはいかんな。

米人A　構ふものか。もうおれは髮賊軍で働く氣はしないよ。

英士官A　實際、かうやつて敵味方が仲よく話をしてゐるところは、ちよいと歐羅巴では見られない圖だな。

米人B　おれ達もよつ程支那化して來たらしいな。

英士官C　考へて見ると、をかしな話だ。支那の内亂で、支那人同志が戰つてゐるのは當り前だとして、一方には吾々英吉利人がついてゐて、一方には君達亞米利加人がついてゐる。支那の國内戰爭で亞米利加人と英吉利人が戰つてゐるのだ。

米人A　全くだ。かうなると、戰爭なんて、なんの爲にあるのか分からなくなる。

英士官B　どこに戰爭があつて、どことどこが戰爭をやつてゐるのだか、まるで分かりやしない。

（一同笑ふ。）

（遠くで喇叭が鳴る。）

英士官A　おつ。午飯だ。ぢやあ、失敬するぞ。

英士官B　なるたけ早くやつて來いよ。

米人A　この儘そつちへ行きたい位だ。

米人B　第一、おれの方は仮の合図もありやしない。

米人C　また長髪賊と一喧嘩か。

（一同、笑ひながら、左右へ別れる。）

第二場

同じ時。

同じ場所。

ゴオツン少佐の陣營内（民家）。

米人バアジエヰンとゴオツン少佐とが唯二人で對座してゐる。

バアジエヰン　では、一昨日お願ひしたことは確かですね。

ゴオヅン　一旦私が引受けた以上は間違ひはありません。あなた方は賊軍に投じたことを悔いてをられるのです。悔いてゐる者を罰することは出來ません。私は降伏して來る者の命はとりません。それどころではない。希望に依つては、あなた方の一部を常勝軍の士官に取立てます、あとは無事に國外へ出られるやうに取計ひます。

バアジエヰン　私のしたことは確に輕擧でした。だが、今更そんなことを言つても爲方がない。今はあなた方の寛大な度量に縋るより外に道はないのです。

ゴオヅン　私が寛大なのではない。神が寛大なのです。

（間）

バアジエヰン　ところで、けふ上がつたのは、その時期の問題ですがな。

ゴオヅン　いつにします。

バアジエキン　今夜にしようかと思ひます。

ゴオヅン　どういふ風にやります。

バアジエキン　突撃と見せて、城を脱走します。

ゴオヅン　宜しい。いづれ髮賊がバツクして來るでせうから、そいつらだけ大砲で追拂つて、あなた方だけこちらへ收容するやうにしませう。

バアジエキン　どうかさう願ひます。(一寸考へて)ところで、今後の方針ですがな。

ゴオヅン　今後の方針と言ふと。

バアジエキン　私があなたと一緒になつてからのことです。

ゴオヅン　蘇州を落して、南京まで攻め登るだけのことではないのですか。

バアジエキン　そこです。よし髮賊を絶滅したところで、今の支那がどうにもなるものではありません。滿清政府は既に大國支那を支へる力を持つてゐないのです。

ゴオヅン　では、どうしようと言ふのですか。

バアジエキン　先づあなたと私で蘇州の城を奪ふのです。それから、そこを根據にして、官軍をも髮賊をも討ち破るのです。それから二萬位の軍隊を組織して、北京へ攻め登るのです。さうして滿清朝廷を覆して新帝國を建設するのです。そして、私が皇帝になつて、あなたが副皇帝に……

ゴオヅン　(突然)ばか。(ベルを鳴らす)

(チオド中尉が現れる。)

ゴオヅン　バアジエキン君を直ぐ城内へお送り申せ。

バアジエキン　だが、ゴオヅン君……

ゴードン　もう何も聞くことはない。直ぐお歸りなさい。

（バアジエキン、腕を摑まれて、チオド中尉と一緒に出て行く。）

（エヌイツク大尉、登場。）

大尉　總兵閣下。

少佐　うむ。

大尉　バアジエキンが何か不穏なことでも申しましたか。

少佐　あいつはばかだ。ばか者だ。

大尉　降伏の一件はどうなりました。

少佐　それはもうきめたことだ。

大尉　何か新しい條件でも持つて參つたのですか

少佐　あいつはばかだ。ばか者だ。ああいふごろつきが横行してるから、支那はいつまで立つても救はれないのだ。

大尉　では、お赦しにはなりませんか。

少佐　いや、約束は約束だ……今夜、突撃と見せて、驅け込んで來る筈になつてるから、その手配をしてくれ。ハイスン號から一齊射撃をして、バツクをして來る賊を追拂ふのだ。亞米利加人が先頭に立つて來る筈だから、洩れなく收容するやうにしてくれ。

大尉　承知しました。

（大尉、去る。）

少佐　（激しく）ばか……ばか……ばか……

第三幕

第一場

西暦一八六三年十一月。

蘇州城内。

夜。

髪賊慕王（モオワン）、納王（ナアワン）、他の二王、四人の大将、いづれも袍をつけ、冠を戴き、卓を囲んで、黙禱に耽りゐる。

黙禱終る。

慕王　（首席につきゐる）では、これから軍議にかからう。だが、豫め言つて置くが、わしは飽くまでもこの城は棄てん。命を賭しても降伏はせんから、そのつもりでゐて貰ひたい。

納王　だが、事態（じたい）ここに至つては、降伏をするより外に道はないと思ふ。李の大軍、程の大軍、ゴオヅンの常将軍に依つて、この城は既に三方から包圍されてゐる。石壘は既に破られた。軍略に富んだ忠王でさへ、既に望のないのを知つてこの城を見棄てたではないか。

慕王　仕はゴオヅンと文通するやうになつてから急に軟化して來た。降伏すれば罪は問はんといふ彼の詞に嘘はあるまい。併し、攻圍軍には李がゐる、程がゐる。あいつらがどうして吾々に危害を加へずに置かう。

納王　ゴオヅンは決して奪掠もしない、降伏者の罪も問はないといふ立派な言質（げんち）を李からとつてゐる。そのこともはつきり手紙に書いて來てゐる。

慕王　いや、わしは信じない。どうせ死ぬなら、飽くまでも城を守つて死にたい。蘇州を一日守ることは、南京の命を一日延ばすことだ。

他の王　五十歩百歩だ。もう吾々に破滅が來たの

だ。天の命ずるところに從ふより外に道はない。

天將の一人　この上戰ふのはむだ骨折だ。

天將の他の一人　犬死だ。

第三の天將　吾々が死ぬのは好い。だが、三萬に餘る同志を敵の殘虐に任せるには忍びない。

慕王　嘘を言ふな。君は自分の命が惜しいのだ。

第三の天將　ばかを言へ。

慕王　ばかとはなんだ。

（王の一人、突然袍を脱ぎ捨てる。）

慕王　な、な、何をするのだ。

王の一人　かうするのだ。

（いきなり劍を拔いて慕王を刺す。他の諸王諸天將も同時に劍を拔いて慕王に襲ひかかる。）

第二場

その翌朝。

蘇州城内、納王の家の前。

髮賊の兵が四五人、納王の家を護衞してゐる。

ゴオヅン少佐、竹の鞭を手にして、ひとり出て來る。

髮賊の兵と一人一人握手する。

少佐　諸王はもう出かけられたか。

兵の一人　皆さんお出かけになりました、降伏式へ。李巡撫のところへ。

少佐　それはよかつた。家族の方はどなたかをられるか。

（納王の伯父が出て來る。）

少佐　あなたは。

伯父　納王の伯父です。

少佐　あなたにはまだ初めてだ。（握手）あなたも部將の一人でしたな。

伯父　はい。

少佐　あなたの勇名はかねてから聞いてゐました。

伯父　(寂しく笑ふ)

少佐　時に、諸王は無事ですか。

伯父　お蔭で萬事好都合に參りました。今しがた揃つて李巡撫のところへ參りました。

少佐　別條はありませんな。

伯父　ありません。

少佐　あれ程、李や程に確めて置いたのですから、大丈夫だとは思つてゐたのですが、どうも不安心なのでお訊ねに參つたのです。

伯父　それはわざわざ恐れ入りました。

少佐　私は常勝軍を崑山まで引き上げさせるのに忙しかつたのです。うつかりこの邊に置くと、いつ奪掠を始めるか分りませんからな。

伯父　實は吾々もそれを恐れてゐたのです。官軍の方はどうでせう。

少佐　官軍にも決して奪掠はしてならんと言ひつけてありますから、大丈夫だと思ひます。萬一の場合には常勝軍の一部を護衞に殘してありますから、それに防がせます。

伯父　何から何まで行屆いた御處置で、感謝の外はありません。何しろ、宅には婦人などもをりますので……

少佐　いや、大丈夫です。安心して入らつしやい。諸王が無事のやうなら、もう大丈夫です。

(チオド中尉、登場。)

中尉　お出かけになりますか。

少佐　うむ。行かう。諸王もどうやら無事らしいので安心した。だが、官軍の行動は十分監視し

てゐなければならん。

中尉　それはスタック大尉が注意してゐる筈です。護衛兵もしつかりしたのを殘してありますから大丈夫です。

少佐　では、行かうか。

伯父　これから、どちらへお出かけで。

少佐　慕王の葬式に參列しようと思つて。

伯父　慕王の葬ひを閣下がなさるのでございますか。

少佐　髮軍の老雄です。鄭重に埋葬しなければなりません。

伯父　（落淚して頭を下げる。）

（少佐、納王の伯父その他の一人一人握手して、チオド中尉と共に去る。一同、見送る。）

（途端に、納王の家の内部で、婦人の叫び聲が聞える。）

（一同が振向くと、官軍の淸兵が手に手に掠奪品を携へて出て來る。）

（納王の伯父、髮賊の兵、これを捕へようとする。）

（官軍の兵、發砲する。）

（格鬪。）

第　三　場

同じ日の午後。

蘇州城東門に近き河畔。

程學啓、官軍の一部を率ゐて屯營す、對岸にも官軍大勢、群り居る。

ゴオドン少佐、スタック大尉、チオド中尉、常勝軍の護衛兵の一部を引率して、急ぎ登場。

少佐　（叫ぶ）　程(チン)はをらんか。程はどこにゐる。

程　（稍狼狽して、前へ出る）　ここにをります。

少佐　なぜ官軍に奪掠を許した。

程　奪掠。

少佐　納王の家も襲はれた。璋王の家も襲はれた。

程　そんな筈はありません。

少佐　ないことはない。わしは自分の目で見て來たのだ。

程　それは私の知らないことです。早速調べて、嚴重に處罰しませう。(行かうとする)

少佐　どこへ行く。

程　調べに行きます。

少佐　逃げると承知せんぞ。

程　私も軍人です。そんな卑怯なことはしません。

(と言ひながら、走り去る)

(官軍の兵士も同時に走り去る。)

少佐　ああ、だめだ、だめだ。到底支那人と事を共にすることは出來ん。今度こそは紳士らしい戰をしようと思つたのに、城が陷落すると、直ぐにもうこれだ。チオド中尉、直ぐに李の居所を探して、ここへ連れて來い。序に諸王は無事かどうか。それも調べて來い。

(チオド中尉、走り去る。)

(他の方角から、官軍の砲兵士官ベエリイ少佐が出て來る。)

少佐　(直ぐ聲をかける)　おう、ベエリイ少佐、君は官軍につられるのだから、事情が分かつてるよう。どうして、程は奪掠を許したのだ。

エベリイ　實はそのことで、あなたにお目にかかりに來たのです。程は飛んでもないことをしたと言つて、泣いて悔いてゐます。あなたに申譯がないと言つて、奪掠をした兵を二十人直ぐに

銃殺しました。併し、これは決して自分の意志からしたことではない、李の命令に依つてしたことだと、かう申してをります。

少佐　なに……李の命令だと。

ベエリイ　はい。

少佐　怪しからん奴だ。その分だと、諸王の首を刎ねられたに違ひあるまい。

ベエリイ　なんでも、そんなことを聞きました。

少佐　なに、首を刎ねられたと。

（ベエリイ、小舍から支那の少年を一人連れて來る。）

ベエリイ　これは納王の息子です。

少佐　おう、さうか。あなたのお父さんはどうなすつた。

（納王の息、默つて對岸を指さす。）

（一同、對岸を見る。）

（對岸の群集、少しく薄らいで、切りさいなまれた七個の死骸の横たはつてゐるのが見える。）

少佐　おう。（と言つたきり詞がない。涙が潸然と頰を下る）

（ゴオドン、突然スタック大尉の腰からピストルを奪ふ。）

少佐　（語氣荒く）諸君、わしは初めて武器を手にした。この武器は何だ。ジャスチスだ。正義だ。正義が李の肉體に復讐を求めるのだ。

（怒號して走り去る。）

ベエリイ　困つたことになつたな。

スタック　李が惡いのだ。

ベエリイ　併し、李としては、あの位のことをしなければ腹が癒えんのだらう。隨分長い間苦しめられて來たのだからな。

スタツク　そんならゴオヅンはどうた。李は蘇州總攻撃になつてから、見物半分にやつと出て來たのではないか。ゴオヅンはこの八ヶ月といふもの、軍服がぼろぼろになるまで戰つてゐるのではないか。それでも彼は降伏者の罪は問はないと言ふのだ。
ベエリイ　ゴオヅンは髮賊から賄（まひなひ）を受けてゐるといふではないか。
スタツク　ばかなことを言へ。
ベエリイ　だが、さういふ噂は確にあるのだ。
スタツク　李や程の部下にゐる奴は、さういふ下等なことを考へるかも知れんよ。
ベエリイ　それはおれのことか。
スタツク　さうかも知れん。
ベエリイ　失敬なことを言ふな。

（二人、摑み合ひになる。）
（兵の一部が留めにはひる。）
（納王の息、逃げる。）
（チオド中尉、驅けて出て來る。）
スタツク　李はゐたか。
チオド　をりません。どこにもをりません。城內へ逃げ込んだらしいのです。
（ベエリイ、いつの間にか逃げてしまつてゐる。）
スタツク　少佐は非常な怒りやうだ。
チオド　どうしたのです。
スタツク　李が降伏王の首を刎ねたのだ。（對岸を指す）あれを見ろ。
（チオド、對岸を見る。）
（ゴオヅン少佐、ピストルを握つた儘、驅けて出て來る。）

少佐　をらん。をらん。どこにもをらん。（チオド中尉を見る）おう、中尉、李はゐたか。

中尉　をりません。どこにもをりません。

少佐　（ピストルを投げ棄てる）畜生、たうとう逃げてしまつた。

（清朝廷の勅使、官軍の護衞兵を連れて登場。）

勅使　閣下はゴオヅン總兵ですか。

少佐　さうです。

勅使　私は清國朝廷からの特使です。今回の勳功に對し、取敢ず頭等功牌と銀一萬兩を御下賜になりました。常勝軍一同へも賜金がありました。

（賜金を盛りたる盆を捧げる）

（少佐、竹鞭を振り上げる。）

少佐　歸つて下さい。歸つて下さい。斷じてその賞金は受けません。

勅使　それは不禮に當りますぞ。

少佐　不禮の罪は甘んじて受けます。蘇州陷落後に如何なることが起つたか、それをお調べになれば、私が賞を受けない理由は分かります。歸つて下さい。歸つて下さい。

（勅使等、驚いて去る。）

スタック　總兵閣下。もう戰はやめですか。

チオド　常勝軍は解散なさいますか。

（ゴオヅン、考へてゐる。）

スタック　閣下、どうなさるのです。

少佐　（突然）いや、支那人は支那人、英吉利人は英吉利人だ。わしは世界の平和の爲に働くまでも戰はなければならん。わしは支那を忘れよう。支那を忘れて、世界の爲に働かう――文明世界の爲に……さあ、これから南京だ。（命令す

ろやうに）軍議。

（衣兜から地圖を出して、野戰用の小卓の上に廣げる。スタック大尉、チオド中尉、卓を圍む。）

（對岸には七箇の死骸が見えるのみで、もう人影がない。）

――幕

珍客

――ラヂオ・コメヂイ――

登場者

犬
男
犬の主人
主人の妻
巡査

場所

主人の家の門前及び内部（劇の進行に連れて、戸外より戸口へ――戸口を玄関より二階へ、二階より玄関を経て茶の間へ移る。）

アナウンサの口上が済むと、いきなり犬が烈しく吠え出す。

犬　わ、わ、わ、わ、わん。

男　（聲を潜めて）しつ、し、しつ。

犬　（前より烈しく）わん、わ、わ、わ、わ、わん。

男　しつ、しつ。しづかにしねえか。

犬　（一層烈しく）うう、わ、わ、わ、わ、わん。

男　さうだ。すつかり忘れてゐた。（紙包の音）お前の大好きなものだ。牛肉だぞ。

犬　（益烈しく）うう、わ、わ、わ、わん。

男　ほしくねえか。

犬　わ、わ、わ、わん。

男　腹がはつてるな。

犬　わ、わ、わ、わん。

男　主人は工面が好いな。

犬　わん、わ、わん。

男　分からねえ犬だな。もう好い加減に默らねえか。

犬　わん、わん。わ、わ、わ、わん。

男　（强く）商賣の邪魔をするな。

犬　（烈しく）わ、わ、わ、わん。

男　おれは强盜ぢやあねえ。起きられると面倒だ。賴むから靜にしてくれ。

犬　うう、わ、わ、わん。

男　恐ろしく忠義な奴だな――當世でもねえ。

犬　うう、わ、わ、わん。

男　困つたなあ。

犬　わ、わ、わん……わん、わ、わ、わ、わ、わん。

男　（困つたやうに）しやうがねえなあ……

途端に、どこか近所で自動車のとまる音…… 直ぐ靴の音がこつこつと聞える――それが近づく。

男　（口早に）いけねえ――人がやつて來た。誰か歸つて來やがつた。

（男、逃げようとする。犬、男を追ひ廻す。）

犬　わ、わ、わ、わ、わん。うう、わ、わ、わ、わん。

男　（急に悲しさうな聲を出す）助けてくれ――助けてくれ――誰か來て下さい。犬が――犬が……

犬の主人　ペス、ペス。こら、ペス。こつちへ來い。

犬、急に默る。

主人　（少し醉つてゐる）どうも濟みません。

男　（わざと震へ聲で）ああ、恐かつた。

主人　どうも濟みません。なんにもする犬ぢやな

いんですが、どうもひどく臆病なんで。

男　いえ……どうも……犬が嫌ひなもんですから。

主人　済みませんでした。（極短い間）あなた、どちらから宅へお見えになつたのですか。

男　いえ……ちよいと、その……失禮ですが……表札を見せて戴かうと存じまして。

主人　ああ、さうでしたか。で、何といふ家をお探ねで。

男　へえ……あの……その……川……川島といふ家で。

主人　内は川村ですよ。

男　へえ……それで、その……川の字が見えましたもんで失禮とは存じましたが、つい、その……

主人　やつぱり、この、寺町なんですか。

男　へえ。寺町の十八番地なんで。

主人　十八番地はこの五六軒ですが、川島といふ家は聞きませんなあ。

男　では、ことによると番地違ひかも知れません。外を探して見ませう。どうも有難うございました。

（行かうとする。）

主人　ちよつと……ちよつと……（少し口調が變つて來る）大分時間がおそいが、何か急用で來たんですか、その……川……川島さんとかいふ家へ、

男　いえ、その、いえ、別に急用といふこともないんですが、その、自分の、その一身上のことにつきまして……

主人　失禮だが、御樣子で見ると、あまり御裕福

主人　探したつてありやあしないよ。

男　なければないで、又なんとか考へます。

主人　そんなことを言つてるひまに、ちよつと寄つたら好いぢやないか。

男　でも、見ず知らずの方のところへ――

主人　遠慮深い人だね。（間）ぢやあ、ほんとのことを言はう。實は僕、ちよつと、その、一人では内へはひりにくい事情があるんだ。

男　へえ。

主人　門限が過ぎちまつたんだ。（短い間）そら、見給へ。僕の時計は少しおくれてるが、もう十五分で一時だ。

男　成程……

主人　（聲を潛めて）女房がやかましいんだ。助けると思つて、僕と一緒にはひつてくれ給へ。そ

でもなささうだ……今夜は、その、川島さんとかへお泊りになるのかね。

男　へえ、まあ、そのつもりなんで。どうも、その、會社の方を首になつちまつたり何かしたもんで……

主人　それはお氣の毒だ。（極短い間）どうだね、君。僕の家へちよつと寄らないか。飯ぐらゐはあるぜ。

男　でも、それは……

主人　川島なんて家は、この近所にやあないぜ。

男　さやうでせうか……困つたなあ。

主人　兎に角、ちよつと寄り給へ。なんとか又相談のしやうもあらうから。

男　でも、それは……兎に角、もう一遍探して見ます。

ばに人がゐりやあ、さすがに女房だつて、なんにも言やあしまいから……

男　（少し笑つて）へえ……成程さういふわけで…

主人　うむ、かういふわけなんだ……つまり一擧兩得といふ奴で、それで僕も助かれば、君も……と言つたところで、まだその方は相談の上でなけりやあ分からないが……

男　へえ。ぢやあ、なんですね。あなたが助けると思つて、一緒にはひつてくれと仰しやるんですね。

主人　そ、そ、さうだ。

男　賴むからはひつてくれと、かう仰しやるんですね。

主人　そ、そ、さうだ。

男　（非常な決心でもしたやうに）宜しい。はひりませう。はひつて上げませう。武士は相見たがひだ。一つ俠氣を出して、はひりませう。

主人　はひつてくれるか。それはありがたい。

男　その代り、御主人、あつしは息張りますぜ。さうへいへいはしてゐませんぜ。

主人　好いとも。構はないとも。君は僕の友達のつもりでゐれば好い……さうだ。昔の友達で、久しぶりで會つたことにしようぢやないか。

男　でも、この風ぢやあ……

主人　事業に失敗したんだとか何とか言つときやあ好いよ——そこは女は單純だからな。

男　成程、分かりました。

主人　おやあ、聞けるよ。

男　ようがす。

主人　もう友達のつもりだよ。

男　心得てゐます。

　主人、勢よく玄關の硝子戸を明ける。

主人　（大聲に）おい。千代子、千代子。今歸つたぞ。

　ばたばたとスリツパで人の駈けて出る音。

主人の妻　（いきなり泣聲を出す）まあ、あなた、もう何時だと思つてらつしやるの。もう一時半ですよ。

主人　しつ、しつ。靜にしてくれ。お、お客を連れて來たんだから。

妻　（ヒステリツクに）お客。女のお客ですか。

（わざと大きな聲で）また藝者が送つて來たんですか。いつか見たいに。

主人　さうぢやない、さうぢやない……なんだつて、そんな大きな聲をするんだ……友達だよ……友達を連れて來たんだよ。

妻　へえ、お友達。お友達がこんな時間に入らつしやるんですね。へえ。變ですわね。きつと女のお友達でせう。（聲が又大きくなる）藝者でせう。藝者よ。きつと藝者だわ。いや、いや、いや。そんなものを内へ入れるのは。ここは神聖な家庭よ。料理屋や待合ぢやあないことよ。

主人　さうぢやないと言へば。（短い間）昔の友達に偶然そこで會つたんだ。ひどく零落してるんだ。その身の上話やなんかを聞いてゐたんで、遲くなつたんだ。濟まない。

妻　え。宴會は何時にお濟みになつたの。

主人　宴會か。宴會は、その、十一時過ぎに濟んだ。

妻　それから、今までどこに入らしたの。

主人　だから、その、友達に會つて。

妻　それから。

主人　それからつて……それから直ぐずつと内へ帰つて来たのさ。

妻　それにしちやあ遅過ぎるぢやありませんか。

主人　だつて、身の上話や何かを……

妻　身の上話を往来でお聞き遊ばしたの……

主人　うむ……そりやさうさ……往来で聞いたのさ……

妻　なぜ、直ぐ内へお連れしなかつたの。

主人　それが、その、なんだよ。あんまりひどい装をしてゐるんでね……

妻　お友達なら、どんな装だつて構はないぢやありませんか。

主人　大きにさうだ。だが、その、あんまり……

妻　（少し柔らいで）なんだか、信じられないわねえ。あなたは嘘つきだから。

主人　まあ、なんとでも言ふさ。人を見りやあ直ぐに分かることなんだから（間）おい。おい、君、構はないからはひり給へ。待たせて済まなかつた。

男　もう失敬しよう。時間が遅いから。

主人　遅いつたつて、もう今夜どこへ行けるもんか。まあ今夜は僕のところでゆつくりするさ。昔話で夜を明かさうよ。

男　え……うむ。

妻　（すつかり心の柔らいだ様子で）まあ、あなた、お上りなさいまし。

主人　妻も折角ああ言ふんだ。上がつてくれ給へ。どつちにしたつて、今夜はもうしやうがないよ。

男　さうか。ぢやあ、まあちよつと上がらして貰

主人　いや、毎度のことさ。

男　旦那、よつ程景氣が好いんですね。羨ましいなあ。

主人　冗談ぢやあない――唯、會社などに關係してると、やつぱり宴會なぞに引つぱり出されるんでね。

男　自分が引つぱり出す方ぢやありませんか。さうして、酒で株主を盛りつぶして……

主人　おい、おい。飛んでもないことを言ふぢやないか。

男　何を言つたつて、今夜はあつしがあなたの救ひの神ですからね。

主人　（笑ふ）そりやあ、さうだ……どうも君にやお歒はんよ。

（妻、來る。）

主人　いや、毎度のことさ。ふかな。

主人　勿論だ。さあ。上がり給へ。上がり給へ。（妻に）千代子、ウヰスキがまだあつた筈だ。あれを二階へ持つて來てくれ。

妻　ええ、直ぐ持つて參りますわ。でも、お肴がなんにもありませんけれど。

主人　きのふ貰つた千枚漬はどうだ。

妻　さう、さう、すつかり忘れてゐましたわ。（男に）あなた、ちよいと御免遊ばせ。（妻、去る）

主人　さあ、こつちへ來給へ。女中が寢ちまつたんで、なんにも御馳走が出來んよ。（急に聲を低くする）おい。君はなかなか好い役者だ。うまくばつを合してくれたんで、忽ち奥方の御機嫌が直つてしまつた。

男　旦那、随分とつちめられてゐましたね。

妻　あなた、これで宜しいのでございますか。

主人　うむ、それ、それ。（男に）どうだ、君、相變らずやるんだらう。ヰスキはどうだ。

男　ヰスキ、ありがたいな。この頃は電氣ブランばかり飮んでるんでな。

主人　おい、おい。女房の前でそんなことを言ふな。

男　いや、これは大しくぢり。

妻　あの、電氣ブランといふのはどんなお酒なんでございますの。

主人　まあ、そんなことはどうでも好いから、早くついでお上げ。

男　や、どうも、ありがたう。もう澤山です。おつと、こぼれた。勿體ねえ。

主人　肴がなんにもなくて氣の毒だ。京都から送つて來た千枚漬で我慢してくれ給へ。

男　千枚漬。おれはそんなものを食つたことはねえ。

主人　まあ、一つやつて見ろ。

男　（食べる）うむ、こいつあうまい。こりやあ素敵だ。

主人　なあ、千代子。小學校時分からの友達なんだが、もう十四五年も會はなかつたんだ。昔馴染に會ふのは嬉しいもんだよ。

妻　それはねえ、ほんとに。まあ、どんなにか。

主人　長く臺灣の方へ行つてゐたんだが、不幸續きでね。どうも氣の毒な男さ。

男　もうその話はよせよ。おれは臺灣なんか知らねえよ。

主人　分かつた、分かつた。まあ、もう一杯飮め。

（同）だが、不思議さなあ。おれがあの時間にあすこを通らなけりやあ、或はもう一生會はずにしまつたのかも知れなかつたんだからなあ。

男　全くだ。そりやあ全くだ。

妻　ほんとに不思議な御縁でしたわねえ。

主人　こいつなんかは、よくおれの歸りが遲い遲いつてぶつぶつ言ふが、歸りが遲けりやあこそ君にも會へたんだ。なあ、君。

妻　あら、なにもそんな皮肉をおつしやらなくつたつて好いわ。

男　いや、おむつまじくて結構だよ。僕などは女房緣も子供緣も薄くて、いまだに家らしい家を持つてゐないんだからなあ。

主人　いや、それはてんでの運命だよ……おう、大分いけるな。どうだ、もう一杯。

男　ありがてえ。

主人　ところで、例の求職の一件だがな。

男　求職……ああ、さう、さう。求職、求職。それが大事なこつた。

主人　僕の方の會社でよけりやあ、いつでも世話をするぞ。

男　さうか。そいつはありがたいな。役目はどんなところだ。

主人　工場の監督だ。

男　そいつは好い。その方なら多少經驗があるから。あしたからでも好いか。

主人　あした、兎に角。一遍會社の方へ來て見ないか。

男　ああ、行くとも。だが、一體、君の會社はどこさ。

妻　あら、まだ御存じぢやなかつたんですか。

主人　（笑ふ）　さう、さう、まだ言はなかつたんだ。あんまり話がいちどきになつちまつたもんだから。（男に）　なんだよ、君。丸ビルの八階にある極東紡績だ。工場は中野だ。

男　ああ、極東紡績か。さうか。君はあすこの重役か。

主人　重役つて程のものぢやない。やつぱり一箇のサラリイマンさ。

男　嘘を言へ。（妻に）　奥さん、はばかりはどちらです。

主人　玄關の前を右だ。

男　さうか。

妻　御案内いたしませう。

男　（もう少し醉つてゐる）　いや、勿體ない、勿體ない。分かります、分かります。

主人　分かるか。

男　分かる、分かる。

（男、去る）

妻　（聲を潜めて）　あなた。あれ、ほんとにあなたのお友達。

主人　まだそんなことを言つてるのか。話を聞いたつて分かるぢやないか。疑ひ深い奴だな。

妻　だつて、隨分ひどい裝ね。まるで勞働者見たいよ。

主人　現在の境遇が勞働者なんだから爲方がない。それに勞働者だつて現代では決して莫迦には出來んよ。

妻　そりやあ、さうですけれど、なんだか人相の悪い人だわ。人の顔ばかりじろじろ見てるの

ね。

主人　いや、顔で人は分からないよ。あんな正直な奴はないんだ。つまり正直過ぎて失敗したんだね。

妻　まあ、そんな方なんですの。

主人　どうして、昔はなかなか鳴らした男なんだ。

妻　まあ、さうなんですの。

〔男、來る。〕

男　やあ、失敬、失敬。

主人　分かつたか。

男　分かつた、分かつた。

主人　どうだ。腹はすいちやゐないか。

男　腹よりやあ酒だ。どうも實にうまいヰスキだな、これは一體、こいつはなんてヰスキだ。

主人　ヰクトリア・バットさ。氣に入つたら、もう一杯、どうだ。

男　いや、ありがたう。大分もう醉つたよ。

主人　いや、まだ大丈夫だ。ちつとも顏に出てゐやしない。

男　高いんだらうな。

主人　なにが。

男　このヰスキさ。

主人　たいして高くもないが、まあ僕の身分にしては少し贅澤なんだ。

男　會社ではいくら貰つてる。

主人　誰が。

男　君さ。

主人　おれ。

男　うむ。

主人　おれの貰ふものは知れたもんだよ。

男　重役の君が知れたもんだとすると、工場の監督なんかひどいもんだらうな。

主人　そりやあさういつたもんでもないよ。僕の會社では工場の方を優遇するのが昔からの方針だからな。

男　當てにはならないな。

主人　いや、當になるよ。

男　ボオナスはどうだ。

主人　ボオナスだつて、僕等の方は知れたもんさ。

男　嘘つき。

主人　嘘ぢやないよ。

男　銀行の通帳を見せろ。

主人　そんなものはないよ。いつも一杯一杯で暮らしてるんだ。なあ、千代子。

男　でも、時々債鬼が家まで追つて來るさうぢやないか。

主人　よせよ……おい、千代子。お前が餘計なことを言ふもんだから……

男　は、は、は、は。隠すより現るるはなしか。(間) おい。あすこにある、あの立派な物はなんだ。

主人　あれか。あれは蓄音器だ。

男　蓄音器か。たいしたもんだな。百圓もするか。

主人　あれはその、月賦で買つたんで、ちと高い――五百圓だ。

男　五百圓……贅澤なもんだな。

主人　贅澤だと言はれりやあ、それまでだが、家内は始終一人で留守居をしてるんでな。

男　成程、奥さんのおもちやか。愈以て贅澤だが。

主人　まあ、さう堅いことを言ふな。

男　ぢやあ、もうなんにも言はないから、一つその蓄音器といふ奴を聞かしてくれ。

主人　だけど、君、もう二時だ。おそいよ。

男　二時だつて、何時だつて構ふもんか。

妻　でも、御近所が、ねえ、あなた。

男　構やしませんよ。奥さん。ぐづぐづ言つて來たら、僕が出て上げます。

主人　ねえ、君、あしたの朝にし給へ。あしたの朝に。

男　いやだ、いやだ。どうしても聞く。おれは言ひ出したことは後へは引かないんだ。

主人　だつて、君、この夜半に……

男　（脅すやうに）よし。聞かせないんだね。愈聞かせないんだな。

主人　まあ、さう怒つちやいかんよ。しやうがないなあ。ぢやあ、聞かせるよ。聞かせるから、まあ坐つてくれ給へ。

男　よし。ぢやあ、浪花節を一つやつてくれ。

主人　浪花節。君、そんなものは僕んとこにありやしないよ。

男　ぢやあ、安來節でも好い。

主人　それもないよ。

男　なんにもねえんだな。

主人　僕んとこのは西洋のものばかりだよ。

男　西洋のものばかりだと。樂隊か。好いや。我慢してやらあ。樂隊でも好いから。一つ景氣の好い奴をやつてくれ。

主人　ぢやあ、ジャズをかけよう。ジャズを。

男　なんでえ、ジャズてえのは。

主人　ダンスだ。賑かなもんだ。

男　ダンスか。そいつあ面白えだらう。やつてくれ。なんでも好いから景氣をつけてくれ。すつかり好い氣持になつちまつた。

主人　好いか。始めるぞ……

　蓄音器が鳴り出す。

男　（笑ふ）面白え、面白え……こりや、こりやとおいでなすつたな……あら、こりや、こりやと……（手を拍く）

主人　おい、君、さう踊つちやあ、あぶないよ。

男　大丈夫……大丈夫……ああ、こりやこりやと……

　圓盤が四分の三ぐらゐ進んだかと思ふ頃、突然消防自動車のサイレンとベルの音がする。

　（三人とも氣がつかない）

　またサイレンの音、ベルの音。

主人　おや、火事だな。（蓄音器を途中で止める）

　消防自動車がサイレンとベルを鳴らしながら、二三臺續いて、近所の大通りを通る音。

妻　火事ですわ。

男　うむ、火事だ。

妻　近いわ。

主人　なあに、大丈夫だ。（窓をあける音）見えやしないまつ暗だ。

　またサイレン。車の響。

妻　でも、大變消防が來ますわ。

　遠くで太鼓の音、火事の起つた場所を知らせる聲。

男　なんとか言つてるぢやねえか。

　太鼓。町の名を呼ぶ聲。

主人　分からない。

妻　寺町通りつて言つてるやうぢやないの。

太鼓、少し近くなる。併し、町の名を呼ぶ聲ははつきりしない。

サイレン。ベル。

男　寺町通りぢやねえ。だが、はつきり分からねえ。

主人　今に近くへ來ると分かるよ。

太鼓、遠くなる。

妻　あら、行つてしまひましたわ。

サイレン。ベル。

男　ちよいと、おれが行つて見て來よう。

主人　君は地理が分かるまい。僕が行つて來る……大抵、大丈夫だとは思ふんだが。

遠くで太鼓。

妻　太鼓さへ來てくれりやあ分かるのに。

男　いや、僕が行つて來よう。角に交番があつたやうだ。あすこへ行きやあ分かるだらう。

主人　僕が行くよ。

男　いや。僕が行くよ。

主人　君はまあ家にゐ給へ。

男　いや、おれが行くつたら。

主人　君はお客だ。

男　お客も糞もあるもんか。

（男、二階を駈け降りる。）

サイレン。ベル。遠く太鼓の音。

主人　たうとう行つちまつた。をかしな男よ。

妻　ほんとに面白い方ですわね。

主人　正直で可愛いところがあるよ。

妻　ほんとにねえ。

（玄關の方で人の聲がする。）

聲　もし、もし。表があいてますが、誰か起きてい

まァねえ、注意して下さいよ。

主人　（妻に）おい、巡査だ。

妻　（[illegible]をかけながら下へ降りる）はい、はい。ありがたう存じます。起きてをります。今ちよつと火事を見に出かけたもんですから。

巡査　さうですか。注意して下さいよ。この頃この邊は物騒ですから。

妻　ありがたう存じます。

　　玄關の戸をしめる音。巡査の去る靴の音。

　　暫く間。

妻　おや。おや。（だんだん大きな聲になる）あら。あら、あら。あなた。あなた。早く來て下さい。あなた、あなた。

主人　（二階から驅け降りる）なんだ、なんだ。大きな聲で。

妻　た、た、大變よ。今のは泥坊よ。

主人　今の巡査か。

妻　さうぢやなくつてよ。あなたのお友達がよ。

主人　おれの友達。

妻　そら、今の。そら、火事を見に行つた。

主人　え……あれが泥坊だと。

妻　ほら、あなたの靴も外套も鞄も、ここへ置いたのがみんななくなつてるわ。

主人　しまつたあ……奥はどうだ。（茶の間へ驅けてはひる）わあ、大變だ。簞笥がみんな空つぽだ……

妻　あら、あら、あら。

主人　（悲痛に）しまつたあ……しまつたあ……

　　遠く消防のサイレン。犬の吠える聲。

註「ト」書の括弧に（　）〔　〕の二種を用ひたり。（　）は直接放送に關係あるもの。〔　〕は參考上のものに過ぎず。

圓タクの悲哀　一幕

人物

圓タクの運轉手
客A
客B
客C
自家用自動車の運轉手
毀れた自轉車を持つた小僧
浴衣がけで赤ん坊を抱いた男
警部
交通巡査

他の巡査

場所　東京

時　現代

（一）

或往來。

圓タクが一臺とまつてゐる。

車の中には男の客が二人乘つてゐる。

圓タクの運轉手が、車を降りて、ジヤツキイでごつとんごつとんと前の車輪の一つを上げてゐる。タイアのスペエアが地面の上に丸く、太く横になつてゐる。いろいろな修繕用具がそこらに散らかつてゐる。

客A　（八字髭を生やしてゐる。麥藁の均一帽を冠つてゐる。車の上から首を外へ出す）　おい、君、まだか、

隨分待たせるな。

運轉手　濟みません。もうぢきです。（ジャッキイなごつとんごつとんとやる）

客B　（禿頭、赤い鼻、片手に鳥打帽子を、片手に大きな懷中時計を持つてゐる。Aの向うから顏を突き出す）おいおい、君、五分といふ約束だぜ。もう七分たつてしまつた。

運轉手　もうぢきです。もうぢきです。（ジャッキイなごつとんごつとんとやる）

客A　（Bに向ひ、わざと大聲に）パンクの修繕は五分と相場がきまつたもんだ。そのくせ五分で直つたためしはない。先づ十五分は大丈夫かかるね。

客B　おい、君、それぢやあ間に合はないぜ。なにしろ先方はせはしい人なんだからね。けふの約束におくれたら、もう何年先きに會へるか分らないんだ。

客A　（心配さうに）そりやあ、さうだ。若し會へないとなると、死活問題だ。そこで二萬か三萬出して貰はなければ、折角の計畫も畑になつてしまふんだからな。

客B　さうとも。さうとも。三年苦心の結晶たる自動理髮機も特許權讓り渡し位が落ちで、儲けはみんな人の懷にはひつてしまふのだ。（時計を見る）降りよう、降りよう。降りて他の圓タクを探さう。もうとても間に合やしない。

客A　うん、降りよう、降りよう、正直に待つてゐるだけ、こつちが莫迦だつた。

（二人、車を降りかける。）

（運轉手、車體を上げたり、タイアを代へに掛

つてゐる。）

運轉手　旦那、旦那、そんなことを言はないで、乘つてて下さいな。もうこれをはめ替へすれば濟むんですから。

客A　だめだ。だめだ。（車を降りてしまふ）

客B　（車を降りて、時計を運轉手の鼻先へ突きつける）五分の約束ぢやないか。見給へ。もう十分たつてゐる。

運轉手　（手をやめないで）濟みません。でも、もうほんとにぢきなんですから。車が出來たら、スピイドを出して、丸の内まで十分で行きますから。

客A　だめだ、だめだ。こんな車でそんなに早く走れるものか。

客B　そんなことをして、交通巡査にでもつかまつたら、餘計時間がかかるばかりだ。（五十錢銀貨を出す）まだ一哩も走つてゐないんだから、唯でも好いんだが、それもあんまり氣の毒だ。こつちの損とあきらめて、これだけ上げるから。

運轉手　（銀貨を受けとる）そりやあ、旦那、殺生だ。けさからあぶれ通しで、やつとこれが口明けなんですから、どうか丸の内まで乘つて下さいな。ほんとにもう直ぐなんですから。

客A　（Bに）おい、行かう、行かう。それで結構だ。（上手を見る）お、向うに一臺來た。（手を上げる）おい、待つた。（走り去る。Bもあとを追ふ）

（運轉手一人取り殘される。）

運轉手　（呆れたやうに二人の行方を見る。それから、手の内の銀貨を見詰める）おや、おや、たつた一

分か。（銀貨を衣兜へ入れる）爲方がねえ。こつちが惡いんだ。

（默つて、タイアをはめ替へる。ジャッキイを外す。そこらに散らかつたものを、それぞれ車の中へしまふ。それから、スタアチング、ハンドルを廻して、運轉臺に登り、「市内全部一圓」と書いた札を前の硝子板にかけ、ハンドルに手をかける。爆音がしない。）

運轉手　おや。

（車を降りる。ガソリンタンクをあけて見る。）

運轉手　なあんだ。ガソリンが切れてゐやがらあ。

（衣兜を探る。さつきの五十錢銀貨を出す。）

運轉手　おや、おや、この二分もふいか。

（車の中からガソリンの鑵を取り出して、あたりを見廻し、やがて上手へはひる。）

（舞臺端に、下手で物騒がしい人聲がする。）

（浴衣がけで、帽子は冠らず、八字髭を生やした、色の黒い男が、片手に當歳ぐらゐの赤ん坊を抱いて、片手で自動車の運轉手らしい男を引きずつて來る。この運轉手は前の圓タクの運轉手とは違つて、身なりも立派で金モオルで出來た紋のついた帽子を冠つてゐる。そのあとから、毀れた自轉車を引きずつて、シャツ一枚に半ズボンの小僧が、ひどく丈の細長い板を三四枚擔いで來る。）

運轉手　何をするんだ。何をするんだ。

浴衣の男　まあ、好いから、こつちへ來い。――ここは往來の邪魔だ。

運轉手　話はもう分かつてるんだ。何も君が口を出すことはないんだ。

浴衣の男　ばかを言へ。相手が子供だと思つて、ごまかさうとしたつてだめだぞ。おれはちやんと見てゐたんだ。第一手前は後から來ながら、

ラッパを鳴らさねえんだ。だけどこの小僧さんの方ぢやあ、自動車の來たのを知つて、左へよけたんだ。それだのに、手前はわき見をして來やがつたもんだから、その板に突つかかつたんだ。さうして、慌てやがつて、小僧さんの飛び降りた自轉車の上へ車をのし上げやがつたんだ。小僧さんは怪我一つしてやしねえ。それだけでも小僧さんの不注意でなかつたことは分からあ。

運轉手　だつて、あんな長い板を擔いで、自轉車へ乗るなんて……

浴衣の男　長い板だつて、短え板だつて、主人に言ひつけられりやあ、爲方がねえや。なあ、小僧さん。兎に角、自轉車をあんなにめちやめちやにしてしまつて、挨拶一つしねえで行くつて法はねえ。

運轉手　だから、挨拶はしたぢやないか。町所番地をちやんと聞いといた。

浴衣の男　相手の町所を聞いたつて、自分の方の町所を言はなきやあなんにもなりやあしねえ。全體手前はどこの運轉手だ。

運轉手　そんなことを言ふ必要はない。おれの主人は立派な方だ。

浴衣の男　立派な方だつて、名前はあるんだらう。名なしの權兵衞ぢやあるめえ。

運轉手　そりやあ名前はあるさ。

浴衣の男　それぢやあ、その名を言ひねえ。

運轉手　そりやあ言はれない。主人の名を出すことは出來ない。主人に罪はないんだから。

浴衣の男　罪はねえかも知れねえが、手前のやうな運轉手を使つてる以上は、主人にも責任がね

えとは言はせねえ。さあ、主人の名を言へ。

運轉手　聞いて驚くな。

浴衣の男　誰が驚くものか。

運轉手　財政大臣の鳥山さんだ。

浴衣の男　なんだ、あのモラ鳥山か。滿韓銀行の救濟に政府から金を出させようとした鳥山か。人民が膏血を絞つた金を實業家の事業の失敗の穴埋にしようと企らんだ鳥山か。

運轉手　失敬なことを言ふな。

浴衣の男　何が失敬だ。おれはちやんと新聞で讀んで知つてるんだ。おれの言ふことが失敬なら、天下の新聞はみんな失敬だ。成程さういふ紋の運轉手だから、かういふ賤しいことをしやがるんだな。

運轉手　（相手が悪いと見て、少し折れる）まあ、兎に角けふは主人の迎ひに行くんだから、やつてくれ給へ。相手の小僧さんも承知してくれたんだ。主人の名前まで出したんだ。今夜にも小僧さんの主人のところへ、挨拶に行くから……

浴衣の男　いけねえ、いけねえ。だめだ、だめだ。（小僧に）第一、お前がいくぢがなくていけねえ。言ふことに飽くまでも言ふが好いんだ。金モールの紋などに驚くねえ。

運轉手　おい、おい、君。何もそんなにけしかけないだつて好いぢやないか。二人の間に話はついてるんだ。第三者の君が何も口を出すところはないんだ。

浴衣の男　第三者だと。何が第三者だ。見てゐたのはおれ一人だ。おれが手前のわき見をしてゐるところを見てゐたんだ。何が第三者だ。

運轉手　もう好いから引つ込んでくれ給へ。話は當事者の間でするから。

浴衣の男　引つ込めとは何だ。おれが見てなくて、誰が見てゐたんだ。おれが證人だ。證人がゐなくて話が出來るか。

運轉手　だから、僕は挨拶に行くと言つてるぢやないか。挨拶に行つて、自轉車の修繕費を出しやあ、それで好いんだらう。

浴衣の男　ばか。それだから手前たちは人間ぢやあねえつて言ふんだ。金せえ出しやあ、なんでも濟むと思つてやがる。人一人轢き殺したつて、金さへ出しやあ好いと思つてやがるんだ。

運轉手　ぢやあ、どうすりやあ好いつて言ふんだ。

浴衣の男　分かり切つてらあ。手前と手前の主人と二人で、この小僧さんの家へあやまりに行つて、さうして自轉車の新しいのを一臺買つて返すんだ。

運轉手　そ、そ、そんなばかなことが出來るもんか。

浴衣の男　何がばかなことだ。手前んとこの主人は、どうせ今に國民全體にあやまらなきやならねえ時が來るんだ。小僧さんの一人にあやまるぐらゐなんでもありやしねえ。

運轉手　なんといふ不禮なことを言ふんだ。かりにも一國の大臣のことを……

浴衣の男　大臣だらうが、宰相だらうが、資本家の鼻毛を讀んで、國民の膏血を……

運轉手　默らないか。

浴衣の男　默らねえ。

運轉手　ぢやあ、勝手にしやべつてゐろ。おれは

もう行くから。（行きかける）

浴衣の男　待て。（運轉手の腕を抑へる）

運轉手　何をするんだ。（腕を振り切る）

浴衣の男　何がなんだ。（摑みかからうとする、赤ん坊が泣き出す）ええ、畜生。（あたりを見廻す。圓タクの自動車に目をつけ駈け寄つて、その中へ赤ん坊を置く。直ぐ戻つて来る）やい、どうしても逃げる氣か。

運轉手　逃げやしない。用が濟んだから行くんだ。（又行きかける）

浴衣の男　出てと言つたら出たねえか。

運轉手　また何か用があるのか。

浴衣の男　うむ、用がある。

運轉手　どういふ用があるんだ。

浴衣の男　かういふ用があるんだ。（と言ひながら、いきなり運轉手の横つ面をはる）

運轉手　何をしやがるんだ。（浴衣の男に組みつく）

（格鬪。）

（自轉車の小僧、毀れた自轉車を引きずつて、逃げる。）

（交通巡査が一人、飛んで来る。二人の間へ割つてはひる。）

巡査　待て、待て、待たんか。往來で一體、どうしたといふことだ。

運轉手　僕は烏山財政大臣の運轉手ですが、こいつが大臣に對して、あんまり亂暴なことを言ひますんで……

浴衣の男　さうぢやねえ。こいつが小僧の自轉車をめちやめちやにしやがつて、挨拶一つしやあがらねえから……

運轉手　失敬な奴だ

浴衣の男　狡猾な奴だ。
運轉手　官吏侮辱だ。
浴衣の男　人權蹂躪だ。
巡査　さう兩方で一度に言つては分からん。一體喧嘩は何から始まつたんだ。
運轉手　こいつが大臣の惡口を……
浴衣の男　こいつが小僧の自轉車を……
巡査　分からん、分からん。さう一緒に言つては分からん。まあ、兎に角、二人一緒に署まで來い。
浴衣の男　ええ、行きますとも、行きますとも。警察へ行つて黑白をつけて貰ひます。
運轉手　（巡査に）わたしは大臣を迎ひに上野の精養軒まで行かなければなりませんから、お許しを願ひます。
巡査　そんなわけにはいかん。君も一緒に來なければならん。
浴衣の男　さうだ、さうだ。
巡査　（浴衣の男に）お前は默つとれ。
（巡査、二人を連れて下手へ行きかける。）
浴衣の男　待て。小僧さんはどうした。（あたりを見廻す）
巡査　小僧とはなんだ。
浴衣の男　この運轉手が車をぶつけたんです。
巡査　怪我でもしたのか。
運轉手　怪我なんかしやしません。
浴衣の男　その代り、自轉車を一臺めちやめちやにしてしまつたんです。（あたりを見廻す）ほんとに、しやうがねえなあ、あいつどつかへ行つちまやがつて。

巡査　どうも事件が餘程複雜してるやうだ。兎に角、萬事署で調べることにしよう。さあ歩いた、歩いた。

（二人、まだ言ひ爭ひながら下手へはひる。巡査、そのあとから二人を押すやうにしてはひる。）

（圓タクの空車だけが殘る。車の中へ置かれた赤ん坊、いつか泣きやんでゐる。）

（圓タクの運轉手、汗を拭きながら、ガソリンの罐をぶらさげて、喘ぎ喘ぎ歸つて來る。）

運轉手　ほんとに、こんな不便なところつてありやしねえ、ひどい目に會はせやがつた。

（ガソリンキヤツプを明けて、ガソリンを入れる。それから、運轉手臺へ乘つて、ハンドルに手をかける。爆音が聞えて來る。車が上手に走り出す。）

（二）

他の往來。

前場の圓タクが、下手から上手へ走つて來る。上手から太いズボンをはいたモダンボオイ（客C）が出て來て、ステツキを上げる。

圓タク、とまる。

運轉手、腰かけた儘、手を伸ばして、車の戸をあける。

手早く均一札を外す。

客C、車の中へはひらうとして、中の赤ん坊に氣がつく。）

客C　おい、君、君。

運轉手　え。

客C　こりやあ君の赤ん坊かい。

運轉手　赤ん坊。（後を振り返る）おや。

客C　君の赤ん坊ぢやないのか。

運轉手　（車を飛び降りる。赤ん坊を見て、首を傾げる）を、か、し、い、なあ。

客C　僕は急ぐんだ。ぢやあ、他の車にしよう。（行きかけろ）

運轉手　まあ、待つて下さい。（考へる）をかしいなあ。（氣がつく）ああ、さうだ。さつき留守の間に誰か來て乘てて行きやあがつたんだ。（客Cに）濟みません。歸りに警察署へ屆けますから、御迷惑でも、この儘お乘りなすつて。

客C　そりやあ、いかんよ。僕は掛かり合ひになるなあ厭だ。

運轉手　ですから、旦那の行先まで行つて、それから歸りに屆けますから。掛かり合ひになりつこはありませんよ。

客C　でも、途中で泣かれたりなんぞすると、僕は赤ん坊の取扱に馴れてゐないから困るよ。

運轉手　ぢやあ、一圓のところを八十錢に割引しますから、我慢して行つて下さいな。

客C　金はどうでも好いんだが、赤ん坊と合乘は困るよ。僕は急ぐんだから。

運轉手　赤ん坊が乘つてたつて、早さに變りはありませんよ。どちらへ行らつしやるんです。

客C　なに、日比谷公園の入口まで行つて貰へば好いんだが、約束の時間があるんでね。

運轉手　ですから、八十錢で、大急ぎで參りますよ。

客C　（考へて）やつぱりよさう。どうも掛かり合ひになりさうだ。（行きかけろ）

運轉手　待つて下さい。けさからまるであぶれつちまつてるんです。助けると思つて、乘つて下さい。

客C　そりやあ、氣の毒だが、僕の方も大事な用

件があるんだ。若し途中で事件でも起ると困るから、失敬するよ。（どんどん行つてしまふ）

（運轉手、ぼんやり青年の行方を見詰めてゐる。やがて溜息を一つ吐いて、車の中へはひり、赤ん坊を抱いて出て來る。）

運轉手　弱つたなあ。（間）　けふはまあ、何といふ悪日だ。（間）　どこの奴が乘てて行きやあがつたんだらう。（あたりを見廻す）　この儘、ここいらへ乘てて行つても好いわけだが、それも可哀さうだしと……（赤ん坊をぢつと見る）　にこにこ笑つてやがる。（間）　いづれ、あの近所の奴に違えねえが、ひどい親もあつたもんだ。（間）ほんとにまあ、けふは何て間が悪いんだ。（間）兎に角、あの近所の警察へ届けることにしよう。さうしねえことにやあ、商賣も何も出來やしねえ。情ねえことになつたものだ。

（赤ん坊を車の中に置き、ドアを締め、自分は運轉臺に登り、ハンドルに手をかけ、梶を曲げて一廻りし下手へ走り去る。）

（三）

或警察署の内部。

卓が一つ。

卓の向うに警部が一人坐つてゐる。

それと向ひ合つて、前の場の浴衣がけの男と自家用自動車の運轉手とが坐つてゐる。

前の場の交通巡査が、わきに立つてゐる。

警部　（運轉手に）では、あなたは歸つて宜しい。いづれ、あした通知をするから、その節は又出頭して貰ひたい。

運轉手　（立つ）どうもお手數をかけて濟みませんでした。では。（警部と交通巡査とに禮をして、去

ろ）

浴衣の男　（立つ）あつしももう歸つて宜しうございますか。

警部　お前はも少し、そこに待つてをれ。今指物師の小僧を呼びにやつたから。

浴衣の男　ぢやあ、あの運轉手もここにゐなきやならねえわけでせう。

警部　さうだ。併し。あれはけふ大臣の御用があるのだから……決して逃亡の恐れはない……又あしたにも呼び出せば好い。

浴衣の男　へえ……大臣の用があれば、どんな惡いことをしても、直ぐにかへして貰へるんですか。

警部　さう言ふわけではないが、もう事件は分かつてるんだし、大臣もさぞ待つてをられるだらうと思ふから。

浴衣の男　へえ。ぢやあ、大臣の御用は大切で、吾々平民の用事はどうでも好いんですか。

警部　さういふわけではないが、大臣は國家の…

浴衣の男　（遮つて）吾々平民の用事だつて大事ですぜ。けふは公休で休みですが、これでも一家のあるじだ。一家のあるじたる以上は……（と言ひかけて、急に何か思ひ出した樣子で、突然大聲を出す）あ、大變だ。

警部　（驚いて）どうしたのだ。なんだつてそんな大きな聲を出すのだ。

浴衣の男　（泣き聲を出す）大變だ、大變だ、大變だ、大變だ。

警部　（交通巡査に）この男は氣違ひか。

巡査　氣違ひではないやうです。相當理窟も分か

ろやうですから。

浴衣の男　ああ、大變だ、大變だ、大變だ、大變だ。

巡査　（浴衣の男の肩を叩く）　おい、どうしたんだ。しつかりしろ。

浴衣の男　（叫ぶ）　正坊、正坊、正坊を忘れちまつた。

巡査　どうしたんだ、どうしたんだ。

浴衣の男　（巡査に）　おまはりさん。お願ひですから、正坊を探して下さい。

巡査　正坊といふのはお前の子か。

浴衣の男　へえ、さやうで。掛替のねえ一人つ子で。

巡査　それをどうしたんだ。

浴衣の男　自動車んなかへ忘れて來たんで。

巡査　今の大臣の自動車の中へか。

浴衣の男　（手を振る）　さうぢやねえ、さうぢやねえ、圓タクん中へ置いて來ちまつたんで。

警部　なんだかちつともわけが分からんな。どうも少し異狀があるやうだ。松田巡査、少しあつちへ連れて行つて落ちつかせてやれ。警察醫にも見せ給へ。

巡査　はい。（浴衣の男に）　さあ、あつちでわけを聞くから。まあ、さう興奮しちやいかん。（浴衣の男の腕をとる）

浴衣の男　（叫ぶ）　ああ、正坊、正坊。大事な正坊。可愛い正坊。（巡査に腕をとられて去る）

（入れ違ひに他の巡査、登場。）

他の巡査　（警部に）　棄兒を屆けに來たものがありますが。

警部　棄兒

他の巡査　はい。

警部　こつちへ連れて來い。

他の巡査　はい。（去る）

（直ぐ、その巡査、前の場の圓タクの運轉手を連れて來る。運轉手、赤ん坊を抱いてゐる。）

警部　どうしたのだ。

運轉手　棄兒をお届けに參りました。

警部　どこに棄ててあつた。

運轉手　へえ、あつしの自動車の中に棄ててあつたんです。

警部　自動車の中へ。自分の自動車の中へ子供を棄てられて氣がつかなかつたのか。

運轉手　へえ。ちつとガソリンを買ひに行つた間に棄てられたらしいんで、ちつとも知らなかつたんです。

警部　ガソリンを買ひに行つたのはどこだ。

運轉手　ついあすこの交叉點のところで。

警部　氣がついたのは。

運轉手　稻荷町の通りで。

警部　そこから、ここまで引返して來たのか。

運轉手　へえ、こつちの近くの署の方が好いと思ひまして。

警部　鑑札を持つてるか。

運轉手　へえ。（直ぐ衣兜から鑑札を出す）

警部　（鑑札を見て）圓タクだな。

運轉手　へえ。

警部　（巡査に）松田巡査に今連れて行つた男をここへ連れて來るやうに言つてくれ給へ。

巡査　はい。（去る）

運轉手　（警部に）旦那、どうか、この赤ん坊を

受けとりなすつて、直ぐかへして頂きたいんですが……けふはいろんなことで、まるであぶれちまつてるもんですから。

警部　まあ、待て。ちと心當りがあるから。子供の親が分かれば直ぐにかへして遣るが、さもないと、一應はお前の身元も調べなければならんから。この頃はなかなか巧妙な犯罪があるからな。

運轉手　それは困りますね。この上警察に留められた日にやあ、あつしは干上(ひあが)つてしまひます。

警部　まあ、好いから、待つてをれ。

（「ああ、正坊、正坊。」と叫ぶ聲がする。やがて浴衣の男と交通巡査が現れる。）

（浴衣の男、圓タクの運轉手の抱いてゐる赤ん坊に目をつける。いきなり飛びついて、赤ん坊を奪ひとる。）

浴衣の男　ああ、無事でゐてくれたか。正坊や、正坊や。ああ、有難い。有難い。

警部　それはお前の子か。

浴衣の男　有難うございます。確にわたくしの子でございます。この通りなついてをります。

警部　それなら、その運轉手さんに禮を言はなけりやあいかんぞ。

浴衣の男　え、この運轉手さんが連れて來て下すつたんですか。どうも有難う。（懷からガマ口を出して中にあるだけの金をすつかり出す。そして、それを、運轉手の手に握らせる）なんともお禮の言ひやうがねえ。ほんの志だ。とつといてくれ給へ。有難う、有難う。

警部　（浴衣の男に）おい、おい。

浴衣の男　（夢中で）ああ、有難い、有難い、正

坊は運の好い子だ。ああ、有難い。

警部　（浴衣の男に）おい、おい。

交通巡査　（浴衣の男に）おい。

浴衣の男　（警部の方を振向く）へ。

警部　おい人のことに世話を焼くのも好いが、自分の子供を置き忘れるやうな間抜なことをするな。

浴衣の男　どうも濟みません。

警部　若し、この運轉手が氣がつかずにゐて、車からでも振り落されたら、どうするんだ。

浴衣の男　（すつかりしよげて）どうも濟みません。

警部　人の世話を燒くなら燒くやうに、先づ自分の始末からしてかかれ。

浴衣の男　どうも相濟みません。

警部　指物屋の小僧が來るまで、あつちへ行つて待つとれ。

浴衣の男　へい。

警部　もう大臣の惡口などを言ふ資格はないぞ。

浴衣の男　へい。

警部　松田巡査、あつちへ連れてつて、暫く待たして置け。

交通巡査　はい。

（浴衣の男、悄然と行きかける。）

運轉手　（警部に）わたくしはもう歸りまして宜しうございませうか。

警部　（鑑札を返して）宜しい。

運轉手　（手の内の金を示して）これは如何いたしませう。

警部　構はん。貰つとけ、貰つとけ。けふはあぶれてゐるんだらう。

運轉手　（浴衣の男に）どうも有難うございます。やつとこれで、けふの立前（たてまへ）になりました。

（浴衣の男、すつかりしよげて、罪を謝すやうに赤ん坊の顔を見る。）

（警部、顔を上げて笑ふ。）

（運轉手、にこにこしてゐる。）

――終

日田縣事件
五場

人物

水野正名　大參事
小河眞文　權大參事
川島澄之助
吉田足穗
太田茂
鹿野淳二
井上達也
下川巳之助
島田莊太郎
大鳥居菅吉
樋口良臣
篠本廉藏
木山岩之丞
川口誠夫
田中隆吉
青木喜太郎
柳瀬三郎
松村雄之進
寺崎三矢吉
太田要藏
今村圓兵衛
横枕覺助
中村彥次郎
師富進太郎

平　彦　助
以上久留米藩士
大　楽　源　太　郎
山　縣　源　吾
小　野　清　太　郎　（登場せず）
中　村　要　助
以上山口藩脱人
その他

時　代

明治四年三月

場　所

久留米城下

一

水野大參事役宅。夜。

（水野大參事、小河權大參事、床の間を後にして端坐瞑目してゐる。）

（川島、鹿野、島田、井上、大鳥居、太田、吉田、下川、青木、寺崎、篠本、樋口など、詰め寄るやうに、これを取圍んでゐる。）

鹿野　では、水野先生はどうしてもお出掛になるのですか。

水野　（大きく頷く）

井上　小河先生もお出かけになるのですか。

小河　（頷く）

篠本　どうしても、おやめになることは出來ませんか。

水野　出來ない。わしは東京を出る時から、もうその覺悟だつた。わしは人質になるつもりで國へ歸つて來たのだ。

太田　大鳥居や川島は先生のお供をして歸つて來

ながら、それに氣がつかなかつたのか。なぜ、船中でお留め申さなかつたのだ。

大鳥居　アメリカの飛脚船で横濱を出た時は少しも氣がつかずにゐたが、遠州灘あたりで、九州鎭撫總督の有栖川宮殿下が同じ船に乘つてをられるのを知つた時は、おれも驚いた。謂はば久留米征伐の宮樣が、久留米藩知事公の代理たる水野大參事と同船をしてをられたのだ。だが、同じ船に薩州の西鄕も乘つてゐた。水野先生は西鄕に事情を述べて、前後曲直のあるところを監視して貰ひたいと言つた。西鄕もそれは氣の毒だ同感に堪へないと言つて、及ぶだけのことはしようと請合つてくれた。おれは幾分それで安心した。まさか、こんなことにならうとは思はなかつた。

吉田　問題は山口藩の脫人を保護したことにある。だが、その巨魁たる大樂源太郞はもう久留米の領內を逃げてしまつた。もう吾々に責任はない筈だ。

下川　脫人を保護したのは、吾々の同志だからだ。尊王の大業は完成して、幸に王政復古にはなつたが、まだ攘夷の一重大事が殘つてゐる。新政府はいくぢなくも幕政を踏襲して外人の侮辱を甘んじて受けてゐる。然るに、山口藩は常備軍を解隊して、新政府に媚を呈してゐるのだ。馬關海峽に聯合艦隊と戰つた往年の意氣はどこにある。志ある者が國を逃れて、常備軍の復興を謀るのは當り前のことだ。それを暴徒とは何事だ。おれは大樂を國外へ追ひ出したことさへ心外に思つてゐるのだ。

青木　おれ達は唯無暗やたらに攘夷を稱へるのではない。開港が悪いと言ふのではない。文明の輸入を拒むのではない。長崎にゐるおとなしい阿蘭陀人までを追拂へといふのではない。兵力を以て無理無體に開港を迫つて來た奴等の壓迫に屈從する必要はないと言ふのだ。徳川幕府は彼等に對してどういふ處置をした。城下の盟といふ屈辱を甘んじて受けたではないか。假に結んだといふあの條約は、國を辱め、國體をも顧みざるものだ。天下の輿論はこれを許さない。幕府はこれが爲に失脚して、終に政權返上となつたが、幕府が殘したあの屈辱條約は依然として元の儘だ。王政復古した以上、若し攘夷が出來ないと言ふのなら、一日も早く條約の改正をして國體を全うしなければ、畏れながら先帝の遺詔にも背き奉り、外夷に關して斃れた勤王志士の靈に對しても顏向けがならんと言ふものだ。

篠木　さうだ、さうだ。條約の改正だ。だが、その條約の改正は樽俎の間に折衝しようとしても、到底それは望み得られんことだ。名のあるところに從つて、國力を外に展べるのだ。それが第一だ。然るに、今の新政府は、内政にのみ重きを置いて、一切外を見ない。その結果、外に對しては常に畏縮して、口も利かなければ、手も出さない。屈從を屈從とも思はずに、ひたすら外人の鼻息のみ窺つてゐる。山口藩の如きはその雄なるものだ。

鹿野　吾々が山口藩の脱人を庇護したのは、國家を思ふ至誠からしたことだ。その國家の忠臣を國家が攻めるといふのは何事だ。

井上　いや、討伐軍は決して國家ではない。山口藩が國家を示唆したのだ。

太田　戰つて斃れるまでも、兩先生を渡すことは出來ん。

吉田　斷じて出來ん。

（一同、騷然。）

小河　待て。先程からあれ程理を説いて聞かしてゐるのに、諸君はまだ分からんのか。僕は決して諸君の主義を否とするのではない。現に吾輩自身も脱人の保護はした。僕が新政府の對外政策に飽き足らんのは諸君以上だ。併し、今の場合を考へろと言ふのだ。九州鎭撫總督の宮は既に大阪表まで出向いてをられる。巡察使の四條少將閣下は鹿兒島熊本山口三藩の兵を率ゐて、既に目近の日田まで押寄せて、今にも久留米へ攻め入らうとしてをられる。政府は既に四國九州の四十二藩に令して四條巡察使の指揮を待たせてある。參謀の大田黑は百何人といふ兵隊を連れて既に善導寺に上陸した。久留米は四圍の內に落ち入つてゐるのだ。政府が久留米の人民を怒らせて、わざと兵端を開かせようとしてゐることは火を見るよりも明かだ。決して、その手に乘つてはならん。その手に乘つたら、藩は破滅だ。

水野　その上、藩知事公は東京へ人質に取られたやうな形になつてをられる。知事公は謹愼を仰せつけられて、赤羽の藩邸は政府の兵隊で圍まれてゐる。知事公はかの遷都一件以來、事每に新政府の嫌疑を受けてをられるのだ。吾々が何等含むところのない廣澤參議の暗殺でさへ、一

時は嫌疑が吾が藩にかかつた。若しこの場合、血氣に逸つて、巡察使に楯をつくやうなことをしたら、東京の知事公は如何なる憂目を御覧になるか分からん。

小河　如何にも現在久留米を圍んでゐる兵隊は、鹿兒島山口熊本三藩のものに相違ないが、既に朝命を奉じて、巡察使の指揮の下にある以上、これを官軍と言はなければならん。官軍に手向ふことは錦旗に手向ふことだ。そんなことをしたら、忽ち朝敵の賊名を蒙り、天下の兵を一つに引受けて戰はなければならんことになる。吾が久留米藩は天下に率先して勤王論を唱へた。佐幕俗論家は既に斃れて、今日藩政にあづかるものは悉く勤王の諸士だ。然るに、今その久留米藩が朝敵となつて、累を知事公に及ぼし、あまつさへ久留米城下を焦土に化して、何も知らぬ一般人民を塗炭の苦しみに陷れるのは悲慘の極ではないか。忍び難きを忍ぶのだ。志は事と違つた。目的は蹉跌した。併し、今は恭順を表さねばならん時だ。

島田　どうもこれは兩先生の言はれることが道理だ。吾々は一時この屈辱を忍ばなければなるまい。

水野　さうだ。一時のことだ。吾々二人が出て行つたあとで、官軍は必ず無理無體を持ちかけ、諸君に手を出させようとするに違ひない。併し、如何なることがあつても、忍從して、恭順の誠を表し、一旦兵を引上げさせた上で、正々堂々廟堂に迫り、無名の師を起して一般を騷がした罪を糺し、報復して今日の恥辱を雪ぐが好い。

一時のことだ。一時のことだ。
鹿野　併し、殘念だなあ。
井上　今まで先生として敬慕した方々を、おめおめ彼等の手に渡したとあつては久留米藩の恥辱だからな。
太田　全く天下の諸士に對して申譯がない。
川島　いや、併し、今の場合どうにもなるまい。僕も兩先生を引渡すことは飽くまでも反對だつたが、だんだん兩先生の訓話を承つて見ると、如何にも御尤もだ。ここは一番忍ばなければなるまい。なあ、大鳥居、貴公はどう思ふ。
大鳥居　兩先生のお詞に從ふより外はあるまい。知事公のお身の上も心掛りだ。一般人民のことも思はなければならん。總てを兩先生の御意志に任せよう。
島田　どうも、この際さうするより外に手段はあるまい。
下川　屈辱は一時だ。吾々の目的は遠大だ。
篠本　吾々は長い間兩先生の指導を受けて來たのだ。この期に及んで兩先生の意に反するやうな行動を執ることは出來ん。
大鳥居　では、もう誰も異存はないのだな。（一同、沈默）誰も異存はないか。
（一同、沈默。暗に贊意を表す。寺崎三矢吉唯一人、苦々しげに横を向いてゐる。）
小河　寺崎、君はさつきから一言も口を利かんが、君もやはり同意なのだらうな。君は脱人のことに關して前後最も深い關係を持つてゐる一人だ。現に君は吾々と一緒に、あした巡察使廳へ出なければならん人だ。君の同意はどんなに諸

君の心を勵ますか分からい。

寺崎　（突然、聲を勵まして）いや、僕は同意しません。僕の意見は大反對です。たとひ兩先生がお出かけになつても、僕は決して日田へは參りません。

水野　なに。

寺崎　どうせ一度は國家の爲に斃れる覺悟で始めた爲事です。一か八か、遣れるだけは遣つて見ます。あとがどうならうと、そんなことは構つてゐられません。朝命を矯めた奴原を片つ端から皆殺しにして、錦旗を主上にお返し申し上げ、以來かやうな者にはお渡しにならぬやう闕下に伏して奏請いたします。

島田　そんな亂暴なことを言ふ奴があるものか。

青木　そんなことをしたら、却つて不敬に當るぞ。

寺崎　ばかを言へ。朝命を矯めた奴等に屈從するこそ、却つて天意を晦ますといふものだ。おれは斷じて日田へは行かん。兩先生も決して遣らん。

川島　おい、おい、寺崎。どうして君はさう過激なことを言ふのだ。君の眞意はよく分かつてゐる。君は兩先生が救ひたいばかりに、さういふことを言ふのだらう。併し、今の場合さういふことをするのは、却つて兩先生を傷つけることになるぞ。

寺崎　いや、おれは兩先生の爲を思ふのではない。おれは國家の爲に立つのだ。

島田　藩公のことは思はんのか。藩の安危は考へんのか。

寺崎　もう吾々に藩といふものはない。吾々には

唯國家があるばかりだ。上御一人があるだけだ。新政府の腰が弱いのも、畢竟は舊大藩に壓迫されてゐるからだ。

島田　君は知事公はどうなつても好いと思つてゐるのか。久留米が滅びても構はんと思つてゐるのか。

寺崎　國體には換へられん。國威には換へられん。攘夷の爲の犧牲なら、知事公も藩も何かあらんやだ。

島田　默れ。貴樣は久留米藩の藩士ではないのか。

寺崎　おれは日本の國民だ。

（突然、井上が寺崎に斬つてかからうとする。一同、留める。）

島田　寺崎、歸れ、歸れ。貴樣のやうな亂暴者は國事を議する資格はない。

寺崎　おれもこんな穢れた場所に同席は御免だ。いくぢなしの寄合め。

井上　なに。（又斬つてかからうとする。今度は下川も立つ。一同、二人を留める）

寺崎　おれは一人でも、きつと遣つて見せるぞ。

（寺崎、席を蹴立てて歸る。）

（一同、暫く呆氣にとられてゐる。）

水野　困つたものだな。

小河　困つたものです。

水野　だが、實際あいつは遣るつもりだらうか。

小河　それは分かりません。あいつは煽動家ですが實行家ではありません。口だけのことの出來る男ではないのです。

川島　失禮ですが、小河先生の仰しやる通りです。わたくしは武田先生の門下だつた時分から、彼

とは分け隔てなく附き合つてをります。小河、吉桂、南先生へも共に趨いてお世話になつたのです。彼の性格はどの諸君よりもわたくしが知つてをります。彼は誠意のない男ではありません。山口脱人騷の場合にも、彼は身命を賭して働きました。併し、彼は存外小心な男なので、今度の場合も、彼は日田へ行くのが恐いのです。恐くないまでも厭なのです。自分が厭だもので、他を唆かすのです。唯それだけのことです。

水野　併し、唆かされた相手が若し本氣になつたら一大事ではないか。

川島　如何にもさうです。わたくしもそれを心配してゐるのです。

島田　あいつの家には奇兵隊の過激黨が大分集まつてゐるといふ噂だぞ。

大鳥居　さう言へば、横枕が今夜來ないのも不思議だな。

鹿野　ここへ來る途中で、太田要藏や今村圓兵衛に逢つたが、二人とも寺崎の家へ行くのだと言つてゐた。

川島　それはいかん。あの二人は中でも寺崎と親密で、しかも非常な過激論者だ。

水野　では、一刻も猶豫することは出來ん。萬一あの輩に暴動を起されたら、吾々の苦衷（くちゆう）も水泡に歸してしまふ。

小河　さうだ。何と言つても、川島は偏意のない仲なのだから、一つ行つて取鎮めてくれんか。あの男は決して自分で何もする男ではない。唯はたを取鎮めてくれれば好いのだ。あの男の煽

動にはたが乗らんやうにしてくれれば好いのだ。

川島　宜しうございます。參りませう。どうせ過激な連中の集まりですから、散々にわたくしを罵倒するに違ひありません。併し、わたくしはそんな者は相手にしません。寺崎一人と膝詰談判をしてやります。さうして九つ過ぎる頃まで邪魔をしてやれば、兩先生の駕籠は田主丸あたりまでは參るでせう。さうすれば、たとひ本當に何かしようと思つても、もう何も出來ますまい。兩先生が無事に日田へ向はれたとなれば、當人もきつと諦めて巡察使廳へ參るでせう。

水野　成程、好い考へだ。是非さうしてくれ。

川島　では、一刻も早い方が好いと思ひますから、直ぐにこれから參ります。

青木　だが、川島一人では危ない。おれが一緒に行かう。

井上　僕も一緒に行かう。

川島　いや、君はいかん。君はさつきも危なくあいつを遣つつけるところだつたではないか。

青木　では、おれ一人だけでも連れて行け。

川島　いや、誰も來ん方が好い。

青木　大丈夫か。

川島　大丈夫だ。おれ一人なら、何を言はうと、決して寺崎は怒りはせん。

青木　でも、周圍の者が。

川島　周圍の者と言つたところで、みんな寺崎の子分だ。首領の寺崎が手を出さなければ、子分も手の出しようがあるまい。兎に角、おれは氣が急くから、もう行く。（水野と小河の前に平伏す

る）では、水野先生、小河先生、どうぞ御機嫌宜しう。無事の御歸著を祈ります。

水野　あとを宜しく頼みますぞ。

川島　畏りました。

（川島、退場。一同、目送する。）

（入れ違ひに、庭口から、息せき切つて、田中隆吉が飛び込んで來る。）

小河　どうした、隆吉。

（田中、上へ轉び上がる。）

田中　（息を切らして）兩先生の外、お人拂ひを願ひます。

水野　（一同を見て）諸君、暫く遠慮してくれ給へ。

（水野、小河を殘して、一同退場。）

小河　（暫くして）田中、どうした。

田中　（聲を潜めて）一大事でございます。

水野　何事だ。

田中　大樂源太郎が又逃げて參りました。

小河　水野。えつ。

水野　いつ。

田中　たつた今。

小河　どこへ。

田中　わたしの宅へ。

（水野、小河、顏を見合はす。）

田中　（心の急くやうに）如何いたしませう。

水野　待て。奥へ行つて、大鳥居と島田を呼んで來てくれ。密議があるからと言つて。

（田中、奥へはひる。）

（水野と小河、顏を見合せて默つてゐる。）

（田中が大鳥居と島田を連れて來る。）

水野　ずつと側へ寄つてくれ。

（大鳥居と島田、水野と小河の側へ寄る。）

（水野、嘯く。大鳥居と島田、驚愕して、思はず聲を立てようとする。小河、抑へる。）

（一同、鳩首、議を凝らす。）

——幕

二

寺崎三矢吉宅。同じ夜。

（主人の寺崎、今村圓兵衛、太田要藏の二人と床の間の前に鼎坐してゐる。）

（横枕、中村、師富、平の四人、少し離れて一團をなしてゐる。その他、應變隊の諸士、足の踏み込めぬ程、そこここに群つてゐる。）

（杯盤狼藉。一同酒氣を帯びて喧々囂々と論じ合つてゐる。）

寺崎　おれは行かん。斷じて行かん。誰がおめおめと巡察使などに縛られるものか。

太田　さうだ。さうだ。決して行くな。

寺崎　兩先生も遣つてはいかん。駕籠を道に要して、是非とも奪ひ取らなきやいかん。

今村　さうだ。さうして直ぐに兵を擧げて巡察使を追つ拂ふのだ。山口や熊本の二中隊ぐらゐがなんだ。

太田　さうだ。さうすれば、豫て示し合せた豐津島原その他各藩の同志が、きつと來應するだらう。

寺崎　各地に潜伏してゐる奇兵隊の諸士も、きつと方々から出て來るだらう。さうしたら、これを糾合(きうがふ)して、直ぐに日田を奪取するのだ。それから九州の兵を引き纏めて下の關へ押し渡るのだ。それから、山口を乘取つて、ここを根據地にして義兵を擧げるのだ。

太田　さうだ。今が遣り時だ。おれ達の目的が達

せられるのは今だ。

寺崎　今を措いて他に機會はない。その好機會を手を拱いて逃がさうなどとは、何といふ腰拔武士だ。水野、小河南先生には、南先生の立場がある。だが、若い者達が直ぐとそれに同意して、官軍でもない官軍に屈服しようなどとは、何といふ意氣地なしだ。川島などはおれの少年時代からの親友で、常に行動を共にして來た奴だが、あの優柔不斷な態度はどうだ。

太田　あいつは今度東京へ行つてから、ひどく意氣地がなくなつた。きつと東京で臆病風でも引いて來たのだらう。

（一同、笑ふ。）

（途端に、奥の方で、「川島が來た。」「川島だ。」「川島だ。」といふ聲がする。）

寺崎　なに、川島が來たと、あいつ、考へ直したか。

今村　さうだ。さうだ。きつとさうだ。あいつあやまりに來たのだ。

（川島、刀を提げて、周圍には目もくれず、大勢の中を押し分け押し分けまつ直ぐに寺崎の側まで來て坐る。）

寺崎　おう、川島。貴公吾々の味方になりに來たのか。大に宜しい。まあ、一杯やれ。

川島　（杯を受ける）君は愈戰ふ氣か。

寺崎　勿論だ。君も戰ふ氣になつたのだらう。

川島　いや、おれは戰はん。

寺崎　なに、戰はん。

川島　機會はもう去つてしまつた。

寺崎　いや機會は今だ。

川島　まだそんなことを言つてゐるのか。兩先生のお詞がまだ貴樣には分らんのか。

寺崎　兩先生は兩先生だ。吾々には吾々で、また覺悟がなければならん。おれは盲從は厭だ。

川島　おれだつて盲從は厭だ。勝算があればおれだつて戰ふ。勝算はあるのか。

寺崎　ある。

川島　では、それを聞かう。

寺崎　吾々が立てば熊本の同志が三百人は直ぐに來る。島原は藩を擧げて立つだらう。豐津藩も同樣だ。各地に潜伏してゐる奇兵隊も立つて、きつと山口を囘復するだらう。みんな久留米の立つのを今か今かと待つてゐるのだ。

川島　だが、熊本の同志が立つといふなら、久留米の遣るのを待つには及ぶまい。三百人もゐるなら、直ぐに熊本城を乘取り、これを根據にして呼號したら、九州は必ず響の如く應ずるだらう。然るに、彼等がその大事な熊本を棄てて久留米へ來るといふのは分からん。それは誰かが詐り拵へた流言に相違ない。それとも熊本の同志が愈城を乘取つて兵を擧げるといふのなら、君等も同志を率ゐて熊本へ趨いたらどうだ。さうして、天下の兵を一手に引受けたら、或は志を貫くことが出來るかも知れん。然らずんば、到底勝算はない。

横枕　（下座から）よせ、よせ、寺崎。そんな臆病者の議論などは聞くな。

師富　さうだ、さうだ。邪魔者の議論は聞くには及ばん。聞けば迷が出る。迷が出れば考が動く。斷じて聞くな。

中村　そんな奴の議論をぐづぐづ聞いてゐると、時が遅れて機會を失ふぞ。機會は再び來るものではないぞ。

平　そんな奴にかかり合つてる隙はない。叩き出せ。叩き出してしまへ。

（「叩き出せ。」「叩き出せ。」といふ聲が方々で聞える。）

川島　いや、おれは歸らん。飽くまでもおれは留める。身命を賭してもおれは留める。

横枕　腰拔侍。臆病者。

川島　何と言はれても、おれは動かん。今の場合、輕擧妄動するのは國の破滅だ。

横枕　因循姑息も國の破滅だぞ。

平　もうこんな奴には構はずに、どんどん實行に取りかゝれ。

横枕　兩先生の駕籠を奪ふのだ。それから日田を襲撃するのだ。

寺崎　まあ、待て。おれは川島の言ふところにも一理あると思ふ。

横枕　だめだ、だめだ。そんな奴の言ふことに動かされてはだめだ。

寺崎　いや、決して無暗と動かされはせん。併し、熊本の同志が立つなら、熊本城に據る筈だと言ふ一言には一理ある。若し吾々が立つても、熊本の同志が馳けつけてくれなかつたら、吾々はどうすることも出來ん。吾々の人數は餘りに少ない。

今村　おい、おい、大將がそんな意氣地のないことを言ひ出しては爲方がないではないか。

太田　熊本の同志はきつと來る。おれは確な筋か

ら聞いた。三百人は來ないまでも、二百人はきつと來る。

中村　どんなことがあつても、百人はきつと來るといふ報告がおれのところへ來てゐる。

川島　それ見ろ。人數のことでさへ、既にさうまちまちだ。熊本の同志が立つなら、熊本を棄てる筈はない。

横枕　いや、おれ達は熊本の同志などあてにしてゐるのではない。來んなら來んで構はん。おれ達は自分でやる。

寺崎　だが、それは無謀だ。勝算のないのに戰ふのは犬死だ。

横枕　何が犬死だ。國家の爲に死ぬのがなんで犬死だ。攘夷の爲に斃れるのがなんで犬死だ。

（「犬死ぢやない」「犬死ぢやない。」といふ聲が聞える。）

寺崎　待て。おれも犬死ぢやないと思つてゐた。藩がどうならうと、知事公がどうならうと、これは飽くまで戰はなければならんと思つてゐた。だが、だんだん川島の話を聞いてゐる内に、これは一番考へ直さなけりやならんと思つた。

（「考へ直すことはない。」「考へ直しちやならん。」などといふ聲がする。）

寺崎　成程、この際戰はんのは屈辱には違ひない。併し、それは唯外見だけのことだ。肉體は縛られても精神は縛られん。吾々の目的は遠大だ。一時の恥を忍んでも永遠の策を立てなければならん。假にも錦旗に楯をついて、朝敵の汚名を受けたら、多年の苦心も水の泡だ。

横枕　だめだ、だめだ。川島の臆病風が染つたの

だ。

寺崎　いや、斷じて臆病で言ふのではない。この屈辱に堪へるには金鐵の心が要る。

（「言ひ抜けだ。」「恐くなつたのだ。」「大將がやらなきや、おれ達だけでもやつて見せるぞ。」などといふ聲がする。それに對して、「いや、寺崎の言ふのが本當だ。」「屈辱は一時だ。」「目的は遠大だ。」などと言ふ聲が聞える。）

（議論が二派に分れて、詞の聞き取れぬ程混亂する。）

（[illegible]聲が頂點に達した時、殷々と鐘の音が響いて來る。）

――何時だ。

――[illegible]だ。

――だめだ。もう兩先生の駕籠は行つてしまつた。

――もう追つかけても、とても追つつくまい。

（一同、絶望して首を垂れる。）

（稍長き沈默。）

川島　（微笑を含んで、寺崎の前へ向き直る）寺崎、日田へ行くか。

寺崎　（決心を面に表して）うむ、行く。

川島　では、別盃だ。

（川島、寺崎に杯をさす。）

――幕

三

大鳥居菅吉の寓居。或商家の裏座敷。翌日の午後。

（主人の大鳥居はじめ、島田、樋口、鈴木、本山、川口、吉田、太田（茂）、鹿野、井上、下川など、鳩首して、聲を潜め、頻に密議を凝らしゐる。）

（川島、登場。この光景に意外の面持をする。）

大鳥居　（川島の來たのに氣がついて）おう、川島、

疲れてゐるところをよく來てくれた。

川島　また何事か起つたのか。

大鳥居　兎も角も、ゆうべの禮を言はなければならん。よく寺崎を留めてくれた。お蔭で兩先生も無事に日田へ行かれた。寺崎もたうとう日田へ行つたと言ふではないか。

川島　いや、なかなか骨が折れた。併し、夜明けまで居坐つて、たうとう寺崎を日田へ立たせた。

大鳥居　それは大手柄だつた。さぞ應變隊の過激黨が憤慨したらうな。

川島　一時はどうなるかと思つたが、こつちがぢつと堪へてゐたので、たうとう血の雨を見ないで濟んだ。先づ、これで一時の片はついた。

島田　ところが、ここに又一つ大難事が沸いて來た。

川島　（心配さうに）なんだ。何事だ。

島田　（一同に）諸君、あたりに氣をつけてくれ給へ。

（一同、あたりを警戒する。）

（大鳥居と島田、ずつと川島の側へ寄る。）

島田　（聲を潜めて）大樂源太郎が又久留米へ歸つて來たのだ。

川島　（笑ふ）冗談を言つちやいかん。もう大樂は久留米にをりやせん。小河先生も、それだけは安心しろと言はれた。

島田　ところが、ゆうべ、突然又戻つて來たのだ。

川島　（驚く）一人でか。

大鳥居　四人で。

川島　誰のところへ。

大鳥居　田中隆吉のところへ。

島田　ゆうべ君が寺崎のところへ出かけると間もなく、田中があの席へ飛び込んで來た。兩先生の外、人拂ひになつたが、やがておれと大島居が呼ばれた。話を聞くと、そのことだ。兩先生が言はれるには、折角これまで苦心したことも、これでみんな水の泡になつてしまふ。だが、日田へ出發の時刻は迫つてゐる。どうか、自分達の出發後、みんなと相談して、事の破れにならぬやう宜しく結末を頼むと、しみじみとお頼みだ。實に僕等は途方に暮れた。

大島居　至急にどうにかしなければならぬが、僕等はこれまで親しく關係したことでないので、一向工風がつかん。どうしたら好いだらう。好い考へはあるまいか。

川島　成程、それは一大事だ。だが、僕も今まで多少は關係して來たが、潜伏といふことには一向關係したことがないから、これといふ妙案もない。併し、ぐづぐづしてゐれば、直ぐに捕まへられるに相違ない。萬一、大樂等が捕へられたら、藩知事公のお身の上が危ない。

島田　さうだ。吾々もそれを懸念してゐるのだ。

大島居　大樂が捕へられて、何もかもしやべつてしまつたら取返しはつかん。たとひ一度でも知事公は大樂に會つてをられるのだから。なあ、川島、なんとか處置のつけようはあるまいか。

川島　（突然、或希望を面に表して）さうだ。若津に藩の蒸汽船の千歳丸が來てゐるといふ話だ。あれに脫人を載せて逃がしたらどうだ。おれも若手の同志を連れて同船しても好い。さうしてあとを晦ましたら、どうにも捕まへようがある

まい。さうだ。會計に金を出して貰つて、千歳丸で逃げよう。

島田　うむ。成程、それは好い考へだ。大鳥居はどう思ふ。

大鳥居　（首を傾げて）だが、それでも逃げ延びることは出來ない。必ず捕へられるにきまつてゐる。若し捕へられれば、何も彼も漏れてしまふだらう。さうなつたら、もう破滅だ。

（突然、目付役の一人襖を排して入り來る。）

――誰だ。誰だ。無斷ではひつて來てはいかんではないか。

目付役　お許し下さい。急の御用で、島田様にお目にかかりに參つたのです。

島田　おれはここにゐる、なんだ、なんだ。

目付役　きのふ佐賀の兵が若津に押し渡り、千歳丸に乘込んで、大砲を引きおろし、機械類にも總て封印をしてしまつたさうです。その知らせがありましたので、直ぐに御報告に參りました。

島田　しまつた。（間）川島、千歳丸も取られてしまつたぞ。

（目付役、去る。）

（一同、沈默。）

川島　（決心を面に表して）もうかうなつた以上は爲方がない。可哀さうだが、片づけてしまふより外に手段はあるまい。

（一同、顔を見合はす。）

大鳥居　（暫くして）實はみんなもその意見だつたのだ。だが、君には何か他の策があるだらうと思つて、それで君を呼びにやつたのだ。君までが、その意見なら、もう爲方がない。

樋口　（後からにじり出る）いや、わしは初めから不同意だつた。そんな殘忍酷薄なことがあるものか。大樂は國士だ。天下の事を共にしようと吾々が盟つた同志だ。その再び得難い同志を、今日まで助けて置いて、もう爲方がないからと言つて殺すといふ法はない。諸君がどうしても遣ると言ふなら、吾輩は刑法局に出て、一部始終を訴へる。それでも好いか。

島田　それなら、どうしたら好いのだ。誰も好んで遣りたいと言つてゐる者はないのだ。君に良策があるなら聞かうではないか。

樋口　わしはさつきから言つてゐる。大樂等をお城の内へ入れて生米をかじらせて置くのだ。暫く辛抱させて置いたら、決して分かる氣遣ひはない。その内には、事も落着して、兵隊は引上げてしまふに相違ない。暫くの間のことだ。

大鳥居　それが出來れば好い。併し、お互にしても、いつ捕縛されて出て行かなければならんことになるか分からん。さうなつたらあとはどうなるのだ。もう大樂を保護するものはない。大樂はきつと捕へられる。彼が捕へられたら、もう取返しはつかん。

樋口　飽くまで遣ると言ふのか。そんなら遣り給へ。わしはこれから直ぐ刑法局へ訴へて出るから。（立ちかける）

島田　（笑つて）訴へるなら、訴へるが好い。刑法局の總裁は鵜飼先生ぢやないか。鵜飼先生は既に吾々に同意してをられるのだ。

川島　まあ、樋口、待て。成程、樋口の言ふところにも一理ある。吾々が手を下すまでもない。

大樂に自決を迫つたらどうだ。

島田　それだ。それはもうだめなのだ。ゆうべそのことを聞くと、おれはすぐ田中に案内させて大樂を訪ねたのだが、そして、暗に自裁を迫つたのだが、彼は少しも吾々の衷情を汲んではくれんのだ。却つて久留米を死地に陷れるつもりでやつて來たと言はんばかりの態度なのだ。あいつはかう言ふのだ。長州でも嘗て俗論沸騰して奈何とも爲し難き苦境に陷り、正義の士は相踵いで殺された。もう誰も手を出す者がない。殆ど自滅を待つ狀態となつた。その時、敢然兵を擧げて頽勢を挽回したのが高杉晉作だ。今日の久留米の狀態もこれと寸分違はない。諸君が思ひ切つて立てば、必ず事は成就するのだ。今が決心のし時だと言つて、おれの論には一向耳を貸さんのだ。弟の山縣が大樂に向つて、さう御自分の考ばかり言ひ張られても、藩には藩の御事情もあらうから、萬事お任せになつた方が宜しからうと口を添へたのを汐に、一先づ引上げることにはしたが、一時はあまり大樂が自分勝手を言ひ募るので、おれはいつそその場で遣つてしまはうかとも思つた。併し四人を相手にして、ひよつと手創でも負うたら、忽ち一般に知れ渡つて、隱すことも何も出來ぬやうになるから、ここは忍ぶ時だと思つて、話は早々に切り上げた。それで、兎も角も潛伏の手筈だけはして置かなければならんから、誰はどこ、彼はここと、それぞれ別にして置いたが、實におれは殘念だつた。

大鳥居　（川島に）さういふわけで、樋口一人反對

はしたが、實は君の來る前に、一議は既に決してゐたのだ。併し、吾々は今日まで、大樂のことは直接關係してをらん。君はこれまで脫人のことに關係してゐるのだから、君も一緒に遣つたといふことになれば、萬一若手連中にこの事が知れても、事情が疏通するから、是非君にも同意をさせようといふことになつたのだ。併し、君は必ず不同意を稱へるだらうと言ふので、一時は言はん方が好いといふ說も出たのだが、國事多難になつてから、何事も一緒に話し合つて來た仲だから、この一事のみ話さぬといふのも心持が惡い。それに、藩知事公に關した大事なことを君は知つてゐるのだから、話をしたら、きつと同意をするだらうと、自分も信じ、島田も亦さう言ふので、來て貰つたのだが、やはり同意をしてくれたのは有難かつた。

川島　いや、同意にも同感にも、事實さうするより、今の場合他に道はあるまい。樋口、君ももうかうなつたら爲方があるまい。

樋口　（苦笑して）川島までが同意では爲方がない。おれも遣らう。

大鳥居　よし、それで話はきまつた。それでは、これから、それぞれの受持を定めよう。みんな側へ寄つてくれ。

（一同、大鳥居の廻りに丸くなる。）

大鳥居　大樂は一番の大物だが、これは川島と吉田に遣つて貰はう。これは太田が連れ出すのだ。大樂の弟子の中村要助は鹿野の受持として、井上下川の三人で遣るのだ。大樂の弟の山縣と小野清太郎は、別々に引放すことが出來んかも知

れんから、島田の受持にして、おれ、樋口、篠本、本山、川口の六人がかりで遣ることにしよう。あの二人は屈強な若者だからな。

島田　よし。そこで、その手段だ。どうか、みんなもつと側へ寄つてくれ。

（一同、更に首を寄せ合ふ。）

川島　（聲を潜めて）おれは高野の濱で遣らうと思ふ。あの八幡の裏手だ。太田は一旦、大樂を自分の家へ連れて行くのだ。それから……（だんだん聲が小さくなつて、終に聞えなくなつてしまふ）

（雨が降つて來る。）

——幕

四

筑後川の砂濱、高野八幡宮の裏手。

朧月夜。雨しとしとと降る。

（舞臺暫く空虚。鐘鳴る。）

（上手の篠藪ががさがさする。）

（やがて、川島が顔を出す。）

川島　もうやつて來さうなものだな。

吉田　（顔を出す）あまり長いな。

川島　（濱へ出る）途中で取逃したのではあるまいな。

吉田　（これも濱へ出て、向うを透し見る）そんなことはあるまい。太田のことだ。

川島　（きつと向うを見る）や、誰かやつて來たぞ。傘をさして。

吉田　二人か。

川島　いや、一人だ。

吉田　一人だと。

川島　今頃こんなところへ他の人間がやつて來る

筈はない。きつと太田だ。

吉田　太田なら大樂を連れて來る筈だ。

川島　さうだ。若し他の者だといかん。隱れよう。

（二人、叢へ隱れる。）

（太田、一人で急ぎ足で出て來る。）

太田　（聲を潛めて）吉田、吉田。

吉田　（川島と一緒に躍り出る）おう、茂さんか。どうした。大樂はどうした。

川島　（詰め寄つて）取逃したか。

太田　（落ちついて）いや、取逃しはせん。實は宵の内にもうおれの家へ連れて來て置いて、約束の時刻が來たから、直ぐ連れ出さうとしたのだが、蟲が知らせたか一向動かん。いろいろなことを言つてゐて、容易に立たうとしないのだ。時刻はどんどん移るし、どうしたものだらうと思つてゐると、幸に柳瀨三郎がやつて來た。それから、柳瀨にそつと事情を述べて、柳瀨にやつて貰ふことにした。柳瀨の言ふことは大樂もよく聞くのだ。併し、柳瀨一人では危ないと思つたから、松村雄之進を呼び寄せて、これにも手筈を言ひ含めた。それから、やつと四人でおれの家は出たが、大樂の奴、動もすれば他の道へ行かうとするのだ。どうもおれを疑つてゐる樣子なので、これはおれが離れた方が却つてよからうと思つた。そこで、川があると嘘をついて、三人に別れた。近道を來たので、おれの方が先になつたのだらう。もう追つつけ來る筈だ。油斷は出來んぞ。

川島　大丈夫か。

太田　大丈夫だ。一人で連れて來るのだから、容易

に逝すことではない。……

（遠くで人の話し聲がする。）

吉田　やつて來たやうだぞ。

（三人、急いで藪の中に隱れる。）

（柳瀨と松村が大樂を眞ん中にして、何か小聲で話しながら出て來る。）

（突然、柳瀨が大樂に斬りつける。大樂、柳瀨に飛びかかる。松村、後から大樂を斬り下げる。川島と吉田と太田が飛び出した時は、もう大樂は川へ嵌り込んでゐる。）

太田　もう遣つてしまつたのか。

柳瀨　うむ、もう遣つてしまつた。

吉田　早く誰か首をとれ。

松村　うむ。（首をとる）

川島　死骸を殘してはいかん。（藪の中から鍬を持つて來る）

柳瀨　鍬を持つて來たのか。

川島　袴の下へ隱して持つて來た。

吉田　早くやれ。

（川島、濱を掘る。吉田、手傳ふ。川の水がはひつて來るので、穴がなかなか深くならない。）

太田　懷にある書類を出せ。

松村　うむ。（死骸の懷から書類を出す）

太田　（風呂敷を出して）これへ包んでくれ。

松村　うむ。（書類を包む）首はどうしよう。

太田　構はんから、その儘提げて行け。（川島に）穴はまだか。

川島　砂が崩れて來るので、容易に深くならん。

（川島、一所懸命に鍬を動かす。）

太田　よし。みんなでやれ。

（一同、力を協せて穴を掘る。）

五

城内。本庄一行氏舊宅。(水野大參事が移る筈になつてゐて、既に修繕も終つてゐたのだが、大參事が捕はれの身となつたので、その儘明き家同然になつてゐた家)同じ夜の深更。

(島田、大島居、樋口、篠本、本山、川口、鹿野、井上、下川など環坐して、中央に大德利を据ゑ、茶碗で冷酒を飲んでゐる。)

島田　中村はさすがは大樂の弟子だけある。小倅だ小倅だと思つてゐたが、潔く切腹をしたとは豪いな。

井上　「今さらに何か思はむ武士のけふを限りの死出の山道。」歌は平凡だが辭世まで讀みをつた。

鹿野　全く落ちついたものだつた。

大島居　おれの方は、なかなかそんな落ちついたことではなかつた。どうかして山縣と小野を引放さうと思つたが、どうしてもだめだ。二人一緒に遣らなければならんことになつた。幸に兵馬倥偬の間に轉戰した川口本山のやうな勇士がゐてくれたので、たうとう豆津の濱の渡し場で遣つてしまつたが、おれなどは實に危なかつた。山縣がおれを目がけて斬りつけて來た時、若しおれが受け損じたら、それこそ命はなかつたらう。はつしと受け留めた時は、火花で向う岸の肥前がありありと見えた。(笑ふ)

(一同、笑ふ。)

島田　待て。だが、まだ安心はならん。肝心の大樂がどうなつたか分からん。川島達はどうしたのだらう。

鹿野　餘りおそいな。

大鳥居　さうだ。あれを取遁したら、吾々の苦心も水の泡だ。

井上　爲損じたのではあるまいか。

下川　いや、そんなことはあるまい。

篠本　太田はなかなか智略に富んでゐるからな。

本山　併し、腕が心配だ。

（突然、襖を排して、川島、吉田、太田、柳瀨、松村が現れる。）

大鳥居　おう、川島、どうだつた。

島田　爲損じたか。取遁したか。

（川島、默つて、大樂の首を環座の中央へ出し、その儘そこへ置かうとする。）

島田　待て。（紙を出して、疊の上に廣げろ）

（川島、紙の上へ首を置く。）

（一同、瞑目。首うな垂れて、聲がない。）

島田　（稍あつて、首に向ひ、兩手を突いて）　大樂源太郎君。國難この極に至つて奈何ともし難い。百計は既に盡き果て、策の施すべきものは一もない。國の爲、君の爲やむを得ずかかる處置をとつたのだ。どうか許してくれ。追つつけこの怨みはきつと酬ゆることにする。どうぞ瞑目してくれ。

（一同、暗涙に咽ぶ。）

（樋口、茶碗に酒をつぎ、にじり出て首の前に供へる。）

樋口　大樂、大樂。君は吾々の得難い同志だつた。その同志を吾々は討つたのだ。同志が同志を殺したのだ。こんな理不盡なことがこの世にあらうか。なぜ、同志が同志を殺さなければならなかつたか。それはこれからおれ達のする爲事で分かつて來る。おれ達はこの屈辱に堪へて、更

に大きな爲事をしなければならんのだ。君の肉體は亡びても、君の魂は吾々の内に殘つてゐる。君の志は吾々の手できつと貫徹して見せる。冥府で見てゐてくれ。おれ達が何をするか。おれ達が何をするか。おれ達が何をするか……（涙に咽んで、あとが言へなくなる）

（一同、粛然。）

――幕

公園裏

人物

お松　寡婦
お君　お松の先夫の妹
岡山文吉　職工、同居人
太郎　お松の子
近所の人
巡査など

場所

淺草の裏町

時代

大震火災後

バラツク建の長屋。

唯一部屋の内に、雜然と物が置いてある。

（子供の太郎が寢かしてある、直ぐそのわきに汚い長火鉢。それを挾んで、お松とお君が話してゐる。）

（公園のどよめきが遠く聞える。）

（晩秋の或夜。）

お松　（嘆願するやうに）ねえ、君ちやん。

お君　……

お松　さうしておくれな。

お君　……

お松　いやかい。

お君　……

お松　助けると思つて、さうしておくれな。さうすれば、何も彼も都合よく行くんだから。

お君……

お松　どうしても、いけないかい。

お君　……

お松　（むつとして）ぢやあ、勝手におし。（長煙管で煙を吸ふ）

（稍長き間。）

お君　でも、ねえさん、それは無理だと思ひますわ。

お松　無理なことははじめから分かつてるよ。だから、こんなに事を分けて頼んでるぢやないか。

お君　頼むも頼まれるまでもありませんわ。どうせさうなるつもりだつたんだから、當り前なら、あたし、喜んでさうして貰ひますわ……でも、文さんといふ人が、あんまり……

お松　だから、それはあたしが悪いんだつて言つてるぢやないか。

お君　いいえ、あたし、どうしてもねえさんが悪いとは思へませんわ。ねえさんは女ですもの…

お松　（寂しく笑つて）女だつて、お前、あたしにも罪がないとは言へないよ。だから、文さんはなんにも言ふなつて言つたんだけれど、あたしはもうこなひだ中から苦しくつて苦しくつて、どうしてもお前に打明けずにはゐられなかつたんだよ。

お君　ほんとによく打明けて下すつたと思ひますわ。それだけでも……それだけでも、ねえさんに罪のないことは分かりますわ。あの人はあたしを欺さうとしたんです、

お松　欺さうとしたわけでもないんだらうけれど、そんなことを言つたら、とてもお前が承知してくれまいと思つたからだよ。

お君　ほんとに飛んだことになりましたわねえ。
お松　何しろ近所がうるさいしねえ。それに、内の人が被服廠で死んでから、まだ半年にもならないんだらう。子供が小さければまだしもだけれど、太郎だつてもう十二だからねえ。若し、あたしが赤んぼでも生んだら……
お君　でも、そんなことはないんでせう。
お松　……
お君　ええ、ねえさん、そんなことはないんでせう。
お松　……
お君　ええ、ねえさん。
お松　まだはつきり分からないけれど……
お君　……
お松　どうも、さうらしいんだよ。
お君　まあ……
お松　……だから……だから……かうして頼むんだよ。
お君　（きつぱり）あたし、愈文さんが厭になりましたわ。
お松　……
お君　あんな人でなしつたら、ありやあしない。死んだ兄さんにあんなに世話になりながら、ねえさんやあたしの面倒を見てやるなんて言ひながら……
お松　でも、そりやあ、ほんとに見てくれたんだけれどねえ……お前だつて鶴屋バアへ行けるやうになつたのは、おの人のお蔭だし、あたしだつて、震災後ひとりぼつちになつてから、かうやつて食べて行けるのは、あの人がせつせと工

場で働いてくれるからなんだし……

お花　だつて、その工場だつて、この頃やめられたつて話ぢやありませんか。

お松　さあ、それも實は、あたしのことからなんだよ。

お花　まあ……

お松　あの人の出てるところの課長さんが、しよつちう忠義だの孝行だのつて、やかましいことばかり言つてる人なんだとさ。文さんの噂が耳へはひると、岡山は實に感心な男だと思つてゐたのに、それではおれが欺されてゐたんだ。おれを欺すやうな恐しい奴は一刻も工場に置くことは出來ないつて、いきなり首になつちまつたのさ。だから、手當もなんにもないんだよ。でも、ちやうどその時ストライキが始まつたもんだから、組合の方で心配して、文さんの復職のことも條件の一つに出してあるさうだけれど、どうなるかねえ。

お花　……

お松　その儘ぢやあ、とてもだめだらうけれど、お前が一緒にでもなつてやつてくれれば、自然あたしの方の噂もなくなるだらうし、さうすれば、課長さんも元々文さんの腕は見込んでゐらつしやるんだから、きつと工場へも歸れると思ふんだよ。

お花　まあ、四方八方、がんじ搦みねえ……

お松　さういふわけぢやないけれど、あたしも困つてるし、あの人も困つてるもんだから……

お花　だけど、若しさうなつたとして、ねえさんのお腹のものはどうするつもりなの。

お松　だから……だから……それは……内證で始末をして……お前が生んだことにして貰ふのさ。
お君　あたしが生んだことにして……
お松　ああ……いやかも知れないけれど……
お君　……
お松　ねえ、君ちやん、お願だから、さうしておくれな。
お君　……
お松　いけないかい。
お君　……
お松　え、君ちやん。
お君　（立ち上がる）あたし、もう歸ります。
お松　歸りますつて、お前……バアの方はもう暇を貰つて來たんだらう。
お君　もう一遍歸つて頼んで見ます。使つてくれなければ、ほかのカフエエへ行きます。もうここへは參りません。
お松　（お君の袖を掴んで）まあ、そんなことを言はないで……ねえさんが、かうやつて、折角頼むんだから……
お君　ねえさんは可哀さうだけれど……でも、あたし……あたし、なんだか世の中が分からなくなつてしまつたわ。
お松　だから、何も、あたし達が言ふ通りにしなくたつて……なんとか又相談もあらうから……
お君　いいえ、やつぱり、あたし、歸ります。
お松　まあ、そんなことを言はないで……
お君　いいえ、もう、あたしなんかゐないと思つて下さい。

（無理にお松の手を拂ひ、兩手で顏を掩うて走り去る。）

（反對の方角から、文吉驅けて出て來る。）

文吉　（直ぐお松に聲をかける）　どうしたんだ。今逃げて行つたのはお作ぢやねえか。

お松　ええ。

文吉　畜生、逃げやがつたな。

お松　だつて、お前さん、そりやあ、こつちの言ふことが無理だわ。

文吉　無理も糞もあるものか。おれとは昔から言ひなづけだ。あいつの兄貴も承知してたことだ。

お松　だつて、お前さん……

文吉　おめえ、なんにも言やしめえな。

お松　言つたわ。言はずにはゐられなかつたんですもの。何も彼もみんな言つたわ。

文吉　ばか。（いきなりお松を蹴飛ばす）

お松　まあ、なんてことをするの。

文吉　ばか野郎。それを言つちまつて、どうなるんだ。よしおれが行つて連れて來る。是が非でも承知させずにやあ置かねえから。（飛び出さうにする）

お松　（文吉に縋りつく）　それより、工場の方はどうなつたんですよ。

文吉　どうもかうもあるもんか。ストライキ破りが出て來て、もうめちやめちやだ。（さう言ひながら、お松を突き飛ばして走り去る）

（寢てゐた子供が目を覺ます。）

太郎　おつかちやん。おつかちやん。

お松　夢だよ、夢だよ。なんでもないんだよ。早くお寢。おとなしくお寢。

太郎　なんだか、大きな音がしたね。ねえさんが歸つたのかい。

お松　なんでもないよ。お前が夢を見たんだよ。おやすみ。早くおやすみ。（蒲團を叩いてやる。）

子供、間もなく寢入る）

（文吉、お君の手を引つぱつて歸つて來る。お君、泣いてゐる）

文吉　さあ、はひれ。（お君を家の内へ押し入れる）

お君　……

お松　……

文吉　なぜ、ねえさんの言ふことを聞かねえんだ。

お君　……

文吉　おめえ、おれが厭になつたのか。

お君　……

文吉　ええ、おめえ、おれが厭になつたのか。

お君　……

文吉　おめえ、ねえさんから何も彼も聞いたさうだな。

お君　……

文吉　（急に疊の上へ兩手を突く）あやまる。あやまる。おれが惡かつた。少しもそんな氣はなかつたんだが、ついその、一つつきりの部屋なんかにゐるもんだから……いや、もうなんにも言はねえ……おれが惡かつたんだ。ねえさんに罪はねえんだ。おれは何も、おめえが厭になつたんで、そんなことをしたんぢやねえ。おめえのことは一日だつて忘れやしねえ。あんなとこに置くのは心配なんで、毎晩一度は樣子を見に行つてるんだ。硝子戸の外からそつとおめえの樣子を覗いて見て、おめえがいつもちやんとしてゐるの

を見て、安心して歸るんだ。

お君 ……

文吉 なあ、君ちやん、ねえさんの言ふ通りにしてくれねえか。今度はおれが賴むんだ。きのふ、ああ言つて、おれがおめえのひまを取つて來たんだ。今更お前に鶴屋バアへ歸られたら、おれの顏が立たねえ。ねえさんも、世間から責められ通しだ。おれだつて、この儘ぢやあ、とても工場の首はつながりつこねえ。組合の方のストライキも、もう今夜は總崩れだ。なあ、みんなを助けると思つて、さうしてくれ。

お君 ……

文吉 いや、さう言ふと、おれ達が勝手になる。今までのことはあやまるから、どうかおれの心にもなつて、おれと一緒になつてくれ。おれはおめえが可愛くつてしやうがねえんだ。おれはおめえと一緒になれなけりやあ生きてるかひがねえんだ。（さう言ひながら、だんだんお君を抱へるやうにする）

お松 （いきなり二人を突きのける）およしなさいよ。見つともない。

文吉 （嚇とする）何をするんだ。

お松 なんにもしやしませんよ。見つともないからおよしなさいと言つたんですよ。

文吉 何が見つともねえ。

お松 見つともないぢやありませんか。人の前で。

文吉 何が人の前だ……君ちやんとおれは言ひなづけだ……おめえの亭主がきめた言ひなづけだ……

お松 ぢやあ、その言ひなづけが、なんだつて、

あたしに……

文吉　おや。おめえ、今になつて、そんなことを言ひ出すのか。

お松　だつて、相手がそんなに厭がつてるものを……もう好いから、返しておしまひなさいよ。

文吉　なんだと。

お松　返しておしまひなさいつたら……ほんとに生意氣だつたら、ありやしない。

文吉　おい、おい、なんで君ちやんの惡口をつくんだ。

お松　だつて、あんまり分からないんだもの……もうよござんす。世間で何と言はれたつて、どんなに暮らしが苦しくなつたつて、あたしはお前さんと添ひ遂げます。

文吉　おい、おい、冗談を言つちやあいけねえ。そんなことが出來るもんかな。おれはそんな氣でおめえと……おれは世間が恐くて君ちやんと一緒になるんぢやねえ。おれは君ちやんが可愛いんだ。なあ、君ちやん、おめえにやあ、おれの心持は分かつてるな。（さう言つて、もう一度お君を抱くやうにする。お君その儘になる）

お松　（また二人を突きのける）何をするんだよ。

文吉　（立ち上がる）何をしやがるんだ。

お松　もう、もう、あたしはいやだ。お前さんと君ちやんとを一緒にすることは、あたしが不承知だ。

文吉　何を言やがるんでえ。（お君の手をとる）さあ、君ちやん、二人で出て行かう。もうこんな内に誰がゐるもんか。

お松　（文吉をつかまへる）いんえ、いけない。お

前さんはどうしてもこの内にゐなけりやいけない。

文吉　今になつて、何を言やあがるんだ。（お松を蹴飛ばす）

お松　（起き上がつて、文吉にしがみつく）出ていつちやあいやだ。出ていつちやいやだ。

文吉　何を、こん畜生。（もう一度蹴飛ばす）

（お松、悶絶する。）

お君　まあ、文さん……（お松の側へ駈け寄る）

文吉　さあ、君ちやん、早く行かう。

お君　文さん、文さん……ねえさんが大變よ。

文吉　さあ、行かう。早く行つて、どつかで世帶を持たう……なあに、どうにかして食つていけねえことはあるめえ。

お君　文さん、文さん……ねえさんが冷たくなつちまつたわよ。

文吉　なに。

お君　ねえさんが死んぢまつたわよ。

文吉　（はじめて氣がつく）なに。（お松の死骸に手を觸れる）いけねえ。飛んだことをしちまつた。おう、君ちやん。どうしたら好いだらう。

お君　（冷靜に）死にませうよ。二人で。あたし、もう、どつちにしても、さつきから死ぬつもりでゐたわ。

文吉　え。

お君　だつて、あたし世の中が分からなくなつたんですもの。もうさつき、ここを飛び出した時から、死ぬつもりでゐたのよ。だつて、あたし誰も悪いと思ふことが出來ないんですもの。

文吉　……

お君　ねえさんだつて、悪い人ぢやあなし。文さんだつて、一時は、恨んでも見たけれど、會つて見れば、やつぱり昔からの文さんだし。さうかつて、あたし、ねえさんの生むものを自分の子にするなんて……

文吉　もう、なんにも言ふな。

お君　だから、なんにも言はないで、默つて死にませうよ。あの世なら、ことに依ると一緒になれるかも知れないから。もうこの世ぢやあ、とてもだめよ。

文吉　さうだ、この世ぢやあとてもだめだ。

お君　ぢやあ、死んでくれて。

文吉　ああ、死ぬとも、どつちにしたつておれの命は、もうねえんだ。

お君　ぢやあ、早く。

文吉　うむ。（あたりを見廻す。臺所から庖丁を持つて來る。）これでやつても好いか。

お君　ええ、早くして頂戴、太郎ちやんの起きない内に。

文吉　好いな。

お君　ええ、文さん、直ぐ來てね。

文吉　ああ、直ぐ行くとも。（お君の脇腹を刺す。お君斃れる。返す刀で直ぐ自分の咽喉を切る。）

（二人の息が絶える。）

（お松も、もう蘇らない。）

（前から目を覺まして、蒲團をかぶつてゐた少年太郎、そつと夜具から首を出す。）

（三人の死骸を見て驚く。）

太郎　（外へ駈け出す。）大變だ、大變だ。お隣のをぢさん、大變ですよう。

（近所の人々、方々から駈けて出て來る。）

（家を取巻く、その中の一人が、巡査を呼びに行く。やがて、巡査が来る。太郎が聲を上げて泣く。）

（公園の樂隊が聞える。）

——幕

緑の朝　一幕

人物

一條少將義繼
左衛門光綱
竹　　　姫
醫師玄齊
老臣小笠原清長
侍女浮舟
庭作り仁作

時代

不　　明

場所

不　　明

年古りたる寺の廻廊。廊に續きて本堂の一端。

（廻廊のかなたに初夏の緑輝き、木の間より青き空隠見す。廻廊のこなたは一面の植込。所々に立木。その内の一本、一際目立ちて青葉繁る。）

（植込の中に罌粟の花の眞紅なるが七八輪見ゆる外、舞臺にも人物の衣裳にも、一切赤き色を嫌ふ。）

（庭作りの翁仁作、廻廊のこなたに蹲り、大なる利鎌もて、罌粟の花を刈りゐる。）

（美しく年若き侍女浮舟、廊の柱に倚りゐて、物思はしげに、仁作の鎌の心地好げに動くを見る。）

仁作（歌ふ）

思ひそめたよこき紫の
色に出でじと包むに餘る
そでに涙はのんさてまことに

こぼれぞかかる
知らぬ昔はよそなるものを
今は身に知る哀別離苦の
うさを思へばりんさてまことに
なさけもつらや

やれ、やれ。やつとこれだけは刈つてのけたが、あすになると、又どこぞに咲く事であらう。誰がいつ播いた種か知らぬが、なんぼ刈つても又生える。不思議と罌粟の多い寺ぢや。その又花がどれもこれも、血を見るやうに眞赤なのも因果ぢや。（浮舟を見て）浮舟殿。何を思うてゐる。男の事か。

浮舟　一日の疊めたやうに、男とは。

仁作　可愛い男の事ぢや。

浮舟　氣樂な事を。わしやゆうべから寢はせぬぞよ。

仁作　また殿樣のお伽か。ゆうべもまんじりなされいでか。

浮舟　一睡もなされはせぬ。戸も閉さぬ方丈の縁で、夜一夜月の光を浴びてぢや。時々わしの方を振り向いては、「どうぢや、浮舟。わしの髮の毛は白うなつたか。」と仰しやる聲が、夜露の中から響いて來るやうに濡れてゐた……夏は來ても、夜中は寒い……殿樣は齒の根も合はぬ程がたがたと慄へてぢや。餘りの痛はしさに、もう御寢所へおはひりなされませと申し上げたりや、素直にお立ちなされて、敷居の側まで二足三足お歩きなされたが、ふと物の怪にでも襲はれたやうに、立ち竦うで、いや、いや……あれに姫がゐる。あれに姫がゐる……あれ、あの戸

の後に。」と帛を裂くやうな叫び聲ぢや……その聲の恐ろしさ。わしでさへ戸の後に誰ぞゐはせぬかと疑うた程ぢや……その儘、夜の明けるまでお休みはなされなんだ……月の光の氣味の惡さ……梟も鳴いてゐた……やんがて、光綱樣も御寢所からお伽に見えたが、兄の殿がその有樣ぢや。男泣きに泣き明かされたよ。

仁作　はれ、やれ、哀れな。おりや氣違ひの殿樣よりは弟君の光綱樣の方が可哀さうでならぬわ……あの若い美しい侍が……夜の目も寢ずに兄の殿の御介抱ぢや……戀一つする間もあるまいに。

浮舟　またしても戀か。そなたは戀の事ばかり言うてゐる。

仁作　そんならおぬしは戀知らずか。

浮舟　戀の果はどうなるぞ。

仁作　ふしあはせなりや、殿樣のやうになる。

浮舟　しあはせでも、賴りない。光綱樣はどうぢやと思ふ。

仁作　なに。光綱樣か。うむ。さては、あの日每に輿で通うて來る美しい姬が、弟の殿の……

浮舟　わしや知らぬわいの。

仁作　あれは何處の姬樣ぢや。おぬし知つてであらう。

浮舟　お妹ぢや。

仁作　お妹ぢやと。誰の、どなたの。

浮舟　殺されたお姬樣の。

仁作　殺されたお姬樣の。

浮舟　殿樣の御寢所で、奥方のお手にかかつた、あの春姬樣の妹御ぢや。

仁作　ふむ。それで讀めた。この間から、この寺の近所へ何の用があつて來るのかと思うたが、さては弟の殿に會はう爲ぢやな。

浮舟　わしや知らぬわいな。

仁作　したが、あの春姫とやらは、殿樣と樂しい戀の語らひさなかに、嫉妬の刃に刺し貫かれたと言ふは誠か。夜一夜物も言はれいで、血まみれな體のなきがらを抱きしめてござつた殿樣が、夜の明けると共に、氣ちがひにならしやれたと言ふは誠か。

浮舟　それは御家老の小笠原樣に伺ふがよい。あのおかたが何も彼も御存じぢや。

仁作　そこで、その妹御が……はて、光彌樣はその妹御を慕うてか。ゆうべも泣いてぢやとおぬしは言うたな。

浮舟　（聽耳を立てる）あれ、醫師が見ゆるやうな。それ、御家老と御一緒ぢや……わしやもう行くわいの。

仁作　どこへ行く。わしの部屋へ來て、もちつと詳しい話をしてくれぬか。なう、浮舟殿。浮舟殿。

浮舟　わしや何も知らぬわいの。わしや何も知らぬわいの。

（浮舟、庭の奥へ入る。仁作その後を追ふ。）

（本堂の方より醫師玄齋、老臣清長と話しながら出て來る。）

清長　早いものぢや。もう夏が參つた。この緑のすがすがしさ。吾等の胸も透くやうな。

玄齋　したが、この寺には罌粟の花が多い。あの血汐のやうな赤い色が、殿には何より禁物ぢや。かまへて病人に見せてはならぬ。

清長　そこにぬかりはない。庭作りの仁作に申しつけて、一輪咲けば一輪もぎ取らせ、二輪咲けば二輪摘み取らせてゐるがの。仁作の目にもこぼれがあつて、ついをとつひも裏庭の繁みから、眞赤のが一輪顔を出してゐたものぢや。殿は一目それを見らるると、顔色を變へて、ぶるぶると慄へてぢや。あの夜の恐ろしさがまざまざと見えたのであらうよ。やんがて、殿はつかつかとその花の側へ寄らしやれて、その赤い花をもぎり取らるるとの、ひしとそれを胸に抱かしやれた。さて、それからの物恐ろしい獨り言。吾等、腸を掻きむしらるるやうであつたわい。やがて、水を持て來いとの仰せぢや。浮舟が閼伽桶に清水を汲んで參るとの、それでお手を洗はしやるのぢや……又あの朝の事が思ひ出されたのぢや……ほんに、あの朝は殿の手も足も血まみれぢやつたわい。吾等それを洗うたがの。どこにもここにも血がこびりついて、一通りでは落ちなんだ……殿は吾等の洗ふ間、笑はしやれた……止度もなう笑はしやれた……吾等はあの笑ひ聲を一生忘るる事は出來まい。

玄齋　おぬしはその場に居合せたのぢや。おぬしは何も彼も知つてをる……そこで、おぬしはあの殺された春姫の妹御を知つてか。

清長　（優しく）うむ。あの竹姫樣か。

玄齋　おう。あのお方の名は竹姫か。實はその竹姫殿が手前方へ參られた。

清長　それは吾等も知つてをる。

玄齋　おぬしにも話されたか。

清長　うむ。吾等にも話された。

玄齋　何の故やらいまだに分らぬ。不意に來て、義綱様に會ひたいと仰せらるゝのぢや。

清長　さもあらう。さもあらう。

玄齋　したが、あれは殺された姫の妹ではないか……怨みを言ひに來たのかとも思うたが、どうも様子がさうでない。

清長　なんで怨みなどを言ひに來ようぞ。

玄齋　したら、何しに參つたのぢや。

清長　哀れな事ぢや。

玄齋　話してくれぬか。

清長　因果な事ぢや。

玄齋　うむ。さては……あの竹姫も殿に心を寄せてゐたのか。

清長　竹姫様の戀は弟の殿ぢや。光綱様ぢや。それを知るは吾等一人、いつぞやも殿のお供で、この裏庭を歩いてゐると、ふと姫に行き會うた。殿は姫の顔を一目見らるゝと、名を呼ばしやれた。姫が逃げうとすると、その袖を捉へて「義綱に會はさう。」と仰せらるゝぢや。そこまでは、正氣よりも確であつたが、姉君に瓜二つの竹姫様ぢや。ふと亡き姫が面影に立つたかして、殿は俄に顔色を變へて、「許してくれ。わしも死ぬ。」と悲しさうに仰せらるゝぢや。姫は驚いて逃げてしまはれたがの。吾等は又新しう泣かされた事ぢや。

玄齋　さても哀れな。殿はまだ姫の血に浸(つか)つてをらるゝのぢやな。生きもせず死にもせずに。

清長　いや。それを誰が知らう。殿は吾等の命より、もそつと深い、もそつと廣い命を生きてをらるゝのぢや。殿の命を操る絲は吾等思ひも思

はぬ。それを知る者は神の心のみぢや。

玄齋　誠に殿の片言隻語は、吾等の眠れる心を覺ますぢや。

清長　（本堂の方へ耳を傾ける）殿はまだ眠つてをらるるかの。（間）

（仁作の歌ふ聲、裏庭より聞ゆ。）

めせめせ草花何々ぞ
妻待つ夕顏白菊の花
美人草に戀草
すんど秋風の立たぬ間に
なびかさんせをみなへし
おさしあひはござんせぬかいの
ちよつとかるかや

清間　うむ。眠つてをらるる。なう、醫師殿。殿の寢顏を見て、殿の暗い命を思ふ者があらうか。吾等は殿の熟睡してをらるるを見ると、まだ元服もなされなんだ頃の、清い幼な顏を又見るやうな心地がする。

玄齋　誠にさうぢや。昔の心が眠りの上を浮んで來るのぢや。根のない花が靜な水の上を浮んで來るやうにの。

清長　眠りが覺めたら、正氣になるといふ事はあるまいか。

玄齋　ないとは言はれぬ。殿の心はどこもそこなはれてはをらぬ。

清長　どうぞ、さうあつて欲しいものぢや、竹姫樣とゆるゆる話でもなされたら、癒らうも知れぬが、それも心の儘にはならぬ。

玄齋　竹姫様にここへお出での筈ぢや。

清長　それはいつの事ぢや。

玄齋　けふぢや。今朝ぢや。

清長　したが、姫が分からうかの。何を姫に仰せられうかい。姫はあの朝の恐ろしさを思ひ出されて一言もよう口は利けまい。

玄齋　姫はその朝参られたのか、

清長　知らせを受けると、飛んで参られた。布に包まれた死骸が渡された。姫は布を上げて姉君の顔を見ると、頬ずりをして泣かしやれた。やがて供の者にそれを擔（にな）はせて、朝霧の中を母君の許へ急がれた。

玄齋　それでも、姫は殿を怨みはなされなんだか。

清長　何を怨まう。貴方にも罪はない。二人の戀にも罪はない。

玄齋　それに。なんで氣が狂はれた。

清長　それが悲しい天道ぢや。

玄齋　なによりもけふの出會が大切ぢや。不意と癒られうも知れぬ。

清長　したが、死なれうも知れぬ。

（仁作の歌、又聞え來る。）

知らぬ昔はよそなるものを
今は身に知る哀別離苦の
うさを思へばのんさてまことに
なさけもつらや

玄齋　や。お目覺めになつたやうぢやぞ。

清長　（本堂の方へ歩きながら、小聲に）もうそこへわせられた。

（仁作の鼻唄、なほ繁みの内に聞ゆ。）

（狂へる少將義織、綠色の狩衣着て、本堂の階に顯れ、怪しげに微笑みつつ、足音を竊むやうにして階を降りる。）

義織　うさを思へばのんさてまことに、なさけも辛(つら)や。（兩手を前へ延ばし、何笑ひつつ、そつと醫師の方へ進む。淸長は身を退き、やがて本堂へ姿を隱す）どうぢや、玄齋。聞いたか。仁作の歌を聞いたか。

知らぬ昔はよそなるものを
今は身に知る哀別離苦の
うさを思へばのんさてまことに
なさけもつらや

聞いたか。好い歌ではないか。したが、玄齋……

玄齋　（義織の手を取る）今までお休みでござりましたか。手前參りました時、本堂の窓の側で、ようお休みでござりました。

義織　ほう、見たか。あの白い蝶がわしの目の前を行つたり來たりするのを。わしが目を開くと、蝶は窓に留まつてゐた。捕へようとしたら、逃げた。日光の中へ消えてしまうた。（惱ましげに額に手を遣る）どうも、あの蝶はここから逃げたやうな氣がする……ここから逃げたのぢや。こゝから逃げたのぢや。あの蝶の目の前を飛んでゐる間は、よう眠られた。靜に寢てゐたとそちも申したな……わしは水の上に浮ぶ花のやうな心地でゐた。

玄齋　又お目をお閉ぢなされたら、そのやうなお

心地におなりでござりませう。

義織　いや。その目を閉づるといふ事が、容易な事ではない。わしは時々眼瞼がなくなつたのではないかと思ふ事がある。そちはあの泣き姫の話を知つてをるか。あまり泣き過ぎたので、下眼瞼が柳の葉のやうに土の上まで垂れ下がつて、晝も夜も目が明き通しに明いてゐたといふ、あの哀れな姫の話を。さう言へば、ゆうべわしも……(突然、恐怖の色、顔に現る)

玄蕃　(義織の問を逃げ、その手を引いて、日向へ出る)さあ、さあ。この明るい所へお出でなされませ。まあ、よくお顔をお見せ下さりませ。けさは何といふ御機嫌のよいお顔をしてゐらつしやるのでござります……や……お召物も御新調でござりまするな。とんと若葉のやうなお色でござりまするな。

義織　(自分の妻を見る)この狩衣が氣に入つたか。これはわしが光綱に申しつけて作らせたのぢや。「綠の狩衣を作つてくれい。わしが森の中にはひつても、木の葉が驚かぬやうにな。」とかう申したのぢや。すると、光綱がこの狩衣を持つて參つた。けさ著るのが始めてぢや。そちにも氣に入つたか。もうこれさへ著れば木の下に寢る事も出來る。草の中にころがつても好い。そつと木の葉の側に寄つて、木の葉の密語を聞く事も出來る……(子供のやうに笑ふ)　そこで、わしは光綱に申した。「この狩衣には好い夢をやらう。」とな。そこで、けさわしはこの狩衣を著て、夢を見る爲に窓の側で寢た。すると、光綱の待つてゐた戀人の來る夢を見た。したが、弟はよ

だそれを知らぬのぢや……あいつ、ゆうべ泣きをつた。まだその夢を知らぬからぢや……

うさを思へばのんさてまことに
なさけもつらや

(裏庭の叢みを見て笑ふ)そちは弟に會うたか。弟と話したか。弟は月の話をしたか。

玄齋　月の話とは。

義繼　わしが月と仲よう遊んだ話ぢや。わしは少しも泣きはせなんだ。月がやさしう守をしてくれたでな……(突然、詞を切りて、食指を脣に當てる)そちにはあの鈴の音が聞えるか。(音樂でも聞くやうに暫く耳を傾けてゐる)　好い音色ぢや。聞えるか。

玄齋　あれは蜂の唸りでございます。

義繼　いや、いや……そちには聞えぬのぢや。

玄齋　手前は年をとつてをりまするで……耳が遠いのでございます。

義繼　そちの髮の毛は白いな。わしの髮の毛は……白うない。(又恐怖の色、顏に現る)わしはどうぞして髮の毛を白うしたい。ゆうべも月の光に夜一夜さらして見たが、つひに白うはならなんだ。「どうぢや。白うなつたか。」と浮舟に尋ねても、あいつまるで違うた返事をしをつた。浮舟はいつもわしの言ふ事を聞かぬ。いつも他の事ばかり思うてゐる……そこで、わしは浮舟に訊いて見た。「そちにはあの高殿(たかどの)の白い孔雀が見えぬのか。」と。ああ、さうぢや、わしは月の話をする筈であつた。わしはその白い孔雀を幾度

も見たのぢや。見るといつも泣き出すのぢや。

玄蕃　お泣きになつてはなりませぬ。男が泣いてはなりませぬ。

義繼　悲しうて泣くのではない。悲しうて泣くのではない……羨ましうて泣くのぢや。そちはその白い孔雀の話を知つてをるか。

玄蕃　一向に存じませぬ。

義繼　百合姫といふ姫があつての。それが清彦といふ若者と戀に落ちたのぢや。姫は高殿から繩梯子をおろして、毎晩庭で男に會うた。或晩百合姫の夫がそれを見つけての、その繩梯子に罠を作つて置いた。姫は直ぐとその罠に落ちて、首を絞められた儘、夜一夜中空に釣り下がつてゐた。すると夜明けに美しい白い孔雀が高殿から東の方へ飛んで行つた。繩梯子にはもう姫の姿がなかつたと言ふのぢや。その白い孔雀は時時ここへも飛んで來る。あれは慥かに百合姫の魂ぢや。わしは、あの白い孔雀が羨ましうてならぬ。ゆうべもわしは、あの白い孔雀に言うた。「孔雀。孔雀。百合姫の孔雀。そち程しあはせな者はない。そちはそちの手の内に戀人の死ぬのを見ずに濟んだ。そちはそちが戀人の血で息の詰まるのを覺えずに濟んだ。そちはそちが戀人の許へ通ふその繩梯子で急に咽喉を締められた。そちが泣く事はない。泣いて好いのは義繼だけぢや。泣いて好いのは義繼だけぢや。」かう言ふと、白い孔雀がわしの側へ飛んで來て、わしの手を涙で洗うた。そして、かう言ふのぢや。「わしはそなたの弟ぢや。光綱ぢや。そなたも決して泣く事はない。わしはそなたに好い夢を持

つて來た。」（急に手を太陽の方へ延ばす。やがて、眩暈するやうに、よろよろとして、廊の柱の一つを抱き、それに頬を摺り寄せる。目を閉ぢた儘、息を跳ませながら暫くその儘にしてゐる）

玄齋　（優しく）　さやうに御興奮なされてはなりませぬ……たつた今殿樣は木の下で靜に橫になりたいと仰しやつたではござりませぬか。青葉のやうなお召物につけても靜になさらにやなりませぬ。木の葉はそのやうに喚き立てはいたしませぬ。

義繼　（怪しきばかり靜なる聲にて）そちにはあの鈴の音が聞えぬか。あれは姫百合が微風に鳴る音ぢや。聞えるか。（身を屈めて耳を傾ける）人の死ぬ時鳴らすやうな鈴の音ぢや。（間、突然、身を起す）や。輿のきしむ音がする……誰ぞ來たな……おう、戀人ぢや。……光綱、光綱。

玄齋　（狼狽して、それを押し留める）　さやうにお呼びなされますな。

義繼　なぜ、呼んではならぬ。光綱はどこにをるのぢや。

玄齋　（躊躇して）誰ぞ參つたのでござりまする……もう光綱樣がお出で遊ばしたのでござりませう。

義繼　（喜んで）　光綱は會ひに行つたか。もう戀人と一緒にゐるか。ああ。わしの夢は噓ではなかつた。光綱はしあはせ者ぢや。わしはあれを呼ぶまい。あれを呼ぶ用はない。瞬きする間も振り向いたら、あれは樂しい時を失ふのぢや。わしは呼ぶまい……だが、わしはあれに會ひたい。あれの新しい顔が見たい。あれの新しい聲

が聞きたい。あれの可愛い顏は皮を剝いだ巴旦杏のやうぢや……今頃はさぞ赤くなつてゐる事であらう。（笑ふ）どうしたらわしの姿を見せすに、向うの姿を見る事が出來よう。（裏庭の繁みを覗き込むやうにする）そつと繁みの中へはひつて行かう。木の葉の面をかぶらう。兩手に草を結ひつけう。したら、わしは體中靑うなる。そこで、草の中を潛つて行くのぢや。わしは竹姫があれに會ふ場所を知つてゐる……あすこへは百合姫も通うた……

玄齋（狂者の幻想を遮るやうに）お聞きなされませ。又輿のきしむ音が聞えまする。

義織（再び身を起す）聞える……段々近う來る……

…見ろ、見ろ、玄齋。義織と木が一つになるぞ。（突と樫の木の側に驅け寄り、その木の葉の中に首を突き入れる。兩手に二つの枝の先を持ち、それを折り曲げて、首を卷く。そして暫く木の葉に顏の隱れた儘にしてゐる。狩衣の袖まくれて、兩の腕肱まで現る）

玄齋　まるで木と一つでござりまする。

義織　木の葉が靑う透き通つて見えるぞ。わしの目が靑うなつたやうぢや。おう。小さな木の葉が、わしの肩の上に乘つてをる。柔かな木の葉ぢや。わしの息で溶けてしまひさうぢや。おう、溶けて來たぞ。うまい。蜂蜜の雫を啜るやうぢや。

玄齋　それは何よりでござりまする。いつまでもさうしてお出でなされませ。

義織　かうしてゐれば、木と一つぢや。光綱が側へ來ても氣がつくまい。わしはあれが竹姫と言ひ交す戀の囁きを、聞き洩らすまい。光綱は何

んと言ふであらうな。分かつてゐる、分かつてゐる、それはそれは優しい詞ぢや。泣いてゐる者は笑ひ出すわ。死にかかつてゐる者は生き返るわ。光綱が默れば、この世は雲のやうに消えてしまふわ……あつ。（叫びを上げる）血汐ぢや……（再び恐ろしき叫びを上げて、木を飛び離れる。枝が一本折れる）血ぢや。血汐ぢや……（恐ろしげにおのれの腕に赤き血の小さくにじめるを見つめる。總身がたがたと慄へ出す）

玄齋　（義繼の手を取つて慰める）大丈夫でございます。大丈夫でございます。これは血ではござりませぬ……これは小さな蟲が殿樣のお腕に留まつてゐるのでござります……御覽なさりませ。これは臙脂蟲でござります。御運の好い兆でござります。そのやうに慄へる事はござりませぬ。御覽なされませ。もう何もなりはいたしませぬ。

義繼　（尚惱ましげに慄へつつ）いや。そこにも見える。ここにも見える……わしの體中血だらけぢや……玄齋、早うこの血を取つてくれ……木の葉の中は清淨ぢやと思うたが、やはりここも汚れてゐた……きのふも、わしは森の中で、傷のついてゐる木を何本か見た。

玄齋　あれは木樵が印をして置くのでござります。

義繼　草の中にも赤い滴りがあつた。

玄齋　あれは山櫨の花でござりまする。

義繼　いや。いや……（慄へながら、おのれの額や手に觸れ、その手をぢつと見る）

玄齋　殿樣のお手は白百合よりも白うござります。

義鐵　（櫨の木から折れ下がつてゐる枝に目をつける）わしは枝を折つたのぢやな。（その側へ近寄り、悲しげにその折れた枝を見る）　何んといふ酷い傷ぢや。折口が木の汁で濡れてゐる。木の命は悉くここから流れ出るのぢや……わしはむごい事をした。むごい事をした。

玄齋　御配慮には及びませぬ。その傷は自然と癒りまする。木は又新しい枝を出しまする。

義鐵　したが、この枝はどうなるのぢや。

玄齋　輪なりとお作りなされませ。

義鐵　（急に子供らしき微笑を浮べる。折れたる枝をもぎとりて、笑ひながらそれを輪にする）

　知らぬ昔はよそなるものを
　今は身に知る哀別離苦の
　うさを思へばのんさてまことに
　なさけもつらや

わしはこれで光綱に冠を作つてやる。見ろ、この枝には葉もある、花もある……まだ開かぬ花がある。これを弟が冠ると、花が咲くのぢや。糸はないか、金糸はないか。浮舟、浮舟。

玄齋　浮舟はあれに参りまする。手前は暫くおひまを頂きまする……誰ぞ待つてをるやうでござります故……御機嫌ようお出でなされませ……冠をおこしらへなさりませ。

義鐵　（笑ひながら、機嫌よく、腰を屈めて挨拶する）では、玄齋。又會はうぞ。（醫師の本堂の方へ行くを目もて追ふ）

　思ひそめたよこさ業の

色に出でじと包むに餘る
そでに涙はのんさてまことに
こぼれぞかかる

(歌の詞を繰り返しつつ、靜に裏庭の繁みへ進んで行く。浮舟に會ふ。やがて、二人繁みに隱れる。)

(光綱、廊の下手より足音をぬすみて出で來る。兄の行方を見定めて、さて合圖をする。竹姬、本堂の後より恐る恐る出で來る。二人は恐ろしげに暫く無言にて寄り添ひ、なほ義繼の姿を隱したる森の繁みを見入る。仁作の歌、裏庭より聞え來る。)

めせめせ草花何々ぞ
妻待つ夕顏白菊の花
美人草に戀草
ずんど秋風の立たぬ間に
なびかさんせをみなへし
おさしあひはござんせぬかいの
ちよつとかるかや

光綱　(抑へ聲にて) 兄は今森の方へ參りました……あなたの輿を見つけるに違ひありませぬ……したら、歸つて參りませう。(竹姬、驚く) 歸つて參つたら……歸つて參つても、ここにお出でなされまするか……兄にお會ひなされまするか。

竹姬　(氣遣はしげに) お目にかかりたうござります。(光綱、二三步裏庭の方へ進みて、あたりを見廻す)

光綱　歸つて參る樣子はござりませぬ。森の中に

は大好きな場所がござりまする故、そこへでも参つたのでござりませう。（倒れ木を指さす）先づ、これへお掛けなされませ。（二人ならんで腰を卸す。竹姫は何か思ひ迫りて、口も利けぬ様子。顔色青ざむ）この庭には罌粟の花がたんと咲きまする。したが、醫師が兄に見せてはならぬと申すので、庭作りが毎朝刈つてしまひまする。あなたのお庭にも花がたんとござりませうな。

竹姫　空木（うつぎ）がたんと咲きまする。

光綱　母君は大層花がお好きであつた。今でもお好きでござりまするか。

竹姫　この頃は何を見ても悲しさうな顔をしてござりまする。

光綱　（躊躇して）まだ悲しんでをられまするな。

竹姫　（相手の顔をじつと見て）あの日の朝と少しも變りませぬ。

光綱　あなたのお詞も慰めにはなりませぬか。

竹姫　道ならぬ戀ではあるが、誠の戀に捨てた命ぢや。惜しうはないと申してをりまする。

光綱　それでは何も彼も御存じか。

竹姫　奥方にも罪はないと申してをりまする。

光綱　して、あなたのここへ參らるるをも御存じか。

竹姫　よう知つてぢや。母も一度義織様に會ひたいものぢやと始終申してをりまする。それ程嫗を思うてくれたお方ぢや。會うたら嬉しさに死なうも知れぬが、それでも會ひたいと申してをりまする。光綱様、あなたのお噂も申さぬ日はござりませぬ。

光綱　なに、わしの事までも。

竹姫　母はあなたがこのやうな寺にゐて、夜の目も寢ずに兄君の御介抱遊ばすをどんなにか褒めてをりませう。母はあなたをまるで自分の子か何ぞのやうに思うてをりまする。なう光綱樣。一度妾が屋敷へお越し遊ばして、母にお會ひなされませぬか。

光綱　參る段ではござりませぬ。（熱情面に現る）參る段ではござりませぬ。

竹姫　妾と一緒にお出でなされませ。母はまあどのやうに喜ぶ事でござりませう。きつと久しぶりで笑ひまする。

光綱　二つの悲しみが出會ふのでござりまする。心を知り合つた悲しみと悲しみが、顔を合せて笑ふ事でござりませう。

竹姫　したが、あなたと妾はどうなるのでござりませう。（二人顏を見合はせて、同じ感動に打たれる。光綱不意に立ち上がり、つかつかと裏庭の方へ進む。竹姫もその後を追ふ。間。）

光綱　（又もとの所へ戻りて坐る）兄は歸つて參りませぬ……兄はけさあの綠の狩衣を著たのでござりまする。あれを著ると何も彼も忘れた樣子でござりまする。きつと機嫌よう遊んでゐるのでござりませう。

竹姫　妾も一時はあの血汐に膽を潰しましたが、もう今ではそれも忘れました。流された血汐は又妾の身内へ戻つて參りました。そして前よりも淸い心で一際あなたをお慕ひ申すやうになりました。

（裏庭の奥に義繼の姿現る。その顔は木の葉の冠り物に蔽はれ、兩手には草の葉結びつけらる

狂人は怪しきばかり物靜に、廻廊の方へ進み來る。）

光綱　（竹姫に向ひ、慄へ聲にて）したが、そのわしは、かやうな寺の住人でござりまするぞ。狂氣と悲嘆の外には何もない寺の住人でござりまするぞ。

竹姫　あなたには妾の心が分かりませぬ。

光綱　それが若し分かりましたら……（突然、兄の足音を聞きつけて、詞を切る）兄が來ました。それへ來ました。

（二人、顏色を失ひて、物言はぬ緑色の幽靈にぢつと目を注ぐ。長き沈默。）

（狂人、廻廊の下に立ち留る。なほ折れたる木の枝にて作れる輪を持つ。眼笑ふ。白く美くしき齒、木の葉を通して光る。竹姫はそれに目を注ぎて魅せられたるが如く凝立す。光綱、狂人に近寄る。）

光綱　兄上。

義織　わしは兄上ではない。（一歩前へ進む）わしは兄上ではない。わしは草木の仲間にはひつた。草木はもうわしを恐れはせぬ……わしは仲間と一緒に森の中で、そち達の來るのを待つてゐた。そち達は樂しい話をしながら、わし達の仲間の側を通るであらうと思うてゐた。わしの仲間の草や木は喜んでそち達を迎へようと思うてゐたに……なぜそち達は嘘をついた。（竹姫と光綱、顏を見合はす。狂人は二人の方へもう一歩進む。裏庭に浮舟の姿現る。やがて、仁作も繁みから顏を出す。仁作、浮舟の側へ行く。暫くして、二人又繁みの中へ姿を隱す）義織は緑の狩衣を貰うた禮に、光綱に、好い夢をやる約束をした。仁作が歌を歌う

てゐる時、窓の側で見た夢ぢや。その夢には戀人がゐた。戀人は青葉の中を輿で來た。したが、義繼がまだその話をせぬ内に、光綱はゆうべ泣いた方丈の緣から、戀人の來る姿を見て、物をも言はずに飛んで行つてしまうた。哀れな鳩ぢや。哀れな鳩ぢや。（弟の側へ近寄り、草の葉を縛りつけし兩手を、その額に觸れる）

光綱　（氣遣はしげに）兄上。それは何を仰しやりまする。

義繼　（竹姬に向ひて）この男を御覽なされ……美しい男ではござらぬか。この男は透き通る程美しうござる。なんぞ大事なものがあつたら、この男の中に入れて御覽なされ。透き通つて見えまするぞ。何處の國にもこの男ほど澄み切つた川はござらぬ。山奥から涌き出る清水のやうな男ぢや。わしはこの男をそなたに進ぜよう。どうぢや。連れて行つてたもるか。直ぐとここから連れて行つてたもるか。

光綱　（宥めるやうに）兄上。兄上。もうそのやうな事は仰しやりますな。兄上は何も御存じないのぢや。

義繼　いや。義繼の事を憂ふるには及ばぬ。あれは一人殘されても、一向構はぬ。あれはそちがくれた緣の狩衣を持つてをる。草木が友達になつてくれる……そちのやうに優しい草木が仲よしになつてくれる。さらばぢや……（ふと左の手にした木の枝の輪に氣がついて、詞を切る）見ろ。わしが窓の側で夢を見てゐた時、仁作が歌を歌うた……そちはあの歌を知つてをるか。

思ひそめたよこき紫の
色に出でじと包むに餘る……

これがその紫の冠ぢや。わしはそちの爲にこの冠を作つて置いた。折れた枝で作つたのぢや。悲しや、枝を折らねば冠も出來ぬ。見ろ。傷はまだ新しい。（前に枝を折りし橙を指さす。木の枝の輪を光綱の頭にのせる。輕い足取りで後へ下がる。聲が低くなる）さらばぢや。さらばぢや……わしはもう義織ではない……あとで森を通るか。そんなら、待つてをる。待つてをる……（光綱、絶望したやうに竹姬の顏を見る。冠を頭から取る。冠、地の上に落ちる。直ぐ兄の後を追ひ、その袖を摑む）

光綱　兄上。兄上。先づ。お聞きなされ。あなたは何も御存じないのぢや……まあ、これへお出でなされ。これへお出でなされ……（狂人の手を引きて、竹姬の前に立たせる。竹姬、石のやうになりゐる）なう、兄上。このお方が分かりませぬか。よう顏を御覽なされ。とつくと顏を御覽なされ……分かりませぬか。分かりませぬか……（狂人、突然、木の葉を顏より拂ひ捨てる。目を据ゑて、竹姬の顏をぢつと見る）分かりませぬか。竹姬殿でござりまするぞ……妹御の竹姬殿でござりまするぞ……（狂人、いきなり兩手の間に、竹姬の頭を挾む。竹姬顏を仰向けて、死人のやうに目を瞑りゐる。狂人恐ろしきまでぢつと姬の顏を見る内、突然叫びを上げて、重き物にても捨つるやうに、姬を放す）

義織　あ、姬が死ぬる。姬が死ぬる。

光綱　いや、いや……よう顏を御覽なさりませ。

義織　わしは又重い死骸を抱いたやうな心地がし

た。
光綱　いや、いや……よう顔を御覧なさりませ。分かりませぬか。姫はあなたの前に立つてをられまする。分かりませぬか。
義繼　（恐怖の餘り、眼眩む）　誰が立つてをると、誰が。誰が。
光綱　妹御でござりまする……竹姫殿でござりまする……まだお分かりにはなりませぬか。よう顔を御覧なされ。とつくと心を落ちつけて御覧なされ。とつくと心を落ちつけて御覧なされ。
義繼　妹ぢやと。どうして妹が來たのぢや。どうして來たのぢや。（再び恐るるやうに、竹姫の顏に目を据ゑる。兩手から草の葉をもぎ取り、我が手をぢつと見る。やがて、體中に手を觸れて見る。狂氣やうやう激しくなる。）どうして來たのぢや。春姫を取りに來たのか。母の所へ姫の死骸を運びに來たのか……姫には一滴の血の汚れもない……姫の血汐は悉くわしが浴びてしまうた……見ろ。この手を、胸を、胸を、髮の毛を……わしは姫の血汐で息が詰つた……ああ。怨んでくれるな。怨んでくれるなと言うてくれ。わしは姫を捨てたのではない。わしはもう生きてはをらぬのぢや……姫は死んだのではない。わしの手に抱かれて眠つたのぢや……姫はわしの胸に抱かれて喜んで目を閉ぢたのぢや。そして、その目をもう明かなんだのぢや。わしは姫の暖い血汐に包まれて、たとへやうもない喜びを味うてゐた。すると、わしの抱いてゐる體が段々冷たうなつた。氷のやうになつた。石のやうに重うなつた。鐵のやうになつた。たうとう死骸になつた。も

う一度と、二度と、三度と生き返らぬ不思議なものになつてしまうた……。（がたがたと膝を慄はせて、地面の上に倒れる。両手に顔を蔽ひたる光圀、その有様を聞きつけ、兄の側へ走せ寄りて、兄を扶け起さうとする。老臣清長も駈けつけて来て、狂人を抱へ起す。狂人は両手を竹姫の方へ差伸ばして、何事をか哀願する態）どうぞ、母上に怨んで下さるなと言うて下され。わしはもう生きてはをらぬのぢや。どうぞ姫と同じ棺へ入れて下され。姫と一緒に埋めて下され。わしを一緒に埋めねば、姫を埋める事は出来ませぬぞ……なぜなら、姫の血汐は悉くわしに附いてをるからぢや。姫の命は悉くわしの體にあるからぢや……（烈しく身を悶えて、二人の手を振り放す）放してくれ。放してくれ。わしに觸るな。わしを洗ひに連れて行くつもりぢやな……わしは行かぬぞ……わしは行かぬぞ……わしはこの儘かうしてここにゐたい。この儘かうして母君に見られたい……（急に気を失ひさうにする。地面の上へ横に倒れる）かうして埋められて。

（少し前より姿を見せたる醫師玄齋、竹姫を倒れ木の方へ連れ行く。竹姫両手に顔を掩ひつつそれに腰を卸す。光圀その方へ静に歩む。醫師は狂人の上に身を屈め、手を觸れる。狂人、意識を回復する。頭や肩や脊を撫で摩す）

玄齋　（身を屈めたる儘）お休みなされてござりまするかな。なぜかやうな所にお休みになりまするな。白い蝶が飛んで行つてしまひましたぞ。森の方へ……殿様は先程木の下で静に寝たいと仰しやりましたな。そこへ御案内いたしませう。その白衣で青葉の下にお休みなされたら、どんなに静に眠

れませう。殿様は草や木と一つにおなりでござ
いませう。どうでござります。そこへ御案内い
たしませうか。

義綱　（あたりを見廻す）　さうぢや……そこへ行て
そこへ行て……木の葉と一緒に眠らう……（老
臣清長、悲しげに頭を垂れて去る。光綱をば倒れ木の
側に立つ、竹姫、立ち上がる。二人して、裏庭の方へ
進む。竹姫も一度振り向いて、狂人をぢつと見る。や
がて二人姿を隱す。稍暫く沈默。）

玄齋　さあ、參りませう……お手を取りませう。
（義綱を抱き起さうとする）

義綱　わしはもう力がない……どうかもうちつと
待つてくれ。たつた今、わしは森にゐたやうな
氣がする……わしは草のやうに横になつてゐた
……誰かがわしの上を踏んだ……確に誰かがわ
しの上を踏んだ……待つてくれ……わしは今起
きる程に……（やはりあたりを見廻して居る。やが
て橙の木に目をつける）見ろ。玄齋。あの木にあ
んなに蜂が集まつてゐる。蜂は蜜を吸はうとし
て、花の咲くのを待つてゐる……（あたりを見廻
し、自分の捨てた木の葉の冠と木の枝の冠とに目をつ
ける）それから、その木の葉は。その冠は。
（一道の光明、朦朧とした心を照し始める）　光綱は
何處にゐる。光綱は何處にゐる。（額や頰や脣に
手を觸れる　何も彼も忘れたやうな様子になる。足を
引き摺るやうにして、木の枝の冠の方へ行く。拾ひ上
げる。それをぢつと見ながら、子供のやうに笑ふ）
思ひそめたよこき紫の……

——幕

（Gabriele D'Annunzio: Sogno d'un Mattino di Primavera に據る）

塵境　三幕

人物

野村伸吉　富める大地主
權爺　その地方の最年長者。八十歳
友爺　水車小屋の雇人
お松
おさだ
お富
お淺
おりえ
六造　牧羊者
仁作　牧羊者
（以上）野村の雇人
村長

場所

東北の或深山地方

序の幕

或岩山の頂上近き所。雪ところどころに殘りゐる。前も後も右も左も山。後の高き山には白雪皚皚たり。細き山道、上手より下手へ降るやうになりゐる。下手高き所に粗末なる羊飼の小屋。

（朝の四時頃。星なほ天にあり。後景悉く霧に包まる。前景には曙光既に迫り來りなり、小屋の周圍仄明かるし。舞臺暫く空虚。沈默。やがて、羊の鈴の音がする。）

仁作　（姿見えず。下より）おうい。

六造　（姿見えず。下手より）おうい。

（やがて、仁作、山造の上手より頭を現す。六造、下手、小屋の後より姿を現す。）

六造　誰だ。仁作か。えら早えでねえかの。

仁作　われも早えでねえか。

六造　どけえさ行ぐだ。羊連れて。東か。

仁作　あによ。雉子（きじだび）さ行ぐだ。

六造　狼に氣いつけろよ。

仁作　大丈夫だ。おら短刀持つてるだ。それに、犬さ連れて來ただから。

六造　あにしても、氣いつけねえぢやなんねえだ。

（この間に、兩人近寄る。上手下に羊の首につけたる鈴の音す。）

六造　けふは好い天氣になるぞ。

仁作　霧が晴れたらなあ。

六造　上さ行ぎたら、みんなに宜しく言つてくらつせえよ。

仁作　誰にも會はねえだか。

六造　三月この方人つ子一人見ねえだ。又こんで、われが上さ登つてしめえば、おら幾月立つたら口動かすか分かんねえだ。

仁作　寂しくねえだか。

六造　寂しいにやあ寂しいが、おら一人が好きだ。夜も晝も勝手に夢さ見られるだからな。こんねえなしあはせな事は外にねえだ。おら寢る前に、この山の神様にきつと二つ願かけるだ。一つはお袋や親父の爲に願かけるだ。おら二人ともちつとも覺えちやゐねえけんどな。今あ神様の右と左にぶつ坐つてるべえと思つての。おらが事何もかも見てゐて貰ふだ。もう一つの願はよ。こりやあ神様へ毎晩内しよで賴むだ。六造に嫁

さ貰ひてえとな。

仁作　（笑ふ）あんだ。嫁だ。われ、女ち者知つてるか。一度でも女ち者見た事あるか。口利いた事あるか。

六造　そりやあ、こねえなとけえ女の來る筈あねえ。だがの、年に一度、山ん下の村の祭に行ぐでな、そん時、遠くから見た事あるだ。だが、おらきつと今に嫁持つべえと思つてるだ。

仁作　（笑ふ）

六造　笑ふ事ねえだ。おら眞劍だぞ。ゆんべもおら小屋ん中に寢てゐての。いつもの願を一つかけてな。二度目の願を半分言ひかけると、ぐつすり寢込んでしまつただ。それで夢見ただがな。その夢だよ。おらの羊が一度にみんな山下の方へ逃げ出しただ。おらその跡を追つかけての。石い一(ひと)つぽんと投げただ。獸ら驚いて留まるだらうと思つてな。ところが、その石があの蛇沼ん中へ落ちただ。すると、あの沼の水がの。鍋かなんぞのやうに、ぶくぶく泡吹いて來ての。そん中から雲のやうなものが涌いて來ただ。それが段々はつきりして來たで、目を据ゑて見るとの。それが、われ、女でねえか。手の眞つ白ななあ。漆のやうな黑い髮の毛えした別嬪でねえか。おら、たまげたぞ。ところが、その女、水の上渡つて、おらがの方へ寄つて來るでねえか。さうして、につこり笑ふでねえか。おら、思はず膝あ折つて、手え合はしたぞ。おらあさう思つただ。これが今におらがの嫁になる女だとな。山の神樣あおらがに嫁としあはせくれべえ思つて、そんで、夢で知らしてくれただ。

仁作　嫁としあはせを一緒くたにして考へてゐるな。ところが、嫁としあはせぢやあ、てえした相違だぞ。今に、そりやあ、われにも分かるこんだけど。

六造　おらが嫁はどつちから來るかな。（石を一つ拾ひ上げる）この石一つ天へ投げて見るだ。石の落ちたところから、きつとおらの嫁が遣つて來るだ。（石を投げる）

野村仙吉の聲（上手の下から）誰だ。石投げんのは。あぶねえぢやねえか。人がゐるぞ。

仁作　あれ。誰か登つて來たぞ。

六造　構ふもんか。誰もおらがんとけえ來る筈あねえだ。

仁作（透かして見て）旦那だぞ。野村の旦那だぞ。われ、旦那様を知らねえだか。こけえら一圓、牧場も、畑も、森も、川もみんな、旦那様のものだ。おら達みんな、上の羊飼も下の羊飼も、みんな旦那様のけらいだぞ――見せえ。あの一緒に來るなあ、村一番の年寄いだ。權爺と言つてな。もう九十にもならうよ。

六造（冷淡に立上がりながら）おらあ小屋へへえるだ。おらに用あるなら、おら呼ばるに違えねえだ。

（のろのろと後の方へ行く。）

仁作（ぢつと下の方を見る）あれ、二人の外にもう一人來るなあ、女だぞ。（笑ふ）たうとう山の神様、六造に嫁さくれるだか。

（仙吉、お松、權爺、登場。）

仙吉　六造はゐねえか。

仁作　小屋にゐますだ。

仙吉　權爺、行つて呼んで來い。（仁作に）貴様は山下の乳でも持つて來い。腹がへつた。

（權爺と仁作、小屋の方へ登り行く。權爺は小屋へ入る。仁作は小屋の外に乳など運ぶ用意をする。）

お松　旦那様。なんで、おらこねえなとけえ引つぱつて來ただ。

仙吉　心配することあねえだ。ちと考へる事あつて、連れて來ただ。

お松　なんだか、早く話して聞かしてくらつせえよ。

仙吉　心配しねえでも好いだ。お前はいつもよくおれの言ふ事を聞いてくれたな。その代り、おれもお前を可愛がつて遣つた。お前が乞食の娘で、お母と親父と一緒にこの山下の村へお貰ひに來た時分の見じめさはどうだつた。おれはお前が氣に入つたから、お前の親父を水車小屋の番人にした。それはお前の器量に惚れ込んだからだ。ところで、今ぢやあ、お前があの水車小屋の主人だ。そんでおれに拂ふものと言つたら……（にやりと笑つて）安いものよなう。

お松　でも、そりやあ爲方ねえだ。お前様あおらの御主人様だもんな。

仙吉　さうだ。御主人様だ。だから主人としてお前に言ひつけるだ。

（六造、上の方に現れる。）

仙吉　あの男を見ろ。どうだ、可愛い奴でねえか。年も若い。強さうな男だ。おらああれをお前の亭主にする事にきめた。

お松　（驚いて逃げ歸らうとする）おら厭だ。あん

な者の女房になる位なら、蛇沼へ身い投げるだ。
仙吉　まあ、待て、ばか。おら言ふ事を聞くだ。もうかうなつたら爲方がねえだ。
お松　勘辨してくらつせえ。
仙吉　お前の爲にも好いと思つたから、きめた事だ。六造を亭主に持て。
お松　（仙吉に取られた手を振り拂つて）放してくらつせえ。旦那樣。おら厭だ。おら厭だ。
仙吉　まあ、よくあの男を見ろちや。
お松　やだ。やだ。おら厭だ。（振り拂つて、下の方へ逃げて行く）
（六造、お松の直ぐ側まで來て、口を明けて女の樣子を見てゐる。）
（仁作、乳な運んで來る。それから、小屋の方へ歸つて行つて、無關心に何か外の爲事をする。）
六造　（まだ驚いたやうに、ぼんやり女の行くへを見詰めてゐる）好え女だなあ。
仙吉　おい、六造。われこねえな所にゐて面白いか。
六造　面白いち事もねえけんど、別にはあ不足はねえだ。旦那樣。
仙吉　もつと好い暮らしがしてえとは思はないか。
六造　でも、どうしたら好えだか、分かんねえものな。
仙吉　そりやあ、羊飼も惡くはない。だが、もつと好い爲事あつたらどうしるだ。おらこの山下に水車小屋一つ持つてるだ。われあの水車小屋の番人にならうとは思はねえか。
六造　はて、飯せえ食へりやあ、あんでもしるだ。
仙吉　水車小屋の上に、しかも女房一人附けて遣

るぞ。

六造　女せえおらがの氣に入りやあ、おら厭とは言はねえだ。

仙吉　今見たらうで。あの女だ。

六造　（驚いて）あに、今見た女だと。旦那樣、おらがをからかふ氣だな。それとも、おらあまだ夢見てゐるだか。

仙吉　まあ、おらがの側へ來て、よく聞くが好えだ。水車小屋には今番人ゐねえだ。あれの親父死んだでな。ところで、おらお前の事を考へついた。よけりやあ、山を降りて來い。そして、さつきの女を女房に持て。お前を水車の番人にして遣るだから。

六造　それ、ほんの事かね。旦那樣。

仙吉　ほんの事だによ。

六造　はれまあ。あんちうしあはせなこんだ。おらがの夢はたうとう本物になつたぞ。

權爺　旦那樣からわしに御相談があつたでの。わしお前の名をさう申しただ。わしはもう長い間、この山へは來た事がねえが、お前の事あよく知つてるだ。お前は元氣の好い若え者だ。さあ、早く承知をして、神樣にも旦那樣にも禮を言ふが好いだ。

仙吉　どうだ。承知いしたか。

六造　だが、女の方はどうだ。おらがを氣に入らねえと言つたらどうしるだ。厭だと言つたらどうしるだ。

仙吉　大丈夫だ。それおらに任しとくが好いだ。

六造　でも、今あの女、おらがを見ると、逃出したでねえか。

仙吉　女といふものはさうしたもんだ。好いから、早く支度をして，山の下へ降りて來い。あした直ぐ婚禮しるだ。その支度もおらがみんなして置いただ。

六造　あに、あすだ。もうあす直ぐ婚禮しるだか。

權爺　早過ぎる事はねえだ。しあはせが來ただ。しつかり摑まへて放すでねえだ。

（仙吉、權爺、歸る用意をする。）

仙吉　では、水車で待つてゐるぞ。

六造　きつと參りますだ。

權爺　待つてるぞ。

（仙吉、權爺、山を降る。）

六造　仁作、聞いたか。今ん話を。神樣、たうとシおらがに女房くれたぞ。おら、谷へ降りるだぞ。

仁作　（上から降りて來る）あんだ。われ谷へ降りると。あの狹（せせ）つこましい所へか。小さな家のごちやごちや立つてる所へか。あすこは空氣い惡いぞ。第一、埃だらけだぞ。とても、この山のやうな氣持の好い事にやあ行かねえぞ。毎日人が喧嘩したり口論したりばかりしてる所だぞ。それでも、われこの靜な山あ捨てて行く氣か。どうでも谷へ降りる氣か。

六造　しあはせになりに行ぐだ。おらがの羊はわれに賴んだぞ。旦那樣がおらがの代りよこすまでな。

（霧、段々霽れて來る。太陽の光、白雪に輝きて、日映ゆし。）

六造　さあ、もうこの山にも別れだぞ。峯でも谷でも草場（くさば）でも、おらがの知らねえ所はねえ。こ

の山にも別れたぞ。

（六造、靜に山を降る。）

六造　好いか、仁作。俺は頼んだぞ。狼い氣いつけてくんろ。われも達者で暮らせ。下へ降りても、われが事あ忘れねえぞ。（犬を呼ぶ）黑よ。われも達者で暮らせ。おらがの事も忘れるな。

（段々姿が見えなくなつて、聲だけが聞える。）

六造　仁作よ。達者で暮らせよ。おてんと樣おらがの道を照らしてゐるぞ。おらあ仕合せになりに行ぐだぞ。……（聲、なほ聞える）

――幕

前の幕

水車小屋の内部。上手に大なる水車。但し、靜止す。その上に木の樋。但し、その中に水なし。下手に小さき戸口。戸口の下に一段ほどの階段。上手に別の戸口。正面奥に大なる入口の扉あり。兩開きにて、開けば、この地方の景色見ゆ。遥なる地平の上に、雪を持ちたる前の幕の山の遠景。下手前に大なる籠。そここに穀類の入いたる袋。粉ひきの石臼、その他。日沒少し前。

（友爺、穀物を篩にかけてゐる。野村の雇女、おさだ、お富、お淺、一緒にはひつて來る。）

おさだ　友爺、ほんの事かね。

お富　それとも、嘘かね。

お淺　話してくんろよ。

おさだ　早く聞かしてくんろよ。お松つ子、ほんまに婚禮しるだかね。

友爺　（知らん顔をして、篩を空にし、やがて又新しくそれに穀物を入れる）

　裏の水口明ければほんに
　待つてゐるだよ花嫁樣が……

おさだ　聞えねえだか。友爺や。あんとか返事い
してくれちや。

お淺　ほんまにお松つ子は……

お富　婚禮しるだか。

おさだ　ほんの事か。

お淺　それとも、こしれえた話か。

お富　跡形(あとかた)もねえ事か。

三人　聞かしてくれちや。返事してくれちや。話
してくれちば。

友爺　(前のやうに)

　裏の水口明ければほんに
　待つてゐるだよ花嫁樣が……

おさだ　は。爺や腹あ立つてるな。お松つ子に嫌
はれたで怒つてるな。お松つ子の父さんが死ぬ
と、われ喜んで、小屋の番人さなつたつけが、
一年經つても、お松つ子はわれ亭主にしべえた
あ言はねえだ。

お富　誰言ふ者あんべえ。

おさだ　爺過ぎるだからのう。男わる過ぎるだか
らのう。

お富　意地惡だからのう。

お淺　まあ、そねえな事どうでも好いから、お松
つ子の事話して聞かしてくらつせえよ。お願え
だあから。

友爺　(前のやうに)

裏の水口明ければほんに
待つてゐるだよ花嫁様が……

お富　その待つてゐるなあ、爺や、われかね。

おさだ　一ておえ、お松つ子どこにゐるだね。

お滝　そだ、お松つ子、どこにゐるだね。

お富　水車にゐるだかね。

友吉　（態と横を向く）

おさだ　呆れた頑固おやぢだ。

（正面の戸口より、年の若いおりえ、何か縫ひながらはひつて来る。閾の上に立ち留る。）

おりえ　おら鶏みんな小屋さ入れただ。ちつとへえつても好いだかね。

お富　好いとも。好いとも。

おりえ　おらお松姉えとけえ来ると、いつもみんなして叱るでねえか。けふは叱らねえか。お松姉え、えらくおら可愛がつてくれるだから、そんで、おら遊びに来るだよ。

おさだ　おりえつ子。何か聞いた事ねえか。

お富　なにか噂聞かねえか。

お滝　聞いたら、話せちや。

おりえ　（當惑して）あに話したら好いだ。

おさだ　われ權爺に會はねえだか。

おりえ　會つただ。權爺ならいろいろ話してくれただ。

三人　ふむ。どねえな話しただ。どねえな事言つただ。

おりえ　權爺が言ふにやの。こけえらにあるもなあ、みんな旦那様のものだとよ。野村の旦那様の。おら達の家でもよ。水車でもよ。旦那様住

んでござらつしやる、あの立派な屋敷でもよ。山の上のものも、山の下のものも、みんな旦那様のものだとよ。

お富　そねえな事あ誰でも知つてるこんだ。

おさだ　珍しくもねえ。

おりえ　まあ待てよ。おらもつと知つてる事あるだ。權爺が言ふにやの。これから歩き出して、あすの朝まで休まずに歩くとしるな。その途中の森でも畑でも牧場でも川でも瀧でも、みんな旦那様のものだとよ。花でも鳥でも魚でも蝶々でもみんな旦那様のものだとよ。野村の旦那様の。

おさだ　そねえな事あ、誰でも知つてるこんだ。

おりえ　だが、おら知らなかつただ。おら山から來た權爺に聞いて、始めて知つただ。

おさだ　して、權爺は今どこにゐるだ。

おりえ　權爺は旦那様と一緒に、あの雪のある笠子山登つて行つてな。羊飼一人連れておりて來ただ。その羊飼がの。姉え達。今夜、お松姉えと婚禮しるだとよ。

三人　そうれ見ろ。だあから、言はねえ事か。

友爺　（出たりはひつたりしながら、總てを聞いて）たうとう知つてしまやがつただ。

お富　（おりえに）今夜か。誰がさう極めただ。

おりえ　誰がきめたと。旦那様がきめたにきまつてるだ。お松姉えと羊飼と一緒にしる事も旦那様きめただ。姉えが旦那様のものだとは、前から知つてるたつけが、その時分にやあ。はあ、何のわけだか分からなかつただ。

お富　あんだと。

おりえ　おゝ聞いた事あるだ。

おさだ　そんだら、なぜ今まで黙つてゐただ。

おりえ　だとつて、何のわけだか分かりもしねえ事を、人に話すなあ、おら厭だもんな。

二人　好いから話せちや。聞かしてくれちや。

おりえ　いつの晩げだつけの。お月様牧場あ照らしてゐた時な、おら草つ原へ横になつてゐたとの。川つぷちを姉えと旦那様連つて歩いて来るでねえか。姉えは泣いてゐるだ。そして、こねえな事言つてゐるだ。おら、お前のもんだ。どねえな事しても離れるこんちやあねえ。つてな。そして、又泣き出しただ。すると、旦那様が言ふにやの。「われがどんな男部に持つても、おれがどんな女女房に持つても、おれはお前のものだ。いつまでもお前のものだ。」と、かうだ。おら、おらの耳で確にかう聞いただ。さあ分からねえだ。姉えが旦那様のものだと言ふに、不思議はねえだ。おらだつて、誰だつて、みんな旦那様のものだあからな。だが旦那様が姉えのものだ言ふなあ分からねえだ。

おさだ　ふむ。ふむ。そんで。そんで。

友爺　黙らねえか。阿魔。お松つ子来たぞ。

（女達、お松がその部屋より出て来る事とのみ思ひて、下手の小さき戸口の方を見詰める。ところが、お松は上手なる水車場の戸口から出て来る。お松は首うなだれて女達の方は見向きもせずに、舞台中央まで来る。女達のそこにゐるのに気がつくと、急いで自分の部屋へ駆け込んでしまふ。）

おりえ　はれ、行つてしまつた。

おさだ　お松ちや、お松ちや、お前本まに婚禮し

るだあか。

お富　どうも、さうらしいぞ。婚禮しるらしいぞ。

（友爺、正面の戸口から外へ出る。）

お富　あの驢馬、あんにも知らねえだ。馬鹿おやぢめ。あんにも知らねえだ。あんにも知らねえで。はは、お松つ子と……ははは。

（三人して笑ふ。）

おりえ　あに笑ふだ。

おさだ　婚禮はめでてえものな。

お淺　この婚禮は、はあ、別してめでてえものな。

お富　この話いしたら、誰でもはあ笑ふぞ。お松つ子が、ははは、羊飼と、ははは、友爺の馬鹿おやぢが、ははは。

おさだ　今夜は、はあ、みんなで祝ひに來べえぜ。

お淺　みんなして、みんなして　祝ふべえよ。

（お松、怒り泣きに泣きながら、下手の戸口から姿を現す。）

お松　みんな歸れちや。おら、誰の顏見るも厭だ。

おさだ　はれ、ま、お松ちや、どねえしただ。

お富　わしらあ、もうみんな知つてるだ。

お松　歸れちや。出て行けちや、

お淺　お松ちや。わしらお前に……

お松　歸れちや。歸れちや。歸らねえか。

（女達が歸らうとしないと、お松はそこに置いてあつた女達の手籠などを、正面の戸口の外へはふり出す。）

お松　出て行け。みんな出て行け。

（女達叫びながら逃げ去る。）

おりえ　（戸口のところに唯一人殘りゐる。）あんねえ。おらも出て行くだか。あんねえ。おら、お

りえつ子だに。

お松　（優しく）はれ。おりえつ子か。われなら好いだ。こけえ来い。こけえ来い。

おりえ　あんねえの顔べた濡れてゐるだに。

お松　構はねえだ。

おりえ　なぜ、泣いたりなどするだ。

お松　おら、もう笑ふ事あ出来ねえだ。

おりえ　でも、あんねえは婚禮しるのでねえか。

お松　婚禮しると……そうだ。おら、なぜしめえまで厭だと言はなかつただ。こんねえな間違つた婚禮、世の中にあるべえか。まるで、はあ、氣違えの婚禮だ。おら悲しいだ。誰も、はあ、おらの味方あねえだ。誰も、おらの力になつてくれる者ねえだ。

おりえ　あんねえ、おらがゐるでねえか。

お松　（相手の詞を聞かずに）誰も、はあ、おらの困つてる時、助けてくれるもなあねえだ。あんだ、あの六造見てえな男、あれがおらの亭主だ。おら顔見るも厭だ。おら一人でゐてえ。おら一人でゐる方が餘つ程好いだ。

（表に人聲が聞える。）

お松　おりえつ子。行つて見ろちや。野村の旦那でねえかな。おら泣いてるとこ見られると、旦那樣にぶたれるだ。

おりえ　そねえな事しる法はねえ。

お松　いや。そでねえだ。おら泣いてると、えらくぶたれるだ……

おりえ　分かんねえな。悪い事しもしねえものが、なんでぶたれるだ。

お松　まあ、好いから、なんにも言はずと、行つ

て見ろちや。

（無理に、おりえを外へ押し出す。）

お松　おらあ旦那のもんだ。旦那の自由になんねえぢやならねえだ。だが、おら何惡い事しただ。なんで、こねえな苦しみしねばならねえだ。おら死にてえだ。

（表に人聲聞える）

お松　おら連れに來ただな。あの莫迦も來たに違えねえだ。おら顏見るも厭だ。

（自分の部屋へ駈け込む）

百姓達　（正面の戸口の外にて）來たぞ。來たぞ。

おりえ　何處に。何處に。

おさだ　山降りて來ただ。お前まだ見ねえだか。

お淺　今直ぐこけえ來るだよ。

お富　花聟樣がよ。

（一同笑ひながら、下手へ去る。）

友爺　（權爺を連れてはひつて來る）ぬしに、ちと聞きてえ事あるだ。

權爺　あんだ。

友爺　ぬしやあ、始めてこけえ來たか。

權爺　始めて來た。わしや山に住んでるでな。この村へはまだ來た事ねえだ。

友爺　そんでも、俺の旦那、野村の旦那樣あ知つてるだか。

權爺　立派な旦那衆だ。有難え旦那樣だ。

友爺　だら、他の事はあんにも知らねえか。

權爺　どねえな事だ。言つて見せよ。

友爺　六造たらいふ奴あ莫迦者か。そんでねえなら惡者か。

權爺　なぜ、そねえな事聞くだ。はあ、讀めたぞ。

われ、お松つ子に惚れてゐるだな。そんで……

友爺　ふざけるでねえだ。

權爺　たら、なぜそんな事言ふだ。

友爺　まあ聞け。直ぐ分かるだ。一體、あの娘は親父と一緒にこの村へ乞食して来ただ。ほんまの親父だかどうだか、そりや誰にも分からねえがな。あにしても、可愛い娘つ子だつたあよ。そんで、野村の旦那様あ、娘可哀さうだちつて、この水車小屋その親父にくれてやつただ。それから、旦那とお松つ子は……もう、あとは言はねえでも分かつてるだ。

權爺　嘘だ。そら嘘だ。

友爺　まあ、しめえまで聞けよ。そんだら、あんで、あの娘つ子に亭主なんど探して来ただ。旦那はの、近頃ちつとんべゑ工合悪い事あつてな。借金澤山こしれえただ。愚圖愚圖してゐると差押へたらいふ事されるちうだ。さうすりやあ、おのでつけえ身上みんな飛んで行つちまふだ。ところへ、丁度好い縁談持ち上がつただ——大金持のお嬢さんがの、旦那と一緒になりてえ言ひ出しただ。さてさうなると、悪い噂あつちやなんねえ。お松つ子との事も、さつぱりと片つけにやあなんねえだ。そりや世間の當り前でねえか。そんで分かつたろ。お松つ子が、あの莫迦もんの女房さならなけりやならねえわけがよ。

權爺　そりや嘘だ。（立ち上がる）

友爺　誰にでも聞いて見るが好いだ。誰一人知らねえもののあねえ事だに。

權爺　たとつて……

友爺　好い年して、おらがのやうに笑はれるが好

いだ。

権爺　莫迦こくな。

友爺　莫迦とはなんだ。

（二人が棒切れを持つて、猛り立たうとするところへ、外から大勢の人聲が聞える。二人、手を引く。）

（六造、おりえ、お富、お淺、おさだ、その他男女大勢、物騒がしくはひつて來る。夕映やうやく夜の薄暗になる。）

おさだ　（正面の戸口の外で）來たぞ。來たぞ。

お淺　六造が來たぞ。

お富　花聟様が來たぞ。

六造　（戸口の所に立ちて）さうだ。おら來ただ。山から谷へ駈け降りて來ただ。おら來ただ。だがのし、あの人は何處にゐるだ。おらがの花嫁様は。

おさだ　（呼ぶ）お松ちや。お松ちや。

お富　出て來せえ。われが花聟、山から來たぞ。

六造　（一同の、笑ひながら自分の廻りへ押し寄せ來るを見て）はれ、みんな嬉しさうな顔してるだな。おら婚禮しるで、みんな喜んでくれるだな。われ、お松つ子知つてるだか。好え女でねえか。

おさだ　お松つ子はほんとに器量よしだあよ。

お富　村一番の娘だあよ。

お淺　われ、仕合せ者だな。

六造　禮言ふだ。おら、みんなに禮言ふだ。こねえな仕合せ來ようたあ、おらも知んなかつただ。まあ、考へても見ろさ。お松つ子がおらがの女房になるだ。おら、目え廻りさうだ。お松つ子が、おらものになるだ。今夜からおら女房になるだ。

権爺　（友爺に）野村の旦那様に限つて、われの言

ふやうな事ねえだ……

友爺　自身で聞いて見るが好いだ。野村の旦那様によ。見ろ、旦那様来ただから。

（野村仙吉、入り来る。）

おりえ　旦那様。入らつせえまし。

仙吉　六造はまだ来ねえか。

六造　来てるだ。旦那様。もうちやんと来てるだ。おら、旦那に禮言ふだ。

仙吉　お松は何處にゐる。

おさだ　部屋にゐるだ。

仙吉　行つて、呼んで来い。

（おさだ去る）

仙吉　（六造に）もう支度はみんな出来てるぞ。仲人には村長頼んだだ。もう一時（いつとき）すると、お前ら夫婦になるだぞ。盃取り交すだ。それでもう何も彼も濟むだ。

六造　なんと禮言つたらよかつぺえ。なあ、旦那様。

おさだ　（お松の部屋から出て来る）直んぐ来るとよ、お松ちや。

仙吉　直ぐ来るとは何だ。おらが来たら、呼ばねえでも出て来るが好いだ。

（お松の部屋に近づく）

仙吉　お松。

權爺　（仙吉の後を追ひながら）旦那様、わしちつと話あるだ。ちつとんべえ心配な事だで。

仙吉　お前の心配がおれに何の關（かかは）りあるだ。あとにしろ。

權爺　さうでねえだ。みんなの爲だ。直ぐでなけりやなんにもならねえだ。

（この途端に、お松、自分の部屋の戸口に現れる。）

仙吉　やつと出て來やがつただ。（つき纏ふ權爺に）うるせえ。あとにしろちや。あとにしろちや。

お松　（階段を降りて來る）さあ、旦那様、めえりましただ。（さう言ひながら、仙吉の直ぐ側へ寄り小聲に）旦那様。お願だから、勘辨してくらつせえ。

仙吉　（大聲に）どうしただ。なぜ、そんなに塞いでるだ。まあ聟の六造を見ろ。お前は仕合せもんだぞ。

おりえ　はれ、あんねえは泣いてるだに。

おさだ　子供見てえだの。

お松　（急いで涙を拭く）誰だ。おらが泣いてるなんて誰が言つただ。旦那様の言ひつけだ。おら嬉しいだ。見ろつちや。おら笑つてるだ。

六造　さうだともよ。婚禮ほどめでてえ事外にねえだもの。なあ、みんな。（一同笑ふ、お松に）みんな、あねえに喜んでくれてるだ。なぜぬしやあおらがに一言も詞かけてくれねえだ。一言もよ。なぜだ。

お松　もう行かうでねえかよ。

仙吉　（六造の著てゐる物を指さして）これえな汚ねえ装で盃の取り交せは出來ねえ。著物の支度もしてあるだ。お聟様はめかさなくちやいけねえだ。好い男にならねえと花嫁に嫌はれるだからな。

男達　あれがめかすのだとよ。

女達　好い男になるだとよ。

（一同、聲を上げて笑ふ。）

六造　あに、笑ふだ。あに、をかしい事あるだ。をかしくもねえ事笑ふと、頬げたはり曲げるぞ。

（拳を固めて、一人の男に近づく。女達叫び散る。大喧嘩が始まりさうになる。）

お松　みんな逃げろよ。この莫迦あ、なにしるだ。

仙吉　六造。

六造　（直ぐと氣を靜める。混雜止む）おら、腹立ちつぽくていけねえだ。

仙吉　まあ。好いから、早く着物着て、婚禮の支度しろちや。村長が待つてるだ。

六造　さあ、みんな來て、おらがのめかす手傳ひしてくれちや。おら惡かつただ。さあ、みんな笑つてくれちや。おらが祝え日だ。おらがの婚禮だ。みんな喜んでくれちや。

（男達、六造と共に上手へ去る。）

おさだ　（女達に）窓から覗いて見べえよ。覗いて見べえ。

女達　そだ。覗いて見べえ。

（女達、中央の戸口から外へ出る。丁度その時村長が來る。女達ぴよこぴよこお辭儀をする。）

權爺　（仙吉に）旦那樣。わしほんとに話あるだがな。大事な話だに。

仙吉　（煩さげに）そんなに急ぐ用なら、外で待つてゐろ。直ぐ行くだから。

權爺　では、待つてをりますだ。旦那樣。（去る。）

（この間に、村長入り來り、仙吉の側に立つ。）

仙吉　村長。待遠だらうが、まだ花嫁にちよつと言ひ聞かして置く事あるだに、一足先きへ行つて貰えてえだ。だが、おら行くまで式は待つてるだぞ。式はみんな一緒の所でなけりやなんねえぞ。

（村長去る。）

（お松は總てこの間、無關心にて、後の方にある石臼に腰をかけてゐる。舞臺が空になると、彼女は默つてぢつと仙吉の姿を見詰める。）

仙吉　お松よ。

お松　旦那樣。おら旦那にどねえ事しられても構はねえだ。だが、あの男と一緒にする事だけはどうかよして貰えてえだ。

仙吉　（嘲るやうに）お前にやあ、もつと可愛い男があるだからな。さうだな。（お松を引き寄せようとする。お松逃げる）お前、おら怨んでゐるだな。何も怨むこたあねえだ。お前はおらがもんだ。やつぱりおらがもんだ。お前はいつまでもおらがもんだと思つてるが好いだ。さあ、ここへ來い。まだ話あつから。（荒々しく女の手を摑む。女の從順なのを見ると、安心して笑ふ。）お前、あの六造が怖えか。

お松　怖えといふ事もねえけんど。

仙吉　なら、おらの言ふ通りするが好いだ。おらだとつて、この婚禮平氣で見ちやゐられねえだ。お前にあの男氣に入られちやなんねえんだ。

お松　でも、何もかも承知で亭主になんなら、まだ好いだ。旦那樣、あの男だましてるだもんな。そりやあ、あの男莫迦にしると言ふもんだ。（表に聲高な笑ひ聲聞える。お松仙吉を離れる。）おら莫迦にしると言ふもんだ。

仙吉　お前とおらとの仲に變りはねえだ。おらやつぱりお前に惚れてるだ。分かつたか。

お松　なんだか、おら心配でなんねえだ。

仙吉　おら、この世にお前より可愛い女、外にねえだ。おら一度でもお前捨てた事あるか。おら

今お前を外の男に遣るだが、どうも、そりや、さうしねはならねえ事になつたからだ。おらも婚禮するだが、おら相手の女を何とも思つてるぢやねえ。持參金貰えてえばかりだ。そりや、お前もよく知つてるな。何せえ、相手は町長の娘だで、世間の悪口防がにやならねえだ。おら、世間の爲に、お前を六造にやるだ。おら、ちつともお前遣りてえ事はねえだ。おら、お前に惚れてるだかんな。おら、お前がなけにや生きちやゐられねえだ。おら、どうしてもお前放す事ぢやねえぞ。

お松　おら、あんだか恐ろしいな。

仙吉　なに、恐ろしい事あんべえ。おら、お前が可愛くてなんねえだ。

お松　旦那樣—

仙吉　まだ、お前にやおらが心分かんねえか。おらお前を遣るなあ厭なんだ。分かつたか。厭で厭でたまらねえんだ。

（表に又笑ひ聲聞える。）

仙吉　どうだ。婚禮しに行くか。

お松　參りますだ。

仙吉　だら、愈六造の女房になるか。

お松　なりますだ。

仙吉　それでも、やつぱりおらのもんでゐるか。

お松　（逃げる）だめだ。だめだ。

（また表で笑ひ聲が聞える）

お松　（思はず仙吉の側へ飛んで行く）さあ、もうみんな迎ひに來ただ。

仙吉　（勝ち誇つたやうに笑ふ）よし。よし。今に又お前はおらん所へ歸つて來るだ。

（六造・お淺、お富、おさだ、おりえ、その他の男女入り來る。）

男達　六造はどうしてもめかすなあ厭だちうだ。

女達　好い著物著るなあ、どうしても厭だ言ふだ。

六造　おら、あんねえな莫迦くせえもな著られねえだ。著てえ者あ著るが好えだ。おら厭だ。おらこの古い著物の方が餘つ程好えだ。

仙吉　お前がそれで好いなら、おら構はねえだ。さあ、お松、支度は好いか。

お松　おら、いつでも好いだ。（仙吉に小聲で）さあ、もうこれで、二人の事あ、おしめえだ。

仙吉　（小聲で）おら、さうは思はねえだ。今夜もおら、お前んとこへ行くつもりだ。お前の部屋に明かりがついたら、おらが來ただと、さう思へ。

おりえ　あんねえ、羽織だ。

（權爺、正面の戸口からはひつて來る。）

お松　禮言ふだ、お前ふんとに可愛い子だな。

おりえ　あんねえが可愛がつてくれるから、おらがもあんねえを好くだ。なあ、あんねえ、いつまでも可愛がつてくれちや。

お松　おいよ。（仙吉に）旦那樣。これ見せえ。おらがも昔はおりえつ子のやうに罪がなかつただ。まだ、この水車へ來た時分はよ。

仙吉　（脇を向く）さあ、みんな、出かけるだ。

（廣く開かれたる正面の戸口より、人々行列を作つて出で行く。五六の男は炬火を手にする。お松はおりえの肩に手をかけて、戸口へ向ふ。六造、そこに待ちゐる。男女押し合ふ。）

權爺　（仙吉に）旦那樣。わしどうしても旦那樣に言ひてえ事あるだ。その返事聞くまでは、この

婚禮させる事ならねえだ。

仙吉　（權爺に）なんだと。（躊躇してゐる男女に）さあお前ら先きへ行け。おら直ぐ行くから。

六造　（門の外で）さあ、出かけろ。さう押しちやなんねえだ。おら、お松つ子と列んで歩くだ。さあ、出かけろ。

（一同笑ひ戯れながら、無秩序に去る。權爺、友爺殘る。）

仙吉　（友爺に）何の用あるだ。友爺。貴樣婚禮へは行かねえのか。

友爺　行かねえだ。おら、こねえな婚禮へは行かねえだ。

仙吉　なぜ行かねえだ。わけえ言へ。

友爺　言はねえだ。言はねえ方好いだ。

仙吉　では、言ふな。その代り、荷物ひつちよつて、ここ出て行け。

友爺　はあ、出て行くだあとも。

（後の方へ行つて、自分の荷物を纏める。）

仙吉　（權爺に）さて、お前は何言ふ事あるだ。

權爺　わし旦那樣とお松つ子との事聞いてたまげただ。わし、ほんとにしやしねえだ。ほんとにしやしねえけんど、もし、そんねえな事あつたら、六造が可哀さうだ。あいつなんにも知んねえだからな。わしにも罪があるといふもんだ。萬一、そんねえ事あんなら、この婚禮させちやなんねえだ。

仙吉　何處で何聞いて來ただ。言ひてえ奴にやあ言はしとくが好いだ。あと方もねえ事だに。

權爺　（友爺に向ひて拳を振る）ほうれ見ろ。こん嘘つきめが。

仙吉　ふむ、さうか。（友爺に）やい。出て行け。出て行かねえと、ぶちのめすぞ。さあ、出て行け。犬め。

友爺　（既に支度を整へ終り、主人の妾な足の先から天邊まで見上げ見おろして）犬だと。どつちが犬だ。

權爺　旦那様に向つて、そねえな口の利きやうする奴あるか。

友爺　もう旦那でもあんでもねえだ。おら、こんな人一日でも旦那に持つたが怨めしいだ。

仙吉　出て行け。

友爺　出て行くだ。だが、出て行く前に、權爺の前で何も彼もしやべるだ。さあ、それでどつちが嘘つきか極めて貰えてえだ。旦那。お前がお松つ子の部屋へ忍び込むのを、おら見た事ねえと思つてるだか。お前が無理にあの莫迦者お松つ子に押つつけたわけ、おら知らねえと思つてるだか。おらの言ふ事に嘘はねえ。おら手巻山の明神様の前でも、さう言つて見せるぞ。さあ一言でも返事が出來るか。

仙吉　何を言つても、聞く事あねえだ。

權爺　さうか、やつとそれで分かつただ。さあ、えれえ事になつたぞ。こりや村長様のとけえ行つて、この婚禮やめにしにやならねえぞ。

（遠くに手拍子を打つ音聞える。）

權爺　はれ、手拍子打つてるだ。もうだめか。（仙吉に）旦那様、飛んでもねえ事してしまつただね。えれえ事してしまつただね。

仙吉　濟んだ事あ濟んだ事だ。心配するにあ及ばねえだ……早く休むが好いだ。（去る）

權爺　はれまあ、飛んでもねえ事し出かしたぞ。

手巻山の明神様、どうぞ許してくらつしやい。

友爺　（權爺の肩を叩いて）おら行くだ。どうだ。一緒に來ねえか。おら山へ行くだ。又あの高え山へ歸つて行くだ。青い空と綠の草があるだけで、人間のゐねえ所へ、歸つて行くだ。どうだ。行かねえか。

權爺　六造も山あおいて來なけりや好かつただ。

友爺　（戸口にて）どうだ。一緒に行かねえか。

（遠く人の笑ひさざめく聲聞える。）

權爺　まあ、あんちう罪なこんだ。おらとても一人の顏見る事あ出來ねえだ。とても出來ねえだ。さあ、行け。わしも行くだ。

（兩人去る。）

（舞臺暫く空虛。やがて、人聲やうやう近づく。お松舞臺へ入り來る。六造、門の敷居の所に立ち、表を過ぎ行く人々に挨拶する。）

六造　婚禮はめでたく濟んだぞ。さあ、みんな、歸つて寢るが好いだ。機嫌よく寢るだぞ。好いか。は、は、は、は。

外の聲　門しめて、早く寢ろちや。あやかりもんめ。

（聲高なる笑ひ聲聞える。）

六造　（なほ外に向ひて呼ぶ）機嫌よく寢るだぞ。仲よく寢るだぞ。

（門をしめて、前へ來る。お松、竈の前に、首うなだれて坐る。）

六造　さあ、門を締めただ。もう二人ぎりになつただ。そこで、お松つ子、何か一言言つてくれちや。そだ。もうお松つ子ぢやねえ。これ、嚊よ。

お松　何用あるだ。構はねえでくらつし。

六造　はれ、どうしただ。こけえ來て坐れちや。（地面の上に坐つて、笑ふ）さ、こけえこ。こけえこ。（羊でも呼ぶやうに呼ぶ。やがて無邪氣に笑ふ）來い。來い。

お松　（元の所に坐つた儘）構はないでくらつし。

六造　おらまだお前馴らす事は出來ねえだ。待てよ。（懐から小さい布に包んだ銀貨を出す。獨語）さあ、これ餌に馴らして見べえちや。（そつとお松に近づき、小聲に笑ひながら、お松の頭や肩を指で突く）來う。來う。

お松　（身を竦めて）あにしるだ。あに惡さしるだ。

六造　（笑ふ）怒るでねえだ。（布から銀貨を取り出して不器用にお松の目の前に捧げる）さ、手えくれちや。（間。お松、振り向きもせず）これ、松や、手え出せちや。

お松　（六造の手をまるで見ずに、立ち上がつて、行つてしまふ）惡さしるでねえだ。おら冗談しる氣ねえだ。もう遲いだ。早く寢たらどうだ。

六造　まあ待て。強情者……（地面の上に態と音をさせて銀貨を置く）見ろちや。こりや一圓の銀貨だ。おらが始めて儲けた金だ。おらこの金儲ける爲に、考へても恐ろしい事しただぞ。（笑ふ）旦那樣が、野村の旦那樣が、この金くれただ。だあから、この金取つてくれ。あんにも心配ねえだ。おら自分で儲けた金だ。

お松　（六造の手を突きのける。併し、前のやうに邪慳ではない）厭だ。厭だ。おら入らねえだ。

六造　まあ、聞け。おら、並大抵の事でこの金儲けたでねえぞ。おら命がけで遣つた事だぞ。そだ。ふんとに命がけだつたぞ。毎晩、おらがの

羊小屋へ狼遣つて来るやあ、小羊一匹殉取つて行くだ。おらがの一番好え犬も食ひ殺しただ。おら気違えのやうになつて怒つただ。ようし、おら、命捨てても、あの狼取つちめねえぢや置かねえだとな。そこで、或晩げに、おら岩ん蔭に隠れて待つてゐただ。あの狼のぬすつとめ、逃かすこつちやねえぞとばかりでな……（お松、段々興味を持つて来る）おら目えおつ開いて、耳い立つて、隠れてゐただ。頭の上にや星光つてゐただ。もう夜中も大分過ぎたて、そけえらあしいんとしてゐるだ。唯、時々風がの、ひゆうひゆうつて獣あ唄つてるだけだ。すると、不意に草の中でがさがさいふ音がしての。なま暖けえ息がおらの首に当るだ。それが狼よ。犬が吠え出した。羊が鳴き出した。おらあ立ち上がつて、短刀抜いて、待つてゐただ。すると、狼が血だらけな子羊くはへて遣つて来ただ。おら、いきなり飛びかかつて、力一ぺえ短刀突き立てただ。それから先きの事あ、よくは知らねえだ。あんでも、おらが狼に抱きつくと、狼もおらにむしやぶりついただ。狼が吠えるとおらもおらんだだ。おらも向うへ噛みついて遣つたが、狼の歯もおらの體へ突き通つただ。さうして、山あころがり轉がり落ちて、一緒に谷底へ落ち込んだだ。（お松益興味を持て聽く）おらが息を吹つ返すとな。おらの廻りに大勢仲間が立つてゐるだ。そして、おらと列んで、死んだ狼が横になつてゐるだ。谷川の水は、狼の血で眞つ赤よ。それから、みんながおらを小屋へ運んで、傷う縛つてくれただ……それから、あんでも、十日ぐれえ

藁の上に轉がつてゐただな。やつと表へ出られるやうになつたで、日向ぼつこりしてると、そけえ旦那様遣つて來てな。おらがにこの銀貨くれただ。おら、禮言ふべえと思つて、手え突くとな、まだ傷よく直らねえもんで、血い流れて、銀貨あ赤くしただ。だあから、これ容易な事で儲けた金ぢやねえだ。

お松　（感動して）もうおそいだ。休まうでねえか。

六造　だら、この金取つてくれ。おら、お前に遣るだから。

お松　厭だ。そりや貰はねえだ。まあ、好いから、寢るが好いだ。われの部屋あしこにあるだから。

（上手の戸口を指さす）

六造　あに、おらが部屋だ。冗談言ふもんでねえ。二人の部屋がそこにあるでねえか。（下手の部屋を指さす）

お松　冗談ぢやねえだ。おら一人で置いて貰えてえだ。

六造　あんだと……一人でだと……われ本氣で、そねえな事言ふだか。

お松　（困惑して）さう責めるもんでねえだ。おら言ふめえと思ふ事言はなけりやならねえやうになるだから、お前のした事怨まなけりやならねえやうになるだから。お前は何も彼も知つてるだに、お前は悪い人だ、恥知らずだ。

六造　（驚いて）あんだと。おらがわれに何しただ。あんで、そねえな悪態こくだ。何おらが知つてるだ。

お松　（顏を染めて）みんなのわれに言つた事をよ。

六造　言つた事だ。誰もなんにも言やあしねえぞ。

お松　うんにゃ。知らねえ道理ねえだ。知らねえで、そねえな事承知しる者あるか。おら女房にしる以上、お前はお前のした事知つてる筈だ。

六造　あにをおらがしたと言ふだ。うむ。おらのした事は分かつてるだ。仕合せ來たから、それ摑めえただ。おら、いつまでもそれ放すめえと思つてるだ。一生摑めえて放すこつちやねえだ。おら、お前より外に可愛い者ねえだからな。たんだ心配なあ、おらお前を仕合せにしる事出來れば好いと思つてるだ。

お松　（稍困惑して）そねえな事ぢやねえだ。そねえな事ぢやねえだ。

六造　だら、言つて見ろ。言つて見ろちや。

お松　（獨語）ぢや、ふんとに知らねえのかな。欺されてるなだかな。だら、意地悪いこんだ。

六造　話してくれちや。あにがそねえ氣になるだ。おら心配でなんねえだ。どうしただ。何おらお前にしただ。

お松　（六造の知らぬ事を打ち明けようとして悶える）ああ、なんにも言はねばよかつたに。惡く取らねえでくらつし。おら頭割れさうだ……ふんとに、まあ、あの人ああんたら事しるつもりだ。

六造　誰が。誰がお前に何しただ。聞かしてくれちや。

（この途端に、お松の部屋からぱつと明りが差す。）

お松　（びつくりして）はれ、もう來ただな。

六造　（驚いて）や。明かりだな。われの部屋に明かりがついただな。誰かゐるだな。

お松　（恐怖を隠して）誰もゐる筈あねえだ。

六造　うんにや。ゐるに違えねえだ。（懐の短刀を探りながら、下手の戸口へ近づく。）
お松　（引き留めて）誰もゐやあしねえだ。おらが部屋の明かりは、ありや、おらがつけただ。
六造　そねえな事あねえだ。おら達が歸つて來た時、明かりはあしこについてなかつただ。（明かり消える）は。消えたぞ。
お松　われ夢見てるだ。目えどうかしただ。
六造　でも、今われさう言つたでねえか……
お松　われ夢見ただ。おらにはなんにも見えやしねえだ。
六造　あに、明かりが見えなかつたと。
お松　ああ、見えなかつたとも。お前夢見ただ。おらがの部屋に明かりなんどあるわけねえだ。
六造　（不安げに女を見る）おら夢見たのか。
お松　（獨語）まあ、今夜來るなんて。
六造　（思ひ惑うて、獨語）おら明かり見たのぢやねえかな。おら夢見たのかな。
お松　（爐の前に蹲りて）おら夜ぢうここにかうしてゐるだ。（六造に上手の戸口を指さす）お前は行つて寢るが好いだ。
六造　いや、おら行がねえだ。（土間の上に身を横たへる）
お松　（獨語）ああ、頭あ割れさうだ。（苦しき表情）ひでえ事しる人だ。ふんとにひでえ事しる人だ。（憫むやうに）可哀さうに、あの男あ、なんにも知らねえだ。
六造　（悲しげに、殆ど泣き出しさうに、併し、諦めて）おらどうしたら好えだ。分からねえ。堪へるだ。

堪へるだ。堪へて、岩の陰で寢るだ。おら、お前の側にゐてえだ。（段々お松の側へ蹈つて行く）さあ、おら、山の神樣にお袋の事や親父の事願かけるだ。も一つの願はもうかけねえでも好えだ。神樣はおらがに好い嫁樣くれただからな。

お松　ああ、恐ろしい闇だ。

六造　（半分眠りながら）はれ、靜かだなあ。今夜は狼來ねえぞ。今夜は狼…………

——幕靜に降りる

後の幕

前の幕と同じ舞臺。お松と六造、前の幕の終と同じ形でゐる。夜明け。

おりえ　（舞臺の後で）

山の羊は夜でも鳴くが
泣くに泣かれぬ螢草
やつさ、えつさ、ええ。

（お松、目を覺ます。まだ眠つてゐる六造の方をちらりと一目見て、舞臺奥の方へ行き、朝の支度に掛かる。おりえの次の唄の間に、自分の部屋へ消える。）

おりえ　（續けて）

朝は悲しやあの水車
暗い内から思ひ泣き
やつさ、えつさ、ええ。
山にやお日樣夜つぴて泣いた

星はすがれて消えて行く
やつさ、えつさ、ええ。

（歌ひながら、おりえ、中央の戸口より入り來る。胴着のやうなものを縫つてゐる。）

おりえ　お早う。

六造　（目を覺まして）　お松つ子。

おりえ　（笑ひながら）　あんねえおやねえだ。おらだに。

六造　だら、お松つ子どこにゐるだに。

おりえ　それ、お前おらがに聞くだか。よんべから、お前あんねえの御亭主でねえかよ。

六造　よんべから。

おりえ　おら、お前にこれ拵えてやるだ。お前の著り物あんまり汚ねえからな。

六造　よしにしろちや。それ出來る時分にや。おらもうここにゐねえだ。

おりえ　ここにゐねえ。

六造　そだ。おらもうここにゐねえだ。今にこの家ぶつ壊れて、おらが頭ん上へ落つこちて來るやうな氣いしるだ。おらもうお松つ子んとこ出て行ぐだ。おらもう氣い違えさうだ。あんで、あの部屋に明かりついただ。誰が明かりつけただ。おら、その野郎ぶつ殺してえだ。おら、その野郎の咽喉へ短刀突き通さねえだちや、腹癒えねえだ。

おりえ　どうしただ。にいや。おらがにや、ちつともわけ分かんねえだ。

六造　（自ら省みて）　そだ。われの知んねえ事だ。勘辨してくれちや。

おりえ　一體、まあ、どうしただ。（六造、頭を振る）はあ分かつた。お松あんねえ、われ可愛がらねえだか。みんながわれの事笑ふだか。

六造　みんなが笑ふと。

おりえ　そだ。みんな言つてるだ。「六造は可哀さうに」と。そ言つて笑つてるだ。なぜ笑ふだか、おらにや分かんねえだ。

六造　なぜ笑ふだ。あにか、おらがに悪い事あるに違えねえだ――よんべのあれが誰だか分かりせえすりや……

おりえ　なんとでも言はして置くが好いだ。笑ふなら、笑ふが好いだ。お前仕合せなら、それで構はねえでねえか。

六造　仕合だと。おらがか。仕合せなんちもんが、この山下にあるか。この大勢の人住んでる所に仕合せなんちもんがあるか。おら山さ降りて來ねばよかつたと思つてるだ。山は靜かだ。山にゐりやあ、おら、なんにも心配はねえだ。

おりえ　一體、まあどうしただ。話してくれねえだか。おらお前大好きだに。なぜ、そねえな陰氣な事ばかり言ふだ。

六造　（おりえの頭を撫でて）お前や可愛い子だのう。

（お松、出て來る。）

おりえ　それ、あんねえが來ただ。おら行くだ。

六造　行ぐでねえだ。ここにゐろちや。

お松　（ちらりとその方を見て、嫉ましさうな表情をする。やがて爐の側へ行き、火を搔き立てて鍋をかける）

六造　ばかな火だ。ちつとも燃える事ぢやねえ……

おりえ　（お松の方へ近づく）あんねえ。どうした

だ。

お松　おら、もうわれの顔見たくねえだ。出て行ぐが好いだ。

おりえ　はれ、まあ、出しぬけに、どうしただ。

お松　おら、お前に用はねえだ。出て行がねえと、ぶちのめすぞ。

おりえ　おら何しただ。

お松　おら、われの顔見たくねえだ。

おりえ　六造にいやが出て行け言ふなら、おら出て行ぐだ。あの人がここの主人だかんな。

お松　だら、六造にさう言はせるだ。

六造　お松つ子の言ふ通りしるが好えだ。おら、あんにも言はねえだ。好い子だから、出て行けちや。

お松　うんにや。もう出て行つちやなんねえ。いつまでもここにゐるだ。

おりえ　（泣きながら）おら、どうしたら好いだ。どねえしたら好いだ。

六造　行けちや、おりえつ子。おら送つてやるだに。

お松　そねえな事しちやあなんねえだ。お前はおらがの側にゐるだ。お前は……

（言ひかけて、はたと黙る。）

六造　（立ち留つて、ぢつとお松を見詰る）おらは……

お松　（困惑して）おら知らねえだ。おら知らねえだ。（泣き伏す）

六造　（嘲るやうに）お松つ子は、なんで泣く事あるだ。お前は笑ふが好いだ。よんべから笑え通しに笑つてる筈だに。（おりえを抱へるやうにして、戸口へ向ふ）さあ、おりえつ子、一緒に来

せえ。もうこの家へ歸つて來るぢやねえぞ。この家に何あるだ。この家にやあ、不仕合せの外なんにもねえだ。（二人で出て行く）

お松　（やがて、急に二人の後を追ふ）あの人連れて行く事あならねえだ。おら、誰にもあの人遣るこつちやねえだ。（戸口へ突き進む。出會ひ頭に、權爺がはひつて來る）

權爺　どけえ行くだ。

お松　おら知んねえだ。おら知んねえだ。

權爺　六道、しよけ返つて、出て行つたたな。

お松　あに。しよけ返つて。

權爺　そだ。可哀さうに、あの野郎、人に笑はれながら、なせ笑はれるか、そのわけ知らねえだ。あいつの恥い知らねえもなあ誰もねえだに、あいつ一人それを知らねえだ。おら、お前が憎くてならねえだ。おら、お前ぶちのめしてえだ。

お松　だら、ぶつが好いだ。

權爺　おら、お前といふ者が分かつただ。お前は……

お松　ぶつとも叩くともしるが好いだ。だが、おら悪く言はれることたあねえだ。權爺や、お前子を持つたことたあねえか。

權爺　一人持つたが、もう極樂へ行つてしまつただ。

お松　おれ悪く言ふ前に、お前に娘一人あつたと思つて見ろ。そして、お前が先きに死んだと考へて見ろ。お前の娘がこの悪い世の中にたつた一人ゐると思つて見ろ。誰がその娘の味方しるだ。おら死ぬ方餘つ程好いだ。死ぬより外におら助かる道ねえだ。

權爺　あに泣くだ。空涙でねえか。

お松　お前までがそねえな事言ふのか。おらお前の事ちつとも惡かあ思つてゐねえだに、お前までがおらいぢめるだか。

權爺　あにもいぢめやしねえだ。

お松　だとつて、おらの言ふ事聞きもしずに、おらの事惡く言ふでねえか。

權爺　だら、話すが好いでねえか。おら聞くだに。

お松　一體、お前この事の起り知つてるだか。おら嘘あこかねえだ。おらひでえ目に會つてるだ。

權爺　だら、話すが好いだ。

お松　まあ、聞いてくれちや。おら、おらがの父さん誰だか知らねえだ。おら一度も顔見た事ねえだ。なんにも知らねえだ。お母あ南の方で乞食してゐただ。お母あ盲だつた。おら、お母あと一緒に寺の門や往來の端に立つた事覺えてるだ。お母あなんにも言つた事ねえだ。唯、手え前の方へ突ん出して、突つ立つてゐただ。おら、お母にかぢりついて、着り物の裾ん中で泣いてゐただ。ところが或日、一人の男遣つて來て、おら達と一緒になつただ。跛の爺さんだつたよ。それから、三人して乞食して歩いただ。時々、お母あとその爺さんと、夜つぴて喧嘩してゐただがな。或晩、ばかに靜かだと思つたら、お母は地面の上に横になつて、その側に爺さん默つて坐つてゐただ。朝になると、爺さん立ち上がつて、おらがに、お母あ死んぢまつた言ふだ。だが、おらがにやなんの事だか分からなかつただ。おらお母あの事を泣いたなあ、それから餘つ程あとの事だつた。

権爺　ふむ、それから。

お松　それから、その爺さんと二人で、村から村歩き廻つただ。その内、おら段々大きくなつただ。おら何かして働きてえと思つただが、爺さんどうしても放してくれねえだ。爺さん、おら踊らしたもんだ。すると、人がおらがに錢い投げてくれただ。おらそれが厭で、毎晩夜つぴて泣いてゐただ。

権爺　ふむ。可哀さうに。

お松　或日、この村へ二人で來ただ。おら、百姓の前で踊り踊つただ。爺さん、錢い集めてるとの、そけえ旦那様たらいふ人遣つて來ただ。それが野村の旦那様だ。旦那様あ、おらがの頭撫でてな。なんで、われそねえに器量よしだ。何處で踊り習つただ。いろいろ親切に聞いてくれるだ。おら、そねえな詞かけられたなあ、生れて始めてだ。やがて、おらがの主人の方向くとの。どうだ。水車小屋の番人になつて、この土地にゐつかねえかと言ふだ。おら、どうかさうして貰えてえと思つただ。もう乞食して歩かねえでも好いだし、道つ端で踊り踊らねえでも濟むだからな。爺さんは暫く小さな聲で、野村の旦那様と何か相談してゐたつけが、やがて何か約束出來たと見えて――その儘、この土地にゐつく事になつただ。それから、毎日のやうに野村の旦那様が遣つて來て、おらがに物くれて、賴んだり嚇したりしるだ。爺さんは、おらぶつたり、髪の毛ひつぱつたりしるだ。旦那様の言ふ事聞かなけりやあ、又乞食したり踊つたりしなけりやならねえだ……それで、たうとうおら

こんな身になつてしまつただ。

權爺　可哀さうに。

お松　さうだ、おら可哀さうな人間だで。おら決して悪い人間ぢやねえだ。

權爺　そりや、野村の旦那が悪いだ。

お松　おら、牢屋ん中にでもゐる心で暮らして來ただ。六造との婚禮だとつて、旦那が無理にした事だ。おら泣いて厭だ言つただ。だけんど、おら旦那の言ひつけに背中向けることあ出來ねえだ。

權爺　その事にやあ、おれも、相槌打つただ。

お松　ところが、不思議な事あるだ。よんべ村長様とこで婚禮してるとな。明神様のお告げあつたやうな氣いしただ。これがわれの亭主だ。われが今の苦しみ抜けるなあこの人の力だ。こりやあ、われが守り神だ。われが杖柱だとな……それに、六造は……六造はおら好いてるだ。心からおら好いてるだ。おら、そねえな女ぢやねえによ。

權爺　六造はなんにも知らねえだ。今に知つたら、きつとわれさけすむに違えねえだ。

お松　はれ、やつぱりだめかな。情ねえ。おら確に好かれてゐるだがな。おらも六造好いてるだがな。おら、ふんとにあの男可愛くなつて來ただ。おら、ぶたれても好いだ。殺されても好いだ。どねえに怒られても好いだ。おら、あの人可愛がるだ。おら、あの人放す事でねえだ。

權爺　ほんにお前があの男可愛がるなら、お前何も彼も話さなけりやならねえだ。

お松　おらが話すのか。おらがおらの恥いあの人

に話すのか。若し話してあの男行つてしまつたら、どうしるだ。あの男に行つてしまはれたら、おらどうなるだ。

權爺　どうしても話さなけりやならねえだ。お前が話さなけりやならねえだ。もう嘘こいてる時でねえだ。ほんの事言ふ時が來ただ。

お松　言へりや好いがな。おら覺束ねえだ。

權爺　神樣の力借りでも、言はなけりやならねえだ。

（戶外に笑ひ聲聞える。）

お松　女子達が來ただ。おりえつ子も一緒に來るだ。おらあの女の顏見たくねえだ。（去る）

（お淺、お富、おさだ、おりえ、入り來る。）

おさだ　權爺がゐるだ。爺に聞くが好いだ。

お富　お松つ子何處にゐるだ。六造何處にゐるだ。

お淺　一體、どうしただ。話してくらつし。

權爺　おら、なんにも知らねえだ。

おさだ　（出て行かうとする權爺を引き留めて）　まあ待つてくらつし。ちつと待つてくらつし。

權爺　おら、用あるだ。（出て行つてしまふ）

お富　頑固爺めが。なんにも言やがらねえだ。

おりえ　爺はなんにも知らねえだ。おら知つてるだけんど。

おさだ　だら、話して見せえ。

おりえ　おら言はねえだ。

お富　なぜ言はねえだ。

おりえ　なぜでも言はねえだ。

三人　話せちや、おりえつ子。話せちや。

おりえ　（笑つて）　そねえに騷ぐでねえだ。見るちや。六造が還つて來ただ。あの人にぢかに聞

いて見るが好いだ。

（六造、はひつて來る。一同身を退く。）

おさだ　えら、むづかしい顏してるでねえか。

お淺　婚禮した明けの朝だと言ふによ。

お富　挨拶もしねえだな。

六造　お前ら、何用あるだ。

おさだ　穀物持つて來ただ。けふ水車廻すかな。

六造　持つて來たら置いて行ぐが好えだ。水車は廻らねえだ。

おさだ　厭な顏してるだな。

お富　どうかしたか。

お淺　あんべえでも惡いか。

六造　うるせえ。お前らの知つた事ぢやねえだ。

お富　お松つ子は何處にゐるだ。

六造　何處にゐようと、お前らの構ふこつちやねえだ。

お淺　だとつて、婚禮濟した朝けぢやねえか。樣子ぐれえ聞いたつて、あに惡かんべえ。

（三人の女、聲を揃へて笑ふ。）

六造　あに笑ふだ。あに可笑しくて笑ふだ。

おさだ　笑やしねえだ。

お富　（笑ひながら）誰も笑やしねえだ。

六造　おらもう我慢出來ねえだ。（いきなりおさだの肩を摑む）さ、なに可笑しくて笑ふだか言つてしまへ。お前らきのふも笑つた。それに又けふも笑つた。おらお前らに何しただ。お松つ子お前らに何しただ。（兩手もておさだの體を搖ぶる。女悲鳴をあげる。おさだ、六造の手をすり拔ける。六造お淺をつかまへる）さ、言はねえか。このあま。

お淺　お前は莫迦だ。

（六造、お淺の咽喉を掴む。）

六造　なに、おらが莫迦だと。さうだ。おらあ莫迦だ。だが、お前らおらを氣ちげえにしるだ。命ほしけりや言つてしまへ。なぜ、お前ら笑つただ。

お富　お松つ子に聞くが好えだ。

他の女達　お松つ子に聞くが好えだ。

六造　（呆然とする）お松つ子に。おらそれをお松つ子に聞かなけりやならねえか……

女三人　（外へ出ながら）さうだ。お松つ子に聞くが好いだ。

お[illegible]え　（この時まで、恐れゝ後に立ちゐたるが、前へ出て六造の肩に手を置く）あんねえに聞くが好えだよ。

女三人　それ、そけえ遣つて來たど。

（三人走り去る。）

お松　（部屋から出て來て、鍋を火からおろし、臺の上に置く）さあ、飯出來ただ。（小皿に盛りたる菜を出す。庖丁にて何かを刻みにかかる）

六造　おら食へねえだ。おらお前と話がしてえだ。

お松　（六造の側へ來ながら）はて、どねえな話してえだ。

六造　（急に手を振る）もう好えだ。もう好えだ。行つてくれ。行つてくれ。おらもう山へ歸るだ。おら出て來たとけえ又歸るだ。機嫌よう暮らすが好えだ。

お松　ぬし行つちやなんねえだ。おら、あやまるだあから。

六造　なに、あやまると。そんぢや、お前おら欺

したたな。おら欺したたら、おらお前生がしちや置かねえだ。

お松　そんだ。おら殺してくれちや。お願えだから、殺してくれちや。

六造　うんにや、殺すめえ。おら出て行ぐだ。もう二度とお前にや會はねえだ。

お松　（失望する。六造を留めようとする）おつかねえだな。おら殺す元氣ねえだな。卑怯者。臆病者。

六造　なんだと。

お松　怒るが好えだ。怒つておらぶつ叩くが好えだ。おら足で踏んづけるが好えだ。短刀おらが胸へ突き通すが好えだ。おらお前歸すこんぢやねえだ。

（六造の膝へ縋りつく。）

六造　おらこねえなところにゐたら死んじまふだ。おら山へ歸してくれちや。お前はいつまでも泥ん中にゐるが好えだ——あの男と二人してな。

（お松を突き放して、戸口の方へ行く。お松、床の上に倒る。やがて片手を突き、半身を起す。）

お松　（絶望の餘り、氣もそぞろに、或は笑ひ或は泣く）おらがおつ惚れてる男と二人でか。さうだ。その通りだ。おらお前欺しただ。分かつたか。おらお前欺しただぞ。お前は臆病もんだ。その仇い取る事が出來ねえだ。おらお前のもんぢやねえんだ。あの人のもんだ。分かつたか。あの人のものだぞ。お前のもんぢやねえぞ。

六造　（激怒して戻り來る。拳もてお松を嚇す）默れ。

お松　（六造の立ち去らぬを見定め、落ちついて、立ち上がる）お前は莫迦だ。お前にやあ分からねえだか。おらお前を欺しただ。おらそれが可笑しくてならねえだ。（氣違ひのやうに笑ふ）おらみんなと同じに笑ふだ。可笑しな婚禮だつたよ。みんなも笑つただ。あの人もよう。

六造　（祖のある方へ突き進み、庖丁を掴む）おら讐い取らなけりやあ、神様が讐い取るだ……

お松　（六造の左の手に縋りつく）あの人が笑つただよ。あの人が。は、は、は。

六造　（庖丁を振り廻す）うぬ……

お松　さ、元氣い出して、突くが好えだ。おらお前の卑怯もんでねえところが見てえだ。

六造　（再びお松を離れる）ためだ。おらお前どうする事も出來ねえだ。

お松　（それを見ると、又新しく相手を怒らせようとする）はれ、ま、あんたら卑怯もんだ。お前や金つかまされて、われが身賣つただな。

（挑戰するやうに、相手の顏をぢつと見る。）

六造　（我を忘れて、お松の方へ突き進む）なに、おらが身を賣つたと。こん獸。

（思はずお松の片腕に傷を負はす。）

お松　たうとう遣つただな。

六造　（驚いて刃物を投げ出す）おら何しただ。

お松　おらがの血い流しただ。おらやつと望みが叶つただ。

六造　なんといふ事だ。おら氣い違つただ。

（床の上に崩れて、兩手で頭を抱へる。）

お松　（その側へ近寄り、跪いて、男を抱くやうにする）お前やつとお前のしなけりやならねえ事をした

だ。おらお前に殺されたかつただ。さ、お願えだから殺してくれちや。こん胸の眞ん中さ突き通してくれちや。

六造　（驚いて逃げようとする）飛んでもねえ。おらそねえな事出來ねえだ。

お松　（泣きながら六造の腕にしがみつく）情ねえ。まだ分からねえだか。おらもう生きちやゐられねえだ。おら死ななけりやならねえだ。おらお前の手で死なれりやあ本望なんだ。おらがの罪は、おら死ななけりや綺麗にやあならねえだ。おらあ、おらあ惡い人間ぢやあねえだ。おらあ唯運惡かつただ。世間の奴がおらいぢめるだ。おらが運めちやめちやにしてしまつただ。六造どん。ちつとの間でもおらがを仕合せにしてくれる事出來るなあお前だけだ。おらお前に殺して貰えてえだ。そして、何もかもおしめえにして貰えてえだ。

六造　（女を抱きしめて）おらお前殺さなけりやならねえだか。こねえに可愛いお前を。山で始めてお前を見た時から、氣違えのやうに、おらお前におつ惚れただ。お前が何であらうと、おら構はねえだ。お前が何をしたとつて、おらそねえな事構はねえだ。おら一目見た時から、お前たあ離れられねえと思つただ。おらもうすつかりお前につかめえられてしまつただ。おらどうしてもお前を山へ連れて行ぐだ。あの嵐ん中で、吹雪ん中で、廣々したおらがの山で、おら婚禮するだ。あすこなら、誰もお前盗むものはねえだ。あすこへせえ行ぎやあ、お前はいつまでもおらのもんだ。おらのもんだ。おらのもんだ。

（お松、男の手の内に半ば気を失ふ。六造、女を戸口へ引きずつて行く。）

六造　さあ誰でも来せえ。もう誰が来ようと、おらお前放す事でねえぞ。

お松　（しがみつく）はれ、よ。

六造　（女を抱き起す）さあ、もうお前はおらがもんだぞ。

お松　（喘げる）だめだ。だめだ。

六造　なぜ、だめだ。

お松　その前に、その前に話しなけりやならねえだ。何もかも話しなけりやならねえだ。それからなら、何処へでも連れて行ぐが好えだ。

六造　だら、直ぐ話すが好えだ。うんにや。だが、ここぢやあいけねえだ。山へ行ぎてから、話してくんろ。山へ行ぎたら、なに話しても好えだ。聞く者はおら達二人と神様ばかりだから。

お松　だら、おら勘弁してくれるだな。

六造　しねえでどうしるもんだ。さ、行ぐべえ。

（二人、戸口へ向ふ。野村、入り来る。）

仙吉　（二人に立ち向ふ）どうした、花嫁。どうした、花聟。

六造　好えとけえ来ただ。おら水車小屋お前へ返すだ。おら出て来たとけえ又帰るだ。

仙吉　（六造の詞には耳も貸さず、お松に向ひて）今夜おらがの嫁の親父（おやぢ）遣つて来るだ。それまでは、まだおらの世界だ。おら久しくお前の踊るのみ見ねえ。さあ踊れ。おら月琴（げつきん）弾くだから。

（この間に、後より男女の百姓大勢入り来る。野村、その中の一人の手より月琴を奪ひ取る。）

仙吉　さあ踊れちや。

(月琴を弾きながら歌ふ。)

踊れちや。踊れちや。
祭ぢや。踊れちや。
おいど振り振り。
踊れちや。祭ぢや。

六造　よせ。お松つ子、行ぐべえ。

仙吉　(構はず弾き續け歌ひ續ける)

屆く思に屆かぬ思。
山の羊の氣か焦れる。
踊れちや。踊れちや。
祭ぢや。踊れちや。

六造　お松つ子。行ぐべえ。

仙吉　(怒る)　何だと。何と言つた。

六造　行ぐべ言つただ。

お松　二人で行ぐべ言つただ。

仙吉　(我を忘れて、お松の腕を掴む)　お前氣でも違つたか。そねえな事してはなんねえだ。

六造　だら、どうしるだ。

仙吉　(六造に)　おら放すこつちやねえだ。おら自分のもの放すこつちやねえだ。

六造　お松つ子はおらがの女房ぢやねえか。

(野村笑ふ。)

お松　おら六造どんと一緒に行ぐだ。旦那あもうおらがどうしる事も出來ねえだ。

仙吉　何だと。(人々に)　やい、みんな、この野郎を引きずり出せ。(お松に)　お松、お前はこけえ

残るだ。
六造　（お松の手を掴む）　おらがの女房はおらがの
もんだ。おら二人して出て行ぐだ。
仙吉　ひぶとい野郎だ。出て行かねえか。このど
畜野郎。

（六造の頬をぴしりと打つ。）

六造　（激怒して叫ぶ）　あつ。
お松　お前ぶたれただぞ。早く讐い取らねえか。
六造　（怒の前に泣きながら）　だめだ。あれはおら
がの旦那だあに。
お松　旦那だと。なにが旦那だ。お前の女房盗ん
だ奴だ。恥知らずの業つくばりだ。あいつはよ
んべおらがの部屋へ忍び込んだだ。
六造　なんだと……旦那が……あいつが。（氣違ひ
のやうに野村に喰ひかからうとする。百姓達が留め
ろ）やい、ぬすつと。泥坊。
仙吉　叩き出しちまへ。
六造　うぬ、叩つ殺すぞ。
仙吉　何ぐづぐづしてるだ。早く引きずり出さね
えか。
六造　放せ。放せ。放さねえか。やい、われが命
は貰つたぞ。
仙吉　（お松を捕へて）　こいつはやつぱりおらがの
もんだぞ。
お松　六造どん。助けてくれちや。
六造　うむ。助けねえでどうしるだ。畜生。畜生。

（人々荒れ狂ふ六造を外へ連れ出す。野村、力を失ひて床の上に倒れたるお松を眺めて、得意げに笑ふ。）

（權爺、戸口に現る。）

仙吉　やい。何用あるだ。

權爺　お前さんの嫁様の親父どんに言つかつて來ただ。

仙吉　なに言つかつて來ただ。

權爺　もう婚禮はやめだとよ。諦めてくんろとよ。

仙吉　なんだと。誰かお松んことをしやべりやあがつただな。誰がしやべりやあがつただ。

權爺　おらが話しただ。おらが何もかも話しただ。

仙吉　糞ぢぢいめ。よし、おらが自分で行つて、話いつけて來るだから。馬だ。馬だ。

（急ぎ去る。）

權爺　爲方ねえだ。世の中の事さううまくは行がねえだ。（去る）

（お松、漸く力を得て來る。同時に、漸く興奮して來る。）

お松　だめだ。だめだ。また旦那歸つて來るだ。

六造どんは行つてしまつただ。（耳を澄す）みんな默つてゐるだな。誰もなんとも言はねえだな。おらもう我慢出來ねえだ。六造どんや。六造どんや。聞えねえだか。お松が呼ばつてるだぞ。お前の女房が呼ばつてるだぞ。

（お松、戸口へ向ふ。野村、入り來る。）

仙吉　おら向ひに來ただな。可愛い女だ。おらやつぱりお前が好いだ。

お松　はれ、飛んでもねえ。

仙吉　おらがの嫁はだめになつちまつただ。もうお前より外に女はねえだ。もうおらお前放す事でねえぞ。

お松　だら、おら殺すが好えだ。おらどうしてももうここにやあゐられねえだ。

仙吉　強情言はねえもんだ。この水車小屋おらが

もんだ。お前もおらがもんだ。逃げられるなら逃げて見るが好えだ。

お松　ああ、おらどうしたら好えだ。

仙吉　お前も強情張るなら、おらも強情張るだ。おらこの水車小屋にお前と二人で住むだ。世間の奴らあ何と言つても構はねえだ。

お松　おら可哀さうだと思はねえだか。

仙吉　可愛いとは思ふが、可哀さうだとは思はねえ。おらもうお前がゐねえぢや生きてゐられねえだ。お前がゐねえぢや息出來ねえだ。

お松　おらまた六造どんが可愛くてならねえだ。おらあの人におつ惚れただ。

仙吉　もうあねえな奴の名あ呼ばらねえ事だ。おらが名あ聞いてせえ黒つ走るだ。

お松　うんにや。おらあの人の名呼ばるだ。ありつたけの聲して呼ばるだ。六造どんや。早く來て助けてくれちや。

仙吉　默れ。お松。われおらが腹立たせる氣か。

お松　おら。もう昔のお松ぢやねえだ。むかしの弱えお松でねえだ。おらもうなんにも恐くねえだ。おら喧嘩しても自分の可愛いもの取るだ。自分のしあはせつかめえるだ。六造どんをおらがもんにするだ。お前の知つてるお松つ子は、はあもうゐねえ者になつちまつただ。ここに立つてるなあ、自分の好いた男の爲には命ぐれえいつでも捨てる女子だ。

仙吉　お前怒ると倘好い女になるだな。おらもうお前を……

お松　放してくんろ。おら厭だ。（叫ぶ）六造どんよ。

仙吉　おらどうしてもお前を自分の者にするだ。おさへつけても、おらがの女房にするだ。

（野村、お松を追ひ廻す。お松、逃げ廻る。）

お松　はれ、まだ來てくれねえだか。（叫ぶ）六造どんや。

仙吉　來つこねえだ。お前はおらがの者だ。おらがの。

（お松の首に抱きつかうとする。）

お松　六造どんや。六造どんや。早く助けに來てくれちや。

仙吉　なんぼ呼ばつてもむだなこんだ。もうお前放すこつちやねえだ。來るなら來るが好えだ。取るなら取つて見ろだ。

（六造、お松の部屋から躍り出る。）

六造　さあ來ただ。その女取りに來ただ。

お松　（六造に縋りつく）はれ、ま、六造どん。

仙吉　（飛びのいて）われ何處から來ただ。

六造　そこから來ただ。よんべお前が女を盗みに來たあの部屋から出て來ただ。さあ、もうかうなつたら、男と男だ。勝負すべえ。

仙吉　出て行け。この野郎。

六造　出て行かねえだ。おらもうお前が山から連れて來たぼんやりぢやねえだ。おらもうお前の家來ぢやねえだ。お前とおらとは對等だ。男と男の勝負しろちや。

仙吉　よし、生意氣な。待て。（戸口へ行かうとする）

六造　（野村と戸口との間に飛んではひる）逃げるだな。卑怯者。だめだ。だめだ。勝負つけねえぢやあ、ここ出すこつちやねえだ。さあ、そこにおらがの女房立つてるだ。あれはおらがのもん

だ。さあ取るなら取つて見ろ。唯は渡さねえだから。（懐にした短刀を抜く）女は勝つた方のもんになるだ。生き殘つた方のもんになるだ。

仙吉　刃物持つてやがるだな。

六造　お前持つてねえのか。だら、こねえなもの使はねえでも好えだ。お前殺す刃物は、おらこの胸の中に持つてるだ。（短刀を投げ捨てる）さあ、來い。

お松　（六造の手に縋る）飛んでもねえ。お前何しるだ。

六造　（女を押しのける）お前はぢつとしてるが好えだ。構ふでねえだ。（野村に）さあ、何ぐづぐづしてるだ。

仙吉　見ろ。（六造の捨てた短刀の方へ駈け寄る）

お松　（聲を立てる）はれ。

六造　（野村の舉動を一目見ると、短刀を足で踏みつける。）ぬすつと。おら眠つちやるねえぞ、さ、刃物欲しけりや取るが好えだ。（短刀を足蹴にする。）

仙吉　畜生、そんな、なまくら何になるだ。

六造　何だと。（いきなり野村の首を締める。）

仙吉　助けてくれ。助けてくれ。

六造　吠えろ。吠えろ。この犬め。

仙吉　人殺し。人殺し。

お松　はれ。はれ。

六造　だめか。手向えは出來ねえだか、だら、お前の命は貰つたぞ。（お松に）見ろちや。もう、死んでしまつただ。

（縡切れた野村を床へ投げ捨てる。）

お松　はれ、ま。飛んでもねえ事しちまつただな。

六造　（死骸に一瞥を與へ、さて戸口へ行き、戸を大き

く開く。）みんな來い。女も來い。みんなこつち
へ來い。

（男達、女達、おさだ、お淺、お富、おりえ、
權爺など、入り來る。）

お松　（氣を失つたやうになつてゐる）

人々　どうしただ。どうしただ。

六造　旦那が、お前ら呼ばつてるだ。

おさだ　（死骸を見て）死んでるだな。

お淺　はれ、ま。

權爺　神樣ん罰だ。

六造　さあ笑へ。みんなして笑へ。今が、笑ふ時だ。やつと笑ふ時が來ただ。笑へ、笑へ。笑はねえか。（おのれ一人、物狂ほしく笑ふ。）さ、お松つ子、おら達は山へ行くだ。

お松　さうだ。山へ。

六造　（手を振つて）山へ。山へ。あの高え山へ。人間のゐねえ山へ。うるせえ事のねえ山へ。さ、どけ、どけ。みんな、どけ、どけ。おら狼い殺しただ。狼い、狼い絞め殺しただ。（笑ふ。）

（六造、お松、出て行く。）

（一同、恐るる者のやうに見送る。或者は死骸の前に跪く。）

——靜に幕

（Eugen d'Albert; Tiefland に據る）

息子　一幕

人物

火の番の老爺　七十歳

金　次　郎　二十七歳　無頼漢

「手先」と呼ばるる捕吏　三十歳位

時代

徳川末期

場所

江戸の入口

舞台にはつきり見えるものは、唯粗末な火の番小屋だけである。雪がさかんに降つてゐるので、右も左も奥も前も、ただ一面に白いだけである。火の番小屋には明かりがついてゐる。障子が一枚明けてあつて、襟巻頭巾に顔を埋めた火の番の老爺が、土間で焚火をして、あたつてゐるのが見える。十二月の或晩の夜半過ぎである。

（幕が明くと、「手先」と呼ばるゝ捕吏が、あたりに目を配りながら出て来る。二三度、火の番小屋の前を行つたり来たりする。やがて、小屋の前に立ち留り、火の番の老爺に呼びかける。）

捕吏　とつつあん。まだ生きてるな。

火の番　（頭を上げる）生きてるとも。誰だ。そんな事を言ふのは。

捕吏　誰でもねえ。おれだよ。

火の番　おれはまだ死にやあしねえよ。誰が死ぬものか。

捕吏　向きになる奴があるものか。冗談だな。

火の番　冗談だ。何が冗談だ。
捕吏　生きてるなと言つたのがよ。
火の番　生きてるともさ。當り前だ。死んでたまるものか。
捕吏　分からねえな。お前、冗談が分からねえのか。かう寒くつちやあ、冗談の一つも言はなけりやあ、とても遣り切れたもんぢやねえんだ。
火の番　そんな事を言つてると、體でもあつたまるのか。
捕吏　話にならねえ。（行きかける）
火の番　まあ、あたつて行けよ。
捕吏　（火の番小屋へはひつて、手を暖めながら）　寒いな。
火の番　誰がよ。
捕吏　誰がつて、みんながよ。天氣がよ。
火の番　おれは寒かねえ。
捕吏　寒いから寒いと言ふのに、何もさう怒るこたあねえ。（火の番答へず）寒いと言つたつて、おれが首になる氣遣えはねえんだ。（火の番答へず）だが、ここいらは吹きつつあらしのせるか、格別また寒いな。
火の番　なあに、もつと寒い所があら。
捕吏　そりやあ、あるだらう。
火の番　ぢやあ、なぜそんなむだを言ふんだ。
捕吏　とつつあん。お前今夜どうかしてるぜ。おれはお前が淋しからうと思つて、元氣つけに話をしてやつてるんだ。揚足ばかり取つてやがる。かりにもお客だ。もうちつとやんはり口を利くもんだ。（火の番、默々かく）　え。とつつあん（火の番、默なかく）　好い火の番だ。居眠り火の

番か。

火の番　（目を明かないで）あんまりくだらねえ事ばかり言ふから、眠くなるんだ。

捕吏　とてもかなはねえ。（小屋を出る）ぢやあ、あばよ。

火の番　（冷淡に）あばよ。

捕吏　（小屋を離れながら）あばよ。頑固ぢぢい。（行つてしまふ）

火の番　（立ち上がる）頑固ぢぢいたあなんだ。おれにやあ名があるぞ。（また坐つて、火をいぢる）あんなおつちよこちよいが、手先の何のと言つて、いばつてゐやがるんだ。やま犬一疋でも、捕まつたらお慰みだ。

（金次郎、出て来る。頬冠り、ふところ手で、尻をはしよつてゐる。火の番小屋の前まで来ると、立ち留る。火の番は囲爐裏の火をいぢりながら、金次郎に背を向けてゐる。）

金次郎　ぢいさん。あたらして貰つても好いか。

火の番　（肩越しにぢろりと相手を見て）あたるが好いやな。

金次郎　ぢやあ、あたらして貰ふぜ。（小屋へはひつて、手を暖める。火の番の半身、障子の蔭に隠れる）寒いなあ。

火の番　おれは寒かあねえ。

金次郎　そいつあしあはせだ。おいらは寒いよ。この一月、暖まつたことがねえんだ。

火の番　お前、どこにゐるんだ。

金次郎　片門前の盲長屋にゐたんだ。あすこが又寒い所よ。

火の番　もう、そこにゐねえのか。

金次郎　家賃が高過ぎらあ。（懐を明けて見せる）おいらあ、もう一文なしだ。

火の番　酒か。ばくちか。

金次郎　冗談言ひつこなしだ。おいらあ堅氣の商人だ。商賣ですつたのだ。

火の番　商賣はだめだ。この頃のお上の遣り口ぢやあ商人は上つたりだ。お前、煙草をやるか。

金次郎　御馳走か。有難え。

火の番　おれは遣らねえが、貰つたのがある。（棚から紙に包んだ煙草と烟管をとる）烟管は詰まつてるかも知れねえぜ。

金次郎　なに、構はねえ。（烟管の火皿を焚火にかざして、それから細い木の枝で煙管を通す。それから煙草を詰める。）

火の番　ひどく手が震へるな。

金次郎　（煙草をすつぱすつぱやりながら）體が悪いんだ。頭がふらふらしてしやうがねえ。

火の番　お前、腹がすいてるんぢやねえか。

金次郎　きにようの朝食つたきりだ。

火の番　早くさう言やあ好いに。（辨當箱を持つて来る）まだ一かたぎぐらゐは残つてる筈だ。

金次郎　有難え。有難え。（かぶりつくやうにして食ふ）

火の番　味が分かるか。

金次郎　（頬ばりながら）うむ。

火の番　腹のへつてる時、さう急いで食つちやあ毒だ。

金次郎　毒でも好い。（食ひ続けながら）だが、お前、見かけに寄らねえ親切者だな。おらあ歸つてから、こんなにされるなあ始めてだ。

火の番　歸つて來たと。何處から歸つて來たんだ。

金次郎　上方からよ。

火の番　大阪か。

金次郎　（目を一杯にして）うむ。

火の番　何處にゐた。

（金次郎、聞えない振りをする。）

火の番　大阪は何處にゐたよ。

金次郎　川つぷちだ。

火の番　それぢやあ分からねえ。大阪は何處でも川つぷちだ。

金次郎　（慌てて）北――北だ――北の新地だ。南にも少しゐたよ。東にもゐたな。だが、北だな――おもにゐたなあ北だな。

火の番　何の商賣をしてゐたんだ。

金次郎　商賣。おれが商人に見えるか。

火の番　だつて、お前いま商人だと言つたぢやあねえか。

金次郎　おいらあ職人だ。

火の番　ぢやあ、職は何だ。

金次郎　鍛冶屋だ。

火の番　嘘をつけ。（相手の手を指さす）それが火を掴んだ手か。

金次郎　當てられた。おいらあ、實は釣るのが商賣だ。

火の番　魚をか。

金次郎　分からねえ。人を釣るんだ。（賽をふせるやうな眞似をする）これだ。

火の番　ばくちか。いかさまをやるんだな。

金次郎　うぶな人間に、世の中の歩きやうを敎へてやるんだ。錢の使ひやうを傳授してやるんだ。

火の番　(間を置いて) おれにも一人上方へ行つてゐる息子があるが、有難え事に、お前のやうな奴ぢやあねえ。律氣者だ……お前、なぜまともな事をしねえのだ。

金次郎　見たつて分からう。おいらにやあ出來ねえ。おいらあ生れつき、(又、瞼をふせるやうな科をする) レコに出來てるんだ。世の中にやあ錢のなくしてえ人間が澤山ゐるんだ。おいらあ、その手合をたんのうさせてやるんだ。

火の番　ばくちはいけねえ。地獄へ落ちるぞ。

金次郎　落ちたら落ちた時よ。地獄にも大きなのが出來てるかも知れねえ。

火の番　恐ろしい事を言ふ奴だ。(目をつむつて) 南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

金次郎　よせやい。縁喜でもねえ。(辨當箱を返す) でも、お蔭で助かつた。有難うよ。

火の番　こなひだも、ここへ狼の辰といふ奴が來た。霰の降る暗い晩だつた。「あたらして貰へるかい。」「なんて言やがるんだ。「あたつたら好いぢやねえか。」おれはかう言つた。やつぐしよ濡れだ。火へあたると、湯氣が立つのよ。恐ろしい顏をした奴だつた……お前、いける口だらう。一杯やるか。(貧乏徳利を出す)

金次郎　(頷いて) いけねえ。そいつあ一つたらしもいけねえんだ。

火の番　お前、こなひだお仕置になつた赤羽橋の人殺しを知つてるか。

金次郎　うむ。あいつあ、おれの幼馴染だ。

火の番　あいつがお仕置になつたのは、おれのせゐだ。あいつもここへあたりに來やがつた。

金次郎　（平氣で）ふむ。緣があつたんだな。

火の番　殿樣傳次は、捕まらねえ内に咽喉を突きやあがつた。あいつも名高え奴だつた。

金次郎　傳次たあ四つ目で一緒にゐた事がある。

火の番　あいつもここへあたりに來たんだ。咽喉を突く前に、おれに小判を一枚くれて行つた。まだ持つてらあ。

金次郎　お前、それを使はねえのか。

火の番　使はうと使ふまいと、おれの勝手ぢやねえか。

金次郎　堪忍してくれ。いつもの癖だ……だが、咽喉が渇いた、一杯やつて見るかな。（貧乏德利をとつて、口から飲む——直ぐ、いやな顏をして、口の中の物をはき出す）ぺつ。ぺつ。こりやあ何だ。

火の番　茶だ。茶だよ。

金次郎　おつそろしく冷てえ茶だ。こんなものな夜中に飲ませるどぢがあるか。おいらあ、茶なんてものは、もう何年にも飲んだ事がねえ。

火の番　酒ばかりくらつてゐるんだらう。

金次郎　酒ぢやあねえ。泡盛だ。

火の番　泡盛は毒だ。

金次郎　へ。「ばくちはいけねえ。」……「泡盛は毒だ。」……さうだ。今に「煙草は命とりだ。」と來るだらう。

火の番　さうだとも。煙草だつて、好い事はねえ。

金次郎　分かつた。分かつた。もう、よしねえ。もう、なんにも飲まうたあ言はねえから。

火の番　一體お前、何しにこんな所へ來たんだ。

金次郎　え。それはその、いろいろ用があるからだ。

火の番　かう、何かきまつた用はねえのか。
金次郎　そりやあ、ねえ……いや、ある。（調子を變へて）ちやんとお袋を探しに來たんだ。
火の番　めつかつたか。
金次郎　分からねえ。
火の番　分からねえ。
金次郎　會つてくれるかどうだか分からねえんだ。
火の番　ぢやあ、ゐどこは分かつてゐるんだな。
金次郎　う。うむ。大抵ゐどこは分かつてゐるが、おいらが行つたつて、會つてくれるかどうだか、それが分からねえんだ。
火の番　そりやあ會つてくれるとも。やつぱり、お前のやうな事をしてゐるんだらう。
金次郎　なぜよ。
火の番　蛙の子は蛙よ。昔からきまつてゐらあな。
金次郎　（變な氣持で）さうかね。（居ずまひを直す）
火の番　お前、くたびれたらう。そんなに堅くなつてゐるからだ。もつと樂々とあたりねえ。
金次郎　これで澤山だ。
（間、金次郎何か言ひさうにする。）
火の番　なんだ。
金次郎　お前の息子の事を考へたんだ。上方へ行つてると言つたな。して見ると、どつかでおいらが會つてゐねえものでもねえ。名は何と言ふ。
火の番　會ふ氣遣えはねえ。おれの息子はまつたうな人間だ。
金次郎　それは分かつた。名を言つたつて好いぢやあねえか。
火の番　金公よ。金次郎つてんだ。

金次郎　(靜にひとり頷く)　うむ。それぢやあ、會つた事はねえ。

火の番　當り前だ。九年前に江戸を出て行つた——十九だつたよ、その時な。商賣は金物よ。今ぢやあ立派にやつてらあ。

金次郎　飛んでもねえ。

火の番　何が「飛んでもねえ。」だ。

金次郎　どうして、立派にやつてる事が分かるんだ。

火の番　さうに違えねえもの。

金次郎　たよりはねえのか。

火の番　まだ、ねえ。

金次郎　まだだと。九年もたつてるのにか。

火の番　忙しいんだ。せつせと稼いでるんだ。もうたいしたものになつたに違えねえ。

金次郎　さうありてえものだ。だが、若し、おいさん。若しさうでなかつたらどうする。

火の番　そんな事がありやう筈がねえ。あいつはまつたうな人間だ。

金次郎　又まつたうだ。まつたうだつて、思わく違えといふものがあらあ。

火の番　ばかあ言へ。あいつは子供の時から、近所の褒め者だつた。酒も飲まねえ。ばくちは元よりだ。どうしたつて出世をする男に出來てるんだ。

金次郎　いつもさうとはきまらねえ。

火の番　だが、あいつはさうだ。

金次郎　だが、どうして……(言ひ淀む)

火の番　どうしてだと。何がどうしてだ。

金次郎　だからよ……その……だからよ。(間ふべ

き事を考へる）　誰かにたよりがあつたのかよ。

火の番　うむ……一度あつた。

金次郎　誰によ。

火の番　（にがい顔をして）　お前の知つた事ぢやねえ。

金次郎　ふむ。ぢやあ、お前の嫌ひな人間にでもたよりがあつたのか。

火の番　（少し熱して）　近所の娘のところへ手紙をよこしやあがつたんだ。向うへ着くと直ぐに書きやあがつたんだ。いやらしい手紙よ。「故郷が戀しい」なんて書きやあがつて。

金次郎　そりやあ戀しいだらう。

火の番　（怒つて）稼ぎに行く奴が、故郷が戀しいもねえもんだ。その娘め、伜と夫婦約束がしてあるなんて言やあがつた。ばかばかしい。だから、おれはさう言つてやつた。もうみんな忘れちまつてらあつてよ。

金次郎　う。うむ。娘の方でももうお前の息子の事は忘れつちまつてるだらう。もうずつと前によ。

火の番　ところが忘れねえんだ。まだ、それを言つてやがるんだ。

金次郎　なんだと。それぢやあ、まだ嫁に行かねえのか。

火の番　かう諸式が高くつちやあ、うつかり嫁にも行けねえのさ。おまけに、好い時分を逃がしてしまつちやあな。

金次郎　（熱心に）　ところで、おいらお前に一つ聞きてえ事がある。こりやあ、唯、その、お前の考へが聞きてえんだ。よしか。若し、お前の息

子がしくじつたとするな。そいつが困つて、歸つて來たとするんだ……運が惡くてよ……以前とは違つてよ。牢にでもへえつて來たとするんだ……

火の番　(怒つて)お前、うちの金次郎の事を言つてるのか。

金次郎　さう怒つちやいけねえ。おいらあ、唯お前の考へが聞きてえんだ。

(捕吏が出て來て、火の番小屋の横に身を寄せ、そつと二人の會話を聞いてゐる。)

火の番　よせ。さつきから言つてるぢやねえか。息子はそんな奴ぢやねえよ。

金次郎　だが、人間には運不運といふものがあらあ。

火の番　稼ぐ人間に運も不運もあるものか。

金次郎　でも、病氣をするとか怪我をするとかしたらどうする。

火の番　そんなら手紙をよこす筈だ。

金次郎　若し手紙がよこさなかつたら――

捕吏　(前へ出る)若いの。そのぢいさんにからかつたつてむだだ。しやれも冗談も分かる親爺ぢやねえんだ。

火の番　又來たな。また何か冗談を言ひに來たのか。

捕吏　さうだ。寒くつてたまらねえ。

火の番　この若いのは冗談を言つてるんぢやねえんだ。

金次郎　さうだとも。おいらあ、唯、ぢいさんの考へを聞いてるんだ。聞いたつてしやうのねえのは分かつてるんだが。

捕吏　お前、この頑固ぢぢいを知つてるのか。
金次郎　どうして。知るわけがねえや。
捕吏　知つてねえとも限らねえ。だが、ぢいさんの言ふ事を聞いてりやあ間違ひはねえよ。
火の番　それも冗談か。
捕吏　やつと分かつたか。
金次郎　（立ち上がる）ぢやあ、もう行くぜ。大きにお世話だつた。
火の番　まあ、坐れ。さう急ぐこたあねえ。
金次郎　うむ……だが……
捕吏　おれの顔を見て、直ぐ出かけると、お前うろんに思はれても爲方がねえぞ。
金次郎　お前さん、何の商賣だ、針でも賣るか。
捕吏　なぜよ。
金次郎　ちくうり刺すからよ。
捕吏　（笑つて）こいつあ好い。
火の番　若いの。とても上方にやあゐめえな。こんなお手輕なお手先様は。
捕吏　（金次郎に）お前、上方から來たのか。上方は何處にゐた。
金次郎　堺だ。
火の番　お前、さつき大阪だと言つたぢやねえか。
金次郎　堺に一番長くゐたんだ。
火の番　ぢやあ、さつき、なぜ大阪にゐたなぞと言つたんだ。
金次郎　大阪の話が出たから、大阪にゐたと言つたんだ。さう揚足がとりたけりやあ、相撲とりにでもなるが好いや。
捕吏　（金次郎に）お前、上方で何をしてゐた。
金次郎　町奉行をしてたかも知れねえ。だが、生

惜さうぢやあなかつた。

捕吏　おやあ、何をしてゐたんだ。

金次郎　川口で荷揚をしてゐた。

火の番　（驚いて）お前、さつきは……

金次郎　（烈しく火の番を睨みつけて）默つてろ。ぢぢい。

火の番　（呟くやうに）さうか。それで分かつた。そんならさうと早く言やあ好いに。

捕吏　とつつあん、どうした。目を白黒してるぢやねえか。

火の番　（捕吏の方へ向き直つて、烈しく）お前の知つた事ぢやあねえ。どうして、さうお前は疑ぐ深えんだらう。さう人の事に一々口を出すもんぢやあねえ。

捕吏　（驚いて）どうした。どうした。おれは唯當り前に聞いてるんだ。（金次郎に）役目だけで聞くんだ。返答をしてくれるか。

金次郎　（不安心に）するとも。

捕吏　よし。

金次郎　お前さんの來た時、おいらあおぢいさんの考へを聞いてゐたんだ。

火の番　さうだ。ばかな事を聞いてやがつたんだ。うちの金次郎がどうだのかうだのと。

金次郎　やつぱり、おいらあもう行くぜ。大きに世話だつた。御免ねえ。旦那。

捕吏　まあ、待て。ちよつと氣になる事があるんだ。

金次郎　冗談ぢやねえ。（行きかける）

捕吏　まあ、待て。行くな。どうも、お前はおれの尋ねてる代物らしいぞ。（捕吏も動かない。金次

郎も動かない）お前、おれのところへ來て、一晩暖まつたらどうだ。夜ぢう雪ん中をうろつくよりやあ好いぜ。どうだ。

金次郎　それにやあ及ばねえ。

捕吏　大方さう言ふだらうと思つた。

（捕吏、いきなり小屋へ飛び込む。金次郎、すりぬけるやうにして、小屋を躍り出る。直ぐ見えなくなる。捕吏、帯の間に呼笛を探りながら、あとを追ひかける。）

火の番　やつぱり、さうか……（小屋を出て、遠くを透かして見る。呼笛鳴る。火の番、雪に手をかざす。呼笛また遠くで鳴る）あいつ一人ぢやだめだらう。（間）見えねえ。（間）角を曲つたな。（ずつと遠くで呼笛が鳴る）いくら吹いたつて聞えるものかな。（呼笛の音が少し近くなる）や、又こつちへやつて來たな……（延び上つて見る）さうだ。（ずつと近くで呼笛が鳴る）また角をこつちへ曲がつたな……（小屋へはひる）人の事だ。引つ込んでよう。（障子を少し引く）

（呼笛、直ぐ近くで鳴る。金次郎、息を切らして、駆けて來る。小屋の前で轉ぶ。捕吏、あとを追つかけて來て、金次郎の起き上がらうとするところを捕まへる）

金次郎　（喘ぎながら）よし。捕まつた以上は神妙(しんめう)にする。

捕吏　神妙にすると。感心な奴だ。まあ面を見せろ。（金次郎の顔を火の方へ向ける）

金次郎　（反抗して）神妙にするから……そんな事はするな。

捕吏　火の側へ來い。

金次郎　（烈しく抵抗する）お前、おいらの面に見知りはねえ筈だ。

捕吏　おぢいに見せるのだ。

金次郎　いけねえ。そりやあいけねえ。（烈しく抵抗する）

捕吏　見せねえか。ぬすつと。見せねえか。

金次郎　（急に抵抗するのを止める）

捕吏　見せるか。

金次郎　仕方がねえ。どうともしろ。

（二人、火の側へ歩み寄る。不意に、金次郎、身を屈めて、捕吏の両足に抱きつき、捕吏を仰向けに倒す。金次郎、逃げる。）

捕吏　（はね起きて）畜生。（あとを追ふ）

（金次郎、直ぐ又小屋のうしろから出て来る。）

金次郎　見當違ひへ行きやあがつた。（呼笛鳴る。金次郎、小屋を覗く）ぢいさん、あばよ。

火の番　（少し顔を出して）あばよ。達者でゐねえ。

金次郎　何か。お前んとこの婆さんは達者か。

火の番　ばあさんは死んぢまつた。

金次郎　死んだ。息子の歸るのを待たねえでか。

火の番　何を言つてるんだ。早く行け。達者でゐろよ。

金次郎　（聲を飲むやうにして）ちやん。

（金次郎、逃げ去る。呼笛遠くで鳴る。火の番、嘲笑ふ。）

——幕

（Harold Chapin: Augustus in Search of a Father に據る。）

伊左衛門　一幕

人物

久　古　新町の幇間

藤屋伊左衛門

河　内　元遊女

おせき　伊左衛門の娘

場所

大阪。京橋の片側町

（小さき流れ。流れに小橋かかる。橋の前に自然木を柱としたる門。茨垣。垣の上に赤き壁に白き障子はめたる二階見ゆ、流れの下に流灌頂。門の前に床几。床几の上に毛氈。春の午後の日ざし。暫く舞臺に人なし、小鼓の音、二階より好き音響く。

（太鼓持久古、坊主頭に大黒頭巾を冠り、紫の袱紗に包みし小鼓を抱へ、流れに沿ひて出づ。）

久古　（ふと立ち留まり、二階の小鼓に耳を傾く）　おう、まぎれもない伊左衛門様ぢや。かたかは町とのみで、しかとお宿が知れなんだに小鼓の音で知れた。こちも鼓で挨拶せう。（袱紗を解き、立ち身の儘、二階の鼓に合はして我が鼓を打つ。稍長き間）

（ふと二階の鼓やむ。障子あく。伊左衛門、衰へし顔を出す。）

伊左　やれ、久古か。なつかしい。

久古　（鼓をやめる）　お久しや、藤屋様。もうお目には當るまいと思ひしに、下司の命も役に立た

いでか、また御機嫌のよい顔を見まする。

伊左　よい顔に見ゆるか。先づ、それへ行く。待ちや。（障子を閉ざす）

久古　（流灌頂に目をつける）流灌頂がある。さては夕霧様のお弔ひの爲のお下りぢやな。俺も回向せう。（流灌頂の前に跪き、手を合はす）

（伊左衛門、門の内より出て來る。皮の短き袖つけたる荒き縞の羽織。素足に草履ばき。）

伊左　（久古の背を打つ）何をする。

久古　夕霧様を拜みまする。

伊左　夕霧がどこにゐる。

久古　お立てなされた流灌頂に。

伊左　いや、俺は流灌頂は立てぬ。

久古　でも、今年は七年忌ぢや。それでお下りなされたのであらう。性悪にも似合はず、あの方ばかり忘れられぬと見えまする。

伊左　いや、年忌は京でした。また淨國寺へも志した。

久古　そんなら、なんでお下りなされた。

伊左　様子にも知れう。世間晴れての下りなら、長町や北濱へ行く。俺はまたさんざんな身になつた。

久古　またお内を出なされたか。

伊左　出たのではない。出されたのぢや。女房妾のある身が勘當されたのぢや。

久古　（笑つて）二人ではまだ足りませいでか。

伊左　足らぬではない。とんと何もないと同じ事なのぢや。空なのぢや。

久古　お内儀と荻野様を左右に抱いて、それが空とは禪宗の坊主が言ひさうな。その悟りがあれ

ばい勘當にはお會ひなさるまい。またいつもの嘘ぢや。

伊左　いや實ぢや。夕霧が死んで後、よう似たと言うて、秋野に阿呆盡したを、女房が聞いて、こゝへ下り、請け出して京へ歸つた。それから、暫く廓へは足踏もせいで、一門の褒め者になつた。それで濟めば事もないに、島原の大坂屋に難波といふ女郎が出て、それがまた夕霧に瓜二つぢやと友達が言ふ、

久吉　難波なら私もよう知つてをりまする。成程微塵違ひませぬ。夕霧が見たくば難波ぢやと申します。

伊左　初めは取り合ひもせなんだが、ふと見たうなつて、密に行つて見たれば、夕霧にその儘ぢや。そこで女房も秋野もとんとほたらかして通ふ程に、また一門がやかましうなつて、ばらばらと勘當した。

久吉　さても氣の多いお人ぢや。それでは夕霧樣もお怨みなされませう。

伊左　何で怨まう。夕霧は俺を置いて死んで行つてしまうたのぢや。

久吉　それ故、あの世でお怨みなされませう。

伊左　「あの世」があるなら、俺も生きてはゐぬ。今にも死んで夕霧に會ひに行く。年忌に弔ひはしても、それは心遣りばかりの事ぢや。俺は「あの世」があるとは思はぬ。もう夕霧には佛でも會へぬ。

久吉　それなら、なぜ夕霧樣に似た女郎をお買ひなされまする。

伊左　そこぢや。俺は「あの世」はないと思うて

ゐるが「前の世」はあると思うてゐる。その前世で契つた女に夕霧が似てゐたのぢや。夕霧が初めてはない。まだ前に女がある。それが誠の女ぢや。

久吉　分からぬ事を仰せられまする。そのやうな事がござりませうか。

伊左　そなたには分かるまい。人は誰でも前の世で先づ女と契るものぢや。この世へ生れて來る時が、その女との暫くの別れぢや。さて、この世で大きう育つて、前の世で契つた女を探す。これを世間では「性惡」といふのぢや。「遊び」とぬかすのぢや。なんでこれが「遊び」であらう。これが「遊び」なら、命は「遊び」ぢや。

久吉　「遊び」がなうては、私等は冷飯も食へませぬ。それはお道理でござりまする。

伊左　そなたにまだ俺の言ふ事が分からぬ。分からいでも大事ない。先づ聞いてゐよ。それで、前の世の女に似た女を探す。ちと似たのがあれば、直ぐと現をぬかす。したが、似た物は似た物、同じ物ではない。きつと折り合はぬ節が何處ぞに出來て來て、女が厭になる。そこで、またこれに似た他の女を探す。また阿呆を盡す。また丁度に行かぬ所が出來て來る。そこでまた新しい女を探すのぢや。

久吉　それはお前の移り氣でござりまする。不心中でござりまする。

伊左　いや、これが心中ぢや。前の世を戀しうも思はず、一門世間がくれた「女房」といふ目隱しで目を隱し、よその女に見向きもせで暮らすこそ不心中ぢや。世間にはこの不心中が、堅人

よ聖人よと褒めらるる。世間の男の大方はこれぢや。

久古　されば、その前の世の女とやらが一定この世に生れてをりまするか。

伊左　生れてゐないでか。そこが前の世での契りぢや。前の世の契りは、この世の契りよりずんと堅いわ。

久古　女もその契りを忘れずにゐまするか。

伊左　そこが難事ぢや。男は忘れずに生るるが、女は忘れて生るる。女の不心中は生れぬ先からの事ぢや。

久古　されば、どうして前の世の女とお見當てがつきまする。

伊左　それで男は苦勞する。あれかこれかと迷ふ。目星をつけても、女の心の底を知るまでには、大分の年月が掛かる。前の世の女の心は、覺まされるまでは眠つてゐるのぢや。

久古　夕霧樣は前の世とやらのお内儀ではなかつたのでござりまするか。

伊左　さればぢや。いまだに戀しうは思ふが、俺の探す女ではなささうぢや。眞實前の世の女なら、俺に先立つ筈がない。

久古　でも、それは御病氣故。

伊左　その病氣がそでない證據ぢや。前の世の契りは、この世の命をも儘にする。

久古　されば、萩野樣はどうでござりまする。

伊左　女房が粹の立て損ねぢや。あれは請け出す前に俺の目違ひが分かつてゐた。

久古　すれば、難波がそれぢやと仰せらるるか。

伊左　まだ分からぬ。大方さうでないとは思ふが、

今ではあの女より外に見當てはない。それで勘當受けたが、白黑の分かるまでは通ひ續くる心じや。そちに賴む事がある。

久吉　何なりとも承りませう。

伊左　俺が娘を知つてゐやるか。

久吉　京のお内儀のでござりまするか。

伊左　女房にはとんと子が出來ぬ。それ、夕霧が死なう五年前に、子を産んだ。桑名に米商してゐる伯父に預けて置いた。それを今度連れて下つたのぢや。

久吉　どうなされます。

伊左　廓へ賣つて金にしたい。それで、そちに賴む。

久吉　たはけた事を。

伊左　たはけでも是非がない。難波に會うた揚錢の殘りが十五兩ある。それを濟まさねば尋ねるにも尋ねられぬ。早う濟まさうとは思へども、今の身では一兩も絞れぬ。詮方盡きて桑名へ下り、娘おせきを連れて來たは、難波が一分も立て、俺も前の世の契りを探りたい爲ぢや。娘を金にしてくれ。

久吉　やくたいもない事仰せらるる。夕霧樣が廓でお果てなされたさへ情なう思し召したに、その娘御を廓へ賣り、二代の傾城をさせうとあるは、草葉の蔭から夕霧樣のなんぼう悲しう思し召さう。

伊左　夕霧が事は何とも思はねど、娘は俺とても憎うはない。勿論長う廓へ置くではない。俺が友達に川口屋の淸左衛門といふがある。

久吉　それは鼻の下に上髭のある、髮を高う結つ

たお人ぢや。私も存じてゐまする。
伊左　あれは阿呆ぢや。
久吉　阿呆ではござりますが、拔けでござります。
伊左　はて同じ事を言ふ。どうした緣か俺ときつう仲がよい。あのやうなれども、眞實のある者ぢや。あれに言うても十五兩は貸さう。なれども、今來たばかりには面目なうて言はれぬ。長う廓に置くではない。一時の逃れ道ぢや。
久吉　それなれば、畏りました。
伊左　一兩も慾には入らぬ。十五兩でよい。ひとへに賴む。
久吉　畏りました。
伊左　それで話は出來た。(間)そちは今がた鼓を打つたな。
久吉　御挨拶に打ちました。
伊左　うつけにも似ず、よう鳴るわ。
久吉　お前のお蔭で爲上げました。この頃は松囃子にも私が出ぬと始まりませぬ。
伊左　何を打つ。
久吉　やはり傾城事でござります。
伊左　むむ、何ぢやな。
久吉　江口を打ちまする。
伊左　さらば、曲舞から打つて見よ。
久吉　お前大鼓を打つて下されませ。
伊左　心得た。
(伊左衞門、家の内へ入り、直ぐ大鼓を持ち出づ。久吉、調べの緒を締める。やがて、二人して鼓を打ち始む。元の遊女河内、町風して出づ。二十あまりの美女。川原に立てたる流灌頂に水を手向く。伊左衞門、久吉、直ぐそれに目を留めて、二人同時に鼓をやめる。)

河内　（涙ながらに手を合せて）ああ誠に月日の立つは夢ぢや。今手向けまする水をよう受け取つて下さんせ。
久吉　（河内の側へ歩み寄る）はて、お愁傷や。さては姉御様は血の上でがなお果てなされ、それ故流灌頂をお立てなされましたか。
河内　いや、さやうではござりませぬ。
久吉　そんなら、斬られて死なしやれましたか。
伊左　はて粗相言ふな。
河内　いや、そのやうなことではござりませぬ。お前方を私は見知つてゐまする。
久吉　（今は床几にゐる伊左衛門に向ひ）ここな烝性者め。後家、比丘尼、腰元、小娘まで、お前の手に掛からぬ者はない。近附でござりませう。
伊左　いや、覚えぬ。
河内　もし、藤屋の伊左衛門様。
久吉　そりやこそ。
河内　これ久吉殿、久しい。
伊左　これ、おのれぢやは。
久吉　いや、覚えませぬ。（河内の顔をぢつと見て）顔は見たやうなが、名は覚えぬ。名の頭字を聞きたい。
河内　カの字でござんす。
久吉　むむ、覚太夫が娘か。
河内　いや、いや。
久吉　そんなら、ま一字言うて下さい。
河内　はて、カハでござんす。
久吉　むむ、おかはさんか。
河内　はて、やくたいもない。河内でござんす。
伊左　（驚きて、女の顔をぢつと見詰め）おう。さて

は夕霧が妹女郎の河内か。
久吉　ぽんにさうぢや。町の風になつた故、とんと見違へた。先づこれへ。
（久吉、床几の毛氈を川原へ敷く。三人、これに坐る。）
伊左　そなたは井筒屋の八兵衞に請け出されたが、見れば供も連れず、どうした事ぞ。
河内　されば、井八様に請け出され、暫く一緒にゐましたが、井八様大酒が病で、咽喉からたんと血を吐き、それから煩ひになり、終に死なしやりました。
久吉　むゝ、さてはその弔ひの爲の流灌頂か。
河内　いや、井八様の弔ひは寺へ頼みました。これは夕霧様の七年忌。深う恩を著ました故、志でござんす。
久吉　はて殊勝な。
（娘おせき、十六七の紫帽子。門の内より茶を持ちて出づ。）
娘　茶を参ります。
河内　（娘の顔をぢつと見て）はて、こなさんは夕霧様にその儘ぢや。
伊左　その筈よ。桑名にゐた俺と夕霧が中の子ぢや。
河内　さうでござんすか。（娘に）私はお前のかかさんと懇の者ぢや。おう、いとほしや。（伊左衞門に）もし伊左衞門様。このお子を一夜貸して下さんせ。夕霧様に會はしたい。
久吉　いや、不思議な事ばかり聞く日ぢや。
伊左　何をいふ。夕霧に會はさうとは。
河内　されば、夕霧様が生き返りでござる。京で

は難波といふた女郎ぢや。ここでは難波津といふが、その儘の夕霧様ぢや。京の大盡がついて來て、ここの京屋で御全盛ぢや。

伊左　(大に驚く) それは京の大坂屋の女郎か。京では天神であつた難波が事か。

河内　如何にもさうでござんす。この所では太夫樣でござんす。

伊左　(肝の高ぶり來る樣子にて) やい久吉。何を浮浮聞いてゐる。最前話した女ぢや。

河内　お前見知つてか。

伊左　見知りどころか。そいつめ故に千貫の身代また捨てた。俺はあれが心中次第、死にもする。共に乞食でもする心ぢや。そこな娘を賣りに下つたも、揚錢濟ましてやりたさぢや。それに、俺がこの態となりたれば、桑名へ行きし留守を幸に、この所へ來る奴ぢや。(悲しげに) 久吉、難波にも前の世の契りはなかつた。

久吉　されば、どうなされます。

伊左　また他の女を探すまでぢや。難波が事はふつつりと思ひ切る。

娘　ととさん、わしは何となるぞ。

伊左　(河内に) さりながら、人の物を負うてゐるのは厭ぢや。娘を十五兩の金にしてくれ。

河内　それなれば、久吉殿と共に新町へ行き、埒の明くやうにいたしませう。

伊左　おせき、行てくれるか。

娘　如何にも、ととさんの爲ならば傾城になりませう。

久吉　(伊左衛門に) お前はどうなされます。

伊左　飛脚を頼んで、一時も早う金を揚屋へ渡し

たい。それから、川口屋に後を賴む。その上の分別ぢや。

久吉　京へお戻りなされますか。

伊左　京へ戻るか。この儘ここにゐるか。娘を連れて桑名へ行くか。また一人して行方も知らず旅立つか。とんと今では分からぬ。兎にも角にも、俺はまた道を違へた。ま一度道らしい道へ戻るまでは、一足も踏み出しはならぬ。

河内　されば、久吉さん、行て參りませうか。

久吉　心得た。

（河内、久吉、おせきを連れて行きかける。）

伊左　（後より娘に聲をかける）　おせき、新町へ入り、二町程行き、左手に扇の書いた暖簾のある格子が、母の夕霧が死んだ所ぢや。回向して通れ。

娘　あい。

伊左　あの方へ行きたりとも、難波津といふ傾城と物言ふな。一つ座敷にもゐたらば聞かぬぞ。

娘　あい。

伊左　久しう置きはせぬ。おつ附け取り戻す程に辛抱しや。

娘　あい。

河内　さらば。

久吉　さらば。

（三人去る。伊左衞門、一人殘り、毛氈の上にくづをれゐて、空を仰ぎ、太息をつく。ふと、まろびゐる太鼓に目をつけ、物狂ほしげに、そを搔い抱いて、急調に打つ。日かげる。）

――幕

（近松「夕霧七年忌」に據る）

與三郎　一幕三場

人物

伊豆屋　喜兵衛
伊豆屋手代伊之助
宿役人　六兵衛
同　　七　助
會津屋下男半助
伊豆屋下男忠助
切られの與三郎　伊豆屋の養子
島　　岑　屋
下　役　二　人

時代

江戸の末期

場所

伊豆屋の周圍

五月下旬の夜。

なかば戸を閉ぢたる伊豆屋の店先。彩色にて鼈甲櫛の形を描き、その下に「御誂鼈甲品々」と筆太に書きたる滑り障子、中よりの明かりにて燈籠のやうに仄白く見えゐる外、舞臺總て暗し。上手に土藏。下手に店の脇より勝手へ通る滑り戸。元山町としるしある用水桶。

（幕の明く前より、百萬遍、鐘の音。幕明くと、宿役人のこしらへをした六兵衛、同じこしらへにて鐵網寄洞など下げたる七助、下役二人、弓張を持てる手代伊之助、羽織着流しの伊豆屋老主人喜兵衛、召喚せられし役所より戻りし態にて、店の前に立ちかかりゐる。）

（店の奥より「南無阿彌だんぶつ、南無阿彌だんぶつ……」と、百萬遍を繰る聲、單調にして陰鬱なる叩き鐘の音、聞え來る。）

喜兵衛　いや。皆さん御苦勞でござりました。

六兵衛、七助　あなたこそさぞおくたびれでござりませう。

下役の一人　時に今夜はお內に御法事でもござりまするか。百萬遍がござりまするな。

喜兵衛　さればでござります。この百萬遍もあの野良めが、島へやられた船出の日を命日と思うて、毎月毎月御近所へ御迷惑をかけてゐるのでござります。親は未來の事など思うてゐますが、あいつめは親をも世間をも目の內に置かぬやうな惡業ばかり、けふ俄のお呼び出しも、やつぱりあいつが事でござりました。皆さんにも飛んだ御苦勞をかけました。

七助　なんのあなた、その御心配には及びませぬ。

六兵衛　年中お店の御厄介になりますわたくしどもでござります。この上とも何なりとも、御遠慮なく御用の筋は仰しやつて下さりませ。

七助　併し、御子息の與三郎樣には、何とも彼とも申しやうがござりませぬな。

喜兵衛　いや、いや。もうあいつの事は、わたくしも諦めました。けふもお役所であゝいふ嚴しいお言ひ渡しがあつたのでござりますから、どうか皆さん、若しこの居廻りにあの野良めがうろうろしてゐるやうな事でもござりましたら、決して庇はずと役所へ突き出して下さりませ。若しもの事がありますと、却つてお前方を恨みますぞ。

六兵衛　それはお氣遣ひなされますな。
七助　その事なら、よう心得てをりまする。
喜兵衛　それは有難うござります。何は兎もあれ、くたびれ休め、お茶など上がつてお歸りなされませ。
六兵衛　いや、さういたしてはをりますまい。
七助　お内もどうやらお取込の御樣子。失禮ながら、これでお暇いたしませう。
喜兵衛　強ひてお止めはいたしませぬ。そんなら又あしたお目に掛かりませう。（下役二人に）あなた方も御苦勞でござりました。

（喜兵衛、店の滑りへはひる。）

伊之助　さあ、さあ、それではこれから内へ歸つて、ゆつくりお休みなされませい。いやもう、わしはきのふからの事で、大抵粉になりました。
六兵衛　その御心配は御尤だ。わしも親の代から地主をしてゐるので、聞捨にもならずさ。お前さん方と立ち會つて、海老名樣のお屋敷へ出たのだが、兎角あすこはやかましい屋敷だてな。
七助　いやもう、ちつと物の言ひやうが惡いと、直ぐとつこに取つて、目の玉の出る程叱られる。
下役の他の一人　御代官所の事ばかりは、馴れぬといけぬものでござりまするて。

（上手より、やつし股引の番人半助、店行事と書きし提灯を持ち、割竹を鳴らしながら、「火の用心、火の用心」と出て來る。）

半助　これは皆さん、お揃ひだな。
伊之助　おう。おぬしは會津屋の半助どの。
七助　御苦勞でござるの。
六兵衛　御大儀、御大儀。

半助　おい。おい。あの、この家の忠助爺さんはゐねえかね。

伊之助　今そこらにゐたつけが、けふはちつと内も混雑。

半助　混雑でも、なんでも、けふは店番が廻つてゐるわな。

伊之助　その店番の事は承知さ。

六兵衛　大方、今に出るだらうよ。

七助　お前さんは組合だが、いつも不精だ。穴を埋めてやるが好いさ。

半助　なにお前方がさう言ふなら、どうでも好いが……成程、ここの伊豆屋は混雑な筈だ。今會所で聞いて來たがの。家の嗣子の與五郎さんと、嫁御のお鶴さんがゐなくなる。そこへ持つて來て、いつか島へ遣られた與三郎さんが……

六兵衛　（遮つて）これ、これ。大きな聲で。靜にさつせえ。

七助　靜に。靜に。

（半助、默つて控へる。）

六兵衛　時に、お二人の一件は、あした仁田様へ別に訴へる事にいたしませうな。

伊之助　それが宜しうございませう。

七助　わしは三田にゐますが、あすこにもこの家の地面がありますから、この事は、やつぱりおつちの代官所へも届けて置かにやなりますまい。いづれ、あした又こちらへ出張りませう。

伊之助　それは御苦勞でござりますな。

七助、六兵衛　そんなら、あした。

伊之助　御苦勞様でござりました。

（伊之助、七助と、提灯と鐵雪洞の交換する。）

六兵衛、七助、下役二人、下手へはひる。伊之助も、直ぐに内へはひりかける。）

半助　これ、これ。まあ待ちなせえ。

伊之助　それでも、おらあ忙しいわ。

（と、行きかける。半助、その袂を捉へる。）

半助　忠助さんはどうしたのだ。早くよこしてくんなせえな。

伊之助　ええ、これ、おぬしも皮肉なものだ。今し助さんにあのくらゐ言はれたではないか。

半助　言はれた事は言はれたが、いつもおれが少し遅く出ると、きつとあの親爺が早く番小屋へ出しやばつて、今の若い奴はしつこしがねえ。寒からうが暑からうが、年がよつても勤める所はきつと勤めるなんのと、三段目の師直を見たやうな事を言つて、若い者を遣り込めてならねえ。

伊之助　そりや誰がよ。

半助　お前の家の師直親爺よ。

伊之助　そりやあ誰の事だ。

半助　忠助親爺の事だわな。

（下男忠助、この少し前より出て来て、二人の話を後で聞いてゐる。老けたるこしらへ。割竹。店番と記したる弓張提灯。）

忠助　（突然、二人の前へ躍り出る）何がどうしたと。（割竹で下を叩く）

（兩人、呆れて詞なし。）

忠助　（半助に）これ忠助なら忠助で好いわい。忠助親爺たあなんの事だ。さあ、もう一遍言つて見せろ。

伊之助　これさ。これさ。まあ好いわな。お前が

ゐねえと思つて言つたのだ。親爺だから親爺だと言つたらうではねえか。

半助　陰で言ふ事はしかたがねえ。量見しなせえ。量見しなせえ。

忠助　まあ、まあ。さう言へば堪忍してやるがな。いつでも、おれにばかり番をさせて置くではねえか。今夜は内がちつと取り込んでゐる事があればこそ、遲くなつたのだ。いつもおれよりは半時づつも遲く出張つて、九つを聞くと、こくらこくら居眠りを始め、八つを聞くと白川夜船(しらかはよふね)明け方には他愛なしだ。丁度おれと組み合ふのが仕合せ、いつでも、おれが一人勤めてやるのだ。

伊之助　まあ、まあ、理窟を言はずとも好いではねえか。

忠助　それでも、こんな年下の者にばかにされるのも……(と、店の内を覗くやうにして)やつぱり旦那樣が惡いからだ。

半助　(分からぬ樣子にて)これ、これ、そりや何を言ふのだ。

伊之助　旦那が惡いなんぞと、滅多な事は言はぬものだ。

忠助　いやさ。こなた衆が知つての通り、與三郎さんや弟御の事で、家中が亂飛亂國(らんぴらこく)、たうとうこんな騷動になつたのも……旦那の心が弱過ぎるからだ。

伊之助　これさ。そんな事は、お前が言つても追つつかねえわな。

忠助　それでも、もう六七年前だ。おれが何かの譯は知つてゐるから、大旦那にかうかうしなさ

るが好いと言うたれど、その通りしねえもんだから、たうとう今度の一件だ。

半助　さあ、その與左郎様の内にござらぬ取込を知りながら、こなたの番に出やうが遅いと言つたのは悪かつたよ。

忠助　なんの、與左郎さんはどうでも好いが、それよりもまだ氣に掛かる事が……(と、又店の方を窺ふやうにする。)

伊之助　ええ。

忠助　ああ、もうかうなつては後(あと)の祭だ。(と落膽する。)

半助　何の事だ。おれにやあ、ちつとも訳(わけ)が分からねえ……それはさうと、忠助さん、今夜はい、宵の内はお前まあ内の臺所も取込だらうし、暇手に休みねえな。

伊之助　むむ、成程。さうして、九つを打つたら、番小屋へ行くが好い。それからは、貴様の番になつてゐるものだから……

半助　それから、心任(こゝろまか)せにするが好い。

忠助　(一寸考へて)成程。さうしようか。おれも今の間にちつと旦那へ……(と、言ひかけて詞を濁す)なんなら、さうして貰はうか。

半助　さうしなせえ、さうしなせえ。それぢやあ一遍廻つたら、こなたは臺所で休みなせえ。九つまではおれが番小屋へ行つてゐるから。

忠助　ぢやあ、さうしてくんねえ。

伊之助　わしもまだ色々用があつた。(と、件の鐵網の雪洞を持ち、立ちかける)

忠助　(始めて、それに心づき)これ、これ。番頭ともあらう者がどうしたものだ。往來へ雪洞を。

持ち出すとは。店番をする家では餘計氣をつけにやならねえ。火の用心が悪うござるぞ。

伊之助　こりやあ、あやまつた。

半助　それぢやあ、一遍廻んなせえ。おいらもあすこの新道から、直ぐ番小屋へ行つてゐる。

（と、上手へ向ふ）

忠助　九つを打つたら、おれが代るぞ。

伊之助　どれ、店の用を片つけようか。

半助、忠助　火の用心。火の用心。

（半助、割竹を鳴らしながら、上手へはひる。伊之助、勝手へ通る潜り戸をはひる。忠助、割竹を鳴らしながら、下手へ向ふ。百萬遍の聲、叩き鐘の音、段々遠くなる。）

三方飾りの舞臺廻る。舞臺と舞臺との接續、合理的なるべし。

濃塗の高塀。忍び返し。非常潜り戸。下手に箱の用水溜。これに元山町と記したる町名札。

（時の鐘。忠助、上手より、同時に切られの與三郎、下手より、三尺著流し、頬冠りにて、あたりを見廻しながら、出て來る。）

（與三郎、黒塀を見上げ見廻す。忠助、それに目をつけ、大きく「火の用心。火の用心。」と叫びながら割竹を鳴らし、その側を通り過ぎようとする。與三郎、ふと忠助に目を注ぎ、驚く。忠助、訝りながら下手へ掛かる。）

與三郎　（呼び留める）おい。爺さん。爺さん。

忠助　（顔だけ振り向ける）なんだ。通りへ出るのなら、先の曲り角から出さつせえ。この向うの潜りは締切だよ。

與三郎　さうだやねえ。ちよいと聞きてえ事がある。

忠助　時を聞くのか。まだ四つが鳴つたばかりだ。

(と、行き過ぎようとする)

與三郎　これさ。おれだよ。

忠助　(顔を振向ける) なんだ。おれだ。大風な事を抜かすな。ははあ、生酔か。

與三郎　おい、爺や。おれだよ。おれだよ。

忠助　爺やあだ。へん、甘つたれた事を抜かすな。誰だね。ははあ。屋根富の弟の源次か。家へ歸りそびれて、お袋へ詫事してくれか。そんな好い氣な事ぢやあねえわ。

與三郎　これ爺や。おれだ。手前はいつも達者だな。

忠助　(提灯をかざして) さては氣違ひだな。これ。おれはそんな汚ねえ若え者に近づきは持たねえぞ。

與三郎　ええ、分からねえ。(と、すつと側へ寄り、あたりを見廻しながら) 與三郎だよ。

忠助　(驚く) ええ。(又よく提灯で見る) 嘘をつかつせえ。おれがお育て申した坊さんは、そんな醜え男ぢやねえ……ああ、おれが色々あの子の事を思つてゐるものだから、それで、そんな事を……併し、まさか贋者ぢやあああるめえが、一體、手前は何だ。

與三郎　(一寸考へて) むむ。それぢやあ、おれが面や體の變つた事を……成程、その後おぬしにやあ會はねえから、まだ訣を知らねえのも尤だ。かう、爺やあ。(と、頬冠りの結び目を解く) おれは與三郎だ。

忠助　(暫く、ぢつと相手の顔を見てから、驚いて) おう。さうだ。坊さんだ、與三郎さんだ。(と、又ぢつと與三郎の顔を見て) さうして、まあ、お

前のその顔の疵は……ははあ、そんなら、この間、噂に聞いた通り……

與三郎　木更津の一件で、面も體もこの通りだ。

忠助　ええ、情ない、變り果てたそのお姿……（と、言ひかけたが、突然提灯を吹き消し、何事かを恐れるやうに、與三郎の手を引つ張る）まあ、まあ、こつちへ來さつしやりませ。（と下手をさす）

與三郎　これさ。どうするのだ。

忠助　ここでは話が出來にくい。まあ、わたしが好い事がござります。もし。（と與三郎の耳へ何か囁く）

與三郎　むむ。ついそこか。

（下手の蔭で、犬がけたたましく吠える。）

忠助　ええ。畜生め。提灯を消したら、吠えやあがる。しつ。しつ。（と、犬を追ふ）ぢやあ、坊さん。

與三郎　むむ。（と、天水桶の蔭に忍ぶ）

（また犬の聲、忠助、下手へ向ふ。舞臺廻る。前に同じく、次の舞臺への接續、合理的なるべし。）

板屋根の番小屋。「店番火の用心」と記したる掛行燈。篠矢來。高塀。「元山町裏河岸」と記したる天水桶二つ程。下手に柳の立木。

（番小屋の戸、一枚明きなり、これに割竹立てかけあり。火のつけてない手丸置いてある。以前の半助、火鉢を控へ、番をしてゐる。）

（忠助、上手より出で來り、番小屋へ立ち寄る。）

半助　（顏を上げて、驚く）おや。もうお前來たのか。今、犬が吠えたつけな。こなたはどつちを通つて來た。

忠助　一廻り廻つて、直ぐ來たんだ。さあ、こな

たは暫く休まつせえ。

半助　お前何を言ふのだ。たつた今、四つを打つたばかりだ、代るなあ九つからだ。

忠助　はて、もう好い。おれが番をするわ。貴様はまあ休め。

半助　そりやあ厭だ。うつかり、そんな事をすると、又さつきのやうに言はれるのだ。おらあ九つまで勤める、勤める。

忠助　これは又聞きわけの悪い。おれが代ると言へば。

半助　はて、九つから代るつもりだよ。

忠助　ええ、おれが代ると言つたら。

半助　なぜそんな事を言ふのだ。

忠助　はて、おれが内の臺所の用は片付いた。どうで家にゐたところが、寝られはしねえから、けふはおれに勤めさせて下せえ。

半助　さう言ふなら、どうでも好いがの。又あとで、さつきのやうに言ふと厭だぜ。

忠助　さつきのは、おれが悪い。量見さつせえ。まあ、どうかおれに代らせてくれ。

半助　色々な事を言ふなう。それぢやあ、おらあ八つを打つと出て來るよ。

忠助　はてまあ、それもどうでも好いから、早く行かつせえ。

（半助、提灯へ火を入れ、割竹を持つて、上手へ向ふ。）

半助　それぢやあ、一廻り廻つて行かう。

忠助　ああ、これ、これ。そつちは今おれが廻つて來た。

半助　はて、年寄といふ者は、色々な事を言ふも

のだ。

（と、割竹を鳴らしながら下手へ入る。忠助、その後を見送り、直ぐと上の方へ行く。）

忠助　さあ、もうようございます。ここへお出でなされませ。

（與三郎、上手から出て來る。）

與三郎　むむ。こりやあ番小屋だな。かうして毎晩手前が勤めるのか。

忠助　いや。さうではございませぬ。なんでも家持の店々から人を出して、この通り代り代りに勤めるのでございます。さあ、まあここへお上がりなされませ。

與三郎　好いかえ。

忠助　なんの。氣遣ひはございませぬ。（と、番小屋にある蒲團の塵を拂ふ）

與三郎　むむ。（番小屋へ上がつて、坐らうとする）

忠助　あ。もしもし。板敷の上は薄縁ばかりで、足が痛みまする。汚なうございますが、これをお敷きなされませ。（と、蒲團を勸める）

與三郎　なんの。好いわ。以前とは違ふわ。これ程の身になるまでにやあ、色々苦しい目にも會つて來たのだ。

忠助　でもまあ。（と無理に蒲團をあてがふ）

（與三郎、やむを得ず、蒲團の上に乘る。稍長き間。）

忠助　もし若旦那。以前に變ると仰しやるが、いやもう變つた事だらけ。まあ、その變つた事の始まりに聞きたいは、お前なぜ、そんな、顏へ大層な疵を受けなすつた。どうして、そんな恐ろしい顏にならつしやつた。

與三郎　されば、さ。あの木更津へ預けられた時分にの。あの土地に赤間源左衛門といふ道樂者があつて、そいつの女房にお富といふ女があつた。構ねえわけで、その女をな……(と、口ごもる)

忠助　お前、その女をどうかしたのおやな。

與三郎　そこはまあどうでも好いわ。

忠助　呆れたものだ。

與三郎　言はれて見りやあ、こつちにちつと義理の悪い訳もある。そこで源左衛門といふ野郎の子分等に、寄つてたかつて手籠にされ、それでしやつ面、體へも、この通りの疵だらけよ。

(と、腕をまくり、頬冠りを取り捨てる)

忠助　(行燈の明かりを、消したる提灯に移し、又ちつと與三郎を見る)　おう、おう。やれ、やれ。むごたらしい。ああ、情ねえ事をしやがつたなう。

與三郎　このわけ故に、親父は腹を立て、中々江戸では寄せつけず、それで、手前にも會はねえ仕儀。たうとう、その儘勘當と、體一つを棒に振り、切られの與三と異名をつけられ、そつちこつちとごろつく内、そのお富といふ女を嚊あにして暮らしてゐたが、また程もなく食ひ込み、こんな態で江戸へ來て、お主に會ふのも面目ねえなあ。

忠助　なんの、お前、面目ない事がござりませう。お前さんの御勘當は、親御様の御立腹ばかりではござりませぬ。これには色々……しかし、そい事はまあ後でお話し申しませうが……もし若旦那。(と、與三郎に何か囁き)　そんな噂を聞きましたが、ほんの事でござりますかえ。

與三郎　(平氣で)　ほんの事よ。

忠助　え。

與三郎　おりやあ腹が立つてならねえのだ。おれは養子。あとから出來ても、與五郎は實子。その弟に家の跡を取らせたいばつかりに、心にもねえ身持放埒(みもちはうらつ)。併し、まあそりやあ金で濟む事だから構はねえが、あとにも先にも、たつた一度、人の女に惚れたばかりに、一生涯人交(ひとまじ)はりの出來ねえ體になるとは、天道樣も聞えねえや。さあ、そい破れかぶれで、癪に障る奴は片つぱしから、いぢめて歩いた。そのお蔭で、たうとう終(しまひ)が島流しだ。おれはもう口惜しくつて、口惜しくつてしやうがねえから、たうとう島を破つて忍び忍び、やつとの思ひで、ここまで來たのよ。

忠助　（愈驚く）それぢやあ、愈その恐ろしい所を脱(ぬ)け、島紛失(しまふんじつ)してござつたか。（と、泣き伏す）

與三郎　（あたりに心を使ひながら）これさ、これさ。そんなに言はずとも好いぢやあねえか。靜にしやれ。靜にしやれ。（と、又あたりを見廻す）どうで、おれは腐つた體だ。しちくどいやうだが、たつた一度犯した罪の爲に、一生涯世の中へ出られねえ燒金(やきがね)を當てられた不運な男だ。どうせ命はねえものと諦めてゐる。唯、お主に聞きてえのは、親父さんや母さんは御機嫌が好いか。弟の與五郎も達者でゐるか。その安否が聞きてえばかりに、うそうそこんな所まで迷つて來たのだ。

忠助　（默つて、泣き伏してゐる）

與三郎　これさ。泣いてゐちやあ分からねえ。父さんやお袋は達者か。與五郎は無事でゐるか。

ええ。これ。さぞ親達もおれの事を、憎い奴だと言つてござるだらうな。

（忠助、默つてゐる。かすかに、叩き鐘、木魚の音まじりて、聞え來る。）

忠助　（悄々して）親御の安否が聞きたいとはまだしもだ。そのお心なら、なぜまあ、だいそれた島破りなどさつしやりました。恨めしいお人だなう。

輿三郎　今更そんな事を言つたところで、もう追つつかねえ話だわい。（無と癪に障つたらしい様子で）面倒だ。どうで勘當を受けた體だ。親父やお袋の安否などを聞いたところで、しやうがねえわ。ぢやあ、達者でゐろよ。（と、行きかける）

忠助　（狼狽して留める）これ、これ。まあ待たつしやれ。愚痴を言つたのは、わしが悪い。勘忍して下さりませ。（木魚の音、鈴の音に耳を傾ける）あれ、あれ。親御の安否が聞きたくば、あの鈴の音や木魚の音をお聞きなされませ。お袋様や親旦那が、ろくろく夜の目もおよらずに、輿の佛間で看經のお勤めをさつしやるも、御自分達の後世は措いて、この世のお前の身の爲を、おぼしめしての御回向でござりまする。せめて、あの音の聞える、ここにござれば、二親にお會ひなされたも同じこと。まあ、下にゐて下さりませ。（と、無理に又輿三郎を坐らせる）もし若旦那。けふは幾日と思はつしやるのだ。

輿三郎　（考へて）手前に言はれて氣がついた。おれが科が流罪ときまり、伊豆の島へ流されたは、如何さま去年のけふであつた。（と、思ひ沈む）

忠助　別して、けふは祥月とて、胸の内は百萬遍、

同行衆を呼び集め、もてなして返すのも、みんなお前の身の祈禱だ。毎月その日になると、大旦那やお袋様が、座敷へいつでもわたしを呼ばつしやつて、仰しやるには、これ爺よ。どういふ事か與三郎は、頑是ない時分から、乳母をつけてもお主になじむので、守をしてくれたのは、そちばかり。それ淺草の觀音様、兩國の開帳よ、花火の夜店緣日と、連れ歩いたのもそちばかりぢや。その與三郎が成人して、やつと男一人前になるかと思ふと、知つての通りの身持放埒。世間を兼ねて、據所なく勘當はしたが、たうとう恐ろしい罪を犯して、島流しにまでなるといふのは、よくせき薄い親子の緣。どうで、あれが體では、島で命を終へるであらう。船に乘つた日を命日と思ひ、それで營む志ぢやに依つて、けふの正客は忠助そちぢや。と、膳の上座に据ゑられる心苦しさ。ああ情ない。これがまあ、與三郎様がおとなしくしてござつて、嫁御でも取らつしやれて、その披露の喜びか、初孫様の宮參り、初の節句のお祝ひなら、御祝儀の赤あづき飯、末座で喰べても、さぞ嬉しうござりませうが、それと引きかへ、守り育てたそのお子が、島へ行かれたけふの膳。その正客にばつかりは、なりたうもござりませぬと、わしが言へば、御兩親も尤におぼしめし、なんにも仰しやらないで、唯しくしくと泣いてばかり、仕出しは八百屋で、手を盡した結構な本膳も、一箸咽喉へ通らばこそ。わしや毎月毎月、けふの日の來るのが思ひでござりますわいの。（と、泣く）

（與三郎は忠助の眞實に心を動かされながら

も、態と弱みを見せまいとして、延つ反つし、
　さまでもなき咳を拂ひなどする。）

忠助　（それに氣のつきたる態にて）ああ、こりや氣のつかぬ。お前を捕まへて、わが勝手のよい事はかり。どうも、ここは濕のあるせゐかして、もう咳が少しづつ出ますわいの。それに夜が更けるせゐか。ひやひやと……（と、與三郎の裝を見る）お前、風を引いては惡うござります。これなと引つかけてござりませ。（と、袷の上へ引つかけし半纏を脫いで、與三郎に著せようとする）

與三郎　好いわえ。好いわえ。うつちやつて置くが好い。もうかうなつちやあ、風も引かねえ。そりやあさうと、親父どのお袋へも物を思はせ、可哀さうに、手前にまでも、そんな思ひをさせるのも、みんなおれが心からだ。おらあ、もうつくづく體に愛想が盡きた。だが、おれが島ぬけの事を、どうして手前知つてゐるのだ。

忠助　さあ、それはの。けさ海老名様のお屋敷から、俄の召し狀。何事かと親旦那様が宿老方と同道で、お役所へ出たところが、お前さんのお身の上、かやうかやうの不屆ゆゑ、その方は親里、きつと尋ね參るであらうから、見つけ次第搦めて出せ。若し隱しでもする時は、親は元より緣者までも同罪と、いやもう嚴しいお上のお言渡しを、旦那様が戾る早々、わしへのお話、もし、まあ、ひよんな事になりましたなあ。

　（與三郎、これを聞くと、つと立ち上がり、番小屋を驅けて出ようとする。忠助、驚いて、その袖に縋る。）

忠助　もし、お前どこへござる。何處へ行かうと

思ふのぢや。
與三郎　知れた事を。名のつて出るわえ。
忠助　（驚く）ええ。
與三郎　よもや。おれがこの江戸へ來たといふ事は、誰も知るめえと思つたに、もうさうなりやあ、これまでだ。名のつて出るのが、いつちの分別。そこを放せ。ええ、そこを放せ。
忠助　いや、いや。そりやなりませぬ。そりやなりませぬ。
與三郎　ええ、放せ。放さねえか。
忠助　いや、いや、放さぬ。これ、若旦那。そりやお前、わるい量見でござりますぞえ。
與三郎　ばかを言ふな。これ、親の首へも繩をつけ、奉公人にも難儀をかけうよりは、男らしく名のつて出て、立派に兇状受ける心。それがなぜ悪い量見だ。
忠助　ええ。情ない事言はつしやるな。お前、今名のつて出れば、命を助かると思はつしやるか。
與三郎　何の命が助かるものか。悪徒のしまひはかうしたものだ。やる所までやつつけるわよ。
忠助　さ、さ、さ、それが悪い。死ぬのが知れてゐる事なら、よしにして下さりませ。これ、お前が今名のつて出れば、科は島破りだ、荒繩で高手小手に縛り上げられ、忌はしい紙幟、裸馬にのせられて、拔身の槍で先を拂はせ、ここらあたりを引き廻される。その時人が何と言ひますぞ。あれ、あれ、見やれ。あれが元山町の伊豆屋の息子ぢや。あれが切られの與三とやらぢやと、言はれじまひが木の空で、大身の槍で突かるる苦しみ。お前はそれでもよいと思はつし

やるか知らないが、それを見聞する御兩親のお嘆きは、どのやうにあらうと思はつしやりますぞ。なあもし、若旦那。この親爺が惡い事は申しませぬ。どうぞわしが言ふ事聞いて、名のつて出る事は見合せて下さりませ。（與三郎、默つてゐる）もし、若旦那。これ程までに、わしが事を分けて言ひますに、聞き分けては下さりませぬか。これ、默つてござるは不承知か。ええ、不承知なれば是非がない。いつその事に……

（と、手拭にて我が手に首を縊らうとする）

與三郎　（慌てて止めて）これ、これ、滅相な、何をするのだ。

忠助　いや、いや。わしが詞を聞き入れぬなら、どうぞ放して殺して下され。死にたい。死にたい。

與三郎　ばかあ言へ。小さい時から世話になつたお主に、さういふ事をさして濟むものか。

忠助　止めさつしやるは、わしが言ふ事聞かつしやる氣か。

與三郎　さあ、それは。

忠助　聞き入れなくば、わしはやつぱり。

與三郎　これ、ばかな。

忠助　そんなら、言ふ事聞かつしやるか。

與三郎　さあ。

忠助　さあ、もし、若旦那。もう生先のない、この親爺。わしを不憫と思はつしやるなら、どうぞ名のつて出る事は廢めて下され。

與三郎　成程、手前がそれ程までに言ふ事だ。廢めにするから、さう思へ。

忠助　そんなら、あの、聞き濟んで、思ひ止まつ

て下さりますか。
與三郎　それもお主に免じてだ。併し、かうなつちやあ、江戸の内にはゐられねえ。これから氣のつかねえ、遠い所へ巣を變へようよ。
忠助　おう、よく言つて下すつた。お前がさういふ氣にならつしやれば、わしに思はくがござります。ちと待たつしやりませ。（と、番小屋を出ようとする）
與三郎　どこへ行くのだ。
忠助　はて、お前樣に餞をいたします。
與三郎　何を言ふのだ。手前に餞を貰つてどうなるものだ。
忠助　これ。これから遠方へござるお前ゆゑ、實は餞と申したは……（と、塀の内へ心を遣る）　與にござる親御達へ、一目なりとお前の姿を……
與三郎　ええ。（と、立ちかける）
忠助　（抑へて）もし。（と、與三郎に囁く）
（時の鐘。忠助、草履を出して、與三郎に穿かせ、手を引いて連れ立つ。忠助は割竹を持ち、與三郎は手拭をわざと不器用にかぶり、手に提灯を持つ。共に、夜番の心。道具廻る）
第一場の舞臺。伊豆屋の表口。但し、潜り障子の外は、既に雨戸がおりてゐて、その上の覗き窓の小障子だけ、ぼんやり明かるく見えてゐる。
（與三郎、忠助、時廻りの心にて、上手より出で來る。生醉、夜商人の戻りなど、無言にて四五人東西より行き違ふ。犬吠える。忠助、割竹でそれを追ふ。又、時の鐘。）
忠助　まだ旦那樣はお休みなされは遊ばすまい。お前、一寸ここに、この割竹と提灯を預けます。番のつもりで、待つてござりませ。
與三郎　いや、いや。よすが好い。却つて、そり

やあ恐れ入ら。

忠助　はてまあ、ここに少しの内。わしが一寸與の樣子を見て參りまする。一寸待つて下さりませ。

（忠助、あくせくと勝手口の潜り戶の中にはひる。）

（下手より、夜蕎麥賣、風鈴のつきし荷をかたげ、呼びながら、出て來る。犬また吠える。與三郎、追ふ。）

與三郎　なんぼこんな身なりになつても、割竹で時借りをしようとは氣がつかねえ。飛んだ目に會はしやあがるわえ。畜生。（と、犬を追ふ）

蕎麥屋　饂飩蕎麥しつぽく。そばい。そばい。

與三郎　おい、おい。好い所へ來た。一ぺえ下つし。

蕎麥屋　はい、はい。何にしませう。

與三郎　なんでも好いわ。熱くしてい。

蕎麥屋　いゝゝ、にうめんもござりますよ。

與三郎　やつぱり蕎麥にしよう。

蕎麥屋　はい、はい。

（與三郎、緣先へ提灯を置き、腰をかける。蕎麥屋、揚床へ蕎麥を入れ、湯を通したりなどする。）

與三郎　つゆが辛けりやあ、湯をまはして、甘え方が好いよ。

蕎麥屋　なに、鹽梅は吟味して上げます。（と、拵へて）へい。お上がりなされませ。

與三郎　（丼を手にして）こりやあ割箸で、凝つたものだの。（と、食ひながら、行燈を見て）藤の紋どころで、岩附屋か。いつも見かける印だな。

蕎麥屋　この御近所はお馴染でござります。これから四つ辻へ、夜明けまで店を張ります。

與三郎　（食ひながら）こりやあ好い鹽梅だ。

蕎麥屋　どうござりますか。いやもう夜鷹蕎麥とは言ふものの、この頃は好い衆が召し上がるから、氣をつけにやあなりませぬ。その代り、元ばやりには困ります。

與三郎　何でもそれよ。

（この間に代りをする。蕎麥屋、又一つあとを拵へる。）

與三郎　（二杯目を食ひながら）おい、蕎麥屋さん。

蕎麥屋　湯を上げませうかね。

與三郎　何時（なんどき）だらうな。

蕎麥屋　今、九つを打ちました。（と、言ひながら、與三郎の裝を見て）お前様、夜番をしながら、時をお聞きなさるなあをかしいね。

與三郎　え。（と、驚いたが、直ぐ笑ひに紛らして）でも、蕎麥屋さんに時を聞くのは、お定まりの捨臺詞（すてぜりふ）だ。

蕎麥屋　ははは。ところで、この内では、いつもお爺さんが番に出なさるではござりませんか。

與三郎　その爺さんが、おれに代りを頼んで、今用があつて、臺所まで行つたのだ。

蕎麥屋　それぢやあ、代りかね。この夜番も御苦勞樣さね。併し、わたしの商賣は、お蔭で餘計賣れますよ。

與三郎　おい。湯を下つし。

蕎麥屋　はい、はい。（と、湯を出す）

與三郎　それ、錢よ。

蕎麥屋　（丼と錢と兩方をとり）これは有難うござります。また明晩お願ひ申します。

與三郎　早くしまひなせえ。

蕎麥屋　（荷を擔げて、上手へはひる）そばい。そば

い。うどん蕎麦しつぽこ。

（風の音。捨鐘。與三郎、あたりを見廻し、内の様子など窺ふ。）

與三郎　見えねえ。あんな事を言つては行つたが、よも親父が會ひはしめえ。こんな事をしてゐたら、なほなか氣がおくれるばかりだ。（と、立ちかけるが）併しなあ、この門口もこれが見納めか。（と、ぢつと振向いて、家の様子を見る、やがて決心の色を面にあらはして。）むむ。どれこの内に。（と、提灯と割竹を置いた儘、つかつかと行きかけ、提灯の事に氣がついて、また立ち戻り、提灯を消さうとする。）

（忠助、小風呂敷、脚絆、三度笠など持つて出る。）

（與三郎、提灯を置いて、つかつかと逃げ出す。）

忠助　（呼びとめる）もし、もし、若旦那。まあ、待たつしやりませ。お前、もう直ぐに行く氣であらうが、その身なりでは、猶更人が目をつけます。これ、ここに股引脚絆もあり、風呂敷の中には合羽（かつぱ）から着更（きかへ）まで入れてある。又これは親旦那が、いつぞや参宮なされたその折の三度笠、せめてはこれを片身と思つて、この軒下で支度して行かつしやりませ。

與三郎　成程。おれがこの裝（なり）ぢやあ、人目につくな。ありがてえ。そんなら、直ぐに支度をしよう。（と、旅支度にかかる。）

忠助　それから、お前がお出でのあらまし、親旦那様御老母様へ、お話を申し上げました。

與三郎　たとひ手前がどう言はうと、勘當受けたおれが儘。會ふとは言ふめえ。

忠助　さあ。お前が言はつしやる通り、以ての外な親旦那のお詞。あの不孝者めがうせをつたか。いや、そりや途方もない事ぢや。ここらあたりをまごついたら、この上どのやうな難儀をかけうも知れぬ。人の目褄（めつま）にかからぬ内に、手前早く行つて叩き出せ。汝（われ）も汝ぢや。それをここへ来て、おれ達の耳へ聞かす事があるものか。門口踏ますも暖簾（のれん）のけがれ。どこへなと勝手な所へ行けと、なぜ叱りつけて返しはせぬ。年がひもない愚鈍な奴と、思ひの外に叱られましたわいなう。

與三郎　それ見やあがれ。だから、おれが言はねえ事かえ。ええ、あつたら閑をかかせあがつた。ざまを見ろえ。べらぼうめ。

忠助　（泣き聲を出して）これ、情ない事言はつしやるな。たとひ勘當しられても、育てて貰うた親御の家、その門端で、そんな憎さげな口の利きやう。若し、ひよつと……（と、覗き窓の障子を破り、誰か外を覗く樣子。中の明かり動く。與三郎、氣がつかず）若し、ひよつと、親御達がござつたら、僅の間にも、あのやうに人が悪くなるものかと思はれるだけ、お前不孝になりますぞや。（と、内の方へ向ひ）もし、御兩親樣。御免なされて下さりませ。ありやあ昔の腕白で、わやくを言ふのでござります。

（與三郎、思はず見返る。覗き窓、少し明き、人の影さす。與三郎、それを見て、駈け出さうとするのを、忠助留める。覗き窓、がらりと悉く明く。喜兵衛、涙に濡れた顔を出す。忠助、提灯の光を與三郎にさしつける。與三郎、うつむく。）

喜兵衛　これ、忠助、お主まだそこにゐるか。

忠助　はい。わたくしより旦那様。何と思うて、今頃外を御覧じますぞ。

喜兵衛　されば、さりやあ、今犬めが表で大層吠えた故、目が覚めて、外の様子を見に来たのぢや。これ、内の門口であまり犬が吠えると、ここの家に何事かあるやうで、世間様の思はくも悪からう。一體、そちがあまり可愛がり過ぎるから、どうも犬めが甘えてならぬ。早く追つ拂つてしまふがよいぞ。

忠助　はい、はい。やかましう吠えた犬は追ひ退けましたが、たつた一つ跡へ殘りました。この子犬、唯一目よう御覧なさりませ。

（忠助、提灯の火を與三郎の顔へさしつける。與三郎、思はず、顔を上げて、喜兵衛と顔を見合はし、堪りかねて、その方へ寄らうとするを、忠助隔てる。）

忠助　旦那様。むごたらしいこの子犬……

喜兵衛　不憫な事とは思へども、又他の犬の目にかからば、その身の大事、早く追ひやつて下され。

忠助　（喜兵衛に）もし。せめて別れに唯一言。

（と、與三郎を前に押しやる）

與三郎　親父様か。

喜兵衛　おう、倅。（と、胴巻の儘、金を與三郎に投げ與へる）

（與三郎、それを拾つて、戴く。忠助、與三郎を下手へ突きやる。喜兵衛、障子を立てる。）

忠助　火の用心。火の用心。（と、割竹を鳴らす）

――幕

傾城淺間嶽　一幕

人物

禿　文字野
駕舁七兵衛（巴之丞）
同　作兵衛（家老高島成家）
普賢院
腰元美代野
同　しがらみ
同　清瀧
同　八木澤
局　松ヶ枝
音羽姫

場所

京都附近

時代

元祿時代の人が樣式的に想像せる古代

舞臺一杯に所作臺を敷き、松の釣枝の後に淺葱幕を垂れる。淺葱幕の前に、淺間開帳の立札を一本立てたる外、何等の舞臺裝飾なし

（在鄕歌で幕が明くと、下手から振袖姿の禿文字野、大きな風呂敷包をわいがけにして出る　直ぐ後から、駕舁七兵衛、駕をかたげて、追ひかけて出る。）

七兵衛　おうい。おうい。駕貸しませう。駕貸しませう。

禿　（振向いて）そんなら貸してたもるか。

七兵衛　負けて遣りませう。淺間の開帳まで七分ぢやが合點か。

禿　よいとも、よいとも。我が身が言やるほど遣るわいの。

七兵衛　よいか、よいか。（つくづく見て）ああ、ほんにこなさんは可愛らしい子ぢやの。さあ乗らんせ、乗らんせ。

（女平時、駕へ乗る。七兵衛、後から駕を一人で舁かうとする。上がらない。）

禿　これ、これ。何としやるぞいのう。相手を呼んで早う遣つてたもいのう。

七兵衛　僅か七分を二人して取つて、合ふものぢやないわいの。どれ、肩かへて遣らう。

（今度は前へ廻つて舁かうとする。駕が傾いて上がらない。）

七兵衛　これや、どうでも行かぬわいの。せうことがない。増しを下さるなら棒組を呼んで来ませう。

禿　そちの望み通り遣る程に、早う遣つて賜いの。

七兵衛　心得ました。（下手に向つて呼ぶ）棒組来いやい。棒組やあい。

（「おうい」と返事がして、駕舁作兵衛、息杖を持つて出て来る。）

七兵衛　何ぢや。われか。われなら厭ぢや。

作兵衛　なぜに。

七兵衛　われとおれとは肩が合はぬ。他の者がゐるなら、おこせ、おこせ。

作兵衛　はて、遣つてくれ。どうして又肩が合はぬぞ。

七兵衛　われは丈が高し、おれは低い、それがどう肩が合ふもいぞ。

作兵衛　それは舁きやうがある。登り坂の時は、われが先になつておれが後を擔ぐ。又下り坂の時は、おれが先肩をして、われが後を舁けば、それで好からうがの。

七兵衛　扠てはそれも好いが、平地はどうする。

作兵衛　その時は下駄を穿くわい。

七兵衛　はれ、やくたいな駕舁ぢやなあ。

作兵衛　兎角けふは閑ぢや。相借屋のよしみぢや。是非遣つてくれ、遣つてくれ。

七兵衛　そのやうに言ふなら。何とせう、遣つて遣らう。淺間まで七分ぢやが合點か。

作兵衛　なに、あの、淺間まで七分ぢや。こりやならぬ。（と、行きかける）

七兵衛　こりや、こりや、待て。われが去んで、おれ一人で駕が舁けるものかい。

作兵衛　たはけた奴ではあるわいの。こりや、よう合點せいよ。この深草から信濃の淺間までは凡そ百二三十里あるぞよ。それを七分でどう行かれるものかやい。

七兵衛　待て。われも鈍な奴ではあるわい。東山で淺間の開帳がある。その開帳場までの事ぢやわいやい。

作兵衛　むむ、開帳場までか。そんなら遣らう。（と、直ぐ舁かうとする）

七兵衛　待て、待て。話がついたら、先づ一服吸つて行かう。（と、懐から紙煙草入れを出し、火を打ち附ける。作兵衛も煙草を出す）

作兵衛　ははあ、煙草がない。一服くりやれ。

七兵衛　おれも煙草はないわい。

作兵衛　ええ、吝い奴ではあるわいの。

禿　(駕の中から)　煙草がほしいかや。そんなら、これを呑みやいのう。(と、煙草入を出す)

作兵衛　(戴いて)　さても結構な煙草入の。むむ服部ぢや。お前に小さいが、煙草が上がるか。むむしならしいお子ぢや。氣の盡きた時の一服は、喜見城の樂しみぢやてなあ。

七兵衛　(禿を見て)　ても、仔細らしい奴ではあるわいの。

禿　いや、わしは呑まぬけれど、太夫樣へ喫ひつけて上げるに依つて、それで煙草入を持つてゐるわいの。

作兵衛　ははあ、伊勢衆ぢやな。太夫樣へ上げると言はつしやる。

七兵衛　(作兵衛に)　やい、そこな奴。われと棒組なすれば、おれまでが恥をかく。西ぢやわいやい。

作兵衛　西とは。田の畔か。

七兵衛　ええ、たはけめ。島原のことぢやわい。

作兵衛　ははあ、島原の禿か。

禿　おう、わしや禿ぢやわいのう。したが、島原ではない。指いて見やいのう。

七兵衛　むむ、島原でない。そんなら何處であらうぞ。伏見か、大津か。

禿　いや、いや、そこらぢやない。淀、橋本を越えて來た。さあ何處ぢや。指いて見やいのう。

作兵衛　むむ、そんなら長崎丸山か。

禿　いや、いや。

七兵衛　奈良の木辻か。でもあるまいし。

禿　いいや。

作兵衛　そんなら、大阪の新町。

禿　でもないわいのう。

七兵衞　ええ、聞こえた堺の。

禿　おう、乳守ぢやわいのう。

作兵衞　よう一人で參らつしやるの。

禿　いや、太夫樣の心願の事があつて、淺間の開帳へ名代にわしが參るのぢや。早う遣つてたもいのう。

作兵衞　大方それも思ふ男と添ひたい願であらうが、廓の太夫といふ者は心中なものぢやのう。

七兵衞　ああ、その以前は、おれもそのやうに言はれたものぢやが、今では太夫はどうしたぞ。ああ可愛や、可愛や。

作兵衞　何を抜かすやら。

禿　これ、これ、駕昇。早う開帳へ參りたいわいのう。

七兵衞　駕昇と澤山さうに輕しめな、輕しめな。さらば、淺間へ參らうか。

作兵衞　さらば、鑓を擔けうか。

（二人、立上がり、後向同士に駕を舁き上げる。）

七兵衞　こりやどうぢや。行かれぬわい。行かれぬわい。

作兵衞　おつと合點ぢや。

（と、今度は又、向ひ合せに擔ぐ。）

七、作　これはしたり、肩が違うた。

（と、始めて本當に擔ぎ、下手へ向ふ。）

作兵衞　おつと肩しよ。

七兵衞　肩しよ、肩しよ。

（と、交々肩を變へながら、音樂に合せ、足を高く上げて、一所を歩む。）

禿　（駕の内にて、投節を唄ふ。）

籠の鳥かや恨めしや恨めしや。

七兵衞　何と聞いたか。面白いな、あれが曲輪の投節といふものぢや。聞いて置け、聞いて置け。ああ、その以前は太夫に三味線引かせて、その間へもたれて、投節を聞いた事もあつたわい。この投節はもとおれが唄ひ出したものぢや。あの、今のもああではないわい。先づ投節といふものはかうぢやて。

ニエ。

籠の鳥かやアア。さて恨めしや。ナハハハ

（と、馬士節のやうに歌ふ。）

作兵衞　ほてつはらめ。そりや何ぢや。馬士節ぢやぞよ。投節の根元根本まじりなしと言ふはおれが事ぢやて。親代々の投節屋ぢや。もとこちの祖父様は投節ぶし右衛門と言ふ。その名をかたどつて投節と名つけたものぢやて。唄うて聞かさうか。

籠の鳥かや恨めしや。（と稱名を唱へるやうに歌ふ。）

七兵衞　どん、ぐわらり、チイン。

（と、淺間の作藏普賢院、同宿二人を連れて、上手から出る。）

普賢院　こりや、こりや、駕昇ども。ちと、その方達に談合がある。（二人、駕をおろす）先づその方達が名は何と言ふぞ。

作兵衞　はい、はい。わたくしは作兵衞と申しまして、ずんと利口者でござりやす。

七兵衞　へ、へ、へ、へ。わたくしは七兵衞と申しまして、發明な正直者でござります。

普賢院　然らば、その方達の内、一人召し抱へて

遣はさう。

七、作　あの、わたくしどもをお抱へ下さるとは。

普賢院　別儀でない。この度東山に於いて、淺間の御本尊を開帳いたす。即ち、愚僧は普賢院と言うて、信州淺間の住僧。それにつき、人雇ひをいたす。五十日が間、給銀は五枚、小袖が一つと大小を渡す。それも懸け流しぢや。とつくりと談合の上、抱へて遣らう。

七兵衛　は、は、有難うございます。侍ならば、わたくしが參りませう。

作兵衛　いや、侍ならわたくしでございます。何と侍男でございませうがな。

七兵衛　いや、わたくしでございます。

作兵衛　はて、おれぢやわい。

七兵衛　いや、おれぢやと言ふに。

普賢院　やい、やい、せり合ふな、せり合ふな。こりやかうぢや。何でも一藝に達した者でなければならぬ。それ合點なら抱へるわいやい。

作兵衛　わたくし先づ能書でございます。内には手習子を取ります。けふは休みぢやに依つて、稼に出たのでございます。開帳の戒名でも書きます。又お使を勤める事が上手でございます。ひよつと信濃へ飛脚が立てたいなどといふ事もございませう。

普賢院　そりや度々ある事ぢや。

作兵衛　さあ、その飛脚の遣りたい時に、たつた一日で往て戻る分別がございますて。

同宿　これはけうとい一藝でございますなあ。

普賢院　むむ、そりや又どうしたものぢや。

作兵衛　先づ信濃の淺間へ日歸りに致さうと存じ

まりかけ、淺間まで續く心太の突き出しを拵へますぢや。そこで、その突き出しの孔の端へ、信濃へやる泳をもたせかけて、東山からすぽんと突き出しますぢや。

普賢院　何をやくたいもない事を。

（七兵衞、走り寄り、作兵衞を引き退ける。）

七兵衞　こつちへすつ込んでをれ。われがやうな思案で何の担へられるものぢや。あ、お住寺様、わたくしはさやうな淺はかな事ぢやござりませぬ。いやもう自慢ではござりませぬが、この上の思案は恐らくあるまいかと存じます。

普賢院　そりや又どのやうな思案ぢや。

七兵衞　今度のお開帳につき、信濃からも澤山坊様がおいでなされたでござりませう。定めて月代をお剃りなされてあらう。その時に、五十人でも、百人でも、竝べ立てて置いて、づく達を一時に産毛もないやうに、又毛の生えぬやうにする鍛錬をいたしましてござりますがな。

普賢院　如何さま。これは手廻しな好い思案。それは又どうして、どうして。

七兵衞　先づ坊様方の頭の毛を美しう一本づつ拔きますぢや。そこで、その坊様達を、五人でも、百人でも、竝べ立てて置いて、頭から煮え湯をかけます。

同宿　これは溜らぬ。（一、頭を抑へる。）

七兵衞　萬一それでも生えまするその時は、けちけちを一匹宛あたまへ置いて通るぢや。

普賢院　默れ、推參者。愚僧をたはけにするか。

七兵衞　そんなら、その思案に惡うござりまするか。

作兵衛　（又出て來て）やはり、わたくしの方が好うござりませう。

普賢院　いや、いや、もう一藝よしにしよう。人(ひと)群集(ぐんしゅ)のことなれば、氣が短うてはならぬ。氣の長い、腹の立てぬものを抱へると致さうわいの。

七兵衛　氣の長いものなら、わたくしでござります。母の胎内をぎやつと出ませぬ先から、ついぞ腹を立てた事がござりませぬ。氣の長いものなら、わたくしに仰せつけられ下されませう。

普賢院　やい、ここな嘘つきめ。人間と生れて、小さい時から腹立てぬ者があらうか。汝が言ふは、皆嘘ぢや。ここな嘘つきの、大かたりめが。

七兵衛　やい、芋掘坊主め。おのれが抱へねば抱へぬで濟むことを、大かたりの、嘘つきのとは、ここな俐り廻しめが、鼻柱をこれで見知らすぞよ。（と、握拳を振り上げる）

普賢院　それ、それ、その腹の立てやうでは、めつたに抱へられぬわい。

七兵衛　ても、ひどいところを爲損うた。（と握拳をもじもじして引込める）

作兵衛　ああ、それでは行かぬ、行かぬ。眞實氣の長いと言ふはわしが事ぢや。御出家樣。どのやうになされましても、腹立てるといふ事はござりませぬ。たとへ足で踏み蹂られても、少しも腹は立ちませぬ。いつそ、お前の足で踏み殺して下さりませ。（と、身をひれ伏す）

普賢院　ああ、おのれも合點の行かぬ奴ぢや。そりや、今踏むぞよ。

作兵衛　さあ、お踏みなされませ。

普賢院　なんと、これでも腹は立たぬか、腹は立

たわけ。

作兵衞　ははあ、忝けない。如來菩薩の來迎かや。有難や。有難や。

普賢院　ふむ、これは眞に齒を立てぬ。あつぱれ、この上は、こりやその方を抱へて遣らうわいやい。

作兵衞　ええ、有難うござります。

普賢院　先づ當座の手附に小判一兩。殘りは其方が宿へ參つて遣さう。さやう心得い。(と、一兩の小判を渡す)

作兵衞　ははあ、忝けない、忝けない。七兵衞、これ見ろ。のの樣の草鞋ちや。久しぶりで戴いた。おれがところに御運開。えへん、えへん。(と、ひけらかす)

七兵衞　はう、それが何じや。日傭れ金の一兩や二兩は入らぬ。忌々しい捨坊主めが、おれを抱へならぬその代りに、ここは通さぬ。(と、息杖を横たへて、往來の邪魔をする)

作兵衞　やい、七兵衞、こちの旦那に粗相するな。

普賢院　こりや、こりや、作兵衞。奉公始めに、拂へ、拂へ。

作兵衞　畏りました。

(と、普賢に合せて、息杖にてあしらふ終に、七兵衞を抑へつける。)

作兵衞　さあ、お旦那、お通りなされませ。

普賢院　おう、あつぱれ、あつぱれ、そちも一所に。

作兵衞　さあ、お出でなされませ。(七兵衞に)こりや、われはいつまでも獨昇せいよ。おりや侍おや。は、は、は、侍ぢや。

（普賢院、同宿、作兵衛、皆上手へ入る。）

七兵衛　（その方を向いて）　ほう、好い事ぢや。結構な事ぢや。そのやうな好い事の後は、碌な事はないものぢやわい。（と、駕に目をつけ）　これはこれは肝心の乗手殿が寢てをらるる。これ、禿どの、禿どの。

禿　（目を覺まして）　何ぢやいのう。

七兵衛　こな樣に頼みがあるわいの。

禿　何ぢやいのう。

七兵衛　ここから歩いて往て下んせぬか。

禿　歩きたけれど、足が痛いわいの。

七兵衛　これ、禿どの。足が痛くば開帳まで、おれが負うて遣らうが、それで勘忍して下されぬか。

禿　そりや、どうともぢやわいのう。

七兵衛　ほんに素直な子ではあるわいの。さあ、さあ。（と、文字野を背負ふ）　なんと、又かう負うたところは、駕よりは氣が晴れてよからうがの。

禿　大ぶん好いわいのう。

七兵衛　どりや、發足いたさうか。（と、賑かなる囃子物にて、假花道へ掛る）

七兵衛、假花道より向う正面の歩みを經て、本花道へ掛かる間に、淺葱幕切つておとす。舞臺、簡素なる塗骨の障子屋臺。枝折戸。柴垣。菊の盛り。琴歌になる。

七兵衛　これ、こちは幾つぢやぞ。

禿　十一ぢやわいのう。

七兵衛　はて、年よりませた子ぢや。追つつけ好い太夫になるであらう。その時は、わしが買ひに行くぞよ。

禿　なんの、わが身のやうなものに買はれうぞいの。

七兵衛　なんの、わしぢやとて、生れてから駕舁ぢやない。その以前は傾城買もした者ぢやわいの。

（その時、奥より、琴唄が聞えて来る。）

歌　　憎や憎しと思へばいとし
　　　我にひとしき人しなければ

禿　（聞き入りて）さても面白い歌ぢや。どうぞ覚えて太夫様への土産にしたい。今の節が、まア一度聞きたいものぢやのう。

七兵衛　智者のほとりの童部（わらんべ）は習はぬ経を読むと言ふが、今の一節（ひとふし）を聞いて、太夫様の土産にしたいとは、ああ流石ぢやなあ。これ、これ、あの歌が聞きたくば、最前のやうに投節を唄うたが好い。するとこれは面白いと言うて、又あちで唄ふところを、こちへ取るぢや。なんと好からうがの。（と、禿を下へおろす）

禿　これは好い思案ぢやわいのう。そんなら、唄はうわいのう。

七兵衛　さあ、唄うた、唄うた。

禿　（唄ふ）けふと暮らせし飛鳥（あすか）の川の、のうさて幾夜なんなん馴染も替れば、かはる世の朝別れ。

（と、この時、奥より、局松ヶ枝に腰元美代野、しがらみ、二人ついて出る。）

美代野　（枝折戸を開いて）今の歌を唄やつたは、そちか。

七兵衞　（前へ出て）さやうでござります。

美代野　お局樣、お姫樣のお尋ねなされました歌は、あの者でござります。

局　むむ。やれ、やれ今の歌を唄やつた人か。ても、好い聲ぢやの。この屋敷のお姫樣は、きつい小唄がお好きぢやによつて、今のをお聞きなされて、もつと聞きたいと仰しやる。さあ、内へはひつて、唄やいの。

七兵衞　これは、これは。御意にさへ叶ひませうなれば、歌はなんぼでも唄うてお聞かせ申しませう。

しがらみ　この通り申し上げたら、さぞお姫樣にもお悅びであらう。さあ、さあ、こちへはひりやいのう。

（七兵衞、文字野をそつと後へ隱して入る。）

局　これ、そこな男。お姫樣に歌をお聞かせ申す事は、冥加に叶うたことぢやと有難う思や。

七兵衞　はい、はい、有難うござります。したが、わたくしは日本開山と申す歌唄ひでござります。

美代野　して、そちの名は何と言ふぞ。

七兵衞　わたくしは親より三代の歌唄ひ、鶯啼右衞門と申します。

（と、この時、補襠姿の音羽姬、腰元清瀧、八木澤の二人を連れて出る。）

清瀧　もうし、お局樣。最前の歌は、誰が唄ひよしたえ。

局　その歌は、これなる男が唄ひましてござります。

姬　そんなら、最前の歌は、そちであつたか。はて、可愛らしい聲ぢやのう。

美代野　さあ、お嬢様もお越し遊ばした。歌を唄やいのう。

七兵衛　はい、はい、畏りました。したが、滅多には唄はれませぬ。わしが歌は上中下三段に唄ひ分けます秘密の歌でござりますれば、唯はなりませぬが、御合點かな。

局　はて、そりや合點ぢやわいの。

七兵衛　さらば先づ初音を一寸お聞かせ申さうか。（と、色々に身構へなする）

局　ても面白さうな事ぢや。金が欲しくば何ぼうでも遣らう。早う唄やいの。

七兵衛　畏りました。表へ參りまして、聲の下繕（したつくろ）ひを致して參ります。

（と、文字野を連れて、外へ出る。）

七兵衛　こりや、こりや。禿。今のところで、わしが後から歌を一つ唄うてくれ、頼んだぞ。

禿　わしや厭ぢやわいのう。

七兵衛　ええ、意地の悪い。こりや、わしが金を儲ける事ぢや。一生の頼みぢや。どうぢや。どうぢや。

禿　そちの爲になる事なら、どうなりとしようわいの。

七兵衛　忝けない。忝けない。

（腰元達、内より聲をかける。）

皆々　今の男、歌はどうぢや。歌はどうぢや。

七兵衛　はい、はい、只今それへ參ります。必ずこちら向くまいぞ。

皆々　合點ぢや、合點ぢや。

七兵衛　それへ參ります。（と、内へ入る）こちら向くまいぞ、向くまいぞ。チントンシヤン。そ

れ。

（文字野、七兵衛の後にて、投節を唄ふ。）

禿　染めて口惜しき、賤紫や、本の白地がましぢやもの、白地がな、もとの本の白地が増しぢやもの。

（この間、七兵衛、首を振り、口を動かし、唄ふ眞似をする。腰元達、七兵衛の後の文字野を見つける。局、姫に囁く。歌、終る。）

皆々　よう、よう。面白い事であつたわいの。

（この内、局そつと七兵衛の後へ廻り、文字野を抱いて來て、姫の後へ置く。七兵衛、氣づかす。）

七兵衛　なんと、けうといものでござりませうがな。

姫　さても面白い事ぢや。も一つ何ぞ唄うて聞かしやいのう。

七兵衛　いやもうお望みならば、何ほでも唄うてお聞かせ申しませう。その代りに、お局様、な、合點か。

局　合點ぢや、合點ぢや。

七兵衛　さあ、唄ひませう。短うても大事ない。どれ、唄ひませう。なあ。も一つ唄ひませうなあ。

（と、後へかけて言ふ。）

皆々　はて、唄やいのう。

七兵衛　はい、はい。テントンシヤン。（と、息杖を三味線にして唄ふ眞似をする。文字野の聲がしないので、咳拂ひをして）テントンシヤン。（と、度々同じ事をするが、一向に聲がしないので、思はず後を見る。と、文字野がゐないので狼狽する）

皆々　これ、我が身は何を尋ねるぞや。

七兵衛　いやさ、ここらに聲がござりましたが、そこらへは參じませぬかな。

姫　そちの尋ねる者は、これかや。

(と、後から文字野を出して見せる。)

七兵衛　はい、それでござります。こちへ來い、こちへ來い。(と、文字野を取返し、又息杖を三味線にして)テントンシャン。

禿　もう厭ぢやわいのう。

七兵衛　南無三寶。たくみの程が現れた。

局　やい、ここな嘘つきめ。おのれは唄ひもせずに、あの子に唄はせて、ようわたしらを欺したなあ。おのれがやうな奴は入らぬ。あちへ行きをれ。

七兵衛　(しよげて)はい。

姫　持の者。何とあの子は好い子ぢやのう。近う呼びや。

局　これ、これ、あの子。お姫樣のお呼びなさるる。近うおじや。

禿　わしや。あんなところへ行くは厭ぢやわいのう。

七兵衛　はて、ちやつと行け。また親の言ふ事を聞かぬか。

禿　何をわが身、親ぢやないものを。

七兵衛　又こいつめが。(腰元達に)いや、あのやうに申す筈がござります。わしがこのやうに見苦しうござりますによつて、どなたがお尋ねなさるとも、親ぢやと言ふなと申しつけ置きました。それ故、あのやうに申します。(文字野に)こりや、こりや、七分はわれにはずむぞ。往てたも、往てたも。

禿　そなたの爲になる事なら、往て遣らうわいの。
七兵衛　忝けない、忝けない。それで好い、好い。吸物が出ようと儘よ。賤しう食ふまいぞ。菓子などは辭儀するも悪い。紙へ包んで、こちへほいと。合點か。
禿　そんな事は呑み込んでゐるわいの。
皆々　早うその子を連れておぢやいの。
七兵衛　はい、はい、只今それへ參ります。
（と、文字野を前へ押す。局、文字野の手をとる。）
局　ほんに、可愛らしい子ぢやござりませぬか。
姫　生れつきの綺麗な、尋常な、可愛らしい子ぢや。局、慰みに菓子を遣りやいのう。
局　畏りました。（と、菓子盆を取り出し、文字野の前へ置く）
局　お姫様から遣はされます。有難う思や。
七兵衛　（遠くから）紙に包んで、こちへほいとはふつたり、はふつたり。
禿　おう、せはしな。（と、菓子を摑んで抛る）
七兵衛　おつと、受けとつた。
姫　自らが氣に入つた。わしが手廻りで奉公しやらぬか。
七兵衛　いや、御奉公いたさせませう。
姫　そちはまあ何者ぢや。
七兵衛　はい、即ちこれにをります娘が親父めでござります。年は十年切りまして、銀三十匁下さりませ。四季のお仕着せも銀にして、今とつて歸りませう。
禿　（囁いて）でも、そなたは怖い人ぢやのう。親でもなうて、親ぢやと言うて、わしを賣らう

とは、おう怖。わしや去ぬるぞや。（と、表へ出ようとする）

七兵衛　（禿の袖を捉へて）　こりや禿、奉公すれば、われも身の爲に好い事がある。奉公せい、よう娘、

禿　駕ちや、駕舁の分で親とはなぜ言やる。駕舁の親は持たぬわいのう。

七兵衛　いや、ここな童（わらは）めが、おのれが口から駕舁を親に持たぬと。禿がどれ程のものぢや。あの禿めが。

禿　あの駕舁めが。

七兵衛　いや、おのれは舐め過ぎた物の言ひやうをしをるがな。何ぼうそのやうに言うても、禿よりは駕舁が上でござる。

禿　駕舁より禿が好いわいのう。

七兵衛　そりや、どうして。

禿　禿は駕に乗ると、駕舁の肩に上るによつて、それで上ぢやわいの。

七兵衛　人を駕にのせて、錢をとるによつて、駕舁が上ぢや。

禿　禿が上ぢや。

七兵衛　駕舁が上ぢや。

禿　禿が上ぢや。

七兵衛　駕舁が上ぢや。

禿　べべべべえ。

七兵衛　べべべべえ。

二人　べべべべえ。

七兵衛　（いきなり文字野の手をとる）　御前（ごぜん）様めぢや。失（う）せい。（と、姫の前へ連れて出る）　はい、申し上げます。こいつは禿でござります。わたく

しは駕舁でござります。わたくしは駕舁が上ぢやと申します。こいつは禿が上ぢやと申します。きつと御吟味を下されませうなれば、有難うござります。

姫　（局に）あの者は親ぢやと思うたれば、駕舁ぢやさうな。さもしい、あちへ去なしやいのう。

局　畏りました。（七兵衛）やいそこな駕舁。其方に用はない。あたむさい裝をして。あちへ失せぬか。あちへ行け、あちへ行け。

七兵衛　南無三、また爲損うた。（と片隅へ踞る）

美代野　さては、この子は曲輪の禿とやらか。名は何と言ふぞ。

禿　あい。文字野と申しやんす。

しがらみ　むむ、道理で利口なところがあると思うた。さうして所はどこぢや。

禿　乳守でござんす。

しがらみ　乳守とは。

七兵衛　（首を延ばして）堺でござります。

局　又さし出をるか。すつこんでをらう。

七兵衛　へえい。（と、又片隅にゐる）

美代野　（文字野に）そちは何といふ者に使はるるぞ。

禿　太夫樣に使はれやんす。

しがらみ　名は何と言ふぞ。

七兵衛　傾城のこと。

局　（七兵衛に）またばかな言ふ。

禿　太夫樣の名は言ふなと言はしやんしたによつて、言ふことはならぬわいなう。

姫　（腰元達に）これ、隱すことなら、聞かいでも好いわいのう。

禿　お前方もちと曲輪へ見物にござんせいなあ。

孃　いや、自らは傾城は見たうないが、大盡とやら、買手とやらの風俗が見たいわいのう。

七兵衛　（息杖を腰にさし、肩を張つて、大盡の身振をする）買手、買手。ああ、太夫は何としたぞ。可愛や、可愛や。

皆々　（文字野に）買手はあのやうな者かや。

禿　歩きやうは似てゐやんすが、あのやうな汚いものを著てはゐませぬわいのう。

孃　あれでも以前は傾城買うたものであらうわいのう。

局　さやうでござりませう。餘り買ひ過ごしての難儀でがなござりませう。

七兵衛　（泣嘯いて）ああ、さやう、さやう。木幡(こはた)の里に馬は一疋あつたれども、昔を思へば、てんと跣足(はだし)で通うた。雨の降るにも、風の吹くにも、厭はずに通うたが、ああ、昔になつたなあ。（と泣き聲を出す）

皆々　あれ、買手が泣くわいの。

七兵衛　買手ぢやと言うて泣かぬものか、君故にこがれこがれて鳴く蟲よりも、鳴かぬ買手の身ぞ焦すらんといふ歌もあるわいの。

孃　（七兵衛に）これ、これ。これを著て、買手の風俗をして見やいの。（と、自分の襦袢を脱ぐ）

七兵衛　ははあ、買手が振袖著るは、開闢(かいびやく)以來ないことぢや。買手の著物といふは、薄綿にして、袖口なども芥子(けし)括りは厭らしい。裏に、大間に括り、伽羅の薫がなければ傾城買はならぬわいの。

禿　（風呂敷包を解く）買手の著る物をわしが持つ

てゐる。貸して遣らう。(と、衣裳を取出す) これを著て、早うしやいのう。

七兵衛　買手は著る物を手にとつて著るものぢやない。著せよ、著せよ。

局　はて、横柄(わうへい)なものぢやのう。

七兵衛　著物、著物。

(と、腰元達、側へ寄つて、著物を著せ、帯を結んでやる。)

七兵衛　脇差、脇差。

局　おうおう。

七兵衛　おうおうとはどうぢやいやい。あいあいと言へやい。

局　あいあい。(と、脇差を渡す)

七兵衛　さうぢや、さうぢや。扇、扇。

局　あい、あい。(と、扇を渡す)

七兵衛　金の入れてある巾著(きんちやく)、巾著。

腰元達　あい、あい。

七兵衛　言はずとも、鼻紙。

腰元達　あいあい。

七兵衛　ところで、この頭巾をとつたところが大盡ぢやて。(と、頭巾をとる)

腰元達　さても、好い男ぢや。

(七兵衛、手を叩く。)

禿　あいいい。

七兵衛　煙草盆、煙草盆。

禿　あいいい。

七兵衛　これは禿が一人で少い。(局に) こりや、お前も禿になれ。

局　わしや厭ぢや。

七兵衛　こいつが。大盡の言ふ事を厭とは。

姫　（笑つて、局に）これ、そちも禿になりやいのう。

局　畏りましてござります。

七兵衛　（局に）そちも禿になるか。

局　おう、なる。

七兵衛　これ、あれが言ふやうに返事せいよ。

（と、手を叩く）

局　どう言ふのぢやぞいの。

（七兵衛、又手を叩く。）

禿　あいいい。

七兵衛　あのやうに言ふのぢやわいの。言うて見や。（と、手を叩く）

局　あ、い、い、い、い。（と、嚙み切るやうに言ふ）

七兵衛　さうぢやない。細う長う言へやい。

局　あいいい。（と言ひて、咽喉をさする）

七兵衛　ああ、われは役に立たぬ。もう置け、置け。とてもの事に金が七十三匁ほしい。

禿　また傾城を買やるかや。

七兵衛　いや、米を買ふ。

皆々　何を言やるぞいのう。

七兵衛　（自分の著てゐる衣裳を見て）ほう、この著物は大分綿の加減も好い。幸なものがあつたなあ。（と言ひながら、思はず紋に目をつけて、驚く）や、こりや我が紋。（いきなり文字野の手をとつて）禿來い。（と、表へ連れて出る）

七兵衛　これ、わが附いてゐる太夫の名は何と言ふぞ。

禿　太夫樣の名は言ふなと言はんしたによつて、言ふことはならぬわいの。

七兵衛　そんなら、太夫が名を指いて見せう。奧

州とは言はぬかや。

禿　よう知つてゐやるのう。奥州様に附いてゐる禿ぢやわいのう。

七兵衛　嘘を言ふ。奥州が禿は式部と言ふわい。

禿　その式部様は去年の御影供から勤めに出やしやんして、今では八重桐様といふ太夫様ぢやわいの。それで、わしが奥州様に附いてゐやんす。

七兵衛　さてはさうか。この小袖は太夫とおれが別れる時、形見にやつた小袖ぢやわいやい。

禿　（つくづくと七兵衛を見て）さては太夫様の戀しいと言はしやんす巴之丞様かえ。

七兵衛　おいやい。

禿　お前に會ひたいとの願ひに、この小袖羽織を、淺間の開帳へ納めに行くのぢやわいなあ。

巴之丞　そんなら、太夫はまだおれを思うてゐるか。可愛や、可愛や。

（この内、姫、局、腰元達、立ち聞きしてゐる。）

姫　や、そんなら、お前が巴之丞様か。お懐しうござりまするわいなあ。（と、取り縋る）

巴之丞　巴之丞と聞いて懐しいとおつしやるこなたは。

姫　お前と言ひなづけの音羽の前でござりますわいなあ。

巴之丞　さては、ここは諏訪殿の屋敷か。こりやならぬ。（と、振切つて逃げようとする）

（一同、追ひかけて、引留める。）

皆々　もうし、巴之丞様、まあお待ちなされませいなあ。

姫　今お目にかかつたばかりで、直ぐに去なうとは、お胴慾でござります。女の心は御存じござ

んすまいが、思ひ忘るる間はござりませぬ。もうし殿様、そりや聞えませぬ。聞えませぬわいなあ。(と、取り附いて泣く)

巴之丞　おう道理、道理。そなたと言ひなづけある上に、傾城に迷うた故、親の勘當を受け、この姿となつた。今更そちに何と對面がならう。人々の手前も面目ござらぬわいのう。

局　そりや苦しうござりませぬ。あなたのお行方の知れるやうにと、お姫様のお願ひにてのここのお住居、今不思議にお逢ひなされましたも、淺間の御利生でござります。

美代野　たとへ傾城狂ひを遊ばしても、何の大事ござりませう。いつまでも、このお屋敷にお留め申して、なあ皆様。

皆々　それ、それ、お姫様と御祝言を。

巴之丞　かくまで零落した巴之丞を、然程に思ひ、夫婦にならるる姫が心底か。

姫　勿體ない。二世かけて夫婦ぢやもの。

巴之丞　ええ。忝けない志。

(と、二人手を取合ふ。途端に、文字野、苦しみ悶える。)

禿　のう、悲しやのう。

皆々　(驚いて)何としやつた、何としやつた。

(と、介抱する)

禿　この頸にかけた守をはづして下さんせ。熱うてどうもならぬわいなあ。

巴之丞　なに、守とは。

(と、禿の頸から、それを外す。文字野の苦悩やむ。)

巴之丞　はて不思議。(と、守を開き見る)　こりや

祈請ぢや。さては奥州の執心ぢやな。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。（と、傍の火鉢の中へ投げ入れる）

（どろどろにて、一同、氣を失ひ倒れる。作兵衞、家老の拵へにて駈けつけ、この態を見て驚き、一人一人活を入れる。）

巴之丞　（心づきて）や、そちは作兵衞ぢやな。

作兵衞　（ひれ伏して）段々との御不禮。お詫びはゆるゆる。誠は當諏訪の家老高島和田五郎成家でござりまする。若しやそれかと、駕昇に身をやつしての心遣ひ。お役に立つて、何よりの喜び。殿樣お姬樣、お目出たうござります。

姬　それにしても、哀れなは奥州が執心。皆の者、今宵は夜と共に佛間で回向を。

巴之丞　おう殊勝なる志。それがしとても、この世の迷ひを晴らさん爲、共々回向をなすべきぞ。

局　わたくしどもも共々に、お經を讀誦いたしませう。

姬　さあ、皆の者。

皆々　いざ、巴之丞樣。

巴之丞　文字野も來い。（と、禿の手を引く。文字野呆れてゐる）

婚禮の音樂（水あびせのシヤギリなど）に寺院樂（鐃、鈴、木魚などの混合）をかぶせて。――幕

國性爺合戰　五幕

――近松門左衛門の淨瑠璃に依る
築地小劇場の爲の演出臺本――

主要人物

思宗烈皇帝
右軍將李蹈天
大司馬將軍吳三桂
韃靼の貝勒王
侍女阿監
栴檀皇女
柳歡君（吳三桂の妻）
李海芳（蹈天の弟）
安大人
剛韃
和藤内三官（後に延平王國性爺）
小睦（和藤内の妻）
老一官夫婦
錦祥女（甘輝の妻）
五常軍甘輝
太子
二老翁
侍從、衞兵、女御、侍女、韃靼兵、明兵、舞踊者、その他

場所

明國及び日本

時代

明の末期

第一幕

第一場

南京。

思宗烈皇帝の宮殿。饗宴の間。

中央奥、廣き階段の頂上に玉座、その前に大なる食卓。

(肥えふとりたる皇帝、醉ひしれて玉座に居崩れ、左右に一人宛、寵愛の夫人を抱く。右軍將李踏天、皇帝の足下に居竦る。酒氣を帶ぶ。)

(同じ階上に、この一群とは全く離れて、大司馬將軍吳三桂唯一人儼然と端坐す。全く酒氣を帶びず。)

階段に群臣寵嬪居流る。いづれも醉ひしれたり。酒器、階段に狼藉す。)

(大なる鉢植の桃と櫻、いづれも滿開の花をつけて、そこここに飾り置かる。)

(幕あく。)

(平舞臺の前部にて、二十人ばかりの女御、領巾を振りて群舞す。Bacchanale 風の音樂。明笛やうの獨奏吹奏樂器著しく聞ゆ。)

(群舞終る。一同拍手。歡聲。)

(玉座の下手より侍女阿監、登場。皇帝の前に恭しく跪く。)

帝　おう。阿監か。まだ生れぬか。

阿監　もう、けふかあすでございます。

帝　それはありがたい。祈禱の方はどうだ。まだ男とも女とも分からぬか。

阿監　王子樣御誕生ときまりました。

帝　驗（しるし）があつたか。

阿監　ございました。

帝　(群臣に)みんな、喜んでくれ。愈王子誕生と

きまつたぞ。

一同　（口々に）おめでたうございます。おめでたうございます。

帝　産婦はどうだ。機嫌はいいか。

阿監　殊の外お元氣でいらつしやいます。

帝　柳歎君もいつてゐるな。

阿監　お側去らずでございます。

帝　（呉三桂に）おい、おい、何といふむつかしい顔をしてるのだ。お前の女房の話をしてるのだ。

呉　恐れ入ります。

帝　恐れ入る奴があるか。お前の子とおれの子が乳兄弟になるのだ。もうこれからは親類つきあひだぞ。

李踏天　（口を出す）陛下、そんな輕々しい口をお利きになつてはいけません。

帝　（笑ふ）呉三桂と親類になつたら、おれもさぞ堅苦しい人間になるであらうな。（笑ふ）いや、なんにしてもめでたい、めでたい。阿監は早く産屋へ歸つて、華淸の看護を忘らぬやうに。

（阿監、一拜して去る）それ、あとの踊を直ぐに始めろ。

侍從の一人　次ぎは唐子踊でございます。

帝　面白い。王子誕生の幸先に唐子踊とはめでたいめでたい。

（侍從、手をあげる。grotesque な舞踊音樂ーグリイクの一寸法師の踊など參照。）

（小さき鈴の音の諧調、著しく聞ゆ。）

（唐子姿の男の子、二三十人、踊りながら、登場。）

（皇帝、群臣、更に酒杯を重ねる。）

（活潑なる唐子の踊、高調に達したる時、突然、

支那風の Gong 鳴る。）

（音樂やむ。一同、はたと靜まり返る。一瞬間、不動不安の空氣、殿中を領む。）

（衞兵一人、走り出づ。）

衞兵　（階下にひれ伏す）　奏聞。

帝　（聲を震はせて）　なんだ。

衞兵　（慄へながら）　韃靼王からお使でございます。

（一同、身を竦めて、顏を見合はす。）

帝　（李踏天に）　どうしよう。

李　（狡猾らしく笑つて）　お通しなさいまし。

帝　また、何か難題を持ちかけて來たに違ひない。

（吳三桂に）　吳三桂、どうしよう。

吳　（決然と）　お通しなさいまし。恐れることはありません。

帝　大丈夫かな。

吳　大丈夫です。

李　通さないと、却つて不禮になります。

帝　（衞兵に）　通せ。

（衞兵、走り去る。）

（踊り子達も走り去る。）

（一同、威儀をつくろふ。）

（韃靼風の March。韃靼の使者、一人一人、虎の皮、豹の皮、火浣布、馬肝石その他を捧げ持ちて、登場。階下にこれを陳列す。最後に貝勒王、拂子のやうなる鞭を携へ、長靴にて登場。階下に跪く。音樂やむ。）

李　これは、これは、貝勒王、お使御苦勞に存じます。

吳　して、お使の趣は。

貝　早速ながら申し上げます。韃靼國と大明國と

は、昔から國を爭ひ、兵を動かし、多年相嫉視して參りましたが、これは隣國のよしみにも違ひ、民百姓の煩ひでもあります。そこで、この際是非とも和睦がいたしたいのでありますが、それには一つの條件があるのであります。

李　して、その條件といふのは。

貝　韃靼は大國で、何一つ缺けたものはありませんが、遺憾ながら國に美人がをりません。承れば大明の皇帝は、三夫人、九嬪、世婦二十七人、女御八十一人を擁してをられるさうでありますか、中でも華清夫人は隠れのない美人ださうで、韃靼大王、殊の外の御執心でありますから、それを當方へ戴いて、大王の后と仰ぎ、長く大明韃靼和睦の印にいたしたいと存じて、かやうに貢物を調へ、不肖ながら鎭護大將貝勒王、お迎ひの爲參朝いたしたのであります。

（皇帝、無言、苦悶の色を現す。）

（群臣、動搖、狼狽の色、面に現る。）

（暫時、沈默。）

貝　御返事はどうですな。

（尚沈默續く。）

貝　時間が移ります。早く御返事をお聞かせ下さい。

李　（急に皇帝の前にひれ伏す）陛下、どうか御成敗を願ひます。

帝　（驚いて）何を成敗するのだ。

李　今までは國の恥辱と存じて、祕し隠しに隠して參りましたが實は辛巳の大飢饉の時、わたくし祕密に韃靼を頼み、米穀數百萬石の合力を請うて、國民を塗炭の苦しみから救つたのでござ

います。その際、この報酬としては、何事に限らず、韃靼の希望を必ず一度は叶へようと堅い契約をしたのでございます。

帝　ふむ。そんな契約をしたことがあるのか。

李　御成敗を願ひたいと申すのは、そのことでございます。國家としての契約を、わたくし一箇でいたしました罪は死に當ります。併し、あの場合、若し韃靼の援助がなかつたら、吾々は今日どうしてをりませう。

帝　この泰平はとても見られないな。

李　恩を知らぬは畜生でございます。お名殘惜しくはゐられませうが、賴まれた以上早速夫人をお遣はしになるのが至當かと存じます。

帝　でも、現在産褥にある夫人を。

李　そこが忠義の見せどころでございます。

（吳三桂、憤然と進み出つゝ）

吳　忠義とは何事だ。默つてゐれば野方圖なことを言ふ奴だ。これ、よく聞け、李踏天。忝くも大明國は禮樂の國だ。孔孟の教もあれば、五常五倫の道もある。韃靼國には道もなければ法もない。食ひたいだけ食ひ、著たいだけ著て、善人惡人智者愚者の區別もない、畜類同然の北狄、俗に言ふ畜生國だ。如何におぬしが賴み込んだところで、その畜生國が、數百萬の米穀を合力して、この國を救ふ筈がない。國民が苦しむのは、廷臣が上に奢侈を勸めて、自ら榮耀を事とするからだ。その費用を節すれば、五年十年國民を養ふ糧に事を缺く明國ではない。叡慮をも計らず閣議にもかけず、御懐姙の后を輕々しく夷狄の手へ渡さうとは、何といふ不忠不倫だ。

契約はおぬしとの相對で、陛下は御存じないことだ。畜生國の貢物など、見るも目の汚れだ。

（階段を驅け降りて、貢物を蹴散らす）

貝　（激怒して）やい、呉三桂、その分にはさし置かぬぞ。大國小國は違もあれ合力を得て國民を養ひながら、その恩を忘れて契約を破るとは、この明國こそ道も法もない畜生國だ。よし、この上は即刻大軍を率ゐて押寄せ、帝も后も一くるめにして、韃靼王の履持をさせるぞ。みんな來い。

（貝勒王、席を蹴立てて歸らうとする。李踏天、狼狽して、階段を轉び降り、貝勒王の袖に縋る）

李　暫く。暫く暫く。御立腹は御尤至極でございますが、先年拙者が貴國の合力を頼んで、この國を救つたのは、上への忠義と思つたからです。

然るに今その時の契約を破つて、兵亂を招き、君を苦しめ民を惱ますやうなことになつては、忠臣の道が廢ります。（いきなり、小劍にて我と我が左の眼を突き、眼の球をゑぐり出して、これを笏の上に載せ、貝勒王の前へ差し出す）さあ、これを見て下さい。眼は一身の日月、左の目は太陽です、片目がなければ片輪者。一眼を抉つて韃靼に奉ります。御恩は決して忘れぬとの證據に、どうかこれをお持ち歸り下さい。

貝　（笏を押し戴いて）ああ、なんといふ忠義なことだ。お志は分かりました。最前呉三桂の申すやうでは、厭でも兩國干戈を交へずにはなられませんが、天下の爲に身を捨てて事を治めようとせらるる貴公の忠心、貝勒ほとほと感佩いたしました。これで使者の面目も立ちました。話

を迎へとつたも同然であります。大王にもさぞ御滿足でありませう。それでは、これで。

（前と同じ行進曲。韃靼の一行、去る。）

帝　（李踏天に）ありがたい。ありがたい。お前のお蔭で助かつた。だが、よく思ひ切つてやつたものだな。さぞ目が痛むであらう。

李　なんのこれしきのこと。

帝　誰か早く繃帶をしてやれ。

（廷臣の一人、白い絹の布を持つて來て、李踏天の左の眼の上を縛る。）

帝　ここへ來い。ここへ來い。

（李踏天、階段をよろぼひ昇りて、帝の足下に跪る。呉三桂、階上を睨む。）

帝　おう、呉三桂、お前もここへ來い、ここへ來い。

（呉三桂、階段を登り、以前の場所にゐる。）

帝　みんな聞け。李踏天が目を抉ぐつたのには伍子胥の風がある。二人の忠義に高下はない。明國はこのやうな忠臣を得て、千代萬代も變るまい。大明國は萬歳だ。さあ、もつと飲め飲め。踊も續けろ。

（李踏天、稍不平らしく呉三桂を睨む。）

（呉三桂、幕あきと同じやうに嚴然と端坐す。）

（以前と同じ音樂にて、唐子踊の一群、踊りながら登場。）

――幕

第二場

同じく南京皇居。

皇妹梅檀皇女の居室並に庭。

梅檀女、椅子に倚り、卓上に詩稿をひろげゐる。

女官五人、その前に半圓な形つくり、管絃に合せ

て、皇女の作れる詩を朗誦す。

朗誦、終る。

梅　（詩稿に朱を入れながら）　ありがたう、ありがたう。詩といふものは、やはり自分で書いて自分で讀んで見ただけでは分らない。誰にも自惚といふものはあるものだからね。かうやつてお前達に歌つて貰ふと、よく自分の詩の缺點が分かつて好い。ありがたう、ありがたう。

女官の一　さう仰しやられると恐れ入ります。いつもみんなで申してゐることでございますが、わたくしどもの歌ひ方が惡いので、折角のお歌をだいなしにしてしまひはしまいかと、始終それればかり心配してゐるのでございます。

梅　飛んでもない。いつも歌が音樂に負けてゐるので、あたしは殘念でならないのだよ。それにしても、陛下の方の宴會の音樂は、なんといふ騷々しい野卑な音樂なのだらう。あたしはあれを聞くと、一日頭が痛くてしやうがないよ。

女官の二　さう申しては失禮でございますが、あれは李踏天樣のお好みで、東狄の趣味が大分はひつてゐるといふことでございます。

梅　李踏天かい。厭な人だねえ。あたしはあの人が大嫌ひだよ。陛下のお氣に入りを鼻にかけて、我儘なことばかりするんだもの。少し氣は詰まるけれど、吳三桂の方がよつぽどあたしは好きだよ。

女官の三　でも、李踏天樣は大層殿下に御執心のやうな噂でございますよ。あんな恐い顏をしてゐながら、殿下の御前へ出るとまるで獅子の前へ出た兎のやうでございますわ。

梅　兎でも鼠でも、あたし、あんな人は大嫌ひ。噂をするだけでも胸が悪くなるわ。さあ、それよりは、みんなで早く、次の歌をうたつて見ておくれ。

女官一同　畏りました。

（女官達、また歌ふ。）

（歌なかばに、忠宋烈皇帝、侍臣二名を從へて、登場。）

（歌終る。梅檀皇女、背後に皇帝あるを知る。）

梅　（立つ）まあ、お兄様、ちつとも存じませんでした。失禮。

帝　（笑ふ）いや、構はん。構はん。（女官を見廻して）みんな、なかなか好い聲だな。だが、どうも少し陰氣だ。今おれがもつと陽氣な音樂を聞かせてやるから、待つてゐるが好い。

梅　まあ、何かこゝでお始めになるのですか。

帝　實はかうだ。あの右軍將の李踏天な。あれがこなひだ大手柄をたてたことは、お前も聞いて知つてゐるであらうな。

梅　（冷淡に）はい。伺つてをります。

帝　韃靼から無法な難儀を言ひかけて來て、あぶなく戰爭になるところを、李踏天が自分で自分の左の眼をゑぐつて出した爲にやうやく使者も納得して歸つたのだ。自分の身を片輪にしてまで國を救はうとする大忠臣だ。どうかして禮がしたいと思ふのだが、それに就いて思ひ出したのはお前のことだ。前から李踏天はお前を慕つてゐる。だが、お前はどうしても厭だと言ふ……

梅　ええ、厭です、厭です。厭です。

帝　だが、あの時、若し李踏天があれだけのこと

なしてくれなかつたら、吾々は今頃どうなつてゐるか分からないのだぞ。おれはその恩を思つて、あれをお前の聟にして、北京の都を讓らうと約束をしたのだ。

栴　まあ、わたくしに一言の御相談もなさらないで。

栴　まあ、待て。多分さう言ふだらうと思つて、おれもそれだけの用意はして來たのだ。女官どもを梅と櫻に分けて花いくさをさせるのだ。お前が梅で、おれが櫻だ。若し櫻が負けて梅が勝つたら、お前の思ひ通りにするが好い。櫻が勝つて梅が負けたら、李踏天の妻になるのだ。どうだ。これなら、無理強ひにはなるまい。天運次第で勝負だ。

栴　(笑ふ)

帝　どうだ。これでも無理だと言ふか。

栴　(不精不精に首を振る)

帝　では、承知してくれるのだな。

栴　はい。

帝　ありがたい。ありがたい。(侍臣の一人に) では、直ぐに合圖を。

(侍臣の一人、手にせる鈴を振る。)

(Amazon を主題とする行進曲。庭園の左右より、梅の枝を持ちたる女官の一群と、櫻の枝を持ちたる女官の一群、登場。行進曲やむ。)

帝　人數(にんず)は揃つたか。

(梅組櫻組の兩隊長、同時に、番號を命ず。番號、終る。)

兩隊長　(同時に) 揃ひました。

帝　よし。それでは、鼓を三度鳴らすから、それ

を合圖にかかるのだぞ。

兩隊長　（同時に）畏りました。

帝　（侍臣の一人に）それ。

（侍臣の一人、鼓を三度鳴らす。）

（やはり Amazon を主題とせる War-music。

小鑼、絃子、著しく聞ゆ。）

（兩軍、戰ふ。）

（皇帝と侍臣二人は櫻軍に應援し、皇女とその女官五名は梅軍に應援す。）

（梅軍、故意に負ける。）

（櫻軍、凱歌をあげる。）

帝　さあ、妹、これで縁組はきまつた。みんな、祝へ、祝へ。

（櫻軍、梅軍、共に歡聲をあげる。）

（途端に、大鉦が物騷がしく鳴つて、鎧兜の吳三桂が庭上に現れる。）

吳　陛下、これは何事でございます。

帝　（笑ふ）檀女と李蹈天が縁定めの花いくさだ。だが、それももうきまつた。心配には及ばぬ。おれが勝つた。祝へ、祝へ。

吳　王座のほとりで合戰があると聞いて、物の具とつて馳せ參じましたのに、花いくさとは莫迦らしい。天地始まつて以來、かやうなたはけた話は聞いたこともございません。

帝　まあ、まあ、さう堅いことは言ふな。けふはめでたい縁定めだ。祝つてくれ、祝つてくれ。

吳　いや、さうはなりませぬ。一家仁なれば一國仁を興し、一人貪戾なれば一國亂を起すと申すことがございます。上の好むところ下これに從ふで、若し國民がこの事を聞いたら、百姓木樵の嫁とり聟とり、ここでも花いくさ、あすこでも花いくさと、喧嘩爭擾一國に瀰漫し、萬一逆

臣が起つて宮中に攻め入るやうな場合がありましても、ああ又いつもの花いくさかと誰も馳せ参ずる者はございますまい。

帝　（笑つて）だが、そのやうな逆臣が、今この大明國にならうと思はれん。

呉　いいや、をります。

帝　どこにゐる。

呉　陛下の直ぐ御側近に。

帝　（笑つて）なに、おれの側に。

呉　その逆臣とは即ち李踏天のことでございます。彼は先年大飢饉の時、陛下は御憐憫のお心がないから、やむを得ず自分一箇で韃靼の合力を頼み、國民を危急から救ふのだと稱して、實は帝國の御藏米を國中に散らし與へたのでございます。かうして人心を收攬することが、他日反逆の準備であつたことは、今になつて分かりました。先日、彼が左の眼をゑぐつて韃靼の使者に與へましたのは、平和を欲する忠義ではなくて、實は韃靼へ一味徒黨の合圖なのでございます。陛下は南殿の額に大明とあるのを御存じでございませう。大明とは大に明なりの意味で、明は月日を列べた文字です。大明は南にある陽國で、日の國、韃靼は北にある陰國で、月の國、左の眼をゑぐつて渡したのは、やがて日の國を韃靼へ渡さうとの合圖でございます。使者が喜んで歸つたのも、その意味を悟つたからのことで、かやうな佞臣を一日も安穩にして置いたら、聖人公世の國も忽ち畜類の奴となりませう。天地の祭、宗廟の祟、思ふだに恐ろしいことではありませんか。

帝　（怒つて）默れ、默れ。物知り顔な文字の講釋など聞きたくない。理窟をつければ白いものも黑くなる。みんな李踏天が嫉ましいばかりに言ふことだ。何事もないに、鎧兜などをつけて、おれに近寄る貴樣こそ逆臣だ。出て行け。

（皇帝、吳三桂を足蹴にかける。）

吳　いや、飽くまでもお側にをります。あの逆臣をお退けにならん內は、たとひ踏殺されても蹴殺されても、お側は離れません。

帝　まだ言ふか。

（また、吳三桂を踏みつける。）

（突然、韃靼風の Ta-music。人馬の音。鯨波の聲。）

帝　あれはなんだ。

（吳三桂、逸早く、庭內の物見の櫓に駈け登る。）

帝　なんだ、なんだ、吳三桂、どうしたのだ。

吳　（向うを見ながら）韃靼勢です。韃靼勢です。わたくしの申したことに間違ひはありません。韃靼勢が攻めて參つたのです。

帝　なに、韃靼勢だ。

（皇帝、腰を拔かす。侍臣二人もへたへたとなる。）

（梅檀皇女並にその女官達は、各匕首に手をかけて身構へする。）

（櫻組梅組の女官達も、いつの間にか逃げてしまつてゐる。）

（吳三桂、望樓より駈け降り、皇帝達の前に立ちはだかりて、劍を拔く。）

（鉦、太鼓、鯨波の聲。）

（韃靼の貝勒王、庭上に現れる。）

貝　（大聲に）やい、おろか者。先達ておれが使に來て、韃靼の順治大王がこの國の后華淸夫人を

慕つてゐるなどと言つたのは、みんな嘘だ。さう言つて、懐姙の后を召捕り、明國の帝(みかど)の胤(たね)を絶やさうといふのが、こつちの謀(はかりごと)だ。だが、李踏天が眼をゑぐつて一味の印を見せたので、折返して押寄せたのだ。やい、吳三桂、この城内はもうみんなおれの味方だ。とても敵(かな)ふことではないから、帝も后も搦めとつて降參し、韃靼王の臺所に這ひつくばつて、炊水(かしみづ)でも啜つて命をつなげ。

吳　なにを小癪な。百八十年來草木もゆるがぬ大明國を攻め落さうなどとは、大海に潮を吹く鯨を、小蟻が狙ふのも同然だ。（腰を拔かしてゐる侍臣の一人から鼓をとつて、續け打ちに打つ）もの共出會へ。夷狄を追拂へ。

（吳三桂の手勢、僅十人ばかりが集つて來る。）

吳　たつたこれだけか。右軍はどうした。左軍はどうした。（鼓を打つ）

貝　（大聲に笑ふ）右營も左營も中營も、みんなこつちの味方だ。いくらもがいても、もうだめだ。

吳　うむむむ。

貝　くやしいだらう。くやしければ早く降參するが好い。外で待つてゐる。早く來い、早く來い。

（大聲　笑ひながら、悠々と退場）

（吳三桂、切齒す。）

（柳歆君、嬰兒を抱き、華清夫人の手を引いて登場）

柳　（吳三桂に縋りつき）まあ、くやしいではありませんか。公卿大臣から雜人下郎(ざふにんげらう)まで、みんな李踏天の味方になつてしまつて、誰一人御所を護るものはありません。

召　言ふな。言ふな。もうそれを言つてゐる場合ではない。后は大切なお體、必ず一方を切り拔けて、帝と共におれがお供をしよう。お前は子供をここへ置いて、おん妹のお供をして、早く海道の港へ落ちてくれ。

柳　よろしうございます。

（柳歡君、嬰兒を椅子の上へ置き、梅檀皇女を促して、上手へ走る。）

皃　さあ、これで一安心。（帝に）わたくしはこれから大手の敵を追ひ散らして、無事に陛下をお落し申し上げます。どうかそれまでここを動かずにおいで下さいまし。（手勢に）戰ひは人數ではない。勇氣だぞ。さあ、早く來い。（手勢を從へて、下手へ驅け入る）

（War-music。矢叫び。銃聲。）

（李踏天、李海芳、皇帝の背後より登場。いきなり帝の手を兩方から取り押さへる。華清夫人、李海芳の腕に縋りつく。）

華　おのれ、天罰を知らぬ大惡人、御恩も冥加も忘れたか。

（李海芳、振り返りざまに、后の胸倉をとり、劍を拔く。）

海　なに、貴様とて許しはせぬぞ。

帝　ああ、おのれに出づるものはおのれに歸るとは、この事だ。今日本にゐる鄭芝龍、また皃三桂の諫めをも聞かず、貴様達の諂ひにたぶらかされたればこそ、このやうな恥も見るのだ。自業自得だ。爲方がない。だが、夫人の胎内には十月に當る子供がゐる。誕生も程あるまい。どうかそれだけは助けてくれ。せめてもの情だ。

（鯨波揚る）

李　（殘酷に）いや、ならん、ならん。おれが大事の目をゑぐり出したのは何の爲だ。忠義でもない、義理でもない。目玉一つが知行になるのだ。この首が國になるのだ。（言ひざま、帝の首を斬つて落す）さあ、この首はおれが韃靼王へ屆ける。（海方に）貴樣は后を縛り上げて、直ぐにあとから連れて來い。（首をかかへて奥へ驅け入る）

（李海方、華清夫人を縛り上げ、直ぐに引立てようとするところへ、吳三桂が驅け戻つて來る）

吳　陛下、陛下、一方の血路を開きました。直ぐにお供……（帝の死骸に氣がつく）や。（李海方を見る）貴樣等の爲業だな。おのれ。（いきなり李海方の眉間に斬りつける。海方、朱に染んで倒れる。吳は后の繩を斬り、帝の死骸を押直す。帝の印綬に

手が觸れる）ああ、ありがたい。これは御即位の印綬だ。これさへあれば、御誕生の若宮も無事に位におつきになれる。さあお后樣、お供いたしませう。

華　でも、このおなきがらをこの儘にして置いては。

吳　さあ、それもさうでございますが、御胎内の若君も心配……

華　と言つて、お隱し申す場所はなし……

吳　困りましたな。

（鯨波の聲。）

（韃靼兵、亂れ入る。）

吳　おのれ。（と、韃靼兵を斬りまくりながら、一旦下手へはひり直ぐに又引返して來る）さあ、もうぐづぐづしてはゐられません。お死骸は兎も角も、

大事なのはお世繼。直ぐにお供をいたしませう。

（后の手を引いて出ようとする。椅子の上の嬰兒、突然泣き出す）ええ、邪魔な。だが、お前もおれの世繼だ。（嬰兒を戟の柄に結びつけ、肩に荷ひながら）これ、坊主、萬一父が討死したら、成人して若宮に忠義を盡すのだぞ。

（呉三桂、后の手を引いて、上手へ駈け入る。War-music 續く。）

——暗轉

第　三　場

海道の港。

水邊に蘆、蘆の蔭に小船一艘。落日。

鯨波の聲、銃聲。

呉三桂、華清夫人を庇ひながら登場。

銃丸、后の胸板を貫く。

呉　や、しまつた。だが、お世繼だけはどうしても……

（呉三桂、后の肌を押しひろげて、脇腹に劍を當てる。赤子の泣聲。）

呉　（王子を抱きとる）ありがたい。御男子だ。王子樣だ。（后の袖をちぎつて、これを包み、どこぞに隱さうとしたが、思ひ直して）いや、いかん。后の死骸を見つけられ、若宮のお行方を探されたらなんにもならん。（何か思ひついて）おう、さうだ。（戟から自分の子を解き放して、いきなりこれを刺殺し、その衣裳を王子に着せて、嬰兒の死骸を后の腹に押入れる）坊主、貴樣は果報者だぞ。好い時に生れ合せて、はからずも十善天子のお身代りだ。娑婆の親に心を殘すな。親も心は殘さぬぞ。

（呉三桂、王子を抱いて走り去る。）

柳歌君、栴檀女の手を引いて登場。直ぐに、蘆の中へ隱れる。）

（別の方角より、李踏天部下の將安大人、手勢を具して、驅けて出る。）

安　今の鐵砲は確かに后か吳三桂に當つた筈だ。（后の死骸に氣がつく）　それ見ろ。后がやられてゐる。や、腹を裂いて、帝姬の王子まで殺してあるな。きやつ吳三桂、これを手柄に自分の命を助かる氣だな。そんな腑がひなしはもうどうでも好い。あとは柳歌君と栴檀女だ。早く二人を探して、討ちとれ。

（一同、左右へ驅け入る。）

（剛維、蘆の上に蓑をつけ、小舟を漕いで登場。）

剛　（蘆に目をつけ）　うむ。この中が怪しいぞ。（櫂で蘆を押し分ける）

（柳歌君、その櫂を掴み、力に任せて跳ね返す。剛維うつむけに水中へ落ちる。やがて又浮き上がるを柳歌君、櫂にて打ち沈める。又浮き上がる。又打沈める。）

柳　さあ、皇宮樣、この舟で逃げませう。

（栴檀女を舟にのせ、自分もそれに乘らうとする途端に、濡れそびれた剛維が十騎ばかりの兵を連れて、飛び出して來る。）

柳　（皇女に）　あいつ、どこから匍ひ上がつたか、又やつて參りました。暫く船の底に隱れて入らして下さいまし。（剛維が舟の中に殘した劍と自分の劍とを兩手に持つて、待ち構へる）

剛　やい、女、よくもおれを濡鼠にしをつたな。（戟を振つて、かかつて來る）

柳　お前がくれたこの劍で、お前のそつ首を刎ねてやるぞ。さあ來い。

剛　何を。

（柳歌君、斬りまくる。）

（兵士達、或は斬り倒され、或は傷ついて逃げる。）

（剛毅、戟を切り折られ、柳歌君に組みついて、劍をもぎ取らうとして、あべこべに組み敷かれ、鍔元深く刺し通される。）

柳　（皇女の舟へよろぼひ寄る）姫宮様、姫宮様。もうこの有様ではとてもお供は出來ません。どうか、あなたお一人、この舟で汐に任せてお落ち下さい。舟が沖へ出るまでは、わたくしがここに控へてゐて、何萬騎敵が押し寄せて來ても、斬つて斬つて斬りまくります。もうお目にかかれるかどうか分かりません。どうか御無事で入らして下さい。（舷に手をかけて、舟を押し出す）

（柳歌君、氣が弛んで倒れる。）

（鯨波の聲。）

（韃靼兵、又押し寄せて來る。）

（柳歌君、氣がついて、立ち上がり、劍を振つて、斬り入る。）

——幕

第二幕

第一場

日本肥前松浦郡平戸の郷の濱邊。下手に大きなる岩。岩の上に小松。秋十月の青空。鴎飛び、千鳥鳴く。漣を思はする Scherzo 風の音樂。

和藤内三官、備中鍬で砂を掘る。妻小睦、魚籠を手にして貝を拾ふ。

和　それ、寄生蟲だ。

睦　ほい。

和　小蜆(しじみ)だ。

睦　ほい。

和　あさりだ。

睦　ほい。

和　すだれ貝だ。

睦　ほい。

和　鳥貝だ。

睦　ほい。

和　赤貝だ。

睦　ほい。

和　いたら貝だ。

睦　ほい。

和　鮑は片思ひだ、榮螺(さざえ)は拳固だ。

睦　赤螺、けちんぼ、法螺貝(ほらがい)、嘘つき。

和　(一息つく)は、は、は、とれた、とれた。

睦　とれはとれても、こんな實のない貝ばかりではどうにも爲方がありませんわ。

和　食へない貝は子供のおもちやにくれてやるさ。

睦　又そんな暢氣なことばかり言つて、早く蛤(はまぐり)でも掘つて下さいよ。

和　(笑ひながら) よし、よし。掘つてやらう。掘つてやらう。(また掘りにかかる)

睦　まあ、なんて、氣のない掘りやうでせう。あたしに貸して御覽なさい。(和藤内の手にしてゐる鍬をもぎ取る) さあ、あなたはこの籠を持つて、あたしのお供をしてお出でなさい。

和　(素直に籠を受けとつて、笑ひながら) よし、よし、お供をしよう、お供をしよう。

（小睦、そこらを掘り廻るが、何も出て來ない。）

和　さあ。まだかな、まだかな。

睦　お待ちなさい、お待ちなさい。（掘る）

和　それ、まだかな、まだかな。

睦　お待ちなさい、お待ちなさい。（掘る）

和　實のない貝にも、おもちや貝にも、てんで何も出て來ないではないか。

睦　くやしいねえ。ええ、これでもか。これでもか。

和　まだかな、まだかな。

（小睦の鍬、かちりと何かに當る。）

睦　それ。（掘り廻す。大きな蛤が出る）

和　いや、これは大手柄だ。

睦　なんと、どんなものです。

和　だが、待てよ。中に實があるかな。（蛤、大きな口をあく）いよう、生きてゐる、生きてゐる。

睦　誰が死んだ貝などをとるものですか。

和　分かつた、分かつた。お前はえらい。

（一羽の鴫が飛んで來て、蛤を突きにかゝる。）

和　ほほう、面白い、面白い。

睦　まあ、ばからしい。早く籠へ入れておしまひなさいよ。（鴫を追ふ）しつ、しつ。

和　（小睦の手をおさへて）まあ、待て。

（鴫、終に蛤の口へ嘴を突き入れる。蛤、口をしめる。鴫、その儘飛び上がつて、貝を岩で碎かうとする。蛤、砂の中へ鴫を引き入れようとする。和藤内、ぢつと腕を組んで、それに見入る。長き間。）

睦　まあ、ばからしい。何をそんなに見詰めてゐるのです。もう潮がさして來ました。早く歸りませう。

和　まあ、待つてくれ。おれは今鴫蛤の爭を見て、軍法の奥義を一時に悟つたのだ。いいか。貝は放すまいとする。鴫は離れようとする。それを横からおれが手を出せば、一處に兩方摑みどりだ。兩雄を鬪はしめて、その虛を討つといふ軍法の秘密がこれだ。聞けば今、親父一官の生國大明と韃靼は戰爭最中ださうな。そこへこのおれが乘込んで、日本流の武勇を揮へば、大明韃靼兩國を一呑にすることが出來るのだ。

睦　そんな夢のやうなことを言つてゐると、潮がどんどんさして來て、こつちが呑まれてしまひますよ。さあ、お前達も早くお離れ。（頭の笄をぬいて、蛤の口を割る。鴫、飛去る）さあ、行きませう。

（支那風の March, 栴檀皇女の乘つた船が流れて來る。）

和　や、あれは何だ。

睦　をかしな舟ですわね。

和　日本の舟ぢやない。

睦　あ、女が乘つてゐます。支那の女です。

和　好い女だなあ。

睦　まあ、厭らしい。あんな女が好いのですか。む、親父樣があちらに入らして、あなたもあちらで生れたら、あんな女房をお持ちになつたのでせうが、日本で生れた因果に、こんな女を女房に持つて、さぞくやしいでござんせうよ。

和　おい、おい、くだらないことを言ふものではない。いくら美しくても、あの衣裳では、辨天樣を見るやうで、勿體なくて寢られはせん。

（舟、岸につく。栴檀皇女岸へあがる。）

栴　日本人、日本人、なむからちよんのふとらやあやあ。

（小睦、ぷつと吹き出す。）

和　これ、笑ふな。あれは、日本人、ここへ來てくれ。頼みたいことがあるといふことだ。（と言ひながら、前へ出る）

栴　（泣きながら）大明ちんしんにようろ、くんけんくるめいたかりんかんきう、さいもうすがすんへいするとも、こんたかりんとんな、ありしてけんさんはいろ、とらやあやあ。

（小睦、をかしがつて、砂の上を轉げ廻る。）

和　（まじめに、皇女の前に手をつき）うすうすうさすはもう、ささがちんぶりかくさんきんないろ、きんにやうにやう。

栴　おう。きんにやうにやう。

（二人、手を取り合つて泣く。）

（小睦、それを見ると、突然夫に近寄り、その胸倉をとる。）

睦　まあ、油斷もすきもなりはしない。鷹揚な人だ、そこが豪いのだと、いつも感心してゐたのに、いつの間にかこんな稼ぎをするんですもの。（栴檀女に）やい、とらやあやあ、あたしの大事な男を、よくもきんにやうにやうしたな。日本の男の味より、この鍬の味を食べて見るが好い。

（備中鍬を振り上げる）

和　（鍬を奪ひて）やい。燒餅も場所によるぞ。このお孃様は、親父様の昔の御主君、大明の帝のおん妹栴檀皇女とおつしやる方だぞ。大明韃靼の戰爭を、やつとここまで逃げていらしたのだ、お氣の毒ともお痛はしいとも申しやうがない。

直ぐにも家へお供したいのだが、庄屋や代官が何のかのと煩さからう。お前、早く家へ歸つて、親父様を連れて來い。早く、早く。

睦　（砂の上に手を突いて）　まあ、飛んでもない粗相いたしました。そんなおかたとはちつとも知らずに……

和　お詫びはあとで好い。早く親父様を、親父様を……

睦　畏りました。

（小睦走り去る）

（入れ違ひに、一官夫婦、登場。）

（和藤内、認めて、直ぐに聲をかける。）

和　お父さん、お父さん。

父　おう、なんだ。なんだ。

和　栴檀皇女様が韃靼國を逃れて、ここへお渡りになりました。

父　（皇女に目をつけ、砂の上にひれ伏す）　おう、これは、これはお痛はしい。お聞き及びでもござりませうが、わたくしは鄭芝龍と申して、お國の者、只今の妻や子は日本のものでございますが、一刻として先の御恩を忘れたことはございません。わたくしはこの通りの年寄で、もう碌な御奉公も出來ませんが、せがれは御覧の通りの骨太で、生れつきの大膽者、兵書軍術もわたくしの存じてゐる限りは授けて置きましたから、必ずお役に立ちませうと存じます。わたくし伜と力を協せて、もう一度大明の御代にして御覧に入れますから、どうぞ御安心下さいまし。

栴　では、いつも聞いてゐた鄭芝龍といふのはお前のことかい。お兄様もお前や呉三桂の諫めを

聞かなかつたばかりに、李踏天にだまされて、たうたう命までお落しになつてしまつたのだよ。あたしもあぶなく韃靼兵に殺されようとしたところを、呉三桂夫婦の情で、やつとここまで逃げ延びることが出來たのだよ。

母　まあ、ほんとにあぶないことでございました。實はけさ、夜あけ近く、夫婦一緒に「戰は千里の西に利がある」といふ夢のお告を蒙つたのでございます。

和　おう、さう言へば、わたしも今、この濱で、鴫の鳥と蛤との爭を見て、軍法の蘊奥を悟りました。千里の西に利あるとは、手もなく大明へ渡れとのことでございませう。さあ、直ぐにお供をいたしませう。

父　いや、それでこそ一官の子だ。吾々夫婦も同船でお供がしたいが、人が多いと目に立つて、渡海の番所が面倒だ。吾々はそつと藤津の浦から船を出さう。お前はこれから直ぐに出て、どこか便宜の好い小島に姫宮様をお預け申し、船路を變へて追つつくが好い。出會ふところは、もろこしの千里が竹だ。

和　千里が竹ですね。

父　うむ、千里が竹だ。分かつたか。

和　分かりました。

父　分かつたら、急げ、急げ。こつちも直ぐに出かけるから。(梅檀女に)では、姫宮様、直ぐにお迎ひに參ります。

(一官夫婦、手を引いて、走り去る。)

和　(梅檀女に)では、今申したやうなわけでございますから、どうぞ、もう一度舟へお乗り下さ

いまし。（栴檀女の手を引いて、元の唐船へ移し、これを押し出さうとする）

（小睦、息を切つて、駈けて來る。和藤内が舟を出さうとしてゐるのを見ると、びつくりして、櫂に縋りつく。）

睦　まあ、待つて下さい。家には親父様も母様もお留守、變だと思つて歸つて見れば、道理こそ、道理こそ、親子で相談をきめて、親の國からお上さんを呼び、この小睦を置き去りにして、親子夫婦四人づれで、唐へ引越しするつもりですね。それはひどい。あんまりひどい。あたしに何の落度があります。唐高麗はおろかなこと、天竺雲の果までも、一緒に行かうと言ひ交した二人の仲ではありませんか。それとも、あなたは、このあたしが急に邪魔になつたのですか。それならそれでよござんすから一緒にその舟へのせて行つて、沖の深いところへ抛り込んで、鱶か鮫に食はせて下さい。

和　えい、何をくだらないことを言つてゐるのだ。大事の門出だ。涙は不吉だぞ。さあどけ、どかないか。どかないと、ひどい目に合はすぞ。

（櫂を振り上げる。）

睦　さあ、ぶつて下さい。ぶち殺して下さい。あなたにぶち殺されれば本望です。

和　どうも、こいつは、困つたなあ。

睦　さあ、早く、早く殺して下さい。殺してくれませんね。よござんす。あなたが殺してくれなければ自分で死にます。この海へ身を投げて、蛇になつて仇をとります。

（石を拾つて、袂に入れ、大岩に攀ぢ登る。）

（藤内、驚いて抱き留める。）

和　分かつた、分かつた、お前の心は分かつた。それまでの決心があれば、もう大丈夫だ。實は、大明の戰が片づくまで、姫宮樣をお前に預けて行かうと思つたのだが、お前の心が測りかねて、わざとつれなくして見せたのだ。いいか。四百餘州と釣替の姫宮樣だぞ。その大事な姫宮樣をお前に預けるのは、おれの心の變らぬ證據だ。姫宮樣につかへるのは、姑への孝行、夫への貞節だぞ。命にかけて賴むから、どうか間違ひのないやうにしてくれ。戰が濟んだら迎の船をよこす。さうしたらお供をして來るのだぞ。

睦　分かりました。分かりました。では、御無事で行つて、いらつしやい。

栴　迎ひの船を待つてゐるよ。

和　畏りました。（直ぐに舟に乘る）直ぐにお迎ひに參ります。

（舟、岸を離る。）

（小睦、栴檀皇女、岩に登りて舟を見送る。）

（第一幕の War-music の或 Variation。）

（注意。この場の音樂には、三味線を濫用したし。幕切れは、極めて淡泊に、別離の淚など一切見せざること。）

第　二　場

幕の前。幕は白地に南畫風の山水。一官夫婦、和藤内、登場。日本風の March。

父　好いあんばいに三人一緒になれた。だが、もう一度別れなければならん。お前達二人は日本から漂流した人間の樣な風をして、どこぞの民家で休ませて貰ふが好い。おれはこれから道を變へて、赤壁といふところで待つてゐる。實は、

お袋にもまだ話さずに置いたが、天啓五年にこの國を去る時、二つになる娘を乳母にあづけて置いた。母は娘を生むなり死んでしまつたのだ。その娘が大きくなつて、今では五常軍甘輝(かんき)といふ大名の女房になつてゐるさうだ。それもついきのふ通りがかりの商人に聞いて知つたばかりだが、今のところ、それを頼つて行くより外に仕方はない。國はもう韃靼の支配で、昔の友達も一族も、どこにゐるやら、まるで分からない。娘が若しおれを認めてくれれば、聟の甘輝も味方をしてくれるに違ひない。その甘輝の城のあるところが赤壁だ。では、これで別れるぞ。さあ、これからが虎の棲む名代(なだい)の千里が竹だ。氣をつけて行けよ。

（和藤内と母は右へ、一官は左へはひろ。）

第三場

千里が竹の大藪。

風の音。

（和藤内、母を負うて、登場。）

和　もう四五十里も來たやうな氣がしますが、いつまで歩いても竹藪ばかりですね。

母　ほんとにねえ。狐にでもばかされてゐるんだやないかしら。

和　（母をおろす）まあ、一休みいたしませう。なあに、ばかしたところで、たかが唐の狐です。驚くことはありませんよ。

（突然、遠くに韃靼風の War-music 起ろ。銕、單皮鼓、喇叭等、著しく聞ゆる。）

母　なんだらう。

和　吾々を見咎めて、毛唐人が取卷くのかも知れ

ません。それとも、やつぱり狐のいたづらか。

（激しい風の音。音樂、近づく。）

和　ああ、分かりました。虎狩です。あの鉦大鼓は勢子の者です。これは面白い。一つ日本人の勇氣を見せてやりませう。おつかさんわたしの腰についてゐて下さい。獸に對して武器を使ふのは厭です。この腕一つでやつつけて見せます。さあ、やつて來い。虎でも、象でも、鬼でも來い。

（風の音に激しく絃を掻き鳴らすやうな音交る。War-music も續く。）

（虎、現れる。）

（和藤内、母を藪蔭に隱し、いきなり虎に組みつく。）

（猛獸と勇士との激しい格鬪。）

（やがて、獸も人間も疲れ果てる。和藤内は大童になつて、石の上に腰をおろす。虎は毛を搖られて、岩の間に小首を投げる。）

（二人の大きな息づかひ。）

（母、藪蔭より走り出る。）

母　これ、和藤内。神國に生れて神から受けた身體髮膚を、畜類の爲に傷つけてはならんぞ。さあ、ここに大神宮のお祓がある。これをお護りにするが好い。

和（護符を受取つて押戴き）成程、成程。これさへあれば、もう大丈夫です。

（虎、勢を回復して、また和藤内に襲ひかかる。和藤内、護符をさし向ける。虎、畏縮する。和藤内、足下に虎を踏まへる。）

（韃靼の安大人、兵卒を從へて、登場。）

安　やい、やい、貴樣はどこの風來人だ。その虎は忝くも主君右將軍李踏天が韃靼王へ献上する

獵に狩り出した虎だぞ。おれの高名を妨げるとは怪しからん奴だ。早くこつちへ渡せ。渡さぬと命がないぞ。

和　なに、貴樣の主人は李踏天だと。それはちやうど都合が好い。この虎がほしくば、そのところ天をここへ突き出して、あやまらせろ。さうしたら、渡してやる。

安　なんといふ不禮なことを言ふ奴だ。一體、貴樣はここのどいつだ。

和　おれの生れは大日本だ。

安　うむ、あの小さな小人島か。そいつが何しに唐へ來た。

和　韃靼の芥子坊主を退治に來たのだ。

安　何を生意氣な。それ。狗ども。

（兵士達、一度に劍を拔く。）

（和藤内、護符を虎の頸にかける。）

（虎、憤然と韃靼勢に向ふ。）

（韃靼勢、逃げまどふ。）

（和藤内、安大人を捕へ、その首を斬り落して、岩へ投げつける。兵士達、虎を逃げれば和藤内に追はれ、和藤内を逃げれば虎に追はれ、進退窮して、一同地面の上にひれ伏す。）

和　どうだ、參つたか。

一同　御免、御免。勘忍、勘忍。

和　貴樣等が小國と侮る日本人の手並を見たか。（虎の背を撫でながら）おれを誰だと思ふ。大明國で名の高い鄭芝龍老一官がせがれ、日本九州平戸の浦で育つた和藤内三官だぞ。先帝の妹宮栴檀皇女にめぐり會ひ、三世の恩を報ずる爲、父の故郷へ立歸つて、國の亂を治めるのだ。さあ、命が惜しくば味方につけ。厭だと言へば虎

の餌食にしてしまふぞ。どうだ。どうだ。

一同　（口々に）お味方につきます。御家來になります。御免、御免。

和　よし、よし、それなら、そこへずらりと列べ。おれの家來になる以上は、日本流に月代をして、名も改めなければならんぞ。

一同　はい、はい、畏りました。

（一同、列んで坐る。）

（和藤内、差添ひを拔いて、銘々の頭を剃る。母も手傳ふ。滑稽なる音樂。）

（兵卒、一度に嚏をする。）

和　（笑つて）さあ、これでよし、これでよし、あとは名前だ。（一人一人を指さしながら）　さあ、貴樣はちやぐちう左衞門、貴樣はかほちや右衞門、次は呂宋兵衞、それから東京兵衞、暹羅太郎、ちやほ次郎、ちやるなん四郎、ほるなん四郎、ほるなん五郎、うんすん六郎、すん吉九郎、もうる左右衞門、じやが太郎兵衞、さんとめ八郎、いぎりす兵衞。さあ、二列になつて、前へ進め。

（兵士達、二列縱隊で步き出す。）

（和藤内、母を虎にのせて、その口を取る。）

（三味線を交へたる日本風の行進曲）

第三幕

第一場

獅子ケ城の櫻門。門堅く閉す。皎々たる月夜。

（遙にNocturn風の支那樂。胡琴。笛。左右から、異樣な提灯を腰にさした下官一人宛、板を鳴らして出て來る。舞臺中程で出會ひ、挨拶して、入れ

ます、左右へ[illegible]。）

（暫くして、一官夫婦、和藤内、登場。）

父　（樓門を仰ぎ）これは困つた。運よく赤壁の麓で三人一緒になつて、やつとここまで辿りついたが、この嚴しい堅めでどうにもなるまい。

和　構ふことはありません。門を叩いて見ませう。

父　だが、いきなり男が日本から來たなどと言つても、誰もほんとにはしないだらう。たとひ娘が聞いても、容易に城内へは入れてくれまい。

和　一身の外味方なしとは、日本を出る時からの覺悟ではありませんか。まだ會つたこともないものが、姉だ聟だと親類顔して不覺をとるより、味方になるか、ならないか、一口で談判をきめてしまつた方が好いと思ひます。甘輝の妻が父親の二つで別れた娘なら、わたしとは行合姉、若し孝行の心があるなら、今までに一度や二度の便りはある筈です。決して頼りにはなりません。それよりは千里が竹で降參した島虎を元手にして戰へば、五萬や十萬は直ぐに味方につきませう。もう人頼みなどはせずに、その門を蹴破つて、不孝な姉の首を捻ぢ切り、聟の甘輝と一勝負しようではありませんか。

母　まあ、お待ち。さあ、その娘御の心は分からないが、女といふものは夫次第で、自分一人の自由にはならないもの。何にしても、親父樣とは親子、お前とは胤一つ、わたし一人が他人の繼母、若しそんなことをして日本の繼母の妬みだと言はれたら、日本の國の恥ではないか。お前も大明の爲に大義を思ひ立つて、名に負ふ韃靼の大敵を攻め破らうとするからは、私の恥を

捨て、自分一人の無念を堪へ、人をなづけ從へて一人の雜兵でも味方に入れるのが軍法の本ではあるまいか。まして婿の甘輝は一城の主一方の大將、容易なことで味方にはなるまい。まあ逸らずと心を落ちつけて、案内するが好い。

父　さうだ、さうだ。その通りだ。

和　分かりました。では、ここから聲をかけませう。（城門を仰いで、大聲に）五常軍甘輝公へ直談したいことがある。門をあけてくれ。門をあけてくれ。

（兵士。四五人、城門の上に首を出す。）

兵の一人　甘輝公は大王のお召しできのふから御出仕だ。いつお歸りか分からん。言ふことがあれば、そこから言へ。お歸りになつたら取次いでやる。

父　（小聲に）いや、人傳で申すことではありません。甘輝公がお留守なら、御内室にお目にかかつて、ぢかに申し上げませう。日本から來たものだと仰しやれば、直ぐに分かります。

他の兵士　なに、日本人だと。おい、みんな、油斷をしちやあいかんぞ。

更に他の兵士　吾々さへお顔を拜んだことのない奥樣に會はうなどとは怪しからん奴だ。

他の兵士　みんな、集まれ。鐵砲の用意をしろ。

（銅鑼、鳴る。）

（兵士等、城門の上に列び、鐵砲の筒先を揃へる。）

（突然、城門の上に錦祥女現れる。侍女二人。）

錦　しつかにおし。わたしが言ひつけるまで鐵砲を打つてはならないよ。これ、これ、門の外の

お方、五常軍甘輝の妻錦祥女といふのはわたしのことです。夫の留守にわたしに會はうと仰しやるのは分かりませんが、日本と聞けば懐かしいわけもあります。どうか御用を仰しやつて見て下さい。（兵士達に）これ、粗忽をしてはなりませんぞ。

父　それでは申し上げませう。甚だぶしつけなお訊ねですが、あなたのお父様は大明の鄭芝龍というお方ではありませんか。お母様はあなたを生むと直ぐになくなり、お父様は帝のお咎を受けて日本へお渡りになつたのではありませんか。

錦　まあ、よく御存じでございます。如何にもわたしの父は鄭芝龍、二つの時に別れたきり、お顔を見たこともございません。

父　おう、では、やつぱりさうでしたか。實はわたくしがその鄭芝龍、今は日本の肥前平戸に住んで、名も老一官と改めてをります。これは日本で儲けた弟、これは今の母、實は内々でお願ひしたいことがあつて、遥々たづねて來たのです。門をあけては下さいますまいか。

錦　成程、一々覺えのあることです。併し、證據がなくては胡亂です。何か證據をお持ちでせうか。

兵士達　さうだ。證據を見せろ。證據を見せろ。

父　さあ、證據と言つても、親子だと言ふより外に變つた證據はないが……

兵士達　それ、證據がなければ、曲者だ。

（一同、槍先を向ける。）

和　（父の前に突立ち）やい、無用の鐵砲、ほんと

でも言はしたら撫で斬りだぞ。
兵士達　あいつも逃がすな。
父　（兩手をあげて）まあ、待つて下さい。證據はこつちにはないが、そつちにある筈。先年もろこしを立ちのく時、わたしの姿を繪にうつして乳母に預けて置きました。若しそれがお手許にあるなら、比べて見て下さい。年はとつても、どこかに似たところは殘つてゐる筈です。
錦　まあ、それを知つていらつしやるなら、もう父上に相違ありません。
（懐から繪姿を出して、侍女にひろげさせ、柄つきの鏡を出して、一官の顔を映し、彼と是とを見比べる。）
錦　おう、目許口許、額の黒子、お父様に相違ありません。まあおなつかしい。よう生きてゐて下さいました。
父　おう、さうか。やつぱり娘か。
錦　お父様でしたか。
（暫く沈默。）
父　いや、泣いてゐる場合ではない。實は吾々がここへ來たのは聟の甘輝に内々で頼みたい一大事があるからだ。お前にも豫め話して置きたい、どうか中へ入れてくれ。
錦　仰しやらずとも、お通し申すところですが、實はまだ戰爭最中で、親類縁者でも外國人は城内へ入れてはならぬといふ韃靼王の掟なのです。併し、これは特別の場合です。（兵士達に）ねえ、みんな、どうしたものだらうねえ。
兵士達　（口々に）思ひも寄らぬことです。飛んでもないことです。なりません。なりません。き

こゝい、きこらい。びんくわんたさつ。ぶおん、ぶおん。

母（進み出て）成程、御尤でございます。大王の御禁制とあればいたし方がございません。併し、年をとつたこの母一人ぐらゐお通しになつても大丈夫でせう。ほんの一言申せば、それで濟むのです。どうかわたくし一人だけお通し下さいまし。

兵士の一人　いや、女でも許せといふ仰せはない。併し、繩つきにして通せば、韃靼王へ聞えても言ひわけが立つ。まつことはひりたくば繩にかかれ。

他の兵士　それが厭なら、きこらい、きこらい、びんくわんたさつ、ぶおん、ぶおん。

母（目を怒らし）やい、毛唐人、うぬの耳はどこについてゐるのだ。忝くも鄭芝龍が女房、おれの母、そこな奥方にも母同然の人を、犬猫を飼ふやうに、繩をつけて通さうとは、なんといふ不禮な奴だ。もう、もう、そんな面倒な城なら、はひらずとも好い。さあ、お母さん、もう行きませう。（母の手をとる）

母　これ、これ、今言つたことをもう忘れたか。大事を人に賴むには、憂目にも恥にも會はなければならぬ。繩はおろか、足枷手枷にかかつても、願が叶へば瓦を金に換へるやうなものではないか。さあ、一官殿、早く繩をかけて下さい。

父　分かつた。よし、よし。（腰繩を出して、母を縛り上げる）

錦　何事も時世だと思つて下さい。お母さんはわ

たしがお預かり申した以上、御心配はありません。どういふお話か存じませんが、一通り承つた上で、甘輝にも話し、お望みの叶ふやうにいたしませう。ちやうどこの城の廻りに掘つた堀の水上が、わたしの化粧の間の庭先へ來てをります。若し甘輝が聞入れてくれて、お望みが叶つたら、白粉を溶いて流しませう。萬一、川の水が赤く流れたら、叶はぬ知らせと思召して、お母樣をお迎ひに、門外へお出で下さいまし。

(兵士達に)それ門を。

(石火矢の音。)

(門、開く。)

母　それでは、せがれ、一官殿。

和　お母さん。

父　吉左右(きつさう)を待つてゐるぞ。

錦　それでは、これで。

(母、門内へ入る。)

(石火矢の音。門、しまる。)

(錦祥女の姿隠れる。)

(一官、和藤內、ぢつと城内を見詰める。)

(遙に支那樂。)

——幕

第二場

城内。大廣間。

「上下通しの高二重の屋臺、上手九尺程折廻しの障子に蹴込、階段など、總て歌舞伎の舞臺を參照す。

花道を用ふ

Scherzo 風の音樂。

侍女四人の笑ふ聲にて幕あく。

侍女の一　日本では、若い女でもみんなあんな風をしてゐるんでせうねえ。

侍女の二　目も二つしきやないし、鼻も顏のまん

中にあるところは、ちつとも變つてやしないけれど、髮の結ひやうがをかしいわねえ。

侍女の二　それよりは、著物の縫ひやうが變つてゐるわ。裾も袂もあけつ放しで、あれでは、風でも吹いたら……

侍女の四　太腿までまる見えだわ。

侍女の一　おう厭だ。

侍女の二　おう厭だ。

（一同、また笑ふ。）

（錦祥女、登場。）

錦　まあ、大層賑かだねえ。

侍女達　恐れ入ります。

錦　お母樣へ出來るだけ御馳走をして上げておくれよ。

侍女の一　はい。お料理は精々念入にいたしまして。

侍女の二　龍眼肉の御飯。

侍女の三　家鴨の油揚。

侍女の四　豚のこくせう。

侍女の一　羊の濱燒。

侍女の二　牛の蒲鉾。

侍女の三　いろいろにして差し上げましたが、どれも厭だとおつしやるのです。

侍女の四　それに、縛られてゐて、手が使へないから、むすびをこしらへてくれと仰しやるのでございますが……

侍女の一　そのむすびといふお料理が分からないので、みんな困つてゐるのでございます……

（「お歸り」といふ聲が、花道の向うで聞える。）

錦　おう、お歸りだと見える。では、まあ、御馳

走の方はお前達に任せるから、なんとか考へて、お口に會ふやうなものを上げておくれ。日本のお方はあつさりしたものがお好きだと言ふから、却つて肉類はいけないかも知れないよ。では、一度あつちへ下がつておくれ。內々で殿樣に申し上げることもあるから。

侍女達　畏りました。（退場）

（「お歸り」といふ聲、もう一度聞える。）

（Marche Minatur。唐櫃を擔いだ下人を先に立て、絹張の笠を冠つた五常軍甘輝、花道より登場。）

錦　まあ、お早いお歸りでございました。御前の首尾は如何でございました。

甘　ありがたう。ありがたう。大王はひどく御機嫌でな。今度このおれを散騎將軍にお取り立てになつた。十萬騎の旗頭だ。冠裝束も諸侯王と同じのを戴いて來た。（唐櫃を指さす）

錦　それはまあおめでたう存じます。さう言へば、もう一つ嬉しいことがございます。實は、日頃から戀しい懷しいと申し暮らしてをりました父上が、日本で出來た母上と兄弟を連れて、何かお賴みしたいことがあると言つて、門外まで來たのでございますが、お留守中でもあり、御禁制も嚴しいので、男達は返しまして、母上だけお留め申しましたが、それもお上への聞えを憚つて、繩をかけて、あの奧の亭へお入れ申して置きました。

甘　うむ、繩をかけたのは氣轉だつた。上へ聞えても言譯がなる。併し、馳走に粗略はあるまいな。おれも直ぐにお目にかかりたい。案內して

くれ。

（いいえ、お出ででは恐れ入ります。こちらからお目にかかりに參ります。といふ聲がして、障子屋臺より縛られた儘母親登場。）

甘　わざわざ遠いところをお訪ねて入らしつたのに、縄つきになどして申譯がありません。これも時節とお諦め下さい。これ、錦祥女、お手の痛まぬやうにして上げろ。して、何か御用があるさうですが、この身に相當したことなら、なんでもいたします。どうか御遠慮なく仰しやつて見て下さい。

母　ああ、ありがたい、ありがたい。もうそのお詞を聞いただけでも百人力を得たやうな氣がします。實は、今度あたし達がこちらへ渡つて來たのは、娘に合ひたいだけではありません。去年の冬のはじめ、日本の肥前松浦が磯といふところへ、大明の帝のおん妹栴檀皇女といふお方が小舟でお着きになり、だんだんお話を聞くと、大明は韃靼に滅ぼされたとのこと。夫一官は元から明朝の陪臣、せがれの和藤内も手業は卑しい漁夫ながら、少しは唐日本の軍書に通じてゐるので、韃靼王を攻め滅ぼし、再び大明の世に返さうといふので、姫宮だけを日本に殘して、親子三人こちらへ渡つて來たのですが、情ないことに、もう今ではどこへ行つても韃靼の配下で、大明の味方をしようなどといふ者は一人もありません。和藤内の片腕になりさうな人は、甘輝殿、あなたの外にはありません。どうか味方についてやつて下さいまし。お願ひです、お願ひです。

甘　成程。日本の和藤内といふのは、鄭芝龍一官殿の息子さんでこの錦祥女とは兄弟なのですか。どうも唯人ではないと思つてゐました。わたくしも今はやむを得ず韃靼の祿を食んでゐますが、先祖は勿論大明の臣下ですし、和藤内が義理の兄弟だとあれば、早速味方をすべきですが、少し考へてゐることもありますから、御返事はちよつとお待ち下さい。

母　いいえ、それは卑怯です。これ程の一大事、一旦口から出した以上は、直ぐに決心を聞かなければなりません。あなたが考へてゐる間に、若し世間へ洩れたらどうします。否とでも應とでも、直ぐに返事をして下さい。

甘　宜しい。それ程お急ぎなら、直ぐに返事をして上げませう。如何にも、五常軍甘輝、和藤内の味方をしませう。（さう言ひながら、いきなり錦祥女の胸元を捕へ、劍を拔いて咽に當てる）

母　（驚いて、その間へ割つてはひる）まあ、あなた、なんといふ事をするのです。人に物を頼まれると、女房を殺すのが、こちらのしきたりなのですか。それとも、あたしの言ふことが氣に入らないで、それも女房があるからだと、腹立ちまぎれになさることですか。それとも、氣でも違つたのですか。現在、母の見る前で、たとひ義理ある娘にもせよ、殺さうとする無法人、これで日頃が思ひやられます。味方をせぬならせぬで好い。今までとは違つて親のある大事な娘でございます。（錦祥女に）これ恐いことはない。母の腰にしつかり摑まつておいで。

錦　いいえ、あたしよりお母様がお怪我を遊ばし

では、

母　なあに、わたしは構はない。お前に怪我でもさせたら、お父様に申譯がない。

（甘輝、喜びすさつて、兩手を突く。）

甘　恐れ入りました。御不審御尤もでございます。併し、わたくしに氣が違つたのでもなければ、亂暴をいたすのでもありません。實は昨日、韃靼王からお呼び出しがありましたので、入城いたしましたところ、王の言はれるには、この頃日本から和藤内といふ奴が渡つて來て、韃靼を滅ぼし、再び天下を大明に返さうとしてゐるが、そいつはなかなか智謀軍略にすぐれてゐるさうだ。そこで、これに當るには相當の人物を要するが、數千人の諸侯の内で、それだけの大任の果せるのは甘輝より外にない。けふからお前を散騎將軍に任じて、十萬騎の將とするから一擧に國の禍を除いてくれと、かういふお頼みなのです。勿論その時は、和藤内が自分の女房の兄弟とは夢にも知りませんから、なあに、いくら日本人が強いからと言つて知れたものです。一合戰で追ひまくつて、和藤内の月代首をお土産に持つて參りませうと、廣言を吐きました。そのわたしが、一太刀も合せず、矢一筋も飛ばさないで、味方をしましたら、甘輝は女の緣に腰がぬけて武士の道を忘れたと、きつと韃靼人に笑はれるでせう。それはわたし一人の恥辱ではありません。子々孫々までの恥辱になります。そこで、女の緣に引かれたのではないといふ證據に錦祥女に死んで貰ひたいのです。

錦　（前へ出る）分かりました。さういふわけなら、

決して命を惜しみはいたしません。親に貰つた體を孝行の爲に捨てるのです。どうぞ、直ぐに殺して下さい。（胸をひろげる）

（母、驚いて、中にはひり、錦祥女の袖を口で啣へて引張る。錦祥女、振りもぎつて前へ出る。甘輝、刺さうとする。母親また中へ轉び入る。）

錦　お母樣、どうぞ死なして下さい。今まで親といふものを知らずにゐたあたしが、一生に一度の孝行をするのです。

母　まあ、なんといふ悲しいことを言ふのだい。お前には娑婆と冥土に三人親があるのだよ。その内二人の父母には生みの恩があるけれど、その内一人のこの母は、恩も慈愛もない繼母、その繼母がお前をここで死なせたら、きつと日本の繼母がもろこしの繼子を憎んで見殺しにしたと言はれるに違ひない。それはわたしの恥ばかりではない。日本人は邪慳だと國の名を出されたら、國の恥になることだよ。日本といふ慈悲專らの神國に生れた母が、娘の殺されるのを見物してゐられるものか。ああ、この繩が日本の神々の注連繩となつて、あたしの首を絞めてくれれば好い。（泣く）

甘　どうも、それでは爲方がありません。お母樣の御承知がなければ、けふから和藤内とは敵對です。お母樣を留めて置いて、人質にしたと思はれるのも不本意です。（呼ぶ）これ、誰かゐるか。輿車の用意をして、お母樣をお送り申せ。

錦　いえ、それには及びません。望みの叶はぬ時は、この遣り水から紅を流す約束。さうすればあちらでお迎ひに見える筈です。さあ、紅をと

いて流しませう。

甘　うむ。それでは、それまで、お母様は、わしが礎にお預りする。

（錦祥女、障子屋臺へ入る。）

（甘輝、母親を介抱して、奥へ入る。）

（歌舞伎風の知らせの木で、支那樂—Lamentation de Princesse en exil）

障子屋臺、三尺程せり上げる。

下手の屋臺はドロップで隠す。

石橋を押し出す。

（石橋の上に和藤内が一人でゐて、川を見詰めてゐる。以下 Pantomime.）

（化粧の間の障子があく。錦祥女、赤い木を入れた—赤き布を用ふ—硝子鉢を持つて現れ、直ぐにそれを下へ流し、障子をしめてはひる。）

（和藤内、紅の流れて来るのに氣がつくと、直ぐに橋を駈け降り、飛ぶやうにして花道をはひる。）

舞臺、元へ戻る。

（甘輝、上手の椅子による。老母、縄にかかりたる儘、下手にゐる。冠が中央の臺にのつてゐる。）

（急調な War-music。）

（和藤内、花道から飛んで来る。老母、それを見ると、二重から駈けおりる。和藤内、母の縄を引きちぎり、甘輝の前に立ちはだかる。）

命　やい、五常軍甘輝といふ髭唐人は貴様か。天にも地にもかけがひのないたつた一人の母様に縄をかけたのは、おのれをおのれと奉つて、味方に頼まうとしたからだ。味方にならぬのはこのおれを大将にするのが不足なのか。第一女房の縁と言ひ、元は貴様も大明の臣下、そつちから従ふのが當り前だ。さあ、日本の和藤内がち

かに頼む。返事をしてくれ。

甘　お前が日本の和藤内なら、おれももろこしの甘輝だ。女にほだされて味方をするやうな腰ぬけではない。と言つて、女房を去る謂はれもない。病死するまで便々と待つてもをられまい。追風次第に早く歸れ。それとも、置土産に首が殘して行きたいか。

和　いや、日本への土産に貴樣の首を貰つて行く。

甘　何を小癪な。

（二人、詰め寄る。）

（「まあ、二人とも、待つて下さい。」といふ聲がして、上手の屋臺から錦祥女が現れる。）

錦　病死を待つまでもありません。只今流しました紅の源、さあこれを御覽下さい。

（と、胸をひろげる。懷劍が胸を深く刺し通してゐる。）

（母も和藤内も甘輝も驚く。）

錦　お母樣は日本の恥を思つて、わたしを殺すまいとなさいますが、わたしの命を惜しんで親兄弟に盡さなければ唐の恥になります。さあ、もうかうなつたら、女に心を牽かれるといふ謗はありますまい。甘輝殿、どうか親兄弟の味方をして、力になつて上げて下さい。

甘　むう、でかした、でかした。その志を決して無にはしないぞ。（和藤内の前に頭を下げる）先程も仰しやる通り、わたくしの先祖も大明の臣下、進んでお味方申すべき身が、女の緣に迷つたと言はれては殘念なので、今まで躊躇してをりましたが、妻が一身を犧牲にして勸める以上、心よくお味方いたします。ついては、早速あな

たを大將軍と仰ぎ、諸侯王になぞらへて、お名も延平王國性爺鄭成功と申し上げることにします。さあ、裝束を召して下さい。(呼ぶ)御裝束の用意。

(下官達、唐服を持つて出て、和藤内に支那風の衣裳を着せる。沓・冠。)

(他の下官達、旗・鐵砲・弓矢・鉾などを持ち出して、立て列べる。)

母　(喜んで)錦祥女、あれを御覽。お前が命を捨ててくれた爲に、親子の本望が達したのだよ。親子の本望はやがて天下の本望。その懐劍は九寸五分だが、その劍一つで四百餘州が治まるのだよ。ああ、ありがたい。もうこの上は、母も思ひ置くことはない。(いきなり、錦祥女の劍をとつて、自分の胸に突き立てる。一同立騒ぐ)騒いではいけない。寄つてはなりません。さあ、甘輝、國性爺、早く出陣をしておくれ。

和　お母さん、お志は決して忘れません。

甘　錦祥女、禮を言ふぞ。

(二人、立ち上がる。)

(母と錦祥女、手を取り合つて、落ち入る。)

(Marche Funèbre—Krou Roan Tiena)

——幕

第四幕

第一場

日本、松浦潟の住吉神社前。月夜。

神木の松。波の音。

(小唄。若衆姿、大髷で、朱鞘の木刀を腰にさし、菅笠を深く冠り、あたりを見廻しながら、小走り

に登場。）

睦　（神社の前まで來ると、笠を投げ捨て、砂の上に坐つて、暫く祈誓をかける。やがて、突然、立ち上がると木刀を拔いて、神木に切りつける。）

えい、やつたう、やつたう、えい、やつたう…

（神木の枝が一つ、切つて落される。）

（小蔭から、栴檀女が飛び出す。）

睦　（木刀を構へ、男の聲で）誰だ。何者だ。

栴　いやあねえ、あたしぢやないの。

睦　（氣がついて）まあ、あなたでしたの。恥づかしい。

栴　なんの恥づかしいことがあるものかね。あたしは今感心して見てゐたんだよ。なんだか、この頃、毎晩、毎晩、變つた裝をして出ると思つて、けふは待伏せをしてゐて見たの。まあ、ほんとに器用なこと。いつの間に覺えたの。

睦　いいえ、誰にも習つたのではありません。住吉様にお願ひしては、唯やたらにこの木刀を振廻してゐる内に、どうにか松の木が切れるやうになつたのです。實はあちらからの便りも一向ありませんし、迎ひの舟が來なくても、お供をして渡れるやうにと思つて、ただてらにこんなことをいたしてをるのでございます。

栴　まあ、嬉しい。それぢやあ、直ぐに連れて行つておくれ。

睦　はい。實は便船のことも神様にお願がしてございます。けふは滿願でもございますから、きつとお導き下さいませう。暫くお待ち下さいまし。

栴　して、この住吉様と言ふのは。

睦　船の神様でございますのよ。なんでも、昔も

ろこしの白樂天といふ詩人が、日本の知慧を測らうとして、ここへお渡りになつて、目前の景色を「青苔衣を帶びて巖の肩に懸り、白雲帶に似て山の腰を遶る」とお歌ひになると、この住吉の大明神樣が卑しい年をとつた漁夫の裝で出て入らして（丁度、その時、一人の老漁夫が小舟に棹して、音もなく水の上に現れる）「苔ごろも著たる巖はさもなくて、きぬぎぬ山の帶をするかな」とお詠み……

栴　（漁夫に氣がつく）まあ、あれは。

錦　（老漁夫を見て、目が利けなくなる。土の上に坐つて、手を合す。）

（老漁夫、二人を招く。）

（栴檀、錦祥女を促して、舟に入る。）

（その間に、住吉神社も神木も岸邊も消え失せて、月光を受けた一面の大海に唯一艘の小舟が浮いてゐる。）

（月光と靜な海とを思はせる No. turn 風の曲に小規模の Marche をかぶせる。）

（船が進行する。）

——暗轉

第　二　場

九仙山の絕頂、月夜。

（白髮の老人が二人、石の上に碁盤を据ゑて、わき目もふらずに勝負をしてゐる。吳三桂、太子を石の上にのせ、自分は木の株に腰をのせて、ぢつとそれを見てゐる。）

（暫く、碁石の音だけが聞えてゐる。）

（やがて、吳三桂が口を開く。）

吳　御老人、お樂しみでございますな。併し浮世を離れて山中に自適するあなた方が、琴でもなく、詩でもなく、酒でもなく碁石で勝負をお爭

ひになるのは分かりませんな。

老人の一　（呉三桂の方は見返らず、一種莊重な聲で）碁盤を見れば碁盤で、碁石を見る日は碁石だ。大地世界を以て一面の碁盤となすといふ詞がある。大明一國の山河草木は、この碁盤一面で分かるのだ。一角に九十目、四方に春夏秋冬の九十目、合せて三百六十目、その一目が一日だといふことが分からないか。

呉　成程、面白い。併し、天地一體の樂しみに二人で向ふのはどういふわけです。

老人の二　（前の老人と同じやうに）陰陽二つなければ萬物は調はない。

呉　さて、勝負はどうなのです。

老人の一　人間の吉凶は時の運ではないか。

呉　では、白と黑は。

老人の二　夜と晝だ。

呉　手段は。

老人の一　軍法次第だ。

老人の二　開け。この頃日本から國性爺といふ勇將が來て、大明の味方となり、今合戰の眞最中だ。ここから大分離れてはゐるが、戰の樣子はありありと碁勢に現れてゐる。今見せてやるから、待つてゐろ。

（老人二人、呉三桂、太子などの姿が暗くなり、山の上の空が明かるくなる。）

（遠く War-music。）

（Java 風の影繪にて、國性爺軍と韃靼軍との合戰が空に現れる。）

（合戰數回、韃靼軍、散々に敗亡する。）

（空の方がだんだん暗くなつて、山の頂きがだんだん明かるくなる。）

（吳三桂、夢中になつて、太子を抱いて飛び出さうとする。）

老人の一　これ、これ、どこへ行く。

吳　あの城へ。國性爺のところへ。

老人の二　まあ、待て。直ぐそこに見えても、百里は離れてゐる。お前はこの山へはひつて、まだ一時だと思つてゐようが、もう五年の月日が立つてゐるのだぞ。

老人の一　今見た戰も、短いやうで四年の間の合戰を見たのだぞ。

老人の二　おれは先祖高皇帝だ。

老人の一　わたしは靑田劉伯溫だ。

（舞臺暗くなる。）

（暫くして、月が出る。）

（二老人の姿はもう見えない。）

（急に年をとつた吳三桂が、七つ位になつた太子を見て驚いてゐる。）

太　吳三桂、吳三桂。

吳　（夢中で）はつ、はつ。

太　鄭芝龍の子の國性爺が日本から來て、義兵を起し、春秋五年の合戰に、大明の半は取返したさうだ。早くわしを國性爺のところへ連れて行つてくれ。

吳　はつ、畏りました。

（途端に、谷の向うから「そこにゐるのは司馬將軍吳三桂ではないか。吳三桂、吳三桂」と呼ぶ聲がする。）

吳　おう、あなたは鄭芝龍殿ではありませんか。

（一官、栴檀女、小睦、旅裝にて、谷から上がつて來る。）

一　これは、これは、吳三桂殿。命あればこそお目にかかられた。栴檀皇女もこれにをられる。

これは國性爺の妻小睦。

栴　まあ、吳三桂、あたしはお前の妻柳歌君のお蔭で、無事に日本へ渡ることが出來たが、柳歌君はどうしてゐる。赤はどうした。早く會ひたい。會はせておくれ。

吳　はい。妻はあの時の深手でなくなりました。お后樣も敵の鐵砲で命をお落しになりましたから、御胎内を破つて、我が子を太子のお身代りとし、太子はこの山中で無事にお育て申し上げました。御覽下さい。あれが太子樣でございます。

（栴檀女、驅け寄つて、太子を抱く。）

一　（麓の方を見ながら）や、貝勒王めが姬宮を見つけて、ここへ追つかけて來るぞ。太子樣のお身の上が心元ない。どこぞへ立退く道はあるまいか。

吳　この山は谷が深くて、どこの山へも越す道はない。

一　困つたなあ。どうしたら好いのだ。

吳　待つて下さい。只今奇瑞を現し給うた御先祖高祖皇帝、靑田の劉伯溫、このお二人に願ふより外はありません。あなた方も拜んで下さい、拜んで下さい。

（太子、栴檀女、小睦、吳三桂と共に一心不亂に祈る。一官は佇立つた儘麓の方を見詰めてゐる。）

（遙に人聲。War-music。）

一　や、橋が出來たぞ。橋を作りをつたぞ。あ、渡つて來る、渡つて來る……

（他の四人、一心不亂に祈る。）

（物のめりめりと折れる音。人の悲鳴。）

一　（喜んで）や、橋が折れた。橋が折れた。みんなまつさかさまだ。粉微塵だ、は、は、は、は。

吳　（立ち上がる）ありがたい。ありがたい。さあ、そこらにあるものを、なんでも投りつけるのだ。

（一同、そこらの石を拾つて、谷へ投げる。）

（貝勒王が一人、血だらけになつて上がつて來る。）

吳　おう、貴様は貝勒王だな。大將並に好いものを食はしてやるぞ。待つてをれ。

（兩手にさつきの菜盤をさし上げ、それを貝勒王の頭へ打ちつける。）

――幕

第五幕

第一場

龍馬ケ原の野營。

軍鼓、喇叭。

卓を前にして、中央に國性爺、左右に吳三桂と甘輝とが床几に腰をかけてゐる。

陣屋の上には伊勢太神宮の大祓麻が勧請してある。

吳　（竹の筒を一本取り出して）わたしの謀はこれです。この筒には蜜を入れて山蜂を澤山に仕込んであります。かういふ竹筒を何千本も拵へて、先頭の雑兵に持たせてやるのです。さうして、戰爭をする態に見せかけて、筒を捨てて逃げて來させるのです。韃靼勢は貪慾ですから、きつとこれを食物だと思つて拾ふに違ひありません。そこで、みんなが口を拔くと、一度に何萬といふ山蜂が飛び出して、賊兵を刺すでせう。

その虚に乘じて八方から討取るのです。まあ御覽なさい。（と言つて、竹筒の口を拔く。蜂數多飛んで出る。）すると、賊兵が笑つて言ふでせう。なんだ、こんな子供だましのやうな謀がなんになる。燒き捨てて笑つてやれ。さう言つて、竹筒を積み重ねて火をつけるでせう。その時、筒の底にしかけた火藥が爆發して十町四方の軍兵を粉微塵にしてしまふといふ趣向です。（竹筒に火をつける。火藥、爆發する）

甘　成程、それは奇計です。併し、一應わたくしの謀もお聞き下さい。（果物を入れた折籠を出す）かういふ折籠を二三千程こしらへて、いろいろな菓子や酒肴を入れ、その中へ鴆毒を仕込んで置いて、陣屋の中へ列べて置くのです。それから、陣所近くまで敵を引きつけて置いて、負けた風をして十里ほど退くのです。すると、韃靼人は勝誇つて、陣屋へ飛び込んで來て、われ勝にこの食物を食ふに違ひありません。さうすれば、刃に血ぬらずして敵を皆殺しにすることが出來ると思ひます。

國　成程、いづれも一理ある計略です。併し、國性爺が心魂に徹して忘れることの出來ないのは母の犧牲です。母がわたし達の爲に死んでくれたことは、五臟六腑に沁み渡つて、一刹那も忘れることが出來ません。謀も謀ですが、わたしは唯無二無三に攻め入つて、韃靼王李踏天とむずと組んで、ずたずたに刻んでやらなければ腹が癒えません。母を殺したのはあいつらです。あいつらが母を殺したのです。（落涙する）母は女ながらに故郷を忘れないで、最期まで日本の

國の恥を思ひました。わたしも同じ日本の生れです。生れた國は忘れたくありません。御覽下さい。ああやつて、あすこに天照大神が勸進してあります。わたしが匹夫から起つて、數ヶ所の城を攻め落し、諸侯王となつたのもみんな日本の神の力です。そこで、竹林で從へた島夷達を日本頭に作つて、先陣に立て、日本から加勢が來たのだと言ひ觸らせば、きつと韃靼兵は恐れて二の足になるでせう。その機を外さずに攻め寄せたら、一擧に敵を屠ることが出來るでせう。さう思つて、こなひだ中から家內と二人で用意をして置きました。（呼ぶ）これ、これ、島の牛若、軍兵を率ゐて、これへ參れ。

（小屋、牛若のやうな裝をして、元服頭をした島夷が隊列して出る。）

（と、陣屋の後から、梅檀皇女が駈けて出る。手に旗と書附を持つ。）

梅　これ、これ、國性爺、この旗はお前の父一官の旗じるし、この書附も一官の筆らしいが、どうやら心がかりなこの文言……

國　どれ、どれ。（と、書附を受けとつて、讀む）「われ、慭に明朝先帝の朝恩を報ぜんと、再びこの土に歸參し、功もなく譽もなし。老後の餘命いくばくの樂しみをか期せん。今月今夜、南京の城に向つて討死を遂げ、美名を和漢に留むるものなり。鄭芝龍一官、行年七十三歲。」（間）さあ、敵に念が入つて來たぞ。母の敵に父の敵。もう計略もない、軍法もない。あなた方は兎も角も、この國性爺は唯一人で南京城へ乘込み、韃靼王李諸大の首を捻ぢ切り、父が最期の場所

を去らず討死して、父母の冥土の旅の供をしませう。皆さん、これがお別れです。

（國性爺、驅け出さうとする。兩將が左右から、その袖に縋る。）

甘　なぜ、わたしにもお供をさせて下さいません。あいつらは甘輝の爲にも、妻の敵です、舅の敵です。

吳　吳三桂が爲にも、妻の敵です。子の敵です。

國　おう、成程、これはわたしが早まりました。いづれも敵に輕重はない筈。天下の敵は三人一緒の敵です。さあ、行きませう。

（三人、一緒に驅けて出る。）

（小睦の一隊も從ふ。）

（激しい War-music。）

――暗轉

第二場

南京城外廓。

城門列ぶ。その内の一つ、殊に大なり。韃靼兵と國性爺軍と火花を散らして戰つてゐる。

國性爺、父の死生を知らうとして、その間を驅け廻る。時々「親父樣」「一官殿」などと呼ぶ。

韃靼兵、だんだんに敗けて來て、城門の中へ退く。

國性爺軍、追擊して入城しようとするところへ、韃靼王、李蹈天などが老一官を楯の表に縛りつけて、兵に擔がせて、出て來る。

李　やい、やい、國性爺。貴樣の親一官はこの通り縛り上げた。さあ、日本流に腹を切るか。それとも、親子一緒に直ぐ日本へ歸るか。歸るなら、一官は助けてやる。反對すれば、目の前で貴樣の親を引張り切りにいたすぞ。さあ、返事はどうだ。

（國性爺、はつとして、眼が潤む。）

（陣中、聲がない。）

一官　（目を怒らして）やい、國性爺。うろたへたか。おくれたか。七十に餘るこの一官、この上生きて何になる。母の最期を健氣だつたと、この父に話して聞かせたのは誰だ。やつとここまで爲上げた一大事を、この爺の命一つ惜しんだ爲に仕損じたら、末代までの恥辱ではないか。日本人は愛に溺れて義を知らぬと言はれたら、日本の恥ではないか。女ながら、お前の母は、生れ故郷を重んじて、日本の恥一つに命を捨てたのを忘れたか。もうこれ程の手詰になつたのだ。たとひ、この親が目前で八裂にされても、目もかけずに飛びかかつて本望を遂げ、大明の御代に返さうといふ根性はどこでなくした。未練だぞ。淺ましいぞ。

（國性爺、たまらなくなつて、目をつぶつて、韃靼王に飛んでかゝらうとする。）

（李踏天、一官の胸元に劍を當てる。）

（國性爺、たじろぐ。）

（一官、國性爺を睨む。）

（國性爺、また王に飛びかからうとする。）

（李踏天、また劍を一官に擬す。）

（國性爺、躊躇する。）

（その間に、目交ぜをしてゐた甘輝と吳三桂、つと前へ出で、韃靼王の前に跪く。）

甘　飽くまでも御運の強い韃靼王樣、一官が搦め捕られた以上、國性爺が運ももうこれまでです。吾々二人の命を助けて下さるなら、末見込のない大將の首をとつて差し上げませう。御返事が承りたう存じます。

王　（得意げに笑つて）うむ、神妙、神妙……

（兩將、突然、飛びかゝつて、韃靼王の首を絞め上げる。）

（國性爺はいきなり父の縛を捻り切り、李踏天を取つておさへて、これを椅の面に高手小手に縛りつける。）

（三人、聲を上げて笑ふ。）

（進行曲。）

（太子、栴檀皇女、小睦、登場。）

國　（韃靼王を指さして）夷とは言ひながら、苟（かり）にもこれは韃靼國の王です。五百鞭うつて、本國へ送り返しませう。さあ、打て。

（兵士達、左右から韃靼王を笞つ。）

國　さて、次は李踏天です。こいつは八逆五逆十惡人ですから、片身恨みのないやうに、わたしが首を拔きませう。甘輝殿と吳三桂殿は兩腕を引拔いてやつて下さい。

（國性爺は李踏天の頸に手をかけ、兩將はその兩腕に手をかける。「それ」といふ掛聲で、三人一度に引張る。李踏天、息絶える。）

（韃靼王は、まだ笞うたれてゐる。）

（勝利の進行曲。）

――幕

博多小女郎浪枕

人物

毛剃九右衛門
手下傳左衛門
同　仁左衛門
同　平左衛門
同　彌平次
同　市五郎
同　三藏
小町屋惣七
奥田屋四郎左衛門
傾城小女郎
同　みさほ
禿　重之丞
父　惣左衛門
道具屋
家主菱屋嘉左衛門
旅人實は捕手
檢非違使
遣手婆

場所

下の關、博多、京都、伊勢路

時代

享保（但し衣裳建築必ずしも、この時代を考證せず）

第一幕

下の關附近の沖合。

舞臺一面の海、月の出前。

唐船まがひの大船一艘、舳を上手にして繋りゐる。艫の方にかきだつの小窓、中から燈火がさしてゐる。帆綱、苫、帆柱に赤き燈、高く釣り上げあり。

波の音。

毛剃九右衛門、傳右衛門、仁左衛門、平左衛門、いづれも唐服にて、卓を圍み、トランプをしてゐる。毛剃はマントをはをつてゐる。

彌平次、艫の方に立ち、龕燈で海の上を照らしてゐる。

暫く靜寂。波の音。時々海鳥の叫び。

突然、彌平次、遠くの海に何ものかを認めた樣子で、下手に向つて、二三度龕燈を振る。それに答がおつたらしい樣子で、彌平次、急いで毛剃の側へ來る。

彌平次　（小聲で）かしら、市五郎の舟が來ました。

（その氣持さへ出れば、見物には聞えなくても好い。）

毛剃　さうか。

（と、直ぐトランプを捨てて立つ。）

（傳右、仁左、平左も立ち上がる。）

（毛剃、呼子を吹く。）

（船の下から船頭や舟子が大勢上がつて來る。）

彌平次の言ひつけで、舟子達が舷へ繩梯子をおろす。）

（下手から、市五郎と三藏の乘つた小舟が、飛ぶやうにやつて來る。三藏が龕燈を振る。）

（船頭や舟子が、繩梯子に列んで立つ。）

（三藏と市五郎が、小舟から出す荷物を順々に

受けとつて、順々に親船へ積み込む。）

（それが終つて、船頭も舟子も船の下へ降りる。三藏と常五郎、親船へ乘り込む。）

（その少し前から、かきだつの小窓をあけて、惣七が覗いてゐる。毛剃、それと顏を見合はす。惣七、はたと窓を閉ぢる。）

（毛剃、直ぐ子分達に何か囁く。彌平次、傳右、平左、櫓の下へ驅け降りる。やがて、彌平次と傳右、惣七の下人を一人擔ぎ上げて來て、船の向うの海へ投り込む。）

（惣七、木棹を振り廻しながら、平左と爭ひながら出て來る。）

（市五郎、梯子を窺つて、後から組みつく。惣七、とつて投げる。市五郎、投げられながら惣七の足首を摑んで、引き倒す。そこへ一同いしかかつて、惣七を擔ぎ上げ、船のこつちへ投げ込む。惣七、市五郎三藏が乘つて來た小舟の上へ落ちて、氣を失ふ。）

毛剃　うまく行つたな。

彌平次　もう大丈夫です。（見物には聞えなくても好い）

（一同、手をしめる。）

（惣七、正氣づいて、そつと纜を解き、艪を立てて下手へ漕ぎ出す。三藏、それに氣がつく。）

三藏　しまつた。

毛剃　どうした。

（三藏、下手の海を指さす。）

毛剃　おのれ。

（毛剃、市五郎に囁く。市五郎、飛ぶやうにして櫓の下へ降りる、直ぐ合圖の鐘が船の下で鳴る。）

（親船の纜、下手へ廻る。）

（毛剃、マントを脫ぎ、ピストルを出す。子分達もみんなピストルを出す。）

（一同、惣七の舟を狙ふ。）

（月出る。）

（惣七の舟、花道に入る。）

（波の音。）

――幕

第二幕

第一場

博多柳町奥田屋の表座敷――建築その他、博多風なるよりは寧ろ唐風洋風を加味したる長崎風なるがよし。

座頭の欲市、唐人踊の二上りを彈いてゐる。

〽いきにて／＼、すいちや、えんちや、すいちや、すいふいちやう、いさらてわいめさはんや、さそうわ／＼、ううちたるまたひさらきこいさらこわめさはんや、さそうつ／＼、うあう／＼。

（これに合せて、禿重の丞、他一人が、錢太鼓を踊らうとしてゐるが、拍子が違ふので踊れない。）

重之丞　（踊をやめて）欲市さん、もうおやめよ。そんな間では踊れやしないわ。

他の禿　錢太鼓の三味線を知らないなら知らないと、はじめから斷ればいいのに。

二人　もうあたし達は、踊らない、踊らない。

欲市　これ、これ、そんなことで藝が上がるものか。三味線の濟むまで、さあ、踊つた、踊つた。

重之丞　いいえ、もう踊るのはいや。お前さんも三味線なんかやめて、石臼か跛でも引く方がいいわ。

欲市　これは怪しからん。なんだと。跛を引けと。

盲だと思つて、ばかにするな。よし、ひどい目に合せてやるから。

(三味線を振廻して、盲滅法に二人を追廻す。)

(奥田屋四郎左衞門が、臺所から出て來て、その間へ割つてはひる。)

四郎左　これ、これ、欲市、どうしたものだ。これ、重の丞、けふは母御の十三年忌とやらで、小女郎樣も身あがりをして、奧で看經(かんきん)をしていらつしやるではないか。主人の親御の法養に、線香一本立てる氣はなくて、めくら相手に何事だ。

重の丞　いいえ、それは違ひます。あたし達二人が鐘太鼓の稽古をしてゐると、欲市が間の違つた三味線で邪魔をするのです。

四郎左　さあ、その鐘太鼓が猶惡い。物の稽古も時による。さあ、早く奧へ行つて、太夫さんについてゐろ。さあ、二人とも早く行け。

(禿二人、奧へはひる。)

四郎左　これ、欲市、二階の奧に宰府の源樣が見えてゐるぞ。もう行つたか。

欲市　いいえ、ちつとも知りませんでした。それでは直ぐに參つて、御祝儀にありつきませう。

四郎左　は、は、は、は、現金な奴だ。

(欲市、奧へ驅け入る。四郎左笑ひながら、ついてはひる。)

(鐘の音。若い者が門の燈をつけに出て來る。

(惣七、やつれた身なりで、編笠をかぶり――但し、出來るだけ寫實にして、普通やるやうに伊左衞門型でない方が好い――花道から出て來て、奧田屋の店先を窺ふ。)

若い者　もう餘り物はないぞ。御無用、御無用。

（さう言ひながら奥へはひる）

（惣七、思はず自分の身なりを見る。恥ぢるやうに、下手へ行きかける。秃重之丞、錢を紙に捻つたのを、盆の上にのせて、出て來る。）

重之丞　ああ、お待ち、お待ち。（と言ひながら、盆を出さうとして）あら、この乞食はおかひこを着てるわ。（と、笠の内を覗き込んで）おや、あなたは惣七さんぢやありませんか。ああ、さうだ、惣七さんだ。（後を向いて、大聲に）太夫さん、太夫さん、惣七さんが乞食になつていらつしやいましたよ。

（惣七、驚いて、花道の方へ逃げる。重之丞、帶にすがつて引戻す。この物音に、小女郎、四郎左、仲居達も駈けて出る。）

（小女郎、直ぐに表へ出て、惣七の笠をかなぐり捨てる。）

小女郎　まあ、ほんとにさうだ。これはまあ、一體、どうしたことです。（と直ぐ泣き聲になる）ねえ、四郎左さん、奥へお連れ申して、お話が伺ひたいと思ひますが……

四郎左　ああ、いいとも、いいとも、ふだんからお馴染の惣七樣だ。さあ、どうぞ。さあ、どうぞ。

（四郎左、目まぜして、仲居達を連れ、奥へはひる。）

（小女郎、惣七の手をとり、表座敷へはひるより早く、縋りつく。）

小女郎　まあ、一年ぶりでやつとお目にかかれたのに、一體、まあ、このおなりはどうなすつたのです。親御樣から御勘當でもお受けになつたのですか。

惣七　いや、さうではない。毎年のやうに諸色を

仕込んで、こつちへ下る途中、下の關で海賊船に乘合せ、家來は海へはふり込まれる。わしの命さへあぶなかつたのを、やつとここまで逃げ延びて來たのだ。ことしこそは身請をして、女房に持たうと、その用意もして來たのに、何から何まであてが違つてしまつた。面目ない。面目ない。

小女郎　それはまあ、ひどいお目にお會ひでした。なあに、お金は天下の湧きもの、お命さへあれば、あなた一人ぐらゐ、わたしがどうともいたします。まあ、それにしても、これではさぞお寒いでせう。（と、上着を脱いで、惣七に着せる。）

（花道から、若い者が駈けて來て、直ぐ店先にかかる。）

若い者　これ、これ、奥田屋さん、お大盡樣がおいでだ。お出迎ひ、お出迎ひ。

（さう言つて、直ぐ又向うへ駈けてはひる。）

小女郎　まあ、誰かここへ來るさうです。けふはわたしも身上がりをしてゐますから、ゆつくりお話が出來ます。二階へ參りませう。

惣七　どうか、さうしてくれ。わしもこの裝を人に見られるのはいやだ。

（二人奥へはひる。）

（「よのはよかよか、昔からよかよ、サンタカラナで日を暮らす」の歌、オルゴル、フラジヨオレツト、胡弓、明笛などまじへたる合方にて、毛剃九右衛門、彌平次、傳左、仁左、平左、市左、三藏など、唐風の衣裳美々しく、若い者に支那絹入りの荷物を二棹かつがせて、花道から登場。）

（主人四郎左、仲居、禿など、出迎へる。）

（毛剃の一行、直ぐ表座敷へ入る。）

四郎左　これは、これは、ようこそ、おいで。

毛剃　しばらく遊ばせて貰ひますぞ。

四郎左　さあ、どうぞ、直ぐにお二階へ。

（一同、奥へはひる。）

（同じ合方で、道具廻る。）

第二場

二階の廣間、唐風の欄干、色硝子の戸、硝子製の燈籠、椅子、テイブル。向う一面の海。廻廊を隔てた離れの小座敷に燈が透いて見える。道具とまると、直ぐ毛剃の一行が上がつて來て、椅子にかける。四郎左、仲居、禿などは立つてゐる。

歌なしで、少しかすめて、前の合方。

毛剃　やあ、亭主、暫くだつた。今までは端ぜせりばかりしてゐた吾々だが、けふからは大大盡のだぞ。ここへ來る道で見て置いた、一文字屋の江口、丸屋の勝山、同じ内の薄雲、油屋のみさほ、泉屋の小倉、車屋の大磯、この六人を、早速請け出して、ここにをられる方々の、ものにしたい。あすまでは待たれん。けふの内に始末してくれ。

四郎左　これはまた早急なことで。（と、飛んで出ようとする）

毛剃　待て待て。亭主が留守では面白くない。誰ぞ使にやつたらいいではないか。

四郎左　成程、それもさうでござります。誰か硯を持つて來い。

（仲居の一人が硯を持つて來る。四郎左、懐紙を出して、何か書きつけ、若い者の一人に持たせてやる。）

四郎左　さあ、さあ、忙しいことになつたぞ。さ

あ、お吸物の用意はいいか。子供達を泣かすな。女房にも藥を飮ませろよ。

毛剃　なに花車が病氣だと。おい、誰か、挾み箱を持つて來い。持ち合せの人參が一包ある。（箱をあけて、一包の大人參を出す）これを飮ませるが好い。時に、四郎左、子供は幾たりある。

四郎左　娘が一人、男が二人でございます。

毛剃　おう、それはいい子持だ。小さいが、この珊瑚珠、對で秤目が八匁ある。二人の子に提げさせるがいい。おなすには、ここに緞子が三本、繻子が五本ある。着物にでも帶にでも仕立ててやれ。どうだ、この緋縮緬は、襦袢にでもしてやつたら。（と、それぞれ品物を袖から出して、投げ與へる）

四郎左　どうも、これは、これは、お禮を言ふよりも先づ肝がつぶれました。失禮ですが、いつの間にこんな分限者におなりなさいました。

毛剃　なんと驚いたか。江戸あきなひが間だるいのでな。小夜の中山、むけんの鐘をつきあてたのだ。だが、この鐘をつくには、行法がむつかしい。長者經と言つて、寺に傳はる秘法がある。一つ、それを聞かせてやらうかな。

四郎左　それはありがたい。わたくしどももあやかるやうに、是非一度お聞かせ下さいまし。

毛剃　さうか。それでは聞かせてやる。（ト、懷から本のやうなものを取り出し、勿體をつけて讀みはじめる。子分達、そこらの器物をチンカンと叩く）そもこのむけんの鐘の濫觴を尋ぬれば、天竺の大金持、月蓋と名に高き、さつても吝い長者あり。佛、これに示さん爲、朝な朝なの頭陀の行、は

つちはつちも空耳潰し、うんとも、すんとも、言はれぬ佛の方便にて、光はさながら、一分小判の山吹色、金と見るより吝ん坊長者、佛の箔を剝がさんと、欲から入る手の内を、釋迦の手管にしかけられ、惜しや悲しや南無阿彌陀佛、このつき鐘を建立す。されば、きたない長者が心、末世の今に留まつて、先づ初夜の鐘をつく時は、諸行無常に惜しや惜しやと響くなり。後夜の鐘をつく時は、是生滅法なことと響くなり。晨朝の響きは、生滅滅多に入用知れず、寂滅いらざる鐘の聲、一文惜しみの百八煩惱、この鐘の音を聞く人は、現世にては分限の金持、未來にてはむけんの釜入、かかる不思議のつき鐘を、おろそかにつくべからず。さて、行法の次第と言つぱ、絹も紬も著ることならず、木綿蒲團も榮燿のいたり、荒菰引いて起き臥しの、身はたらはしよ奈良茶粥、精進潔齋、茶入らず、晝夜にたつた二度の節季は尻からげ、往來の中をちよこちよこ走り、ちよこちよこちよこ脫けて、落ちてあるもの只置くな、こけても土を摑んで起きるは七つ起き。質をとらずば金貸すな、欲しいものは買はぬが德、月夜の夜なべはせぬが損、稼ぐに追ひつく貧はなし。芥子を下にも割木の焚きやう、必ず灰をとることなかれ。捨てるものはなんにもない、鍋の墨では細眉つくり、楷の切れはしびりの妙藥、水なき井戸は梯子の入れもの、鼠の尾まで錐の鞘。させ、ほせ、傘、人に貸すな鰹節。擂小木、擂鉢、砥石、石臼、藥研まで、目にこそ見えね貸す度に、減らずに戻るためしなし。扨その外は愛嬌つき合

ひ、始末、たくはへ、讀書、算盤、秤り目の、上を見れば方圖がない。我より下を手本として、右の條々守るに於いては、微塵積つて山となり、長者の金言疑ひなし。むげんの鐘とは名ばかりにて、現世も未來も背かねば、自然と榮ゆる福德緣起、聽聞あれ。

四郎左　いや、誠にどうもありがたいお經でございます。世界中の人が若しその通りにいたしましたら、わたくしどもの商賣などはあがつたりでございます。（と、笑ふ）

（長者經のなかば頃より、隣の小座敷をあけて、小女郎と惣七、廣間の方を窺ひゐる。）

小女郎　ああ、あるところにはあるもの、太夫六人も請け出して、まだその上に、何もやらう彼もやらうと、金銀を塵ほこりのやうにする、あの全盛。お父さんやお母さんの貧しい暮らしを目の前に見てゐる時でさへ、無理なお金をほしいと思つたことは夢にもないのに、けふといふけふは、お金がほしくなりました。人のしあはせを妬むのではありませんが、一體まあ隣のお客はどんな顏をした人でせう。見てやりたいやうな氣がします。（と、さし覗く。びつくりする）おう、あの人なら、わたしのよく知つてゐる人です。まさかの時は力を貸さうと言つてくれたこともあるお客です。行つてお金を借りて來ませう。（と、橋の方へ行きかける）

惣七　まあ、お待ち。成程、あの人とは馴染かも知れないが、ほかに大勢人もゐる。太夫の口から金を貸せなどと言ひ出したら、お前の恥になるではないか。

小女郎　恥を包むも場合によります。ぐつぐつしてゐたら、人手へ渡りかねない體です。お金を借りたつて、返せば恥にはなりません。まあ、わたしに任せてお置きなさい。（と、振り切るやうにして、廻廊を渡り、下手の廣間へ入り、直ぐ毛剃の側へ行く）

小女郎　まあ、毛剃さん久しぶりですわね。わたし、あなたに御無心があつて來たのですよ。實は、少し面倒なことが出來て、急に身請けをして貰はなければならないことになつたのです。何事があつたらと、いつも親切にさう言つて下すつてゐるあなたですから、お願ひするのです。わたしの方で都合のつくまで、一時わたしの身請が出來るだけのお金を貸しては下さいませんか。

毛剃　いよう、日本一の粋様、金を貸してくれとは言ひにくいことだ。二言と仰しやるな。お前の用なら、千兩でも萬兩でも用立てよう。これ、亭主、小女郎さんも一緒に身請だ。但し、どこへでも當人が行きたいところへやります。金は毛剃が引き受けた。その代り、女郎方の見えるまで、小女郎さんを借りますぞ。

小女郎　まあ、ちよつと待つて下さい。あの離れに今言つた大事な男が來てゐます。ここへ連れて來て、お禮を申させますから、毛剃さん、約束を破つては厭ですよ。

毛剃　男冥利、商賣冥利、決して嘘は言ひません。早うこれへお連れ申すが好い。

（小女郎、いそいそと隣座敷へ入る。「太夫さんのおいでですよ」といふ聲がすると、「あつかと

ばい、かなさんばい、おらんださんうら、もろたとばい」の唄囃子で、傾城勝山、江口、大礒の三人、入り來る。）

仲居　薄雲さん、みさほさん、小倉さん、お三人はおあとから入らつしやいます。

（一座、ざわめく。）

毛剃　これ、これ、亭主、ちよつとの間差合があるによね様方を口の座敷で待たして置いてくれ。あとから見える太夫方も、知らせるまでは、ここへは無用。

四郎左　おつと、飲み込みました。さあ、太夫さん方、どうぞこちらへ。

（亭主、太夫達を連れて、廊下より下手へはひる。仲居、禿なども、これに從ふ。）

（惣七、小女郎に手を引かれ、躊躇しながら、離座敷を出て、廊下を渡り、廣間へはひる、と、直ぐ、毛剃と顔を見合はす。）

毛剃　や。小女郎がなじみの男といふのは、貴樣のことか。

惣七　（刀にそりを打たせ、身構へして）おう、貴樣達に會ひたかつた。（大聲に）おい、誰かゐないか、こいつらは下の關の……

子分達　默れ、默れ、たたつ斬るぞ。（と、銘々拔きかける。）

毛剃　（一同を留めて）騷ぐな、騷ぐな。おれに任せろ。みんなで太夫方の側へ行け。あとはおれが引き受けた。

彌平次　いや、さうでない。吾々が相手になる。おやぢ一人では心配だ。

毛剃　やい、これしきのことに、この毛剃が引けをとる男と思ふか。貴樣達がゐると却つて邪魔

だ。さつさと行かぬか。

彌平次　そんなら行きます。だが、おやぢ、大丈夫か。

毛剃　まだ、それを言ふか。

（一同、頷き合つて、廊下を下手へはひる。）

（小女郎は惣七に引添うて、二人の目元に氣を配る。）

毛剃　これ、惣七さん、一言でも口を利いたら破滅だ。吾々の商賣は、言はずとも、見られた通りだ。命がほしけりや、こなひだのこともお堪へなさい。お堪へなさい。若し小女郎をこつちへ請け出してしまつたらどうします。可哀さうに、小女郎はお前さんに心中を立て通して、女郎の口から言ひにくい金の無心までしてゐるのだ。それ程のこころざしを無にするのは邪見といふものです。悪いことは言はん。吾々の仲間へおはひりなさい。小女郎もお前さんのものにして上げるし、五十貫や百貫目の金は取りかへても上げませう。仲間の殖えるのは、こつちの損だが、運を力にする商賣だ。あんな危ないところを逃げおほせた運の強いお前さんだ。必ず九右衛門の力になる人と見た。これ、この通り、手を下げます。どうか仲間へはいつて下さい。

小女郎　もし惣七さん、毛剃さんの商賣は知りませんが、駕籠に乘る人もあれば、駕籠を舁ぐ人もあるのが世の中です。お金も立て換へた上、何から何まで世話をしてやらうと仰しやるのです。直ぐに承知をして、お仲間に入れて頂き、早くわたしと一緒にならうとは思はないのですか。いけないことなら厭だとはつきり御返事を

なさい。あなたと一緒になれなければ、生きてゐる小女郎ではありません。女房にするか殺すかの大事な返事です。急ぐことはありません。よく考へて御返事なさい。

惣七　承知した。（と、刀を下に置く）今からお仲間になつて、一々お指圖に從ひませう。聞けば、長崎では物の約束に血酒を飲むさうです。嘘ではない證據に……（と、片肌を脱ぎかける）

毛剃　見えました。見えました。人にこそよれ。お前さんのやうな一本氣な男になんで嘘があらう。改めて宴會としませう。（大聲に）これみんな、もう濟んだぞ。早く來い。

（あつかとばいの歌囃子になり、下手一同、前の傾城三人に、滿實、みさほ、小倉を加へ、亭主仲居などを引き連れて來る。）

毛剃　（中央の椅子につき、子分達に）喜んでくれ、惣七さんが新しく仲間にはひられた。（惣七に）惣七さん、下の關でみんな見知りの者ばかりだ。どうかねんごろにしてやつて下さい。（小女郎に）小女郎さん、嬉しさうな顔だな。（四郎左に）おう、時に亭主、身請の金はみんなでいくらになるな。

四郎左　はい。これに書きつけて置きました。（と、書附を出す）

毛剃　（書附を一瞥して）小女郎さんを入れて、七人の身請の金が千四百五十兩か、はしたがあつて面倒だ。五十兩は亭主にやる。それ、千五百兩、受けとつてくれ。（と、金を渡す）さあ、これで何もかも濟んだ。めでたい、めでたい。さあ、みんな、歌つた、踊つた。

（毛剃、まつさきに立ち上がる。子分達も遅れず立ち上る。）

毛剃　さあいつもの看々踊だ。看々踊だ。

（太夫達、蛇皮線、胡弓などを弾き、聲を揃へて歌ふ。）

看々兮、賜奴的九連環、九呀九連環、雙手拿來不解、拿把刀兒割、割不斷了、也々呦、也呦。

（一同踊り狂ふ。）

（突然、若い者が一人、座敷へ飛び込んで來る。）

若い者　（息を切りながら）もし、もし、人殺しの罪人が、この廓へ入り込んださうで、上の町から客改めが始まりました。お客様方、お一人も外へ出ることはなりませんぞ。もうお役人がこれへ見えます。

（若い者、亭主を促し連れて、駈け去る。）

（九右衛門達、驚いて、踊をやめ、一同懐から短銃を出して、身構へる。惣七も、小女郎の手を取つて、刀を引き寄せる。途端に、近所でがたがたといふ物音がする。）

（亭主四郎左、飛び込んで來る。）

四郎左　いや、御心配はありません。もう大丈夫です。殿町で飛脚を殺して金をとつた奴が、隣の揚屋でつかまつたのです。もう代官所へ引いて行きました。こつちのことではありません。

毛剃　（溜息をついて）ええ、むだなことに肝を潰した。さあ、まん直しに、もう一度踊だ。惣七さん、あなたもおはひりなさい。

（再び「看々兮」の歌になる。）

（一同、踊り狂ふ。）

――幕

第三幕

第一場

京都心清町（七本松通り今出川下る眞盛辻子）惣七の住居。

下手に出入の門口、それより舞臺前面を上手へ、京風の狭き土間。土間の向う、二重。上手へ長く續く。部屋にして二間程見える。

惣七の父惣左衛門、雇ひ婆を手傳はせて、泣きながら家財（唐風のもの多し）を道具屋に拂つてゐる（この間、總て小聲に捨臺詞）最後に、疊まであげて、床下の板まで賣らうとする。

家主淺屋喜右衛門が驅けつけて來る。

家主　これ、これ、どうしたことだ。この家は内の借し家で、主人は小町屋惣七といふ西國商人だ。こないだ夫婦づれで大阪へ出かけたが、留守居はこの婆や一人。十日ばかりだと言つてゐたから、もうけふかあすは歸る筈だ。これ、爺さん。一體まあ、お前はどこの誰なのだ。町所へ斷りもせずに、人の留守へはひり込んで、疊まで賣拂はうとは、なんといふ不埒な人だ。心清町一のたばねをするわしとして、この儘に見逃がすことは出來ん。さあ、詮義をするから、隣の會所まで來て下さい。婆やさんも一緒に來て貰はう。（この間に、道具屋達、それぞれ逃げるやうに退場する）

惣左　（手をついて）これはお家主様でございましたか。御立腹は御尤でございます。實はわたくしは惣七の親父で、小町屋惣左衛門と申すものでございます。生れは長崎でございますが、も

う廿年この方、上方住ひをいたしてをります。この頃は山科の方に逼塞してをりますが、何分にも元手がないので、故郷を力に、毎年惣七めに西國通ひをさせてをりますが、この頃は一向に便りがないので、どうしたことかと心配をしてをりますと、ふと耳にした噂では、惣七が西國で大儲けをして、博多の傾城を請け出し、心淸町に檜木作り飾なしの店を張つてゐるとのことなので、どうもそれは受けとれないと思つて、實はゆうべはじめてここへ訪ねて參つたわけですが、成程噂にたがはぬ贅澤な暮らし、びつくりして婆やに尋ねましたが、婆やも詳しいことは知らぬと申します。今までは僅十兩か十五兩儲けても、きつと吹聽して悦ばせた正直者の惣七が、一人の親に隱してこんな暮らしをする以上は、どうせろくな金ではございますまい。あとになつて御町内やお家主樣に御迷惑をかけるよりは、今の内に始末してしまつた方が好いとも存じましたし、よこしまの金は身につかぬといふことを、當人にも思ひ知らせやりたいと存じまして、急に道具屋へ驅けつけますやら、古がね買を呼んで來ますやら、つい心がせいて、お家主樣へお屆がおくれました。幾重にもお詫びを申します。どうか貸家札をお出し下さいまし。お家はもうあけますから。

家主 （頷いて） 分かりました。こちらも惣七さんの親御とは知らないので、失禮を申しました。併し、惣七さんには請人もあることですから、念の爲親父樣に一札入れて頂きます。婆やの判も貰ひたい。さあ、兎も角も、會所へ〳〵と言ひ

ながら、懐紙を出し、矢立から筆を出して、「かしや」札を認め、それを表に張つて、惣左と雇ひ婆を促し、下手奥の路次を上手へ曲がり入る）

（花道より、惣七、小女郎——町風になりゐる——連れ立つて、急ぎ足に出て来り、直ぐ自分の家の門口へ来て、かしや札を見て驚く。）

惣七　おや、かしや札が張つてある。

小女郎　まあ、どうしたのでせう。

惣七　（門口をあけて、はひりながら）おい、婆やはゐないのか。婆やはどうした。婆や、婆や。

小女郎　（続いてはひりながら）まあ、婆やもゐないのですか。（と言ひながら、あたりに気がつく）まあ、道具も何もみんななくなつてゐるぢやありませんか。

惣七　おう、畳まで上げてある。（と言ひながら、ふと何か思ひついたやうに、はつとして、尻居にどうとなる）

小女郎　（せいて）もし、あなた、落ちついてゐる場合ぢやありません。家主も家主です。ふだんあんなに懇意にしてゐながら、一言の断りもなしに、こんなことをするとはあんまりです。あたし行つて掛け合つて来ます。（と、表へ駈けて出ようとする）

惣七　（小女郎の袖を捕へて）まあ、待て、待て。女が行つても為方がない。貸家といふのは名ばかりのあばら家を、これまでに手入れをしたのもこつちだ。家賃も一月と滞らしたことはない。町内の附合も相当にはしてゐる。そのおれが、家財はとられる。婆やの行方まで知れないといふのは、ちとをかしい。これは、ことに依ると

足がついたのかも知れないぞ。どつちにしても、もうここには一刻もゐられない。惣七の運もこれまでだ。（と悲憤の涙にくれる）

（雇ひ婆、路次口より駈けて出て來て、直ぐに内へはひる。）

婆　お聲がしたので飛んで參りました。まあ、飛んでもないことになつてしまひました。

小女郎　飛んでもないこととは、どうしたのだい。

婆　いえ、實は昨晩、山科の親父樣がひよつくりお見えになりまして、忰惣七は道に違つた金儲けをして、こんな贅澤な暮らしをしてゐるのだ。お前は何も知るまいが、この屋財家財が忰の敵(かたき)なのだと、かう仰しやつて、道具屋を呼び集め、二足三文に賣拂つた上、家もあけ渡し、その上、いま隣の會所で、何やら町衆の前であやまつたり詫びたりして入らつしやいます。

惣七　（心ここにあらぬ態で）婆や、掛硯(かけすゞり)の中に入れて置いた割符(わりふ)の手形(てがた)はどうした。あれが人手へ渡つたら大變だ。硯と一緒に道具屋の手へ渡つたか。

婆　いえ。掛硯は賣れましたが、その割符は渡さずに、親父樣が鼻紙入へおしまひになりました。まあ、そんなことは兎も角も、早く町を逃がして上げたい。あれ、また會所で呼んでゐるやうでございます。婆やはもう參ります。どうか、お二人とも御無事で。（と、そそくさと又路次口へ走り入る）

惣七　（茫然として）もうだめだ。親父の耳へはひつた以上は、世間にも知れ渡つたに違ひない。四日市には心當りもある。伊勢路を逃げられる

だけ遁げて見よう。もう七つだ。早く支度をしろ。

（二人、遁げる用意をする。）

（毛剃九右衛門、下手より登場。直ぐ惣七の門口へ來る。）

毛剃　惣七、うちか。（と直ぐ潜りをあけて、はひる）

惣七　（ぎよつとして）こ、これはめづらしい。何と思つて。まあ、まあ、これへ。これ、煙草盆はどうした。茶を入れぬか。

毛剃　（あたりを見廻し）默れ。默れ。大坂で會つたのは、つい四五日前だ。その時、追つつけのぼる、京で會はうと約束をしたではないか。それだのに、おれの來るのも待たずに宿がへか。一體、どうしたわけで、どこへ立ちのくのだ。

惣七　いや、實は、おれ達もたつた今大坂から歸つて來たばかりなのだが、山科の親父から急に一緒になりたいと言つて來たのでな、俄に道具を運ぶやら何やらで取込最中なのだ。宿はどこだ。いづれ片づいたら、こちらから訪ねよう。まあ、一服して行くが好い。（と言ひながら、出かけようとする）

毛剃　待て、待て。夫婦とも何をそんなに慌てゝゐるのだ。なあ、惣七、もうやがて商賣の時期だ。おれもあしたは國へくだるつもりだ。それで、實は仲間中から預けた島の割符を受けとりに來たのだ。直ぐ出してくれ。

惣七　よし、よし、割符は大事に箱へしまつて、封印をして、親父にあづけてある。直ぐあとから持たせてやらう。

毛剃　（色を變へて）默れ。命と釣りがへの割符を

親父にあづけたとは、よくもほざいたな。うまいことを言ふな。仲間をぬけて一人儲けをするつもりだらう。斷りなしの引越しと丁度算盤が合つた。割符はその肌についてゐる。渡さぬと言つても、取らずに置かぬぞ。（と、土間へ飛降り、大戸の懸金をかけて、又上へ飛び上がる）

小女郎　まあ、九右衞門さん、お互の仲で、なんの嘘を申しませう。割符は二三日内に、きつとわたしがお屆け申します。けふはまあ、この儘引取つて下さいまし。（と、毛剃を押し出さうとする）

毛剃　えい、何をするのだ。（と言ひながら、小女郎の小腕をとつて、簀の子に投げつける）

惣七　（脇差に手をかけて）卑怯なことをするな。言ひたいことがあるなら、おれに言へ。女をいぢめることはない。

毛剃　そりや打つて嚇かしても、割符をとらずには置かないぞ。（と、刀を拔く）

（惣七、飛びしさつて、拔き合せる。兩人、斬り合ふ。）

（小女郎、鍬箒—こまざらへ—で相手の刃物を落さうとして、裾をとられ、轉ぶ。）

（物音を聞きつけた樣子で、裏の路次口より、惣左衞門が駈けて出て來て、表の戸を推したり叩いたりする。中では氣がつかない。惣左衞門、椎の穴から覗いて氣を揉む。どうしても、戸があかないので、また裏へ駈けてはひる。）

（中では、小女郎、障子を外して、それを楯に、相手の刃物を抑へようとして、足を踏みすべらし、障子を我が身に負ひながら、伏し轉ぶ。毛剃、その上へ片足かけ、障子越に突かうとする。惣七、更にその上から毛剃に斬りつけようとす

る。毛剃、飛びしさる。）

（途端に、隣の會所との境の壁が、ばらばらと破れて、割符を掴んだ手が出る。）

惣七　（きつとそれに目をつけて）やい、九右衛門、あれを見ろ。割符を渡せば、言ひ分はあるまい。こつちも差す、こつちも差せ。

（兩人、刀を鞘に差す）

惣七、手と一緒に割符をとつて押し戴き、それを毛剃に渡す）

惣七　さあ、渡すぞ。確に受けとれ。

毛剃　（受けとつて）うむ、別條はない。確に受けとつた。これ、惣七、お互に命がけの暮らしをする身の上だ。切り結んだ劍の下から睦まじくなるのも魂一つだ。割符を受けとつた以上、もう武情は晴らさん。どうやら氣苦勞のある顔つきだ。山が崩れかかつて來ても驚かぬ覺悟じやな。けれぱ、この商賣はならんぞ。いつもの時分に又くだれ。國で逢はう。（と、平氣で歸つて行く）

（惣七、倒れてゐる小女郎を引起す。）

惣七　今のを見たか。親の慈愛だ。ありがたいではないか。せめて、あの壁のくづれを拜んでくれ。

小女郎　ありがたう存じます。ありがたう存じます。これ程のお慈愛を受けながら、壁一重向うの父御樣のお顏を拜むことも出來ないのか。あゝ、息が切れる。口が利けない。惣七さん、水でも、お湯でも。

惣七　困つたなあ。茶碗もなければ、柄杓もない。

（と又、壁の破れから、茶碗を持つた手が出る。夫婦、それを見て、わつと泣き出す。）

惣七　ああ、勿體ない、ありがたい。お盃とも、

お藥とも、氏神様のおみきとも存じて頂きます。
（と、先づ自分が、その手に縋つて一口飲む。それから、小女郎を促す。小女郎、手を頂いて、茶碗から一口飲む。）

小女郎　もし、親父様。まだお許しは受けませんが、わたしはお前の嫁です。どうか機嫌を直して、惣七さんとも口を利き、一生の見始め見納めに、わたしにもお顔を拜ませて下さいまし。
（と、壁から出てゐる手を顔に押し當てて泣く）
（と、壁から出た手が小女郎の手を振り放して、一度中へ消える。やがて、同じ手が金財布を家の中へ投り出し、早く行け行けといふ風に、門口の方を指さす。夫婦がその手を執らうとすると、手が引込んでしまふ。）

惣七　不孝極まる惣七に、路銀まで下さるお慈悲を、背いたら猶不孝にならう。（と財布をとつて頂き）もう表も暗くなつたらう。さあ、行かう。
（兩人、用意して表へ出る。）

惣七　（隣の方を見て）おい、婆や、一目でいいから親父様を女房に見せてくれ。路銀のお禮も申し上げたい。
（雇ひ婆、路次から驅けて出て來る。）

惣左の聲　これ、婆や。何をしに行くのだ。引込んでゐろ。引込んでゐろ。（雇ひ婆、叱られて、しなしなと又路次へ引込む）今の金は隣の道具を賣つた金だ。禮を言はれる覺えはない。惣左衛門の伜にはあきなひこそ教へたが、非道な暮らしを勸めたことはない。やい、惣左衛門の子になりたければ、手鍋をさげても正道な暮らしをして、淺ましい死に方をせず、しづかに親を先に立て、その葬式に喪服を著て、供をして見ろ。

その時こそは、おれの子だと、棺の中から喜ぶぞ。もう言ふことも聞くこともない。早く行け、早く行け。（と、泣く）

（夫婦、聲のする方を伏し拜み伏し拜み、花道を驅け入る。）

（惣左衛門、はじめて姿を現し、二人を見送る。）

――舞臺廻る

第二場

關の地藏前。夜あけ。

惣七、小女郎、急ぎ足で出て來る。

惣七　もう、夜があけさうだ。まあ一晩は無事に濟んだ。ここはどこだらう。

小女郎　お地藏樣がありますね。

惣七　成程、地藏がある。ああ、分かつた。關のお地藏樣だ。船唄にもある「親よりましなお地藏樣」だ。二人で拜まう。親父樣の御機嫌が直るやうに。

小女郎　ええ、拜みませう。

（兩人、ひれ伏して、地藏を拜む。）

（下手から、空駕籠二挺、來る。）

駕舁　駕籠やりませう。

（兩人、驚いて見返る。）

駕舁　駕籠やりませう。

惣七　ああ、駕籠か。尾張へ行くものだ。次の宿までいくらで行く。

駕舁　石藥師（いしやくし）までは二里ある。駕籠賃はころりだ。

惣七　（思はず自分の首をおさへる）なに、ころりだ。

駕舁　は、は、は。ころりでは分からんか錢（ぜに）百だ。

惣七　それは高い。

駕舁　そんなら、いくら出す。

惣七　七十だ、七十だ。

駕舁　ええ、まけてしまへ。さあ、乘つた、乘つた。

（兩人、駕籠へ乘る。）

——舞臺廻る

第　三　場

四日市に近い追分。杉の木立。
惣七と小女郎の駕籠、下手から來る。
上手から、他の駕籠一挺來る。

駕舁　駕籠かへましよ。

（上手から來た駕籠から、旅人一人おりる。）

惣七　（駕籠の中から）おい、おい、お前乘りかへて、先きへおいで。

小女郎　（駕籠からおりて）そんなら、お先へ參ります。

惣七　四日市で待つてゐるんだよ。

小女郎　分かりました。

（小女郎、何の氣もつかずに駕籠を乘換へて、上手へ去る。旅人も元の小女郎の駕籠に乘換へて、下手へ去る。）

（駕籠舁が惣七の駕籠を舁き上げようとする。上手から又一挺駕籠が來る。）

上手から來た駕舁　女中のお連れをのせた駕籠はこれかい。賃錢も聞いた。駕籠かへよう。

惣七の駕籠舁　さうか。それはありがたい。旦那、駕籠を換へます。おりて下さい。（と、駕籠の簾を上げる）

（上手から來た駕籠からは、脚絆草鞋に身を固めて、腰に早繩をつけた男が、もう降りて立つてゐる。）

（惣七、はつとして、急いで頬かぶりをする。）

惣七　（慌てて駕籠をおり）　御苦勞、御苦勞。（と言ひながら、急いで乘り換へ、駕籠の簾を自分の手でおろす）　急ぎのものだ。增しをやるから、直ぐやつてくれ。（と、聲が震へる）

（それに冠せて、「小町屋惣七御用だ」と、駕籠からおりた男が聲をかける。そして、直ぐ細引で、上から惣七の駕籠を縛つてしまふ。）

（捕手、呼笛を吹く。小屋者大勢、十手を提げて、出で來り、駕籠を取卷く。）

捕手　罪はそつちに覺えがあらう。その方とも仲間八人、一々名前も上がつてゐる。尋常に縛につくか。それとも踏みつけて繩をかけようか。（答がない）　ここは途中だ。次の宿まで、この儘連れて行つて、繩をかけて國へ引け。それ、駕籠やれ。

駕昇　畏りました。

（駕籠昇、駕籠をかき上げる。）

（駕籠の中から血が流れ出る。）

駕昇　や、駕籠の中で自害をしたぞ。

（と、駕籠を投げおろし、飛びしさる。）

（役の者達、細引を取りのけて、簾を上げる。惣七、左の脇腹に小刀を突き立ててゐる。）

（小女郎、後手に縛られて、上手から引かれて來る。と見ると、駆け寄り、惣七の駕籠の中へ顏をさし入れる。）

小女郎　分かりますか。わたしですよ。わたしも縛られたのですよ。

惣七　（目を細くあいて）　ああ、お前まで縛られたのか。許してくれ。みんなおれから起つたことだ。

小女郎　でも、そのはじめは、このわたしを人手に渡すまいといふお心から、親をも捨て、命を

も捨てて、かうした暮らしをなさるやうになつたのです。女冥利、ありがたいとも、忝いとも、お禮の申しやうがありません。この手が自由になるなら、せめて拜んで死にたうございます。(と、泣く)

惣七　もうこれがこの世の別れだ。來世でも變らぬ夫婦だぞ。(と、我が手で脇差を拔く。息絶える)

小女郎　待つて下さい、待つて下さい。ああ、一緒に行きたい。おそかれ早かれ、どうせ殺される命です。どうか皆さん、お願ひですから、今ここで殺して下さい。殺して下さい。殺して、殺して。(と、狂ひ廻る)

(下手から檢非違使を先頭に、海賊達傾城達、一同繩つきになつて、出て來る。)

檢非違使　(一札を開いて) 囚人達に申し渡すことがある。よく聞け。一つ、沖がかりの大船に通路を求め、波を潜り、水底を拔け、舟へ近づき、諸品を奪ひとりしこと、國法を背く大罪、武士に仰せて死罪あるべきところ、當今御即位のお悦びによつて、死罪一等を勅免なり。」(囚人一同、喜び合ふ。更に傾城達に向ひ) お前達は流れの身で、きやつらに添ふのも勤めの習ひだ。罪ではない。どこへでも勝手に行け。繩をといてやれ。

(傾城達の繩、解かれる。)

小女郎　ああ、惣七さんは、こんなお慈悲のあるのも知らず、わたしを置いて先へ行つてしまつた。愈わたしは生きてはゐられない。(檢非違使に) お役人樣、どうかお願ひでございます。わたくしだけはどうぞお慈悲にお殺しなすつて下

さいまし。

横井進使　尤もだ、尤もだ。お前の夫の惣七は、同類とは言ひながら、若氣の至りでしたことで、罪の輕重はお上でもよく御承知だつた。自害をしたのは當人の不幸だ。これからはお前が夫になり代つて、親惣左衞門に孝行をつくし、後世安樂を祈つてやるが好い。

小女郎　はあ。（と、泣き伏す）

（一同、誘はれて泣く。）

（遠くに辨路、鳥の聲。）

――幕

小山内先生の戯曲

水上瀧太郎

小山内薫先生は、詩人で、小説家で、戯曲家で、泰西文學紹介者で、劇評家で、劇文學者で、演出者で、映畫制作者で、新劇運動の指導者であつた。その生涯は不斷の努力勉強を以て貫いた。先生にとつてそれらの事は、衣食の爲の職業では無く、理想の爲の事業であつた。食へなくてもひるまずに敢行しようといふ意氣を以て終始した。

先生は一生涯童心を失はなかつた。世にも稀なる美貌の持主で、常若衆であつたが、その魂も常に若々しく、みづみづしかつた。若年にして詩人として文壇に打つて出た先生は、後年詩作を廢したが、詩心は最後迄捨てなかつた。

先生は曾て基督教を信じたが、後には自ら背教者と名告つてゐた。自分では、信仰を失つた人間として、それをひとつの悲壯なる事のやうに考へてゐたらしいが、實は一生宗教心を振捨てる事は出來なかつた。一時は大本教に凝つて、家を擧げて綾部の本山に赴かうとした事さへある。先生の童心は世の中に奇蹟の行はるゝ事を疑はなかつた。

先生は藝術至上主義者であつた。後年民衆の爲の藝術を理想として宣言したが、遂に先生は民衆と妥協する事は出來なかつた。或る論文の中で先生は本音を吐いてゐる。曰く、需要が供給を生むといふ經濟學の原則は、今日の日本の芝居道にもあてはまり、一般見物の嗜好に投ずる事のみを專一としてゐるが、それは自己の藝術を持たない證據である。元來公衆の求むるものは藝術とは縁遠いものであるから、藝術家は自己の信ずるものを供給するだけでよく、公衆はそれによつて導かれるのである云々。

又曰く、眞の民衆藝術とは、藝術を民衆へ引き下げることではなくて、民衆を藝術へ引き上げることである云々。

先生のこの信念は强かつた。けれども、先生は象牙の塔にたてこもり、ひとりで藝術を樂む態度を嫌つた。藝術家として、此の人生に貢獻する事を理想とした。先生は詩人であると同時に企業家であつた。仕事を以て人生の爲に盡さうとする熱情が、既成宗教に別れた後の先生の宗教であつた。その信仰を胸に抱き、勇敢なる鬪士として、我國演劇運動のトップを切つたのである。

先生は幼少の時から歌舞伎劇には深く親しみ、眞砂座時代の伊井蓉峰一座の作者の一人として劇場の修養を積み、劇文學に關する書籍を涉獵して泰西の新劇運動事情を極め、充分の知識と勇氣を蓄へた上で、自由劇場の運動を起した。それは坪内博士の文藝協會と共に我國の新劇運動の口火を切り、

しかも前者よりも遙かにすぐれたる演出を見せ、且比べる事も出來ない程大きい影響を殘した。文藝協會は分裂して藝術座を生んだが、これは自由劇場に比して遙かに民業的であると共に低級であつた。以後、幾多の劇團が生れ、忽ち泡沫の如く消えた。當年の新劇運動を回顧して、誰しも自由劇場の功績を第一に數へるのはあたりまへである。自由劇場は、はじめて近代劇の正しき演出を示し、我國に於る戯曲の誕生に強い刺戟を與へた。自由劇場が無かつたならば、此の國の新劇運動は、暗中摸索時代をもつとながく經驗しなければならなかつたであらう。

　先生の企業的精神はそれ丈では止まなかつた。先生はひと頃、映畫の制作に熱中し、その方面の俳優を養成した。先生一流の狂熱的信仰は、一時芝居を活動寫眞に見かへる迄深く進んだ。

　近年、築地小劇場の運動を起すと、先生は遂に身命を賭けてその指導に任じた。

　築地小劇場は演劇の實驗室として尊い使命を果した。けれども、先生が演劇の實驗室に供したのは、たゞに築地小劇場のみでは無い。先生の一生の仕事振を見ると、恰も我國の劇壇を、大なる實驗室と看做してゐたのではないかと思はれる。

　第三者から見ると、先生はながからぬ一生に素晴らしい仕事をしてのけたのだが、先生自身にして見ると、まだまだ將來に試み度い仕事は澤山あつたに違ひ無い。すぐれたる理解力と、廣く深く身についた知識を傾けて、芝居に關するあらゆる試みを敢行し度かつたに違ひ無い。先生は完成品を制作

する事に專心なるよりも、指導者として、開拓者として、吾々の時代の先頭に立つ役廻を引受る人であつた。

以上は私の見る小山内先生の總論であるが、戲曲家としての小山内先生も、これ以外の人では無い。先生は自分自身立派な戲曲作家である事を心がけ、又確かに立派な戲曲家であつたが、それよりもなほ大きい先生の姿は、後から生れて來る戲曲家の爲に、戲曲の書方の範を示したところに見出される。

先生は天性のスタイリストだつた。日常生活に於ても、先生は自分のスタイルに無頓着ではゐられなかつた。それは服裝の末に至る迄敏感だつた。例之或る仕事をする時のみならず、その仕事にぴつたりあてはまると考へたものでなければ承知出來ないのだ。他の異なる性質の仕事をする時には、又別のみなりをしなければ氣が濟まない。それが仕事の上にもはつきりあらはれて、往年自然派の運動が旺んだつた時代には、平面描寫が一般に行はれた手法だつたが、先生は多種多樣の短篇小說を書いて、ひとり獨自の道を開いた。戲曲制作の場合にも、先生は完全にスタイリストの本分を發揮し、さまざまの形式の戲曲を提供し、又各種の演出の見本を示した。

しかし總括して見れば、先生の戲曲の著しい特徴を數へる事が出來る。先生は戲曲を文學から引離す事に努力した。戲曲の形式をかいた文學を作らうとはしなかつた。文學的の味を持つ事は意識的に排除した第一人者である。戲曲は演出によつてはじめて生かされるものでなければならない。先生は

言ふ。抒情詩の目的は抒情そのもので終る。小說の目的は說話そのもので終る。ところが戲曲の目的は戲曲そのものでは終らない。戲曲が一種の文學であることに異論はないが、それは決して文學に終るべきものではない。戲曲は舞臺の上に躍動して、はじめて本來の目的を達するのである。戲曲は演出の臺帳としてのみ價値があるのである。

さういふ立場から、讀んで感じる文學的感興の如きは、極力否定する事に努力した。此の場合、先生の詩人的氣稟は、戲曲から詩を追拂ふ努力の讃美となつてあらはれた。詩的衒御趣味はあくまでも排斥された。したがつて、先生の戲曲はテンポが急速で、いきぎれのしたやうな短い會話が、いそがしくとりかはされるのである。

先生は戲曲の對話についてはつきりした主張を持つてゐた。小說の會話は讀まれる詞であるが、戲曲の對話は話される詞で、且行爲の伴ふ詞であるといふのだ。

先生の戲曲の會話は、登場人物に特殊の思想を語らせる爲の會話ではない。作者の思想、作者の主張を放送する爲の會話でもない。舞臺の上に氣分を漲らせ、詩情を漂はせる爲の會話でもない。それは作中の人と人との行爲に伴ふ必然的會話である。有機的にその場面の進展と共に働く會話である。同時に又先生は、寫實的の自然らしさをねらつた會話をかゝずに、思ひ切つて省略を加へ、エッセンスとを抽出し、簡單明瞭を旨とした。限られたる時間と限られたる場面に於て演出せらるゝ戲曲の性質が、

寫實的の自然らしさを求める事を許さないのである。だから、先生の戲曲の簡單明瞭な、急速調の會話を讀む時は、舞臺上の演出の場合を想像して讀まなければならない。極端に省略された會話は、巧妙なる間と、抑揚と、やりとりのいきによつて、はじめていきいきとした效果をあらはすのである。

先生は又ト書の省略を斷行した。ト書は、戲曲を讀む人の爲には舞臺面を如實に見せる一助となり、演出者や役者の爲には、如何に手がく可きかを指示する役目を持つてゐる。時には、それがあまりに細かい指定を敢てする時、演出者や役者を窮屈に束縛する結果を伴ふ事さへある位だ。だが、舞臺で芝居を見る人には、一切無くても差支ないものである。先生は演出者の立場から、細かいト書のわづらはしさを感じる側にあつた。作者と役者の外に、演出者の參加を必要とする以上、演出者を束縛するト書は限定的でなく、ゆとりのあるのが望ましいに違ひない。ト書は小說の地の文とは全然性質を異にするのである。

演出者としての先生も亦、あく迄もスタイリストだつた。寫實的演出のみに頼らず、屢々自由奔放なる手段を用ゐた。既に演出の樣式が多種多樣であるとすれば、戲曲の書方も自由になる。おもふに近代戲曲の發達の一特徵は、演出の進步によつて促されたであらう。すぐれたる演出者としての先生の戲曲が、演出の飛躍と伴つて最新樣式を採つた事はいふ迄も無い。幾場面の變轉、映畫式舞臺推移は、先生の自由自在に驅使した一方法であつた。そして幾多の亞流の徒が、息を切らして追隨した。

先生は戯曲をかりて自己を語らうとした事が無い。素材を取扱ふ事にかけては、完全に客觀的態度を保つた。史上の英雄をとりあつかつても、それに對して崇拜の主觀を微塵もまじへなかつた。同時に又滑稽化する事もしなかつた。ある場面の中に生きる多くの人の中の一人としての外、特に誇張した役目を與へなかつた。先生にとつては、あまりに英雄化する傾向の强かつた過去の芝居に對する反抗もあつたであらう。演劇道の局面展開の意圖もあつたであらう。隅から隅迄芝居を知り盡してゐた先生が、いかに所謂お芝居になる事を避けたかは、先生の戯曲の實證する特徴のひとつである。

お芝居は避けた。だが、先生程芝居の約束を完全に守つた人はない。だから、先生の戯曲は、少數の例外を除いて、殆んどすべて上演された。讀む戯曲でなく、演出さる可き戯曲である事を明かにした。

言葉の誇張を敢てすれば、それは文學的戯曲といふよりも、工學的戯曲である。名人の指物師の仕事のやうにきちんと寸法があひ、すぐれたる技師の引いた設計圖のやうにぬきさしならぬものである。

（昭和四年六月二十日）

解題

水木京太

先生が劇作上の業績は、創作戯曲と外國戯曲のアダプテエションと日本古劇のアレンヂメントの三つに大別することが出來る。卽ち本卷の「非戰鬪員」から「公園裏」までが第一類に屬し、「綠の朝」「塵境」「息子」がその第二類、「伊左衞門」から「博多小女郞浪枕」に到るものが第三類である。而してその種目内に於て、各篇の順列はすべて發表の年月に從つた。

一「非戰鬪員」『帝國文學』の明治三十七年八・九・十・十二及び翌年四月號に連載された先生の處女作である。當時二十四歲の作者はまだ帝大英文科の學生で、一方「鷗鳴公」なる假名の下に『帝國文學』に據つて犀利な劇評の筆を揮ふと共に、眞砂座の伊井一座に關係して修業時代を過ごしつゝあつた。雜誌の目次には本名が揭げられてゐるが、本文には「なでしこ」の作號を署してゐる。西洋の新戯曲にも通じてゐたにかゝはらず、稚拙とも稱すべき技巧でひたむきにトルストイの福音を說くところ、若き作者の理想家的純情を語ると共にその眼前にあつた實際劇界の面影をも偲ばしめるものがある。

二「俊寬」（一九一〇年七月習作）とあり、『新小說』明治四十四年一月に發表された。形式の上で一つの新しい試みをされた小曲であるが、未だ陽光を浴びたことを聞かない。

三　「新綠」　はじめ「同じ事」と題して『中央公論』大正三年一月號に發表した對話體の短篇小說を、後改竄して大正四年五月號の『新小說』に再掲した。

四　「第一の世界」『新演藝』大正十年十二月號所載、同月土方與志の演出に依り帝國劇場にて初演。主なる役割は山中愼一（左團次）敏子（山本安英）島村（故宗之助）谷村（猿之助）糸子（中條惠美子）である。昭和二年七月築地小劇場で再演された。――この作以後先生ははじめて戲曲家としての雄姿をはつきり現はしたと云つてもいゝ、「私はこの一つの作をした爲に、實際二十年から若返つたやうな氣がします。」と云ふ程全力的に書かれた作品で、自ら處女作とさへ呼んでゐる。

五　「ベテスダの池」　大正十一年四月號『三田文學』所載。

六　「捨兒」　大正十一年六月號『改造』所載。翌十二年四月有樂座に於て春秋座が作者の演出で初演した　猿之助が松吉と巡査と二役演じ、その他は主人（猿右衞門）妻（東日出子）學生（八百藏）等。

七　「三人と三人」『演藝畫報』大正十一年八月號所載。昭和二年七月築地小劇場が作者演出に依り上演。仁兵衞（御橋公）お絹（田村秋子）おしん（山本安英）駒澤（薄田研二）等。

八　「許嫁」　大正十二年七月號『女性』所載。

九　「西山物語」『演劇新潮』大正十三年九・十月號連載。昭和三年四月歌舞伎座で作者演出の下に初演。源太（左團次）かへ（松蔦）惣治（壽美藏）母（源之助）團次（猿之助）右内（亀藏）。この作は松莚戲曲十種の一つに推され左團次は翌四年六月帝國劇場で再演した。

十　「亭主」『新小説』大正十四年五月臨時増刊『天才泉鏡花』所載。同年九月新橋演舞場で菊五郎が三吉の役で初演した。お絲（多賀之丞）源次（友右衛門）。昭和二年十月松竹座で新派が之を再演した。

十一　「奈落」大正十五年一月號『新小説』所載。同年七月築地小劇場で作者の演出に依る初演。富さん（汐見洋）八さん（東屋三郎）芳さん（瀧澤修）矢田（伊達信）野村（御橋公）等。更に昭和二年十二月公園劇場で築地小劇場が再演。

十二　「吉利支丹信長」大正十五年三月號『文藝春秋』所載。昭和二年四月新國劇一座が市村座に上場した。信長（故澤田正二郎）日乘（中井哲）勝家（東頭善一郎）フロイス（野村清一郎）等。

十三　「盛遠」第一部は『演劇新潮』の大正十五年四月號、第二部は『劇と評論』の昭和二年七月號所載。第一部は昭和二年二月帝國劇場で、作者の演出で上演された。盛遠（田之助）渡（しうか）袈裟（河村菊江）衣川（藤間房子）。

十四　「賊」大正十五年五月號『演劇・映畫』所載。

十五　「森有禮」大正十五年七月號『中央公論』所載。同十二月歌舞伎座で作者の演出に依つて初演された。森有禮（左團次）西野・横山（猿之助）吉田（壽美藏）黒田（[illegible]）等の役割だつたが、李鴻章との件はカットしまた暗殺の場面はセンサアの忌諱に觸れた。文化史劇を描かんとする意圖の下に執つた映畫的手法と群集場面の巧妙なる演出は劇壇にセンセエションを惹起し、これが追隨者の多くを生むに到つた。翌昭和二年十二月左團次が同座に再演——尚、最初の發表に際して作者は、「この戯曲、必ずしも史實に據らず。然れども、左記の諸著、作者を裨益

すること尠なからざりき。誌して謝意を表す。」と附記して下の書名を擧げてゐる。——木村匡氏「森先生傳」、小松徹三氏「明治大正流血史」、伊藤痴遊氏「森有禮の死」、太政官刊「米歐廻覽實記」、尾佐竹猛氏「維新前後に於ける立憲思想」、煙山專太郎氏「征韓論實相」、宮武外骨氏「明治演説史」、坪谷善四郎氏「明治歷史」、妻木忠太氏「維新後年大表。」

十六　「ある敵討」大正十五年七月號『劇と評論』所載。同時に松竹座にて作者の演出で上演。源太兵衞（井上正夫）淺田（佐々木積）池田（志賀靖郎）一學（山田巳之助）宇右衞（大東鬼城）山田（故正邦宏）等。

十七　「シネマトグラフ」大正十五年八月號『劇と評論』所載。この作は初め松竹キネマの「小山内薫とその乾分の會」の實演用に、特に「映畫俳優の爲の舞臺劇として」書かれたものであるが、その機會を得ず、昭和二年七月築地小劇場で作者の演出で上場された。お時の役は村瀨幸子が演じた。

十八　「金玉均」大正十五年十月號「中央公論」所載。昭和三年六月本郷座で作者の演出で上演されたが、全九場にカットされた。主なる役割は金玉均（猿之助）松山（壽美藏）今村（河原崎長十郎）朴永孝（荒次郎）等。

十九　「吉田御殿」昭和二年一月號『黑潮』所載。翌月帝國劇場に上場のため諸般の準備が成つたが、初日間際に當局から上演禁止を命ぜられた。

二十　「支那の茶」昭和二年六月號『劇と評論』所載。

二十一　「珍客」昭和二年七月號『苦樂』所載の需に應じて書かれたもの。同六月二十八日作者の指揮で築地小劇場員がこれが放送に當つた。

二十二　「間々々の悲哀」昭和二年八月號『文藝春秋』所載。翌年二月作者の演出で歌舞伎座に初演。間タクの三羅子(羽左衛門)浴衣の男(壽美藏)自家用車運轉手(河原崎長十郎)看護部(荒次郎)交通巡査(左升)等。

二十三　「目田讓事件」昭和二年十二月『中央公論』所載。

二十四　「公園裏」昭和三年三月號『文藝春秋』所載。昭和四年四月市村座に上場された。演出は巖谷三一、お松(英太郎)お君(花柳章太郎)岡田(海島昇)等。

二十五　「舊い館」大正十一年八月號『演藝畫報』所載。同時に作者の演出で帝國劇場に上演。義繼(菊五郎)光側(三五郎)竹東(故國太郎)春身(故菊次郎)仁作(彦三郎)玄齋(勘彌)家老(東藏)。

二十六　「鼠小僧」大正九年五月號『人間』所載。十一年四月作者の演出に依り新劇座が有樂座に初演した。六造(小堀誠)野村(藤村秀夫)お松(村田美禰子)等。其後新劇座は花柳のお松でこの作を數度再演してゐる。また大正十三年に日活は鈴木傳明主演でこれを映畫化した。

二十七　「息子」大正十一年七月號『三田文學』所載、翌年三月菊五郎の金次郎、勘彌の捕吏、故松助の火の番で帝劇に初演。菊五郎は同十四年五月新橋演舞場で再演した。十五年の十二月築地小劇場でも作者の演出の下に上場した。其の他多くの劇場で、再演された。――この作は試演劇團の舞臺に上ること屢々で、上演度數に於て先生の作中第一位にある。

二十八　「伊左衛門」大正三年八月號『中央公論』所載。大正九年十一月新歌舞伎研究會が帝國劇場に於て上場。伊左衛門(守田勘彌)夕霧(壽三郎)河内(故宗之助)等。

二十九 「與三郎」大正八年五月號『三田文學』所載。同年九月帝國劇場に於て新歌舞伎研究會が上演。與三郎(勘彌)忠助(幸四郎)喜兵衛(故松助)等。

三十 「傾城淺間嶽」大正十二年三月號『鈴の音』所載。同月新富座で作者の演出で上場。七兵衛(吉右衛門)作兵衛(勘彌)禿(米吉)音羽姫(時藏)等。

三十一 「國性爺合戰」昭和三年十月號『文藝春秋』所載。先生は築地小劇場のために古劇改作の企を抱かれて以來數年にして漸く成つた苦心の作である。これまで行はれた斯種の試みが多く消極的だつたのに比して、先生のこの改作は非常に積極的で、新しいスペクタクルを創造せんとするにあつた。同年十月土方與志の演出にかゝるこの作の上演は、劇壇驚異の的となつた。主なる役割・和藤内(丸山定夫)小睦(村瀬幸子)甘輝(薄田研二)錦祥女(田村秋子)老一官(汐見洋)その妻(山本安英)皇帝(東屋三郎)后(東山千榮子)吳三桂(友田恭助)柳歌君(高橋豐子)李踏天(御橋公)。

三十二 「博多小女郎浪枕」昭和三年十二月號『歌舞伎』所載。作者の演出に依つて同時に歌舞伎座に上場された。先生は近松の詞章に據る「博多小女郎浪枕上演の爲の他の臺本」(『劇と評論』同月號所載)を書かれたが、それとは全然書き改めたのである。主要な役割は毛剃(左團次)惣七(猿之助)小女郎(松蔦)惣左衛門(左升)。——而してこの作とこの舞臺と、今や先生を偲ぶ最後の紀念となつた。十二月二十五日この興行のラクの晩、わが劇壇の先覺者の生涯に永久に死の幕が下ろされたからである。

昭和四年七月二十八日印刷
昭和四年七月三十一日發行

非賣品

小山内薫全集第三巻

第一回配本

著作者　小山内薫

發行者　東京市日本橋區通三丁目八番地　和田利彦

印刷者　東京市日本橋區通三丁目八番地　島源四郎

印刷所　東京市小石川區[illegible]町五六番地　常磐印刷所

發行所　東京市日本橋區通三丁目八番地　春陽堂
振替東京[illegible]
電話日本橋[illegible]

